吉野口遺跡

—岡山市立鯉山小学校給食棟建築事業に伴う発掘調査報告—

1997年3月

岡山市教育委員会

題簽　水内昌康先生（岡山市文化財保護審議会会長）

『吉野口遺跡』　正　誤　表

頁	行	誤	正	備　考
序	9	吉野口遺跡遺跡	吉野口遺跡	トル
例　言	5	山本	山元	
〃	13	図1	図2	
目　次	9	薄片	剥片	
挿入図目次3	15	堀りあがり	掘りあがり	
2	⑪	惣瓜廃寺	惣爪廃寺	
〃	⑬	矢部大土丸	矢部大坱	
3	31	矢藤寺	矢藤治	
〃	33	〃	〃	
5	1	につては	については	挿入
7	4	「風土記」	『風土記』	
〃	9	〃	〃	
〃	注（20）	矢藤寺	矢藤治	
8	3	健治	健司	
12	A壁	竪穴住居4	竪穴住居4	
〃	B壁	竪穴住居8	竪穴住居8	
〃	〃	竪穴住居3	竪穴住居3	
〃	C壁	竪穴住居8	竪穴住居8	
13	21	石包丁	石庖丁	
15	図8	竪穴住居14	竪穴住居14	
〃	〃	竪穴住居15	竪穴住居15	
〃	〃	竪穴住居16	竪穴住居16	
20	29	石包丁	石庖丁	
26	図28	P522	P523	
30	図37	茶色土色土	茶色土	トル
33	土器番号 50	上げ気味	上げ底気味	挿入
〃	土器番号 64	〃	〃	〃
34	土器番号 76	〃	〃	〃
〃	土器番号 77	〃	〃	〃
〃	土器番号104	〃	〃	〃
〃	土器番号114	〃	〃	〃
〃	土器番号119	〃	〃	〃
37	37	高坏	高杯	

頁	行	誤	正	備　考
67	土器番号 13	透かし穴	透かし孔	
70	23	壁帯溝	壁体溝	
72	13	〃	〃	
73	8	〃	〃	
74	37	〃	〃	
76	11	〃	〃	
〃	30	〃	〃	
〃	35	復原	復元	
82	土器番号 32	埋	埋土	挿入
102	土器番号 22	坏部外面は	杯部外面は	
128	図626			裏返し
141	土器番号398	不方向	不整方向	挿入
143	土器番号473	〃	〃	〃
143	土器番号496	内コテナデ	内面コテナデ	挿入
146	土器番号697	不方向	不整方向	〃
〃	土器番号698	不方向	不整方向	〃
156	30	瓦頭	瓦当	
〃	32	〃	〃	
168	31	付近までで	付近までで	
169	5	*	*（7）	挿入
171	16	河口域にに	河口域に	トル
184	7	似た器形のも	似た器形のもの	挿入
206	32	鍛練鍛冶	鍛錬鍛冶	
208	30	鍛練鍛冶遺構	鍛錬鍛冶遺構	
209	19	律冷制下	律令制下	
210	4	していることは	していることが	
222	27	鬼城	鬼ノ城	挿入
232	図271	分在域	分布域	
246	37	符号	符合	
報告書抄録	所収遺跡	吉野口遺跡（よしのくちいせき）	吉野口遺跡（よしのぐちいせき）	

序

岡山市は広域合併の結果、わが国の古代社会において中核地域の一つでありました吉備国の中枢を占めるようになり、古墳を始めとしました多種多様な遺跡が多数所在しており、その密度は全国的にも有数地の一つと思われます。これら埋蔵文化財の保護保存は、現代社会の経済成長に伴う宿命的な社会問題となっており、行政課題として文化財保護行政の中心的な施策であります。

岡山市教育委員会は、都市開発や地域開発が増加の一途を辿る今日的状況の内で、埋蔵文化財の保護保存と諸々の開発との調和を図るため、この数年来各種の遺跡の発掘調査を実施しておりますが、その社会的要求の増大の一途に対して有効な行政的保存施策を苦慮しながらも、その重要性を痛感して鋭意取り組んでいる次第であります。

此度報告致します吉野口遺跡遺跡は、市立鯉山小学校の給食棟建築工事に伴って記録保存の発掘調査を実施致したものです。

発掘調査につきましては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と関係者各位や発掘参加者のご支援を受けて実施され、近世から縄紋時代にかけての集落の一部となる遺構を検出致しまして、吉備津の歴史的意味を考える上で大変貴重な資料を提供してくれたものと確信致しております。発掘調査の成果は、発掘に際しての関係者皆様方のご指導とご支援の賜物であり、皆様方を始め調査担当者各位に対しまして、心から謝意を表する次第であります。

この報告書にまとめました調査成果につきましては、ご検討、ご批判を頂き、少しでも岡山地方の歴史の研究に寄与できるならば幸に存じます。

平成９年３月31日

岡山市教育委員会

教育長　戸　村　　彰　孝

例　　言

1．この報告書は、岡山市教育委員会文化課が平成３年８月３日から平成４年１月31日にかけて実施した岡山市立鯉山小学校の給食棟建築事業に伴う岡山市吉備津1444の発掘調査に関するものである。

2．この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、その執筆は第Ⅳ章を河田が、その他を草原が担当した。

3．遺物の実測は木村真紀、乗岡美佐子、山本尚子、草原がおこない、トレースは高橋博美、木村真紀、草原がおこない、遺物の写真撮影は草原がおこなった。編集は草原がおこなった。

4．報告書の作成にあたって、採集土壌のプラントオパール分析については古環境研究所に、鉄滓の分析については大澤正己氏に依頼し、その成果を掲載している。さらに黒曜石、管玉の石材分析は岡山理科大学自然科学研究所の白石純氏に、人骨鑑定は岡山理科大学理学部の川中健二氏に、動物遺体鑑定は早稲田大学の金子浩昌氏にお願いし、玉稿をいただき掲載させていただいた。

5．この報告書に用いている高度値は標準海抜高度である。

6．この報告書に用いている方位は磁北である。

7．図１は、建設省国土地理院発行の２万５千分の１地形図「総社東部」を複製し、加筆したものである。

8．遺物・実測図・写真等は、岡山市教育委員会にて保管している。

目　　次

第Ⅰ章　位置と歴史的環境 …… 1

第Ⅱ章　調査の経過 …… 9

第Ⅲ章　遺構と遺物 …… 14

第Ⅳ章　貝類の分析 …… 165

第Ⅴ章　結　　語 …… 174

附　章

Ⅰ　植物珪酸体（プラントオパール）分析 …… 248

Ⅱ　吉野口遺跡出土黒曜石製薄片の産地および管玉の石材について …… 252

Ⅲ　吉野口遺跡（鯉山小）出土の鎌倉時代人骨 …… 254

Ⅳ　吉野口遺跡出土鉄滓の金属学的調査 …… 263

Ⅴ　岡山市吉野口遺跡出土の動物遺体 …… 270

図　　版 …… 第1～21

挿　入　図　目　次

図１吉野口遺跡の位置 …… 1
図２周辺遺跡分布図 …… 2
図３真城寺裏山古墳墳丘測量図 …… 4
図４調査区位置 …… 11
図５発掘区域図 …… 11
図６調査区断面図 …… 12
図７縄文時代晩期面遺物分布
（包含層）及び微地形 …… 14
図８縄文時代晩期遺構配置図 …… 15
図９竪穴住居14出土遺物（１） …… 16
図10竪穴住居14出土遺物（２） …… 17
図11竪穴住居14出土遺物（３） …… 17
図12竪穴住居14実測図 …… 18
図13竪穴住居15実測図 …… 18
図14竪穴住居15出土遺物 …… 19
図15竪穴住居16実測図 …… 20
図16竪穴住居16出土遺物（１） …… 20
図17竪穴住居16出土遺物（２） …… 21
図18竪穴住居16出土遺物（３） …… 22
図19Ｐ４８２実測図 …… 22
図20Ｐ４８２出土遺物 …… 22
図21Ｐ５０７出土遺物（１） …… 23
図22Ｐ５０７実測図 …… 23
図23Ｐ５０７出土遺物（２） …… 23
図24Ｐ５０７出土遺物（３） …… 24
図25Ｐ５２２出土遺物（１） …… 25
図26Ｐ５２２実測図 …… 25
図27Ｐ５２２出土遺物（２） …… 25
図28Ｐ５２３出土遺物（１） …… 26
図29Ｐ５２３実測図 …… 27
図30Ｐ５２３出土遺物（２） …… 27
図31炉状遺構１周辺出土遺物（１） …… 27
図32炉状遺構１周辺出土遺物（２） …… 27
図33炉状遺構１実測図 …… 28
図34炉状遺構２実測図 …… 28
図35炉状遺構３実測図 …… 28
図36Ｐ492,Ｐ493,Ｐ509,Ｐ510,
Ｐ511,Ｐ512,Ｐ513実測図 …… 29
図37溝16断面実測図 …… 30
図38溝16出土遺物（１） …… 30
図39溝16出土遺物（２） …… 30
図40包含層出土遺物（１） …… 31
図41包含層出土遺物（２） …… 31
図42包含層出土遺物（３） …… 32
図43弥生時代遺構配置図 …… 35
図44竪穴住居１，Ｐ21実測図 …… 37
図45竪穴住居４実測図 …… 38
図46竪穴住居４出土遺物（１） …… 38
図47竪穴住居４出土遺物（２） …… 39
図48竪穴住居７実測図 …… 39
図49竪穴住居７出土遺物 …… 40
図50竪穴住居３実測図 …… 41
図51竪穴住居３ピット断面図 …… 42
図52竪穴住居３出土遺物（１） …… 43
図53竪穴住居３出土遺物（２） …… 44
図54竪穴住居12実測図（１） …… 45
図55竪穴住居12実測図（２） …… 46
図56竪穴住居12出土遺物（１） …… 47
図57竪穴住居12出土遺物（２） …… 47
図58竪穴住居13実測図 …… 48
図59竪穴住居13出土遺物（１） …… 49
図60竪穴住居13出土遺物（２） …… 50
図61竪穴住居13出土遺物（３） …… 51
図62建物１実測図 …… 51
図63建物１柱穴出土遺物 …… 52
図64Ｐ283実測図 …… 53
図65Ｐ283出土遺物 …… 53
図66Ｐ191実測図 …… 53
図67Ｐ191出土遺物（１） …… 53
図68Ｐ191出土遺物（２） …… 53
図69土壙墓１実測図 …… 54
図70Ｐ17実測図 …… 54
図71Ｐ17出土遺物（１） …… 54
図72Ｐ17出土遺物（２） …… 54
図73Ｐ25実測図 …… 55
図74Ｐ25出土遺物 …… 55
図75Ｐ27出土遺物（１） …… 56
図76Ｐ27出土遺物（２） …… 57
図77Ｐ27出土遺物（３） …… 58
図78Ｐ27実測図 …… 59
図79Ｐ299実測図 …… 59
図80Ｐ331実測図 …… 59
図81Ｐ331出土遺物 …… 60
図82Ｐ356実測図 …… 60
図83Ｐ356出土遺物 …… 60
図84Ｐ362,Ｐ363,Ｐ364,Ｐ375実測図 …… 61
図85Ｐ357実測図 …… 61
図86Ｐ357出土遺物 …… 61
図87Ｐ376出土遺物（１） …… 62
図88Ｐ376出土遺物（２） …… 62

図89Ｐ376実測図 …… 63
図90Ｐ393,Ｐ399出土遺物 …… 63
図91Ｐ374出土遺物 …… 63
図92Ｐ374,Ｐ393,Ｐ399,Ｐ403実測図 …… 64
図93Ｐ405実測図 …… 64
図94Ｐ405出土遺物 …… 64
図95Ｐ419実測図 …… 65
図96Ｐ419出土遺物 …… 65
図97Ｐ424実測図 …… 65
図98Ｐ424出土遺物 …… 65
図99Ｐ436実測図 …… 65
図100Ｐ436出土遺物 …… 65
図101Ｐ440実測図 …… 66
図102Ｐ440出土遺物 …… 66
図103包含層出土遺物（１） …… 66
図104包含層出土遺物（２） …… 66
図105竪穴住居２実測図 …… 70
図106竪穴住居２出土遺物 …… 70
図107古墳時代遺構配置図 …… 71
図108竪穴住居５実測図 …… 72
図109竪穴住居６実測図 …… 72
図110竪穴住居６出土遺物 …… 72
図111竪穴住居８実測図 …… 73
図112竪穴住居８出土遺物 …… 74
図113竪穴住居９実測図 …… 75
図114竪穴住居９出土遺物 …… 75
図115竪穴住居10出土遺物 …… 75
図116竪穴住居10実測図 …… 76
図117竪穴住居11実測図 …… 77
図118竪穴住居11出土遺物 …… 77
図119Ｐ３０６実測図 …… 78
図120Ｐ３０６出土遺物 …… 78
図121溝10実測図 …… 78
図122溝10出土遺物 …… 78
図123鉄滓溜り実測図 …… 79
図124鉄滓溜り出土遺物 …… 79
図125焼土１・２・３実測図 …… 80
図126包含層出土遺物 …… 80
図127建物柱穴出土遺物 …… 83
図128奈良・平安時代前半遺構配置図 …… 84
図129建物２実測図 …… 85
図130建物３実測図 …… 86
図131建物４実測図 …… 86
図132建物５実測図 …… 87
図133建物６実測図 …… 87
図134竪穴住居状遺構実測図 …… 88
図135竪穴住居状遺構出土遺物 …… 88
図136Ｐ１８９実測図 …… 88
図137Ｐ１８９出土遺物 …… 89
図138Ｐ３３２実測図 …… 90
図139Ｐ３３３実測図 …… 90
図140Ｐ３３２出土遺物 …… 90
図141Ｐ332,Ｐ333出土遺物 …… 90
図142溝２，３断面図 …… 91
図143溝２出土遺物（１） …… 92
図144溝２出土遺物（２） …… 93
図145溝２出土遺物（３） …… 94
図146溝２出土遺物（４） …… 95
図147溝２出土遺物（５） …… 96
図148溝２出土遺物（６） …… 97
図149溝２出土遺物（７） …… 98
図150溝３出土遺物（１） …… 99
図151溝３出土遺物（２） …… 100
図152包含層出土緑釉陶器 …… 100
図153包含層出土墨書土器その他 …… 100
図154包含層出土土器（配管部分） …… 100
図155平安時代後半・鎌倉時代遺構配置図 …… 105
図156建物７出土遺物（ＰＡ） …… 107
図157建物７実測図 …… 108
図158建物８実測図 …… 108
図159建物８出土遺物 …… 109
図160建物９実測図 …… 109
図161柱穴列１実測図 …… 109
図162柱穴列２実測図 …… 110
図163柱穴列２出土遺物（ＰＡ） …… 110
図164柱穴列３実測図 …… 110
図165柱穴列４実測図 …… 111
図166柱穴列４出土遺物 …… 111
図167柱穴列５実測図 …… 111
図168Ｐ４実測図 …… 112
図169Ｐ４出土遺物 …… 112
図170Ｐ10実測図 …… 112
図171Ｐ10出土遺物 …… 112
図172Ｐ37実測図 …… 113
図173Ｐ37出土遺物 …… 113
図174Ｐ58実測図 …… 113
図175Ｐ58出土遺物（１） …… 114
図176Ｐ58出土遺物（２） …… 115
図177Ｐ58出土遺物（３） …… 116
図178Ｐ58出土遺物（４） …… 117
図179Ｐ80実測図 …… 117
図180Ｐ80出土遺物（１） …… 118
図181Ｐ80出土遺物（２） …… 119
図182Ｐ84実測図 …… 119
図183Ｐ84出土遺物 …… 119
図184Ｐ94実測図 …… 120

図185 P 94出土遺物 …… 120
図186 P 109実測図 …… 120
図187 P 109出土遺物 …… 121
図188 P 119実測図 …… 122
図189 P 119出土遺物 …… 122
図190 P 134実測図 …… 122
図191 P 134出土遺物 …… 123
図192 P 135実測図 …… 124
図193 P 135出土遺物 …… 124
図194 P 138実測図 …… 125
図195 P 138出土遺物 …… 125
図196 P 139実測図 …… 125
図197 P 139出土遺物 …… 126
図198 P 110遺物出土状況
および堀り上がり実測図 …… 126
図199 P 110人骨出土状況 …… 126
図200 P 110出土遺物（1） …… 127
図201 P 110出土遺物（2） …… 128
図202 P 110出土遺物（3） …… 129
図203 P 110出土遺物（4） …… 130
図204 P 110出土遺物（5） …… 131
図205 P 110出土遺物（6） …… 132
図206 P 110出土遺物（7） …… 133
図207 P 110出土遺物（8） …… 134
図208近世面下層遺構配置図 …… 149
図209近世下層断面図 …… 149
図210下層出土鬼瓦 …… 150
図211 P 140実測図 …… 151
図212土壙墓 2 実測図 …… 152
図213土壙墓 2 出土遺物 …… 152
図214土壙墓 3 実測図 …… 152
図215土壙墓 3 副葬品 …… 152
図216土壙墓 3 出土遺物 …… 152
図217土壙墓 4 実測図 …… 153
図218土壙墓 4 出土遺物（1） …… 153
図219土壙墓 4 出土遺物（2） …… 153
図220溝 6 実測図 …… 154
図221溝 6 出土遺物 …… 154
図222溝 9 実測図 …… 154
図223溝14下層出土遺物（1） …… 155
図224溝14下層出土遺物（2） …… 156
図225溝14下層出土遺物（3） …… 157
図226溝14下層出土遺物（4） …… 157
図227溝14下層出土遺物（5） …… 158
図228近世上層石垣平面、立面図 …… 159
図229近世上層段状遺構 …… 160
図230近世面上層遺構配置図 …… 160
図231上層出土遺物（1） …… 161
図232上層出土遺物（2） …… 161
図233近世上層遺構面 …… 162
図234 P 307実測図 …… 162
図235 P 307出土遺物 …… 163
図236遺跡位置図 …… 168
図237吉備東山遺跡周辺の微地形 …… 169
図238深鉢分類基準 …… 175
図239吉野口遺跡土器分類 …… 176
図240南方釜田遺跡深鉢分類 …… 177
図241南方釜田遺跡出土深鉢
（注 3 より引用） …… 178
図242南方釜田遺跡出土浅鉢
（注 3 より引用） …… 179
図243晩期中葉深鉢分類図 …… 181
図244晩期中葉浅鉢分類図 …… 182
図245吉野口遺跡出土石鍬（石斧）使用痕 …… 187
図246県南部弥生中期土器分類 …… 193
図247調査区周辺の微地形 …… 195
図248弥生時代中期遺構変遷図 …… 196
図249弥生時代中期集落分布
（高梁川・旭川流域） …… 197
図250吉野口遺跡後期遺構配置 …… 199
図251津寺（加茂小）遺跡後Ⅲ期遺構図 …… 200
図252幸利神社遺跡出土土器 …… 201
図253弥生後期後半集落分布 …… 202
図254後期古墳分布図 …… 208
図255吉野口遺跡土師器法量表 …… 211
図256吉野口遺跡出土土師器器種分類図 …… 212
図257吉野口遺跡出土須恵器器種分類図 …… 213
図258吉野口遺跡須恵器法量表 …… 214
図259西谷遺跡法量表 …… 216
図260寒風 1 号窯法量表 …… 216
図261上竹西の坊遺跡灰原 2 法量表 …… 217
図262調査区周辺の古代街路推定図 …… 220
図263平安後半・鎌倉時代面遺構変遷図 …… 226
図264各土壙出土土師質土器法量分布（1） …… 227
図265各土壙出土土師質土器法量分布（2） …… 227
図266各土壙出土土師質土器法量分布（3） …… 228
図267遺構別土師質土器組成比率 …… 229
図268椀法量変遷図 …… 230
図269椀変遷図 …… 230
図270「吉備中山型」土器組成 …… 231
図271中世土器組成別分布 …… 232
図272遺構別杯・皿・底部調整比率 …… 234
図273土壙群出土杯・皿調整種類別分布図 …… 235
図274岡山県下における中・近世墓群の消長 … 241
図275近世道勝寺景観復原図（南から） …… 244

第Ⅰ章　位置と環境

吉野口遺跡は、瀬戸内海へと通じる内海に面した沖積平野に位置し（図１、２）、旧山陽道から備中の一宮である吉備津神社への参道沿いにあたる。現在は岡山市吉備津の岡山市立鯉山小学校の敷地となっているが、明治以前は吉備津神社の門前町に多く存在していた社僧の１つで、普賢院の末寺であった道勝寺の境内となっていた。このあたりは律令制下では備中国賀陽郡板倉郷に属し、現在は岡山市域に含まれているが、もとは昭和35年に真金町が高松町に合併し、さらに昭和46年に岡山市へ合併したものである。そして遺跡近辺には、吉備津神社の門前町の名残を残した閑静なたたずまいの家並が続いている。ただ、水田であった周囲の景観は、山陽自動車道や新空港の建設などの交通網の整備に触発されて、宅地化が急速にすすみつつある。

本州島西側を東西へのびる中国山地の南側には、標高300～600ｍのなだらかな隆起準平原である吉備高原が広がっている。吉備高原の南端は足守あたりで、そこから高梁川と足守川などの中小河川が形成した沖積平野が続いている。吉野口遺跡は足守川流域に属する。足守北側の丘陵部の地形は、谷部の開析がよくすすみ、流路もかなり蛇行している。足守以南の足守川は、現在は岡山市今保で笹ヶ瀬川と合流して児島湖に流入しているが、かつては庭瀬のあたりで縄紋海進により生じた内海である吉備穴ノ海に注いでいた。流路についても日畑丘陵の東側に接して流れているが、現地形の高低差や水田畦畔の形状などから、かつては吉野口遺跡の南側で大きく弧状に曲りながら南流していたと推定される。流路延長は24.4㎞で、高陣山に水源を発する。足守周辺では流路傾斜が急なため、周囲の山裾部では扇状地の発達が顕著であるが、高松から吉備津にかけては自然堤防と後背湿地が列状にならぶ氾濫平野が主体となっている。したがって足守付近の集落遺跡は扇状地上に位置する場合が多いが、高松から吉備津周辺は平野部中の自然堤防である微高地上に位置する場合が多く、複数の微高地にわたって同時期の遺跡が形成されている場合も多い。

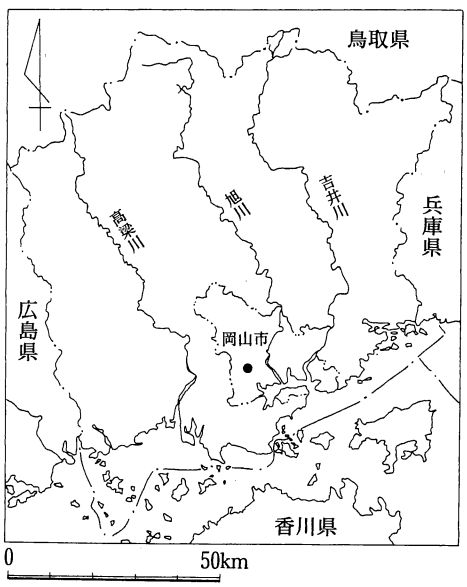
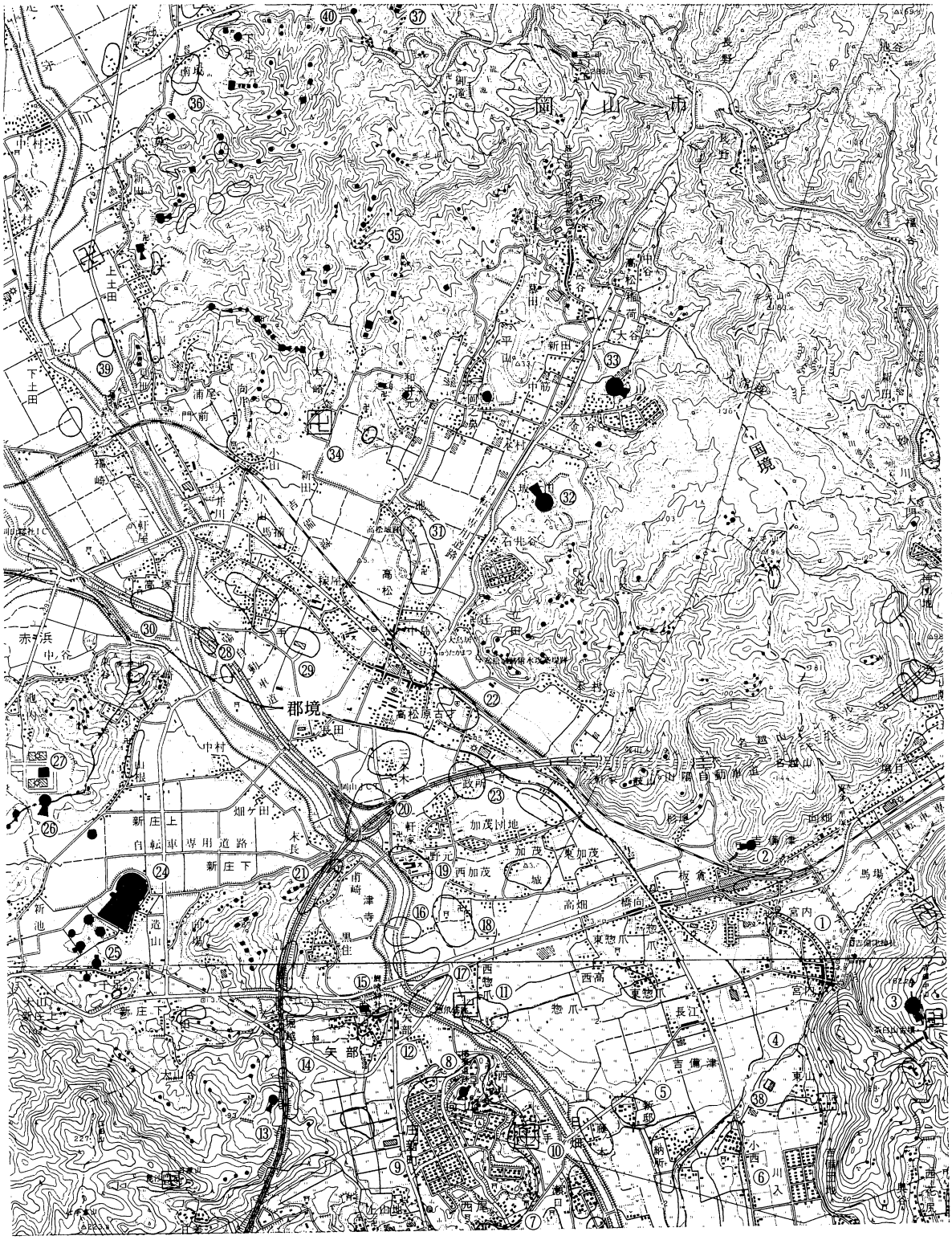


図１　吉野口遺跡の位置

高梁川と足守川などの中小河川が形成した沖積平野に、遺跡が認められるようになるのは縄紋時代からで、矢部奥田遺跡(1)や真壁遺跡(2)では早期の押型紋土器が出土している。しかし継続的に遺跡数が増加するようになるのは後期ぐらいからで、足守川上流の河岸段丘上に位置する余町遺跡でも後期の土器が採集されており、南溝手遺跡では多くの遺物が出土し、そのなかにはイネの籾圧痕のある土器片も含まれている(3)。吉野口遺跡の晩期中葉の集落縁辺部でもイネのプラントオパールが検出されており、縄文時代後期以降の平野部における遺跡数の増加については、稲作との関係を想定しなければならないようなデータが揃いつつある。

弥生時代に入って集落数はさらに増加する。足守川上流部では扇状地端部で突帯紋期から前期中頃の遺構が検出され、足守川中、下流部では岩倉遺跡・東山遺跡(4)・川入遺跡(5)



①吉野口遺跡
②真城寺裏山古墳
③中山茶臼山古墳
④東山遺跡
⑤新邸貝塚
⑥川入遺跡
⑦岩倉遺跡
⑧楯築墳丘墓
⑨王墓山遺跡群
⑩日畑廃寺
⑪惣爪廃寺
⑫矢部遺跡
⑬矢部大土丸古墳
⑭矢部奥田遺跡
⑮鯉喰神社墳丘墓
⑯加茂遺跡
⑰矢部南向遺跡
⑱幸利神社遺跡
⑲津寺(加茂小)遺跡
⑳津寺遺跡
㉑鳥打雲山墳丘墓
㉒上沼遺跡
㉓政所遺跡
㉔造山古墳
㉕千足古墳
㉖小造山古墳
㉗折敷山古墳
㉘三手遺跡
㉙三手（庄内幼）遺跡
㉚高塚遺跡
㉛高松城下層遺跡
㉜佐古田堂山古墳
㉝小盛山古墳
㉞大崎廃寺
㉟大崎古墳群
㊱南坂遺跡
㊲長坂古墳群
㊳伝賀陽氏館跡
㊴鶴免遺跡
㊵三井谷古墳群

図２　周辺遺跡分布図

で前期の遺構、遺物が検出されている。とくに東山遺跡では微高地部上ではあるが、たわみ状に低くなっている部分に水路を掘削して水田を形成しており、百間川遺跡群で検出されている前期水田の様相と似ている(6)。南溝手遺跡では朝鮮半島との関係が推定される松菊里型の竪穴住居も検出されている(7)。高梁川流域の真壁遺跡でも、前期全般の遺構や遺物が検出されている(8)。しかし検出される遺物や遺構の量は多くなく、この時期はそれ程大規模な集落は形成されていないと考えられ、集落の基盤は微高地周辺の可耕しやすい、比較的小規模な水田であったと思われる。

中期の前半についても、新邸貝塚(9)や高松城下層遺跡など新たに遺跡が形成されるものもあるが、基本的な様相は前期とかわらない。旭川流域では、中期前半頃から複数の微高地にわたって大規模な集落が形成されており、それらはおそらく拠点集落であったと考えられる。しかし当流域では、中期末にやや集落規模が大きくなる傾向はあるものの、基本的には後期になるまではそのような集落は形成されていない可能性が高い。

中期末になると平野部周囲の丘陵部に多数の遺跡が形成される。丘陵部において弥生土器の散布地として認識される遺跡のほとんどがこの時期である。足守川中流域の標高87mの小丘陵である甫崎天神山から、南の丘陵部を縦走した山陽自動車道の建設に伴う調査でも、該期の集落が多数検出されており(10)、標高46mの王墓山丘陵でも集落の一端を検出している(11)。これらの集落は、数棟の竪穴住居と掘立柱建物で構成される小規模なもので、山裾部に発達した小扇状地の水田を基盤としていたと考えられる。当地域の平野部周囲には小規模な扇状地の単位がいくつかあり、それらを基盤とする水田の広がりは地形により規定されるものの、水田経営はある程度自立的におこなわれていたと思われる。このような集落形態は、津山市沼遺跡の発掘調査で抽出された水田経営の基本単位とされる「単位集団」(12)とよく似ている。

後期になると丘陵部の遺跡は減少し、平野部に高塚遺跡(13)・津寺遺跡(14)・矢部南向遺跡(15)・東山遺跡(16)・上東遺跡(17)などの大規模な集落遺跡が出現する。しかし、足守では南坂遺跡という大規模な集落遺跡が形成されるものの、中期と同じで扇状地部に位置する。おそらく平野部の安定度が中流域よりも悪く、水田経営の主体は周囲に発達したいくつかの扇状地であったからと思われる。足守地域に、後期末から古墳時代にかけて墳丘墓や中小規模の古墳が周囲の丘陵部に多数築造されるのは、それぞれの水田経営が扇状地ごとの小単位に分かれていたことと無関係ではあるまい。中流域では、後期後半には矢部南向遺跡のようにさらに大規模な集落が形成され、その南側の王墓山丘陵上には全長が80mに達すると推定される双方中円形の楯築墳丘墓が築かれる(18)。全長20m前後、あるいはそれ未満の墳丘墓については、周囲の丘陵部に幾つか築かれているが、大規模なものは楯築墳丘墓とやや後出する時期と推定されている長さ約40m、幅約32mの長方形の墳形である鯉喰神社墳丘墓(19)、さらに後出する全長約36mの前方後円形の墳形である矢藤寺山墳丘墓(20)の3墳ぐらいである。これら3墳は時期的にも相前後して築かれていることや、その規模から同系譜の首長墓であることも推測される。なかでも、矢藤寺山墳丘墓については吉備中山山塊に位置し、当時は眼下に内海がひろがっているいわゆる臨海性の占地をしている。中山茶臼山古墳(21)や車山古墳(22)などの前期の大型前方後円墳が臨海性であるのと共通している。

古墳時代前期になっても、足守川中流域の集落遺跡の規模は大きく、さらに規模を拡大する傾向がある。しかし、高梁川流域などについては三須・畠田遺跡などで同期の遺構が検出されているもののそれ程遺物や遺構の数は多くなく、大規模な前期の集落が形成されているのは、足守川流域に限定されるよ

うな様相を呈している。おそらく津寺遺跡(23)・加茂遺跡(24)・東山遺跡(25)・上東遺跡(26)などの足守川中、下流域に形成された大規模な集落がバックグランドとなって、中山茶臼山古墳（全長130m）・車山古墳（全長130m）のような前期の大型前方後円墳が築かれたのであろう。ただ、特殊器台形埴輪を備え、前方部がバチ形に開く特徴が認められる初源期の前方後円墳はあまり確認されていない。吉野口遺跡の北側にある名越山から派生した尾根上に位置する真城寺裏山古墳は、後円部と比べ前方部の高さが極端に低く、前期古墳と推定された。墳形を確認するため測量調査をおこなった結果（図３）、全長約35mで後円部径25mの数値が得られ、前方部の形状がバチ形に開くことが推測された(27)。後円部の頂部には大きな盗掘壙があるが、石室などの埋葬施設の痕跡は確認できない。葺石や埴輪は認められないが、墳形から前期初頭の時期の可能性が高い。足守川をはさんで対岸にも、全長40mの前方後円墳である大坑古墳があり、特殊器台形埴輪が採集されている。真城寺裏山古墳の時期によっては、足守川河口付近の両岸には同じような規模の初源期の古墳が対峙するように築かれているということになる。

古墳時代中期になると、大型古墳の築造は臨海性からむしろ内陸性へと変わり、造出し付の巨大な円墳である小盛山古墳（全長105m）(28)、佐古田堂山古墳（全長150m）(29)、小造山古墳（全長150m）(30)、宿寺山古墳（全長120m）(31)が中期後半まで継起的に築かれている。そして中期前半には全長が

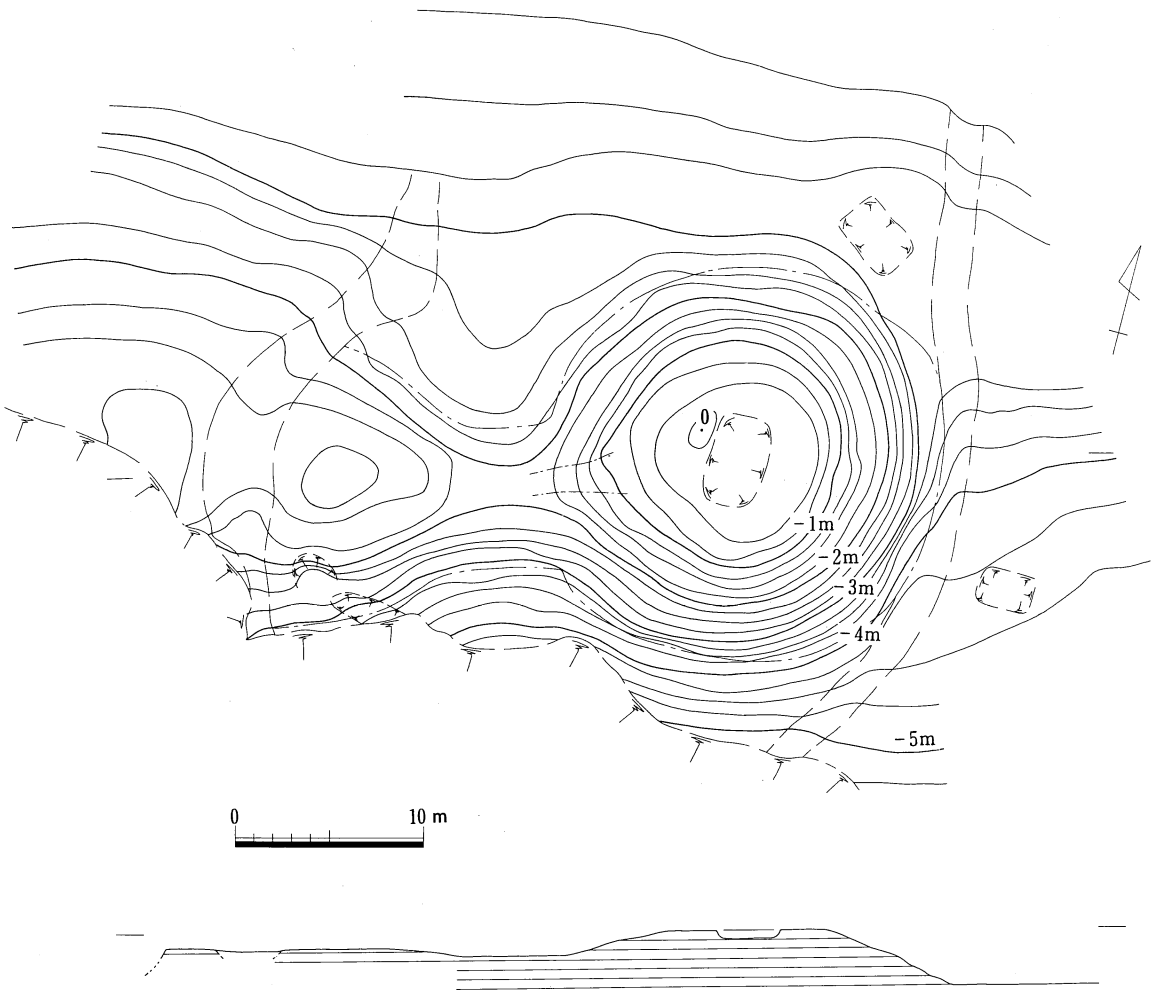


図３　真城寺裏山古墳墳丘測量図

350mの造山古墳(32)や、全長286mの作山古墳(33)のような巨大古墳も出現している。この2墳につては他の大型古墳と比べ規模が圧倒的に大きく、吉備全域の代表者である大首長(34)、あるいは倭政権の代表者である大王(35)、吉備出身の大王の皇后の古墳(36)であるとする見方がある。いずれにせよこの2墳は、吉備地域全体はもとより日本列島全体からの視点で考えなければならない古墳といえる。中期の集落は高塚遺跡、津寺遺跡などでカマドの付属した竪穴住居が検出され、遺物としては朝鮮半島系の土器も多く出土している。造山古墳の前方部正面に位置する榊山古墳でも、朝鮮半島系の土器が採集されている(37)。造山古墳の南側にある標高224mの仕手倉山から西に派生する尾根には、積石塚を数基含む狸岩山古墳群がある。この古墳群の南麓には朝鮮半島系の土器が多数出土した菅生小学校裏山遺跡(38)があることや、墳形が方墳で対岸の讃岐地域の積石塚には方墳がほとんどないことから、狸岩山古墳群も朝鮮半島との関連が想起される。つまり、造山古墳の位置する足守川中流域には朝鮮半島系の遺跡や遺物が集中する傾向がうかがわれ、大型古墳の継起的な築造・巨大古墳の造営・大規模な集落遺跡の形成には、朝鮮半島から渡来した人々との関わりが大きな要因となっていたことが推定される。

古墳時代後期になっても平野部では、津寺遺跡のように多くの竪穴住居が重複して検出されているような様相が続いており、大規模な集落が引き続き形成されている。そのなかには、窪木薬師遺跡(39)や吉野口遺跡のように鍛冶をおこなう集落も認められ、せん引き遺跡(40)などのような製錬遺跡と結び付いて、原料鉄の生産から鉄製品の製造までを地域内で完結的におこなっている様相がうかがわれる。中期に築かれた全長40mの小規模な帆立貝式古墳である随庵古墳の副葬品中には鍛冶道具があることから(41)、当地域の鉄生産は後期ほど数は多くないかもしれないが、中期にもある程度独自におこなっていた可能性は否定できない。

6世紀になると古墳の築成は大きく変化する。大型古墳の築造はとぎれて、6世紀後半のこうもり塚古墳（全長100m）(42)の前後は築かれていない。6世紀前半の中小規模の古墳は、すりばち池2号墳(43)、三輪山第6号墳(44)などがあるが、それ程数は多くない。6世紀後半になると、横穴式石室を埋葬施設とする後期古墳が周囲の丘陵部に多数築かれており、三井谷古墳群・大崎古墳群(45)・王墓山古墳群(46)のように群集墳を形成する古墳群もいくつかある。高梁川西岸の西団地遺跡群(47)では後期古墳群と重なって製鉄関係の遺構が多数検出されており、また大崎古墳群でも炭窯と推定される焼土が確認されている(48)ことなどは、当地域に多数築かれた後期古墳の基盤を考える上で示唆的である。

古代前期の寺院跡も多く認められ、大崎廃寺のように飛鳥時代まで創建年代が溯ると思われるものもある。また、当地域における古代前期での寺院建立の最盛期は白鳳時代であるが、この時期には「吉備式瓦当文」、「水切り瓦」といわれる特徴的な形態をした軒丸瓦が用いられている。前者は備中国の氏寺に、後者は備中国、備後国、安芸国、出雲国の氏寺に分布している。ともに氏寺を建立した主体者である在地首長層間のつながりを示しており、とくに「吉備式瓦当文」の分布は集中的であり、強固な連帯関係が存在していたと考えられる。古代前期の集落については、矢部南向遺跡(49)や東山遺跡(50)で検出されている方形の掘り方をもつ建物などがそれに相当するとも考えられるが、真壁遺跡では奈良時代の竪穴住居が検出されており(51)、県北ではあるが一貫西遺跡の奈良時代の建物の柱穴掘り方は円形である(52)ことなどから、まだ検出されていない可能性もある。官衙関連の遺跡は川入遺跡(53)、津寺遺跡(54)などで、前者は築地塀と平城宮式瓦、後者は規則的な掘立柱建物群とそれを囲む二重の溝が検出されている。また寺跡とされていた矢部廃寺は、出土した瓦と地名の考証から山陽道の駅家に推定されている(55)。同様に巨大な心礎の残存している惣爪廃寺は、古代の山陽道を挟んで北側に「幸利神社」

があり、これを地名から都宇郡衙であるとすると、美作の久米廃寺(56)のように郡衙に付属する寺であることも考えられる。この他吉備中山の山塊では海獣葡萄鏡の出土も伝わっており、出土地付近から同時に須恵器も出土していることから、終末期古墳が存在したと推定されている(57)。当地域では切石を用いた終末期古墳はほとんどなく、現在確認されている横穴式石室のなかには終末期古墳が含まれていると思われる。

古代末から中世前半の集落遺跡の調査例は多く、当地域の微高地上を調査した際には、12世紀末から14世紀ぐらいの時期の柱穴が密集して検出されることもまれではない。津寺遺跡(58)や三手向原遺跡(59)では、区画溝をともなう建物群も検出されている。吉備津神社の南に位置し、方形に堀がめぐる中世の館跡である伝賀陽氏館跡の周囲にも、館の方向と同じ地割が分布している。その地割の中に位置する東山遺跡の発掘調査では、14世紀に地割と同じ方向の溝が掘られており、柱穴列の方向もそれに平行していることが確認されている。これら中世集落の内部にみられる小区画は、在地秩序が自律的に形成されてきているということを示しており、近世の城下町にみる画一的な町割とはかなり隔たりがあるが、それへとつながる要素の１つである可能性も推定される。

当地域の荘園は足守庄・生石庄・大井庄などが知られ、足守庄では荘園絵図が現存しており、内部の考古学的な調査もおこなわれている(60)。「足守庄荘園絵図」は足守庄を南から鳥瞰した景観が比較的正確に描かれており、現在の地形との対比が可能である。また、この絵図には周囲の荘園名や公領名も書かれている。それによると、足守庄の北側には大井庄、東南側には生石庄、西側には阿曾郷が確認できる。阿曾郷の西には郷図の写しが伝わる服部郷が存在しており、限られた史料からではあるが、足守川を挟んで西側に公領が分布し、東側には荘園が分布するという傾向がうかがわれる。高梁川東岸から足守川流域にかけての広大な平野部の水田を潤すのは、十二ヶ郷用水で、これは高梁川から直接取水するものである。この用水路は足守川を境にそれより西側を上郷、東側を下郷と呼ばれているが、これは単に呼称の違いだけでなく両者には開発時期に差のあったことが『太平記』の記述などから考察されている。それによると、下郷の開発は室町時代以降とされ、上郷はそれよりも古く、『延喜式』に備中国の井堰料が記載されていることから、平安時代前半まで溯る可能性も推定されている(61)。つまり上郷の灌漑範囲は阿曾郷や服部郷などの公領に、下郷の灌漑範囲は生石庄などの荘園に対応してくる可能性が指摘でき、そうであるとすると、上郷の用水路は公水と考えられ、十二ヶ郷用水の開発も当初は国衙によるものであったことが推定される。そして中世前半の時期には、この用水の及んでいない下郷域や十二ヶ郷用水の灌漑域外の足守庄域、大井庄域などは、各地域の水利事情に即した個別の開発がおこなわれ、そのため荘園化がすすんでいったということも考えられる。いずれにせよ当地域は、中世遺跡の調査が蓄積されてきており、また荘園関連の史料が比較的多く残存していることから、中世の開発を考える上で重要な資料を内包した地域といえよう。

ところで、吉野口遺跡の周辺は真金町となる以前は真金村であったが、明治８年に川入村と合併する前は宮内村であった。宮内村の宮内とは吉備津神社の門前町の尊称で、慶長頃から文献上に出てくる。吉備津神社は備中国の一宮で、本殿と拝殿は応永28年（1421）の再建で、本殿は「比翼入母屋造」といわれる特異な様式である。この本殿の様式は、源平合戦の際に焼失した東大寺大仏殿を再建した重源との結縁が契機となって創出されたことも推定されている(62)。吉備津宮が文献上に初見するのは仁壽二年（852）で、四品の神位を授けられ、その後、段階的に神位が上がり天慶三年（940）には一品になる。この吉備津宮の初見時期ごろから、当地域を基盤とする賀陽氏関係の人物に関する位階の昇進や、守、

介などに任じられた記事が増える。吉備津宮の社伝ではあるが、吉備津宮は加夜臣奈留美命により造営されたということであり(63)、吉備津宮と賀陽氏とはかなり密接な関係であったと思われ、『扶桑略記』にでてくる狐にだまされた賀陽良藤の弟である賀陽豊恒が吉備津宮の禰宜であることは、そのことの一端を示している。ただ「風土記」逸文によると、賀夜郡（賀陽郡）の大領は下道臣で、その下の少領も薗臣となっている。また賀陽郡域には古代寺院が２つ認められるが、後期古墳については比較的大きな石室をもつものはあるものの、上道氏や下道氏の領域内にある牟佐大塚古墳や箭田大塚古墳のような石室全長が15mを越える巨石墳はなく、古墳時代後期に賀陽郡域を掌握する有力な氏族の姿は見出せない。賀陽氏はいわゆる吉備の五国造の末裔であり、舒明天皇の采女に「蚊屋采女」の名がみられことから采女を差し出すような有力在地豪族のようでもあるが、「風土記」逸文や後期古墳の様相から、賀陽郡域を掌握するような求心力をもつようになるのは平安時代になってからということも考えられる。

しかし、吉備津神社が「吉備」を冠する神社であり、しかも「吉備」を冠する津に存在することは、吉備地域を分割して掌握していた国造の１つである賀陽氏とのつながりだけでは説明することはできないように思われる。おそらく吉備地域全体のなかで最も重要な宗教的中心地であり、最も重要な津、すなわち交通の要衝地であったからこそ、奈良時代には右大臣となる吉備真備を輩出した下道氏が当郡の大領となり、平安時代には当地域で最も勢力の強い賀陽氏が大領となり、吉備津神社の神職も独占したのだと思われる。したがって吉備津には、畿内に匹敵するような大型古墳や巨大古墳を築造した「吉備地域」の構造を解明する重要な手掛かりが内包されているといえよう。（草原）

注

（１）高畑知功ほか「矢部奥田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82　1993年
（２）村上幸雄「真壁遺跡」『総社市史』考古資料編　1987年
（３）平井泰男ほか「南溝手遺跡」Ⅰ『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』100　1995年
（４）乗岡実「岡山市域における最近の発掘調査成果」『古代吉備』第12集　1990年
（５）正岡睦夫ほか「川入遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第２集　1974年
（６）中野雅美ほか「百間川原尾島遺跡２」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56　1995年
（７）注３
（８）注２
（９）近藤義郎「備中新邸貝塚」『古代学研究』８　1953年
（10）浅倉秀昭ほか「矢部堀越遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』82　1993年
（11）間壁忠彦ほか「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報』10　1974年
（12）近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』６－１　1959年
（13）岡本寛久ほか「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』20　1990年
（14）大橋雅也ほか「津寺遺跡」２『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』98　1993年
　　亀山行雄ほか「津寺遺跡」３『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』104　1996年
（15）江見正己ほか「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 1996年
（16）注４
（17）伊東晃ほか「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』第２集　1974年
（18）近藤義郎『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会　1992年
（19）近藤義郎「第四章弥生墳丘墓の成立と展開」『岡山県史』原始・古代　1991年
（20）近藤義郎ほか『矢藤寺山弥生墳丘墓』矢藤寺山弥生墳丘墓発掘調査団　1995年
（21）近藤義郎「中山茶臼山古墳」『岡山県史』考古資料　1986年
（22）水内昌康「尾上車山古墳」『岡山県史』考古資料　1986年
（23）注14
（24）島崎東ほか「加茂Ａ遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 1996年

(25) 注4
(26) 注17
(27) 茅野敦、河田健治、安川満氏らの助力で測量調査をおこなった。
(28) 草原孝典「小盛山古墳の測量調査」『古代吉備』第17集　1995年
(29) 西川宏「佐古田堂山古墳」『岡山県史』考古資料　1986年
(30) 中田啓司ほか「小造山古墳」『総社市史』考古資料編　1987年
(31) 西川宏「宿寺山古墳」『岡山県史』考古資料　1986年
(32) 西川宏「造山古墳」『岡山県史』考古資料　1986年
(33) 近藤義郎ほか「作山古墳」『総社市史』考古資料編　1987年
(34) 西川宏「吉備政権の性格」『日本考古学の諸問題』　1964年
(35) 出宮徳尚「吉備津彦伝承考－非吉備政権論への史料的検討－」『古文化談叢』第30集
九州古文化研究会　1993年
(36) 水野正好「弥生から古墳時代へ」『発掘が語る日本史』4近畿編　新人物往来社
1986年
(37) 島崎東「備中榊山古墳採集の遺物について」『岡山県史研究』3　1982年
(38) 中野雅美ほか「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81 1993年
(39) 島崎東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86 1993年
(40) 武田恭彰「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概要」『総社市埋蔵文化財調査年報』1　1991年
(41) 鎌木義昌ほか『総社市随庵古墳』総社市教育委員会　1965年
(42) 葛原克人「備中こうもり塚古墳」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』35 1979年
(43) 高田明人ほか「すりばち池古墳群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』13　1993年
(44) 西川宏「備中三輪山第6号墳」『古代吉備』第5集　1963年
(45) 小郷利幸ほか「岡山市足守地域史研究（2）」『古代吉備』第16集　1994年
(46) 注11
(47) 村上幸雄ほか「水島機械金属工業協同組合西団地遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9　1991年
(48) 注45
(49) 注15
(50) 注4
(51) 注2
(52) 行田裕美「一貫西遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』33　1990年
(53) 注5
(54) 高畑知功ほか「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』20　1990年
(55) 伊東晃「矢部遺跡」『岡山県史』考古資料　1986年
(56) 栗野克己「久米廃寺」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』4　1973年
(57) 水内昌康「吉備中山の古墳」『吉備中山総合調査報告』岡山市教育委員会　1975年
(58) 正岡睦夫ほか「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90 1994年
(59) 草原孝典ほか「三手向原（処分場）遺跡」『岡山市埋蔵文化財発掘調査の概要』1994
（平成6）年度　1996年
(60) 出宮徳尚ほか『足守庄荘園遺構緊急調査・延寿寺跡第2次発掘調査概報』岡山市教育委員会　1979年
出宮徳尚ほか『足守庄荘園遺構緊急調査・牓示比定遺構発掘調査概報』岡山市教育委員会　1980年
草原孝典『足守庄（足守幼稚園）関連遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会　1994年
(61) 藤井駿ほか『備中湛井十二箇郷用水史』湛井十二箇郷組合　1976年
(62) 根木修『吉備津神社』山陽新聞社　1995年
(63) 藤井駿『吉備津神社』日本文教出版社　1973年

第Ⅱ章　調査の経過

吉野口遺跡は吉備津神社の北西部に位置し、微地形から吉備中山の北西裾部から北に弧状に延びる微高地が推定され、今回の調査区は、その微高地のほぼ中心部に位置する。調査区周辺は吉備津神社の門前町であったため、表面観察では遺跡の広がりは明確に確認できず、土器などの遺物の出土もあまり伝わっていなかった。ただ、現足守川は平野部の西側を南流しているが、かつては吉備津の辺りを大きく東寄りに蛇行して流れていたと推定され、吉備津は東西方向の山陽道と足守川の水運とが合流する、いわゆる交通の結接点であった。したがって、この地には大規模な遺跡が存在する可能性が高いことが予測された。

岡山市鯉山小学校敷地内に、同小学校の給食棟の新築事業が岡山市教育委員会当局によって設定された。用地が吉野口遺跡の推定範囲に含まれていることから、この決定に伴って岡山市教育委員会施設課長から同文化課長宛に平成２年４月４日付けで、当用地の埋蔵文化財等の存在状況確認調査依頼がなされた。この依頼を受けた文化課は、当該地に遺跡が埋没している可能性があることから、重機による試掘の必要性を指示し、文化課職員の立会に基づいて建設予定地の中心部付近で試掘を行い、15～20㎝の厚さの造成層直下には弥生時代から中世までの土器を多量に含む包含層が存在することを確認した。その結果から、設計変更等により遺跡の保存を図るのは不可能であることが判明した。このため文化課は同年７月９日付けで、当該地が埋蔵文化財包蔵地にあり、文化財保護法の適用を受け、給食棟建築の際には、記録保存による事前の行政的措置の必要な旨の試掘調査に関する回答を施設課に通知し、その実施に対する両者の連絡、協議を要請した。文化課と施設課で協議を重ねた結果、記録保存を平成３年度中に実施することで合意に達した。発掘調査の着手に先立ち、平成３年６月29日付けで岡山市長から文化庁長官宛に文化財保護法第５７条の３第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の通知」が提出され、続いて同年７月１日付けで岡山市教育委員会教育長から文化庁長官宛に文化財保護法第９８条の２第１項の規定に基づく「埋蔵文化財発掘通知」が提出された。

以上の経緯の基に、岡山市立鯉山小学校給食棟新築予定地の発掘調査は平成３年８月３日から平成４年１月３１日にかけて実施された。

発掘調査組織

発掘調査主体者　　岡山市教育委員会教育長　奥山　桂
発掘調査対策委員　　稲田孝司（岡山大学教授）
（故）鎌木義昌（岡山理科大学教授）
西川　宏（山陽学園教諭）
（故）西原礼之助（岡山市文化財保護審議会会長）
間壁忠彦（倉敷考古館館長）
水内昌康（岡山市文化財保護審議会副会長）
発掘調査担当者　　青山　淳（岡山市教育委員会文化課長）

出宮徳尚（岡山市教育委員会文化課長補佐）
根木　修（岡山市教育委員会文化課文化財係長）
神谷正義（岡山市教育委員会文化課文化財保護主任）
（調査員）　草原孝典（岡山市教育委員会文化課文化財保護主事）
（調査員）　河田健司（岡山市教育委員会文化課文化財保護主事）
（経　理）　沼　智恵（岡山市教育委員会文化課主事）

発掘調査現場作業員　青木敏夫
板野輝夫
榎　顕司
大溝　神
高坂義視
小西　愿
佐々木龍彦
長門卓正
難波俊一
則武福市
蜂谷由太郎
横田順一

発掘調査現場事務員　森脇光世
出土物整理事務員　木村真紀
高橋博美（旧姓岡）
乗岡美佐子
山元尚子

調査にあたり、対策委員の先生方や地元考古学研究者のご教示・ご助言を頂いた。
発掘の実施に際しては、岡山市立鯉山小学校から諸般の便宜に預かった。また造成土の削除、搬出等の土木作業に関しては本来産合建の多大な助力を得た。さらに報告書の作成にあたって、墨書土器の読解については狩野久氏のご教示を、江見正己、小郷利幸、岡嶋隆司、大谷博志、大橋康二、大庭康時、小野雅明、片岡宏二、加原耕作、汐見一夫、渋田東美、杉山一雄、鈴木景二、高田明人、高田恭一郎、高畑知功、武田恭彰、中野雅美、馬場昌一、林信男、平井勝、平井泰男、弘田和司、久野修義、福島政文、福田正継、松井政子、水野正好、山村信榮、山元敏裕の諸氏からは助言と協力を得た。
諸々にご助勢下さった方々に深謝する次第である。

経過と概要

調査区は、「源平の争乱」の時に平家方の武将として活躍し、木曽義仲と板倉で合戦して敗れて斬ら

図４　調査区位置

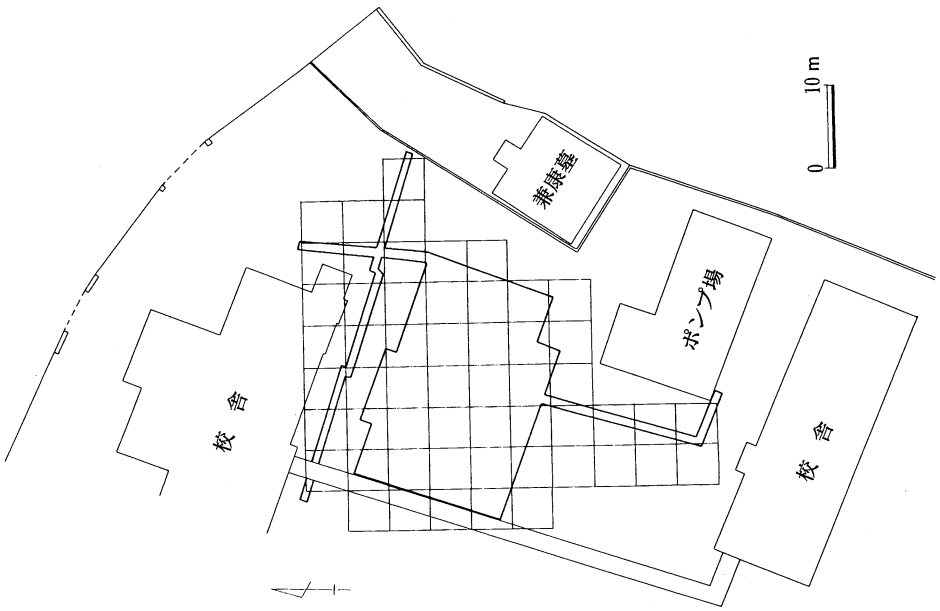
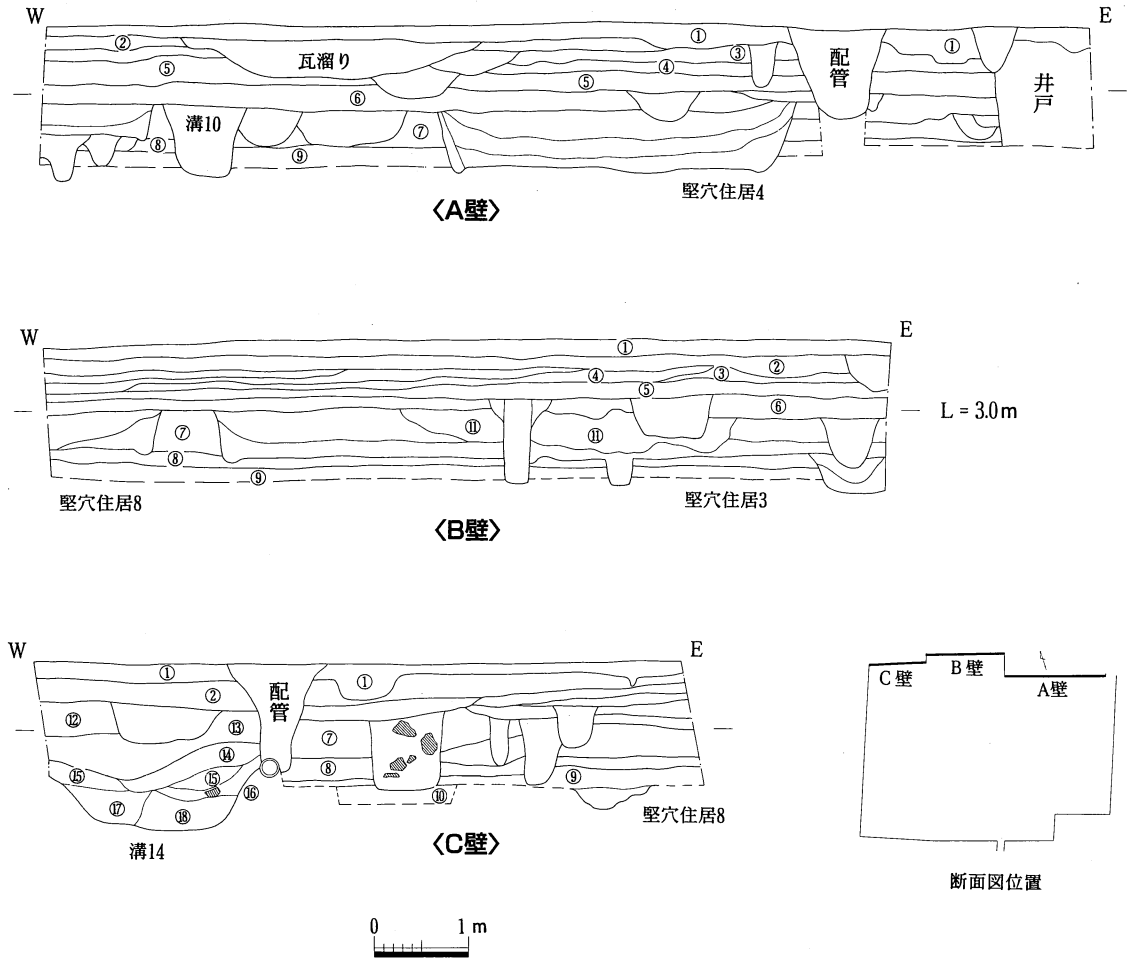


図５　発掘区域図



①淡茶灰色土（近世～近代包含層）
②茶灰色土（含炭）(近世～近代包含層）
③茶褐色土（中世～近代包含層）
④暗茶褐色土（中世包含層）
⑤淡灰茶色土（奈良～中世包含層）
⑥暗灰褐色（古墳～奈良包含層）
⑦暗褐色土（弥生～古墳包含層）
⑧淡褐色土（弥生包含層）
⑨淡黄茶灰色土（縄文包含層）
⑩淡黄灰色土（基盤層）
⑪貝層
⑫黄茶色土（溝14上層）
⑬暗茶色土（溝14上層）
⑭暗青灰色土（溝14下層）
⑮茶灰色粘質土（溝14下層）
⑯暗青灰色細砂（溝14下層）
⑰暗青灰褐色粘土（溝14最下層）
⑱暗灰褐色粘質土（溝14最下層）

図６　調査区断面図

れた妹尾（瀬尾）太郎兼康の供養塔の西側に位置する（図４、５）。兼康は、高梁川から直接取水し、広大な総社平野の水田を灌漑する十二ヶ郷用水を修造した伝承をもっており、地元の功労者としての側面もある。鯉山小学校の敷地は、江戸時代まで兼康の菩提を弔うために建立されたといわれる道勝寺の境内であった。また兼康の供養塔については、鯉山小学校を建てた際に現在の場所に移動させたということも伝わっており、元は今回の調査区付近にあったとする話もある。なお、調査面積は800㎡である。

厚さ15～20㎝の薄い造成土を除去すると、淡茶灰色～淡褐色の包含層が約1.6ｍの深さまで存在し、

基盤層は淡黄茶灰色土で、これは縄紋晩期中葉の包含層でもある（図６）。包含層は土色の濃淡の違いによりいくつかに分けられるが、平面精査時には識別が困難で、機械的にレベルを設定して精査を繰り返し、時期別に遺構面をとらえることを目指した。

遺構面は、近世面、中世面、古代面、古墳時代面、弥生時代面、縄紋時代面の６面である。近世面は、上下の２層があり、２時期に分離できる。これらは道勝寺関連の遺構で、寺に伴う段状遺構や堀、寺墓、ごみ穴などが検出された。しかし、道勝寺関連の遺構は近世初頭までで、それ以前には寺の痕跡は検出できなかった。

中世面は、多数の柱穴と土師質土器が多量に廃棄された土壙が検出され、そのうち最も大きな土壙から頭骨が出土した。この遺構面は、出土した土器から12世紀末が主体となる。

古代面は、２本平行する溝の両脇に方形の掘り方の柱穴で構成される建物が検出された。溝の埋土から多量の土器が出土し、その大半は食膳具であった。建物は、溝の方向と棟方向が同じであり、溝方向は吉野口遺跡の北にある山陽道の方向と平行している。この遺跡の古代の遺構面には、広い範囲を包括した規則性が存在することが推定され、公的施設の可能性が推測される。

古墳時代の遺構面は、竪穴住居、溝、土壙、焼土塊などが検出され、出土した須恵器から６世紀後半が主体と考えられる。このうち鉄滓を廃棄した土壙からは、フイゴの羽口や荒鉄を小割り選別した残滓が出土しており、遺跡内で精練鍛冶などがおこなわれたことが推測される。

弥生時代の遺構面は、中期と後期の２時期があり、それぞれ竪穴住居が検出されているが、遺構や遺物の量は中期の方が圧倒的に多い。

縄紋時代晩期中葉の遺構面は、当初は遺物の含まれない基盤層と考えていたが、部分的に掘り下げた部分から土器が出土したため面的に精査した結果、竪穴住居、土壙、炉状遺構などが検出された。遺物は土器の他に石鏃や石包丁状のスクレイパーが出土しており、南側の微高地おち部、もしくは溝の埋土からイネのプラントオパールが検出されたことから、農具として用いられた可能性も推測される。

発掘日誌（抄）

平成３年８月３日　発掘器材の搬入
５日　発掘開始、北側配管部分の調査区掘り下げ
17日　本体部分の調査区掘り下げ
19日　北側配管部分の調査区掘り上がりの写真撮影
21日　本体部分近世面精査
９月11日　近世面掘り上がりの写真撮影、包含層を掘り下げる
10月14日　中世面掘り上がりの写真撮影、包含層を掘り下げる
17日　Ｐ110の下層から頭骨出土
25日　発掘調査対策委員会開催
30日　古代面掘り上がりの写真撮影、包含層を掘り下げる
11月６日　南側配管部分の調査区掘り下げ
22日　南側配管部分の掘り上がりの写真撮影
26日　本体部分包含層掘り下げ
29日　古墳時代と弥生時代の遺構精査
平成４年１月８日　弥生時代面掘り上がりの写真撮影
17日　発掘調査対策委員会開催
18日　現地説明会を開催、雪の舞う厳寒の日にも関わらず150人以上の参加者がある。
23日　縄紋時代面精査
28日　縄紋時代面掘り上がりの写真撮影
31日　発掘器材撤去、発掘調査終了

（草原）

第Ⅲ章　遺構と遺物

近世から縄紋時代晩期にかけての遺構が検出され、それぞれの層序関係は前節を参照されたいが、ここでは各遺構とそこから出土した遺物の概要を時期ごとに説明する。

Ⅰ　縄紋時代晩期（図7、8）

竪穴住居と推定される柱穴2つをもった円形の窪みと、土壙や炉と推定される焼土塊を幾つか検出した。この時期の包含層は当初上層の弥生時代中期のベースで無遺物層と考えていたが、同層を掘り下げてみたところ標高2.4mぐらいから遺物がかなり出土し、それらの遺物の出土状態が幾つかのブロックに分かれる傾向が看取された（図7）。非常に判別のつきにくい土質ではあったが、精査した結果以下の遺構をとらえることができた。これらの遺構の時期については溝16の埋土上面からいわゆる突帯紋土器が2片検出されているが、他には同時期に属すると思われる土器はなく、この遺構面は縄紋時代晩期前半の比較的単一の時期幅のうちで形成されたものと推定される。

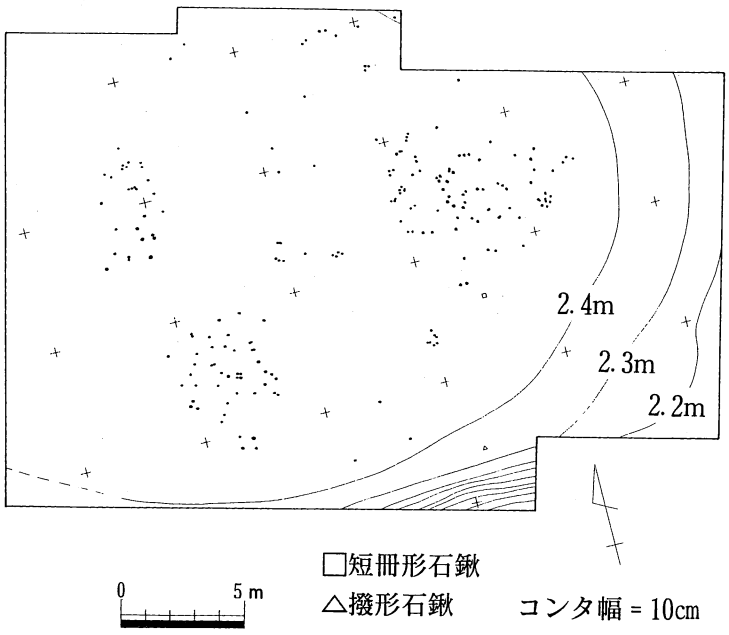


図7　縄紋時代晩期面遺物分布（包含層）及び微地形

竪穴住居14（図9、10、11、12）

調査区中央東側で検出された遺構である。平面形は径約4mの円形で、深さは検出面から約17cm、断面形は逆台形をなす。床面中央には柱穴と思われるピットが3つ認められるが、他の竪穴住居の柱穴は中央に2つあることから本来は当住居の柱穴も中央の2つで、北側の比較的小さなピットは添柱のような複次的なものと推定される。中央の2つのピットの間隔は1.17mである。南側のピットの深さは床面から約30cm、他は約20cmである。床面は平坦であるが貼床等は認められなかった。

遺物は埋土中から全て検出された。床面上には殆ど遺物が認められず、遺物は遺構中央に向ってレベルが低くなる傾向が看取されることから、遺構廃絶後の窪みに遺物が埋没していたと推定される。遺物は殆どが土器片である。土器片のうち多くを占めるのは深鉢の胴部の破片であるが、個体数を推定するために口縁部片についてのみ数えると4点、底部も4点となる。浅鉢については破片数は深鉢と比べ少ないものの、口縁部片については12点となり深鉢よりも多くなる。また浅鉢の胴部の破片と思われる24

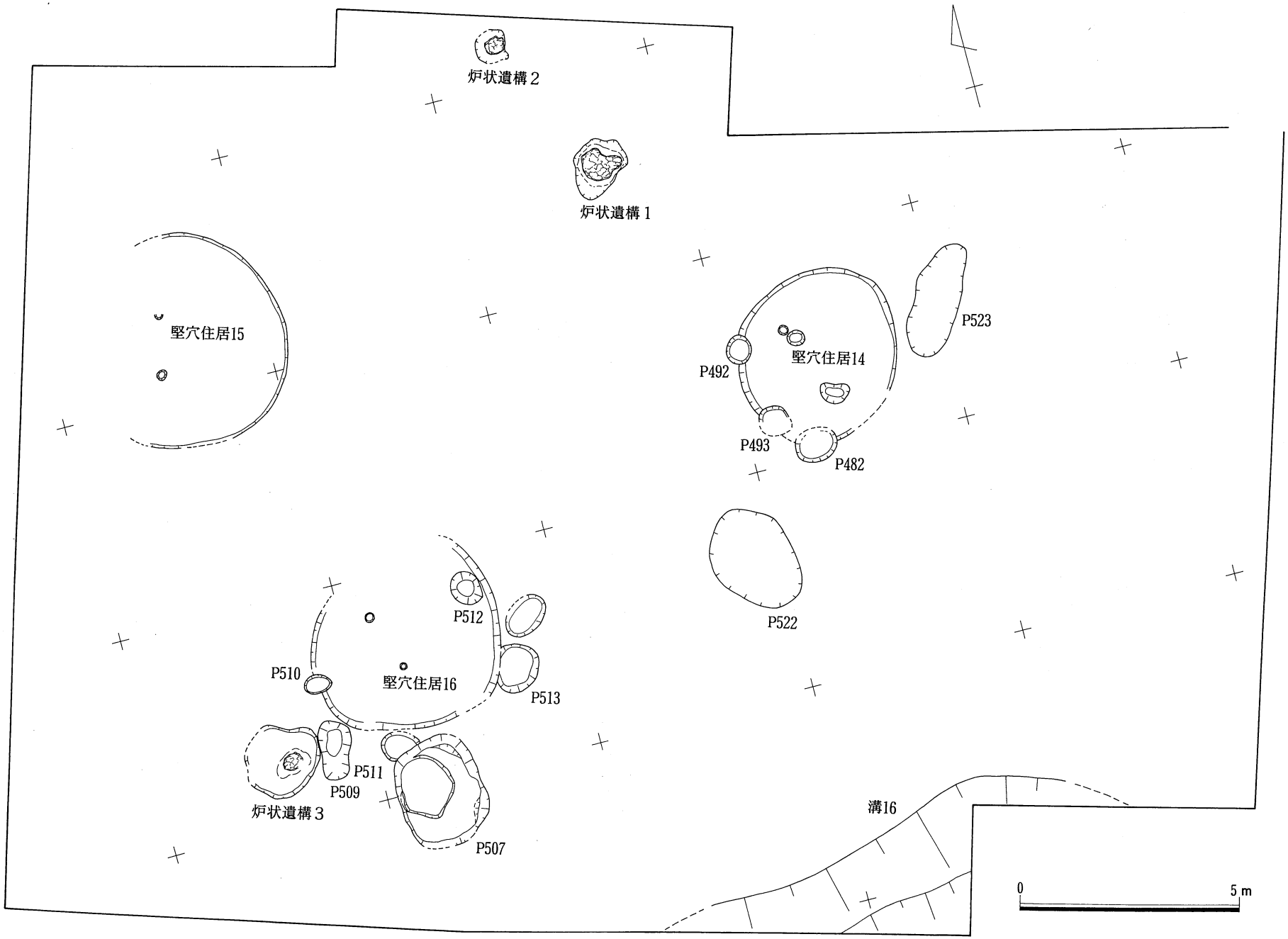


図8　縄紋時代晩期遺構配置図

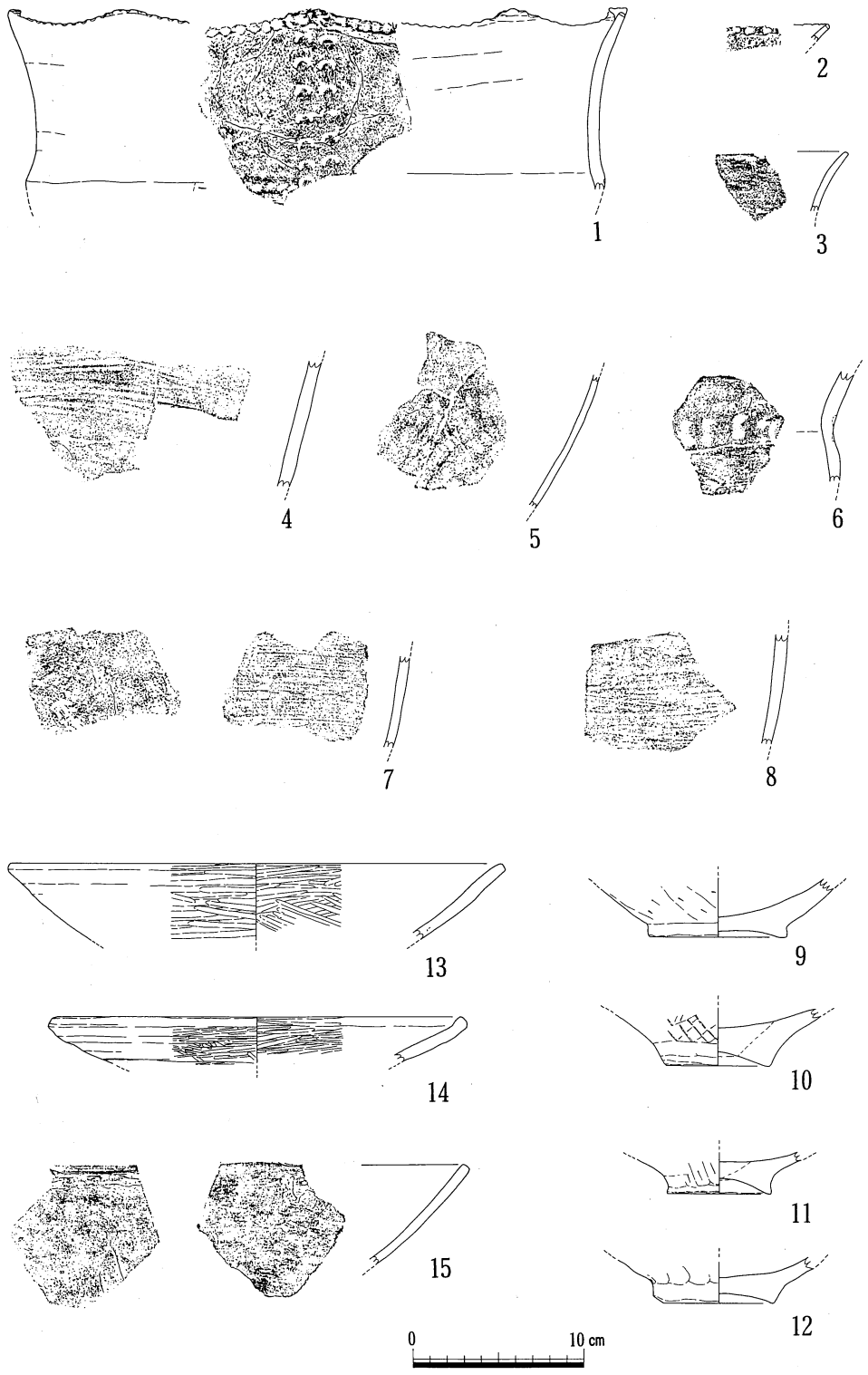


図９　竪穴住居14出土遺物（１）

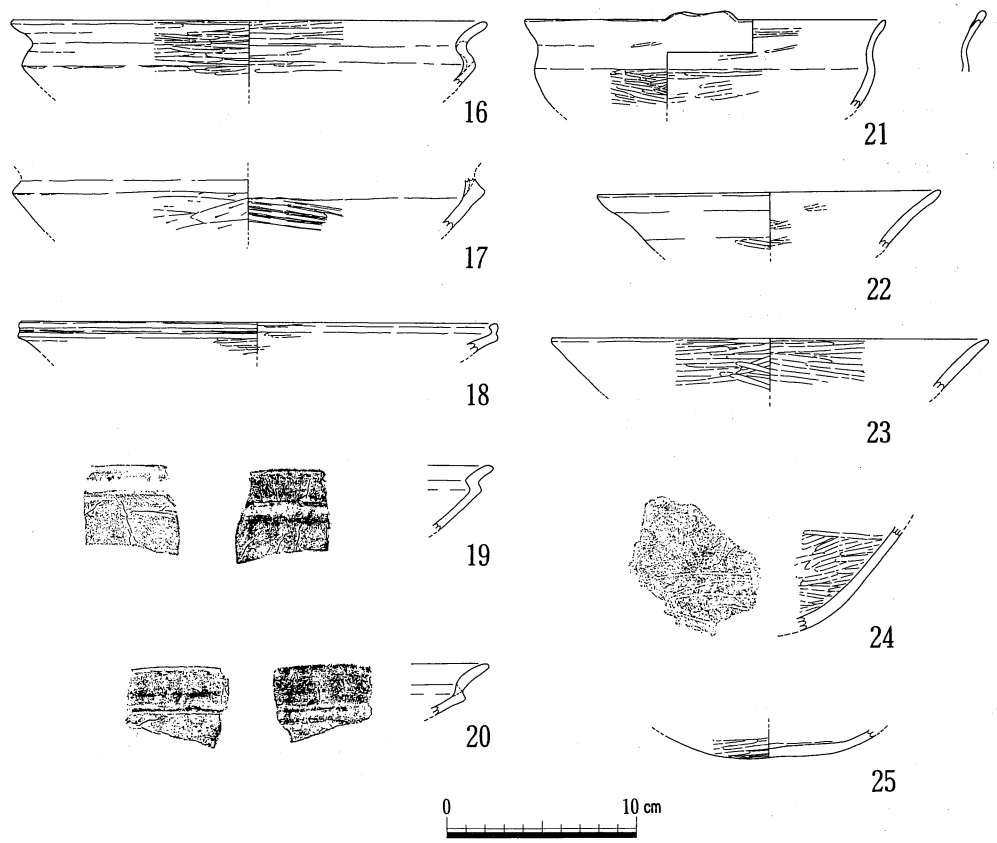


図10　竪穴住居14出土遺物（２）

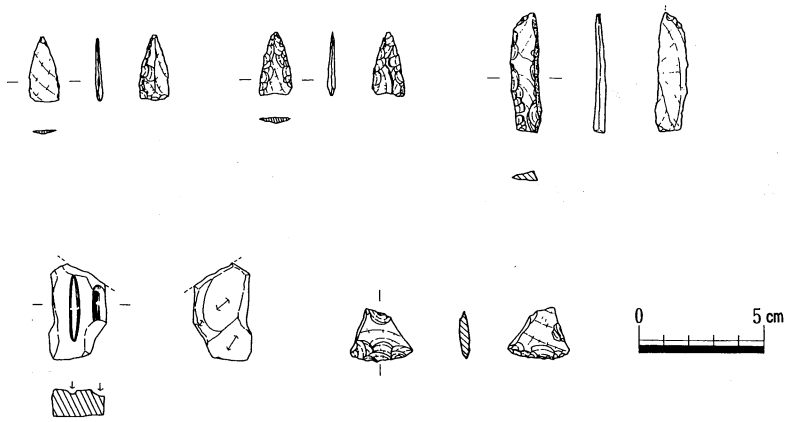


図11　竪穴住居14出土遺物（３）

の外面には鋸歯状の線刻が描かれており、これは当調査区で検出された縄紋時代晩期の土器中で唯一線刻で描いたものである。石器にはサヌカイト製で平基式と凹基式の無茎鏃２点と、同じくサヌカイト製のスクレイパー２点の他に、凝灰岩製の玉砥石が１点出土した。

竪穴住居15（図13、14）

調査区西側で検出された遺構である。西側1／3程は近世の溝により削平されているが、残存部分から平面形が径約５ｍの円形と推定され、深さは検出面から約12㎝で断面形は逆台形をなす。床面中央やや西寄りには柱穴と思われるピットが２つ認められ、南側のピット埋土には上層に焼土がブロック状に含まれている。ピットの径は両方とも約25㎝で、ピット間は約1.2ｍである。北側のピットの深さは床面から約30㎝、南側のピットは約35㎝である。床面は平坦であるが貼床等は認められなかった。

遺物は埋土中から全て検出され、床面直上では検出されなかった。検出された遺物間のレベル差は殆ど認められないが、1～2㎝程北東部分のレベルが高くなっている傾向が看取される。この方向からの遺物の投棄或いは流入が推定される。遺物は全て土器片である。土器片のうち比較的個数の多いのは深鉢の胴部の破片であるが、個体数を推定するための口縁部片についてのみ数えると４点となる。浅鉢については破片数は深鉢と比べ少ないものの、口縁部片については５点となり、深鉢よりもやや多くなる。深鉢の調整は二枚貝条痕、ヘラケズリ、ナデで、浅鉢は比較的細かい単位のミガキが施される。

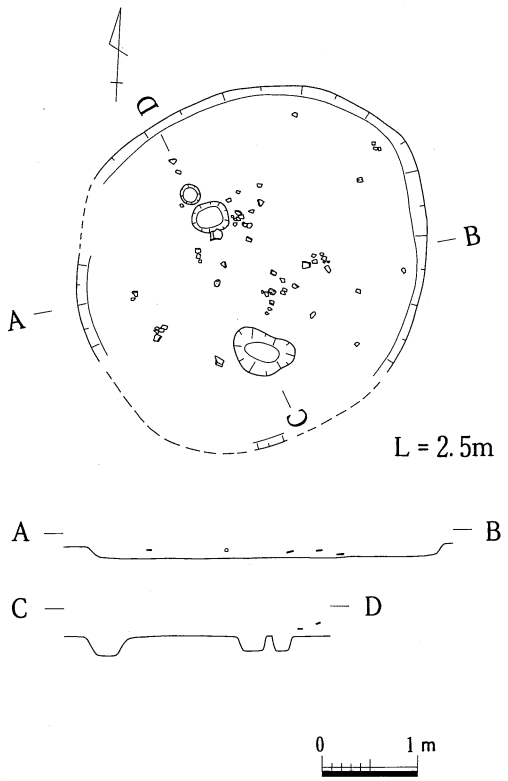


図12　竪穴住居14実測図

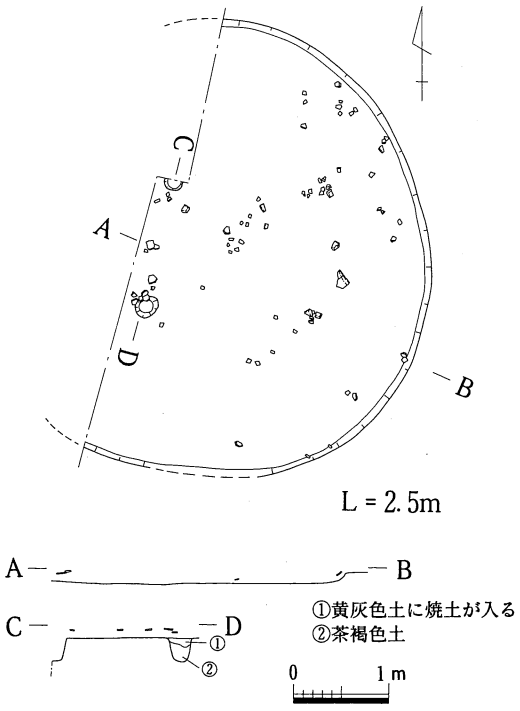


図13　竪穴住居15実測図

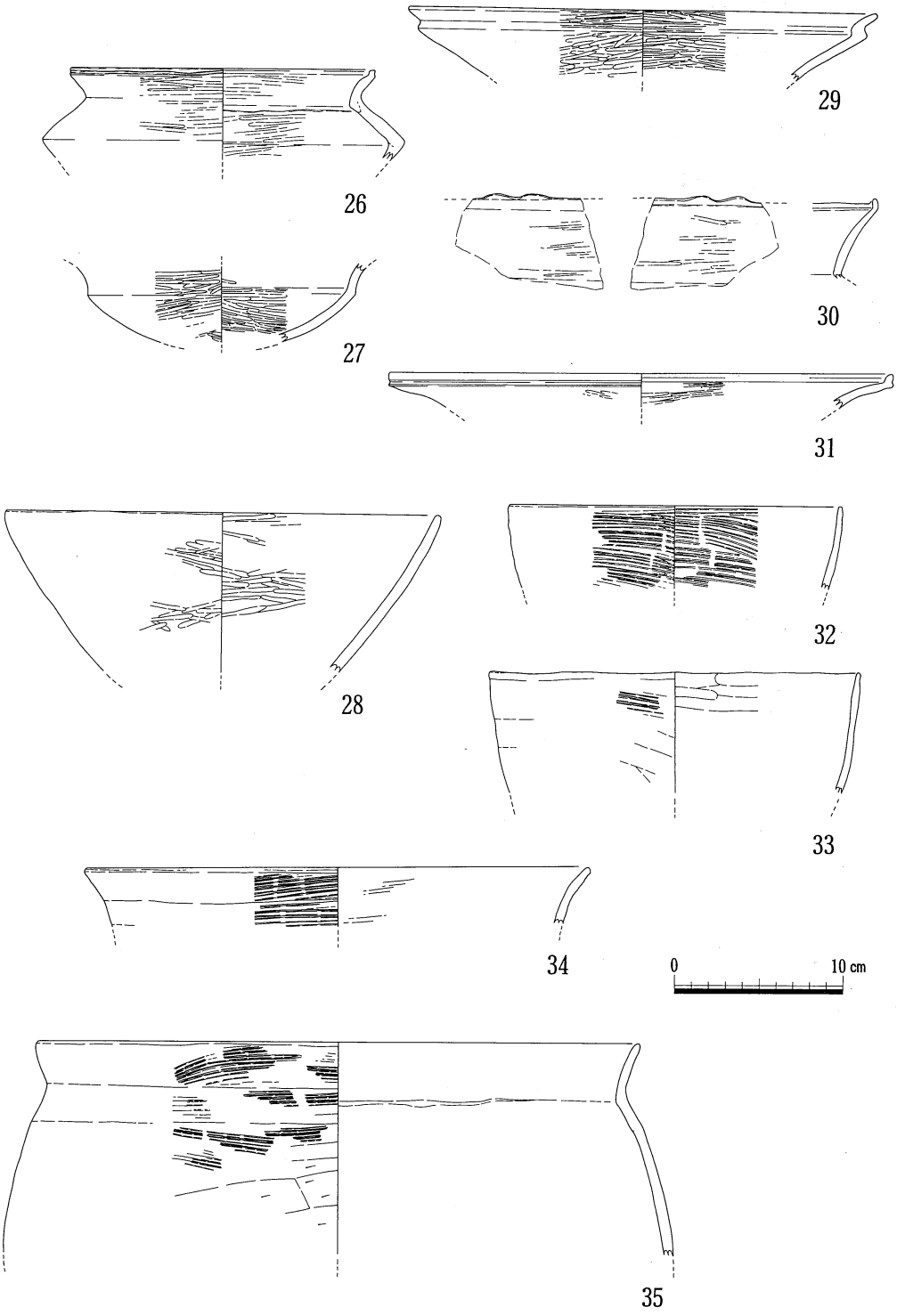


図14　竪穴住居15出土遺物

竪穴住居16（図15、16、17、18）

調査区中央南側で検出された遺構である。部分的に上層の弥生時代中期の住居跡により削平を受けているが、平面形が径約4.8mの円形と推定され、深さは検出面から約17cmで断面形は逆台形をなす。床面中央やや西寄りには柱穴と思われるピットが2つ認められ、北側のピット埋土には浅鉢の胴部と思われる土器片が2点検出された。ピットの径は北側がやや大きく約24cm、南側が約20cmで、ピット間は約1.3mである。北側のピットの深さは床面から約27cm、南側は約20cmである。床面は平坦であるが貼床等は認められなかった。

遺物は埋土中から検出され、床面直上では検出されなかった。遺物の出土状態は中央やや北寄りの部分に向かいレベルが低くなっている傾向が看取され、当遺構廃絶後の窪みに遺物が投棄或いは流入したと推定される。遺物は殆どが土器片で若干石器が検出された。土器のうち最も個数の多いのは深鉢の胴部片で、個体数を推定するために口縁部片についてのみ数えると11点で、底部は2点となる。浅鉢は8点で、底部は1点となる。深鉢の調整は二枚貝条痕が主体で、浅鉢は単位の比較的細かいミガキが施される。石器は石包丁に類似するサヌカイト製のスクレイパーが1点、同じくサヌカイト製の石錐と思われるものが2点と、頁岩或いは粘板岩と推定される石材で偏平片刃石斧と似た形状をし、断面形を台形に整形したものが1点出土した。

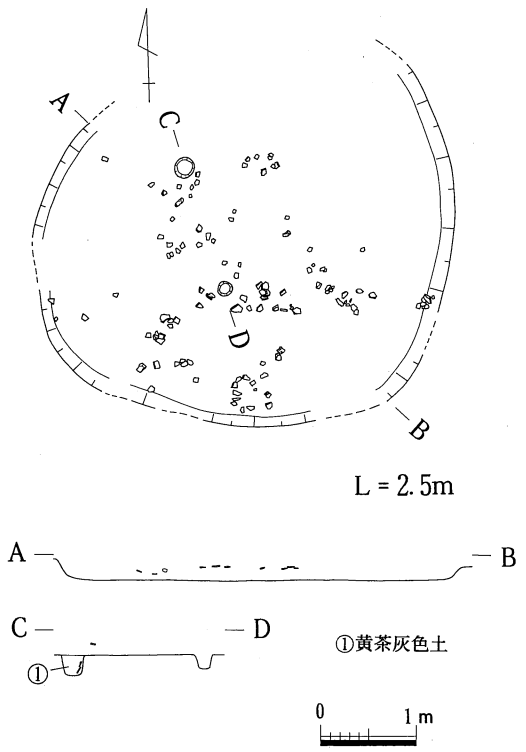


図15　竪穴住居16実測図

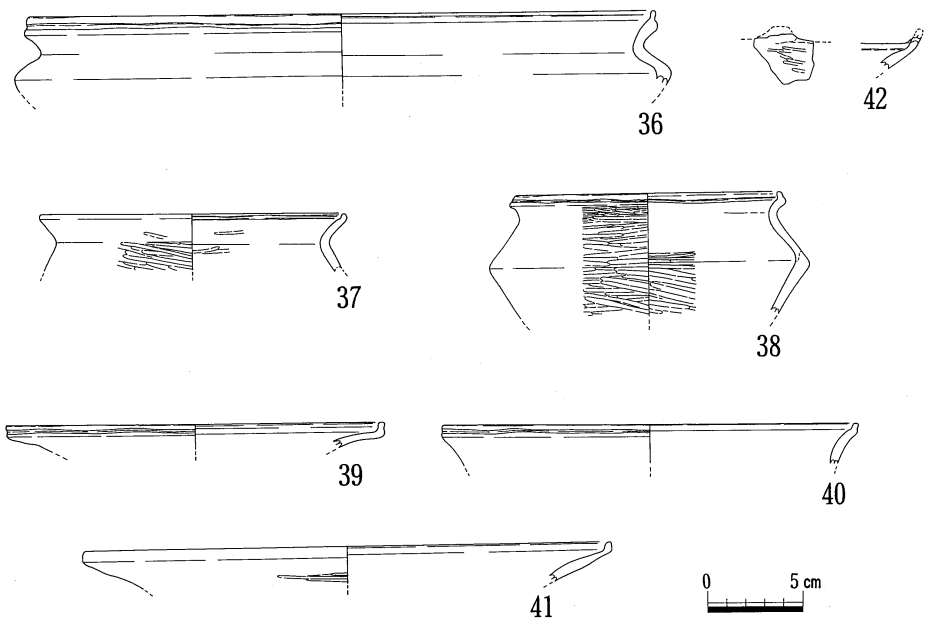


図16　竪穴住居16出土遺物（1）

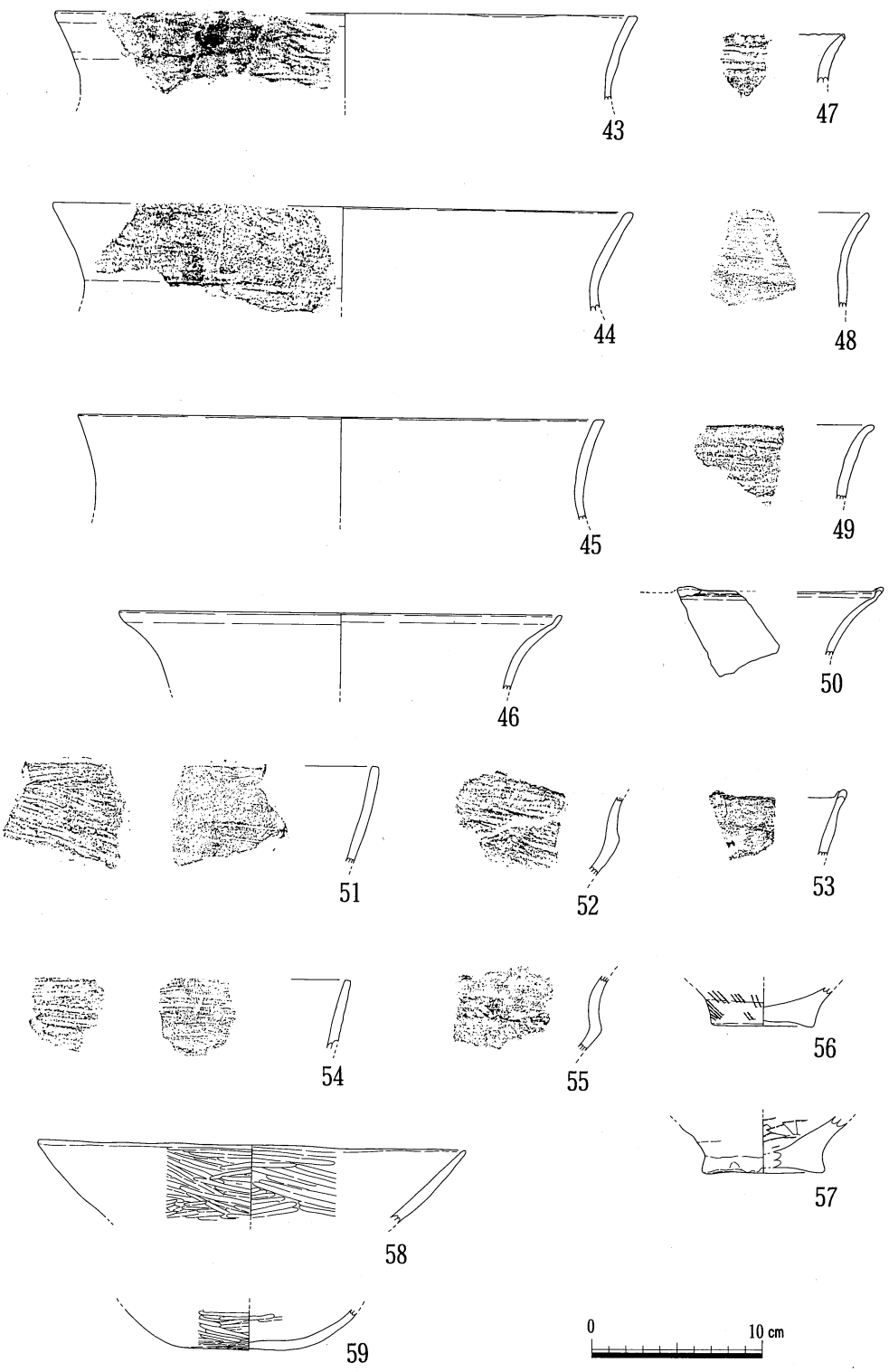


図17　竪穴住居16出土遺物（２）

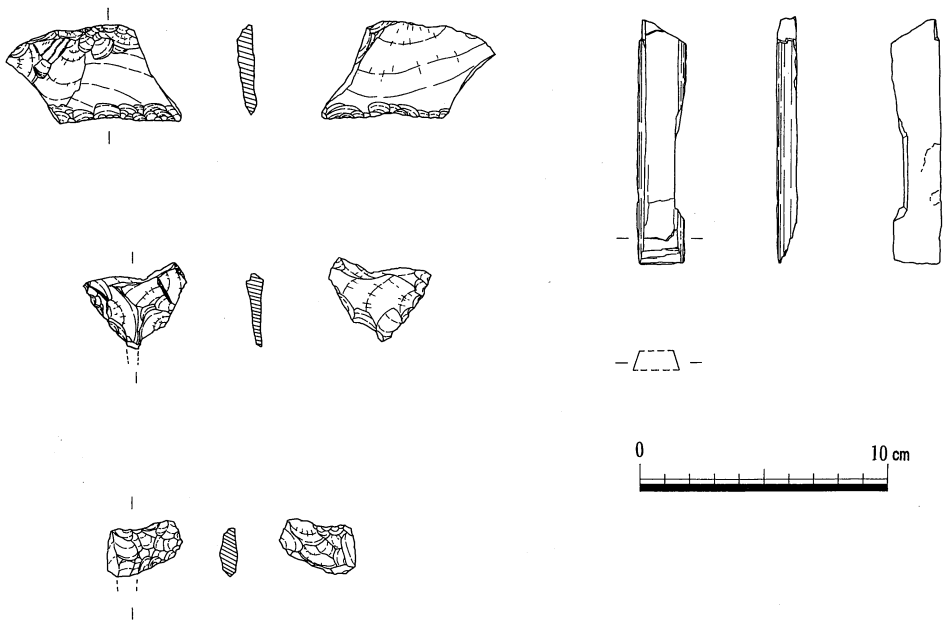


図18　竪穴住居16出土遺物（３）

P482（図19、20）

調査区中央やや東寄りで検出された土壙で、北は竪穴住居14により削平されている。長径約１ｍ、短径約0.8ｍの楕円形の平面形を呈し、断面形は東側がやや窪んだU字形をしており検出面からの深さは約30㎝である。埋土は４層で、第２層と第４層から遺物が出土した。土器は小片ばかりで、深鉢の口縁部片が４点と底部が１点、浅鉢が２点である。

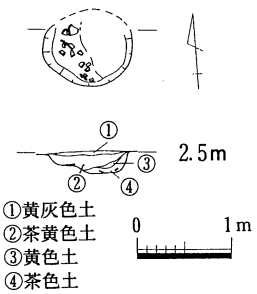


図19　P482実測図

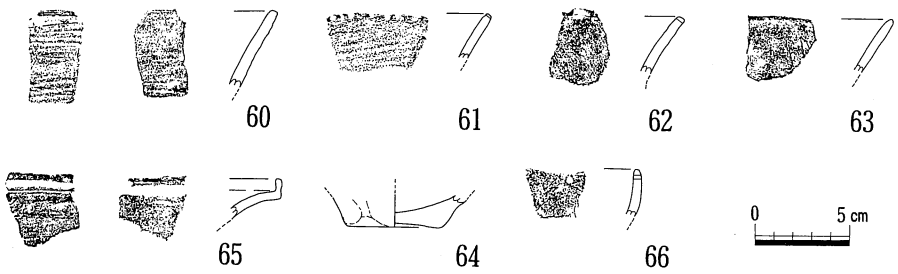


図20　P482出土遺物

P507（図21、22、23、24）

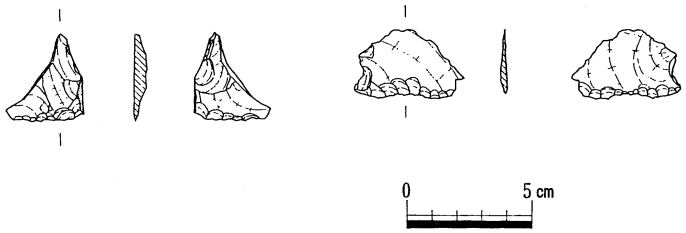


図21　P507出土遺物（１）

調査区中央やや南寄りで竪穴住居16の南側に接するような位置で検出された土壙である。長さ約2.6m、幅約２mの隅丸長方形の平面形を呈し、底部北側はさらに径約1.4m程の菱形気味の円形に掘り下げてある。断面形は基本的には台形で、検出面からの深さは最深部で約65cm、一段上がった部分で約50cmである。埋土は５層で、第２層と第４層から主に遺物が出土した。

遺物の主体は土器で、石器も若干出土した。土器のうち最も個数の多いのは深鉢の胴部片で、そのうち口縁部片は８点、底部片は２点である。浅鉢の口縁部片は３点であるが、確実に別個体の胴部片を含めると５点となる。深鉢は殆どが二枚貝条痕で、口縁端部にキザミをめぐらすものは１点のみである。浅鉢の調整は基本的には単位の細かいミガキである。石器はサヌカイト製のスクレイパーが２点出土した。

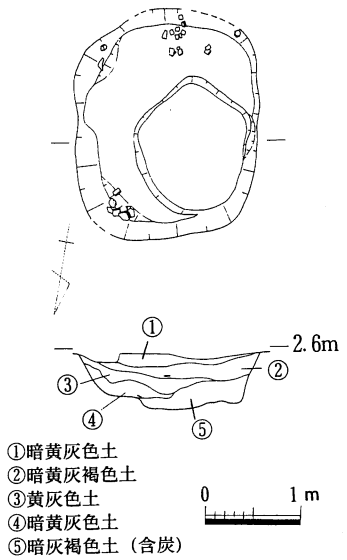


図22　P507実測図

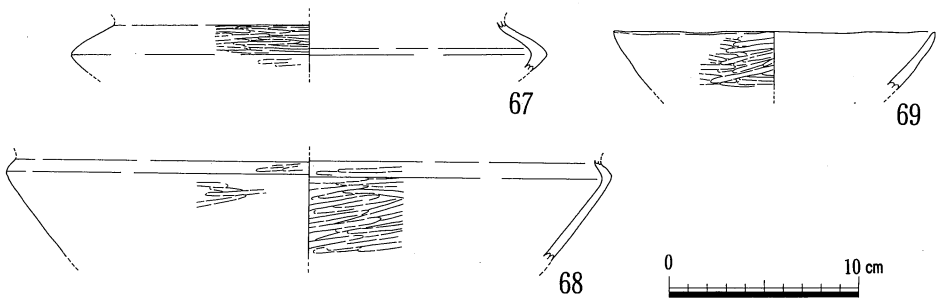


図23　P507出土遺物（２）

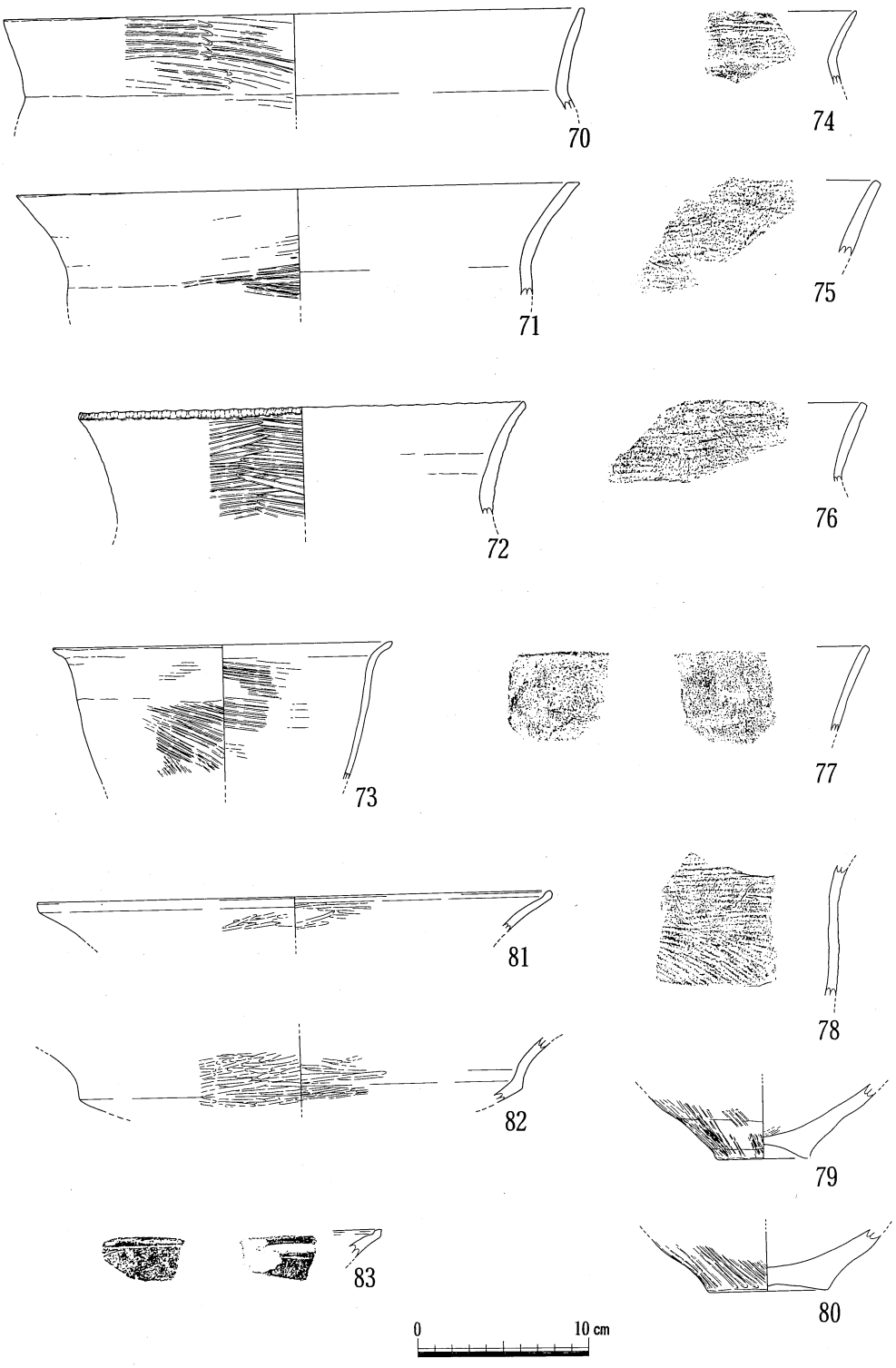


図24　P507出土遺物（3）

P522（図25、26、27）

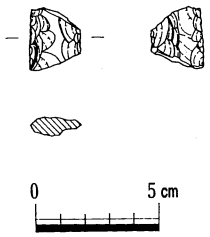


図25　P522出土遺物（1）

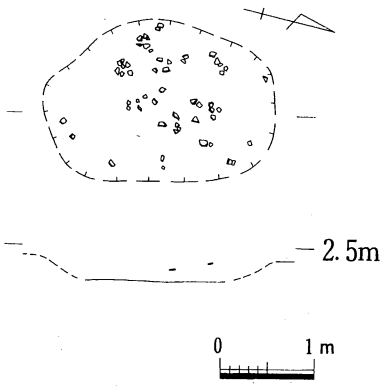


図26　P522実測図

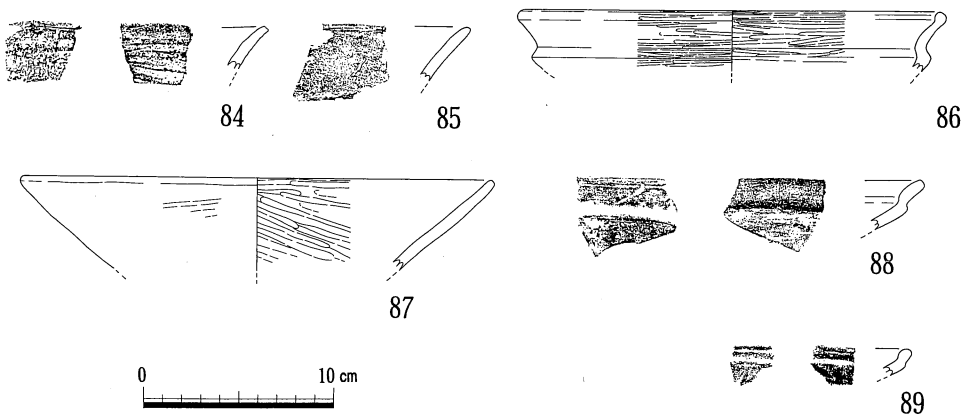


図27　P522出土遺物（2）

調査区中央東側で検出された土壙で、遺物の出土状態から長径約2.5m、短径約1.8mの長楕円形の平面形が推定される。深さは最も高い位置で検出された遺物から約30cmで、断面形は逆台形と思われる。遺物は土壙中央に向かいレベルが低くなる傾向が看取される。

遺物の主体は土器で石器が1点認められた。土器は胴部の破片が多く、図化できたのは6点のみで、深鉢が2点、浅鉢が3点である。石器はサヌカイト製のスクレイパーが1点出土した。

P523（図28、29、30）

調査区北東部で検出された土壙で、遺物の出土状態から長径約2.6m、短径約1mの長楕円形の平面形が推定される。深さは出土した遺物の高低差から約30cmと思われる。遺物は土壙中央に向かいレベルが低くなる傾向が看取される。

出土した遺物は全て土器で、深鉢の胴部片の個数が最も多い。そのうち口縁部片は14点で底部片は1

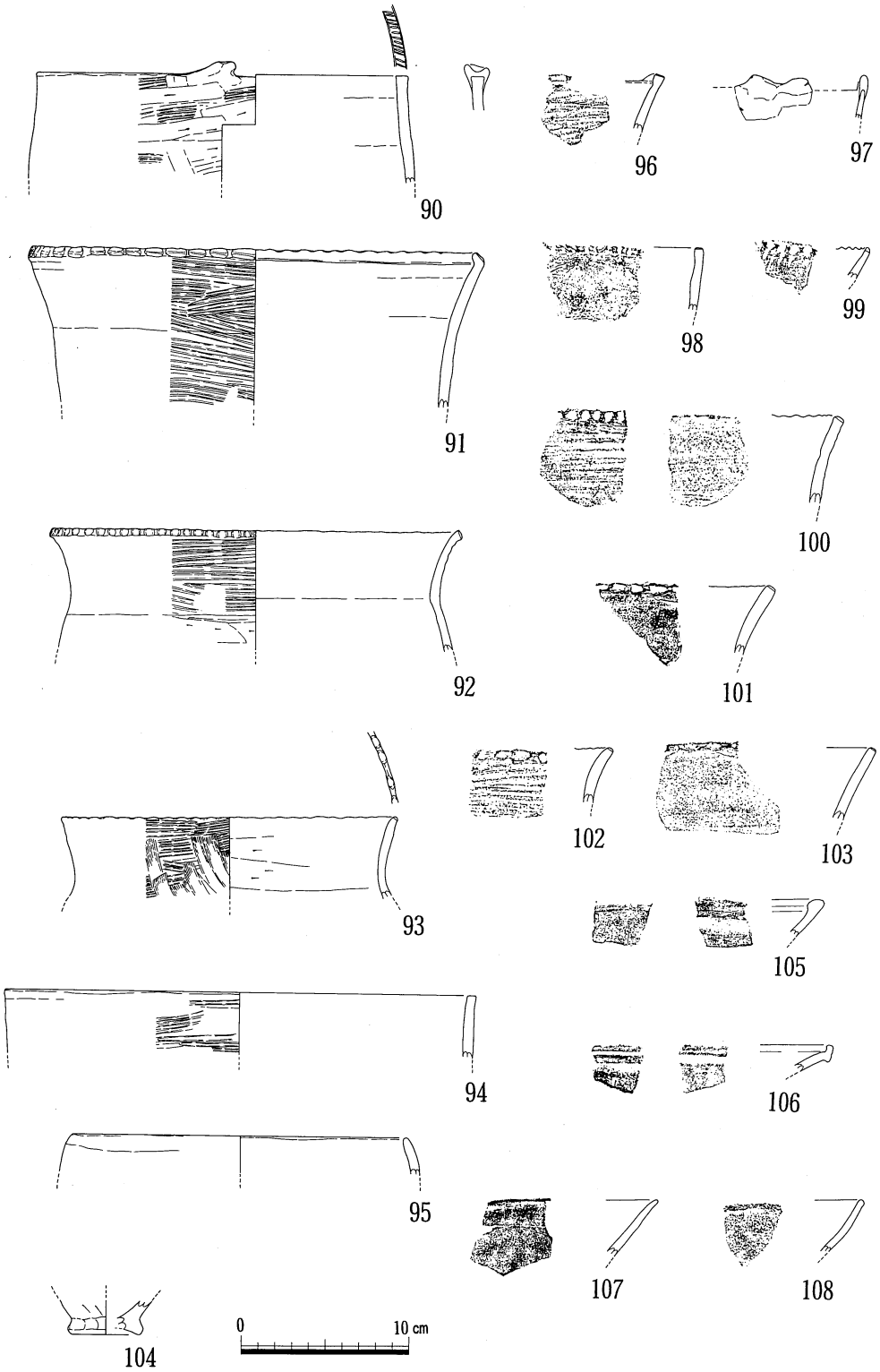


図28　P522出土遺物（1）

点である。浅鉢の口縁部片は6点である。この土壙から出土した土器のうち、深鉢は口縁端部に多様なキザミをめぐらすものが殆どで、端部も折り曲げたり突起を貼付するものが目立つ。浅鉢も（106）のように口縁端部を強調しているものがあり、他の遺構から検出された土器よりもやや古相の感じを受ける。

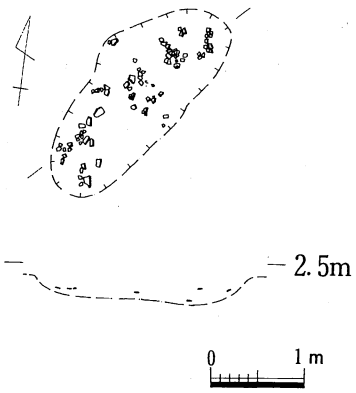


図29　P523実測図

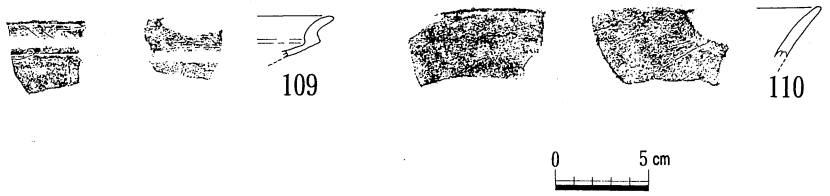


図30　P523出土遺物（2）

炉状遺構1（図31、32、33）

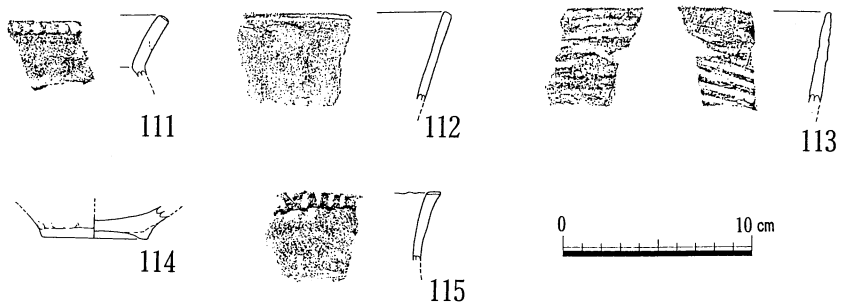


図31　炉状遺構1周辺出土遺物（1）

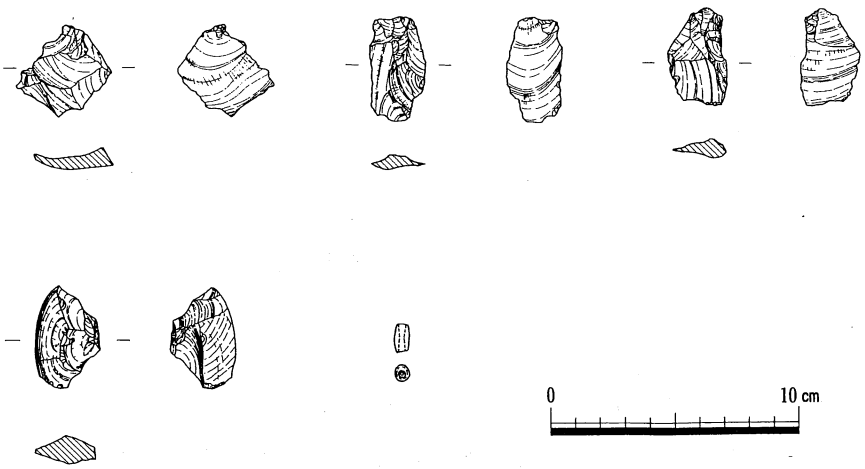


図32　炉状遺構1周辺出土遺物（2）

調査区中央北側で検出された。長さ約1.5m、幅約１mの不定形で、深さ約15cmの浅い窪み状の土壙に厚さ約10cmの焼土が塊状で検出された。焼土周囲には微細な骨片も採集されたが、遺物は含まれていなかった。かなり大きな焼土であることや各竪穴住居からほぼ等しい距離にあることから、共同で用いた炉ということも推定される。

遺物は遺構の周囲から深鉢の破片が若干と、黒曜石の剥片が４点、緑色でやや軟質の石材の管玉が１点検出された。当調査区で出土した黒曜石はこの４点だけである。

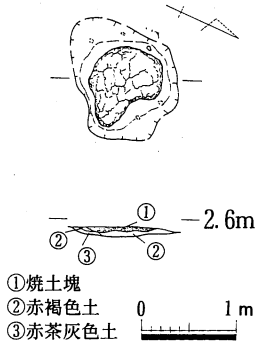


図33　炉状遺構１実測図

炉状遺構２（図34）

炉状遺構１の北側で検出された。

径約70cmの不整円形で、深さ約10cmの浅い窪み状の土壙に厚さ約10cmの焼土が塊状で検出された。炉状遺構１と比べてかなり小さいが、炉状遺構１と同様にそれぞれの竪穴住居が共同で用いた炉ということも推定される。

遺物は全く検出されなかった。

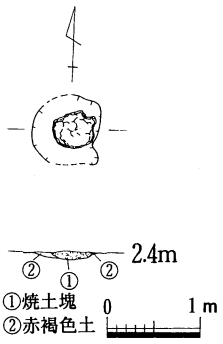


図34　炉状遺構２実測図

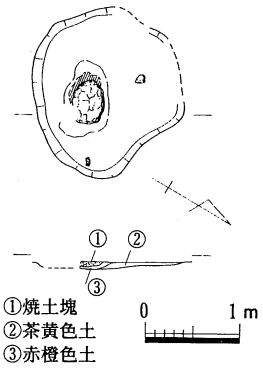


図35　炉状遺構３実測図

炉状遺構３（図35）

竪穴住居16の南側で検出された。長さ約1.8m、幅約1.6mの不整円形で、深さ約10cmの窪み状の土壙の中央やや東寄りの位置で厚さ約10cmの焼土が塊状で検出された。焼土塊の大きさは炉状遺構２と殆ど同じである。

遺物は深鉢と思われる小片が２点出土した。

P492（図36）

竪穴住居14の西側を一部削平している。径約65cmの円形の平面形を呈し、深さは検出面から約40cmで断面形は方形である。埋土は２層で、第１層から深鉢の胴部と思われる小片が１点出土した。

P493（図36）

竪穴住居14の南側を一部削平している。南側は弥生時代中期の遺構で削平されているが、残存部から径約60cmの円形もしくは隅丸方形の平面形を呈すると思われ、深さは検出面から約20cmで逆台形の断面形と推定される。遺物は埋土中位から深鉢と思われる小片が３点出土した。

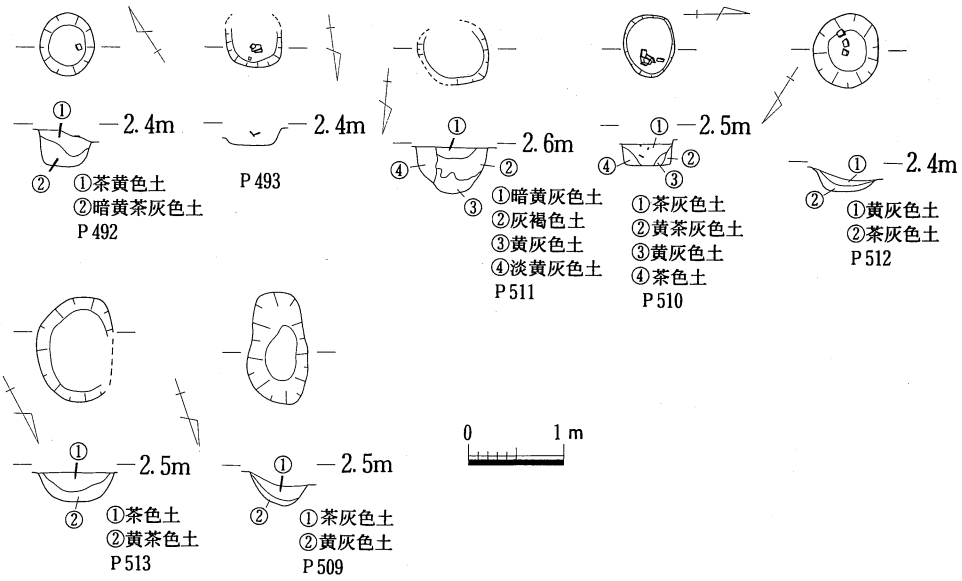


図36　P492, P493, P509, P510, P511, P512, P513実測図

P509（図36）

竪穴住居16と炉状遺構３の間で検出された土壙である。長径約1.2m、短径約0.6mの長楕円形の平面形を呈し、深さは検出面から約35cmで断面形はU字形である。埋土は２層からなり、第１層から土器の小片が出土した。

P510（図36）

竪穴住居16の西側を一部削平している。長径約80cm、短径約60cmの楕円形の平面形を呈し、深さは検出面から約30cmで断面形は方形である。埋土は４層からなり、遺物は第１層からのみ検出された。出土した遺物は全て土器片で、深鉢と思われる小片が７点検出された。

P511（図36）

竪穴住居16の南側で検出された土壙で、南半はP507によって削平されている。残存部から径約80cmの円形の平面形と思われ、深さは検出面から約50cmで断面形はU字形である。埋土は４層からなり、埋土中から土器の小片が１点検出された。

P512（図36）

竪穴住居16の上面で検出された土壙である。径約60cmの円形の平面形を呈し、深さは検出面から約30cmで断面形はU字形である。埋土は２層からなり、遺物は第１層から深鉢と思われる小片が３点出土した。

P513（図36）

調査区中央やや南寄りで検出された土壙で、西側は竪穴住居16により削平されている。残存部分から長径約1.2m、短径約0.8mの長楕円形の平面形と推定され、深さは検出面から約30cmで断面形はU字形である。埋土は2層からなり、遺物は埋土中から土器の小片が1点検出された。

溝16（図37）

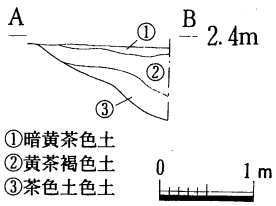


図37　溝16断面実測図

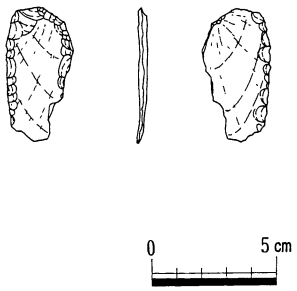


図38　溝16出土遺物（1）

調査区南端で検出された溝である。遺構の殆どが調査区外へ出てしまうため全形はわからない。南側の配管部分の調査区では当遺構面まで掘ることが出来ず、この溝以南における遺構の状況や地形等は明確にはできなかった。したがって溝16が微高地上を掘削したのか、微高地の端部を掘削したのかは明確ではないが、配管部分の重機による部分掘削の際の立会調査では縄紋期の遺物は認められず、土層も粘質土へ変わることから前者の可能性が高いと推定される。

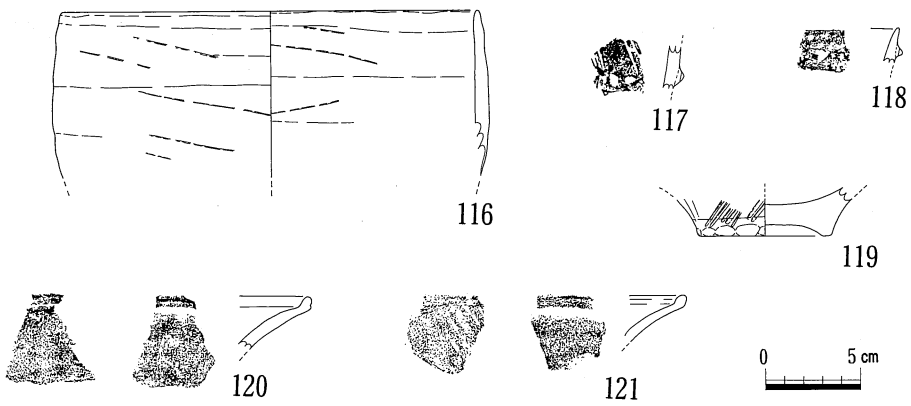


図39　溝16出土遺物（2）

溝の埋土は3層で、第2、3層は溝埋土として普遍的に認められるが、第1層は径約80cmの円形部分にのみ分布し溝全体には存在しなかった。第1層は溝が埋没した後の窪みに堆積したのか、もしくはやや新しい時期に土壙状の遺構であった可能性が考えられる。

遺物は各層から若干出土した。第1層からは（117）と（118）が、その他は第2、3層から出土した。（117）と（118）はいわゆる突帯紋土器で、この面で検出された縄紋土器の中で最も新しいものである。突帯紋土器は、この面ではこの2点だけである。他は深鉢の口縁部片1点と底部1点、浅鉢の口縁部片2点、サヌカイト製のサイドスクレイパーが1点出土した。

この溝の時期については、最も新しい時期の土器が（117）と（118）であるものの、出土した第1層が溝埋土というよりも後の堆積か、もしくは別の遺構の埋土とも考えられることや、第2、3層から突帯紋土器が認められないことから、他の遺構と同時期と考えておきたい。

なお、第１、２層についてプラントオパール分析を行ったところ、下層にいくにしたがいイネのプラントオパールが増加することが確認された（附章Ⅰ参照）。

包含層（図40、41、42）

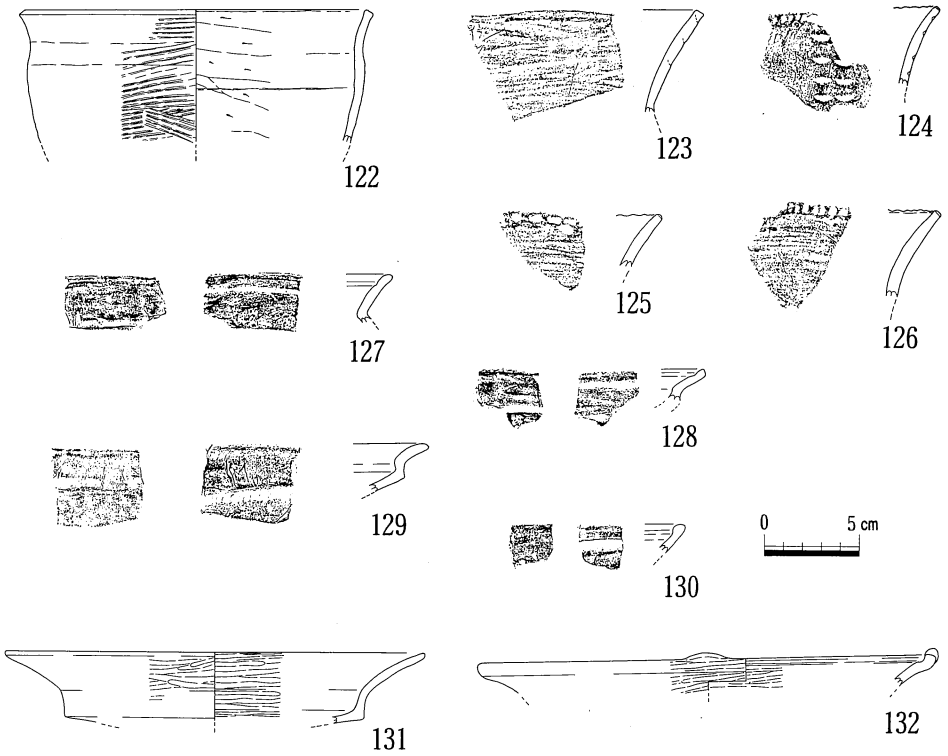


図40　包含層出土遺物（１）

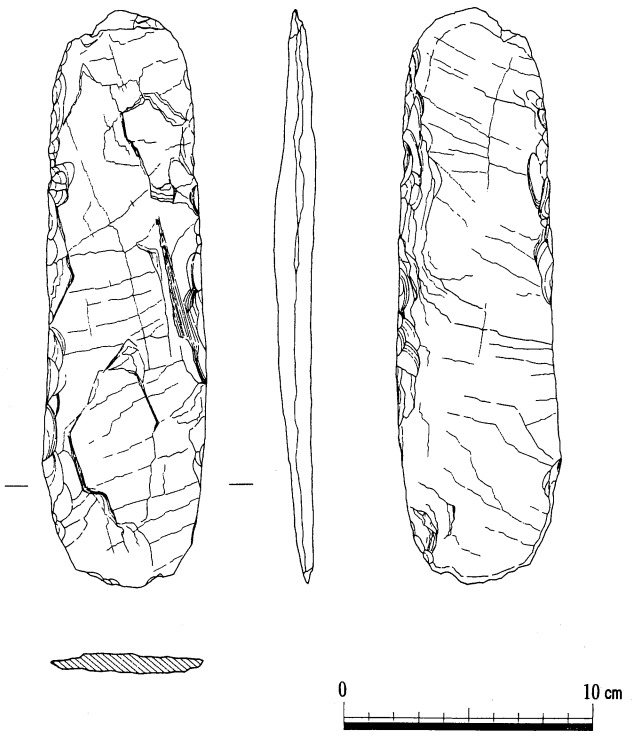


図41　包含層出土遺物（２）

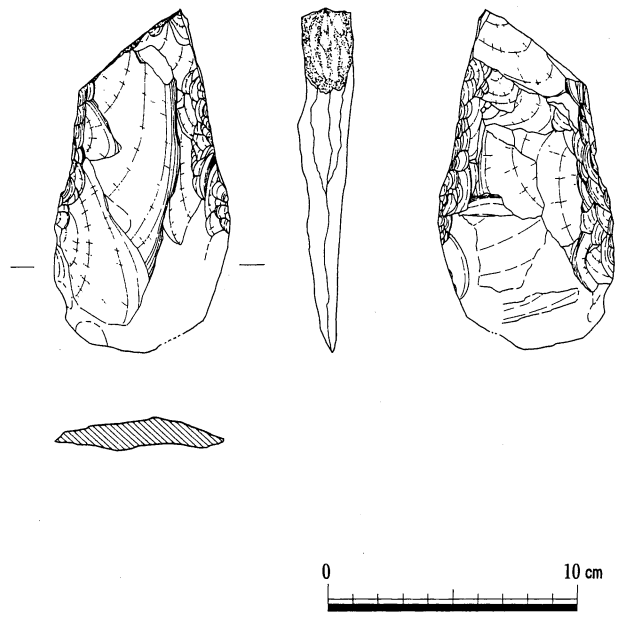


図42　包含層出土遺物（３）

図化できた土器は９点である。深鉢は口縁部が緩やかに外反する形態のものが多く、外面は二枚貝条痕の調整が多い。口縁端部はキザミをめぐらすものと、めぐらさないものの両方がある。頸部に爪形紋を垂下するものも認められるが、それは全出土土器中３点のみで、非常に少ない。浅鉢は破片ばかりで全形のわかるものはないが、比較的多様な形態であったことがうかがえる。外面調整も黒色磨研の技法が目立つ。

短冊形で結晶片岩製の打製石鏃が竪穴住居14の南側（図７、41）で出土した。この石鏃は基端が若干欠損しているもののほぼ完形で、片刃の刃面には使用のための磨滅が顕著である。撥形でサヌカイト製の打製石鏃が溝16の縁辺（図７、42）で出土した。この石鏃の基端は平にはなっていないが、この部分は原石の風化部分であり当初から平らにする意識はなかったものと推定される。片刃の刃面の両側は使用による磨滅が顕著で、特に右側へ偏る傾向にある。

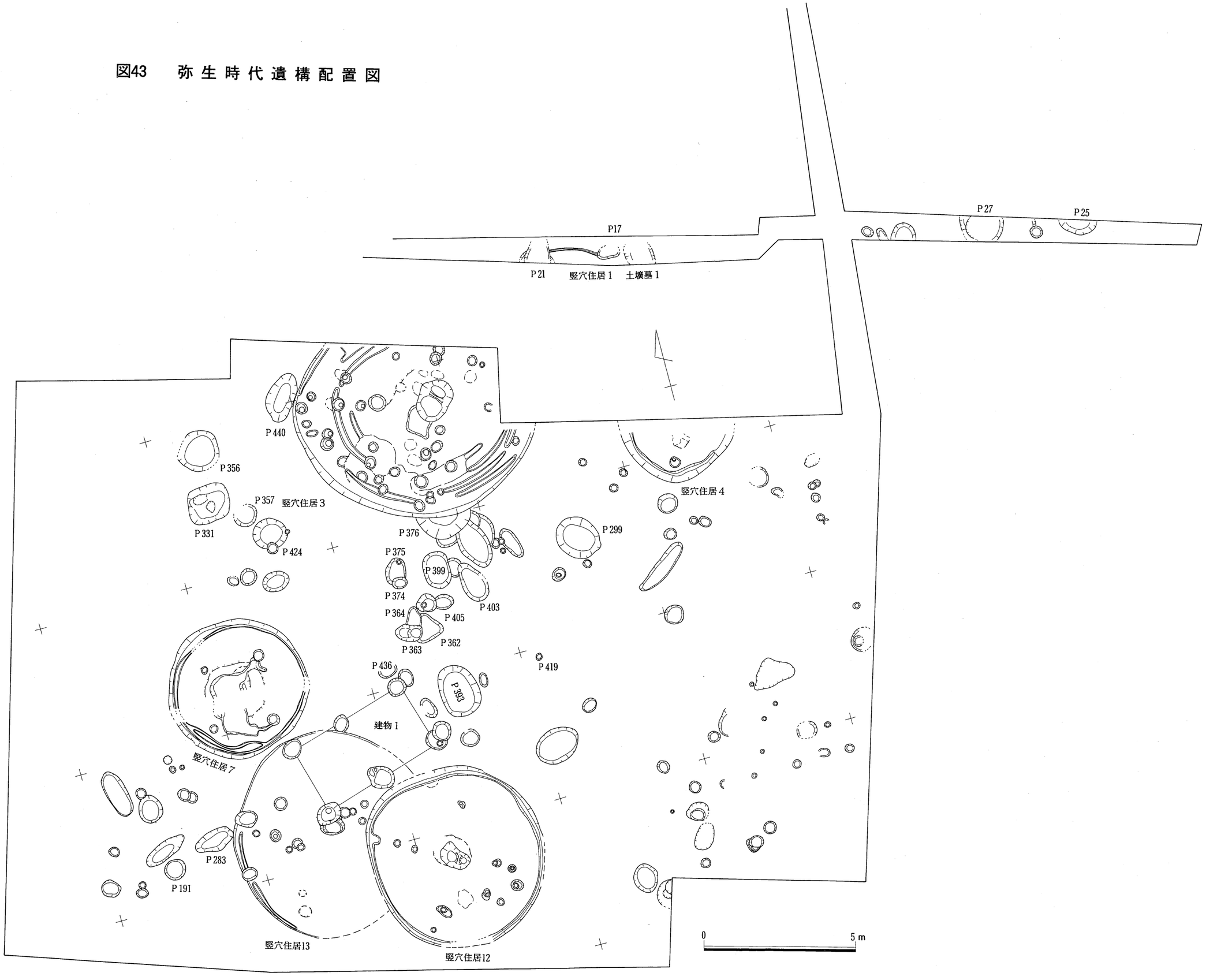
出土土器観察表

器形	土器番号	法量（cm）			形態・調整手法の特徴	胎土	色調	遺構
		口径	底径	器高				
深鉢	1	36.0	－	－	口縁部は波状で端部にはキザミ、頸部や胴部との境には爪形紋、刺突紋を施す	含長石石英	茶褐色	住14
深鉢	2	－	－	－	口縁端部は面取りした後にキザミをめぐらす。	含長石石英	淡茶褐色	住14
深鉢	3	－	－	－	口縁端部は丸くおさめ、外面は横方向の削り、内面はナデ	含長石石英	淡茶褐灰色	住14
深鉢	4	－	－	－	外面上半は条痕、下半は削りが認められ、内面はナデ	含長石石英	橙灰色	住14
深鉢	5	－	－	－	外面は削り、内面はナデ	含長石石英	茶褐色	住14
深鉢	6	－	－	－	外面頸部はナデ、胴部は削り、境には爪形紋が施され内面はナデ	含長石石英	淡茶灰色	住14
深鉢	7	－	－	－	外部は削り、内部は条痕	含長石石英	橙褐色	住14
深鉢	8	－	－	－	外面は条痕、内面はナデ	含長石石英	淡茶灰色	住14
深鉢	9	－	8.0	－	やや上げ底気味で、外面削り、内面ナデ	含長石石英	淡灰褐色	住14
深鉢	10	－	6.0	－	上げ底気味で、外面削り、内面ナデ	含長石石英	淡茶灰色	住14

深 鉢	11	—	6.0	—	上げ底気味で、外面削り、内面ナデ	含長石石英	淡茶褐色	住14
深 鉢	12	—	6.5	—	上げ底気味で、内外面ともナデ	含長石石英	淡橙灰褐色	住14
浅 鉢	13	29.0	—	—	椀形を呈し、口縁端部は面取りし、内外面ともにミガキを施す。黒色磨研	含長石石英	淡茶灰色	住14
浅 鉢	14	23.0	—	—	口縁端部はやや尖り気味に外反しながらおさめる。内外面はミガキ。黒色磨研	含長石石英	淡茶灰褐色	住14
浅 鉢	15	—	—	—	口縁は内湾気味に外反し端部はやや丸みをもつ。内外面はミガキ。黒色磨研	含長石石英	茶灰色	住14
浅 鉢	16	25.0	—	—	短く外反し、端部はやや突がり気味丸くおさめ、内外面ミガキ。黒色磨研	含長石石英	淡灰褐色	住14
浅 鉢	17	—	—	—	胴部屈曲部の破片で、外部下半ケズリ、内部状痕	含長石石英	淡茶灰色	住14
浅 鉢	18	25.0	—	—	口縁端部が上方立ち上がり、外面に沈線を1条施す内外面はミガキ。黒色磨研	含長石石英	淡橙灰色	住14
浅 鉢	19	—	—	—	口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。内外面はミガキ。黒色磨研	含長石石英	茶褐色	住14
浅 鉢	20	—	—	—	口縁部は短く外反し、端部はやや尖り気味におさめ、内外はミガキ。黒色磨研	含長石石英	茶褐色	住14
浅 鉢	21	19.0	—	—	緩やかに外反する口縁部で端部には突起が認められる内外はミガキ。黒色磨研か?	含長石石英	淡橙茶褐色	住14
浅 鉢	22	18.0	—	—	外反気味に開く口縁部で、端部はやや尖り気味である内外はミガキ。黒色磨研か？	含長石石英	淡茶灰色	住14
浅 鉢	23	23.0	—	—	外反気味に開く口縁部で、端部はやや尖り気味である内外はミガキ。黒色磨研	含長石石英	淡茶灰褐色	住14
浅 鉢	24	—	—	—	胴部下半の破片で、内外ミガキの後外面に線刻が認められる。黒色磨研	含長石石英	淡茶灰色	住14
浅 鉢	25	—	5.0	—	薄手で、中央部はやや凹む外面はミガキ、内面はナデ	含長石石英	淡茶灰色	住14
浅 鉢	26	18.0	—	—	胴部が鋭角的に屈曲し、口縁部は短く外反し、端部は上方に拡張する。ミガキ	含長石石英	暗茶褐色	住15
浅 鉢	27	—	—	—	緩やかに外反する口縁部で内外面ミガキ	含長石石英	暗茶褐色	住15
浅 鉢	28	26.0	—	—	内湾気味に外反する口縁部で、端部は丸くおさめる。内外は磨き。黒色磨研？	含長石石英	淡橙灰白色	住15
浅 鉢	29	28.0	—	—	口縁部は短く外反し、端部は丸くおさめる。内外はミガキ。黒色磨研	含長石石英	橙灰色	住15
浅 鉢	30	—	—	—	口縁部は緩やかに外反し、端部は上方に拡張し、突起を貼付す。内外ミガキ	含長石石英	暗茶灰色	住15
浅 鉢	31	30.0	—	—	口縁端部は若干上方へ拡張し、外面に沈線をめぐらす内外ミガキ。黒色磨研	含長石石英	暗灰褐色	住15
深 鉢	32	20.0	—	—	口縁端部は丸くおさめる。内外面条痕。	含長石石英	淡茶灰色	住15
深 鉢	33	22.0	—	—	口縁端部は丸くおさめる。外面条痕後ヘラナデ、内面ヘラナデ	含長石石英	暗灰褐色	住15
深 鉢	34	30.0	—	—	口縁端部はやや面取り気味におさめる。外面条痕、内面条痕の後ナデ	含長石石英	淡茶灰白色	住15
深 鉢	35	36.0	—	—	若干外反する口端部で、端部を若干面取りする。外面上半は条痕、下半はケズリ	含長石石英	淡橙灰褐色	住15
深 鉢	36	34.0	—	—	緩やかに外反する口縁部で端部上面は面取りをする。外面は条痕で内面はナデ	含長石石英	淡橙灰褐色	住16
深 鉢	37	34.0	—	—	緩やかに外反する口縁部で端部上面は面取りをする。外面は条痕で内面はナデ	含長石石英	灰褐色	住16
深 鉢	38	31.0	—	—	緩やかに外反する口縁部で端部上面は面取りをする。外面は条痕後ナデ、内はナデ	含長石石英	淡茶灰色	住16
深鉢(浅鉢)	39	26.0	—	—	薄手で浅鉢の可能性もある調整は磨滅のため不明	含長石石英	淡茶褐色	住16
深 鉢	40	—	—	—	内外面条痕で、口縁端部外面はキザミをめぐらす	含長石石英	暗茶灰色	住16
深 鉢	41	—	—	—	外面上半条痕、下半はナデ内面下半はケズリ	含長石石英	暗茶褐色	住16
深 鉢	42	—	—	—	内外面条痕の後、内面はナデ、外面は口縁部付近のみナデ	含長石石英	茶褐色	住16
浅 鉢	43	—	—	—	緩やかに外反する口縁部の端部を上方に拡張し、突起貼付する。	含長石石英	淡茶褐色	住16
深 鉢	44	—	—	—	口縁端部上面は面取りし、内外面条痕後内面はナデ	含長石石英	淡茶褐色	住16
深 鉢	45	—	—	—	外面条痕	含長石石英	淡橙灰色	住16
深 鉢	46	—	—	—	口縁端部は丸くおさめ、突起を貼付する。外面ケズリ内面はナデ	含長石石英	橙褐色	住16
深 鉢	47	—	—	—	口縁端部上面を面取りし、内外面は条痕	含長石石英	淡赤褐色	住16
深 鉢	48	—	—	—	外面ケズリ、内面はナデ	含長石石英	淡茶橙灰色	住16
深 鉢	49	—	7.0	—	やや上げ底気味で、内面はヘラナデ	含長石石英	淡橙茶灰色	住16
深 鉢	50	—	6.0	—	やや上げ気味で、外面は条痕、内面は不明	含長石石英	淡橙褐色	住16
浅 鉢	51	25.0	—	—	口縁端部はやや尖り気味におさめる。外面はケズリの後ミガキ、内面はミガキ	含長石石英	橙褐色	住16
浅 鉢	52	—	7.0	—	内外面ミガキ。底部中央はやや窪む。	含長石石英	淡茶灰色	住16
浅 鉢	53	33.0	—	—	口縁端部を上方に拡張し、外面には沈線がめぐる。内外面ナデ？	含長石石英	淡橙灰色	住16
浅 鉢	54	16.0	—	—	短く外反する口縁端で端部内面に沈線がめぐり、内外面ミガキ	含長石石英	淡茶灰色	住16
浅 鉢	55	14.0	—	—	口縁部は短く外反し、端部は斜め上方に拡張し、外面に沈線。内外面ミガキ	含長石石英	淡茶灰色	住16
浅 鉢	56	20.0	—	—	口縁端部を上方に拡張し、外面には沈線をめぐらす。	含長石石英	淡茶灰色	住16
浅 鉢	57	22.0	—	—	口縁端部を上方に拡張し、外面に沈線をめぐらす。	含長石石英	淡茶褐色	住16
浅 鉢	58	28.0	—	—	口縁端部を上方へ拡張する外面はミガキ	含長石石英	淡橙灰色	住16
浅 鉢	59	—	—	—	口縁端部は肥厚して丸くおさめ、突起が貼付されている。外面ミガキ	含長石石英	淡茶灰色	住16
深 鉢	60	—	—	—	口縁端部は面取りしている外面条痕、内面は条痕の後ナデ	含長石石英	茶褐色	P482
深 鉢	61	—	—	—	口縁端部にはキザミをめぐらし、外面は条痕、内面はナデ	含長石石英	淡茶灰色	P482
深 鉢	62	—	—	—	口縁端部にはキザミをめぐらし、外面はケズリ、内面は条痕か?	含長石石英	淡茶褐色	P482
浅 鉢	63	—	—	—	口縁端部はやや尖り気味におさめ、内面はミガキ、口縁部付近はナデ	含長石石英	淡灰褐色	P482
深 鉢	64	—	5.0	—	やや上げ気味で、内面はナデ	含長石石英	淡橙灰色	P482
浅 鉢	65	—	—	—	口縁端部は上方へ若干拡張し沈線をめぐらす。内外面はミガキ、黒色磨研	含長石石英	暗赤灰褐色	P482
浅 鉢	66	—	—	—	内湾気味に開く口縁部で、端部はやや尖り気味である内外ナデで穿孔がある	含長石石英	淡橙灰褐色	P482
浅 鉢	67	34.0	—	—	緩やかに外反する口縁部で端部は丸くおさめる。外面は条痕、内面はナデ	含長石石英	淡灰白色	P507
浅 鉢	68	33.0	—	—	やや開きに外反する口縁部で、端部は平坦に面取り外面条痕後ナデ、内面ナデ	含長石石英金雲母	淡橙灰褐色	P507
浅 鉢	69	26.0	—	—	口縁端部にはキザミをめぐらし、外面は条痕、内面はナデ	含長石石英角閃石	淡茶灰色	P507
深 鉢	70	20.0	—	—	短く外反する口縁部で、内外面は条痕の後口縁部付近はナデ	含長石石英	淡灰褐色	P507
深 鉢	71	—	—	—	口縁端部はやや尖り気味におさめ、外面は条痕、内面はナデ	含長石石英	暗茶褐色	P507
深 鉢	72	—	—	—	口縁端部は面取りをし、外面は条痕、内面はナデ	含長石石英	淡灰色	P507
深 鉢	73	—	—	—	口縁端部は面取りをし、外面は条痕、内面はナデ	含長石石英	淡茶褐色	P507

深鉢	74	—	—	—	口縁端部は面取りをし、外面はナデ、内面はケズリの後ナデ	含長石石英	暗茶褐色	P507
深鉢	75	—	—	—	外面上方はヨコ条痕、下方はナナメ条痕、内面は条痕後ナデ	含長石英角閃石	淡橙灰白色	P507
深鉢	76	—	5.4	—	上げ気味で、外面は条痕、内面は条痕の後ナデ	含長石石英金雲母	淡灰白色	P507
深鉢	77	—	7.0	—	上げ気味で、外面は条痕、内面はナデ	含長石石英角閃石	橙褐色	P507
浅鉢	78	30.0	—	—	口縁端部は上方に若干拡張し丸くおさめる。内外面はミガキ。	含長石石英角閃石	灰褐色	P507
浅鉢	79	—	—	—	内外面ミガキ	含長石石英角閃石	暗灰褐色	P507
浅鉢	80	—	—	—	口縁端部は方形に拡張し、内外面はミガキ。黒色磨研	含長石石英	淡橙灰褐色	P507
浅鉢	81	—	—	—	鋭角的に屈曲する胴部をもち、外面はミガキ、内面はナデ。	含長石石英角閃石	暗茶褐色	P507
浅鉢	82	—	—	—	短く外反する口縁部と推定され、内外面はミガキ	含長石石英角閃石	暗灰褐色	P507
浅鉢	83	17.0	—	—	やや内湾気味に開く口縁部で、端部は尖り気味におさめ、外面はナデ内面は不明	含長石石英角閃石	淡橙灰褐色	P507
深鉢	84	—	—	—	口縁端部に面取りをし、内外面条痕	含長石石英	橙褐色	P522
浅鉢	85	—	—	—	口縁端部は丸くおさめ、内外面ミガキ	含長石石英	淡茶灰色	P522
浅鉢	86	22.0	—	—	口縁端部の内面は断面蒲鉾形に肥厚し、内外面はミガキ。黒色磨研	含長石石英	茶褐色	P522
浅鉢	87	25.0	—	—	口縁端部は断面方形で、内面はミガキ、外面は条痕の後ナデ	含長石石英	茶灰色	P522
浅鉢	88	—	—	—	口縁端部は断面方形で、内外面ミガキ。黒色磨研	含長石石英	淡橙灰色	P522
浅鉢	89	—	—	—	口縁端部は断面蒲鉾形におさめる。外面には沈線がめぐり、内外面ミガキ	含長石石英	暗茶褐色	P522
深鉢	90	22.0	—	—	口縁端部に円筒状の突起を付け上端にキザミをめぐらし、外面条痕後ケズリ	含長石石英砂粒	淡赤灰褐色	P523
深鉢	91	26.0	—	—	口縁端部を内折し外面に貝圧痕をめぐらす。外面は条痕、内面はナデか。	含長石石英	淡茶灰色	P523
深鉢	92	24.0	—	—	緩やかに外反する口縁部で端部にはキザミをめぐらし外面上半条痕下半ケズリ	含長石石英	灰褐色	P523
深鉢	93	20.0	—	—	口縁端部に指圧痕をめぐらし、外面は条痕の後タテナデ、内面はヨコケズリ	含長石石英砂粒	橙赤褐色	P523
深鉢	94	28.0	—	—	口縁部上端は平坦で、外面条痕、内面はナデ	含長石石英	淡橙灰白色	P523
深鉢	95	20.0	—	—	内湾する口縁部で、端部は丸くおさめる。外部はケズリの後ナデ、内面はナデ	含長石石英	淡橙灰色	P523
深鉢	96	—	—	—	口縁端部にキザミを施した突起が貼付され、外面は条痕、内面はナデ。	含長石石英	暗茶灰色	P523
深鉢	97	—	—	—	口縁端部にリボン状の突起が貼付され、内外面はナデ	含長石石英	淡橙灰白色	P523
深鉢	98	—	—	—	口縁端部上端にキザミをめぐらし、外面はケズリ、内面はナデ	含長石石英	淡灰白色	P523
深鉢	99	—	—	—	口縁端部上端にキザミをめぐらし、外面ケズリ、内面はナデ	含長石石英	暗茶褐色	P523
深鉢	100	—	—	—	口縁端部にキザミをめぐらし、外面は条痕、内面は条痕の後ナデ	含長石石英	淡茶褐色	P523
深鉢	101	—	—	—	口縁端部にキザミをめぐらし、外面は条痕の後ナデ、内面は不明	含長石石英	淡茶灰色	P523
深鉢	102	—	—	—	口縁端部にキザミをめぐらし、外面条痕、内面はナデ	含長石石英	暗茶褐色	P523
深鉢	103	—	—	—	口縁端部にキザミをめぐらし、外面条痕の後ナデ、内面ナデ	含長石石英	淡赤灰褐色	P523
深鉢	104	—	4.0	—	上げ気味で、外面ケズリ、内面ナデ	含長石石英	淡赤灰褐色	P523
浅鉢	105	—	—	—	口縁端部内面は断面蒲鉾形に肥厚し、内外面ミガキ。黒色磨研	含長石石英	暗茶黒褐色	P523
浅鉢	106	—	—	—	口縁端部を上方へ拡張し、外面に沈線をめぐらす。内外面ミガキ	含長石石英	暗茶黒褐色	P523
浅鉢	107	—	—	—	口縁端部は外傾気味に開き、端部は丸くおさめる。内外面ミガキ。黒色磨研	含長石石英	淡橙灰白色	P523
浅鉢	108	—	—	—	口縁部はやや内湾気味に開き端部はやや丸く肥厚する内外面はナデ	含長石石英	橙灰色	P523
浅鉢	109	—	—	—	短く外反する口縁部で端部は丸くおさめる。内外面ミガキ。黒色磨研	含長石石英	灰褐色	P523
浅鉢	110	—	—	—	やや外傾気味に開く口縁部で、端部は尖り気味におさめ、内外ミガキ。黒色磨研	含長石石英	灰褐色	P523
深鉢	111	—	—	—	口縁端部にキザミをめぐらす。	含長石石英	赤褐色	炉状遺構1
深鉢(浅鉢)	112	—	—	—	口縁端部は断面方形で、外面はヨコ方向のケズリ、内面はヨコ方向のミガキ	含長石石英	淡橙灰色	炉状遺構1
深鉢	113	—	—	—	口縁端部は尖り気味におさめ、内外面は条痕。	含長石石英	橙褐色	炉状遺構1
深鉢	114	—	5.8	—	上げ気味である。	含長石石英	橙灰色	炉状遺構1
深鉢	115	—	—	—	口縁部上端にキザミをめぐらし、外面タテケズリ、内面ナデ	含長石石英	暗茶褐色	炉状遺構1
深鉢	116	22.0	—	—	口縁端部はやや尖り気味におさめ、内外面はヘラナデ	含長石石英	淡茶灰色	溝16
深鉢	117	—	—	—	いわゆる凸帯紋土器で、D字形のキザミと線刻が認められる。	含長石石英	淡橙灰色	溝16
深鉢	118	—	—	—	凸帯紋土器で、尖り気味におさめる口縁端部とキザミが認められる。	含長石石英	淡橙灰白色	溝16
深鉢	119	—	7.0	—	上げ気味で、外面は条痕内面はナデ	含長石石英	橙褐色	溝16
浅鉢	120	—	—	—	口縁端部を上方に拡張し外面に沈線をめぐらす。内外面ミガキ。黒色磨研	含長石石英	暗茶褐色	溝16
浅鉢	121	—	—	—	口縁端部を断面方形に拡張し、内外面ミガキ	含長石石英	暗赤茶褐色	溝16
深鉢	122	18.0	—	—	口縁端部は面取りし、外面は条痕、内面はケズリ。	含長石石英	暗茶褐色	包含層
深鉢	123	—	—	—	口縁端部は面取りし、外面は条痕、内面はナデ	含長石石英	淡橙灰色	包含層
深鉢	124	—	—	—	口縁端部にキザミ、頸部には垂下する爪形紋が認められる。	含長石石英	橙茶褐色	包含層
深鉢	125	—	—	—	口縁端部にキザミをめぐらし、外面条痕、内面ナデ	含長石石英	橙茶褐色	包含層
深鉢	126	—	—	—	口縁端部にキザミをめぐらし、外面条痕、内面ナデ	含長石石英	暗茶灰色	包含層
浅鉢	127	—	—	—	口縁端部を若干肥厚し、内外面はミガキ。黒色磨研	含長石石英	黒灰色	包含層
浅鉢	128	—	—	—	口縁部内面に沈線状の凹みがめぐる。内外面ミガキ	含長石石英	橙灰色	包含層
浅鉢	129	—	—	—	短く外反する口縁部で、端部は丸くおさめ、内外面ミガキ。黒色磨研	含長石石英	黒灰色	包含層
浅鉢	130	—	—	—	口縁端部内側が蒲鉾形に肥厚し、内外面ミガキ	含長石石英	淡橙灰白色	包含層

図43　弥生時代遺構配置図



Ⅱ　弥生時代（図43）

中期と後期の２時期に大別される。特に、中期の土器については当調査区から出土した土器の中では中世についで量が多く、調査区西側の近世溝により掘削されている部分や、近、現代の掘削を受けた部分を除くと調査区全体に遺構が認められ、比較的大規模な集落であったことが推定される。一方、後期の遺構は竪穴住居２軒と土壙が若干で、遺物もコンテナ５箱ほどであった。特殊な文様を施した器台片が出土しているものの、集落の規模はそれほど大きいものではなかったようである。

中期の遺構面は、竪穴住居、掘立柱建物、土壙、墓などが混在しており、旭川下流域の同時期の集落遺跡である南方遺跡が、居住空間と墓地空間とが分離されて占地されているのとは異なった様相である。遺物については圧倒的に土器が多いものの、他に石斧や石鏃などの石製品や、石斧と同じ石材の剥片も出土している。この剥片の数はそれほど多くなく、集落内で石斧の自給的な生産が行われていたことを示しているといえそうである。中期後半になると遺構数や遺物の量は極端に減り、先に想定した微高地の他の地点か、もしくは別の遺跡へ集落が移動したと推定される。したがって、調査区で検出した中期の集落と後期の集落とは、時間的な断絶が存在しているといえる。

竪穴住居１、Ｐ21（図44）

配管部分西側の調査区で検出した。竪穴住居１は、全体の規模などはほとんどが調査区外へ出るため不明であるが、円形の平面形で幅約0.15ｍの壁体溝がめぐっている。遺物は、甕の胴部片が埋土中から出土した。

Ｐ21は、竪穴住居１の西側を削平している。遺構のほとんどが調査区外へ出るため全形はわからないが、径約0.9ｍ以上の円形に近い平面形が推定され、断面形はＵ字形である。遺物は、埋土中から甕と壺の胴部片が出土した。

両遺構の時期については遺物も少なく、また遺構の一部しか調査できていないため明確ではないが、埋土やわずかな遺物から一応中期と推定される。

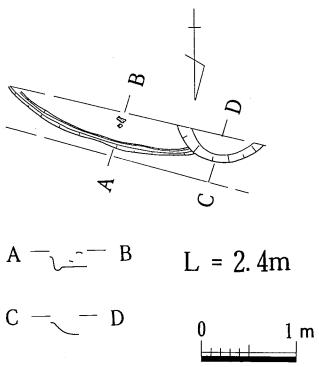


図44　竪穴住居１，Ｐ21実測図

竪穴住居４（図45、46、47）

調査区北東部分で検出された後期の遺構である。北半分は調査区外へ出るものの、径約3.6ｍの円形の平面形を呈し、検出面から床面までの深さは約0.5ｍである。壁体溝は壁にそって１条認められるが、東側ではとぎれている。柱穴は１つ検出され、径約0.15ｍで、床面からの深さは約0.5ｍである。中央付近の床面には炭が面的に広がっており、付近に火所の存在が推定される。埋土は２層あり、住居廃絶直後の流入土が第２層で、第１層はやや間をおいての堆積であるが、両層に含まれる遺物には明確な時期差は認められない。部分的ではあるが、淡黄灰色土を用いた貼り床が認められる。床面の標高は約2.6ｍである。

遺物は、床面直上と埋土中より出土した。床面直上からは甕（４）、(11)、高坏（１）、鉢（10）、壺（６）、脚部（３）で、その他は埋土中から出土した。器台（13）と（14）は第２層の上半から出土した

もので、これらは現状では接合できないものの、弧状の線刻などから13の口縁部の一部であると思われる。この器台の外面は、長方形の透かし穴の周囲に直線を基本とした特殊器台の紋様を彷彿とさせるような線刻を鋭利な道具で施し、口縁部の内面には外面とは異なって弧状の線刻を施している。胎土は他の土器とほとんど変わらない。竪穴住居４から出土した土器から、この器台は特殊器台のうち、最も古い立坂型の時期と並行すると考えられる。紋様の特徴からも、特殊器台と何らかの関係が存在したことも推測される。しかし、この器台の表面の紋様には間帯が認められず、特殊器台の基本的な紋様構成との差異も指摘できる。

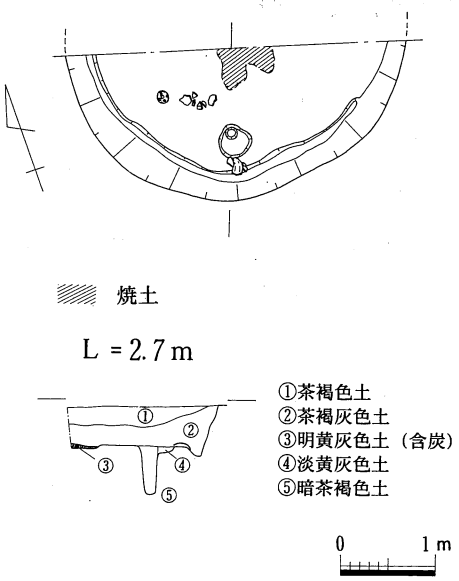


図45　竪穴住居４実測図

竪穴住居７（図48、49）

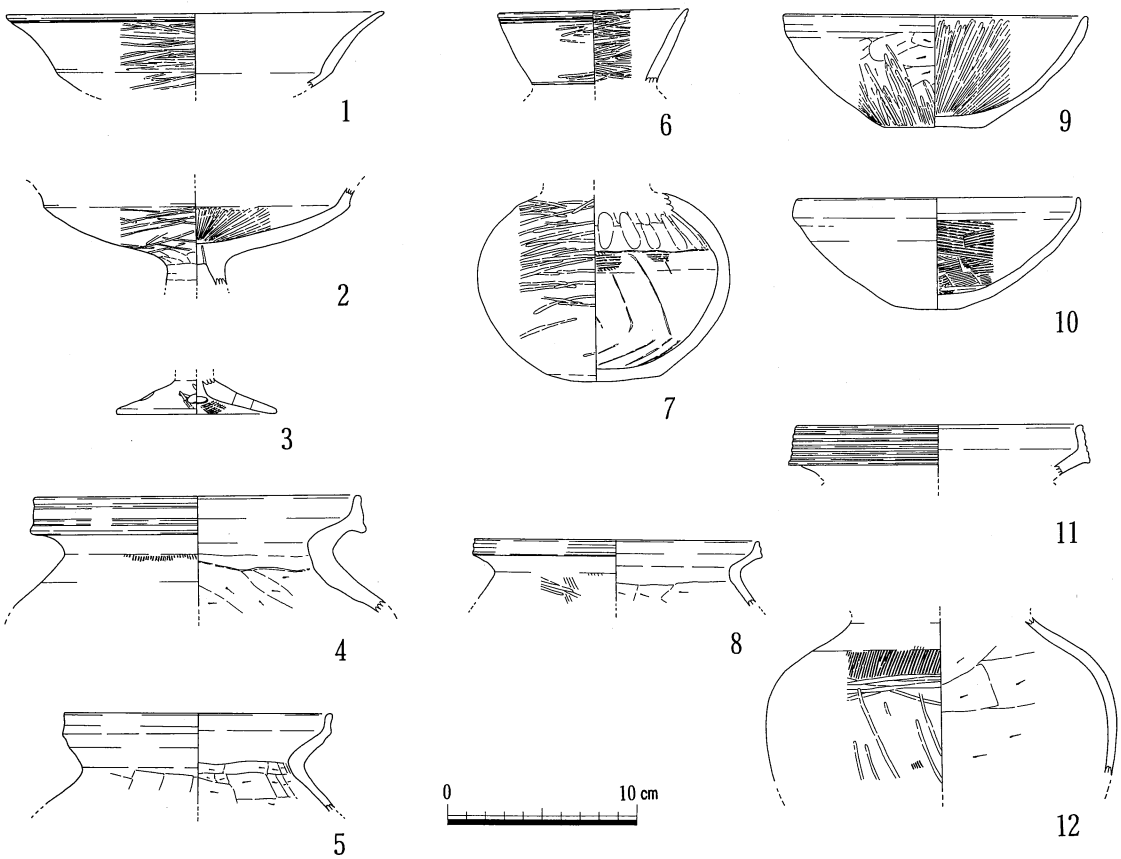


図46　竪穴住居４　出土遺物（１）

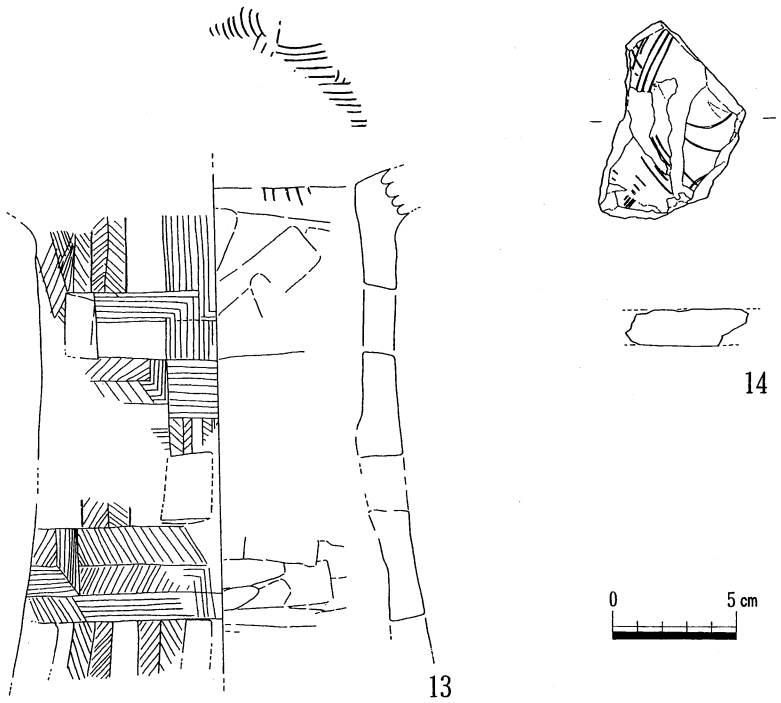


図47　竪穴住居４出土遺物（２）

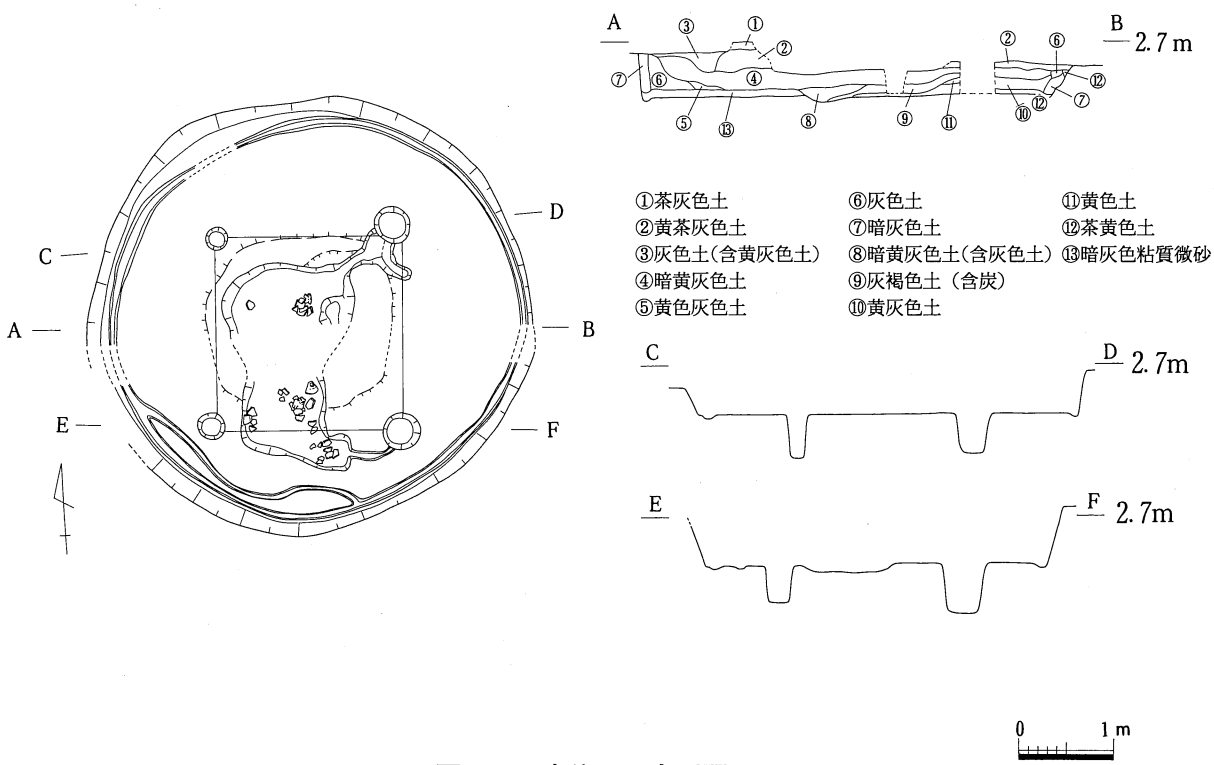


図48　竪穴住居７実測図

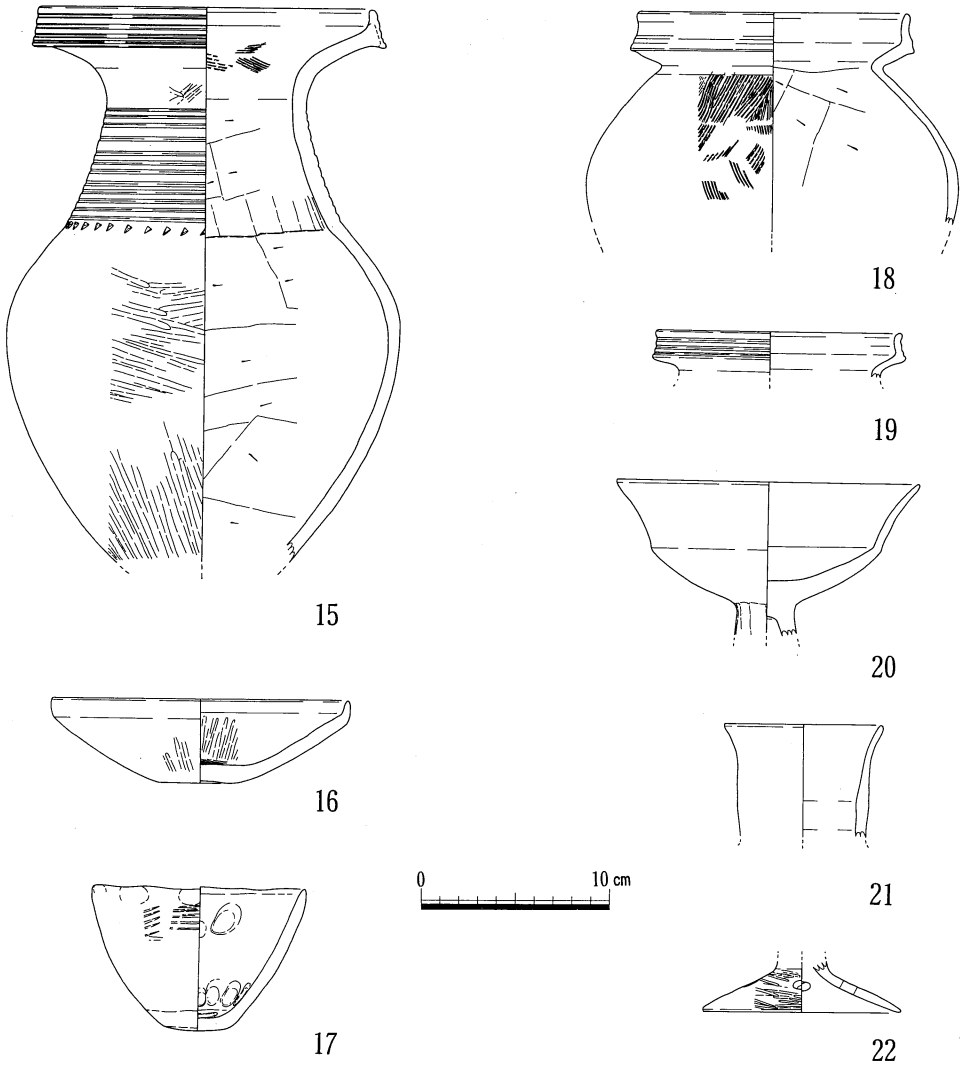
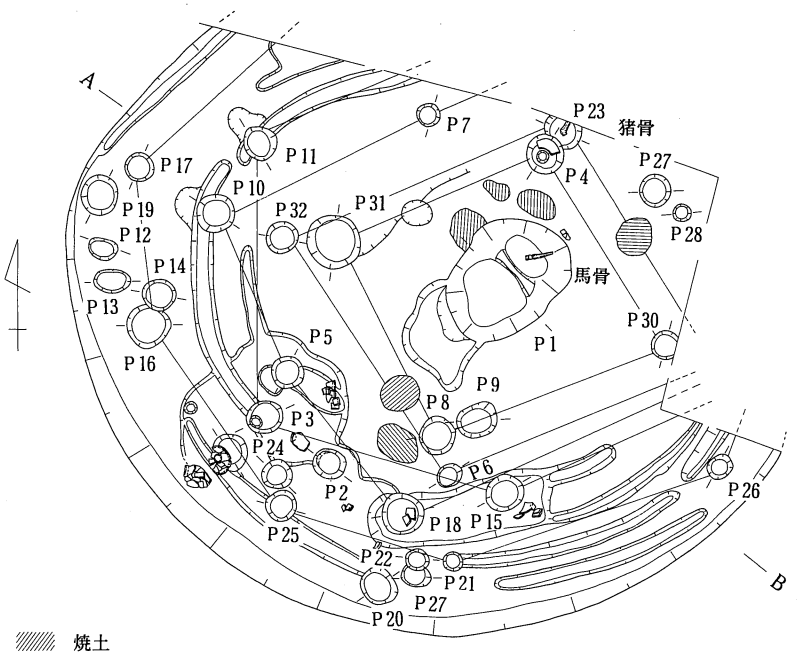


図49　竪穴住居７出土遺物

調査区中央やや西寄りで検出された後期の遺構である。遺構の中央部分幅約0.4ｍは水道の配管が通っているため明確ではないが、ほぼ全形は把握できた。径約4.5ｍの円形の平面形を呈し、検出面から床面までの深さは約0.5ｍである。床面はほぼ水平である。貼り床は、住居の中央以外の大半の床面で認められ、厚いところでは３～５㎝ほどもある。中央付近は床面から５㎝ほど部分的に盛り上げており、さらに中央部は長さ約２ｍ、幅約1.2ｍ、深さ約0.16ｍの長方形の平面形をした窪みをつくっている。この窪みには炭が集中しており、火所であったと思われる。壁体溝は幅約0.1ｍで住居の外周をめぐっているが、南西部ではやや枝別れして内側にカーブしている部分もある。柱穴は床面で４つ確認され、４本柱をなす。柱間距離は約２ｍを測り、柱穴は径0.2～0.4ｍ、深さ0.3～0.4ｍである。床面の標高は約2.6ｍで、竪穴住居４の床面とほぼ同じレベルを呈し、両住居とも安定した微高地上に位置していたことが推定される。埋土は数層がレンズ状に堆積しており、住居廃絶後序々に埋没していったことを示している。　遺物は床面と埋土中より出土した。埋土から出土したものは細片ばかりで図化できなかった。図化できた遺物のうち、壺（15）、（21）、鉢（17）、甕（19）、高杯（20）、脚部（22）は中央の長方形をした窪みから出土したが、壺だけは北側にまとまる傾向が看取された。

竪穴住居３（図50、51、52、53）



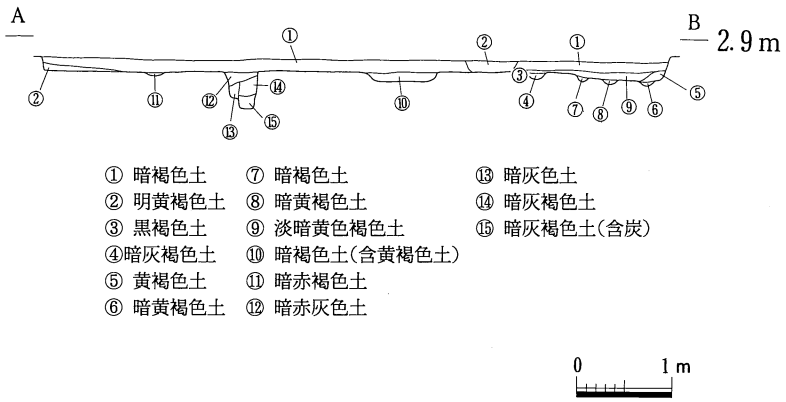


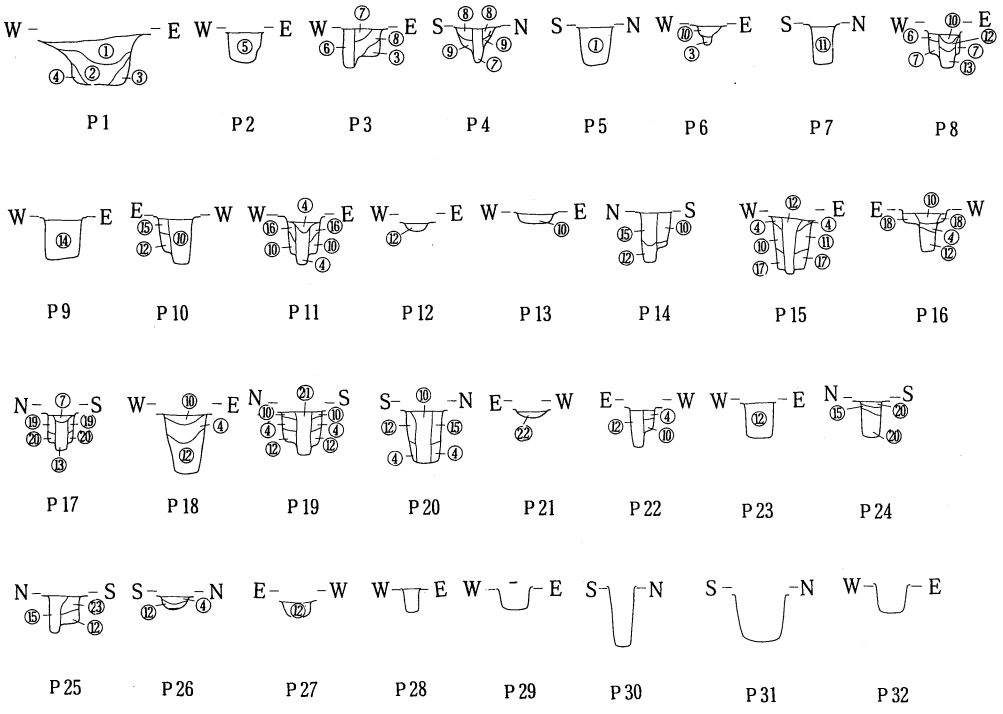
図50　竪穴住居３実測図

調査区中央北側で検出された中期の遺構である。北側1／4程は調査区外へ出るため明確ではないが、最終的な平面形は径約7.6ｍの円形と推定される。柱穴の配置や壁体溝の数から、少なくとも５回の拡張が認められる。

１次住居は、Ｐ４、Ｐ８、Ｐ30、Ｐ31の４本柱で構成される。柱間距離は約2.4ｍを測る。中央ピットは１つしかないため、拡張した後も同じピットを用いたものと思われる。壁体溝は最も内側で検出されたものがこの住居に伴う可能性が高く、そうすると、平面形は径約4.8ｍの円形と推定される。

２次住居は、Ｐ６、Ｐ23、Ｐ32と調査区外に想定されるピットの４本柱で構成される。柱間距離は約3.2ｍを測る。１次住居の外周にある壁体溝がこの住居に伴う可能性が高く、平面形は径約5.2ｍの円形と推定される。

３次住居は、Ｐ５、Ｐ７、Ｐ10、Ｐ18と調査区外に想定される複数のピットで構成される。この住居



① 茶褐色土
② 淡茶褐色土
③ 暗黄灰色土(含炭)
④ 暗黄褐色土
⑤ 黄灰色土
⑥ 灰色土
⑦ 灰褐色土
⑧ 淡黄茶灰色土
⑨ 淡茶色土
⑩ 暗灰褐色土
⑪ 暗赤灰褐色土
⑫ 暗褐色土
⑬ 暗黒褐色土
⑭ 暗褐黄色土
⑮ 黄褐色土
⑯ 暗黄赤褐色土
⑰ 黒灰褐色土
⑱ 暗黄灰褐色土
⑲ 黄灰褐色土
⑳ 暗褐灰色土
㉑ 灰褐色土
㉒ 暗赤褐色土
㉓ 暗黄色土

0　1m

図51　竪穴住居３ピット断面図

に伴うと推定される壁体溝から、径約６ｍの円形の平面形が推定される。

４次住居は、Ｐ３、Ｐ11、Ｐ15と調査区外に想定される複数のピットで構成される。柱の構成が六角形であったとすると、調査区外にあと３つ存在すると思われる。この住居に伴うと推定される壁体溝から、径約6.3ｍの円形と推定される。

最終住居は、Ｐ16、Ｐ17、Ｐ21、Ｐ25、Ｐ26と調査区外に想定される複数のピットで構成される。５回にもわたる拡張でも中央ピットの位置は変わっておらず、中央ピットを中心に同心円状に拡張されていったことがうかがわれる。中央ピットは大小の土壙を連結したような平面形であるが、埋土の断面観察からは２つの遺構が切り合っているような状況は観察されなかった。床面の標高は約2.8ｍで、ほぼ水平である。部分的に貼り床が施されている。中央ピットの周辺には焼土面が６つ認められ、これらは同一貼り床面上にあることから、全て最終住居に伴うものと考えられる。

遺物は、最終住居の床面と埋土中より出土した。床面からは甕（33）と鉢（34）で、外周南西部付近で並んで検出された。鉢（34）は伏せた状態で、甕（33）は倒置した状態であった。埋土中より出土した土器の量は大変多く、コンテナ４箱もあったが、そのほとんどが甕や壺の胴部片で図化できたものはそれほど多くはない。また、ミニチュア形のものが５個体もあり、分銅形土製品も１点認められる。他

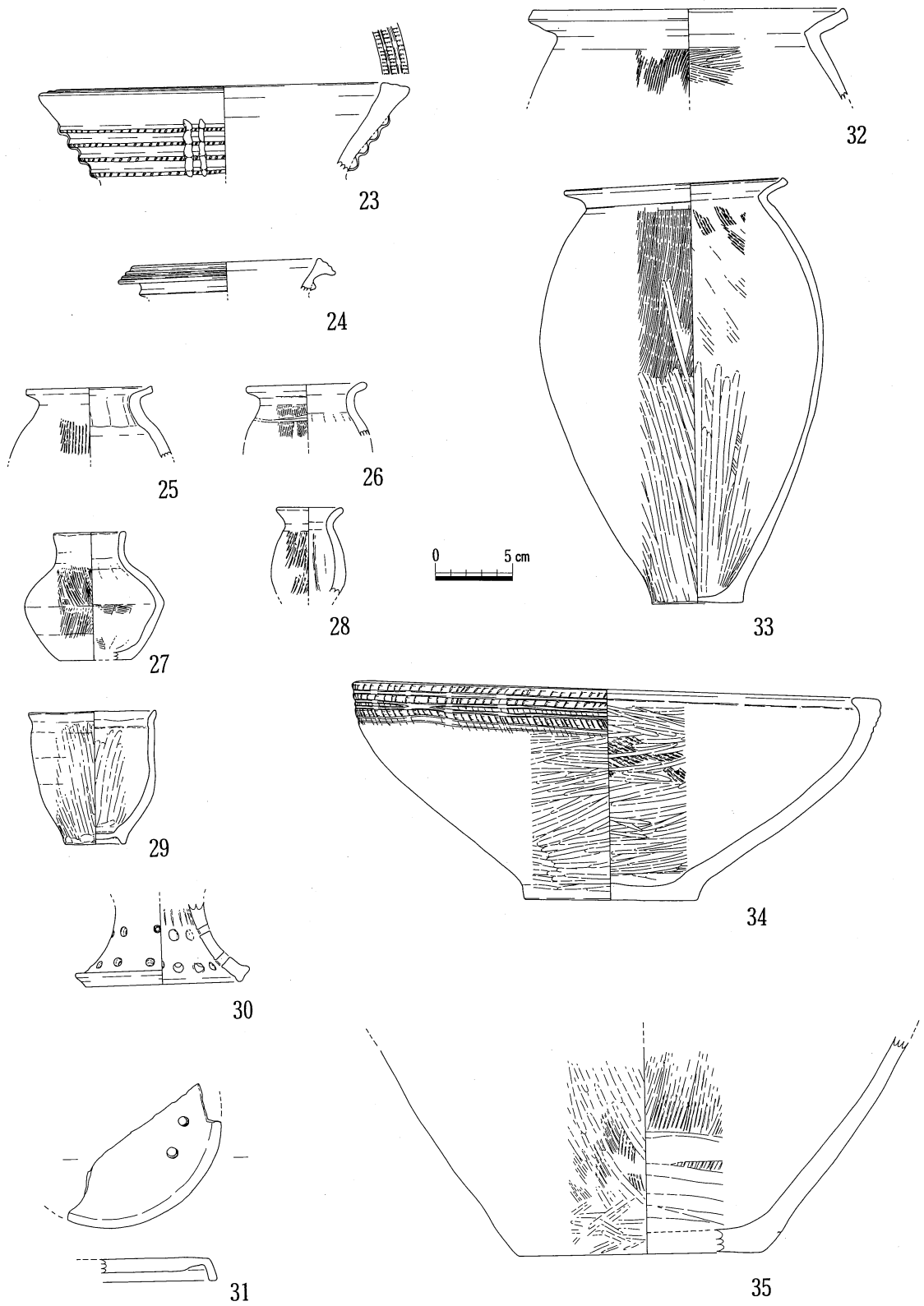


図52　竪穴住居３出土遺物（１）

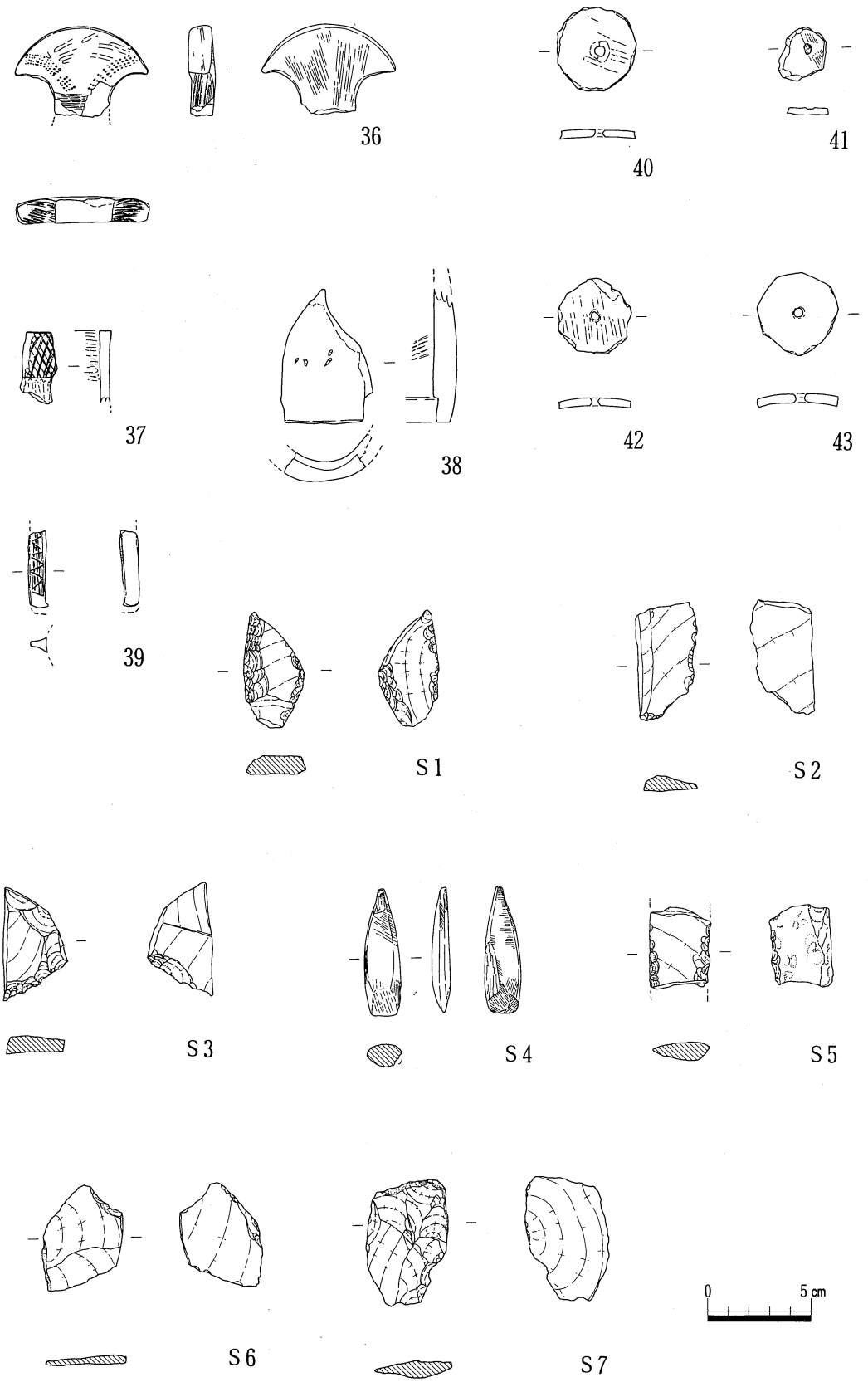


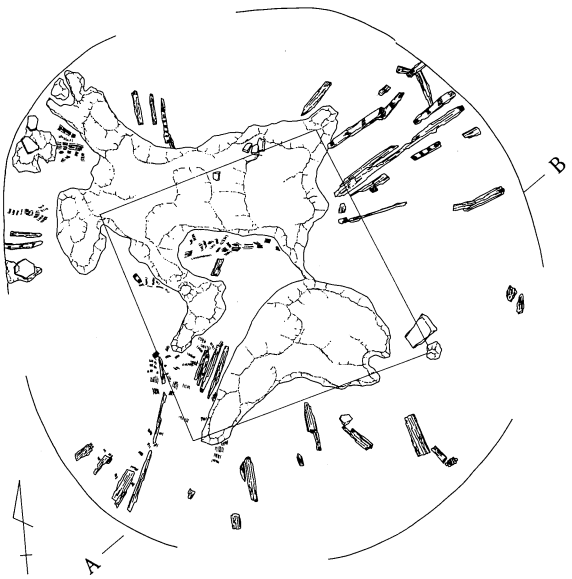
図53　竪穴住居３出土遺物（２）

に（37）、（38）、（39）のような全形の不明な土製品もあり、特に（39）は、銅鐸形土製品の鰭部分の可能性がありそうである。また、土器片を再利用した有孔円板が３点と、その未成品が１点出土している。石器は大半がサヌカイトの剥片であるが、床面付近から小型方柱状片刃石斧が１点出土している。一部欠損しているが、この石斧の長さは6.3㎝、幅1.8㎝、厚さ1.2㎝で、断面形は長方形を呈し、石材の種類についてははっきりしないが、比較的軟質な石材を用いている。この他、中央北側の埋土中には多量の貝殻が堆積している。おそらく、住居の埋没過程にできた窪みへ貝殻を投棄したものであろう。貝殻は北半寄りで調査区外へも広がっていると思われるが、調査区内の貝殻は全て採集し分類した。その結果については第四章でまとめる。他に、猪の下顎骨や馬の足骨（附章Ⅲ参照）が床面から出土している。

竪穴住居12（図54、55、56、57）

調査区中央南側で検出された中期の焼失家屋である。この住居は、竪穴住居13の一部を削平している。径約5.6ｍの円形の平面形を呈し、壁際には幅約0.15ｍの壁体溝をめぐらす。検出面からの深さは約0.5ｍで、床面の標高は約2.65ｍを測り、ほぼ水平である。主柱は４本あり、それぞれ壁体から１～1.2ｍほど離れた位置にある。ほぼ正方形のプランで並ぶ４本柱で構成されているが、内側の対角線上にピットが２つ認められ、主柱の補助的なものか、あるいは棟持柱であると推定される。主柱穴は径0.25～0.4ｍで、深さは0.4～0.7ｍを測る。一方、２つのピットの深さは主柱穴とほとんど変わらないが、径が約0.15ｍとやや小さい。中央ピットは大小のピットを連結させた形状であり、壁体溝が複数認められないことなどから、掘り直しなどではなく当初からの形状であったと思われる。他の中期の竪穴住居の中央ピットも、似た平面形を呈している。南側の床面や、中央ピットの北側で焼土が認められる。

埋土は炭化材の上面に数層が認められ、焼失後序々に埋没したものと考えられる。炭化材は径約0.15ｍの丸木で、一部角材と思われるようなものもある。材は完全に炭化している。炭化材は中央に向かって放射状に倒れており、部分的には茅のような植物質の炭化したものも認められる。中央付近には大きな焼



炭化材・焼土　検出状況

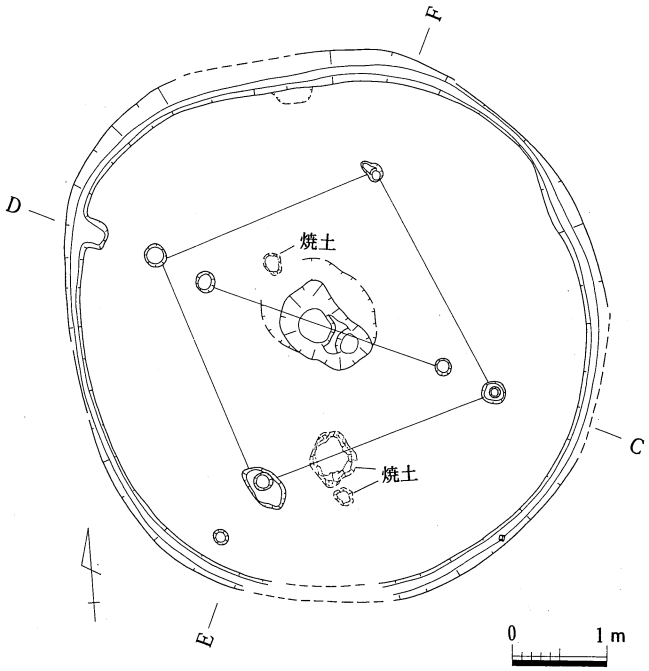


図54　竪穴住居12実測図（１）

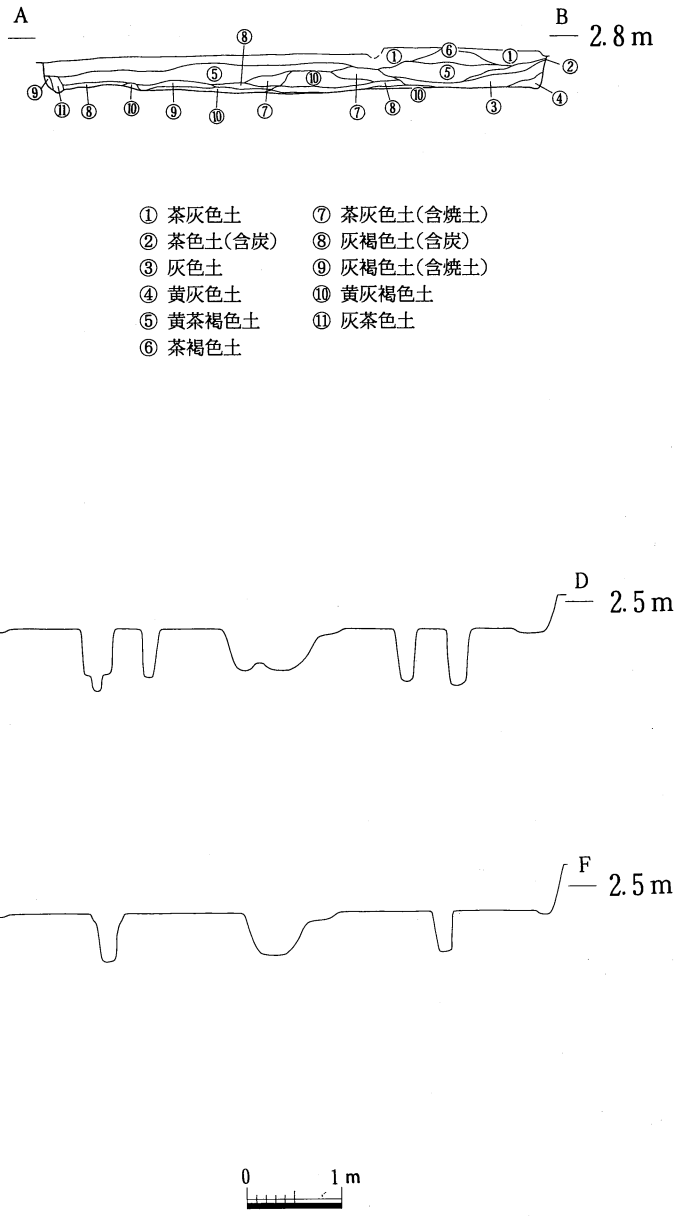


図55　竪穴住居12実測図（２）

土塊があり、高さは0.2mにもおよぶところがある。焼土塊の下には基本的には炭化材は残存していないが、炭化材を被覆している部分も認められる。焼土塊にはスサなどの挟雑物は認められないが、焼失時に粘土を住居中央に入れることは難しいと思われ、むしろ竪穴住居の屋根の一部を粘土で覆っていた可能性を考えた方がよいのかもしれない。

遺物は、床面付近と埋土中より出土した。床面からは、甕底部（46）、甕（47）、壺（48）、分銅形土製品が出土した。甕（44）、（45）は炭化材の上面から、脚部（49）は埋土上半から出土した。他に、サヌカイト製の長さ2.4㎝、幅1.5㎝の凹基式の石鏃が１点、石錐と石庖丁の破片がそれぞれ１点ずつ埋土から出土した。

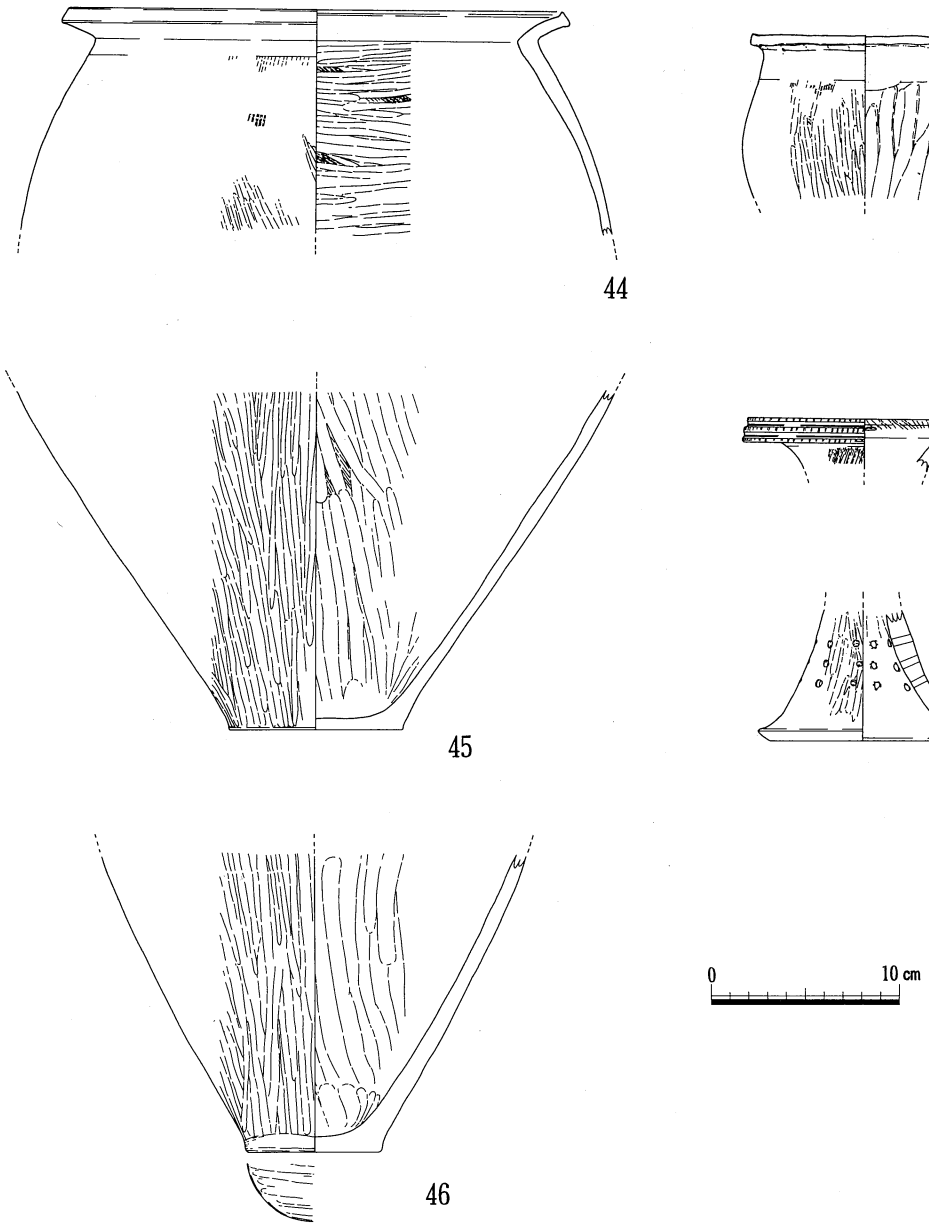


図56　竪穴住居12出土遺物（1）

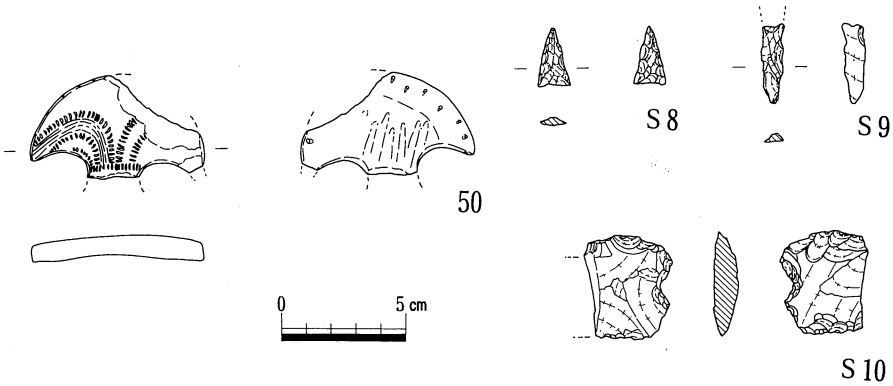
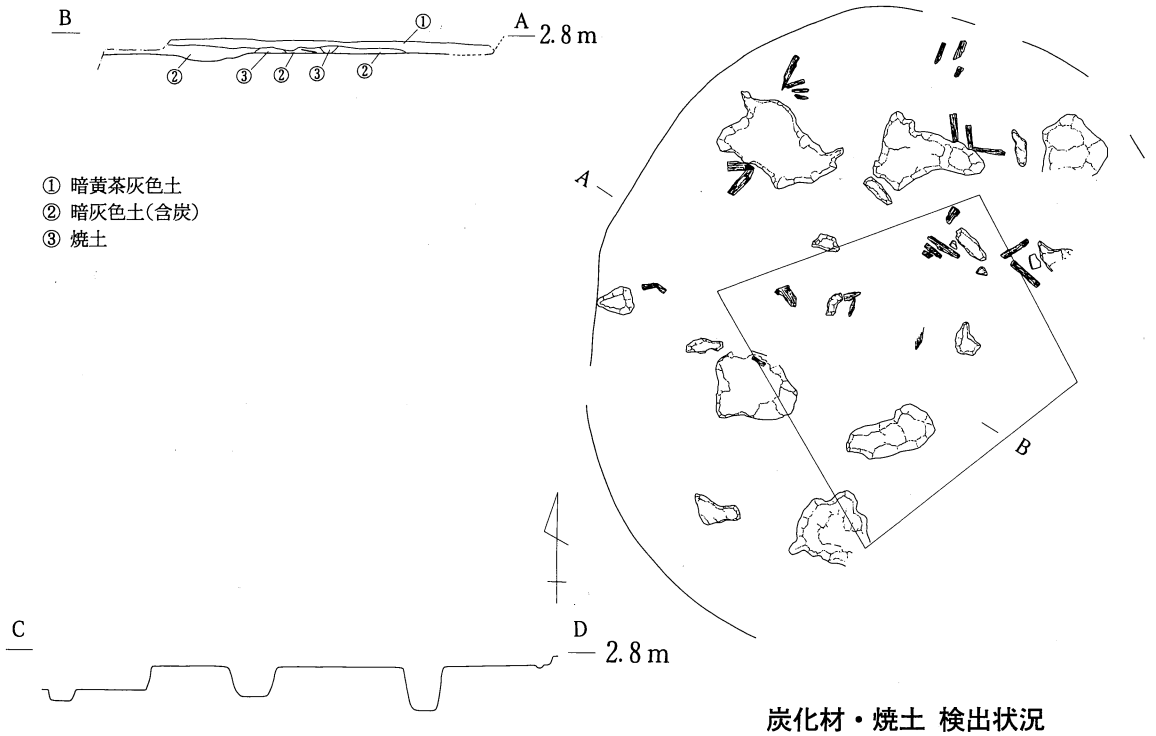


図57　竪穴住居12出土遺物（2）

竪穴住居13（図58、59、60、61）

調査区の中央南側に位置する中期の焼失家屋で、南東部を竪穴住居12によって削平されており、北側の一部は建物１が切っている。炭化材の残り具合は竪穴住居12と比べてあまり良好とはいえず、北半に



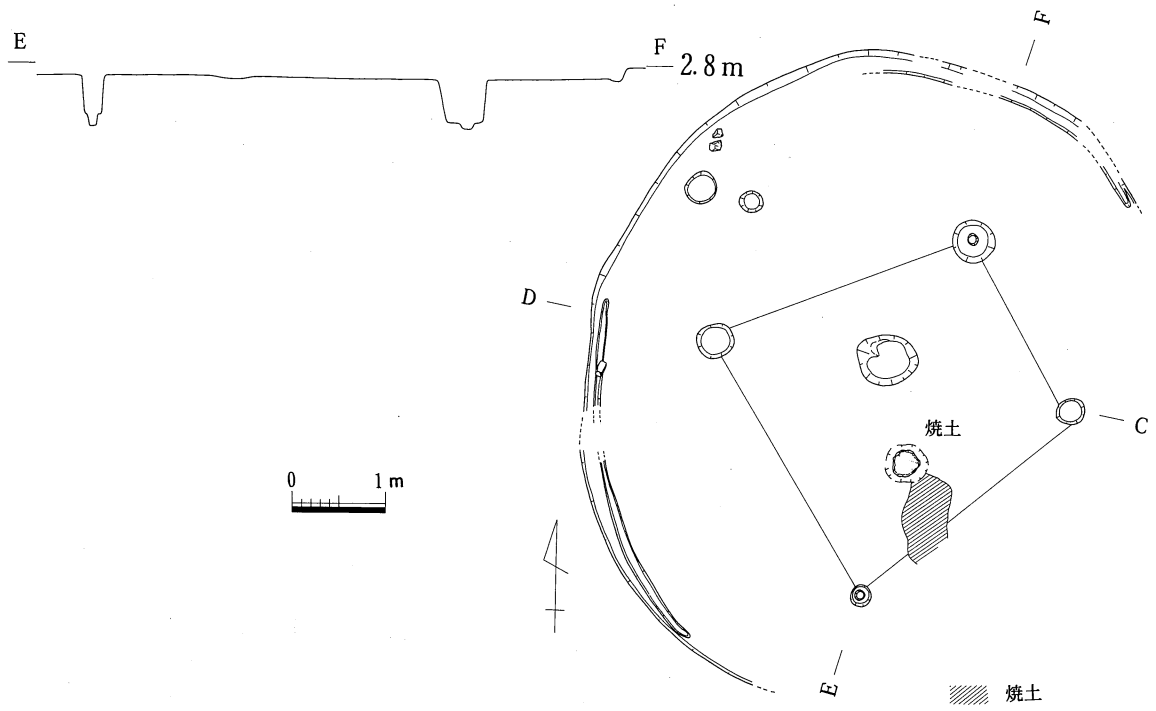


図58　竪穴住居13実測図

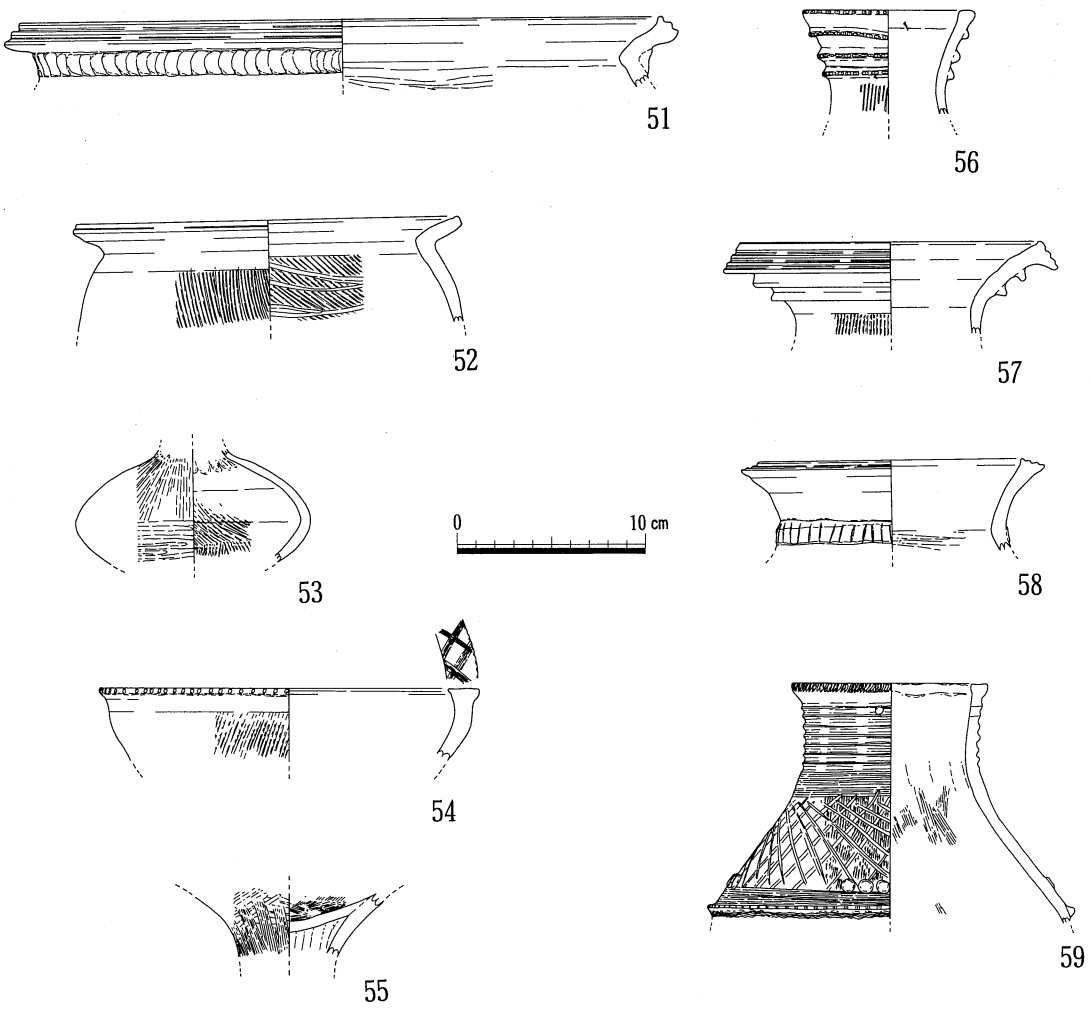


図59　竪穴住居13出土遺物（１）

小さな炭化材の破片と焼土塊が主柱穴の周辺に認められるだけである。床面の標高は約2.75mで、竪穴住居12よりも約0.1m高い。しかし、竪穴住居12との時期差は、出土した土器をみる限りほとんどない。一方、竪穴住居３の床面の標高は両住居よりも高く、中期の遺構でも古相を示すＰ27、Ｐ331、Ｐ376、Ｐ405などが調査区の北半に偏って分布することから、当時の微高地基盤は北にいくほど高く安定していたことが推定される。

残存部から推定すると、平面形は径約6.8mの円形で、壁際には幅約0.1 mの壁体溝がめぐっているが、とぎれている部分もある。主柱穴は４本で、柱間距離は２～3.1mを測る。主柱穴の径は0.25～0.4mで、深さは約0.5 mである。中央には長軸が約0.5mのハート形の平面形をした中央ピットがある。中央ピットの南約0.5mの位置に、円形の焼土塊とそれから南へのびる焼土面が認められ、この部分に火所が考えられる。埋土は３層認められ、焼失後序々に埋没していったことが推定される。

遺物は、床面上と埋土中より出土した。ただ埋土の厚さは約0.2mで、床面出土の遺物と埋土出土の遺物とのレベル差はそれ程顕著ではない。床面上からは壺（56）と緑泥片岩製の偏平片刃石斧（Ｓ11）が出土した。埋土からはヒン岩製と思われる刃部の欠損した太型蛤刃石斧（Ｓ13）と、同種の石材の剥片（Ｓ14)、（Ｓ15）が出土しており、特に剥片の存在は、付近で石斧の製作が行われていたことを示唆している。石鏃はサヌカイト製で５点あり、（Ｓ16）は凹基式で長さ2.1㎝、幅1.5㎝、（Ｓ17）は平基式

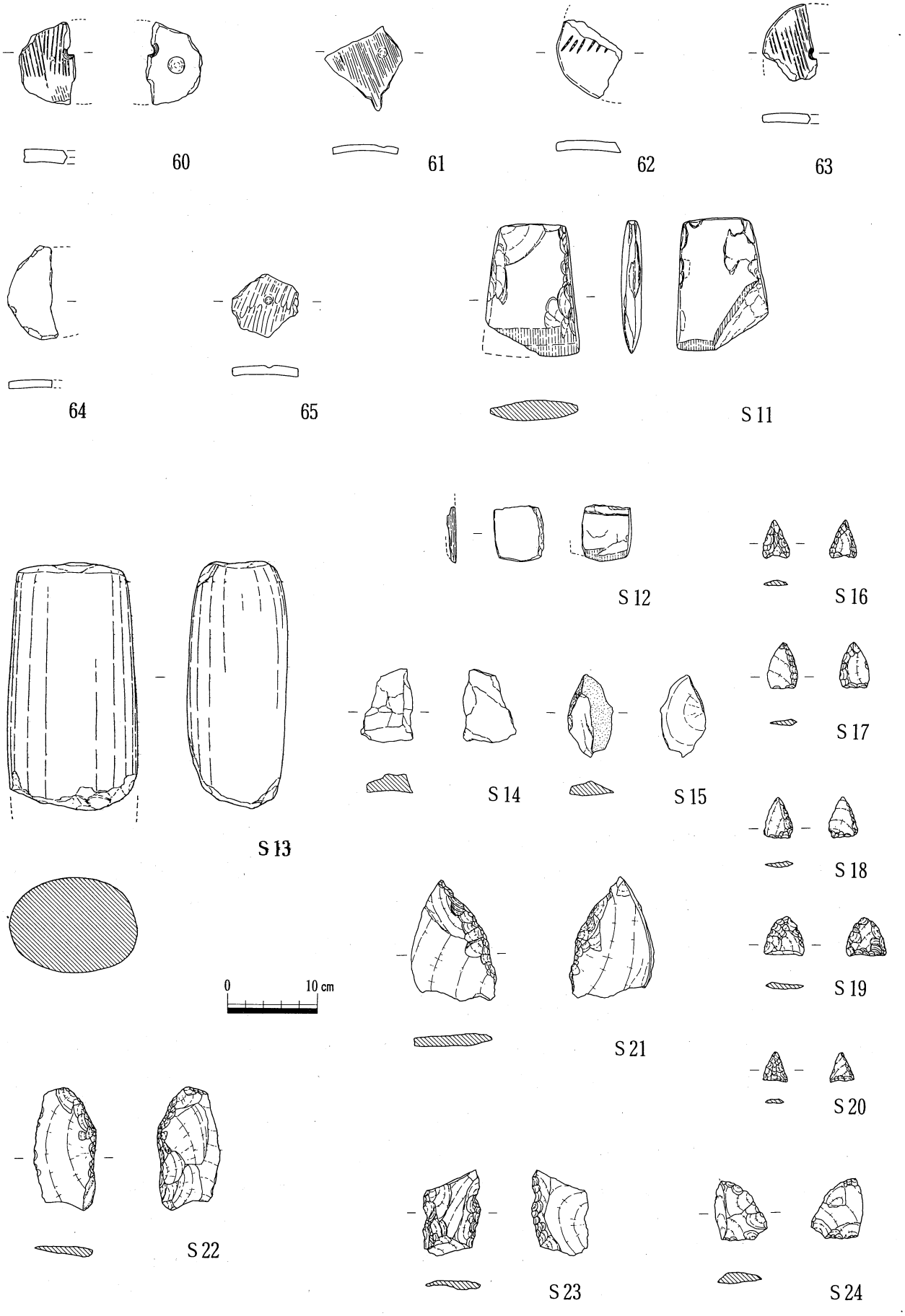


図60　竪穴住居13出土遺物（２）

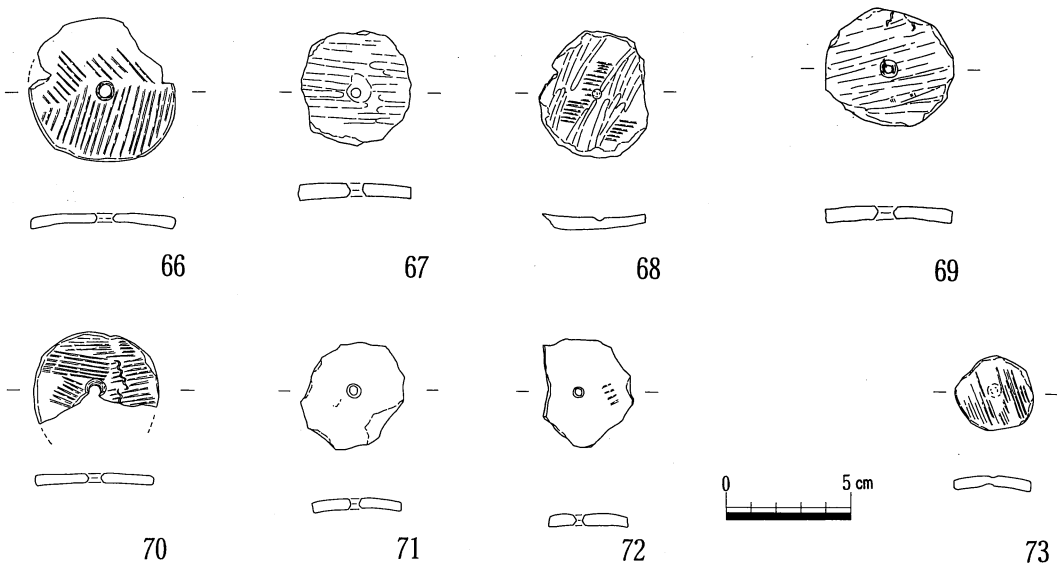


図61　竪穴住居13出土遺物（３）

で長さ5.1cm、幅1.6cm、（S18）は平基式で長さ2.4cm、幅1.5cm、（S19）は平基式で長さ2.1cm、幅2.1cm、（S20）は平基式で長さ1.5cm、幅1.5cmである。（S12）は緑泥片岩製の偏平片刃石斧の破片である。土製の紡錘車が未成品を含めると14点も出土しており、他の住居に比べてかなり多い。出土遺物は、直接的には廃棄時の様相を示しているが、住居使用時の状況も反映している部分もあるとすると、紡錘車の偏った出土状況は、当時の紡錘車を用いた生業活動が、集落内で竪穴住居を単位としてある程度分業的に行われていたことを示している可能性も推測される。他に、サヌカイト製のスクレイパーや剥片も出土している。

建物１（図62、63）

竪穴住居13の北側を切っており、同住居の廃絶後に建てられたものである。柱穴は径0.25～0.4ｍの規模で、深さは0.25～0.4ｍ、１間×２間規模の中期の掘立柱建物である。柱間距離は東西が約2.1m、南北が約1.2ｍである。百間川今谷遺跡で集中的に検出された、中期の掘立柱建物群の建物よりは規模的には小さい。また、調査区内では他に掘立柱建物

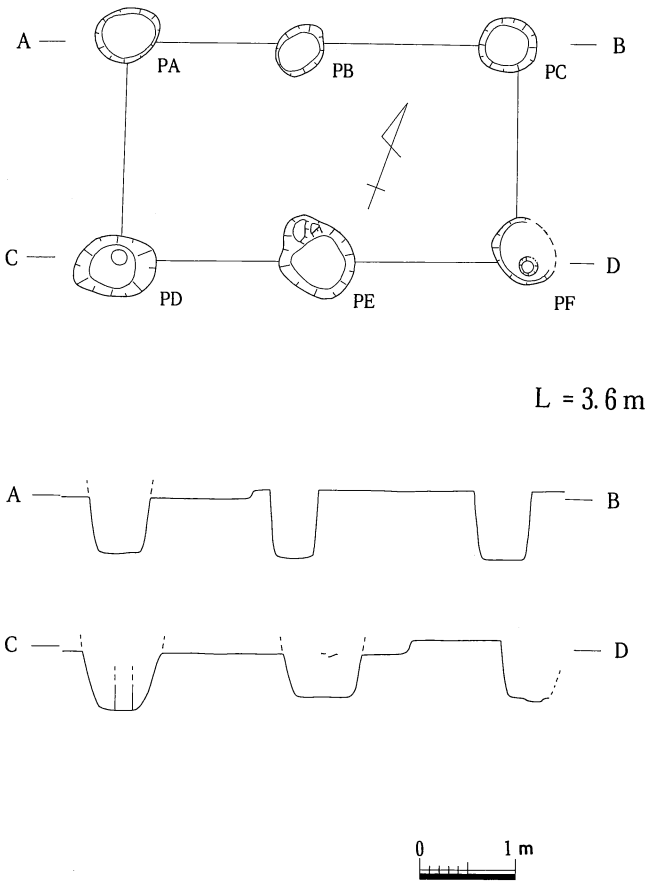


図62　建物１実測図

は検出しておらず、百間川今谷遺跡のように、掘立柱建物だけが集中するといったような様相ではなかったようである。

遺物は、柱穴の埋土中より出土している。甕（74）、壺（75）、（76）は、Ｐ－Ｅの埋土上半で検出され、壺（75）はほぼ完形であるが、２次的な火を受けたため全体が歪んでいる。甕（77）と鉢（78）は、Ｐ－Ｃの埋土から、壺（79）はＰ－Ａの埋土から出土した。

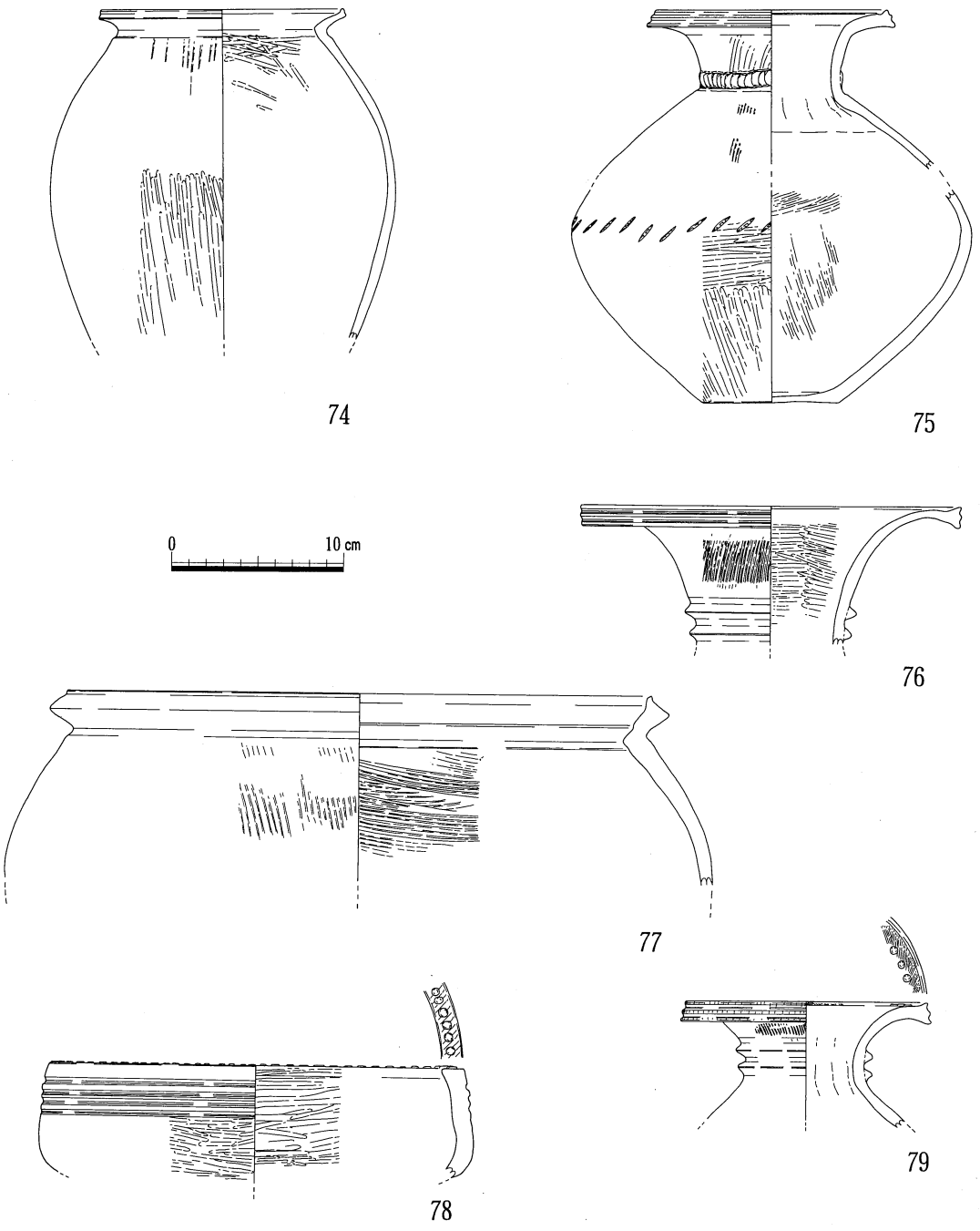


図63　建物１柱穴出土遺物

P283（図64、65）

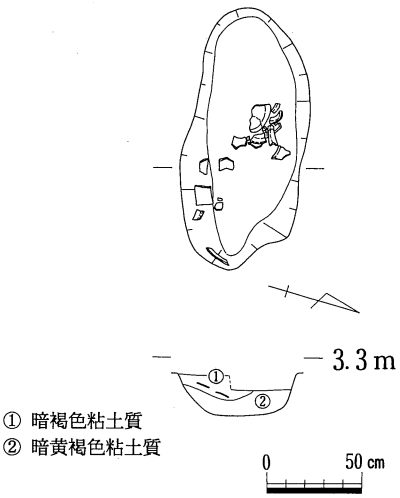


図64　P283実測図

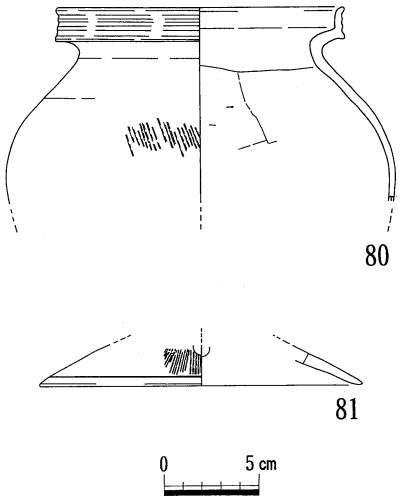


図65　P283出土遺物

調査区南西付近で検出された後期の土壙である。長軸約1.4m、短軸約0.6mのやや不整形な長楕円形の平面形を呈し、断面形は逆台形である。検出面からの深さは約0.2mを測る。埋土は2層確認でき、遺物は全て第1層から出土した。遺物の検出状況は、南から北にいくにしたがい序々にレベルが下がる傾向が看取され、南から土器を投棄したことも推測される。

遺物は土器の破片ばかりで、図化できたのは甕と脚部の2点のみである。これらの土器から当遺構は、竪穴住居4、7とほぼ同じ時期と推定される。

P191（図66、67、68）

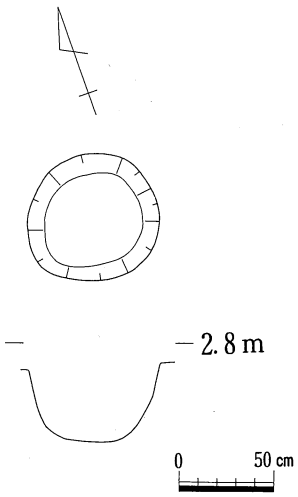


図66　P191実測図

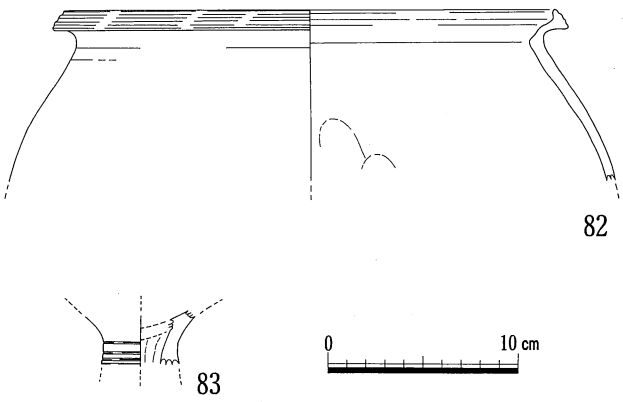


図67　P191出土遺物（1）

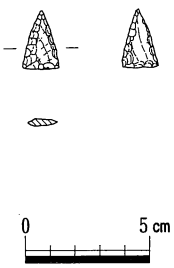


図68　P191出土遺物（2）

Ｐ283の南西付近で検出された中期の土壙で、平面形は径約0.7ｍの円形を呈し、断面形はＵ字形である。検出面からの深さは約0.4ｍを測る。遺物は土器の小片ばかりが埋土中から出土した。これらの土器は、当調査区内で検出された中期の土器のうちでは最も新相であり、この時期に属する遺構は当遺構の他には確認されておらず、また包含層でもほとんどみあたらない。

土壙墓１（図69）

配管部分の調査区で検出された土壙墓で、南側は調査区外へ、北側は中世の遺構により削平されているため、全形を明らかにすることはできなかった。遺構の幅は約0.9ｍで、東側の断面形が西側と比べ傾斜が緩くなっている。人骨が土壙の床付近で検出されているが、木棺などの痕跡は認められない。頭部は欠損しているものの残存している部分から北頭位で、両手両足を折りたたんだ横臥屈位で埋葬されていたと推定される。

遺物は、中期の甕の胴部片が１点出土したのみである。埋土の様子や周囲で検出した遺構との諸関係から、当遺構の時期は一応中期と考えられる。

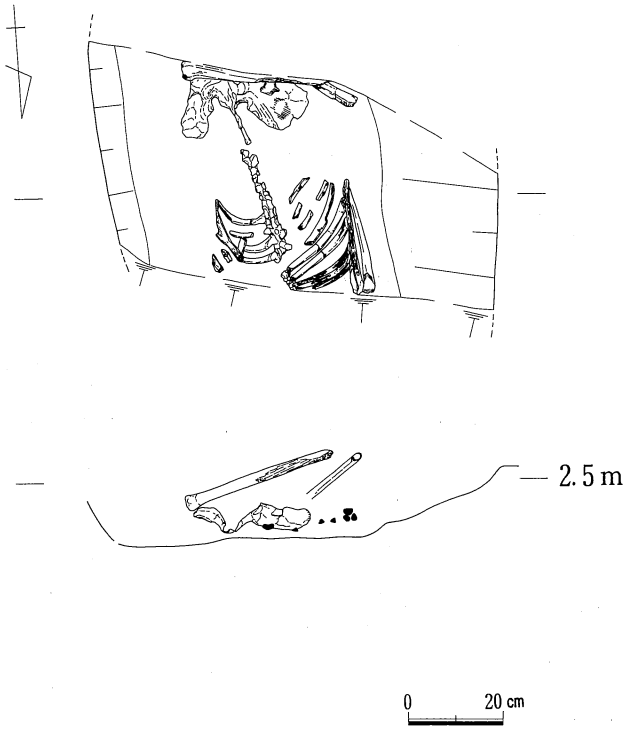


図69　土壙墓１実測図

Ｐ17（図70、71、72）

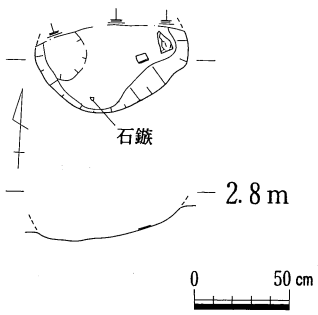


図70　Ｐ17実測図

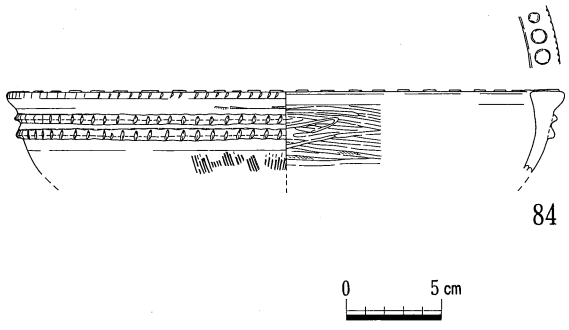


図71　Ｐ17出土遺物（１）

配管部分の調査区で検出された中期の土壙で、竪穴住居１の東側を一部削平している。当遺構の北側は、中世の遺構により削平されているが、長軸0.8ｍ、短軸0.5ｍ以上の不整形な長楕円形の平面形が推定される。底部は東から西へ向かって傾斜している。遺物は東側の底部付近から角礫と鉢の小片が１点、南側の底部より約３㎝上の部分から石鏃が１点出土

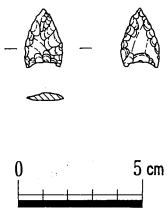


図72　Ｐ17出土遺物（２）

した。石鏃は凹基式のサヌカイト製で、長さ2.1cm、幅1.5cmである。

P25（図73、74）

配管部分の調査区で検出された中期の土壙で、北半は調査区外へ出るため全形は不明であるが、長軸約１ｍ、短軸0.5ｍ以上の長楕円形かもしくは隅丸方形の平面形が推定される。断面形は比較的緩やかな傾斜の逆台形で、遺物は遺構内全体に分布していた。

遺物は土器ばかりであったが、遺構の中央部付近には拳大の焼土塊が２個検出された。甕（86）と高杯（88）は完形であるが、壺（85）や甕（87）は調査区内ぎりぎりで検出されており、調査区外に残りの部分が存在している可能性がある。

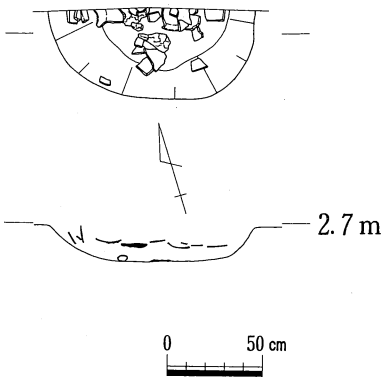


図73　P25実測図

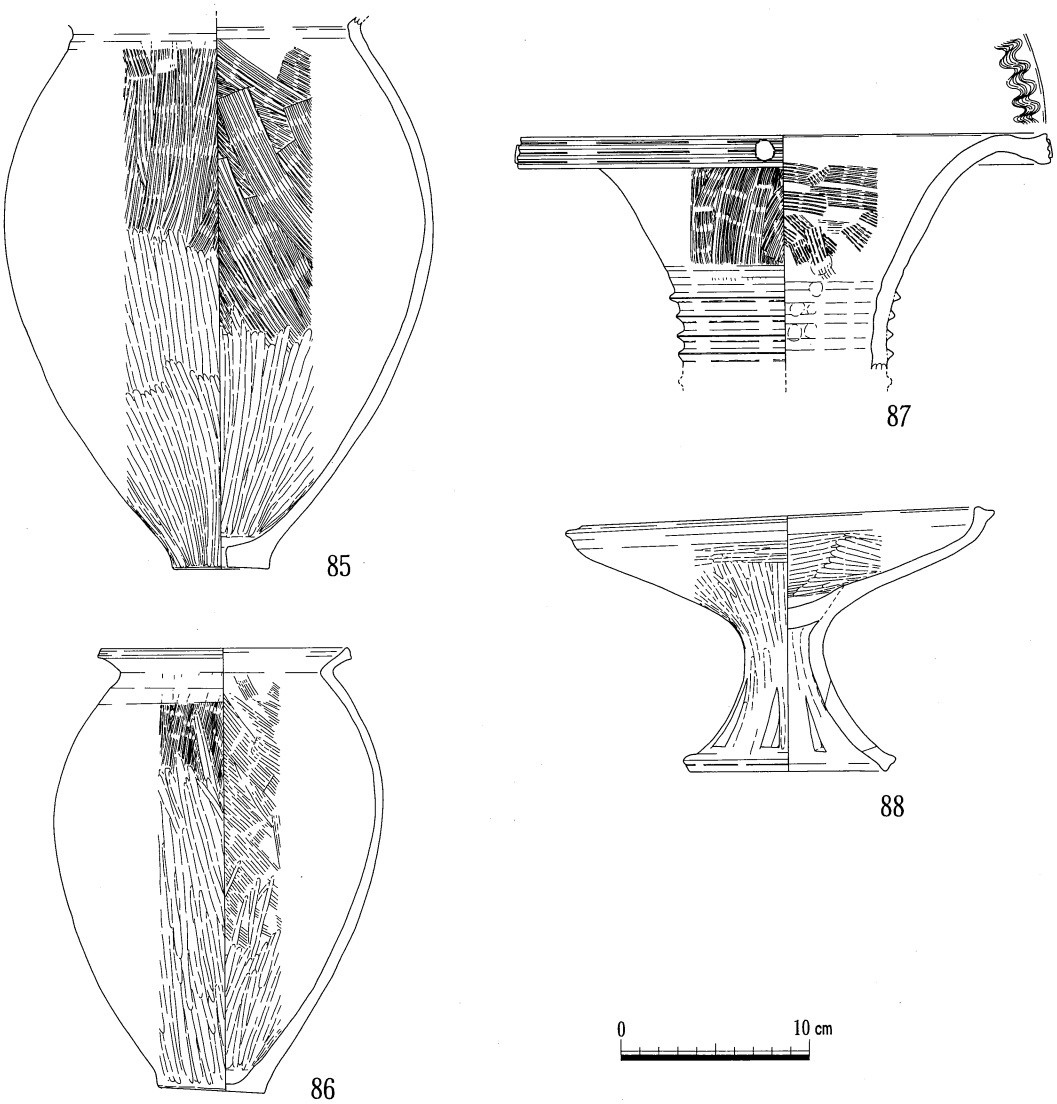
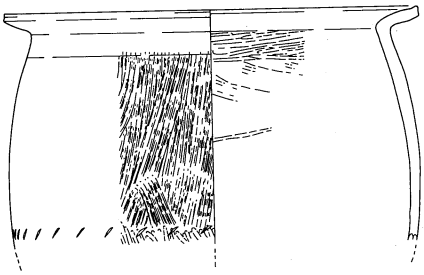
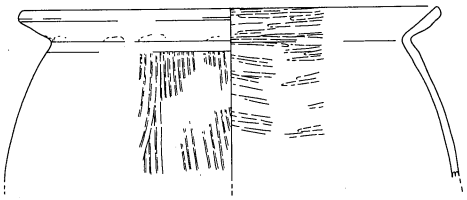
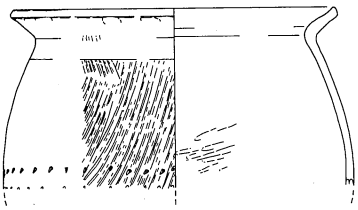
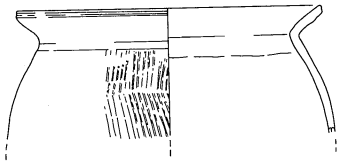


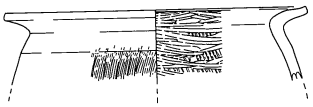
図74　P25出土遺物

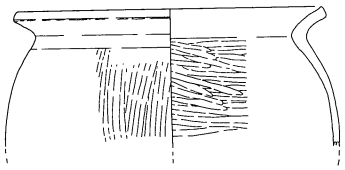

89

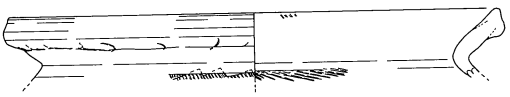

92

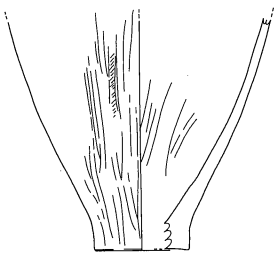

90

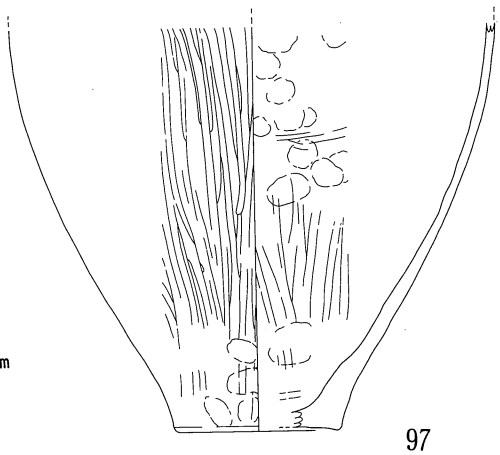

93


94

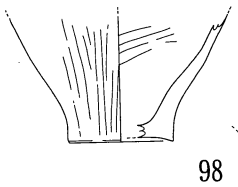

91


95

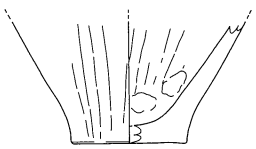

96

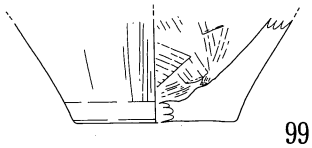

97

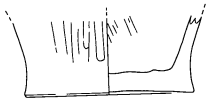
0　5cm

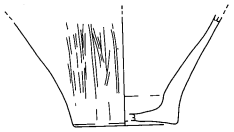

98

101


103


99


102


104

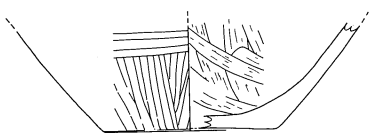

100

図75　P27出土遺物（1）

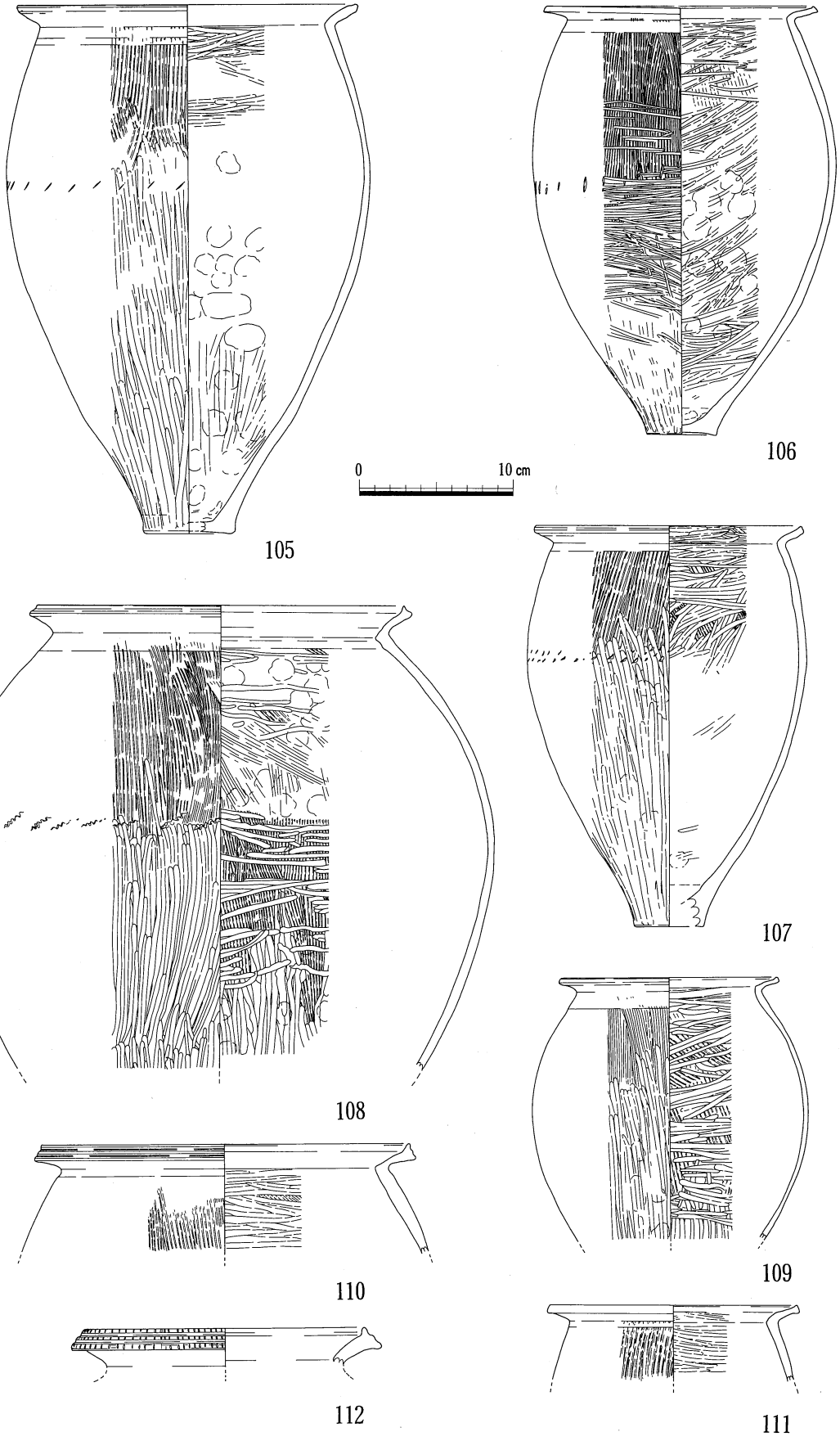


図76　P27出土遺物（2）

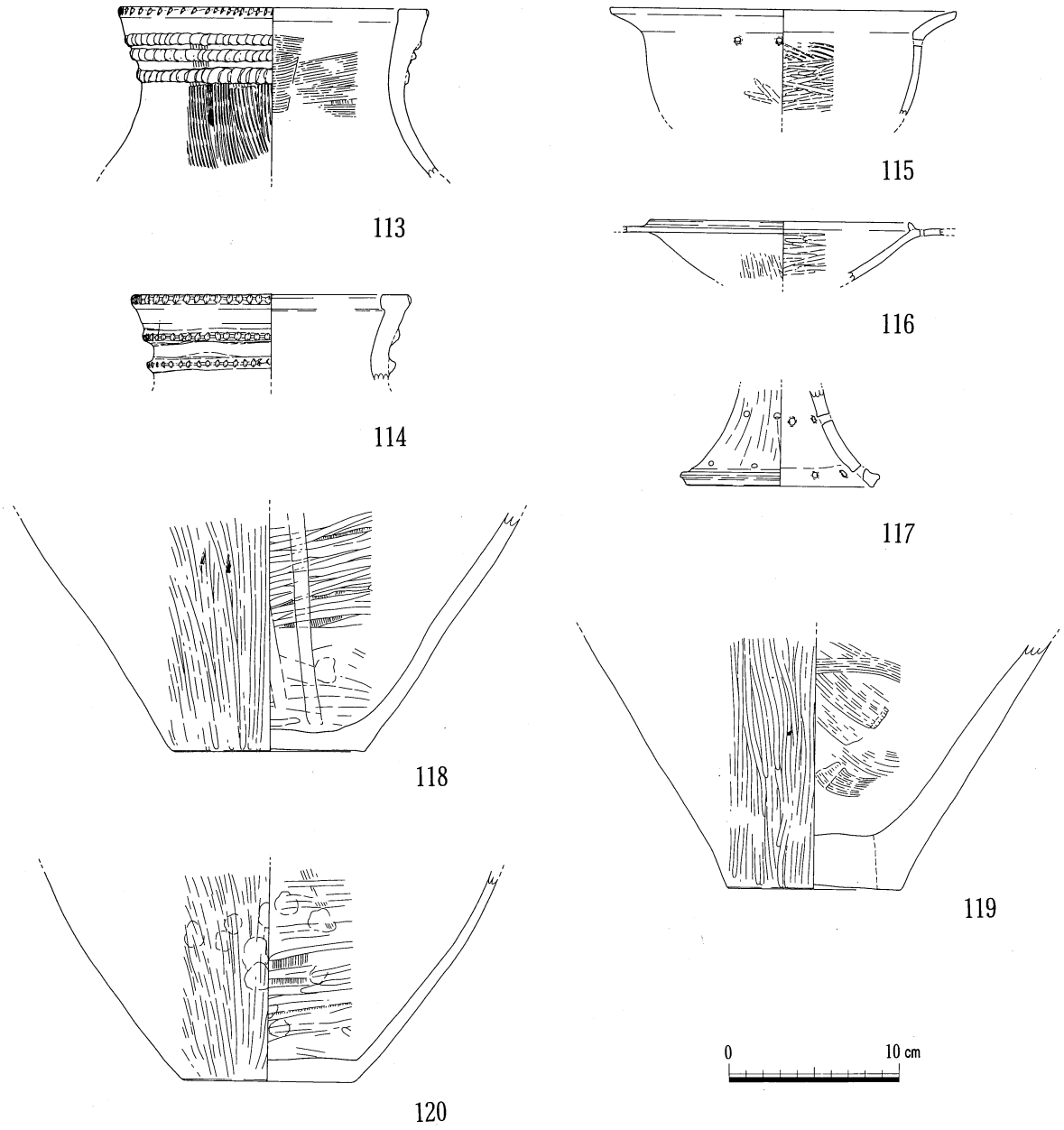


図77　P27出土遺物（3）

P27（図75、76、77、78）

配管部分の調査区で検出された中期の袋状土壙で、遺構東西の端部分は調査区外へ出るため確認できなかった。検出面での平面形は長軸が1.2m、短軸が0.6m以上の長楕円形で、深さは検出面から約1.3mを測る。やや東側をえぐるような断面形で、底部も平坦ではなくU字形になっている。東西方向の断面で最大幅となるところは、底部から約0.6m上方の位置で、約1.2mを測る。遺物の大半は埋土の上半からかたまって出土し、底部付近からの出土は皆無であった。おそらく土壙廃棄後の窪みに、まとめて投棄したものと推定される。ただ、脚部（117）だけは検出面付近で出土しており、当遺構に伴うかどうか微妙な位置であった。調査区の幅が非常に限られていることから明確にはできなかったが、（117）は少なくとも他の土器とは異なった埋没時期も推定される。

遺物は甕が大半で、（105）、（106）、（107）はほぼ完形である。甕のうち、（109）と（111）は色調が

他の甕とは異なる。甕の外面調整は、タテハケの後に下半にタテミガキを行っているものが大半であるが、内面の調整はミガキの粗密にやや違いが認められる。また、口縁部付近の調整についても内面にミガキを残すものと、内外にヨコナデを行うものとがある。壺は口縁部付近の破片が2点だけで、高坏についてもこの土器群に伴うかどうか明確でない（117）を除くと2点だけである。

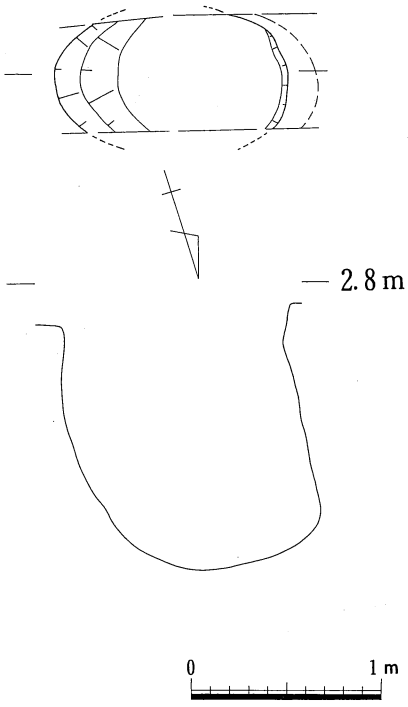


図78　P27実測図

P299（図79）

調査区北東付近で検出された土壙である。平面形は、長軸が約0.8m、短軸が約0.7mの円形で、断面形はU字形を呈する。検出面からの深さは約0.15mである。埋土は5層が確認され、ややブロック状に堆積していることから人為的な埋没が想定される。遺物は、土器の細片が第4層から若干出土している。細片であるため明確ではないが、一応中期の甕の胴部片と考えられることから、遺構の時期も中期に属する可能性が高いように思われる。

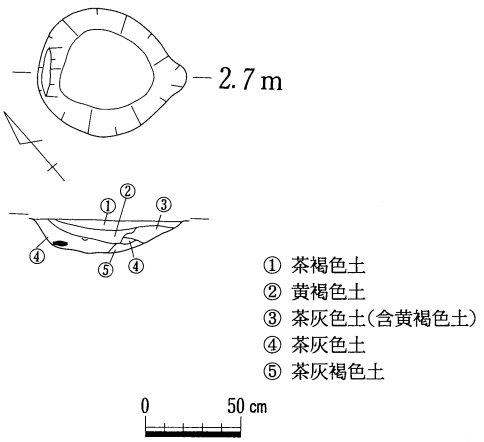


図79　P299実測図

P331（図80、81）

調査区北西付近で検出された中期の土壙である。長軸約1.6m、短軸約1.1mの隅丸方形気味の平面形を呈し、断面形はU字形である。底部付近はやや凹凸が認められ、東側のコーナーには長さ約0.4mの段も形成されている。埋土は5層が確認され、やや複雑な堆積にみえるが、基本的にはレンズ状堆積である。遺物は第2層と第4層に含まれており、大半は第2層から出土した。遺物のレベルは南から北にいくにしたがい低くなっている。　遺物は鉢2点と底部片1点で、鉢（121）は第4層から出土し、出土した土器のうち最もレベルが高かった。

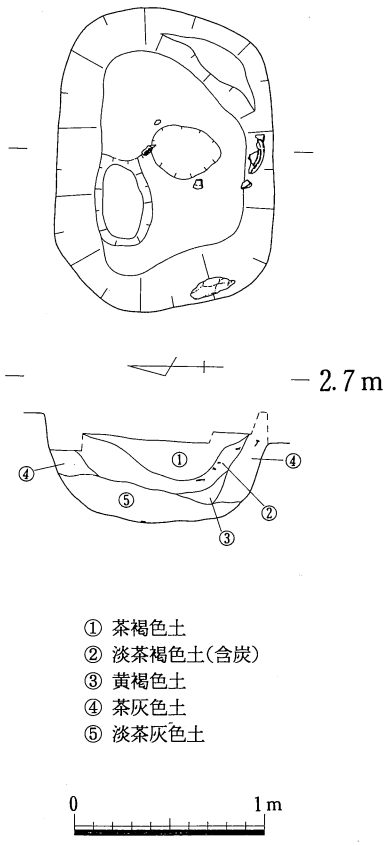


図80　P331実測図

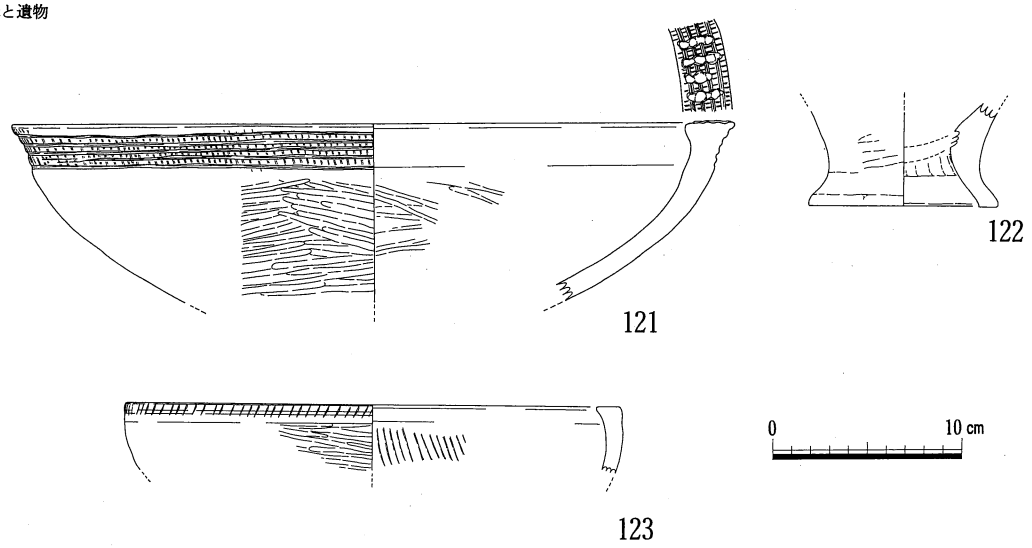


図81　P331出土遺物

P356（図82、83）

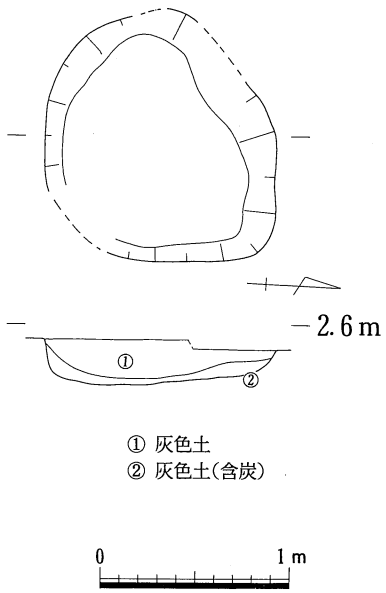


図82　P356実測図

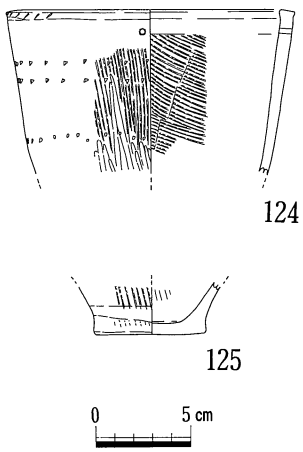


図83　P356出土遺物

P331の北側で検出された中期の土壙である。遺構の一部は古墳時代の竪穴住居により削平されているが、長軸約1.4m、短軸約1.2mの不整形な円形の平面形が推定される。断面形は逆台形で、検出面からの深さは約0.25mを測る。埋土は2層が確認された。遺物は第2層から出土した。

遺物は鉢と底部で、両方とも破片であるが、接合関係にはない。

P362、P363、P364、P375（図84）

P362、P363、P364は調査区中央、ちょうど竪穴住居3と竪穴住居12・13の中間付近に位置する。P362は、P364、P363に切られており全形は不明だが、平面形は径約1mの不整形な円形と推定され、検出面からの深さは約0.4mである。P364は、P363に南半を切られており、全形は不明である。検出面からの深さは約0.2mを測る。P363は、長軸約1m、短軸約0.6mの長楕円形の平面形で、検出面からの深さは約0.3mを測る。遺構東側の幅約0.5mのところは、約0.1mの段がついて低くなっており、こ

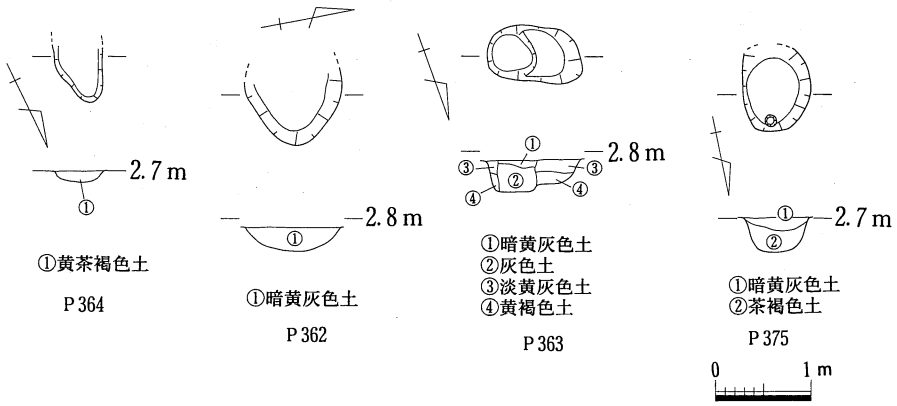


図84　P362、P363、P364、P375実測図

の部分は断面でも異なる土層が認められることから、2つの別の遺構としてとらえられる可能性もある。P362、P363、P364とも遺物はほとんど検出されなかったが、わずかに出土した土器の破片からそれぞれ中期の遺構と推定される。

P375はP364の北側で検出された土壙で、南半はP374によって切られている。長軸1m以上、短軸約0.7mの楕円形の平面形が推定され、断面形は逆台形である。検出面からの深さは約0.3mで、底部北端には、径約0.15mで底部からの深さ約0.1mの小さなピットが検出された。遺物は、中期の壺の小片とサヌカイトの剥片が出土したのみである。

P357（図85、86）

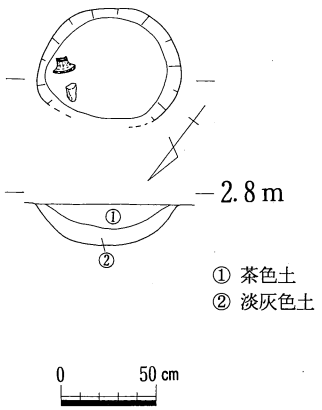


図85　P357実測図

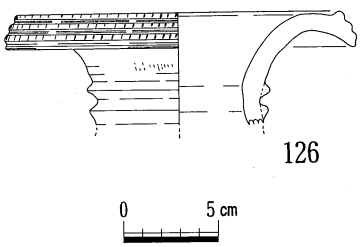


図86　P357出土遺物

調査区北西付近で検出された中期の土壙で、長軸約0.7m、短軸約0.6mの不整形な円形の平面形を呈する。断面形はU字形で、埋土は2層が確認された。遺物は、壺の口縁部片が底部付近で出土した。

P376（図87、88、89）

調査区中央北よりで検出された中期の土壙で、北半上面を竪穴住居3により削平されている。径約1.8mの円形の平面形を呈し、南側に幅約0.3mの段が形成され、そこより約0.2m下がって底部にいたる。埋土をみる限り、2つの遺構の切り合いということはなさそうである。埋土は数層が認められるが、基本的にレンズ状堆積の状況であり、序々に埋没していったことが推定される。遺物は第3層から出土しており、南から北へ落ち込んでいくような状態で検出された。

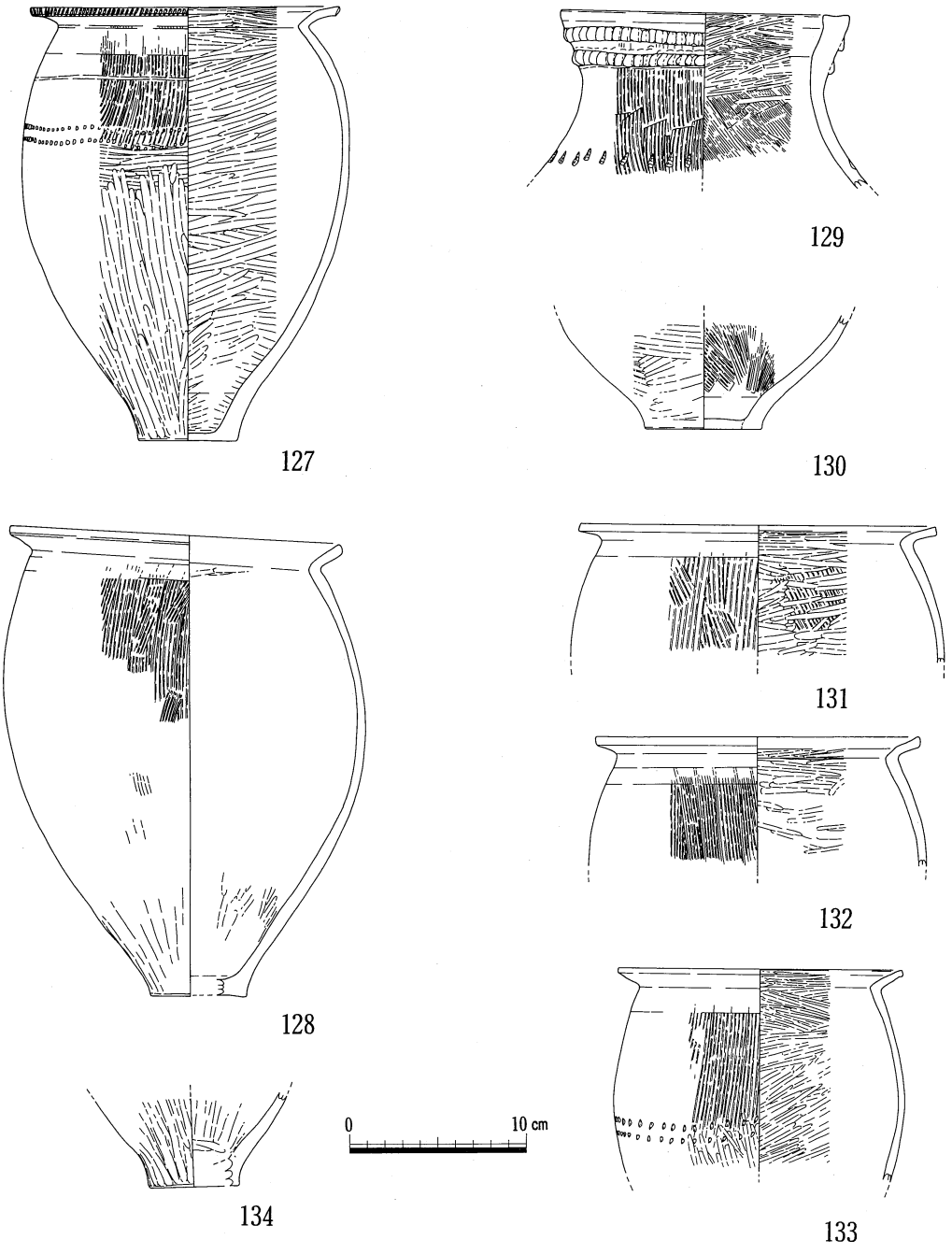


図87　P376出土遺物（1）

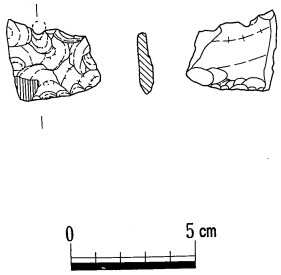


図88　P376出土遺物（2）

甕（127）はほとんど完形である。出土した甕の外面調整は上半がタテハケ、下半がタテミガキで、内面はミガキである。甕（131）のように、内面のミガキが粗なためハケが観察されるものもある。口縁部は外面がヨコナデで、内面はミガキのものとヨコナデのものとがある。壺は、口縁部と底部の破片が１点ずつ出土した。他にサヌカイト製の石庖丁の破片が出土し、磨滅した部分も観察される。

P374、P393、P399、P403（図90、91、92）

P374はP375を一部削平している。径約0.4mの円形の平面形で、断面は逆台形を呈する。埋土は１層で、検出面からの深さは約0.2mである。遺物は、埋土上半からヒン岩製と推定される刃部を欠損した蛤刃石斧が１点出土した。

P393は調査区中央付近で検出した中期の土

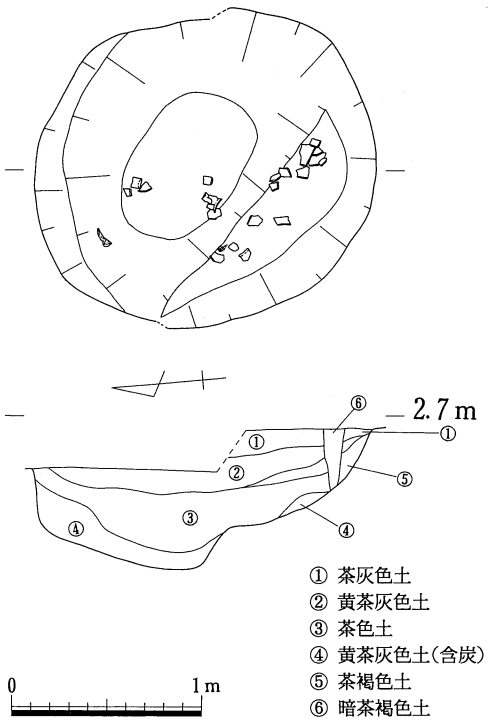


図89　P376実測図

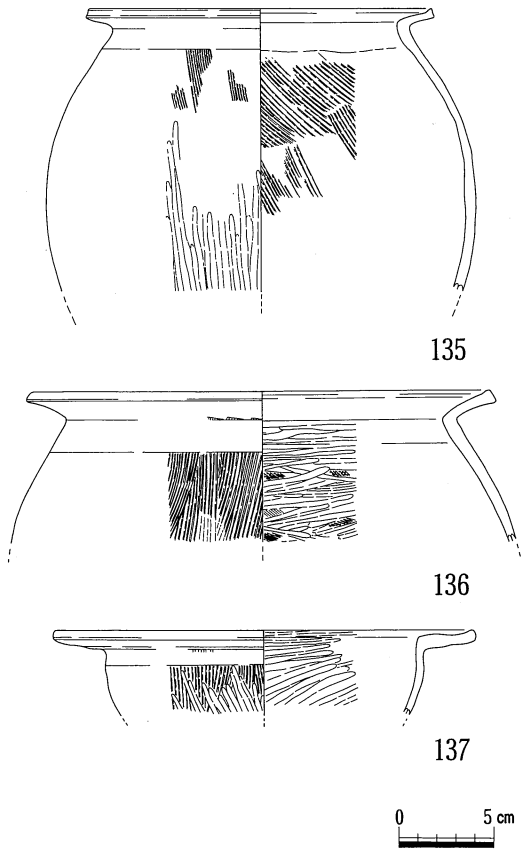


図90　P393，P399出土遺物

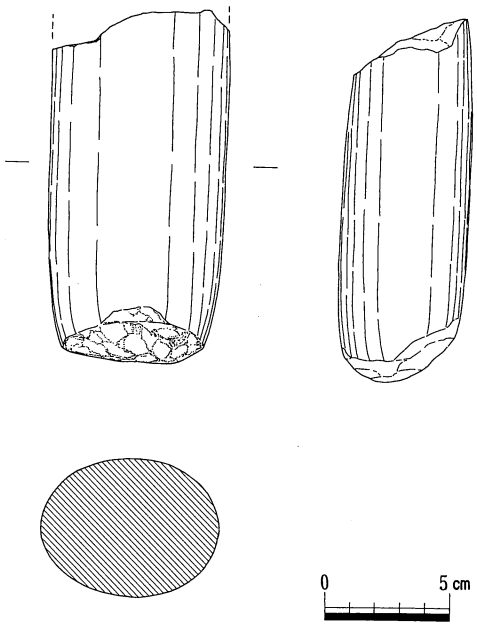


図91　P374出土遺物

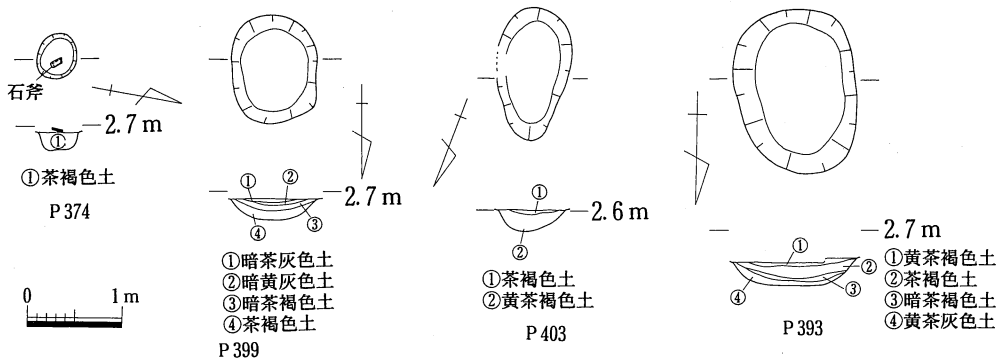


図92　P374，P393，P399，P403実測図

壙で、長軸約1.8m、短軸約1.3mの倒卵形の平面形を呈し、断面形は緩やかな傾斜の逆台形である。検出面からの深さは約0.3mで、埋土は4層が認められるが、基本的にはレンズ状堆積である。遺物は、底部よりやや上の位置から甕（135）が出土した。

P399は竪穴住居3の南で検出された中期の土壙で、長軸約1.1m、短軸約0.9mの隅丸方形の平面形を呈する。断面形はU字形で、埋土は4層が確認されるが、基本的にはレンズ状堆積である。遺物は、埋土中から甕（136）が出土した。

P403はP399の東で検出された中期の土壙で、長軸約1.4m、短軸約0.7mの長楕円形の平面形を呈する。断面形はU字形で、検出面からの深さは約0.2mである。遺物は、埋土中から高坏（136）が出土した。

P405（図93、94）

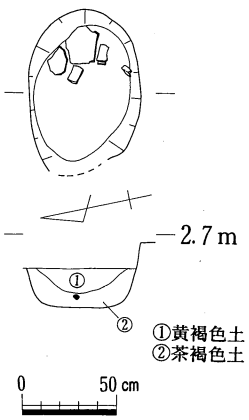


図93　P405実測図

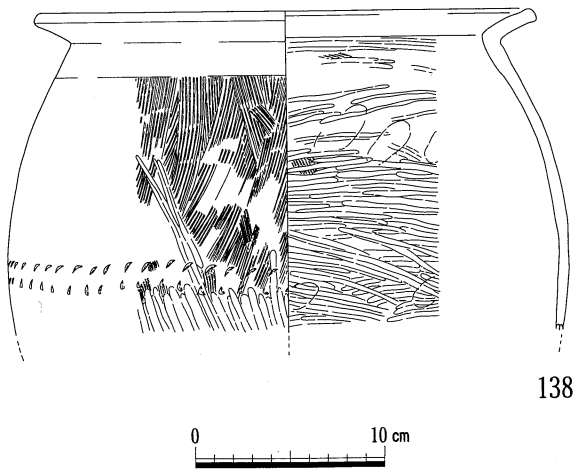


図94　P405出土遺物

調査区中央北半に位置する中期の土壙で、長軸0.9m以上、短軸約0.6mの長楕円形の平面形が予想される。断面形は逆台形で、検出面からの深さは約0.4mである。埋土は2層で、遺物は第2層から出土し、東半にかたまる傾向が看取された。出土した甕（138）は外面がタテハケの後下半をタテヘラミガキしており、内面はミガキで口縁部にはヨコナデを施している。

P419（図95、96）

調査区中央やや東よりで検出され、平面形は径約0.2mの円形を呈し、断面形は逆台形である。深さは検出面から約0.2mを測る。遺物は埋土中からは出土せず、埋土上面から壺（139）が出土した。

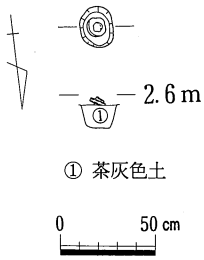


図95　P419実測図

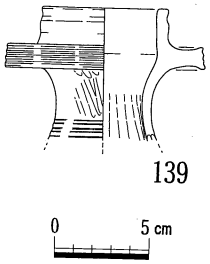


図96　P419出土遺物

P424（図97、98）

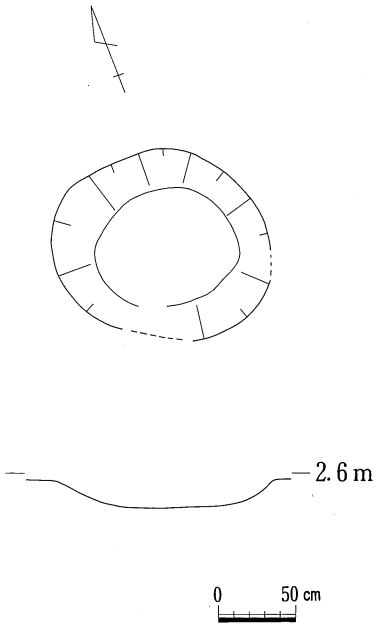


図97　P424実測図

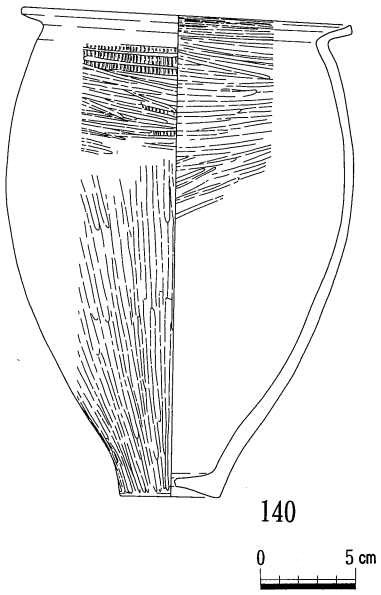


図98　P424出土遺物

調査区北西で検出された中期の土壙である。径約1.2mの円形の平面形を呈し、断面形はU字形である。検出面からの深さは約0.1mを測る。遺物は、埋土中から完形である甕（140）が出土しただけである。

P436（図99、100）

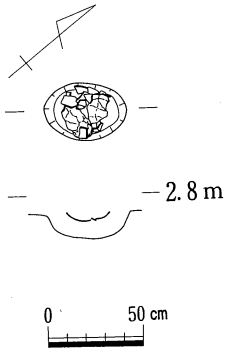


図99　P436出土遺物

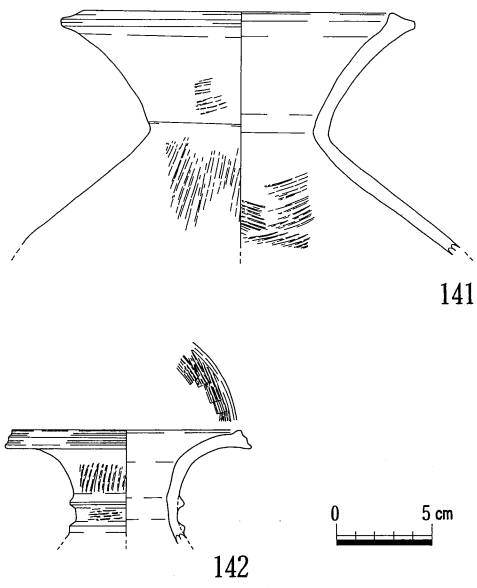


図100　P436出土遺物

調査区中央付近、建物１の北側で検出された中期の土壙で、長軸約0.4m、短軸約0.3mの楕円形の平面形を呈し、断面形はU字形である。検出面からの深さは約0.2mで、遺物は底部から約0.1m浮いた状態で検出された。出土した遺物は、壺の破片が２個体である。

P440（図101、102）

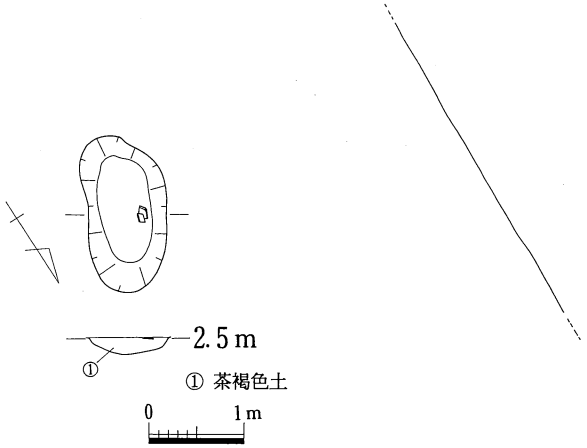


図101　P440 実測図

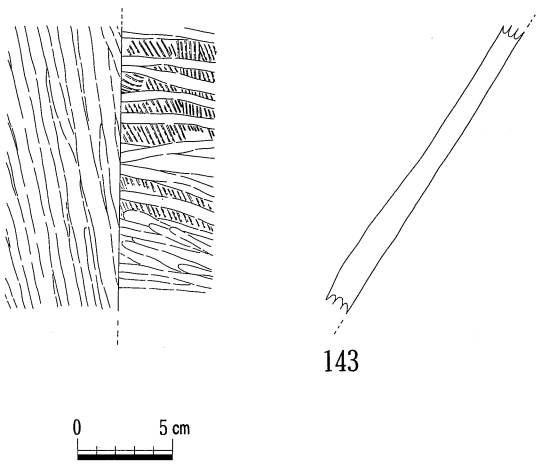


図102　P440 出土遺物

調査区北半、竪穴住居３の西側で検出された中期の土壙で、長軸約1.6m、短軸約0.8mの長楕円形の平面形が推定される。断面形はU字形で、埋土は１層である。検出面からの深さは約0.2mを測り、遺物は、遺構の西側埋土上面付近から甕の胴部下半の破片が出土した。

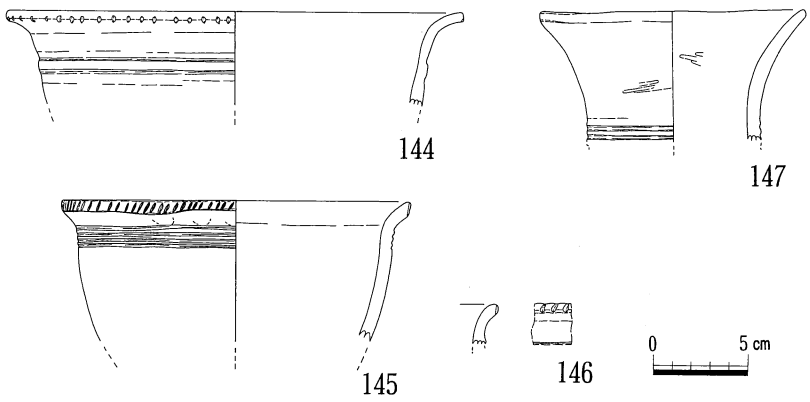


図103　包含層出土遺物（１）

包含層（図103、104）

弥生時代の包含層は調査区全面で認められ、南にいくにしたがいやや厚さが増す傾向がある。土器やサヌカイトの剥片が多量に含まれており、中でも中期に属する土器の量は最も多い。おそらく、当調査区の弥生時代の集落の性格を反映させていると推定される。一方、それらの土器に混じって前期に遡るものも数点認められた。それらの土器の器表面の残り具合は比較的良好で、それほど離れた地点からのものとは思われない。付近に前期の集落が存在するものと思われる。図化できた前期の土器は４点で、甕（144）は削り出し突帯を持ち、甕（145）、（146）は沈線をめぐらす。壺（147）は頸部に沈線をめぐらしている。

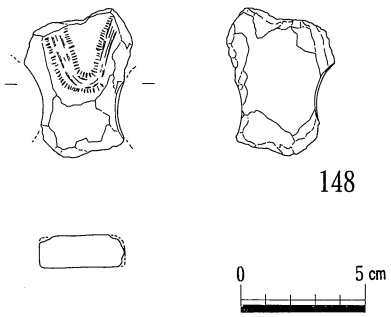


図104　包含層出土遺物（２）

出土土器観察表

器形	土器番号	法量(cm) 口径	底径	器高	形態・調整手法の特徴	胎土	色調	遺構
高杯	1	20.0	—	—	端部外面に浅い沈線が1条めぐる。外面はやや粗いヨコミガキ、内面は不明。	緻密	橙灰色	住4床面
高杯	2	—	—	—	杯部外面はやや粗いヨコミガキ、内面は放射状のタテミガキ。	緻密	橙灰色	住4埋土
脚部	3	—	4.4	—	椀状の杯部をもつ高杯の脚部と思われ、外面はミガキ内面はタテハケである。	緻密	橙灰色	住4床面
甕	4	17.2	—	—	口縁部外面に浅い凹線が2条めぐり、外面頸部以下タテハケ、内面ケズリ。	含長石石英	橙褐色	住4床面
甕	5	16.0	—	—	外面頸部以下タテハケ後ナデ、内面ヨコナデ後頸部以下ヨコケズリ。	含長石石英	淡橙灰色	住4埋土
壺	6	10.0	—	—	外面口縁部に2条、頸部1条の沈線がめぐり、内外面は緻密なヨコミガキ。	含長石石英	淡橙灰色	住4床面
壺	7	—	6.2	—	外面やや粗いヨコミガキ、内面下半はタテ方向のヘラナデ後上半一部ヨコハケ	含長石石英	淡橙灰色	住4埋土
甕	8	15.0	—	—	口縁部外面に凹線が3条めぐり、外面頸部以下タテハケ後ミガキ、内面ケズリ。	含長石石英角閃石	淡茶灰色	住4埋土
鉢	9	16.0	5.0	5.9	口縁部外面に凹線状に窪み外面ケズリの後タテミガキ内面放射状のタテミガキ。	緻密	淡橙灰色	住4埋土
鉢	10	14.8	3.5	5.9	外面ナデ、口縁部付近ヨコナデ、内面ヨコハケ後口縁部付近ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	住4床面
甕	11	15.0	—	—	口縁部外面に凹線が5条めぐり、内外面ヨコナデ	含長石石英角閃石	淡橙灰色	住4床面
甕	12	—	—	—	外面タテハケ後一部ヨコミガキ後タテミガキ後頸部付近ヨコナデ、内面ケズリ。	含長石石英	淡橙褐色	住4埋土
器台	13	—	—	—	長方形の透し穴がめぐり、外面と口縁部内面に線刻で描かれ、内面はヘラナデ。	含長石石英	淡橙灰色	住4埋土
器台	14	—	—	—	器台の口縁部付近の破片と思われ、内面には円弧状の線刻が認められる。	含長石石英角閃石	淡橙灰色	住4埋土
壺	15	27.6	—	—	胴部上半はヨコミガキ、下半はタテミガキ、胴部と頸部内面はケズリ他はハケ。	含長石石英	橙褐色	住7床面
鉢	16	15.6	4.3	4.5	外面下半タテミガキ、内面放射状のタテミガキの後下半に一部ヨコハケ。	緻密	橙灰色	住7床面
鉢	17	11.1	3.2	7.6	外面指頭圧痕後平行タタキ内面ナデ。	含長石石英	淡茶灰色	住7床面
甕	18	14.1	—	—	外面ナナメハケ後頸部以上はヨコナデ、内面頸部以下ナナメケズリ。	含長石石英	淡橙褐色	住7床面
甕	19	13.0	—	—	口縁部外面に凹線が3条めぐる。	含長石石英	橙灰色	住7床面
高杯	20	16.0	—	—	脚部に面取り状の稜線が認められる。	緻密	橙褐色	住7床面
壺	21	8.4	—	—	口縁端部はやや丸くおさめる。	緻密	橙褐色	住7床面
脚部	22	—	10.6	—	四方向に円孔が認められ、外面は緻密なヨコミガキ、内面は不明。	緻密	橙褐色	住7床面
壺	23	24.0	—	—	外面ナデの後粘土紐を貼付し、刻目を入れ、棒状付紋を施し、端部に凹線後刻目	含長石石英	淡橙褐色	住3埋土
壺	24	12.0	—	—	口縁部外面に3条の凹線がめぐり、外面には断面三角形の粘土紐を貼付する。	含長石石英	淡橙灰色	住3埋土
壺	25	8.0	—	—	ミニチュアで、外面タテハケの後口縁部付近はヨコナデ。	含長石石英	淡茶灰色	住3埋土
壺	26	7.4	—	—	ミニチュアで、外面タテハケの後一部にヨコミガキ、口縁部付近はナデ。	含長石石英	橙褐色	住3埋土
壺	27	4.7	—	—	口縁端部を丸くおさめ、外面タテハケ後口縁部はヨコナデ、内面は一部ハケ。	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住3埋土
壺	28	4.0	—	—	ミニチュアで、外面ナナメハケの後口縁部付近はヨコナデ。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	住3埋土
壺	29	8.0	8.8	4.0	ミニチュアで、外面タテミガキ、内面タテミガキ。底部は上げ気味である。	含長石石英	淡橙灰色	住3埋土
脚部	30	—	10.0	—	内面はヨコナデ。	含長石石英角閃石	淡橙灰色	住3埋土
蓋	31	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	住3埋土
甕	32	20.2	—	—	外面タテハケ後口縁部付近ヨコナデ、内面頸部以下ヨコハケ後部分的なミガキ。	含長石石英	淡橙灰色	住3埋土
甕	33	14.5	6.0	27.2	外面タテハケ後下半はタテミガキ、口縁部ヨコナデ。内面ハケ後ナデ後ミガキ。	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住3埋土
鉢	34	34.1	11.2	13.8	外面ヨコミガキの後4条の凹線、さらに刻目をめぐらす。内面ハケの後ミガキ。	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住3埋土
底部	35	—	16.0	—	外面はタテハケ後、上半タテミガキで下半はナナメミガキ。内面ハケ後ヘラナデ	含長石石英	淡橙灰色	住3埋土
分銅形土製品	36	—	—	—	表面はミガキの後クシにより施紋、裏面と側面はハケ施紋は刺突紋と直線紋。	含長石石英金雲母	淡灰褐色	住3床面
土製品	37	—	—	—	外面端部に斜格子紋を施し以下はタテミガキ、内面はタテミガキ。	含長石石英	淡橙灰色	住3埋土
土製品	38	—	—	—	外面ナデの後刺突紋が認められ、内面は部分的なハケ	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住3埋土
土製品	39	—	—	—	断面三角形で表に鋸歯紋と直線紋が施される。銅鐸形土製品の一部か。	含長石石英	淡橙灰色	住3埋土
有孔円板	40	—	—	—	甕胴部の破片でつくっている。両面穿孔。	含長石石英	淡茶灰色	住3埋土
有孔円板	41	—	—		甕胴部の破片でつくっている。両面穿孔。	含長石石英	橙褐色	住3埋土
有孔円板	42	—	—	—	甕の胴部の破片でつくっている。両面穿孔。	含長石石英	橙褐色	住3埋土
有孔円板	43	—	—	—	甕胴部の破片でつくっている。両面穿孔。	含長石石英	橙褐色	住3埋土
甕	44	26.0	—	—	外面上半タテハケ後下半はタテミガキ、さらに上半はナデ。内面ハケ後ミガキ。	含長石石英角閃石	淡橙褐色	住12埋土
底部	45	—	9.2	—	44と同一個体か。外面タテミガキ。内面ナナメハケ後タテミガキ。	含長石石英角閃石	淡橙灰色	住12埋土
底部	46	—	7.0	—	外面タテミガキ後底部付近部分的なナデ。底部外面タテミガキ。内面タテミガキ	含長石石英角閃石金雲母	淡橙褐色	住12床面
甕	47	12.0	—	—	外面タテハケ後下半はタテミガキ。内面下半はヘラナデ後口縁部付近ヨコナデ。	含長石石英角閃石金雲母	淡橙褐色	住12床面
壺	48	12.4	—	—	外面タテハケ後ヨコナデ、2条の凹線の後刻目をめぐらす。内面櫛描紋後浮紋	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住12床面
脚部	49	—	10.0	—	外面タテミガキ後下半および内面はヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	住12埋土
分銅形土製	50	—	—	—	外面ナデの後刺突紋と櫛描紋による施紋。内面ミガキ側面は刺突が認められる。	含長石石英	淡橙灰色	住12床面
甕	51	34.0	—	—	外面ヨコナデ、内面下半ヨコミガキ。口縁部外面に2条の凹線がめぐる。	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住13埋土
甕	52	20.2	—	—	外面タテハケ、内面ナナメハケ後ヨコミガキ。口縁部内外ヨコナデ。	含長石石英角閃石	淡橙褐色	住13埋土
壺	53	—	—	—	外面上半タテミガキ後下半はヨコミガキ。内面下半はタテハケ。	含長石石英角閃石	茶灰色	住13埋土
高杯	54	20.1	—	—	外面ナナメハケ後口縁部ヨコナデ、端部に刻目をめぐらす。上端には斜格子紋。	含長石石英	淡橙灰色	住13埋土
高杯	55	—	—	—	円板充填である。外面ミガキの後脚部からタテハケ。	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住13埋土
壺	56	9.0	—	—	外面タテハケ後粘土紐を3条貼付し刻目をめぐらす。内面ナデ。	含長石石英	淡橙灰色	住13中央ピット
壺	57	16.0	—	—	外面下半タテハケ後上半ヨコナデ。口縁部外面には3条の凹線がめぐる。	含長石石英角閃石	淡橙灰色	住13埋土
壺	58	24.0	—	—	外面ヨコナデ後口縁部は3条の凹線がめぐり頸部には粘土紐を貼付し刻目を施す	含長石石英	茶灰色	住13埋土
壺	59	10.2	—	—	外面ハケ後7条の凹線後斜格子紋後直線紋後円形浮紋、波状紋。内面一部ハケ	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住13埋土

有孔円板	60	—	—	—	甕の胴部片でつくっている両面穿孔	含長石石英金雲母	橙褐色	住13埋土
有孔円板	61	—	—	—	甕の胴部片でつくっている両面穿孔	含長石石英	淡茶灰色	住13埋土
土製円板	62	—	—	—	有孔円板の未成品。甕の破片でつくっている。	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住13埋土
有孔円板	63	—	—	—	甕の胴部片でつくっている両面穿孔	含長石石英	淡茶灰色	住13埋土
有孔円板	64	—	—	—	甕の胴部片でつくっている両面穿孔	含長石石英	淡茶灰色	住13埋土
有孔円板	65	—	—	—	両面穿孔	含長石石英金雲母	橙褐色	住13埋土
有孔円板	66	—	—	—	両面穿孔	含長石石英	橙褐色	住13埋土
有孔円板	67	—	—	—	甕の胴部片でつくっている両面穿孔	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住13埋土
有孔円板	68	—	—	—	甕の胴部片でつくっている両面穿孔	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住13埋土
土製円板	69	—	—	—	甕の胴部片でつくっている	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住13埋土
土製円板	70	—	—	—	壺の胴部片でつくっている	含長石石英角閃石	淡橙灰色	住13埋土
有孔円板	71	—	—	—	甕の胴部片でつくっている両面穿孔	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住13埋土
土製円板	72	—	—	—	甕の胴部片でつくっている	含長石石英角閃石	淡橙灰色	住13埋土
土製円板	73	—	—	—	有孔円板の未成品。甕の胴部片でつくっている。	含長石石英金雲母	淡橙灰色	住13埋土
甕	74	14.0	—	—	外面タテハケの後下半タテミガキ。内面ヨコミガキ。後口縁部内外ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	建物1P-E
壺	75	13.2	7.9	—	外面タテハケ後胴部中位ヨコミガキ後下半タテミガキ内面ヨコ、タテハケ。	含長石石英	淡橙褐色	建物1P-E
壺	76	22.0	—	—	外面タテハケ後粘土紐貼付口縁部に2条の凹線。内面ヨコミガキ。	含長石石英	淡橙灰色	建物1P-C
甕	77	30.0	—	—	外面タテハケ、内面ヨコハケ後口縁部付近にヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	建物1P-C
鉢	78	28.0	—	—	外面下半はヨコミガキ上半はヨコナデ、凹線が3条めぐる。内面ハケ後ミガキ。	含長石石英	橙灰色	建物1P-C
壺	79	14.0	—	—	外面タテハケ後ヨコナデ。口縁部2条の凹線後刻目。内面櫛描文の後円形浮紋。	含長石石英	橙灰色	建物1P-A
甕	80	14.8	—	—	外面タテハケ、内面頸部以下ヨコケズリ。口縁部に浅い凹線が3条めぐる。	含長石石英	橙灰色	P283
脚部	81	—	16.8	—	外面タテハケ。	含長石石英	橙褐色	P283
甕	82	26.0	—	—	調整は磨滅のため不明。口縁部外面には浅い凹線が3条めぐる。	含長石石英金雲母	淡橙灰色	P191
高杯	83	—	—	—	調整は磨滅のため不明。	含長石石英	橙灰色	P191
鉢	84	29.0	—	—	外面タテハケ後粘土紐を貼付しヨコナデして刻目をめぐらす。内面ハケ後ミガキ	含長石石英	淡橙灰色	P17
甕	85	—	5.0	—	外面タテハケの後下半はタテミガキ。内面ナナメハケ後下半タテミガキ。	含長石石英角閃石	淡橙茶灰色	P25
甕	86	13.0	5.6	23.5	外面タテハケの後タテミガキ、内面ナナメハケの後下半タテミガキ。	含長石石英金雲母	淡橙灰色	P25
壺	87	28.0	—	—	外面タテハケ後粘土紐貼付4条の凹線の後円形浮紋貼付。内面ハケ後ナデ、施紋	含長石石英金雲母	淡橙灰色	P25
高杯	88	21.2	10.5	13.5	外面ヨコミガキ後タテミガキ、内面ヨコミガキ後端部はヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P25
甕	89	22.0	—	—	外面タテハケ後下半タテミガキ後刺突紋をめぐらす。内面ヨコミガキ。	含長石石英	淡橙灰白色	P27
甕	90	17.0	—	—	外面タテハケ後口縁部付近ヨコナデ。内面ヨコミガキ胴部外面に刺突紋。	含長石石英	淡橙灰白色	P27
甕	91	16.0	—	—	外面タテハケ後口縁部付近ヨコナデ。内面ヨコミガキ後口縁部付近ヨコナデ。	含長石石英	淡灰褐色	P27
甕	92	22.0	—	—	外面タテハケ後口縁部付近ヨコナデ。内面ヨコミガキ	含長石石英	淡橙灰白色	P27
甕	93	16.0	—	—	外面タテハケ後口縁部付近ヨココナデ。内面タテハケ後ヨコミガキ。	含長石石英	淡橙灰白色	P27
甕	94	26.0	—	—	外面タテハケ後口縁部付近ヨコナデ。内面ヨコハケの後ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰白色	P27
底部	95	—	5.0	—	外面ナナメハケ後タテミガキ、内面タテミガキ。	含長石石英	淡橙灰色	P27
底部	96	—	9.0	—	外面タテミガキ、内面ヨコおよびタテミガキ。	含長石石英角閃石	淡橙灰褐色	P27
底部	97	—	5.4	—	外面タテミガキ、内面ヨコミガキ。	含長石石英角閃石	淡橙褐色	P27
底部	98	—	9.0	—	外面タテミガキ後底付近ヨコナデ。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙褐色	P27
底部	99	—	9.0	—	外面タテミガキ後ヨコミガキ。内面ヘラナデ。	含長石石英角閃石金雲母	淡橙灰白色	P27
底部	100	—	7.0	—	外面タテミガキ。内面タテハケ。	含長石石英	橙褐色	P27
底部	101	—	9.0	—	外面タテミガキ。内面タテハケ。	含長石石英角閃石	淡黄褐色	P27
底部	102	—	6.0	—	外面タテミガキ。内面タテミガキ。	含長石石英	淡黄褐色	P27
底部	103	—	5.2	—	外面タテミガキ。内面は不明。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	P27
甕	104	22.0	4.9	34.4	外面タテハケ後下半タテミガキ後刺突紋。内面上半ヨコミガキ、下半タテミガキ	含長石石英金雲母	淡灰褐色	P27
甕	105	17.0	4.4	26.2	外面タテハケ後下半タテミガキ後刺突紋。内面ナナメハケ後ヨコミガキ。	含長石石英	淡黄褐色	P27
甕	106	17.0	4.4	26.2	外面タテハケ後タテミガキ後刺突紋。内面ナナメハケ後ヨコミガキ。	含長石石英	淡黄褐色	P27
甕	107	24.0	—	—	外面タテハケ後下半タテミガキ後刺突紋。内面ナナメハケ後ヨコミガキ。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	P27
甕	108	24.0	—	—	外面タテハケ後下半タテミガキ。内面ナナメハケ後ヨコミガキ。口縁部ヨコナデ	含長石石英角閃石	淡黄褐色	P27
甕	109	24.0	—	—	外面タテハケ後口縁部ヨコナデ。内面ナナメハケ後ヨコミガキ。	含長石石英	橙灰褐色	P27
甕	110	26.0	—	—	外面タテハケ、内面ヨコミガキ後口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰白色	P27
甕	111	18.1	—	—	内外面ヨコナデ後凹線後刻目をめぐらす。	含長石石英	橙灰色	P27
壺	112	28.0	—	—	外面タテハケ後粘土紐貼付し口縁部ヨコナデ後刻目。内面ヨコハケ。	含長石石英	淡橙灰白色	P27
壺	113	16.0	—	—	内外面ヨコナデ後粘土紐貼付し刻目をめぐらす。	含長石石英	橙褐色	P27
高杯	114	20.4	—	—	外面ミガキ、口縁部ヨコナデ。内面ナナメハケ後ヨコミガキ。	含長石石英	淡橙灰白色	P27
高杯	115	—	—	—	外面タテミガキか。内面ミガキ後口縁部付近ヨコナデ	含長石石英	淡灰褐色	P27
高杯	116	—	11.0	—	外面タテミガキ後端部内外はヨコナデ。	含長石石英	淡橙褐白色	P27
底部	117	—	11.2	—	外面タテミガキ後一部ハケ内面タテハケの後ヨコミガキ後タテミガキ。	含長石石英角閃石金雲母	淡褐灰色	P27
底部	118	—	10.1	—	外面タテミガキ、内面ヨコハケ。	含長石石英角閃石	淡褐灰色	P27
底部	119	—	11.0	—	外面タテハケ、内面タテハケ後ヨコミガキ。	含長石石英角閃石	淡黄褐色	P27
鉢	120	38.0	—	—	外面ヨコミガキ後口縁部下刺突紋の後4条の凹線、端部同じく後に棒状浮紋貼付	含長石石英	淡橙灰色	P27
鉢	121	26.0	—	—	外面ヨコミガキ、内面タテハケ後口縁部ヨコナデ後刻目をめぐらす。	含長石石英	淡橙灰白色	P331
脚部	122	—	10.0	—	外面ミガキの後ナデか。円板充填。	含長石石英	淡橙灰色	P331

鉢	123	15.0	—	—	外面タテハケ後下半タテミガキ、口縁部一部刻目、体部刺突紋。内面ハケ。	含長石石英	淡茶灰色	P331
壺	124	17.0	—	—	口縁部外端3条の凹線の後刻目をめぐらす。外面ハケ後内外面ヨコナデ。	含長石英金雲母	淡茶灰色	P356
底部	125	—	8.8	—	外面タテミガキ後下半ヨコナデ。内面タテミガキ。	含長石石英	淡橙灰色	P356
壺	126	17.2	—	—	外面タテハケ、内面ナデ。	含長石石英	淡橙色	P357
甕	127	27.5	5.4	23.9	外面タテハケ後ヨコミガキ後下半タテミガキ後刺突紋内面ヨコミガキ。	含長石石英	淡橙灰色	P376
甕	128	18.5	5.4	26.2	外面タテハケ、下半タテミガキ。内面ミガキ。口縁部ヨコミガキ。	含長石石英	淡灰白色	P376
壺	129	16.3	—	—	外面タテハケ後刻目、粘土紐貼付。内面ナナメハケ後ヨコミガキ。	含長石石英	淡橙灰色	P376
底部	130	—	6.6	—	外面ヨコミガキ、内面放射状のタテハケ。	含長石石英	橙灰色	P376
甕	131	20.0	—	—	外面タテハケ、内面ナナメハケ後ヨコミガキ、口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P376
甕	132	18.0	—	—	外面タテハケ、内面ヨコミガキ、口縁部内外ヨコミガキ。	含長石石英	淡橙灰色	P376
甕	133	26.0	—	—	外面タテハケ後下半タテミガキ後刺突紋をめぐらす。内面ヨコミガキ。	含長石石英	淡橙灰色	P376
底部	134	—	5.0	—	外面タテミガキ、内面ミガキ。	含長石石英	淡橙褐色	P376
甕	135	18.0	—	—	外面タテハケ後タテミガキ内面ナナメハケ後口縁部内外ヨコナデ。	含長石英角閃石	淡橙灰色	P393
甕	136	24.8	—	—	外面タテハケ、内面ナナメハケ後ヨコミガキ	含長石石英	橙灰色	P399
高杯	137	22.0	—	—	外面タテハケ後タテミガキ後口縁部ヨコナデ。内面ヨコミガキ。	含長石石英	淡橙灰色	P403
甕	138	26.0	—	—	外面ナナメハケ後下半タテミガキ後刺突紋。内面ハケ後ヨコミガキ。	含長石石英	淡茶灰色	P405
壺	139	6.4	—	—	外面タテミガキ後ヨコナデ口縁部外面3条の凹線。内面口縁部付近ヨコナデ。	含長石英角閃石	淡橙灰色	P419
甕	140	17.2	5.1	25.4	外面タテハケ後ヨコミガキ下半タテミガキ。内面ヨコミガキ。	含長石石英	淡灰白色	P324
壺	141	16.3	—	—	外面頸部付近ヨコハケ、胴部タテミガキ。内面ヨコハケ、口縁部ヨコナデ。	含長石英角閃石	淡橙灰色	P436
壺	142	12.0	—	—	外面タテハケ、ヨコハケ、口縁部付近2条の凹線。内面ヨコナデ、口縁ハケメ。	含長石石英角閃石	淡橙灰白色	P436
甕	143	—	—	—	外面タテミガキ、内面ナナメハケ後ヨコミガキ。	含長石石英	橙褐色	P440
甕	144	24.0	—	—	外面削り出し凸帯が1条、口縁部刻目をめぐる。	含長石石英	淡橙褐色	包含層
甕	145	28.4	—	—	外面4条のヘラ沈線と口縁部に刻目がめぐる。	含長石石英	淡橙褐色	包含層
甕	146	—	—	—	外面にヘラ沈線と口縁部に刻目がめぐる。	含長石石英	淡橙褐色	包含層
壺	147	14.0	—	—	外面ヘラ沈線、一部ヘラミガキ。内面ミガキ。	含長石石英	橙褐色	包含層
分銅形土製品	148	—	—	—	細かい刺突紋の間に3条の直線紋が施される。	含長石英角閃石	淡褐色	包含層

Ⅲ　古墳時代（図107）

基本的には、6世紀中頃から後半にかけての遺構面である。上面の遺構によりかなり削平を受けてはいるものの、カマドをもつ住居跡も含めて7棟が検出された。住居跡は調査区全体に比較的ランダムに分布し、そのうちカマドの検出されたものが2例あり、その方向は2例とも大体北向きである。

調査区の南東コーナー付近には鉄滓と焼土が多量に出土した土壙が検出され、その周囲には焼土塊が認められた。これらは製鉄に関する遺構と考えられ、調査区の東側からは鉄滓が比較的多く出土しており、調査区外に製鉄をおこなっていたエリアが広がっていく可能性がある。また検出された竪穴住居の埋土からも鉄滓が出土しており、製鉄関連の遺構と竪穴住居が並存していたことは確実である。

この他、断片的ではあるが製塩土器も出土している。製鉄関連の遺構に製塩土器が共伴する例は大阪府大県遺跡(1)や岡山県総社市窪木薬師遺跡(2)などにある。

なお各遺構の時期については、出土した須恵器を指標とし、基本的には田辺編年(3)を用いることとする。

竪穴住居2（図106、107）

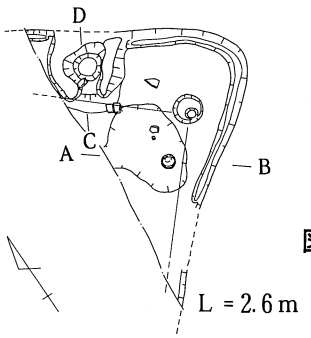


図105　竪穴住居2実測図

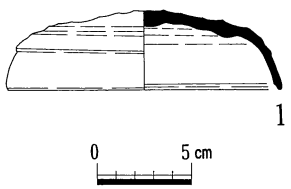


図106　竪穴住居2出土遺物

調査区中央の西側で検出された竪穴住居である。西半は近世の溝により削平されているため全形は不明であるが、南北2.9m以上、東西2.4m以上の方形の平面プランが考えられる。東西方向については、カマドが北壁の中央に付設されたと仮定すると、約3.2mの規模が推定される。柱穴は北東コーナー部で1つ検出され、径約0.28mの円形の掘り方に径約0.12mの柱痕が認められた。壁帯溝は北東コーナー部分と西側で壁部に沿って検出されており、幅0.08～0.15mで、深さは床面から約0.03mである。床面は東側が長径約1m、短径約0.6mの楕円形の範囲で、深さ約0.08mの断面U字形に窪んでいる。床面のレベル高は2.5m付近である。

北壁にはカマドが付設されている。上部は削平されており、下半部のみが残存していた。煙道部は、カマドの背後が近世の遺構により削平されていることもあり検出されなかった。袖部は現状で、幅約0.3m、高さ約0.17mの規模で、黄褐色の砂質土で構築されている。燃焼部は径約0.3mの円形で、焚口にむかって若干床面が高くなっており、燃焼部周囲の袖部は被熱のため赤褐色に硬化変色している。焚口は幅約0.16mで、床面よりも約0.1m高くなっている。

遺物は、全て埋土中から出土した。須恵器の杯蓋は完形で、他に須恵器の甕胴部片と土師器の小片が検出された。土器の他に親指大の鉄滓が1点と、径0.03～0.05mの焼土片が2点出土している。この竪穴住居の時期は杯蓋（1）から、TK10もしくはMT85に比定され、6世紀中葉から後半の時期が考えられる。

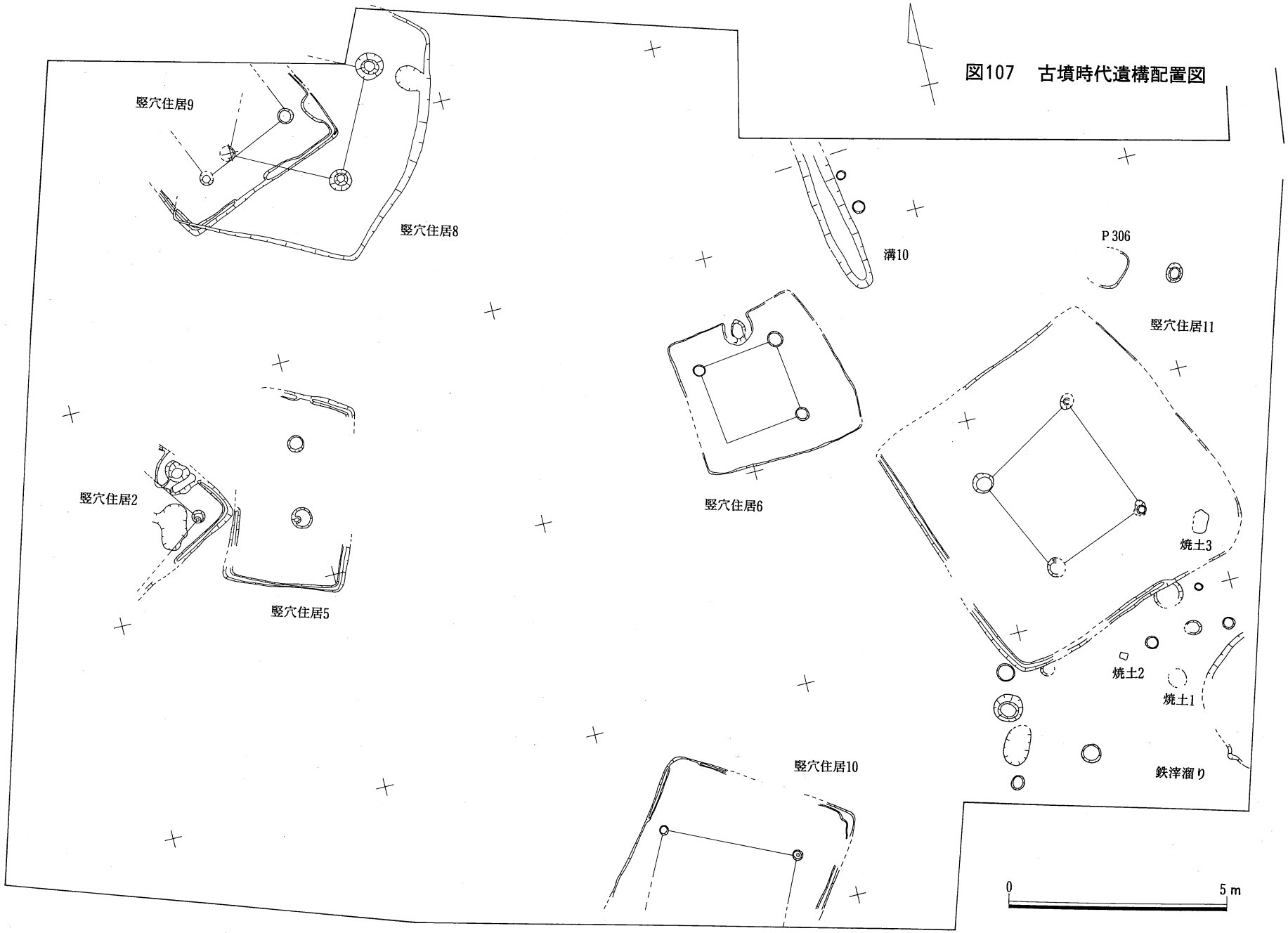


図107　古墳時代遺構配置図

竪穴住居 5（図108）

竪穴住居 2 の東側で検出された。中、近世の遺構によりかなり削平されているが、東西約2.8m、南北約4.4mの長方形の平面プランと考えられる。柱穴は 2 つ検出されており、東西方向に中央付近で並ぶことから、この竪穴住居は 2 本柱であったと推定される。北側の柱穴は径約0.34m、床面からの深さは約0.6mで柱痕跡は検出されなかった。南側の柱穴は径約0.32m、床面からの深さは約0.48mで、径約0.08mの柱痕跡が認められた。部分的にとぎれるものの壁部周囲には幅0.08～0.14m、床面からの深さ約0.08mの壁帯溝が認められた。床面はほぼ平坦で、レベル高は2.5m付近である。埋土は基本的に 3 ～ 4 層で、レンズ状に堆積している。

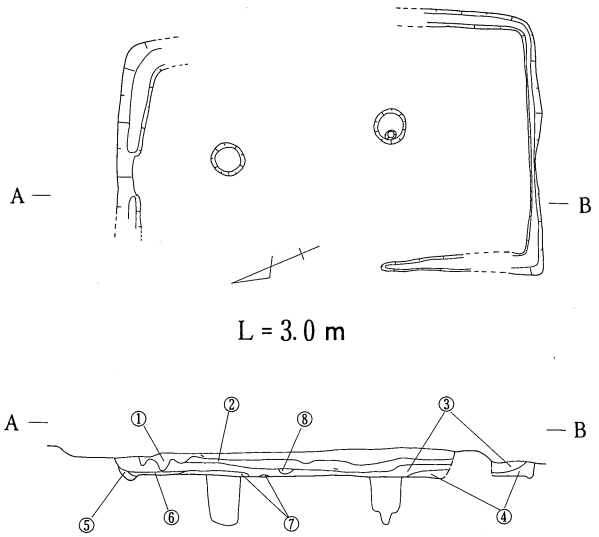


図108　竪穴住居 5 実測図

遺物は土師器の小片が埋土中から若干検出されただけで、須恵器は認められなかった。時期を明確に示す遺物が検出されなかったため詳細な時期はよくわからないが、他の竪穴住居よりも時期的に溯る可能性もある。しかし、調査区からは古墳時代前期の遺物はほとんど出土しておらず、この竪穴住居は前期までは溯らない可能性が高いと思われる。

竪穴住居 6（図109、110）

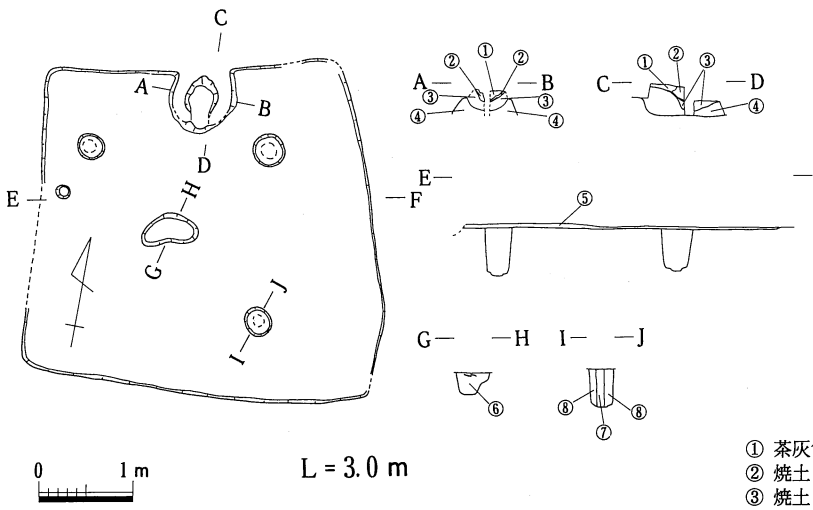


図109　竪穴住居 6 実測図

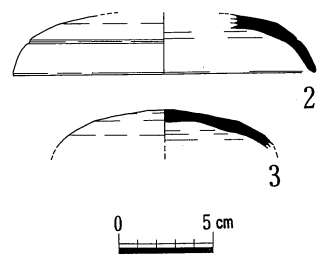


図110　竪穴住居 6 出土遺物

① 茶灰色土（含焼土）
② 焼土
③ 焼土
④ 黄茶褐色
⑤ 暗褐灰色土
⑥ 淡灰色土（含炭）
⑦ 灰褐色土
⑧ 黄褐色土

調査区中央付近で検出された竪穴住居で、東西3.2～3.6m、南北3.2～3.6mの方形の平面プランである。柱穴は3つ検出されており、1つは中、近世の遺構により削平を受けたため残存していなかったが、本来は4本柱であったと推定される。北西部の柱穴は径約0.24m、床面からの深さは約0.48mで、径約0.16mの柱痕跡が認められた。北東部の柱穴は径約0.22m、床面からの深さは約0.43mで、径約0.16mの柱痕跡が認められた。南東部の柱穴は径約0.24m、床面からの深さは約0.40mで、径約0.10mの柱痕跡が認められた。北西部と北東部の柱穴間の芯々間距離は約1.9m、北東部と南東部の柱穴間の芯々間距離は約1.8mである。この他中央付近で長径約0.56m、短径約0.3mの楕円形のピットが検出されたが、この住居に確実に伴うかどうかはよくわからない。壁帯溝は検出されなかった。床面のレベル高は2.5m付近である。

北壁にはカマドが付設されており、上部は削平され、下半部のみが残存していた。煙道部は残存していなかったため不明である。袖部は現状で、幅約0.2m、高さ約0.16mの規模で、黄茶褐色の砂質土で構築されている。燃焼部周囲の袖部は被熱のため赤褐色に硬化変色している。燃焼部は径約0.3mの円形で、床面は平坦になっており、燃焼部の埋土には焼土塊が多量に認められ、天井壁が陥没したものと考えられる。焚口は幅が約0.24mで、床面よりも若干高くなっている。

遺物は床面付近の埋土中から須恵器の杯蓋片2点と、土師器の小片が若干出土した。図化できたのは須恵器の杯蓋2点だけであった。杯蓋（2）は天井部と体部の境界に沈線が認められるものの、境界の稜は明確でなく、端部にも明確な稜がない。杯蓋（3）は天井部付近の破片で、天井部と体部の境界は明確ではなくなっている。土器の他に径約6㎝の鉄滓が1点出土している。この竪穴住居の時期は2点の杯蓋から、TK43に比定され、6世紀後半の時期が考えられる。

竪穴住居8（図111、112）

調査区北西部コーナー付近で検出された竪穴住居で、西側は近世の遺構により削平されているが、東

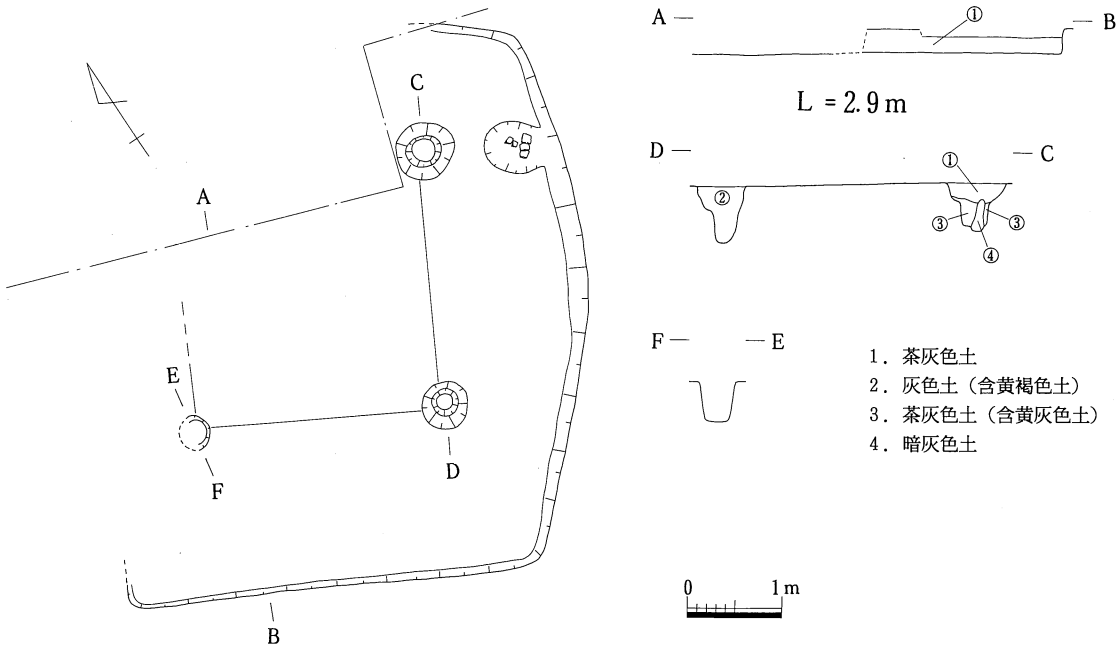


図111　竪穴住居8実測図

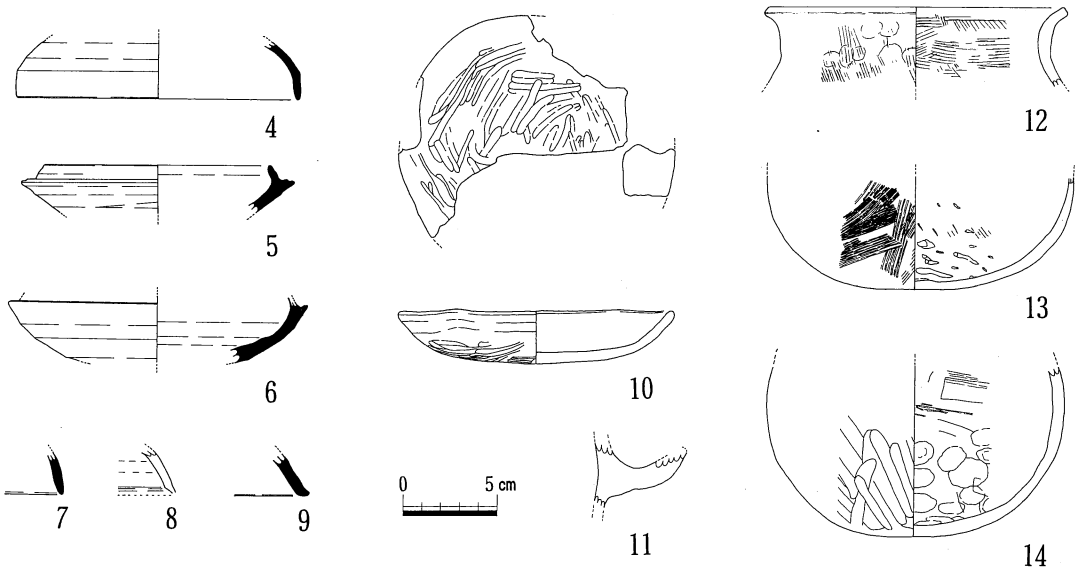


図112　竪穴住居８出土遺物

西約4.4m、南北約5.7mの長方形の平面プランである。柱穴は３つ検出されており、１つは調査区外に存在すると推定されるため、柱構成は４本柱であったと考えられる。北東部の柱穴は径約0.56m、床面からの深さは約0.56mで、径約0.16mの柱痕跡が認められた。南西部の柱穴は径約0.36m、床面からの深さは約0.43mで、柱痕跡は検出されなかった。南東部の柱穴は径約0.48m、床面からの深さは約0.56mで、径約0.24mの柱痕跡が認められた。北東部と南東部の柱穴間の芯々間距離は約2.6m、南西部と南東部の柱穴間の芯々間距離は約2.6mで、ほぼ正方形の柱構成となる。床面はほぼ平坦で、レベル高は2.5m付近である。カマドは調査範囲の中では検出されなかったが、北壁もしくは西壁に存在している可能性が高い。

遺物は、床面付近の埋土中から須恵器や土師器が比較的まとまって出土した。土師器には丸底の壺と口縁部片、平面形が隅丸方形になる鉢がある。須恵器は杯蓋と杯身の破片が出土している。このうち杯身（５）は口径が小さく、立ちあがりも低く内傾する傾向にあり、他の須恵器と比べ若干後出すると思われる。須恵器の杯蓋には（８）のように端部に稜が明確に認められるものもあるが、これは小片で、（４）のように端部を丸くおさめ天井部と体部の境界が明確でないものが主体である。この竪穴住居の時期は須恵器の杯蓋（４）と杯身（６）がＴＫ43、杯身（５）がＴＫ209に比定され、６世紀後半から末の時期が考えられる。

竪穴住居９（図113、114）

竪穴住居８に上面を削平されており、竪穴住居８の床面を精査していて検出された。北半は調査区外へ出るため、ほぼ1／2を調査したことになる。南壁の長さは約4.2mで、方形もしくは長方形の平面プランが推定される。柱穴は２つ検出されているが、基本的には４本柱で構成されているものと思われる。西部の柱穴は径約0.24m、床面からの深さは約0.4mで、東部の柱穴は径約0.32m、床面からの深さは約0.18mで、双方とも柱痕跡は検出されなかった。東部と西部の柱穴間の芯々間距離は約2.3mである。壁帯溝は南壁中央付近でとぎれているものの、調査できた部分をほぼ全周し、東側で若干広がる。幅0.16～0.25mで、床面からの深さは約0.07mである。床面はほぼ平坦で、レベル高は2.45m付近である。

カマドは検出されなかったが、東西壁もしくは北壁に付属している可能性が高い。　遺物は、床面付近の埋土中から須恵器の破片と土師器の小片が若干出土した。図化できたのは須恵器杯身１点と製塩土器１点だけである。須恵器杯身は、立ちあがりが低いもののそれ程内傾しないといった特徴が看取される。製塩土器は口縁部付近の小片ではあるが、外面にタタキが明瞭に認められる。この竪穴住居の時期は須恵器杯身からＴＫ43に比定され、６世紀後半の時期が考えられる。

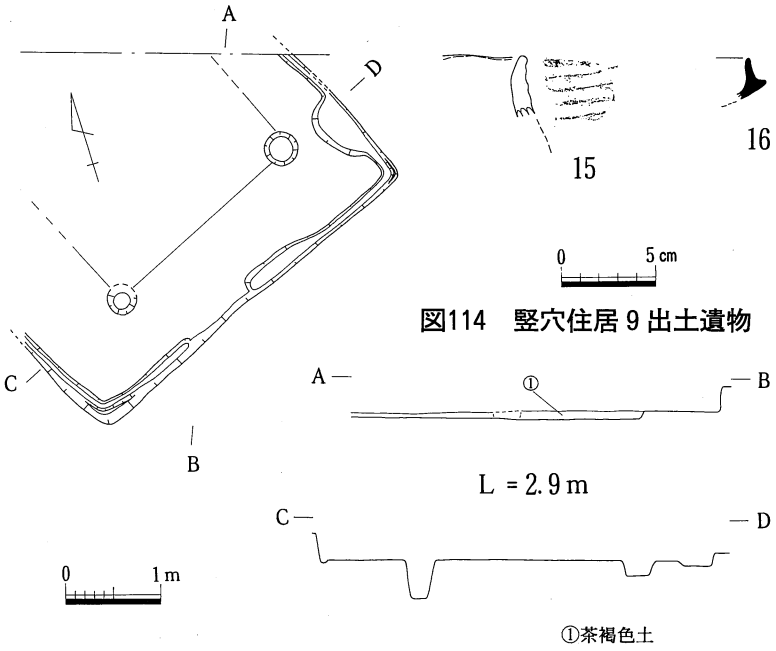


図114　竪穴住居９出土遺物

図113　竪穴住居９実測図

竪穴住居10（図115、116）

調査区中央南端付近で検出された竪穴住居で、中央部は古代の遺構により削平されており、南半は調

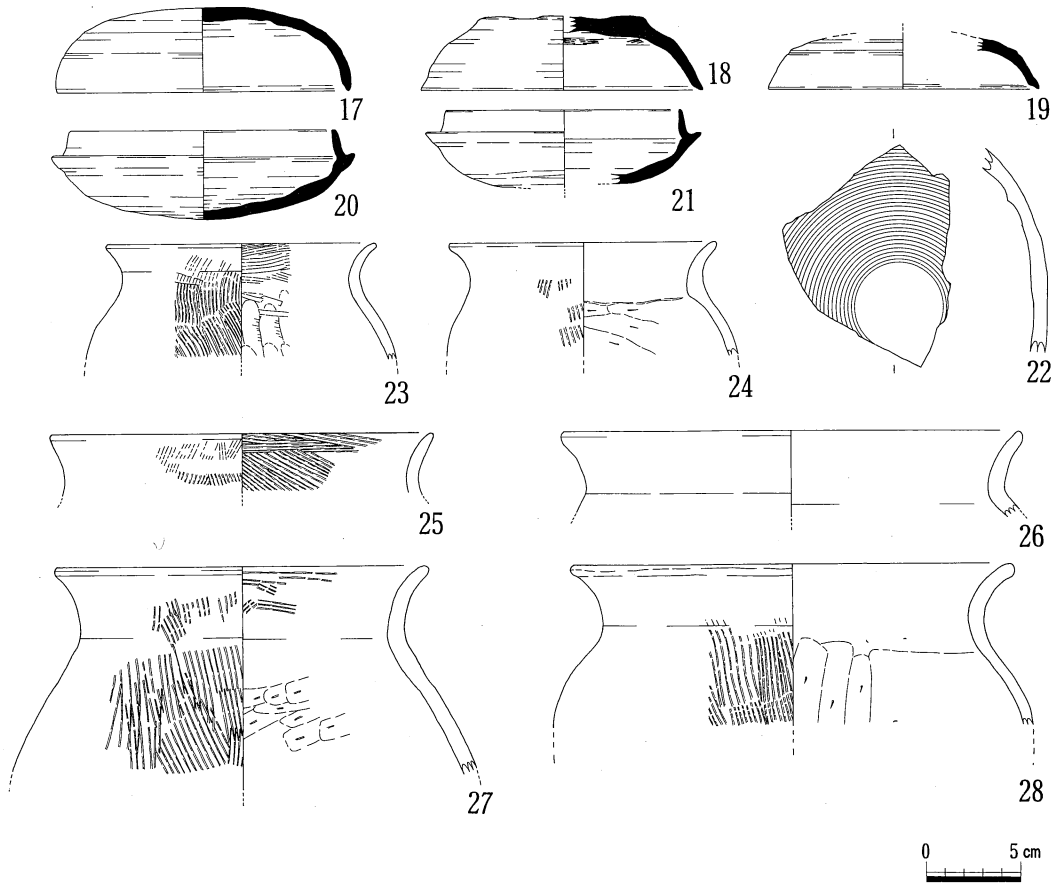


図115　竪穴住居10出土遺物

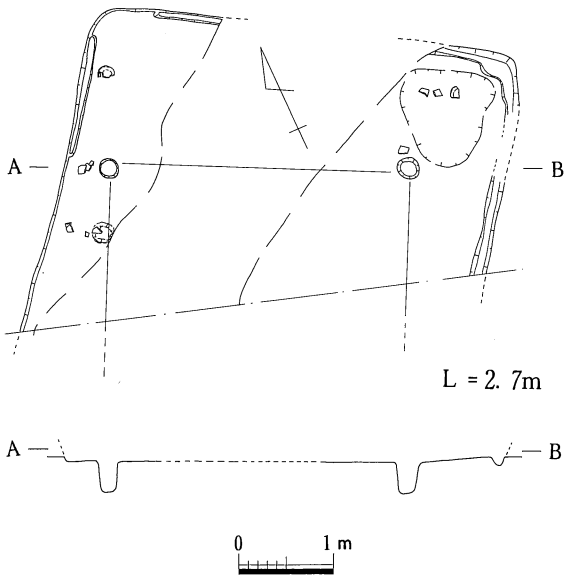


図116　竪穴住居10実測図

査区外へ出てしまうため全形は不明である。北壁の長さは約4.6mで、方形もしくは長方形の平面プランが推定される。柱穴は2つ検出されているが、基本的には4本柱で構成されているものと考えられる。西部の柱穴は径約0.24m、床面からの深さは約0.32m、東部の柱穴は径約0.24m、床面からの深さは0.32mで、双方とも柱痕跡は検出されなかった。東部と西部の柱穴間の芯々間距離は約3.2mである。西壁には長さ約1.2m、幅約0.08mと、北壁から東壁にかけては床面からの深さが約0.08mの壁帯溝が検出された。床面はほぼ平坦で、レベル高は2.6m付近である。北東コーナー付近に、円形に若干窪む部分も認められる。カマドは検出されなかったが、どの壁面も完全に把握する程は検出できていないため、その有無は不明である。

遺物は床面上で全て出土した。須恵器は杯身、杯蓋と提瓶の破片、土師器は甕の口縁部付近の破片が6点出土した。土器以外に径0.03～0.1 mの大きさの焼土塊が10点出土した。須恵器の杯蓋は端部に稜が認められるものの、天井部と体部の境界は明確ではない。杯身は、端部を丸くおさめるものの、立ちあがりは比較的しっかりしている。この竪穴住居の時期は須恵器杯身、杯蓋からおおむねＴＫ43に比定され、6世紀後半の時期が考えられる。

竪穴住居11（図117、118）

調査区東側で検出された竪穴住居で、中、近世の遺構によりかなり削平を受けているが、かろうじて全形が把握できた。南北の長さ約6.4m、東西の長さ6.2～6.4mの方形の平面プランである。柱穴は4つ検出されている。北西部の柱穴は径約0.48m、床面からの深さは約0.32mで、柱痕跡は認められなかった。北東部の柱穴は径約0.3m、床面からの深さは約0.24mで、径約0.1mの柱痕跡が認められた。南東部の柱穴は径約0.16m、床面からの深さは約0.24mで、柱痕跡は認められなかった。南西部の柱穴は径約0.48m、床面からの深さは約0.32mで、同じく柱痕跡は認められなかった。南西部と北西部の柱穴間の芯々間距離は約2.6m、北東部と南東部の柱穴間の芯々間距離は約2.9m、北東部と北西部の柱穴間の芯々間距離は約2.6m、南東部と南西部の柱穴間の芯々間距離は約2.24mである。南壁と西壁には幅約0.17m、床面からの深さ約0.05mの壁帯溝が認められた。床面は比較的平坦で、レベル高は2.6m付近である。周囲の壁面や内部はかなり削平を受けていることから、カマドは検出することができなかった。

遺物は埋土中から、須恵器と土師器が若干出土した。全て小片で、全形の推定できるのは須恵器の杯蓋2点と杯身1点だけであった。杯蓋（30）は端部に明瞭な稜線が認められるが、杯蓋（29）は端部の稜線は退化気味である。杯蓋（29）の天井部と体部の境界は段状の沈線が認められるものの、その境界は不明瞭になりつつある。杯身（31）はかなり小片であるため、復原された口径については多少明確さを欠くものであるが、たちあがりがやや低くなりつつある。土器の他に径3～4の㎝鉄滓が2点出土している。この竪穴住居の時期は、須恵器の杯蓋（30）がＴＫ10に、杯蓋（29）がＴＫ10からＭＴ85に、杯身（31）がＴＫ43に比定され、6世紀後半前後の時期が考えられる。

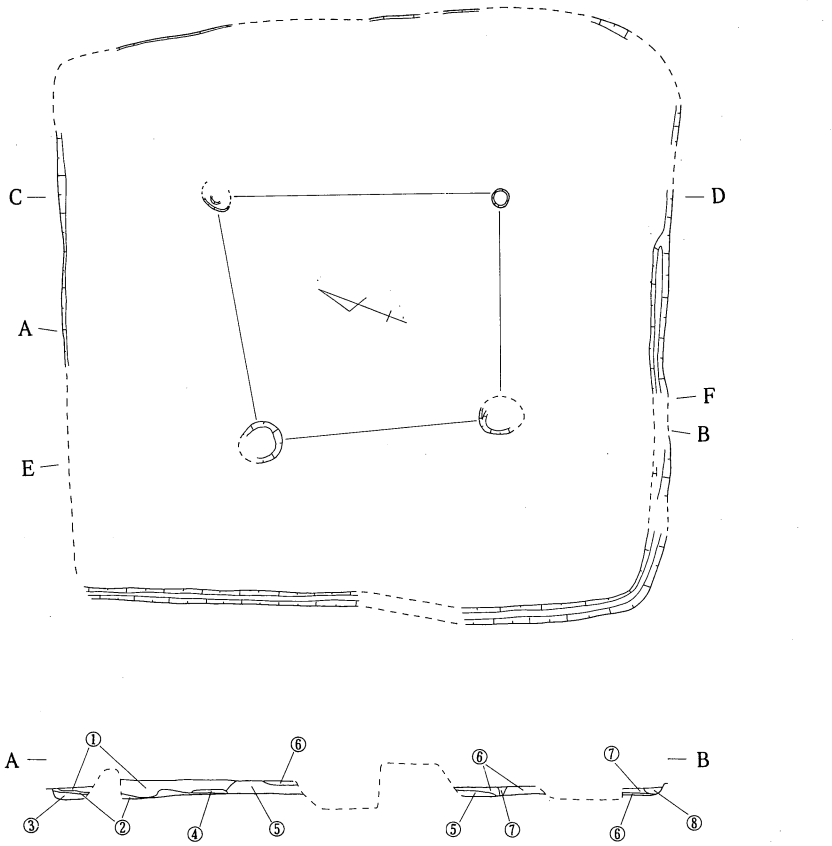


図117　竪穴住居11実測図

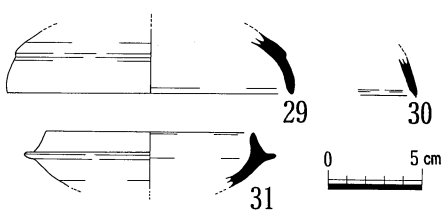


図118　竪穴住居11出土遺物

P306（図119、120）

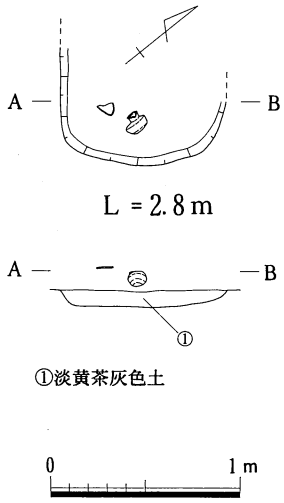


図119　P306実測図

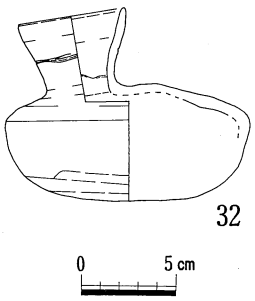


図120　P306出土遺物

竪穴住居11の北側で検出された土壙で、西半については古代の遺構により削平されている。１辺0.8m程の隅丸方形の平面プランが推定される。断面形は逆台形で、北側の方がやや傾斜角度が緩い傾向にある。埋土は１層だけであった。遺構の検出面は2.7m付近であるが、遺物はそれよりも上で検出されており、本来の遺構面は検出面よりも上であったと考えられる。

遺物は須恵器の平瓶の完形品が１点と、同じく須恵器の甕の胴部片が１点出土した。この遺構の時期は平瓶からＴＫ209に比定され、６世紀末の時期が考えられる。

溝10（図121、122）

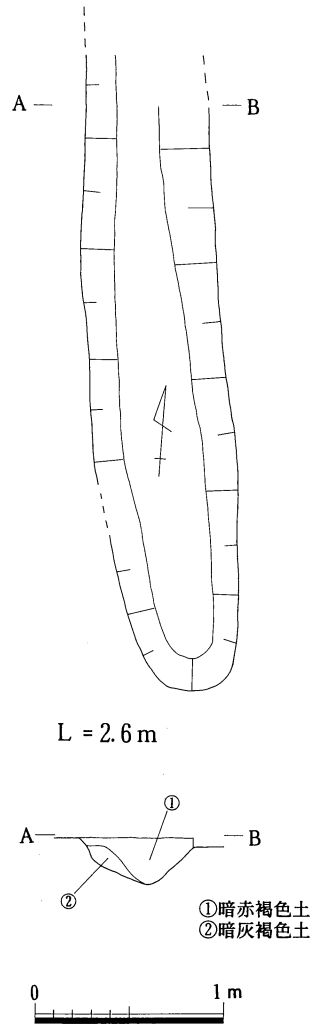


図121　溝－10 実測図

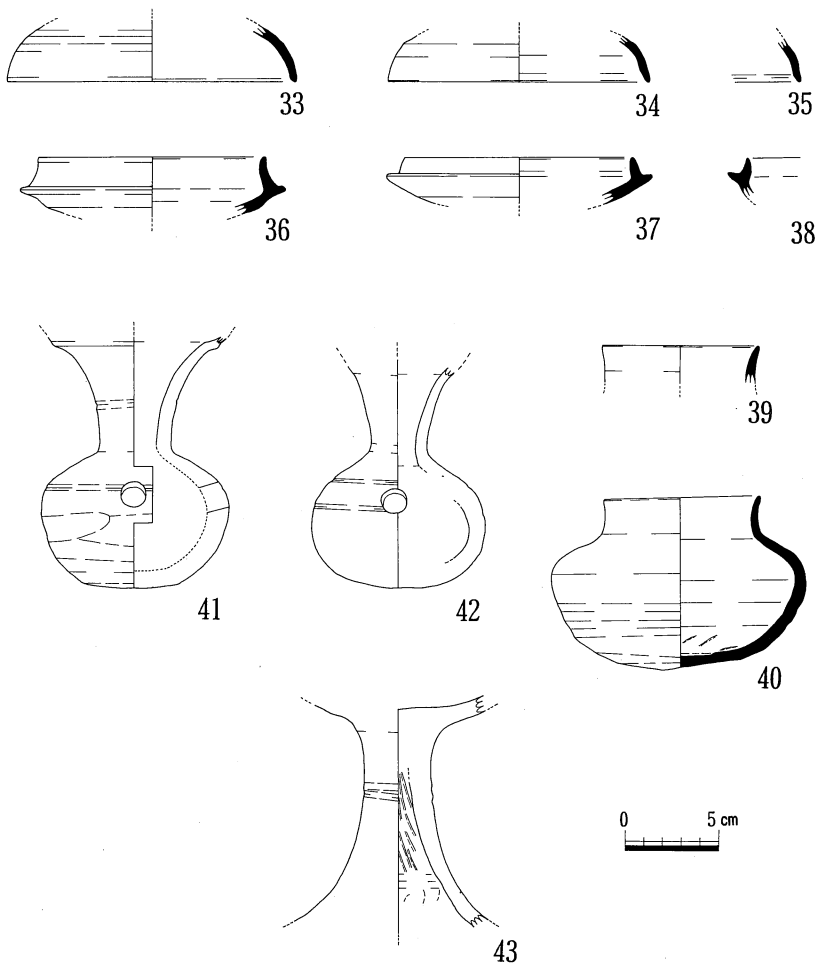


図122　溝－10 出土遺物

調査区北東部付近で検出された溝状の遺構であるが、南端でとぎれることから長楕円形の土壙である可能性もある。幅約0.8mで、長さは3.4mまで検出できた。検出面は2.6m付近で、検出面からの深さは約0.3mである。断面形はU字形であるが、部分的にV字形になる。埋土は基本的には1層で、それ程時間を経ずに埋没したものと推定される。

遺物は全て埋土中から出土しており、ほぼ完形のはそうや短頸壺がある。この遺構の時期は、出土した須恵器の一部にやや古い様相が認められるものの、基本的にはTK43に比定され、6世紀後半の時期が考えられる。

鉄滓溜まり（図123、124）

調査区南東部のコーナー付近で検出された土壙で、東側は調査区外へ出るため不明である。調査区内では長さ約3mで、外周のプランは緩やかな弧を描いており、円形もしくは楕円形の平面プランが推定される。遺構検出面は2.8m付近であるが、遺構のプランよりも鉄滓の方が先に検出された。深さは検出面から約0.04mで、底部はほぼ平坦である。遺構の中央から南端にかけて鉄滓と焼土が多量に認められ、それらは遺構の南半で約0.3mとぎれることから、土壙の中でもいくつかの単位に分かれるのかもしれない。鉄滓と焼土に混じって角礫もいくつか認められる。鉄滓は3.2kg出土した。この鉄滓は分析の結果、鉱石系の鍛冶滓と製鉄

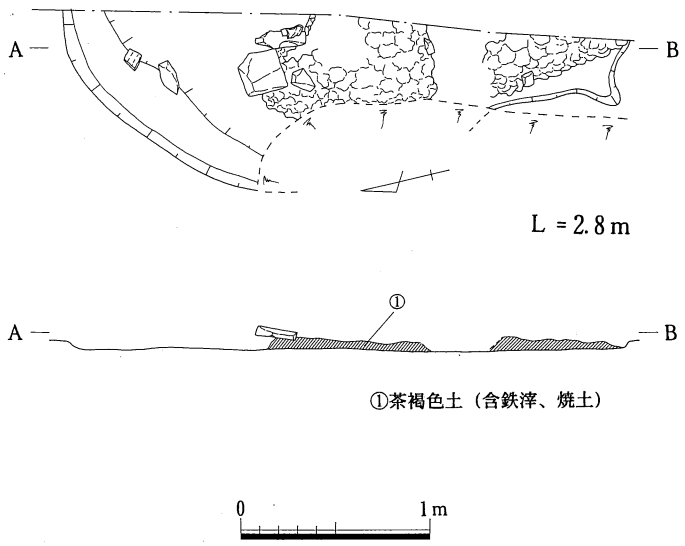


図123　鉄滓溜り実測図

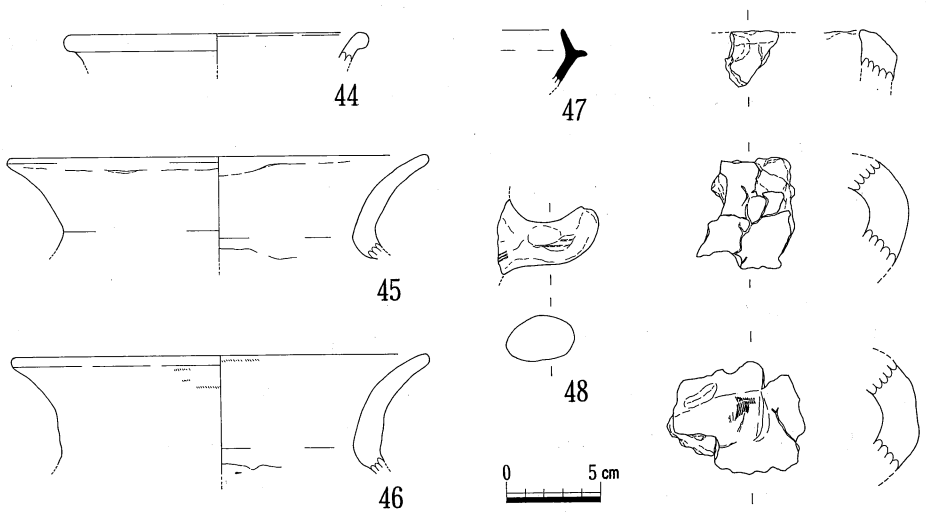


図124　鉄滓溜り出土遺物

炉片であるとされ、付近で製錬と鍛冶がおこなわれていたことが推定されている（附章Ⅳ参照）。この遺構の周囲で検出された焼土塊などは、これらの鉄滓と関係する鍛冶炉である可能性も推定される。

鉄滓の他にフイゴ羽口が５点出土しており、それらは外面が被熱のために青灰色に変色していたり鉄滓が付着していたりする。全形のわかるものはないが、筒状のものであったと思われる。

土器は、須恵器と土師器の破片が埋土中で若干出土している。須恵器は広口壺の口縁部片と杯身の破片で、小片のため明確ではないものの杯身の立ちあがりがそれ程内傾しておらず、退化傾向にもないことからＴＫ43に比定される。したがってこの遺構は、６世紀後半の可能性が推定される。

焼土１、２、３（図125）

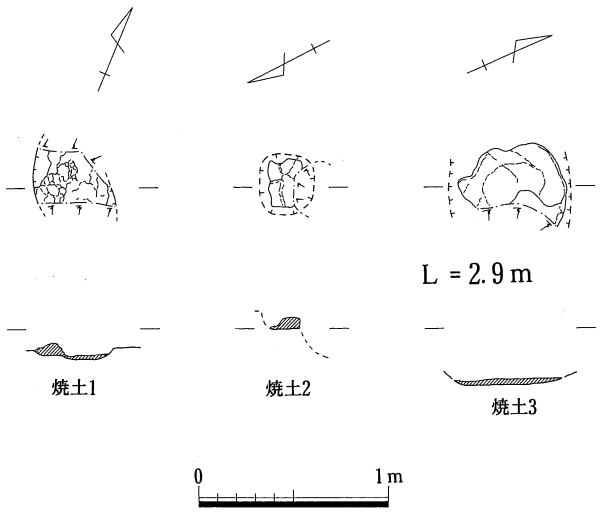


図125　焼土１・２・３ 実測図

鉄滓溜まりの西側で検出されたもので、いずれも古代や中、近世の遺構により削平を受けており、全形を検出できたものはない。焼土１は長径0.28ｍ以上、短径約0.4ｍの楕円形の平面プランをした窪み状の土壙の中央付近に、長さ約0.36ｍの焼土塊が認められる。断面形は緩やかなカーブを描く。

焼土２は長径約0.32ｍ、短径約0.28ｍの楕円形の平面プランが推定される窪み状の土壙の中央付近に、長さ約0.28ｍ、幅約0.2ｍの方形の焼土塊が認められる。焼土塊の底部は平坦である。

焼土３は、竪穴住居11の埋土上面を削平して形成されている。幅約0.64ｍの窪み状の土壙に、長さ約0.5ｍ、幅約0.36ｍの焼土塊が認められ、底部は緩やかな弧状を呈する。

これらの焼土は中央付近が橙灰色に硬化しており、かなりの高温が加わったことを示している。いずれの焼土にも遺物は伴っていなかったが、焼土１、２は奈良時代の遺構により削平されており、焼土３は６世紀後半の竪穴住居を削平していることから、これらの焼土は６世紀後半から８世紀の間にその時期が求められる。しかし、近接する鉄滓溜まりには鍛冶滓も確認されており、この焼土の周辺に鉄滓が比較的多く出土したことからも、これらの焼土が鍛冶炉であった可能性が推定される。したがってこれらの焼土は、鉄滓溜まりの時期と同じ６世紀後半と一応推定しておく。

包含層（図126）

当調査区内では、近世から縄文時代晩期までの包含層が重層的に存在しており、それらを時期ごとに分離して遺物を取り上げることはできなかった。しかし、竪穴住居10の北側では鉄滓が比較的まとまって出土（2.2kg）しており、その周辺から出土した土器は極めて少量で、しかも小片であったが古墳時代後期に属する須恵器、土師器と考えられるものばかりであった。その中に製塩土器が１点（49）含まれており、口縁部外面に平行タタキが認められ、口縁部が

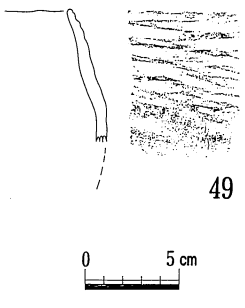


図126　包含層出土遺物

内傾することから備讃瀬戸に一般的に分布する師楽式土器(4)に比定され、当遺構面の時期とも矛盾しない。

注

（1）北野重「柏原市所在の製鉄関連遺跡」『河内・大県遺跡周辺の鉄・鉄器生産の検討』古代を考える會 1991年

（2）島崎東「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86　1993年

（3）田辺昭三『陶邑古窯址群』平安学園考古学クラブ　1966年
田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年

（4）近藤義郎『土器製塩の研究』青木書店　1984年

出土土器観察表

器形	土器番号	法量（cm）			形態・調整手法の特徴	胎土	色調	遺構
		口径	底径	器高				
須恵器杯蓋	1	14.4	—	4.2	外面天井部ケズリ、内外面口縁部付近ヨコナデ	含長石石英	淡灰色	住２埋土
須恵器杯蓋	2	—	—	—	外面天井部ケズリ、外面口縁部付近、内面ナデ	含長石石英	淡灰褐色	住６埋土
須恵器杯蓋	3	16.0	—	—	外面天井部ケズリ、外面口縁部付近ナデ、内面ヨコナデ	含長石石英	灰褐色	住６埋土
須恵器杯蓋	4	14.8	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	暗灰色	住８埋土
須恵器杯身	5	11.9	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	暗青灰色	住８埋土
須恵器杯身	6	—	—	—	外面底部ケズリ、外面受部付近、内面ヨコナデ、受部に重ね焼の痕跡有	含長石石英	暗灰色	住８埋土
須恵器杯蓋	7	—	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	暗灰色	住８埋土
須恵器杯蓋	8	—	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	灰色	住８埋土
須恵器高杯	9	—	—	—	内外面ヨコナデ、内面に自然釉付着	含長石石英	暗灰色	住８埋土
土師器皿	10	7.2	—	2.9	外面ヨコナデ後底部付近不定方向のミガキ、内面ヨコナデ及びナデ	含長石石英角閃石	淡橙褐色	住８埋土
土師器把手	11	—	—	—	外面押圧痕後上部ナデ、内面ケズリ	含長石石英	淡橙褐色	住８埋土
土師器甕	12	15.6	—	—	外面タテハケ後頸部以上ヨコナデ、内面ナデ後ヨコハケ一部タテハケ	含長石石英角閃石	淡橙褐色	住８埋土
土師器甕	13	—	—	—	外面不定方向のハケ後底部ナデ、内面ケズリ？	含長石石英角閃石	暗褐色	住８埋土
土師器甕	14	—	—	—	内外面板状工具によるナデ、外面底部ユビナデ、内面底部付近に押圧痕	含長石石英角閃石	淡橙褐色	住８埋土
須恵器杯身	15	—	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡灰色	住９埋土
須恵器杯身	16	—	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡灰色	住９埋土
須恵器杯蓋	17	15.4	—	4.5	外面天井部ケズリ、内外面口縁部付近ヨコナデ、内面天井部ナデ	含長石石英	淡青灰色	住10埋土
須恵器杯蓋	18	14.9	—	—	外面天井部ケズリ、口縁部付近ナデ、内面天井部タタキ後ナデ	含長石石英	淡灰色	住10埋土
須恵器杯蓋	19	14.4	—	—	外面天井部ケズリ、外面口縁部ナデ	含長石石英	淡灰白色	住10埋土
須恵器杯身	20	14.1	—	4.7	外面底部ケズリ後ナデ、内面ナデ	含長石石英	淡灰色	住10埋土
須恵器杯身	21	12.4	—	—	外面底部ケズリ、外面受部以上ヨコナデ、内面ヨコナデ	含長石石英	淡灰褐色	住10埋土
須恵器提瓶	22	—	—	—	外面カキ目	含長石石英	淡灰褐色	住10埋土
土師器甕	23	14.2	—	—	外面タテハケ後口縁部付近ヨコナデ、内面ヨコハケ後頸部より下ユビナデ	含長石石英	橙灰色	住10埋土
土師器甕	24	14.0	—	—	外面タテハケ後頸部以上ナデ、内面頸部より下ケズリ頸部以上ナデ	含長石石英	淡茶橙褐色	住10埋土
土師器甕	25	20.0	—	—	外面タテハケ後口縁部付近ナデ、内面ヨコ、ナナメハケ	含長石石英	鈍橙色	住10埋土
土師器甕	26	25.0	—	—	内面ヨコナデ	含長石石英	淡褐灰色	住10埋土
土師器甕	27	19.4	—	—	外面タテハケ、内面口縁部付近ヨコハケ後内外面ヨコナデ、内面胴部ケズリ	含長石石英角閃石	鈍橙色	住10埋土
土師器甕	28	23.0	—	—	外面頸部以下タテハケ後内外面頸部以上ヨコナデ、内面胴部タテヘラナデ	含長石石英	橙褐色	住10埋土
須恵器杯蓋	29	15.1	—	—	外面天井部ケズリ後内外面ヨコナデ	含長石石英	青灰色	住11埋土
須恵器杯身	30	11.0	—	—	外面底部ケズリ後内外面ヨコナデ	含長石石英	灰白色	住11埋土
須恵器杯蓋	31	—	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡灰褐色	住11埋土
須恵器平瓶	32	5.7	4.8	10.3	底部ケズリ後内外面ヨコナデ	含長石石英	灰褐色	P 306 埋
須恵器杯蓋	33	15.3	—	—	外面天井部ケズリ後内外面ヨコナデ外面天井部ケズリ後内外面ヨコナデ	含長石石英	青灰褐色	溝10埋土
須恵器杯蓋	34	14.0	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	青灰褐色	溝10埋土
須恵器杯蓋	35	—	—	—	外面底部ケズリ後内外面ヨコナデ	含長石石英	青灰色	溝10埋土
須恵器杯身	36	12.2	—	—	外面底部ケズリ後内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	溝10埋土
須恵器杯身	37	12.2	—	—	内外面ヨコナデ、底部外面に自然釉付着	含長石石英	淡青灰色	溝10埋土
須恵器杯身	38	—	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	青灰色	溝10埋土
須恵器短頸	39	8.2	—	—	外面底部ケズリ、内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	溝10埋土
須恵器短頸壺	40	8.2	—	—	外面下半ケズリ後ヨコナデ	含長石石英	灰褐色	溝10埋土
須恵器鉢	41	—	2.0	—	自然釉付着、内面ヨコナデ	含長石石英	淡灰褐色	溝10埋土
須恵器鉢	42	—	2.1	—	外面下半ナデ、内外面ヨコナデ	含長石石英	淡青灰色	溝10埋土
須恵器高杯	43	—	—	—	脚部内面ケズリ、指圧痕後ヨコナデ、杯部内面ナデ、外面ヨコナデ	含長石石英	灰白色	溝10埋土
土師器長頸	44	15.0	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	淡黄橙白色	鉄滓だまり
土師器甕	45	21.8	—	—	内外面頸部ナデ後頸部以上ヨコナデ	含長石石英角閃石	黄橙灰色	鉄滓だまり
土師器甕	46	21.6	—	—	内面頸部ケズリ後ナデ、内外面口縁部付近タテハケ後ヨコナデ	含長石石英角閃石	橙灰色	鉄滓だまり
須恵器杯身	47	—	—	—	内外面ヨコナデ	含長石石英	灰褐色	鉄滓だまり
土師器把手	48	—	—	—	外面ヨコハケ後ユビナデ、内面ケズリ	含長石石英角閃石	淡橙灰色	鉄滓だまり

Ⅳ　奈良・平安時代前半（図128）

中心は奈良時代である。調査区を斜方向に横切る2本の溝の両脇に建物が2群検出された。建物は2度の建替えが認められる。建替えられた建物は若干軸方向をずらしており、それが溝を挟んだ両群の建物で同様に認められることから、建物の建替えは個別的に行われたというのではなく、当該期の吉野口遺跡全体の様相とも推定される。建物のうち、建て替えられた北側のものは柱穴に焼土が多く認められることから、火災を被った可能性があり、溝中より出土した土器にも被熱の認められるものがある。この他非常に小さい竪穴住居状遺構があり、その方向性から最初の建物に伴うものと思われる。溝と建物の関係については、建物に伴う遺物は僅かであるが、それらと溝の遺物とには時期差は殆ど認められず、建物は比較的短期間に建替えられ、溝は建物と平行して存在していたと考えられる。また、溝についても、出土した土器や検出状況から2本が同時に存在していたと考えられる。そして、溝中から瓦は一片も出土しておらず、溝間は築地塀などではなく、通路あるいは道路として用いられていた可能性が高い。

平安時代前半の遺構は調査区中央の土壙が1つだけで、他にはない。奈良時代の溝の埋土上方から同期に属する土器が数点出土しているが、これは溝廃絶後に窪み状となった部分に堆積したものと考えられる。

建物2（図127、129）

調査区北西で検出された掘立柱建物で、西側については近世の溝により削平されているため、建物全体の規模は明らかではない。柱穴の掘り方は平面形が方形で、一辺0.7～0.9mの規模、柱痕跡は径約0.2m程で、建物3と比べるとやや小さい。現状で、桁行2間以上、梁間2間の柱構成で、棟方向はN－64°－Eを示す。平面形は整った長方形を呈している。遺構の検出面は高いところで2.85m付近で、底レベルは2.2m前後である。柱穴の埋土には若干炭や焼土の認められる部分もあるが、建物3と比べると非常に少ない。

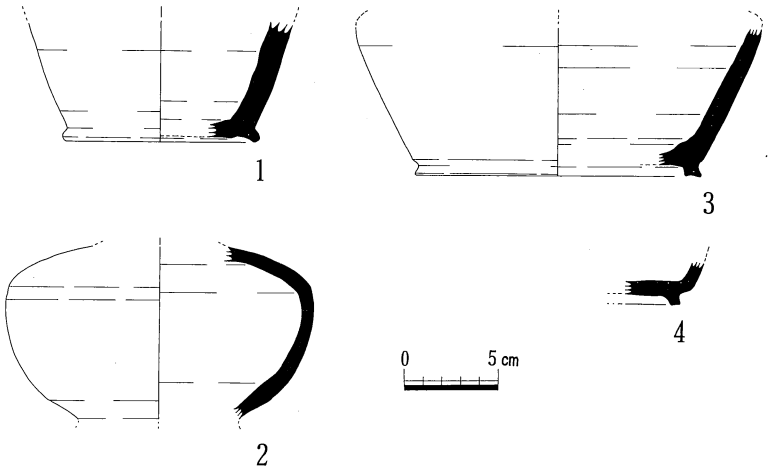


図127　建物柱穴出土遺物

遺物は各柱穴から出土しているが、細片ばかりで、図化できたものはP－Aから出土した壺（2）だけであった。

建物3（図128、130）

建物2を建替えたと考えられる掘立柱建物で、西側については近世の溝により削平されているため、建物全体の規模は明らかではない。柱穴の掘り方は平面形が方形で、一辺0.7～1mの規模、柱痕跡は径約0.25mである。一部の柱穴には柱を抜き取った痕跡の認められるものがある。現状で、桁行2間以上、梁間2間の柱構成で、棟方向はN－74°－Eを示す。平面形は整った長方形を呈している。遺構の検出面は2.9m付近で、その底レベルは2.1m前後である。埋土で特筆すべきは、多量の焼土が含まれて

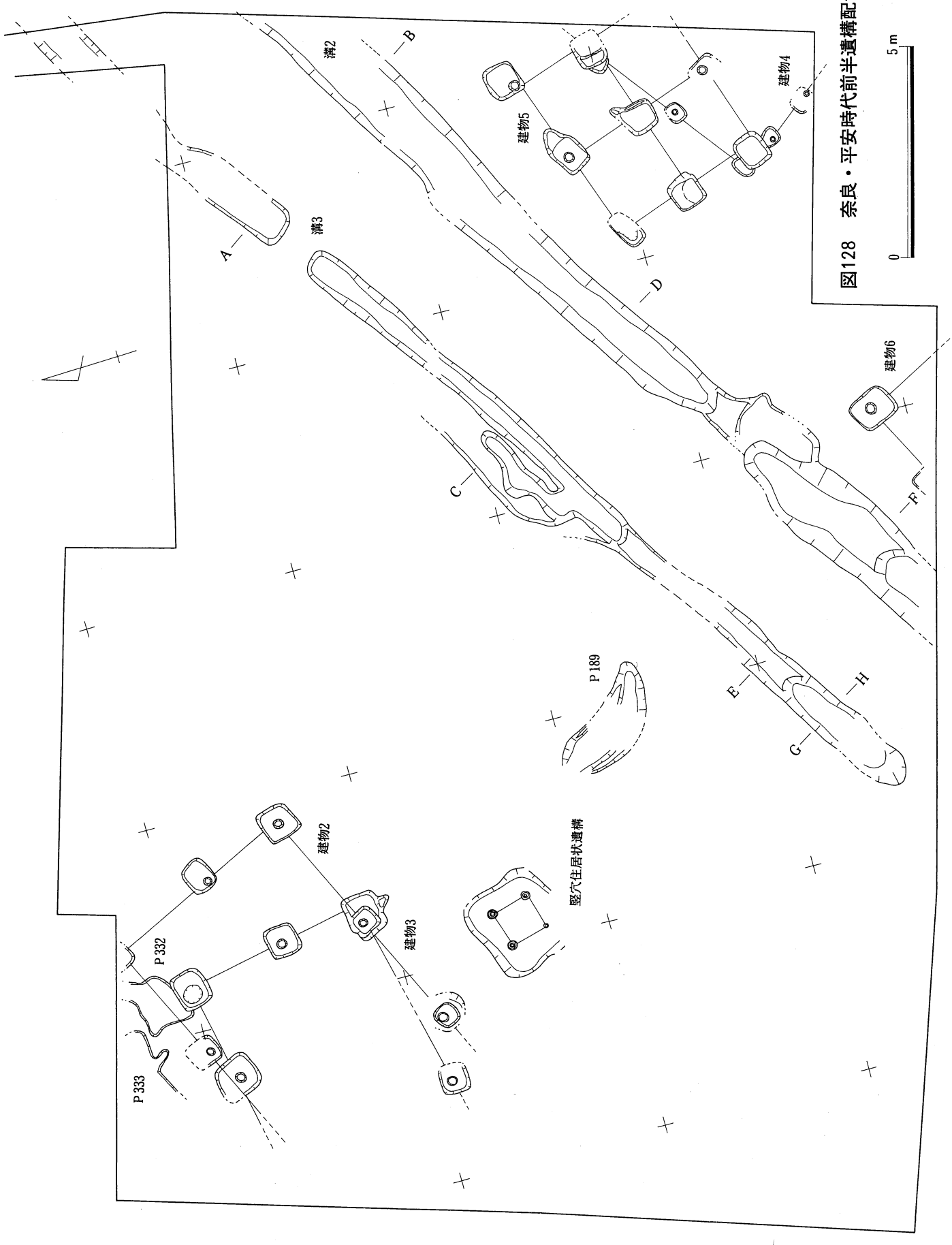


図128　奈良・平安時代前半遺構配置図

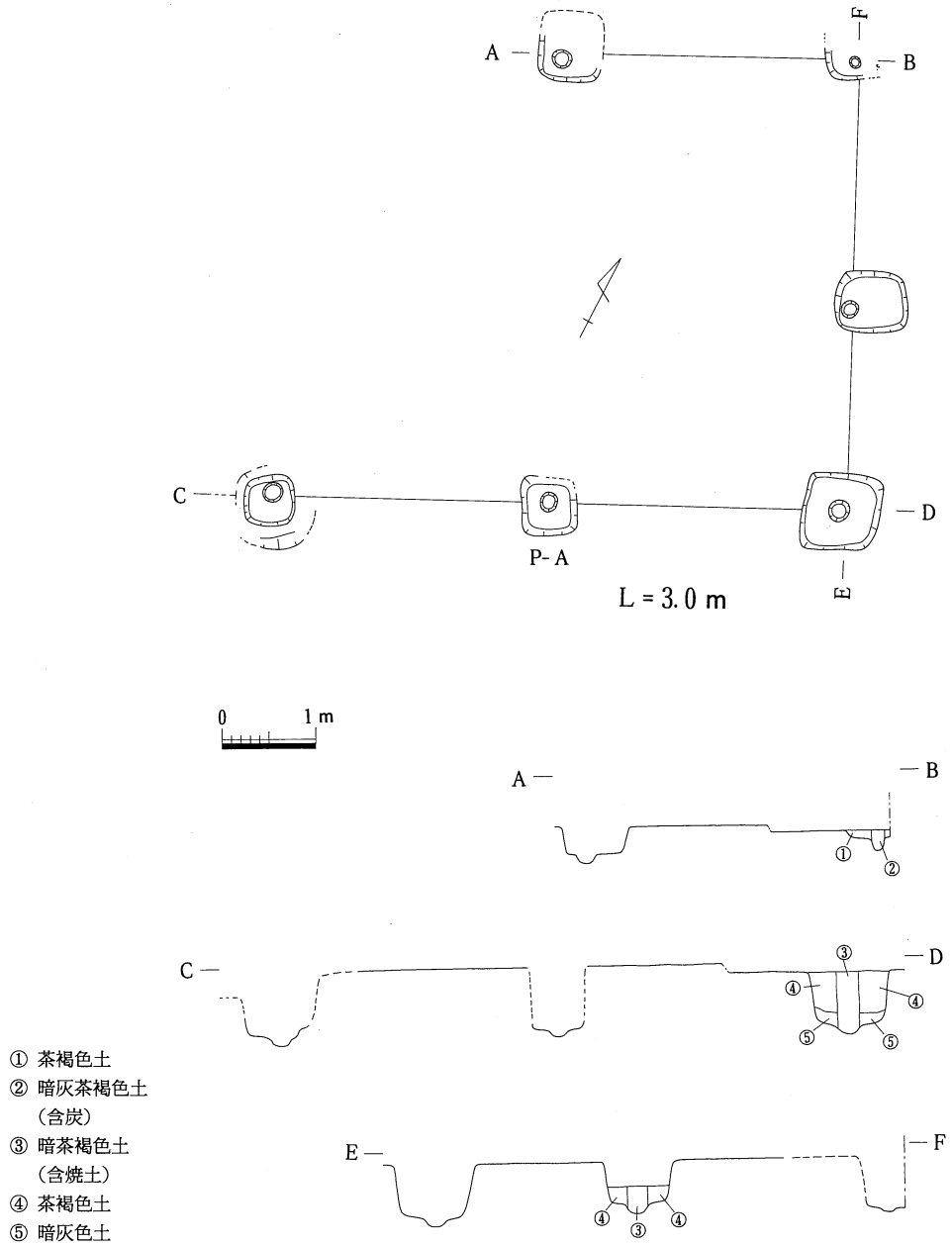


図129　建物 2 実測図

いることで、柱穴部分についてはむしろ焼土の方が多い。これは、この建物が火災を受けたことを示しており、建物の北側に隣接する浅い土壙の中に、焼土や炭が多量に含まれていることもこれと関連があるものと思われる。

遺物は各柱穴から出土しているが、細片ばかりで、図化できたものはＰ－Ａから出土した壺（１）の底部だけであった。

建物 4（図131 ）

調査区南東部で検出された掘立柱建物で、南側については調査区外へ出るため建物全体の規模は明らかではない。柱穴の掘り方は建物 5 により削平されているためはっきりしない部分もあるが、平面形は方形と推定され、一辺約0.5ｍの規模、柱痕跡は径0.15ｍ程と思われる。現状で、桁行 2 間以上、梁間

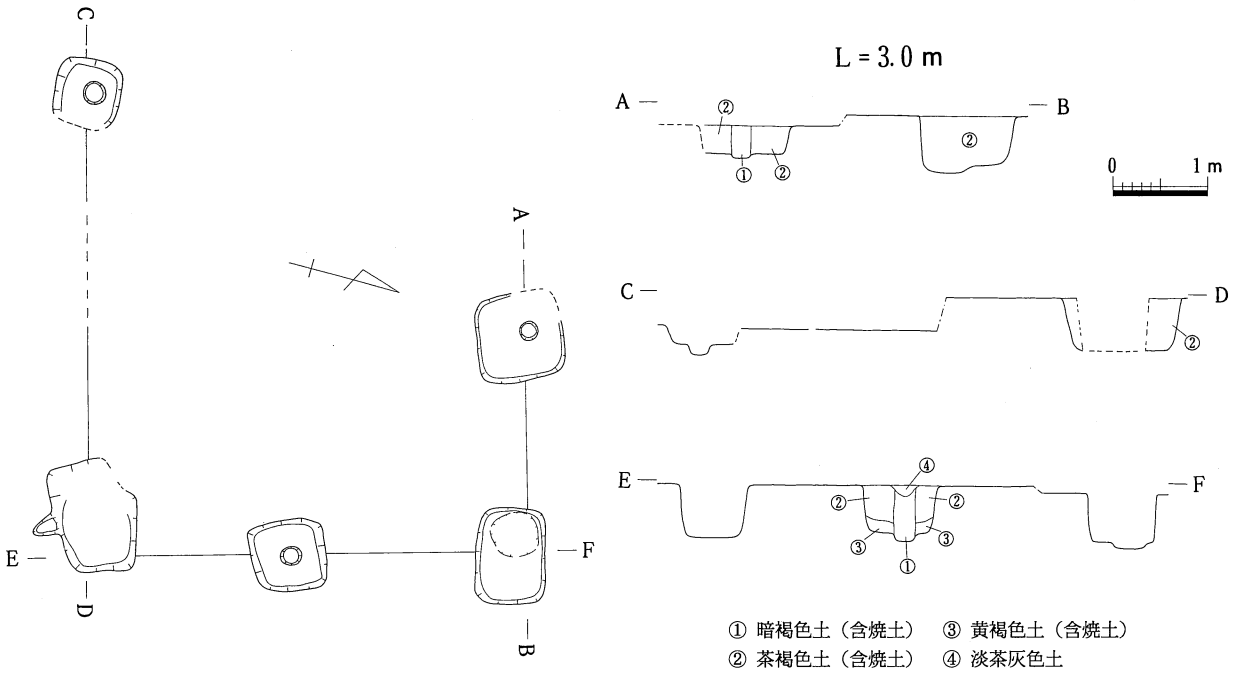


図130　建物 3 実測図

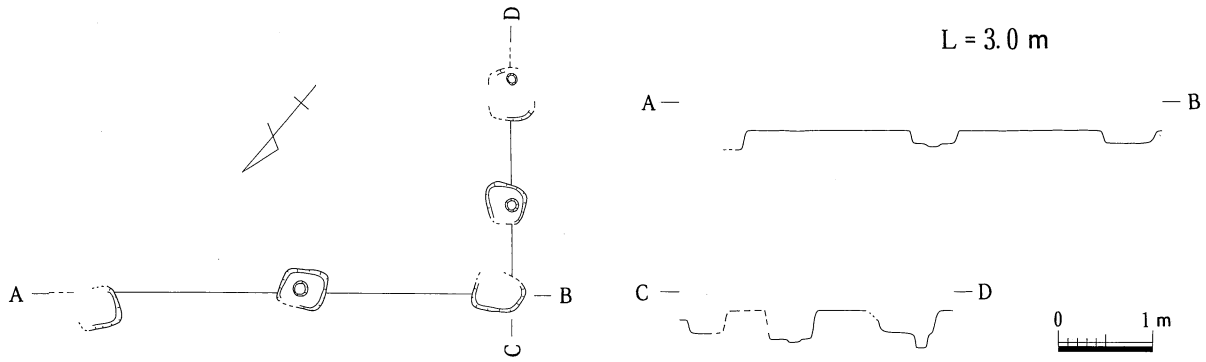


図131　建物 4 実測図

2 間以上の柱構成で、棟方向はＮ－50°－Ｅを示す。平面形は長方形と推定される。遺構の検出面は2.4～2.6m付近で、深さは検出面から0.3～0.4mである。他の建物と比べると、柱穴の大きさはやや小さいものの、溝の方向と棟方向がほぼ一致するようである。

遺物は柱穴の掘り方から土器の細片が若干出土している。

建物 5（図128 、132）

調査区南東部で検出された掘立柱建物で、建物 4 とほぼ重なる位置にある。柱穴の掘り方の平面形は方形で、一辺0.7～0.8mの規模、柱痕跡は径約0.25mである。現状で、桁行、梁間ともに 2 間の総柱の建物である。建物の長軸方向はＮ－72°－Ｅを示す。遺構の検出面は2.6m付近で、その底レベルは2.3m付近である。建物 5 は建物 4 と比べて柱穴も大きいことや、ほぼ同じ位置に重複して存在することから、建物 2 と建物 3 との関係とよく似ている。つまり、溝をはさんだ南北両群の建物は、当初溝方向と

ほぼ同じ軸方向であったが、建替えた建物は若干軸をずらしている。そして、両群の建物ともやや規模の大きなものにしており、両群の建物は個別に建替えられたのではなく、同時であった、あるいは同じプランのもとに建替えられたと考えることができる。そして、このことは、調査区外に広がっていく吉野口遺跡の建物全体に通じる様相である可能性も推定される。

遺物は各柱穴から出土しているが、細片ばかりで、図化できたものはP－Aから出土した壺もしくは平瓶の破片（3）と、杯の破片（4）だけである。

建物6（図133）

調査区南側で、柱穴が2個検出された。建物の大半は調査区南側へ出てしまうため、平面形や軸方向については明確ではない。ただ、建物5と柱穴の大きさが似ていることや、位置的な関係から建物5と似た建物であった可能性が推定される。検出面のレベル高は2.6m付近で、その底レベルは2.3m付近である。

遺物は細片ばかりで、図化できたものはない。

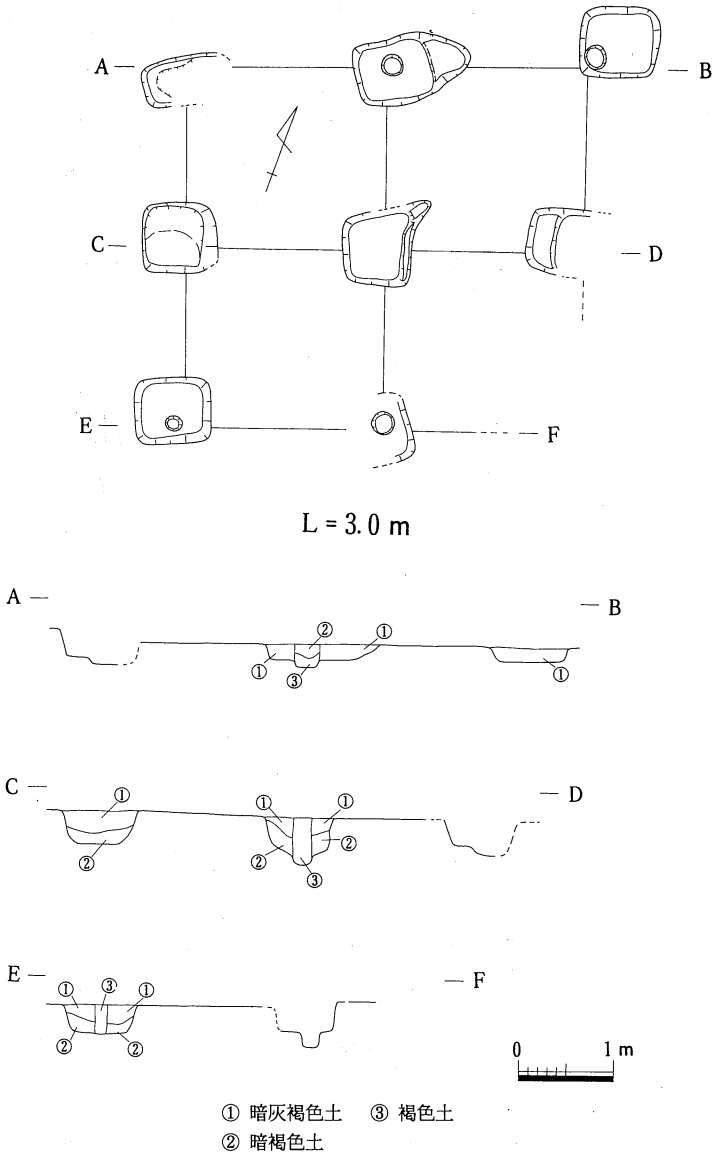


図132　建物5実測図

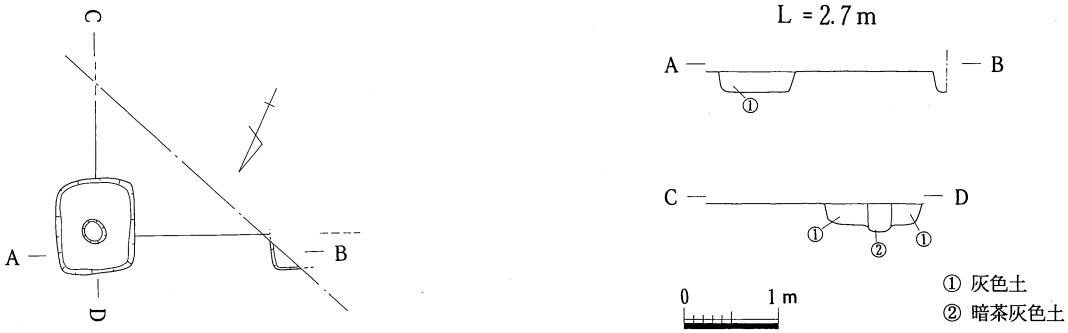


図133　建物6実測図

竪穴住居状遺構（図134、135）

建物２の南側で検出された非常に小さな竪穴住居状の遺構で、遺構の検出面は2.45ｍ付近で、床のレベル高は2.0ｍ付近である。南西コーナー付近は配管により削平されてはいるものの、一辺約2.6ｍの方形の平面形と推定され、床面には柱穴が４本認められる。柱間は0.85ｍで方形を呈する。柱穴は径約0.25ｍの円形の掘り方で、柱痕は径約0.1ｍ、深さは

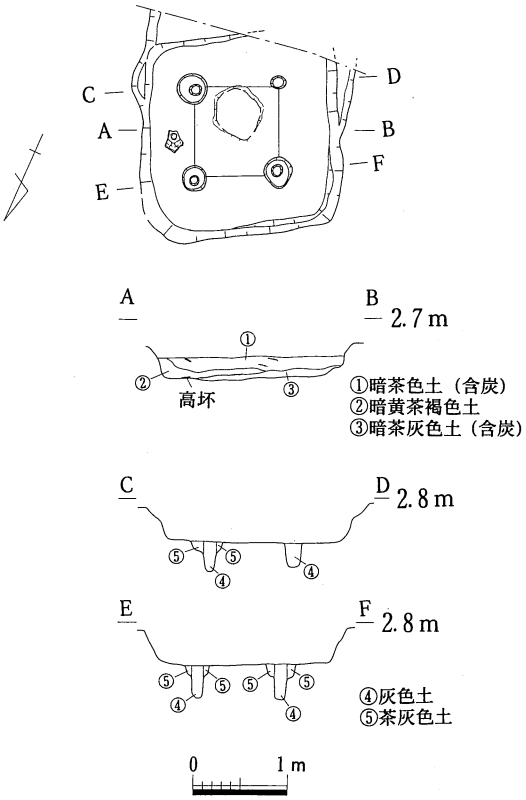


図134　竪穴住居状遺構実測図

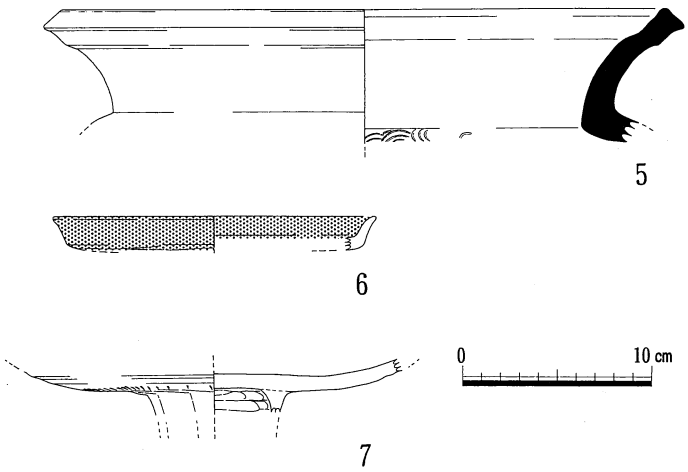


図135　竪穴住居状遺構出土遺物

床面から約0.42ｍを測る。床面はほぼ平らであるが、中央部付近が径0.6ｍ程微妙に高くなっている。しかし、カマドや炉を推定させるような焼土は認められない。断面形は逆台形で、埋土は３層が確認され、２層と３層の間に炭がやや多く認められる。南側に段差のある平坦面が付属する可能性もあるが、配管によりその部分が不明瞭となっているため確認できなかった。ただ、その部分と当遺構の平面形はずれており別の遺構である可能性もある。当遺構の軸方向と建物２の棟方向がほぼ一致しており、両遺構は同じプランの中に存在する可能性が考えられる。

遺物は、床面から高杯の杯部（７）が１点出土し、埋土からは甕（５）と皿（６）が出土した。

Ｐ189（図136、137）

調査区中央部に位置する。長さ2.8ｍ以上、幅約1.2ｍで、三日月形の平面形をしている。遺構の検出面は3.0ｍ付近で、深さは検出面から約0.16ｍである。遺構の検出レベルは最も高い。断面形はＵ字形で、埋土は１層である。

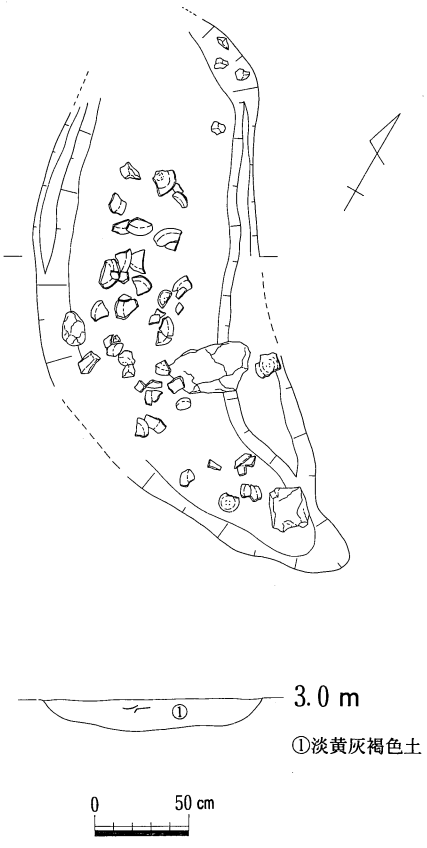


図136　Ｐ189実測図

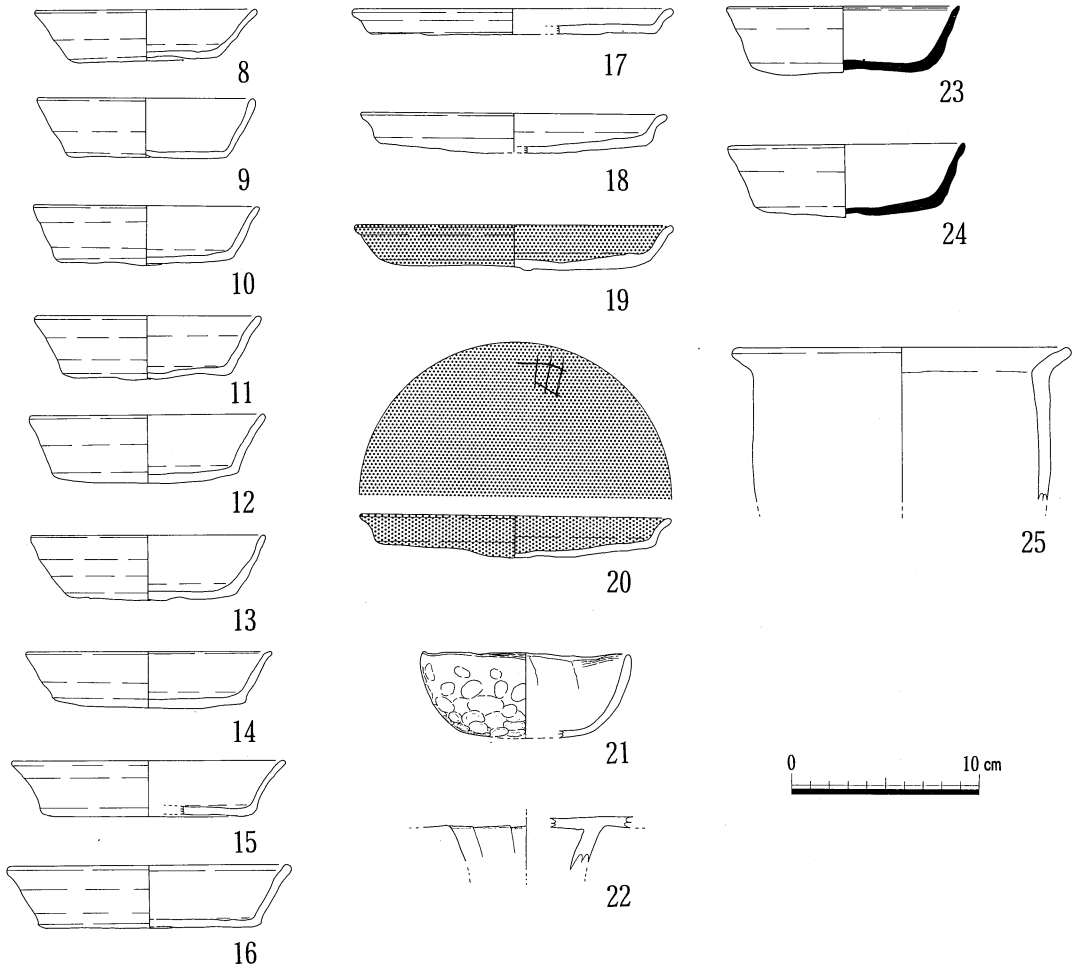


図137　P189出土遺物

遺物は土器と比較的大きな角礫が2つ遺構の南半から出土した。土器は遺構の中央付近から南側にむかって堆積している。全て埋土から出土しており、しかも上面に近い位置で検出された。出土した土器は土師器と須恵器で、須恵器は2点、土師器は16点と圧倒的に土師器の方が多い。土師器は杯、皿、椀、高杯、甕で、杯や皿の大半は丹塗りではないが、本来は全て丹塗りであったと思われる。杯、皿とも内外面ヨコナデで調整され、底部外面には指頭圧痕が多数認められる。須恵器も基本的には同じで、内外面ヨコナデで調整され、底部外面には指頭圧痕が多数認められる。これらの土器の特徴から、P189は当遺構面中では最も新しいものといえる。

P332（図138、140、141）

建物3の北東コーナー部分の柱穴と同時に検出され、当初は両遺構に切り合い関係を想定していたが、柱穴埋土に含まれている焼土や炭がP332へ流入している状況であることから、建物3の火災後、建物3が廃絶するのと同時に埋没したと考えられる。平面形は不整形で、深さは検出面から約0.1mで、断面形が緩やかな逆台形となり、土壙というより窪み状の遺構である。

遺物は、遺構全体から散在的に検出されたが、図化できたものは須恵器の皿（30）のみである。土器以外では遺構の中央部付近から鉄製の刀子が1点出土している。

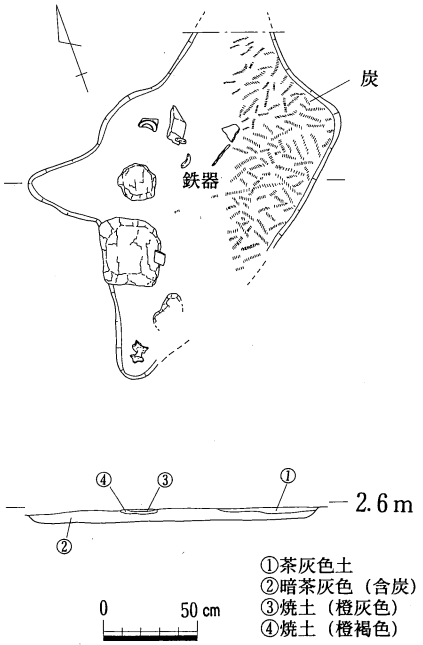


図138　P332実測図

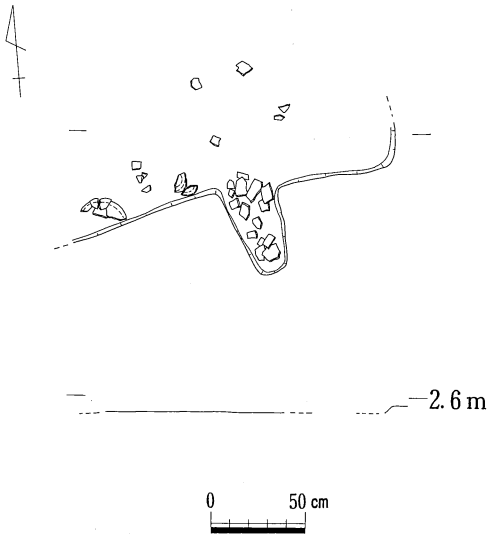


図139　P333実測図

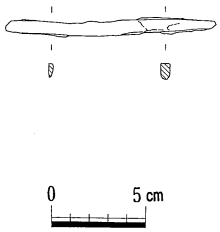


図140　P332出土遺物

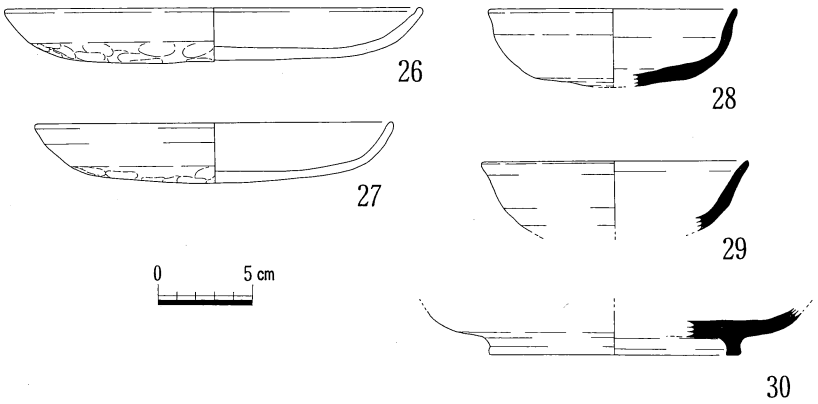


図141　P332，P333出土遺物

P333（図139、141）

建物3の北側で検出された浅い不整形な平面形をした土壙で、埋土や検出された状況はP332と似ている。遺構の北側は調査区外へ出ており、西側は近世の遺構により削平を受けているため全形はわからない。しかし、P332と同じ様に窪み状の形態であったことが推定される。深さは検出面から約0.08mと非常に浅い。

遺物は遺構南半で、建物3寄りから大半は出土した。僅かな差ではあるが、南側の方が遺物のレベル高が高く、建物3側からの遺物の流入を示しているといえる。図化できたものは土師器の皿（26)、(27)と須恵器の杯（28)、(29）だけである。土師器の皿はほぼ完形で、それらは畿内からの搬入品と考えられ、平城宮ⅢからⅣの時期に比定される。したがって、吉野口遺跡の奈良期の遺構は、実年代的には8世紀中葉頃と考えられる。

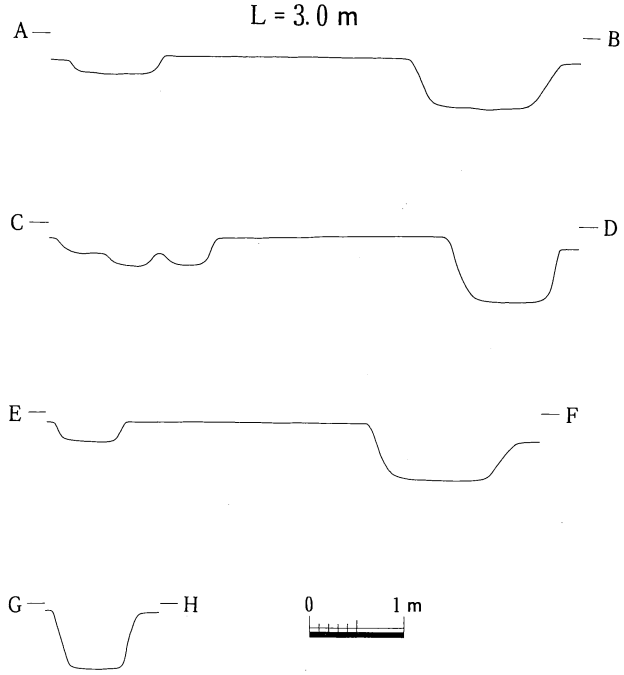


図142　溝２，３断面図

溝２（図142、143、144、145、146 、147、148 、149）

調査区東側で検出された溝である。溝３とは約2.4ｍの間隔をあけてほぼ平行にならんでいる。両溝は検出面や埋土の状況もよく似ており、同時に存在していたと思われる。溝２の検出面での幅は約1.6ｍで、底部の幅は約１ｍである。断面形は逆台形をしている。溝底部は建物５の北側付近で、底部から約0.3ｍ上がって約1.3ｍの間で浅くなっており、それからまた同じように約0.3ｍ下がっている。つまり深い部分と深い部分が、浅い部分により連結されている、あるいは溝中に深い部分を設定しているというような形態である。このようなことは溝３でも認められる。埋土は基本的に単層で、流水のあったことを示しているようではなかった。

遺物は、溝全体の埋土中より出土した。ただ、(39）の杯や、(61)、(62）の皿は遺構上面から出土した。土師器については、内面底部にラセン暗文、体部に一段斜放射暗文をもっている畿内からの搬入品と推定される皿（49)、(50）があり、他は内外面に丹塗りを施した土師器や、製塩土器が比較的多く出土している。１点ではあるが「本」の文字を線刻したもの（74）もある。杯や皿の底部外面の調整については、ヘラケズリのままのものと、ミガキを施したものがあり、両者の比率は大体半々ぐらいである。また、杯や皿は法量の違いにより幾つかに分けられる。杯や皿の底部外面にヘラ記号を線刻したものも幾つか認められる。製塩土器は、尖底薄手で口縁部にむかって窄まる形態のものが大半であるが、厚手で受口状の口縁部をなすものが１点出土している。この時期の製塩土器は、生産地以外では美作国府などにその例があるだけで、出土する場所は限られており、吉野口遺跡の性格を考える上で示唆的である。食器類の他に甕や甑、カマドも出土している。深い溝部分の連結部北側の底部付近から出土したカマドは非常に大きく、横幅は0.6m、高さは0.45ｍもある。

須恵器については、杯、皿、壺、高杯、鉢、甕があり、杯については法量の差により幾つか分けられる。杯蓋（109）に墨書が認められるものがあるが、破片であるため、文字なのか記号なのかははっきりしない。この他体部外面と底部外面にヘラ記号の認められるものがある。

これらの土器のうち２次的に火を受けたものがあるが、それらと受けていないものとの時期的な差はあまり認められないようである。また、須恵器と土師器の比率であるが、小破片全てをカウントしたわけではないが、やや土師器の方が多いようである。

溝３（図142、150）

溝２の北側に平行して検出された溝で、検出面と埋土の有り様が似ていることからも、溝２と同時期に存在していたと推定される。検出面での幅は0.8～１ｍで、底幅は0.5～0.7ｍで、溝２よりも小規模で

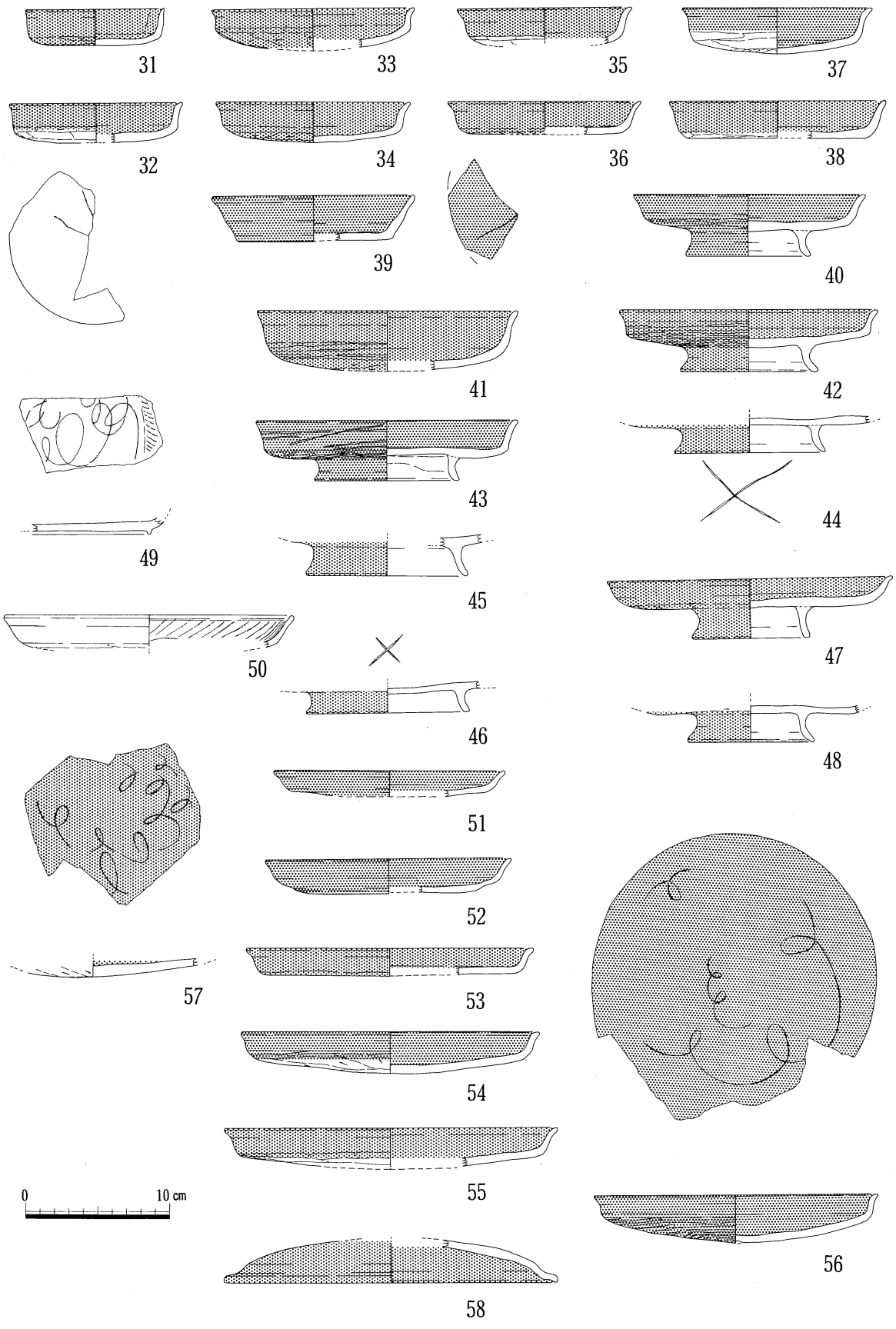


図143　溝２出土遺物（１）

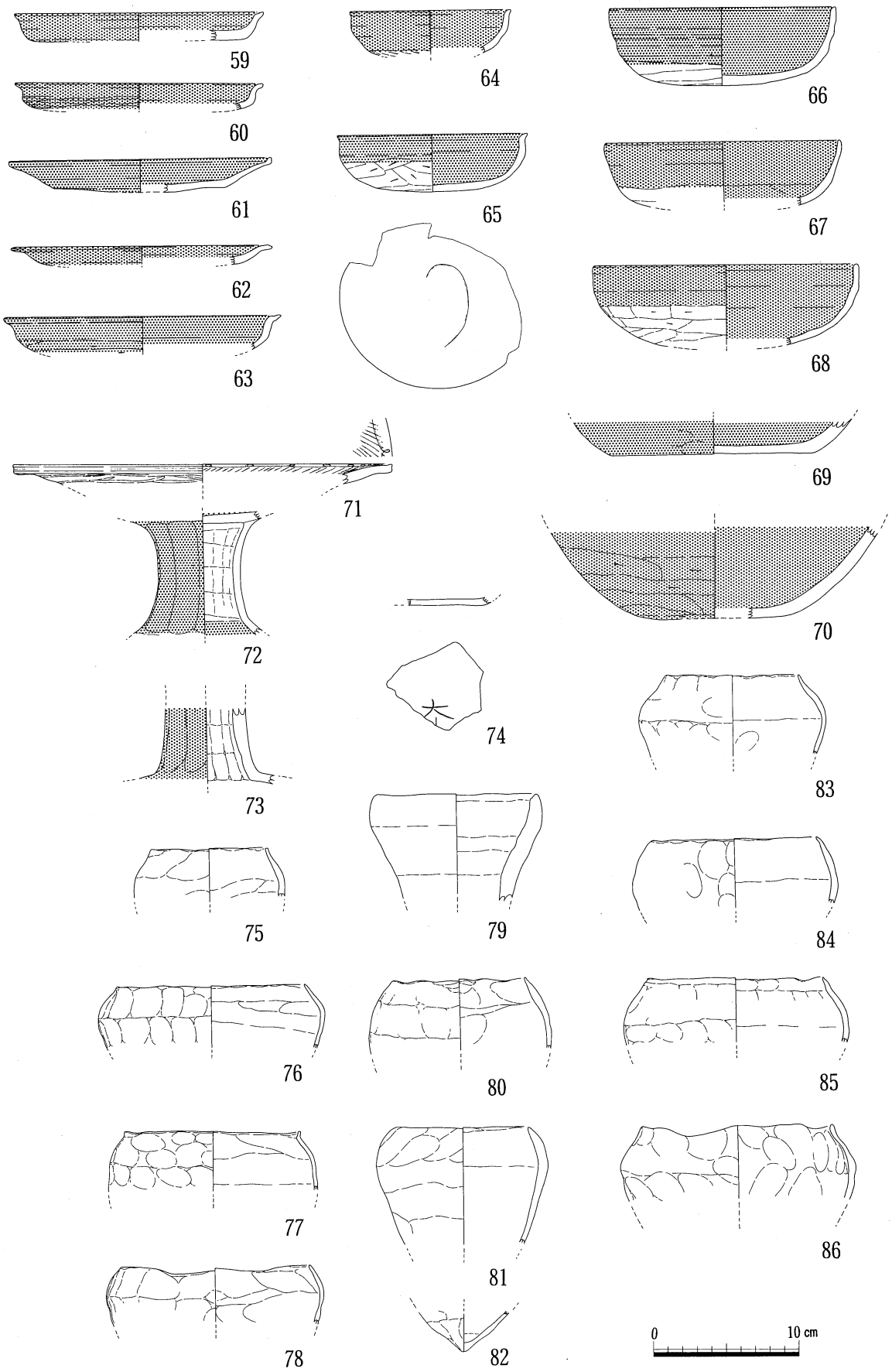


図144　溝２出土遺物（２）

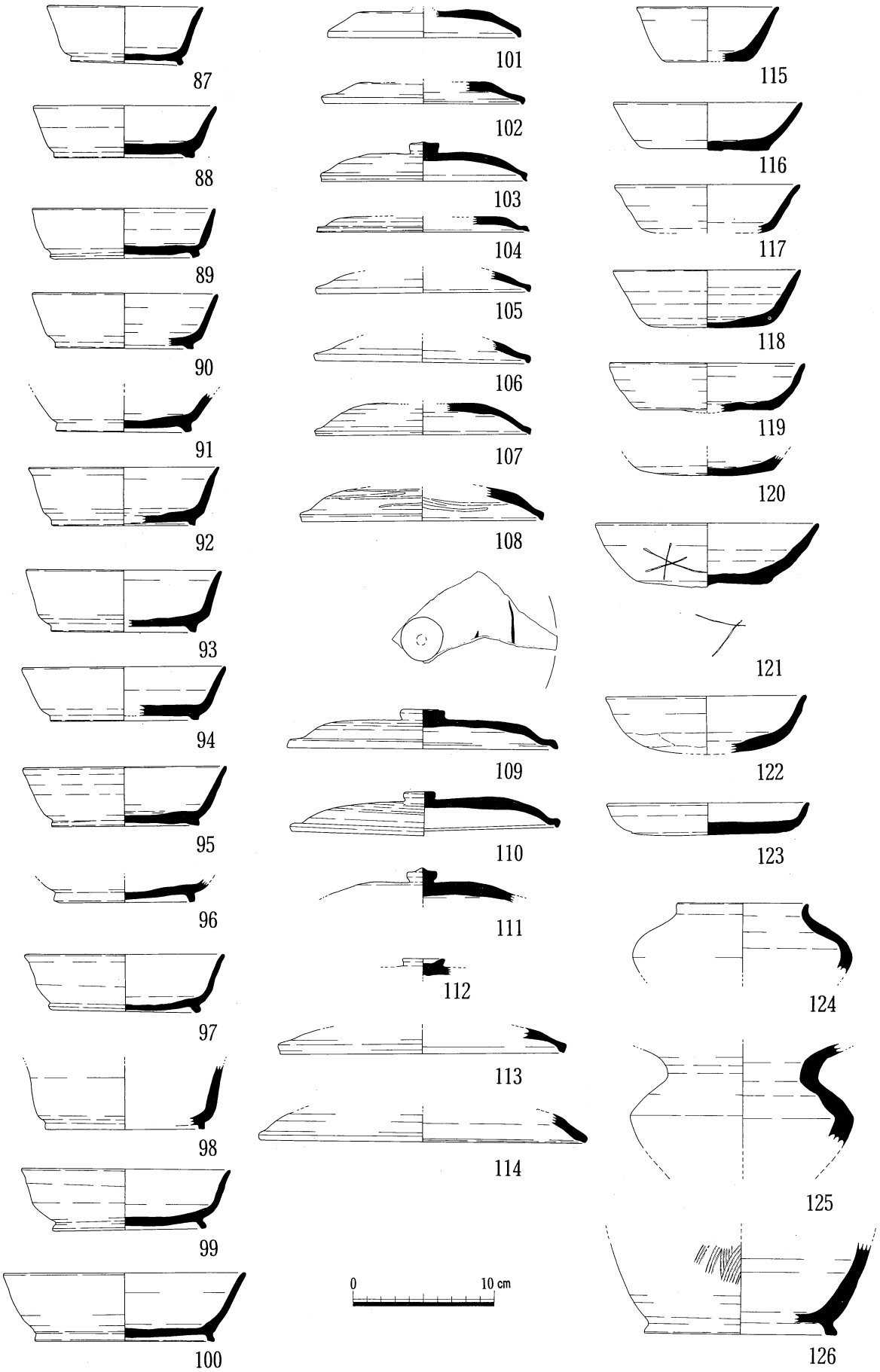


図145　溝２出土遺物（３）

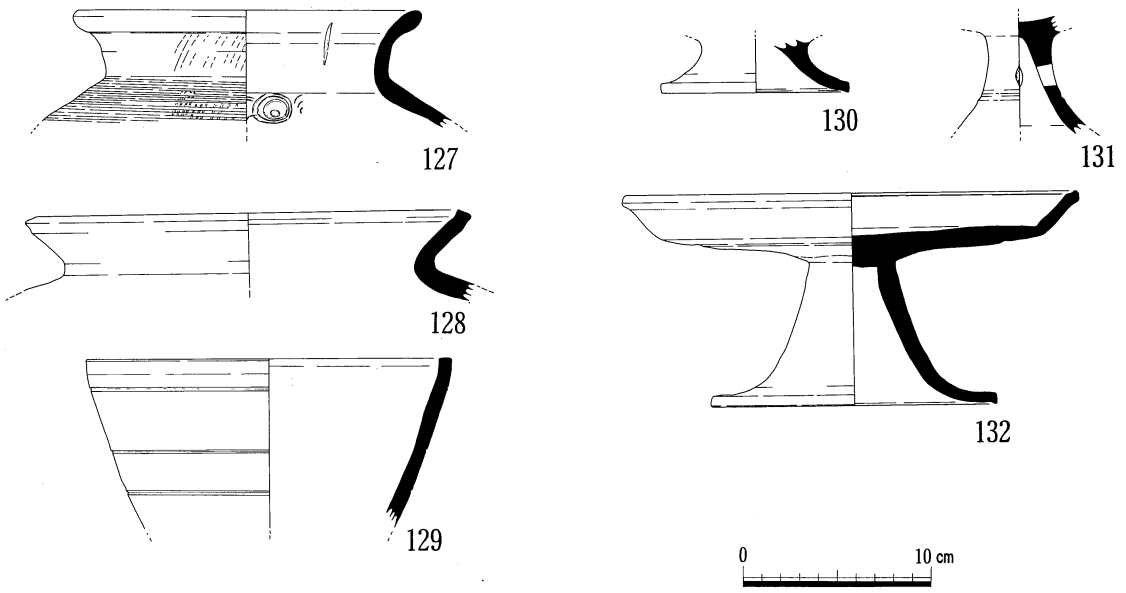


図146　溝２出土遺物（４）

ある。断面形は逆台形で、調査区中央付近で部分的に二股に分かれており、さらに北側へ約0.15ｍの段も認められる。調査区北半と南端で溝は区切れるものの、北側へはさらに同様に溝が続いている。これは、溝２のように溝底に高低差があるためと考えられ、浅い掘り方の部分については後世に削平されて残存していないと思われる。残存している溝の底部についても段差が認められ、南端が最も深く検出面から0.56ｍ、他は0.14～0.2ｍである。溝２と溝３の中央部を起点とした幅は3.7～4.0ｍ、溝に挟まれた部分の幅は2.5～2.6ｍとなる。溝２、３の埋土中からは瓦は一片も出土しておらず。溝間に築地塀などが存在したとは思われない。両溝間を道路あるいは通路とし、両溝はその側溝であったと考えるのが妥当と思われる。

遺物は溝の埋土中から出土した。量はそれ程多くなく、土師器、須恵器と鉄釘が１点ある。土師器の鉢（146）はほぼ完形で、内外面は丹塗りを施しており、底部外面はヘラケズリを行う。鉢（147）はやや口径が大きく、底部外面はヘラケズリの後ヨコ方向のミガキを行う。杯（148）は高台付で、内外面を丹塗りし、内面底部にラセン暗文、体部に一段斜放射暗文を施す。須恵器の盤（163）はほぼ完形である。完形や比較的大きい破片の土器は、溝の南端の最も深い部分から出土した。須恵器と土師器の比率であるが、図化できたものは須恵器の方が多いものの、破片数についてはほぼ同じである。この他鉄釘は溝中央部付近の埋土中から出土した。

包含層（図152、153、154）

まず、緑釉陶器であるが、３点出土している。皿（167）は調査区南端の中央部で出土したもので、底部については完存し、輪高台である。口縁部の引出しはするどく、残存しているカーブから耳皿と考えられる。素地はやや硬質で、灰緑色の釉が厚く施釉されている。皿（169）は硬質の素地で、濃緑色の緑釉が施釉されている。長頸壺もしくは瓶（168）は、白灰色の軟質の素地に濃緑色の緑釉が施釉されている。緑釉陶器で長頸壺、すなわち貯蔵器の形態をなす例は、平城京や三重県斎宮跡などにあるが、

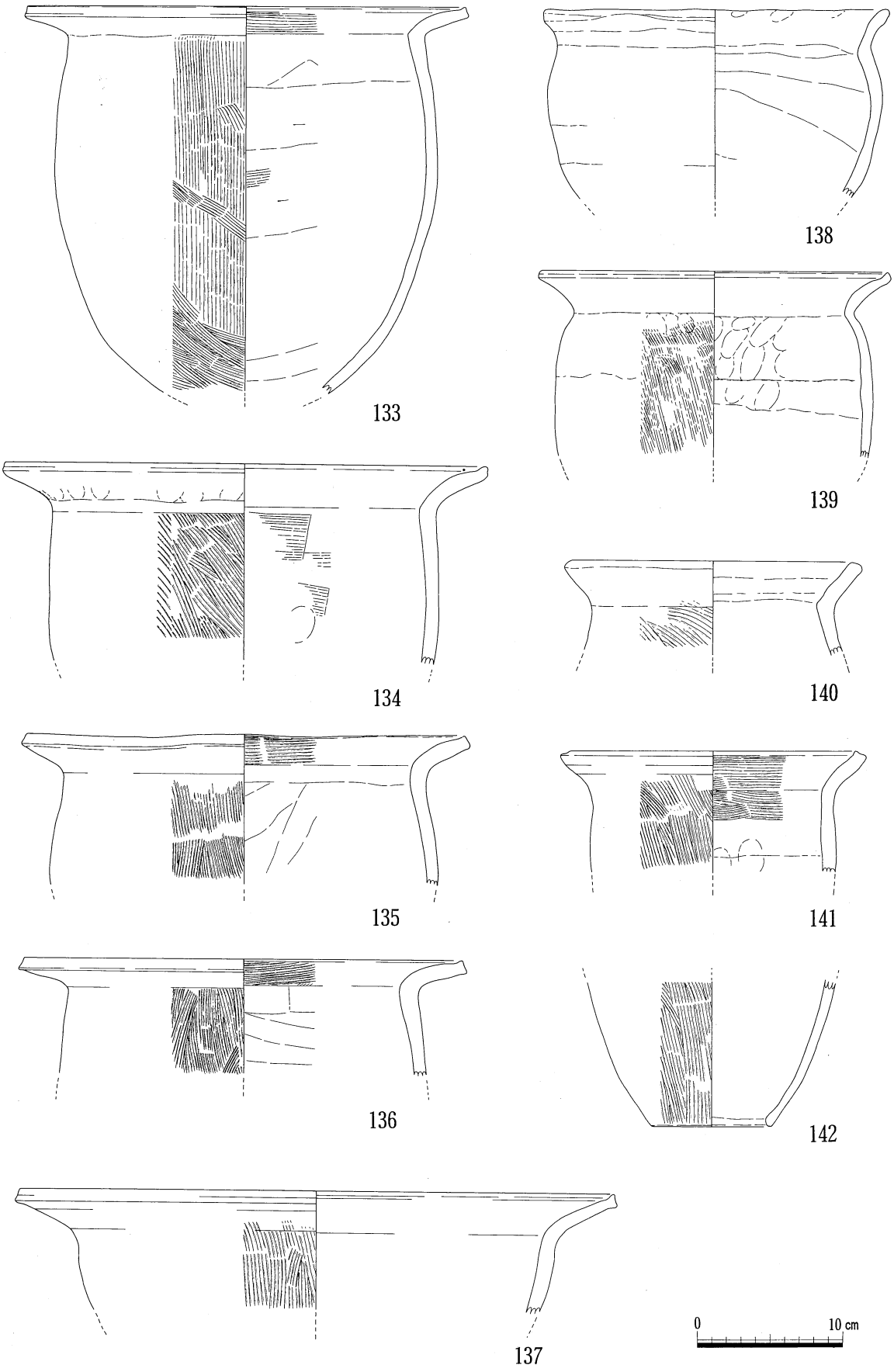


図147　溝２出土遺物（５）

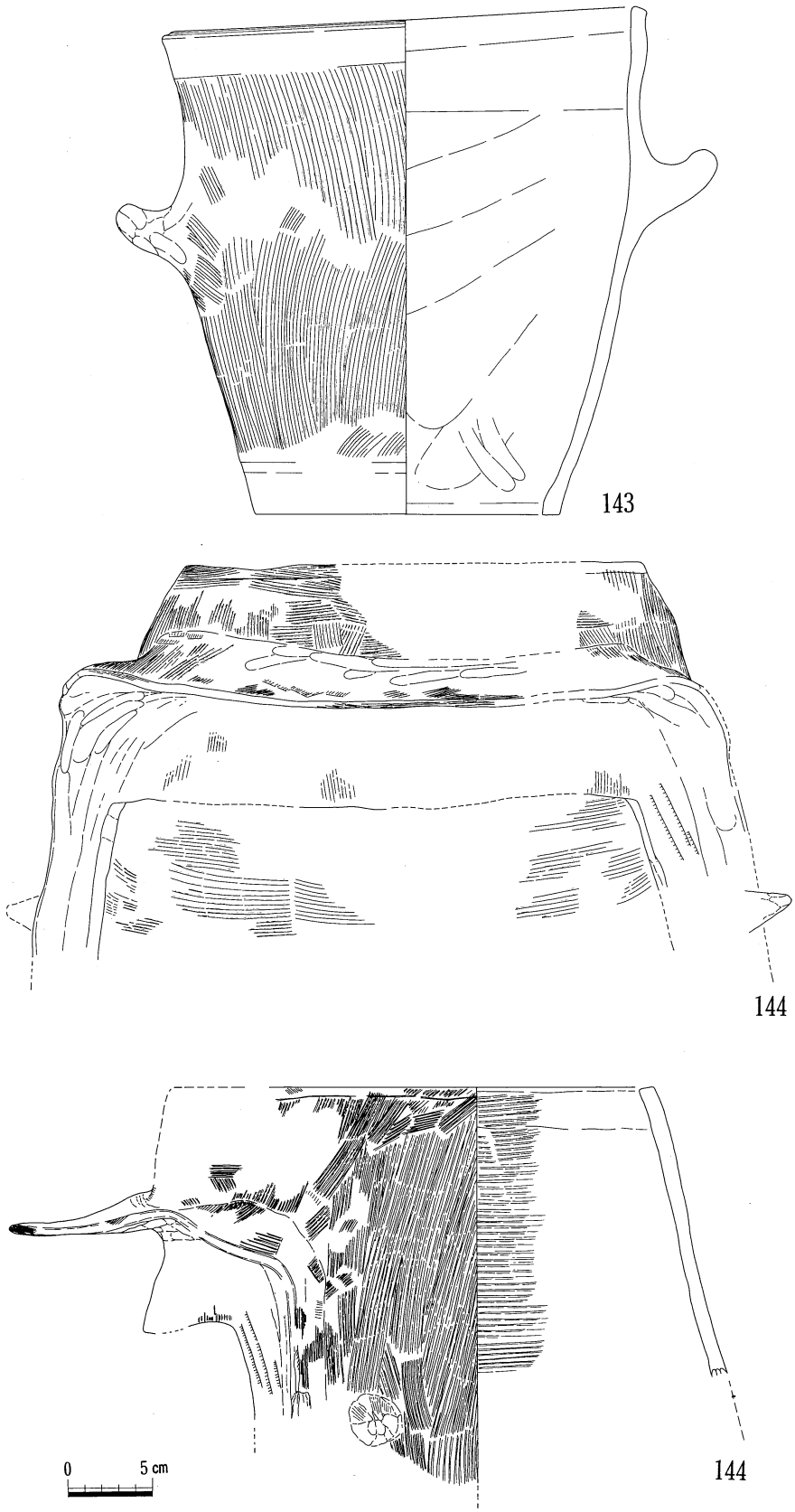


図148　溝２出土遺物（６）

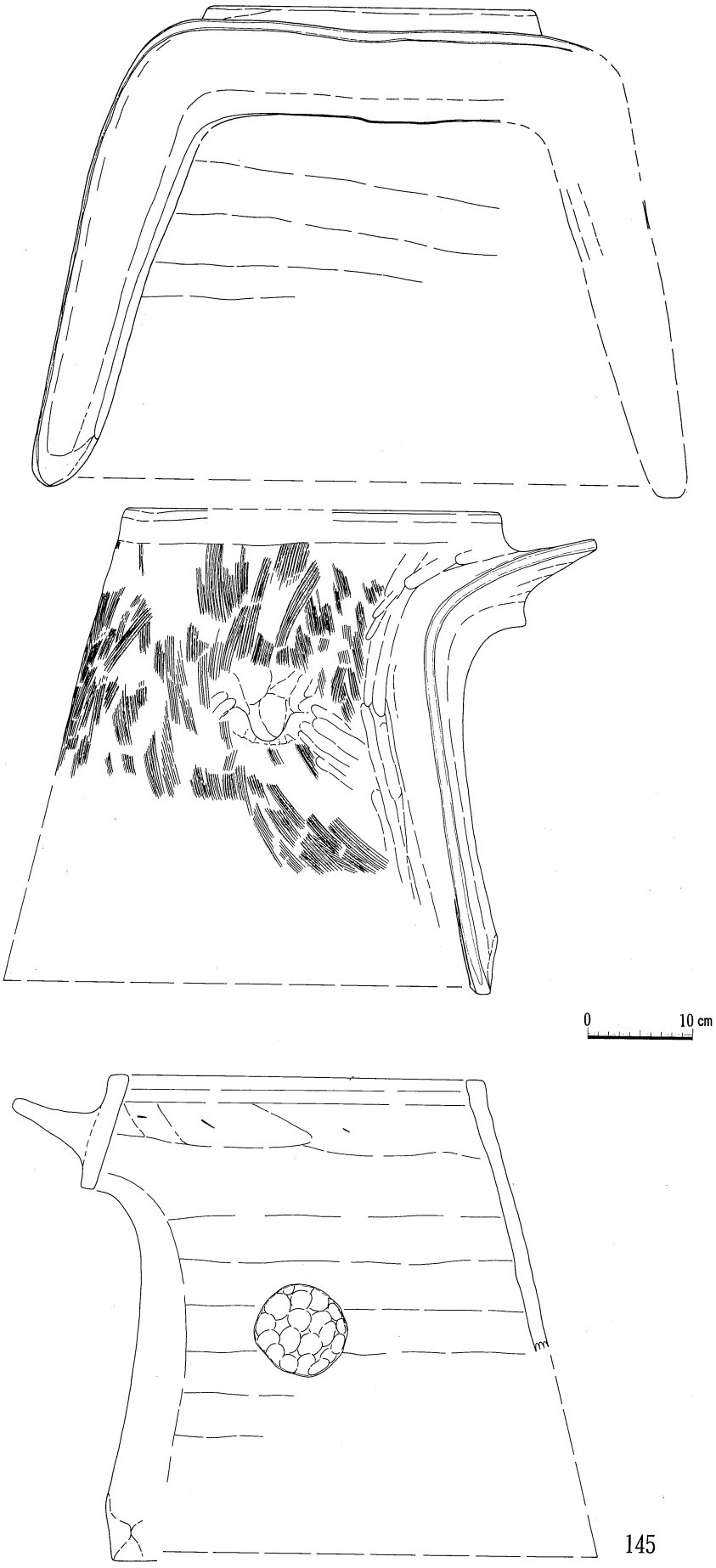


図149　溝２出土遺物（７）

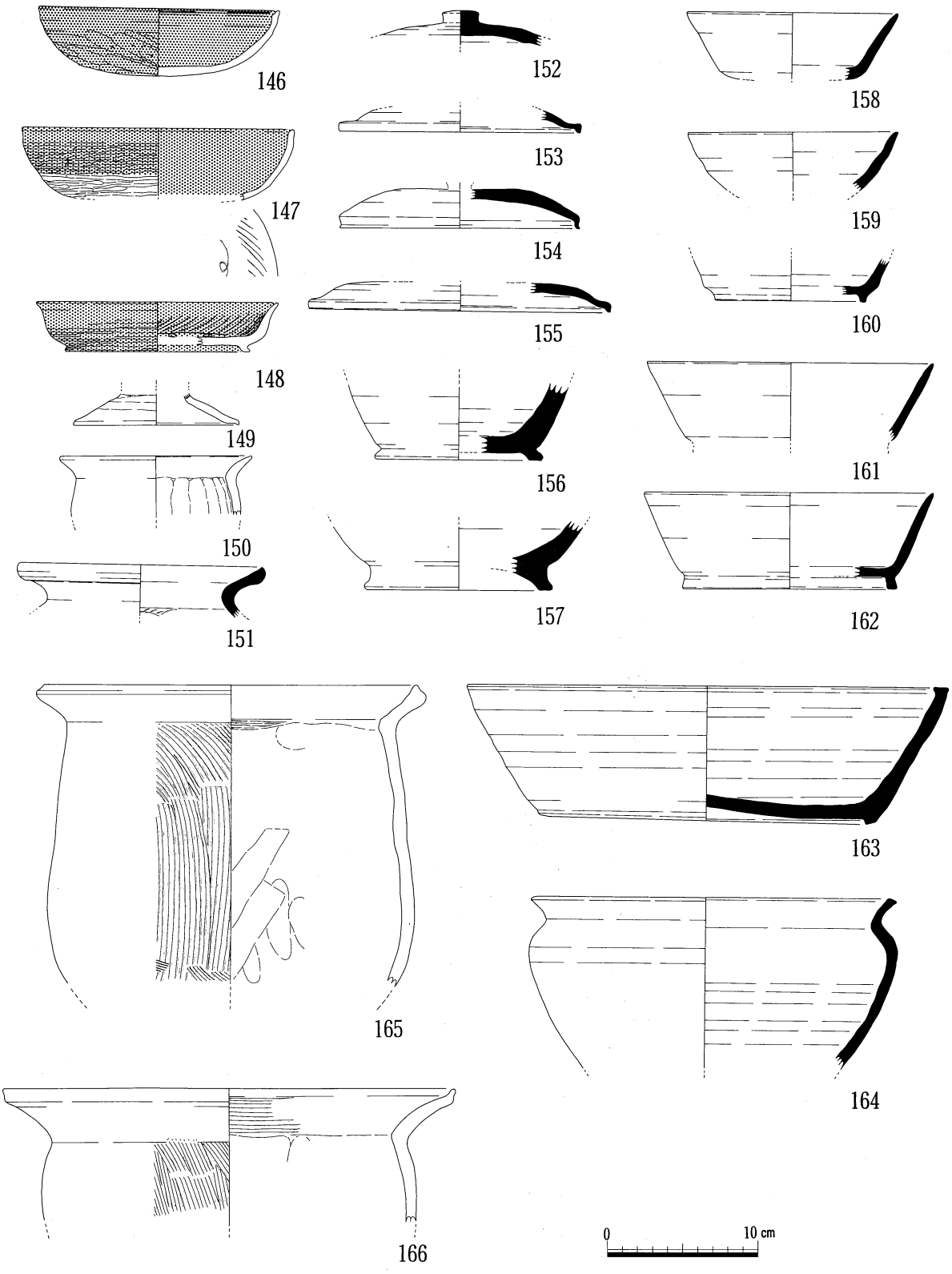


図150　溝３出土遺物（１）

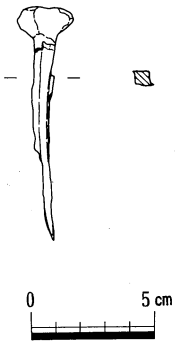
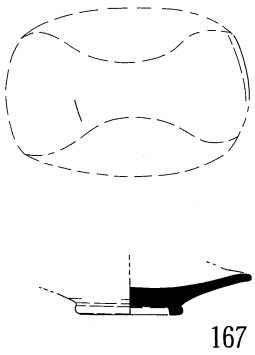
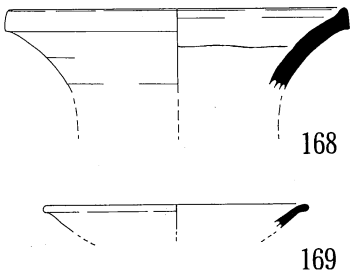


図151　溝３出土遺物（２）





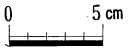
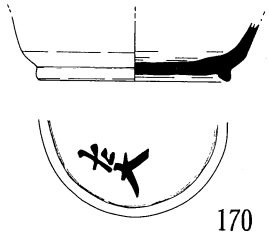
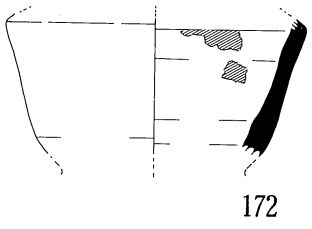


図152　包含層出土緑釉陶器





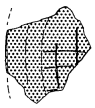
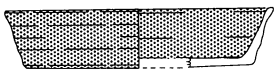
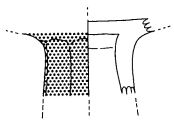
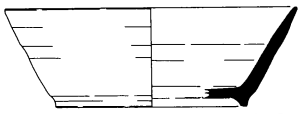
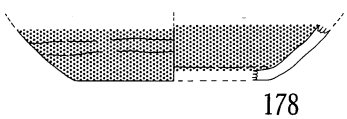


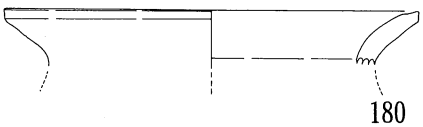
図153　包含層出土墨書土器その他











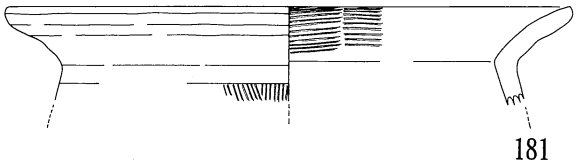


図154　包含層出土土器（配管部分）

出土例は非常に少ない。　墨書土器は3点ある(1)。(170)は須恵器の杯の底部に書かれており、「左大」と読める。時期は奈良時代である。(171)は土師器の杯の底部に書かれており、文字部分をふくんだ半分が欠損しているため明確ではないが、「新盆ヵ」と読めそうである。底部外面に指頭圧痕が認められ、時期は(170)よりも若干下る可能性がある。(174)は土師器の杯の底部付近の破片で、「中男」もしくは「中田」と読める。時期は(170)と同じ奈良時代である。

須恵器の長頸壺(172)の内面には漆の被膜が認められる。この壺は胴部1／5程の破片であり、この種の壺の出土状況と似ている。この種の壺は漆を生産地から運ぶための容器として用いられ、消費地において容器を割って中の漆を取りだし使用したと考えられている。つまり吉野口遺跡は、漆の消費地であったと考えられる。

土師器の皿(173)は、内外面を丹塗りしており、外面底部付近はヘラケズリの後ヨコ方向にヘラミガキを行う。外面底部にヘラ記号が認められる。

配管部分の調査区で、溝3の上面から全て破片ではあるが土器がやや纏まって出土した。一応包含層出土の土器として取り上げたが、それらはP189よりもやや古い時期に属するもので、溝3埋没後のたわみ状の窪みに廃棄された可能性が推定される。須恵器の杯(175)は底部外面の調整も簡略化しており、該期の土師器の杯とほぼ同じ器形と調整である。須恵器の杯(176)は器高が増しており、高台の断面形も方形となる。土師器(177)、(178)、(179)は丹塗りが認められる。甕(180)、(181)は口縁部の中程が肥厚する。

注

(1)墨書土器の判読については狩野久氏のご教示とご指導を得た

出土土器観察表

器形	土器番号	法量（cm）			形態・調整手法の特徴	胎土	色調	遺構
		口径	底径	器高				
須恵器壺	1	－	10.0	－	内外面ヨコナデで、底部にヘラケズリをおこなう。	含長石石英	淡灰色	建物3P－A
須恵器壺	2	－	－	－	外面下半にヘラケズリ、他内外面はヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	建物2P－A
須恵器壺	3	－	15.0	－	内外面ヨコナデ。	含長石石英	暗灰色	建物4P－A
須恵器杯	4	－	－	－	底部ヘラケズリ、他内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	建物4P－A
須恵器甕	5	32.0	－	－	内面胴部にタタキ、他内外面ヨコナデ。	含長石石英	暗灰褐色	竪穴住居状遺構埋土
土師器皿	6	27.0	－	－	底部ヘラケズリ、他内外面ヨコナデ。内外面丹塗り	含長石石英	橙灰色	竪穴住居状遺構埋土
土師器高杯	7	－	－	－	脚部に面取りをおこなったもので、外面はヨコナデ、脚部内面はヘラナデ。	含長石石英金雲母	橙褐色	竪穴住居状遺構埋土
土師器杯	8	11.8	8.2	2.7	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められる。	含長石石英金雲母	淡褐色	P189
土師器杯	9	11.4	8.6	3.2	内外面ヨコナデ、後内面底部付近はナデ。底部外面は指頭圧痕が多数。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	P189
土師器杯	10	11.8	9.4	3.15	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められる。	含長石石英	淡橙褐色	P189
土師器杯	11	11.8	9.0	3.45	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められる。	含長石石英赤色粒	淡橙褐色	P189
土師器杯	12	12.35	9.9	3.65	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められる。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	P189
土師器杯	13	12.3	9.15	3.5	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められる。	含長石石英	淡黄褐色	P189
土師器杯	14	12.85	10.25	3.05	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められる。	含長石石英	淡橙褐色	P189
土師器杯	15	14.3	11.5	2.95	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められる。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	P189
土師器杯	16	15.0	11.1	3.3	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められ縁辺にヨコナデをおこなう	含長石石英金雲母	淡橙褐色	P189
土師器皿	17	16.8	15.3	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められる。	含長石石英金雲母	淡褐色	P189
土師器皿	18	16.0	13.9	2.1	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められる。	含長石石英金雲母	淡橙褐色	P189
土師器皿	19	16.7	14.3	2.4	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められる。内外面丹塗り。	含長石石英角閃石	淡黄褐色	P189
土師器皿	20	16.2	14.8	2.25	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められ縁辺にヨコナデをおこなう	含長石石英	淡黄褐色	P189
土師器椀	21	10.8	5.2	4.5	外面ユビナデ後口縁部付近ヨコナデ、内面ナデ後口縁部付近ヨコハケ。	含長石石英	淡橙褐色	P189
土師器高杯	22	－	－	－	坏部外面はヘラミガキ、内面ヨコナデ。脚部内面ヘラナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P189
須恵器杯	23	12.25	9.85	3.65	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められる。	含長石石英	灰白色	P189
須恵器杯	24	12.45	9.8	3.9	内外面ヨコナデ、底部外面は指頭圧痕が多数認められる。	含長石石英	淡黄灰白色	P189
土師器甕	25	17.4	－	－	胴部内外面ナデ、後口縁部内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P189
土師器皿	26	21.9	14.0	2.8	底部外面ユビナデ後、口縁部外面および内面をヨコナデ。搬入品	含長石石英	淡橙灰褐色	P333
土師器皿	27	18.8	12.0	3.2	底部外面ユビナデ後、口縁部外面および内面をヨコナデ。搬入品	含長石石英	淡橙灰褐色	P333
須恵器杯	28	13.0	－	－	内外面ヨコナデ、底部にはヘラ切り痕が残る。	含長石石英	淡灰色	P333
須恵器杯	29	14.0	－	－	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	P333
須恵器皿	30	－	13.0	－	内外面ヨコナデ、内面一部ナデ。２次的に火を受けた痕跡がある。	含長石石英	淡灰色	P332
土師器杯	31	9.8	9.0	2.4	内外面ヨコナデ後、底部外面ヘラケズリ。丹塗り。	含長石石英角閃石	橙褐色	溝2
土師器杯	32	12.0	10.0	2.8	内外面ヨコナデ後、底部外面ヘラケズリ。丹塗り。底部外面に線刻がある。	含長石石英角閃石	橙色	溝2
土師器杯	33	14.0	13.1	(3.0)	内外面ヨコナデ後、底部外面ヘラケズリ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器杯	34	13.4	12.0	2.8	内外面ヨコナデ後、底部外面ヘラケズリ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器杯	35	12.0	10.5	－	内外面ヨコナデ後、底部外面ヘラケズリ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器杯	36	13.4	11.6	2.3	内外面ヨコナデ後、底部外面ヘラケズリ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器杯	37	13.0	11.3	3.2	内外面ヨコナデ後、底部外面ヘラケズリ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器杯	38	15.0	11.0	2.6	内外面ヨコナデ後、底部外面ヘラケズリ。丹塗り。底部外面に線刻がある。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器杯	39	14.0	10.8	3.15	内外面ヨコナデ後、底部外面ナデ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器杯	40	16.0	8.6(14.0)	5.3(2.5)	内外面ヨコナデ後、底部外面ヘラケズリ。丹塗り。脚部内外面ヨコナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器杯	41	18.0	16.0	(4.2)	内外面ヨコナデ後、底部外面ヘラケズリ後、一部ヨコミガキ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器杯	42	17.8	9.4(16.8)	4.3(2.6)	内外面ヨコナデ後、底部外面ヨコミガキ。脚部内外面ヨコナデ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器杯	43	18.0	9.4(16.8)	4.3(2.6)	内外面ヨコナデ後、底部外面ヨコケズリ後ヨコミガキ丹塗り。脚部ヨコナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器脚	44	－	10.4	－	丹塗り。底部外面に線刻がある。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器脚	45	－	11.0	－	内外面ヨコナデ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器脚	46	－	11.2	－	底部付近ヘラケズリ脚部内外面ヨコナデ。丹塗り	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器皿	47	19.6	8.0(16.2)	4.2(2.0)	内外面ヨコナデ後、底部外面ヨコケズリ後ヨコミガキ丹塗り。脚部ヨコナデ	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器脚	48	－	8.6	－	外面底部ヘラケズリ後脚部接合部ヨコナデ、内面ヨコナデ。脚部ヨコナデ。丹塗	含長石石英	橙色	溝2
土師器皿	49	－	－	－	内面に暗紋が認められる。搬入品	含長石石英	橙灰色	溝2
土師器皿	50	19.6	－	－	底部付近ヘラケズリ、他はヨコナデ。内面は暗紋が認められる。搬入品	含長石石英	橙灰色	溝2
土師器皿	51	16.0	13.4	(1.8)	内外面ヨコナデの後底部ケズリ。丹塗り	含長石石英	橙灰色	溝2
土師器皿	52	17.0	14.0	2.4	内外面ヨコナデ、底部はヘラ切り後ナデ。丹塗り	含長石石英	淡橙灰色	溝2
土師器皿	53	20.0	17.0	1.9	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。丹塗り	含長石石英角閃石	淡橙灰色	溝2
土師器皿	54	20.6	19.2	2.9	内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ後、境部分をヨコミガキ。丹塗り	含長石石英	淡橙灰色	溝2
土師器皿	55	23.0	21.0	(2.9)	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。丹塗り	含長石石英	淡橙灰色	溝2
土師器皿	56	19.3	18.0	3.35	内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ後ヨコミガキ。丹塗り。	含長石石英	淡橙灰色	溝2
土師器皿	57	－	－	－	外面ケズリ、内面ナデ。暗紋が認められる。丹塗り	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器蓋	58	23.0	－	－	内外面ヨコナデ。丹塗り	含長石石英	淡橙灰白色	溝2
土師器皿	59	17.0	15.0	2.0	内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ。丹塗り。	含長石石英	淡橙灰色	溝2

土師器皿	60	17.0	16.0	—	内外面ヨコナデ、底部ヘラミガキ。丹塗り。	含長石石英	淡橙灰色	溝2
土師器皿	61	18.0	12.0	2.3	底部外面ヘラ切り後、内外面ヨコナデ。丹塗り	含長石石英	淡橙灰色	溝2
土師器皿	62	17.8	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	溝2
土師器皿	63	29.0	—	—	内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器椀	64	10.8	—	—	内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器椀	65	12.8	12.2	4.0	内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器鉢	66	15.4	13.6	5.4	内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器鉢	67	16.0	—	—	内外面ヨコナデ、底部ナデ丹塗り	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器鉢	68	18.1	—	—	内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器鉢?	69	—	13.7	—	外面ナデ、内面ヨコナデ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器鉢?	70	—	10.2	—	外面ヨコケズリ、内面ヨコナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
土師器高杯	71	26.0	—	—	外面ヨコミガキ。内面暗紋が認められる。	含長石石英	橙灰色	溝2
土師器高杯	72	—	—	—	外面面取りが認められる。丹塗り。	含長石石英	橙灰色	溝2
土師器高杯	73	—	—	—	外面面取りが認められ、裾部付近ヨコナデ。丹塗り。	含長石石英	橙灰色	溝2
土師器皿?	74	—	—	—	外面に線刻が認められ、「大□」と読める。	含長石石英	橙灰色	溝2
製塩土器	75	8.0	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	橙灰色	溝2
製塩土器	76	13.0	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	橙灰色	溝2
製塩土器	77	12.0	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
製塩土器	78	13.0	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
製塩土器?	79	11.0	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
製塩土器	80	9.0	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
製塩土器	81	9.0	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
製塩土器	82	—	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
製塩土器	83	9.0	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
製塩土器	84	11.4	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
製塩土器	85	11.2	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
製塩土器	86	13.0	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	橙褐色	溝2
須恵器杯	87	10.9	7.3	4.15	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰褐色	溝2
須恵器杯	88	12.8	9.9	3.7	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰白色	溝2
須恵器杯	89	12.8	9.6	3.6	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石石英	暗灰白色	溝2
須恵器杯	90	13.0	9.6	3.6	内外面ヨコナデ、自然釉が付着する。	含長石石英	暗灰白色	溝2
須恵器杯	91	—	9.6	—	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石石英	淡灰白色	溝2
須恵器杯	92	13.4	10.0	4.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石石英	淡灰白色	溝2
須恵器杯	93	13.8	10.2	4.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石石英	灰褐色	溝2
須恵器杯	94	14.4	10.4	3.8	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器杯	95	14.4	10.5	4.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石石英	淡灰白色	溝2
須恵器杯	96	—	10.0	—	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器杯	97	14.0	10.0	4.1	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ後、不定方向のナデを中央部に行う。	含長石石英	淡灰白色	溝2
須恵器杯	98	—	11.0	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器杯	99	14.6	10.5	4.3	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ後、不定方向のナデを中央部に行う。	含長石石英	黒灰色	溝2
須恵器杯	100	17.0	12.5	4.8	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ後、不定方向のナデを中央部に行う。	含長石石英	灰白色	溝2
須恵器蓋	101	13.8	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰白色	溝2
須恵器蓋	102	14.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰白色	溝2
須恵器蓋	103	14.5	—	2.8	天井部ヘラケズリ、他は内外面ヘラケズリ。	含長石石英	灰白色	溝2
須恵器蓋	104	15.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰白色	溝2
須恵器蓋	105	14.8	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰白色	溝2
須恵器蓋	106	15.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰白色	溝2
須恵器蓋	107	15.0	—	—	外面ケズリ後、内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰白色	溝2
須恵器蓋	108	17.0	—	—	内外面ヨコナデ後、内外面一部ヨコミガキ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器蓋	109	19.0	—	2.8	内外面ヨコナデ。墨書が一部に認められる。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器蓋	110	18.8	—	2.4	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器蓋	111	—	—	—	外面ケズリ後、内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡青灰色	溝2
須恵器蓋	112	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器蓋	113	20.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器蓋	114	23.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器杯	115	10.0	6.0	3.9	内外面ヨコナデ、底部はケズリ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器杯	116	13.3	9.1	3.3	内外面ヨコナデ、底部はヘラ切り痕が認められる。	含長石石英	淡橙灰色	溝2
須恵器杯	117	13.0	—	—	内外面ヨコナデ、底部はケズリ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器杯	118	13.0	8.2	4.1	内外面ヨコナデ、底部はケズリ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器杯	119	13.8	8.6	3.5	内外面ヨコナデ、底部はケズリ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器杯	120	—	9.7	—	内外面ヨコナデ、底部はケズリ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器杯	121	15.5	9.5	4.5	内外面ヨコナデ、底部はヘラ切り痕が認められる。外面と底部にヘラ記号あり。	含長石石英	灰白色	溝2
須恵器鉢	122	14.0	11.8	4.2	内外面ヨコナデ、底部はヘラケズリ。	含長石石英	淡灰色	溝2

須恵器皿	123	14.0	11.0	2.3	内外面ヨコナデ、底部はケズリ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器壺	124	9.1	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰褐色	溝2
須恵器壺	125	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器壺	126	—	13.2	—	外面タテハケ、底部付近および内面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器壺	127	28.0	—	—	外面タタキ後タテハケ後カキメ、内面胴部タタキ後、内外面ヨコナデ。ヘラ記号	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器壺	128	22.6	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器鉢	129	14.1	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器脚台	130	—	9.9	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器高杯	131	—	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	溝2
須恵器高杯	132	24.0	15.0	12.0	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰白色	溝2
土師器甕	133	30.0	—	—	外面タテハケ後、底部付近ナナメハケ。内面ケズリの後口縁部ヨコハケ後ナデ。	含長石石英金雲母	淡赤褐色	溝2
土師器甕	134	33.0	—	—	外面タテハケ、内面ヨコハケ後、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石石英	茶褐色	溝2
土師器甕	135	30.0	—	—	外面タテハケ後口縁部ヨコナデ。内面胴部ヘラナデ、口縁部ヨコハケ。	含長石石英	茶褐色	溝2
土師器甕	136	30.0	—	—	外面タテハケ後口縁部ヨコナデ。内面胴部ヘラナデ、口縁部ヨコハケ。	含長石石英	茶褐色	溝2
土師器甕	137	41.0	—	—	外面タテハケ後、内外面ヨコナデ。	含長石石英	茶褐色	溝2
土師器甕	138	23.0	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	淡茶褐色	溝2
土師器甕	139	23.6	—	—	外面タテハケ、内面ナデ後口縁部と胴部下半ヨコナデ	含長石石英角閃石	淡茶褐色	溝2
土師器甕	140	19.0	—	—	外面ナナメハケ後、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石石英金雲母	淡橙灰色	溝2
土師器甕	141	19.4	—	—	外面タテハケ、内面ヨコハケ後、口縁部付近内外面ヨコナデ。	含長石石英角閃石	淡橙灰色	溝2
土師器甑	142	—	8.0	—	外面タテハケ、内面ナデ。	含長石石英角閃石	淡橙灰色	溝2
土師器甑	143	27.4	17.9	29.2	外面タテハケ、内面ケズリの後ヘラナデ、口縁部および底部付近ヨコナデ。	含長石石英角閃石	淡橙灰色	溝2
土師器カマド	144	26.8~28.0	—	—	外面タテハケ、内面ナナメおよびヨコハケ。	含長石石英	淡橙灰色	溝2
土師器カマド	145	30.6~34.8	60.0~45.6	45.6	外面タテハケ、内面口縁部付近ケズリ、他はナデ。	含長石石英	淡橙灰色	溝2
土師器鉢	146	16.0	14.0	4.5	内外面ヨコナデ後、底部ヘラケズリ。	含長石石英	橙褐色	溝3
土師器鉢	147	18.0	—	—	外面底部ケズリ後、ヨコミミガキ、内面および口縁部付近ヨコナデ。	含長石石英	橙褐色	溝3
土師器杯	148	—	9.0	—	内外面ヨコナデ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	溝3
土師器高杯	149	—	11.0	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	橙褐色	溝3
土師器甕	150	12.6	—	—	口縁部内外面ヨコナデ、内面タテナデ。	含長石石英	淡赤褐色	溝3
須恵器壺	151	16.0	—	—	外面ヨコナデ、内面胴部にタタキ。	含長石石英	灰白色	溝3
須恵器蓋	152	—	—	—	外面ケズリ、内面ヨコナデ	含長石石英	淡灰茶色	溝3
須恵器蓋	153	16.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰褐色	溝3
須恵器蓋	154	16.0	—	—	外面ケズリ後、ヨコナデ。	含長石石英	淡灰褐色	溝3
須恵器蓋	155	20.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰褐色	溝3
須恵器壺	156	—	11.0	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	暗灰褐色	溝3
須恵器壺	157	—	12.0.	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰褐色	溝3
須恵器杯	158	14.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰白色	溝3
須恵器杯	159	14.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰褐色	溝3
須恵器杯	160	—	10.0	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰橙	溝3
須恵器杯	161	19.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	溝3
須恵器杯	162	19.3	14.0	6.4	内外面ヨコナデ、底部ヘラケズリ。	含長石石英	淡灰色	溝3
須恵器盤	163	22.0	21.0	9.0	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰白色	溝3
須恵器鉢	164	23.4	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰白色	溝3
土師器甕	165	24.6	—	—	外面タテハケ、内面一部ヨコハケ、ヘラナデ、口縁部内外面ヨコナデ。	含長石石英	橙褐色	溝3
土師器甕	166	29.6	—	—	外面タテハケ後口縁部ナデ。内面口縁部ヨコハケ。	含長石石英	茶褐色	溝3
緑釉陶器耳皿	167	—	—	—	須恵質で、灰緑色の釉が厚く全体にかかる。良質	含長石石英	淡黄緑色	包含層
緑釉陶器長頸壺	168	18.0	—	—	淡灰色のやや軟質で、濃緑色の釉が全体にかかる。	含長石石英	濃緑色	包含層
緑釉陶器皿	169	14.0	—	—	セピア色の須恵質で、濃緑色の釉が全体にかかる。近江産か。	含長石石英	濃緑色	包含層
須恵器杯	170	—	10.0	—	内外面ヨコナデ、底部外面ケズリ。底部外面に「左大」の墨書がある。	含長石石英	淡灰白色	包含層
土師器杯	171	—	11.8	—	内外面ヨコナデ。底部外面指頭圧痕が認められる。底部外面に墨書「新盆」あり	含長石石英	淡橙灰色	包含層
須恵器壺	172	—	—	—	内外面ヨコナデ、外面に自然釉がかかる。内面に漆の付着が認められる。	含長石石英	淡灰色	包含層
土師器皿	173	16.6	14.0	1.8	底部外面ヘラケズリ後、ヨコミガキ、口縁部と内面はヨコナデ。底外面ヘラ記号	含長石石英	橙褐色	包含層
土師器杯	174	—	—	—	底部外面ヘラケズリ。内面ヨコナデ。外面に「中男」か「中田」の墨書あり	含長石石英	橙褐色	包含層
須恵器杯	175	14.0	10.0	3.6	底部外面ナデの後縁辺部のみヘラケズリもしくはヘラ切り。内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	包含層
須恵器杯	176	16.0	10.0	5.2	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰色	包含層
土師器杯	177	14.4	12.0	2.4	底部縁辺部ヘラケズリもしくはヘラ切り。内外面ヨコナデ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	包含層
土師器鉢	178	—	10.8	—	内外面ナデ。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	包含層
土師器高杯	179	—	—	—	内外面ナデ、面取りする。丹塗り。	含長石石英	橙褐色	包含層
土師器甕	180	22.0	—	—	内外面ナデ。	含長石石英	茶褐色	包含層
土師器甕	181	30.0	—	—	外面タテハケ後口縁部付近ヨコナデ。内面口縁部ヨコハケ。	含長石石英	茶褐色	包含層

図155　平安時代後半・鎌倉時代遺構配置図

V　平安時代後半・鎌倉時代（図155）

平安時代末から鎌倉時代前半の時期の遺構が主体である。平安時代後半の遺構で明確なものとしては、2間×4間の掘立柱建物が1棟だけで、柱穴から黒色土器の椀と土師質土器の椀が出土している。包含層から出土する土器もこの期のものは少ない。

平安時代末から鎌倉時代前半の様相は、調査区北西部には遺構の認められない空白部分があり、周囲に柱穴や土壙が並んでいる。遺構の切り合い関係から前後の2時期に分けられる。前期の遺構としては、土壙が調査区中央のやや南よりの位置に東西方向に並んでいる。そして、それぞれの配置に規則性が認められ、切り合い関係もないことから、かなり近接した時期に掘られたものと思われる。また、それらの土壙からは土師質土器が多量に出土しているが、完形、もしくは完形に近い状態で出土するものと、比較的小さな破片で出土するものの二者に大きく分かれるようである。配管部分の調査区でもこれと似て土器が多量に入る似た土壙の一部が確認されており、このような土壙は調査区中央部だけに集中するのではなく、ある程度の広がりをもって分布しているようである。同種の土壙のうち配管部分で検出されたP10から出土した中国製陶器片と、本体部分の調査区で検出されたP110から出土した中国製陶器片とが接合しており、これらの土壙群は極めて近接した時期に埋没したと思われる。柱穴については、調査区の範囲が限定されているため明確な復原は難しいが、建物になるものはなく、調査区中央部の土壙群を囲むような柵列になりそうである。

後期の遺構としては、掘立柱建物が2棟検出されている。後期の遺構に伴う遺物は非常に少ないため明確な時期はよくわからないが、一応前期が12世紀末、後期が12世紀末から13世紀初頭と考えられる。

中世に属する遺構、遺物の量はこの時期以降急速に減少し、明確な遺構が形成されるのは17世紀に入ってからである。

建物7（図156 、157）

調査区南半で検出された掘立柱建物で、南側については近世の溝により削平されているため明確ではないが、柱穴の底部付近の残存部分を1つ検出できた。一応それを手掛かりに桁行4間、梁間2間の柱構成が推定され、棟方向はN－70°－Wを示す。北側の柱穴はP110により削平されている部分もある。柱穴の平面形は円形を呈し、径0.3～0.4mの掘り方で、柱痕跡から柱の径は0.14～0.16mが推定される。遺構の検出面は3.0～3.1m付近である。

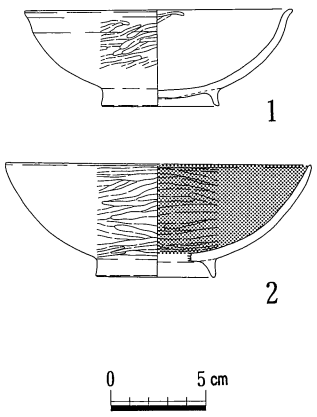


図156　建物7出土遺物（PA）

遺物は各柱穴の埋土から出土しているが、細片が主である。柱穴Aからは、P110により半截された椀が2個体出土した。出土状況から、元来は完形の椀を柱に添えて埋めていたと考えられる。椀は内外面をヨコ方向にヘラミガキし、内面を黒色処理した黒色土器と、内外面を丁寧にヘラミガキした土師質土器である。これらから建物7は、11世紀中葉の時期と考えられる。

建物8（図158、159）

調査区東側で検出された掘立柱建物で、桁行3間、梁間2間に南側へ庇が付属する柱構成である。棟

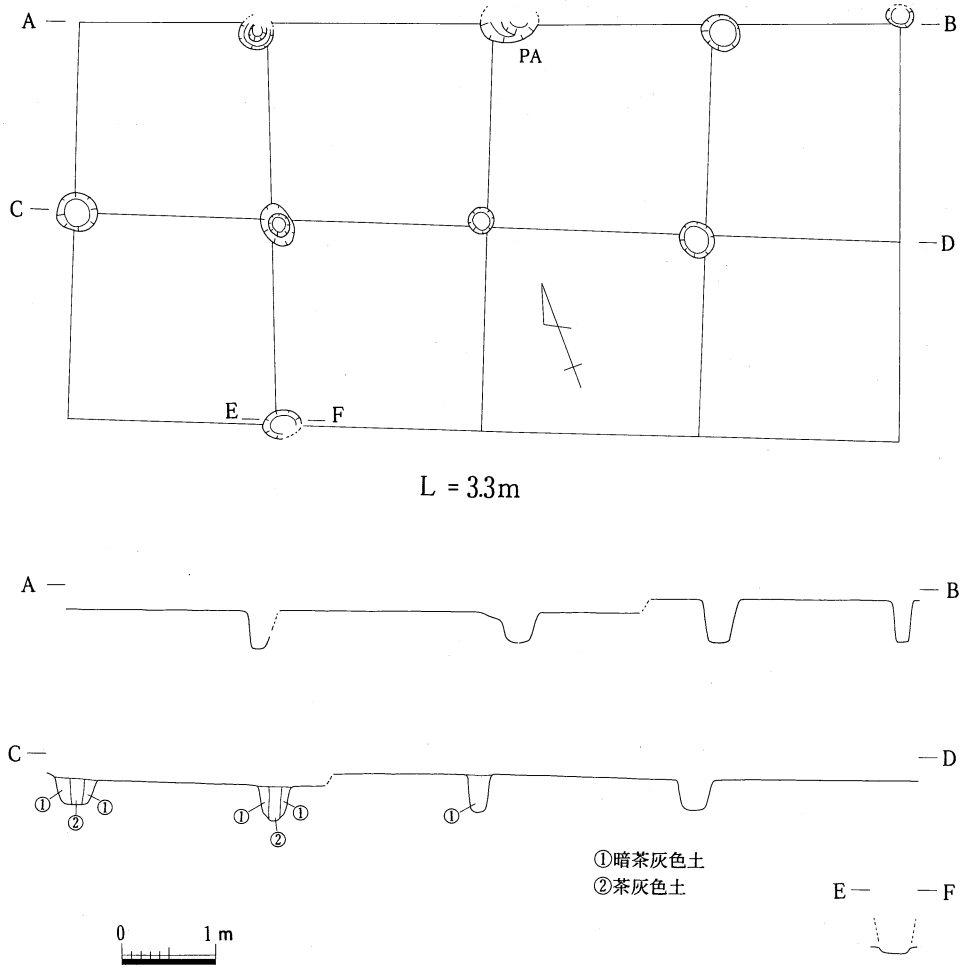


図157　建物 7 実測図

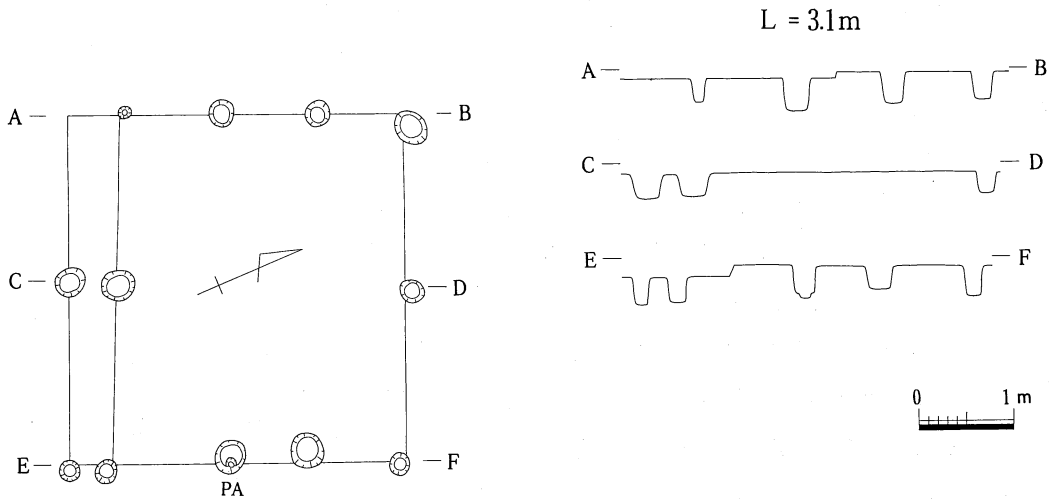


図158　建物 8 実測図

方向はN－75°－Wを示す。柱穴の平面形は円形を呈し、径0.1～0.4mの掘り方で、柱痕跡から柱の径は0.1mほどと推定される。遺構の検出面は3.0m付近である。

遺物は、柱穴Aから図化できるほどの小皿片が出土しているが、他の柱穴からは土師器の小片が若干出土しているだけである。ただこの建物は、円形の平面形をした土壙であるP84と重なっており、両者の遺構に時期差があることが推定される。建物8の柱穴内から出土した土器の中に、小片ではあるものの、やや高台の突出度が低い土師質土器椀の破片が認められることから、P84→建物8の順序が推定される。

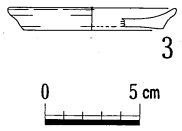


図159　建物8出土遺物

建物9（図160）

調査区西南部で検出された掘立柱建物で、桁行2間、梁間2間以上の柱構成である。南半については、近世の溝により上面が削平されていることから、柱穴の底部付近をどうにか検出することができたのみである。北半部分での遺構の検出面は3.0m付近である。

遺物は、柱穴掘り方から土師質土器の小片が若干出土したのみである。北側の柱穴が、柱穴列4を切っており、12世紀後半の時期と推定される柱穴列4よりも時期が下がると考えられる。ただ、出土した土器については、柱穴列4の時期のものとそれ程時期差はないようで、建物8に近い時期と推定される。

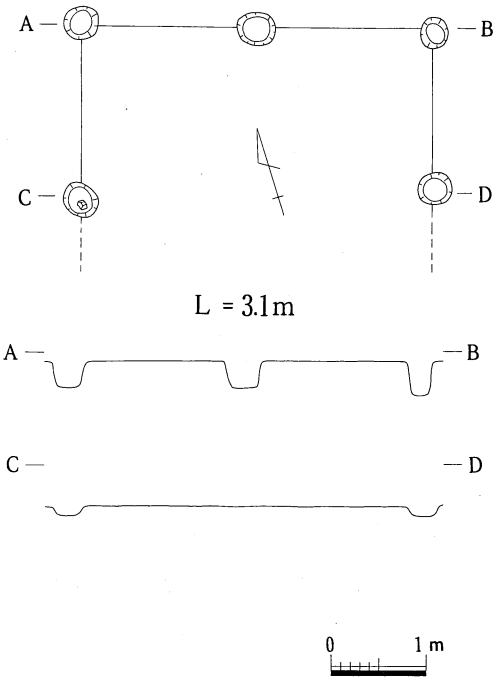


図160　建物9実測図

柱穴列1（図161）

調査区西側で検出された南北方向の柱穴列で、4つの柱穴が並ぶ。柱穴の平面形は円形を呈し、径0.15～0.2mの掘り方である。柱の間隔は、1.3～1.6mで、遺構の検出面は2.2m付近である。この柱穴列の南側は、東西方向の柱穴列である柱穴列4の延長部分でとぎれており、調査区中央付近の土壙群を「コ」字形に囲む柵列の西側部分にあたると考えられる。しかし、土壙群の一部であるP50が柱穴列1の西側にも存在することや、比較的小規模な柱穴列であることから、この柱穴列は東西方向に並ぶ土壙群を南北方向に区切るいくつかある柱穴列の1つと考えるのが妥当であると思われる。

遺物は、土師質土器の小片が出土している。

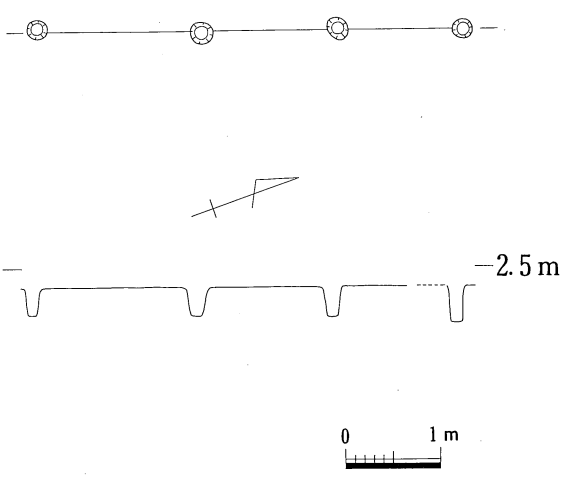


図161　柱穴列1実測図

柱穴列２

（図162 、163）

調査区東側で検出された南北方向の柱穴列で、７つの柱穴が並ぶ。柱穴の平面形は円形を呈し、径0.3～0.4ｍの掘り方である。柱の間隔は、1.6～1.7ｍで、柱痕跡から柱の径は0.12～0.16ｍと推定される。遺構の検出面は2.4ｍ付近である。この柱穴列は調査区外へも続いている可能性もあるが、西側の南北方向の柱穴列と同様に南側は調査区内で検出した部分でとぎれる可能性も考えられる。一応ここでは、調査区中央付近の土壙群を南北方向に区切る柵列の東側部分にあたると考えておきたい。

遺物は、柱穴の掘り方から土師質土器の小片が若干出土しているが、図化できたものは、柱穴Ａから出土した小皿のみである。

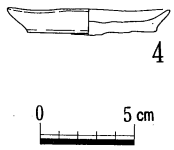


図163　柱穴列２出土遺物（PA）

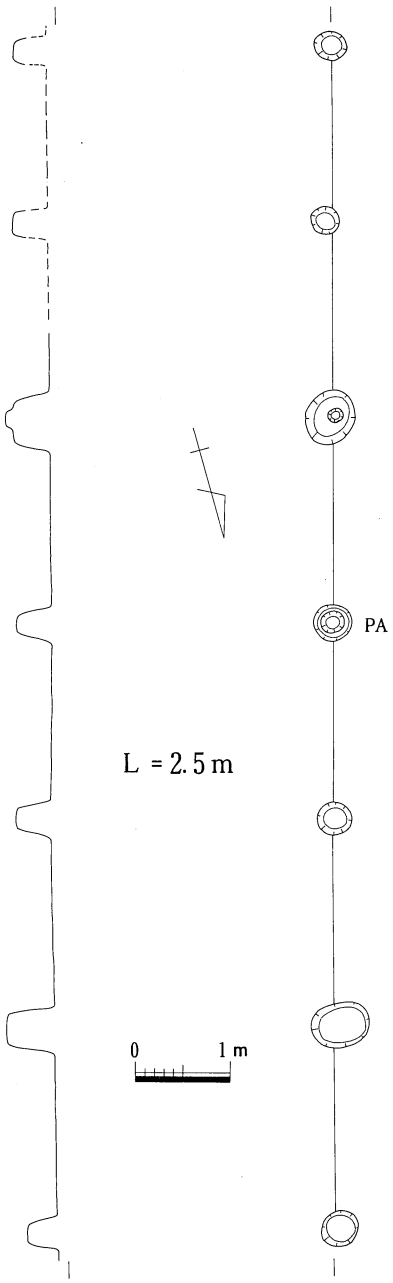


図162　柱穴列２実測図

柱穴列３（図164）

調査区中央部のやや南側で検出された東西方向の柱穴列で、５つの柱穴が並ぶ。柱穴の平面形は円形を呈し、径0.25～0.3ｍの掘り方である。柱の間隔は、1.9～2.0ｍで、柱痕跡から柱の径は0.16ｍほどと推定される。遺構の検出面は2.4～2.6ｍ付近である。この柱穴列は南側の柱穴列４と平行しており、北にあるＰ110の長軸とほぼ同じ長さである。この柱穴列は、柱穴列４やＰ110と一連のものと推定される。

遺物は、土師質土器の小片が柱穴埋土から若干出土した。

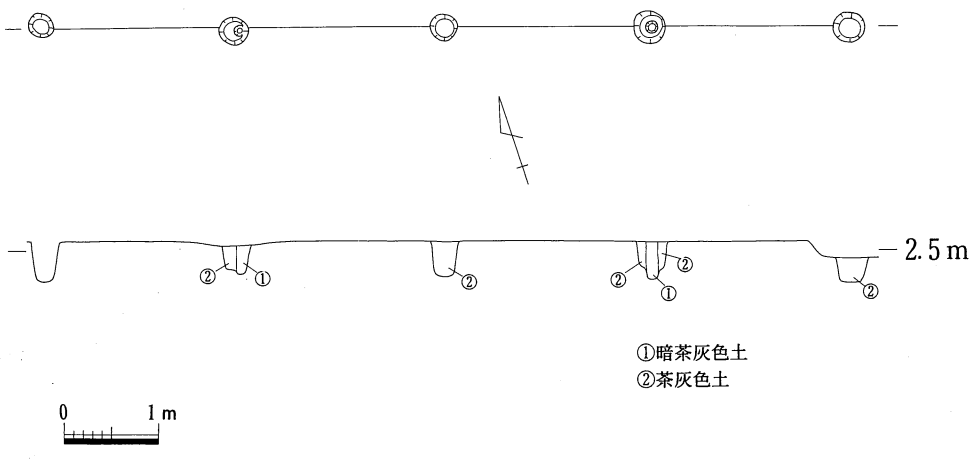


図164　柱穴列３実測図

柱穴列４（図165、166）

調査区中央部南端で検出された東西方向の柱穴列で、９つの柱穴が並ぶ。柱穴の平面形は円形を呈し、径0.2～0.4ｍの掘り方である。柱の間隔は1.6～2.0ｍであるが、東側については近世の遺構によりかなり削平を受け、残存してはいないが、西側からの柱間隔のながれからもう１つ存在していたと思われる。当調査区内で検出された柱穴列のうち最も長い。調査区中央付近の土壙群を「コ」字形に囲む柵列の南側部分にあたる。この柵列で囲まれる部分は東西20ｍ、南北は東側で12ｍ、西側で５ｍである。

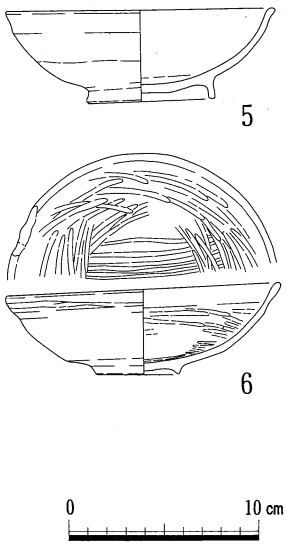


図166　柱穴列４出土遺物

遺物は、柱穴Ｂから椀が２個体まとまって出土した。１つは当地域では一般的な土師質土器で、もう１つは畿内産の瓦器で和泉型といわれるものである。瓦器は備中においてはあまり出土例がなく、当例は極めて珍しいものである。また、瓦器椀と土師質土器椀が実年代を記した題籤（1183年）とともに出土している例が邑久町助三畑遺跡にあり(1)、柱穴Ｂから出土した椀の特徴や法量はそれらとよく似ている。したがってこの柵列の時期は、12世紀末頃と推定される。

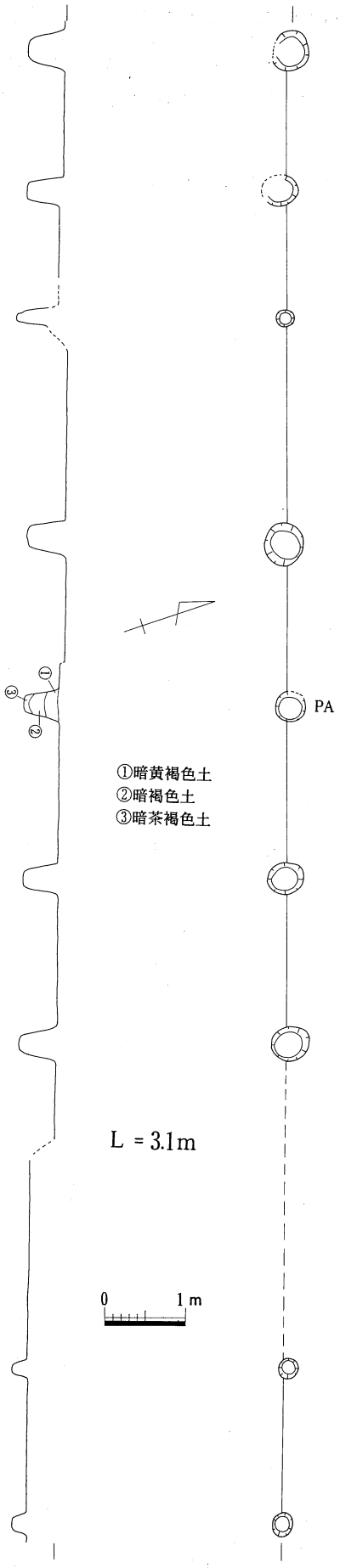


図165　柱穴列４実測図

柱穴列５（図167）

調査区東側で検出された南北方向の柱穴列で、６つの柱穴が並ぶ。柱穴の平面形は円形を呈し、径0.2～0.4ｍの掘り方である。柱の間隔は、0.3～0.8ｍで、柱痕跡は認められない。遺構の検出

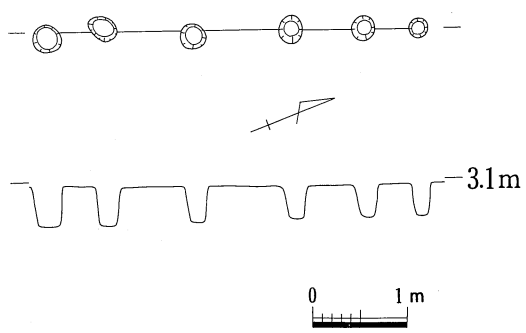


図167　柱穴列５実測図

面は3.0m付近である。この柱穴列は、西側の南北方向の柱穴列と同様に短くとぎれている。柱穴列2と平行することから、南北方向を柱穴列2と共に二重に区切る柵列であると考えておきたい。

遺物は、柱穴の掘り方から土師質土器の小片が若干出土している。

P4（図168、169）

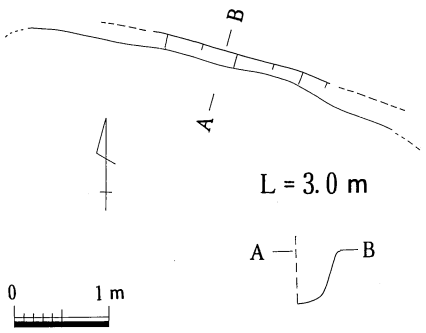


図168　P4実測図

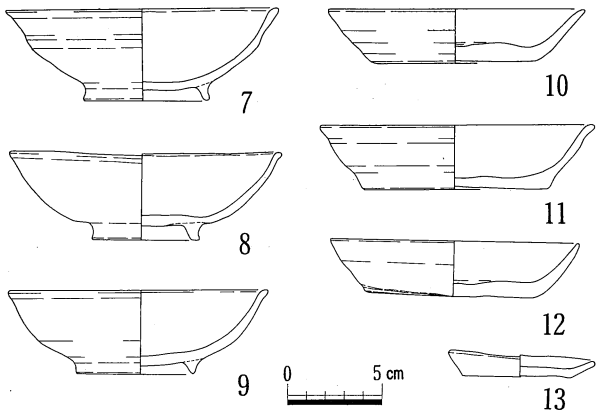


図169　P4出土遺物

配管部分で検出した遺構で、大半が調査区外へ出ることから、土壙であるのか溝であるのかは不明である。しかし、西側に隣接するP10と方向や形態が似ており、溝状の長方形をした土壙が並んでいることも推定される。遺構の検出面は3.0m付近で、断面形は逆台形に近い形といえそうである。埋土は1層で、土器が多量に含まれている。

遺物は全て土師質土器で、椀と杯と小皿がある。

P10（図170、171）

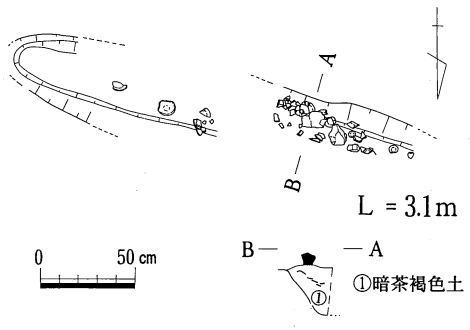


図170　P10実測図

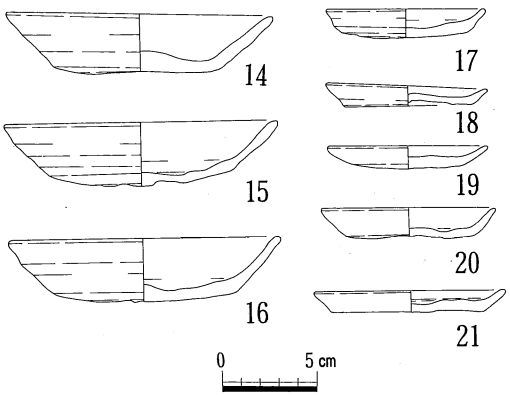


図171　P10出土遺物

配管部分で検出した遺構で、調査区の幅や近代のゴミ穴による削平のため全形ははっきりしないが、溝あるいは溝状の形態をした土壙であると推定される。遺構の検出面は3.0m付近で、断面形は逆台形もしくはU字形である。埋土は1層で、土器が多量に含まれているが、土器に混じって角礫も散見される。

遺物は全て土師質土器で、杯と小皿がある。完形の土器と小片の土器が混在していた。中国製の黄釉陶器片が1点出土したが、これはP110出土のものと接合した。

P37（図172、173）

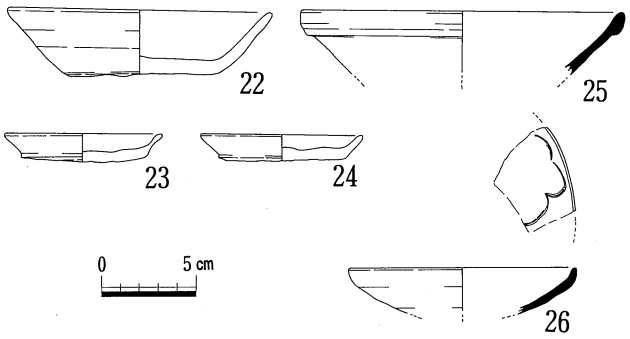


図173　P37出土遺物

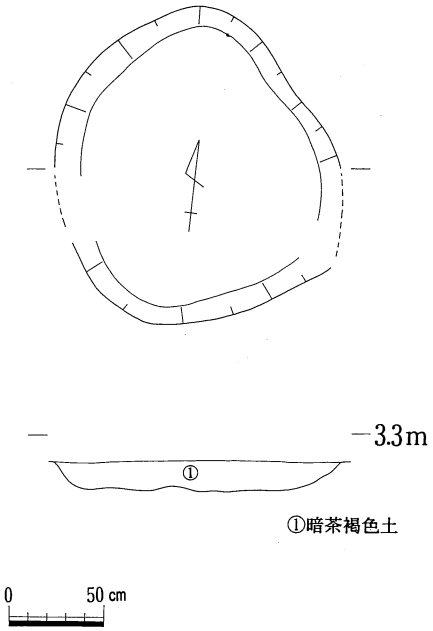


図172　P37実測図

調査区中央東寄りで検出された土壙で、部分的に配管で削平されているものの、ほぼ全形が検出された。長径1.7m、短径1.5mの長楕円形の平面形で、遺構の検出面は3.1m付近である。断面形は逆台形で、底部は平坦でなくやや凹凸が認められる。埋土は1層で、土器が若干含まれている。

遺物は、土師質土器の杯や小皿と白磁の椀や同安窯系の青磁の皿がある。土師質土器は破片に混じって完形の土器も認められるが、磁器は全て小片ばかりであった。

P58（図174、175、176、177、178）

調査区南半の西側で検出された土壙で、東西方向に規則的に並ぶ土壙群のうちの1つである。長辺2.4m、短辺1.7m、幅1.9mの台形をした平面形で、遺構の検出面は2.9m付近である。断面形は方形であるが、底部付近はやや傾斜が緩くなっている。底部は若干凹凸が認められ、南半は北側より2㎝程窪んでいる。底部付近で基盤層と同じ土層がブロック状に認められる以外は基本的に1層で、土器が多量に含まれている。土器は破片も多いが、完形もしくは完形に近いものも多く、埋土中には魚の骨や鱗も検出されていることから（附章Ⅴ参照）、P58は食事をした残滓とそれに用いた食器を投棄した土壙であることが推定される。したがって、土器を多量に含む土壙が群をなしていることは、この周辺で大きな宴会の催されたことを示していると考えられる。

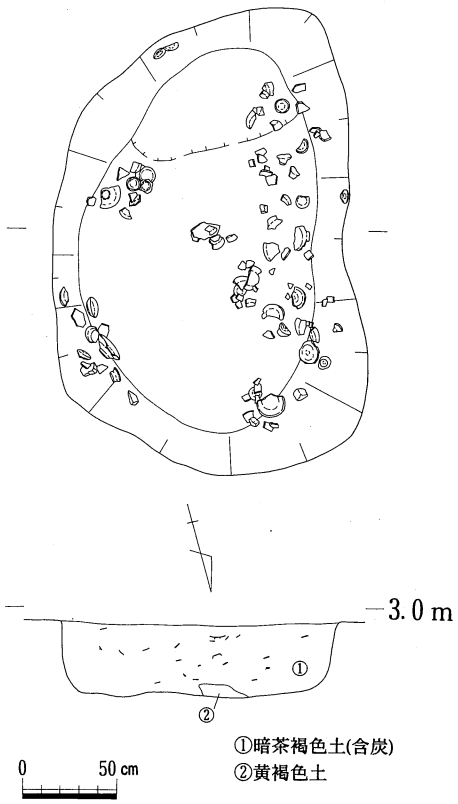


図174　P58実測図

遺物は、多量の土師質土器と陶器、陶磁器がある。土師質土器は、椀、杯、皿、高台付大皿と鍋である。皿は浅い皿と深い皿の2形態がある。浅い皿には灯明皿に用いられた痕跡の認められるものもあるが、大半にはそういった痕

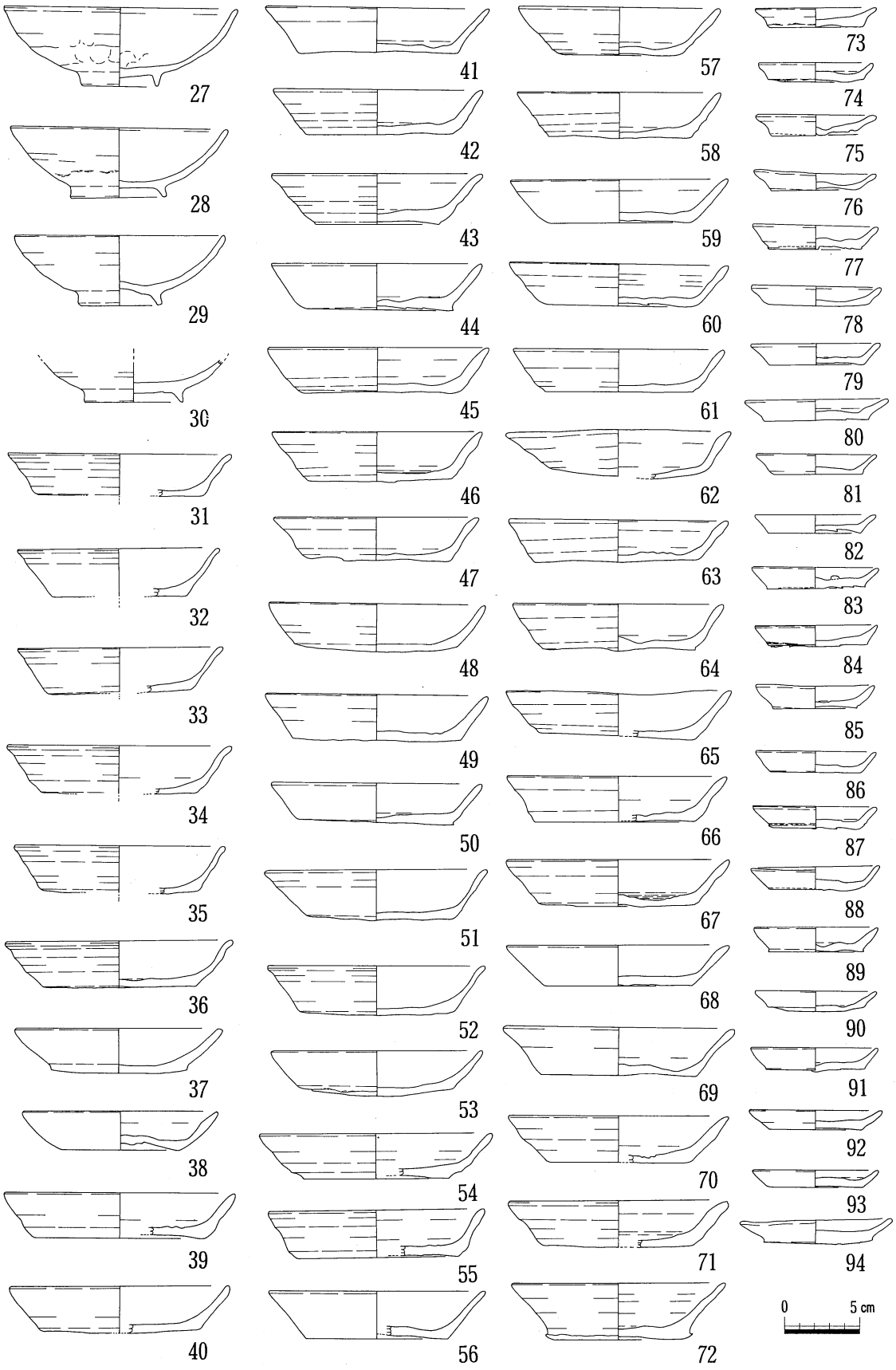


図175　P58出土遺物（1）

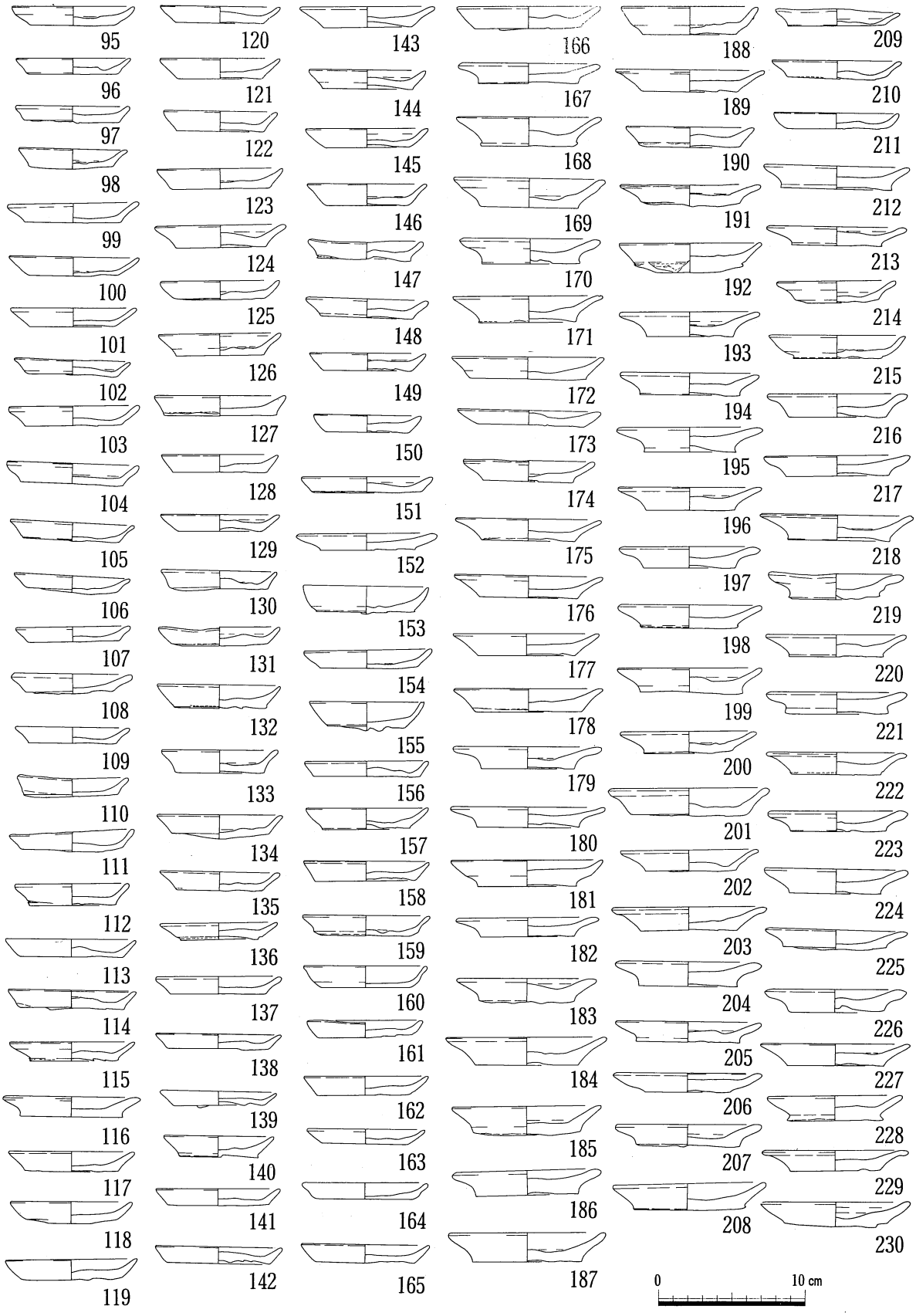


図176　P58出土遺物（2）

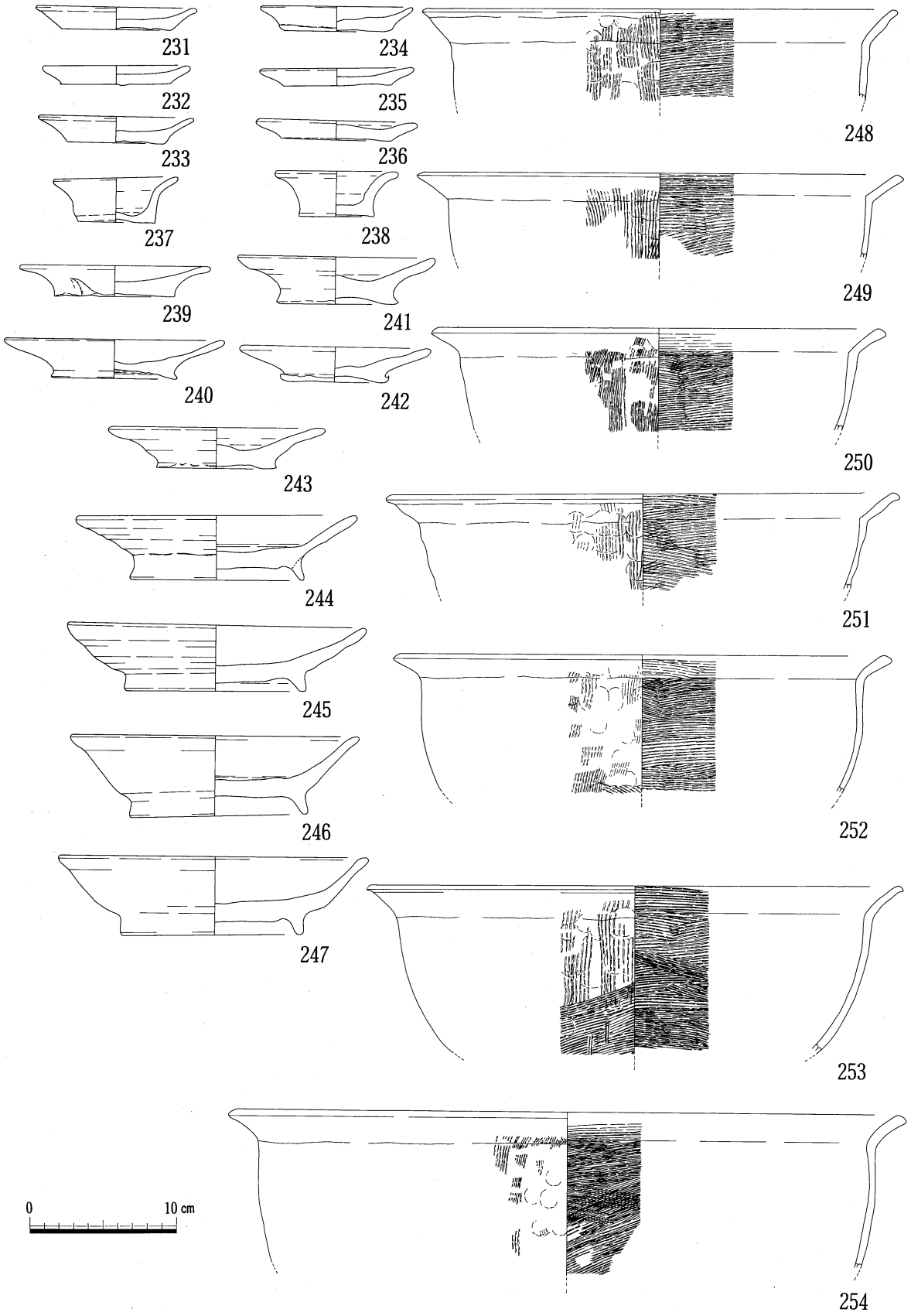


図177　P58出土遺物（3）

跡は認められない。このことは近世の灯明皿のように、皿を幾枚も重ねて使用したのか、もしくは灯明皿以外になんらかの食器として用いたのかもしれない。深い皿には灯明皿に用いた痕跡のあるものはないが、底部中心付近を穿孔したものや、底部を薄くするためヘラ切りをぎりぎりでおこなった結果、穴のあいたままのものがある。深い皿には必ずしも液体をいれていたということではないようであり、口径的にみて浅い皿の台として用いたと考えるのが妥当なようである。また深い皿は浅い皿よりも出土する量が少なく、複数の皿と深い皿が組み合わさるのかもしれない。出土した土師質土器のうち最も多いのは皿で、次に杯の順であり、中部瀬戸内地域において該期に多く出土する椀などは破片も含めても４個体しかなかった。他に魚住焼の捏ね鉢が１点出土している。陶磁器は白磁の椀や皿と、同安窯系の青磁の椀や皿があるが、いずれも破片である。他に滑石製の石鍋の底部付近の破片が１点出土しており、外面には煤が付着している。

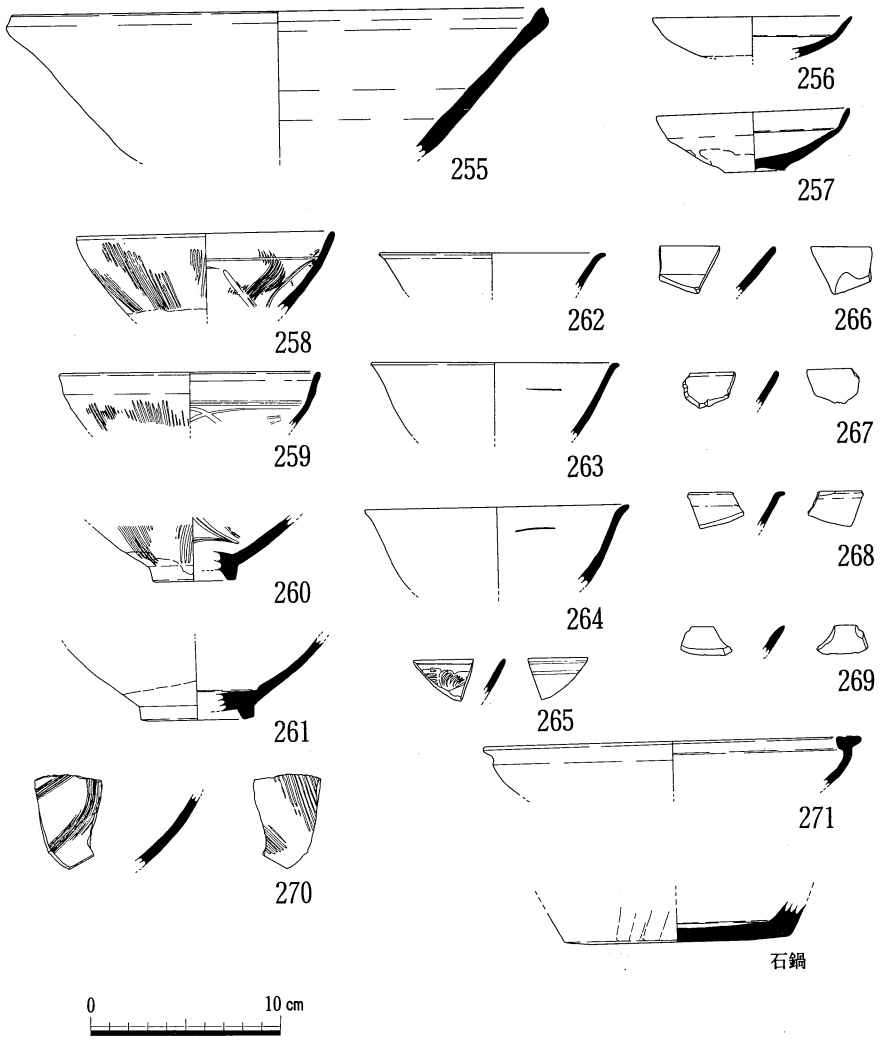
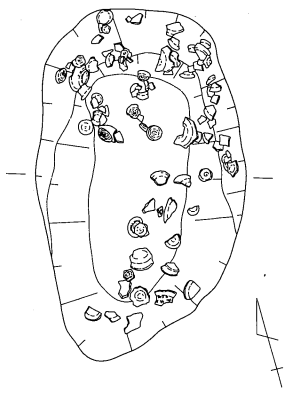


図178　P58出土遺物（４）



P80（図179、180 、181）

調査区南半の西側で検出された土壙で、P50の東側に隣接する。長軸をP50に合わせているが、規模は小さい。長径1.8m、短径1.1mの長楕円形の平面形をしており、遺構の検出面は2.8m付近である。断面形はU字形で、中心部付近がやや深くなっている。埋土は１層で、土器が多量に含まれる。土器は破片も多いが、完形もしくは完形に近いものも多く、埋土中にランダムに含まれており、埋土

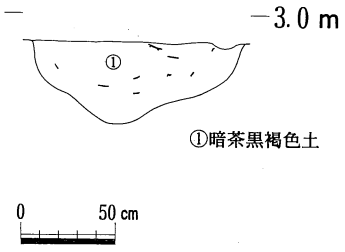


図179　P80実測図

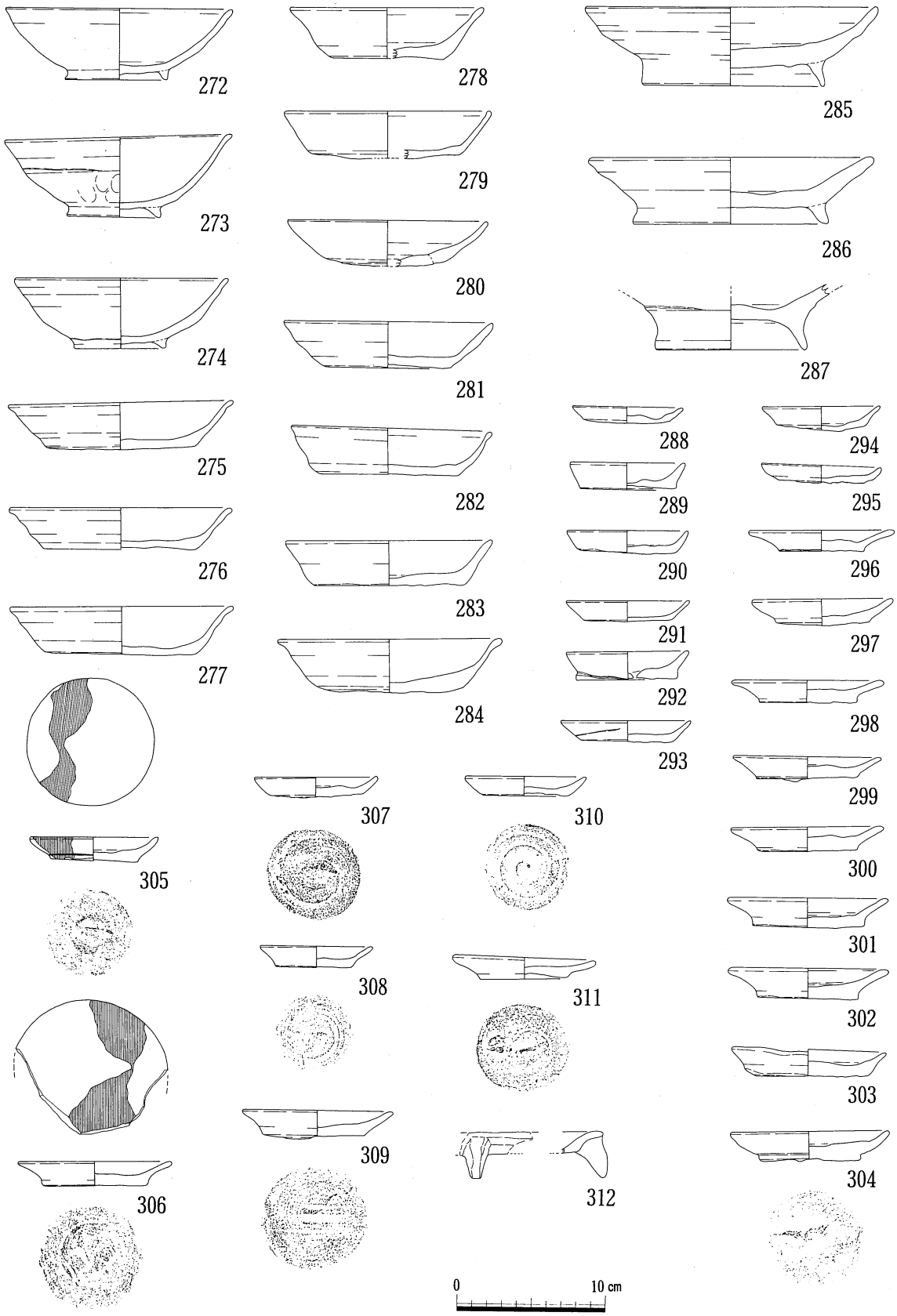


図180　P80出土遺物（1）

と土器は同時に埋没したと考えられる。

遺物は、多量の土師質土器がある。椀、杯、皿、高台付大皿、鍋などがあるが、P58と同様に椀は3～4個体ほどで非常に少ない。杯は底部の調整をみると、ヘラ切りのままのものと、ヘラ切りの後に板状工具による圧痕が認められるものとがある。また、口縁部や体部のヨコナデにもいくつかのパターンがある。胎土も白色系のものと橙色系のものとがあり、白色系のものは中部瀬戸内地域では椀に用いられる場合が多い。しかし当遺跡出土の中世土師質土器は、椀の比率が極端に少ないことに比例してか、橙色系のものが大半である。椀の中には（273）のように体部中央付近に接合痕の観察されるものがある。杯についても（280）のように断面に接合痕が認められるものがあり、杯が円板あるいは円柱状の粘土の上に粘土紐を巻き上げて成形したことが推定される。椀の成形については、杯の底部を押し出しておこなうことが指摘されており、椀に残る接合痕は杯成形の際の痕跡と考えられる。皿には、煤の付着したものが2点（305）、（306）あり、灯明皿として用いられたものと考えられる。皿も口縁部の短いものや長いもの、底部の厚さの厚いものと薄いものなどいくつかの形態差がある。底部外面についても、ヘラ切りのままのものと、板状工具による押圧が認められるものと、ハケ状工具によりヘラ切り痕を消したものとがある。1点だけではあるが、脚を付属させた皿（312）も出土している。

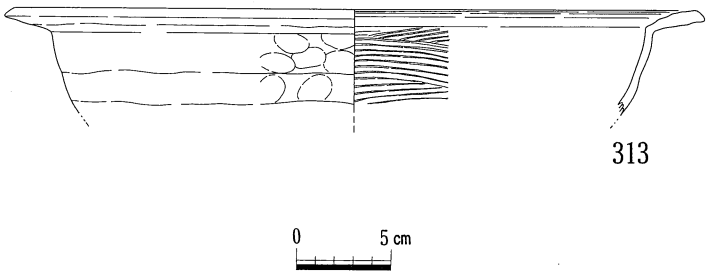


図181　P80出土遺物（2）

P84（図182、183）

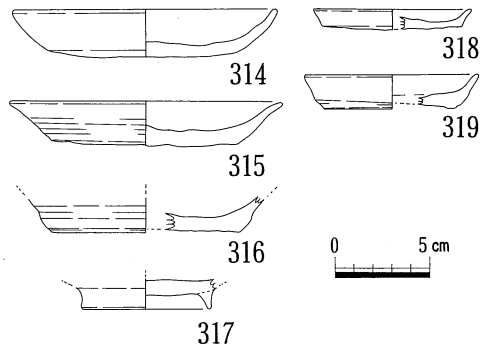
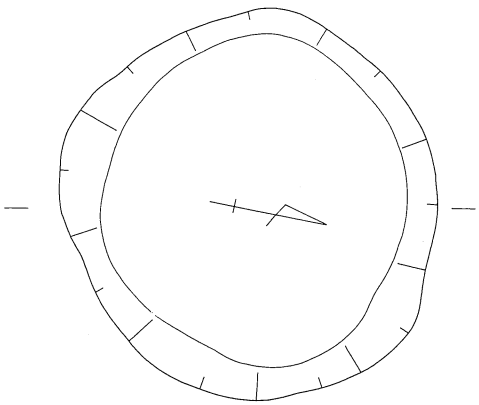


図183　P84出土遺物



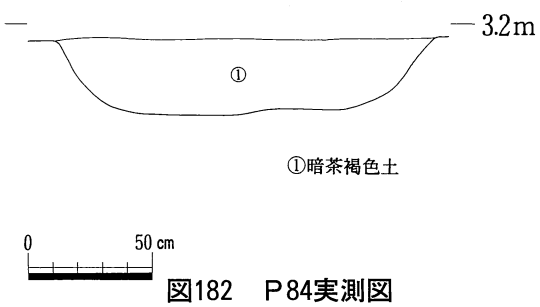
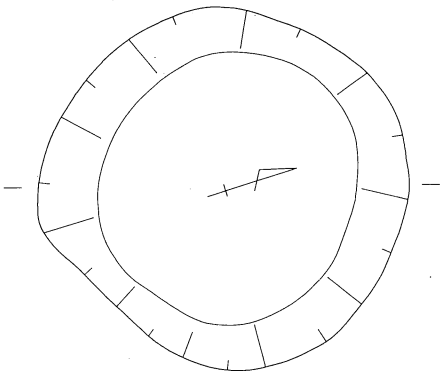


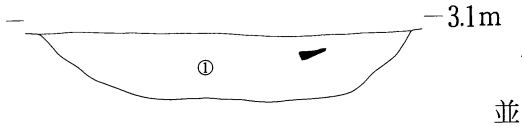
図182　P84実測図

調査区中央東側で検出された土壙で、調査区中央に列状に並ぶ土壙群の東端にあたる。径1.5mの円形の平面形を呈しており、検出面は3.1m付近である。断面形は逆台形で、底部は比較的平坦である。埋土は1層で、土器の小片が多く含まれる。しかし、完形あるいは完形に近いものはほとんどなかった。

遺物は、図化できたものはわずかだが、大半は杯か皿である。

P94（図184、185）





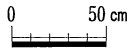


図184　P94実測図

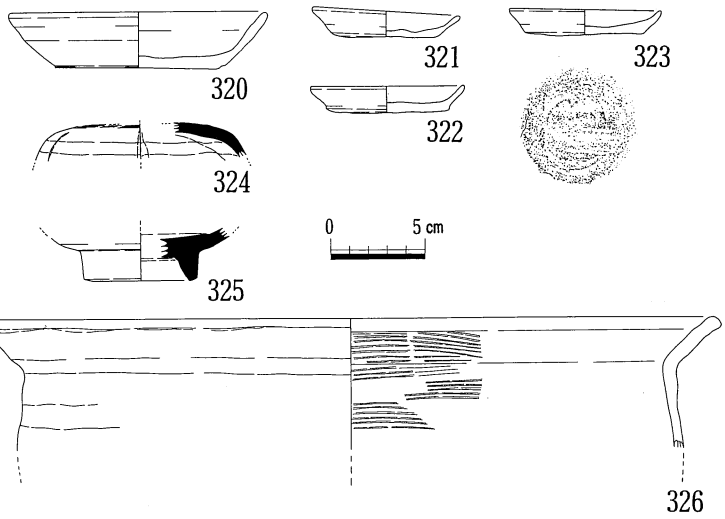


図185　P94出土遺物

調査区中央付近で検出された土壙で、東西方向に規則的に並ぶ土壙群の１つである。径1.9ｍの円形の平面形を呈しており、検出面は3.0ｍ付近である。断面形は逆台形で、底部はやや中央付近が高くなっている。埋土は１層で、土器の小片が多く含まれる。しかし、完形あるいは完形に近いものはほとんどなかった。Ｐ84と遺物の構成や埋土の状況がよく似ている。ただ、２点だけではあるが白磁が認められた。また、土器に混じって角礫も数点認められた。

遺物は、図化できたものは、杯、皿、鍋、白磁の合子の蓋と椀の破片だけで、土師質土器の椀については破片も認められなかった。最も多いのは皿で次に杯の順である。

P109（図186、187）

調査区中央東寄りで検出された土壙で、東西方向に規則的に並ぶ土壙群の１つである。北側が削平をうけているため全形は不明だが、隣接する土壙と同様に円形、もしくは長楕円形の平面形が推定される。南側には長さ1.4m、幅1.4ｍほどの平坦面が付属する。この部分から土壙中央部にかけて土器がまとまっている。遺構の検出面は3.1ｍ付近で、断面形は逆台形である。埋土は１層で、土器が多量に含まれる。土器は破片の量も多いが、完形もしくは完形に近いものも多く、埋土中にランダムに含まれており、埋土と土器は同時に埋没したと考えられる。

遺物は土師質土器が大半で、瓦の破片が１点ある。土師質土器は椀、杯、皿、鍋で、椀は２～４個体出土している。大半は杯と皿である。皿は、(353) や (369) のようにヘラ切りの際にヘラがずれた痕跡が

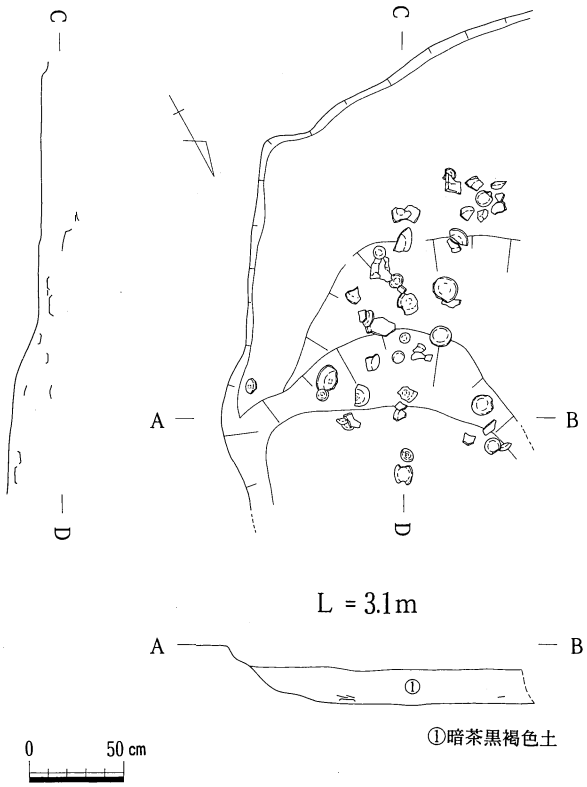


図186　P109実測図

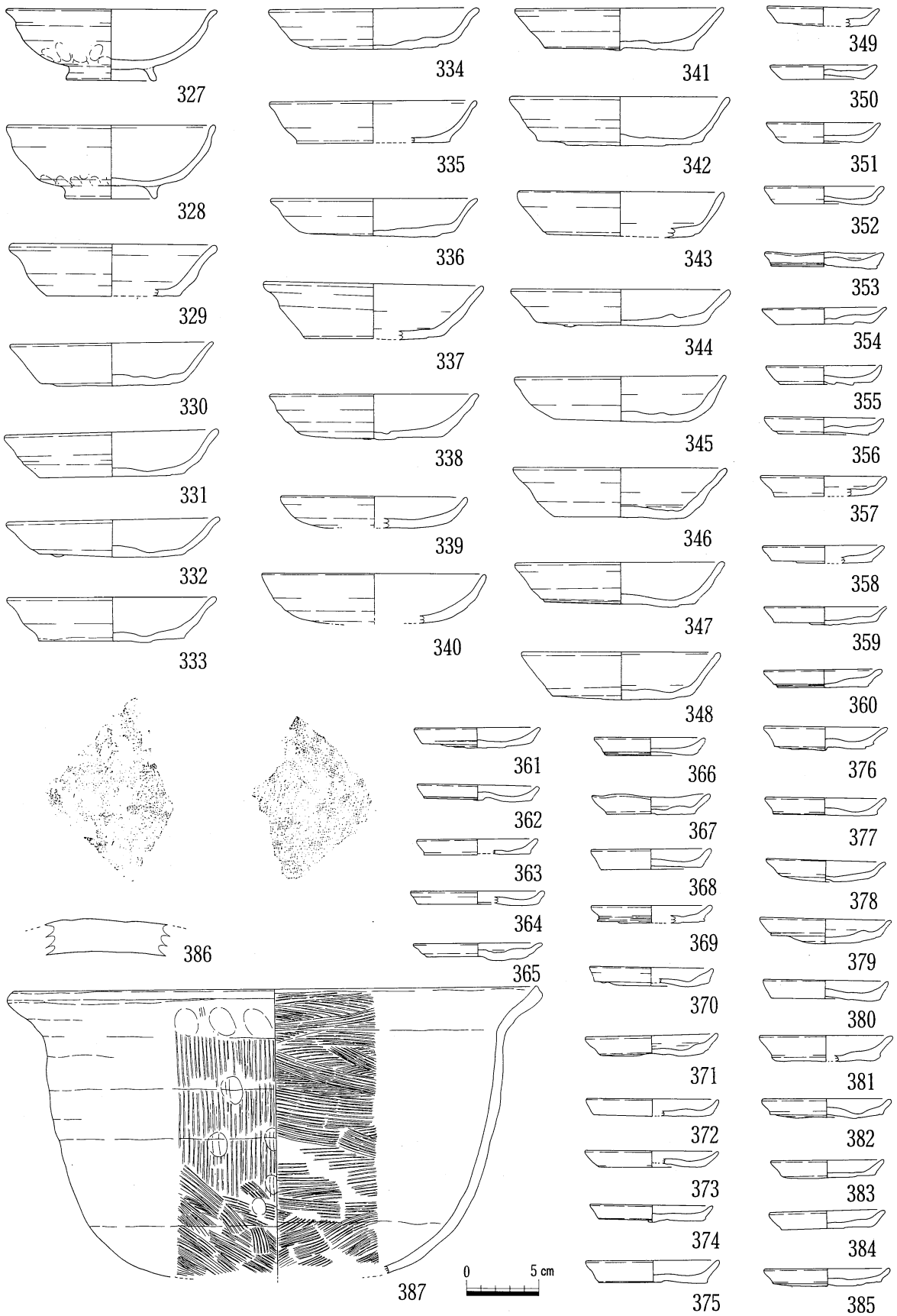


図187　P109出土遺物

側面に残るものがある。杯や皿については底部外面に板目痕の認められるものがあるが、それらの底部内面中央付近にはナデた痕跡が認められる。おそらく底部をヘラ切り後中央付近の切り残した部分を板で押さえ、その際に内面が盛りあがるため、それをナデて平坦にしたのであろう。また、多くの皿が出土したにもかかわらず、深い形態のものは全くなく、浅い形態のものばかりであった。高台付大皿もみられなかった。当遺跡で、土器が多量に含まれる土壙の器種組成は、杯と浅い形態の皿が数的に卓越しており、これについては共通しているものの、その他の器種については微妙に異なっている。

P119（図188、189）

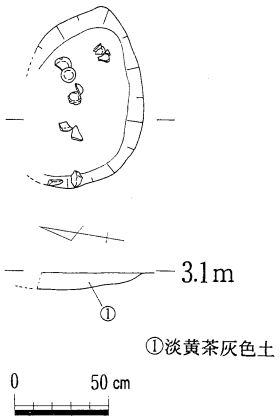


図188　P119 実測図

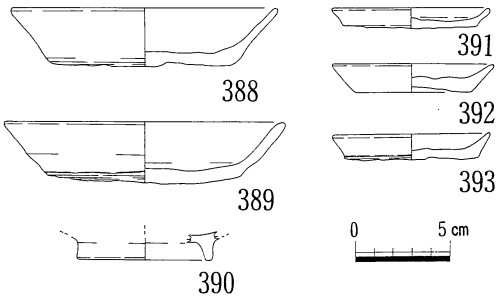


図189　P119 出土遺物

調査区中央東寄りで検出された土壙で、P109により北半を削平されているが、長径１ｍ、短径0.6ｍの楕円形をした平面形が推定される。遺構検出面は3.1ｍ付近で、断面形は浅い皿状を呈する。埋土は１層であるが、他の土壙よりも基盤層が含まれているためか、やや黄色気味である。遺物は埋土中にランダムに含まれており、埋土と土器は同時に埋没したと考えられる。完形の杯と皿と椀の小片が検出された。

P134（図190、191）

調査区中央東寄りで検出された土壙で、東西方向に規則的に並ぶ土壙群の１つである。長径2.6ｍ、短径1.8ｍの楕円形を呈しており、遺構検出面は3.1ｍ付近である。断面形は逆台形で、底部は平坦ではなくやや凹凸が認められる。埋土は１層で、土器が多量に含まれる。土器は破片も多いが、完形もしくは完形に近いものも多く、埋土中にランダムに含まれている。埋土と土器は同時に埋没したと考えられるが、完形の土器は西側にかたまる傾向がある。

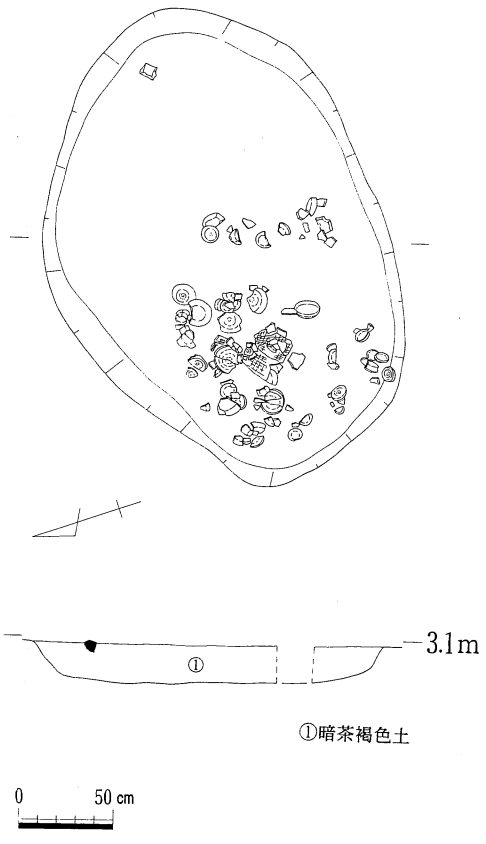


図190　P134 実測図

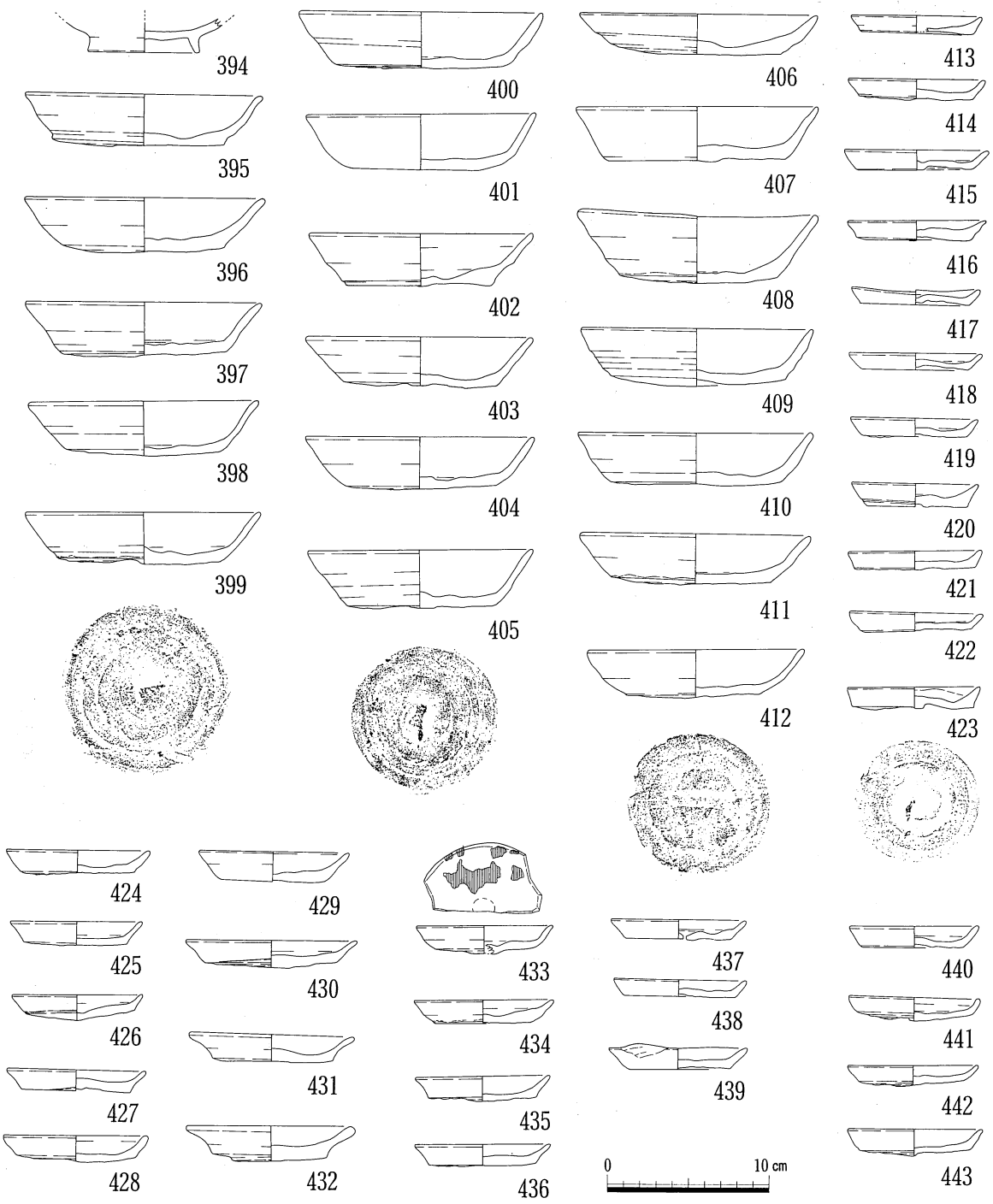


図191　P134 出土遺物

遺物は土師質土器が主体で、平瓦の破片も１点出土した。椀は底部付近の破片が１点のみで、他は杯と皿である。杯は底部の調整や口縁端部および体部の形態にいくつか種類がありそうである。皿にしても（431）、（432）のように底部が厚くやや口径の大きいものも認められる。また、（433）には煤が付着しており、灯明皿に用いられたと推定される。多数の皿が出土しているが、煤が付着しているのはこれ１点だけであった。

P135（図192、193）

調査区南西部付近で検出された土壙である。長径1.6m、短径1.1mの楕円形の平面形をしているが、さらに径0.8mの円形部分が窪んでいる。遺構検出面は3.0m付近で、断面形はやや中央部が深くなるものの皿状を呈している。埋土は1層で、土器が多量に含まれるが、遺構上層に偏る傾向が看取された。

遺物は土師質土器が主体で、白磁や捏ね鉢も認められた。土師質土器のうち最も多いのは皿で、次は杯であった。椀は図化できた1点（444）が出土しただけである。捏鉢（456）は口縁を内側に折り返し、口縁部と口縁部下で二本の凸帯をつくりだしており、これは中国製のもので、北九州の博多周辺に分布が集中している(2)。

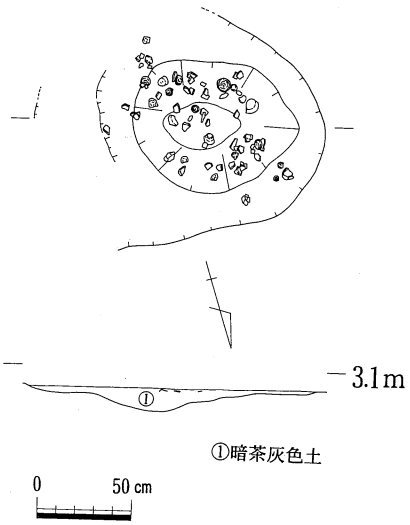


図192　P135 実測図

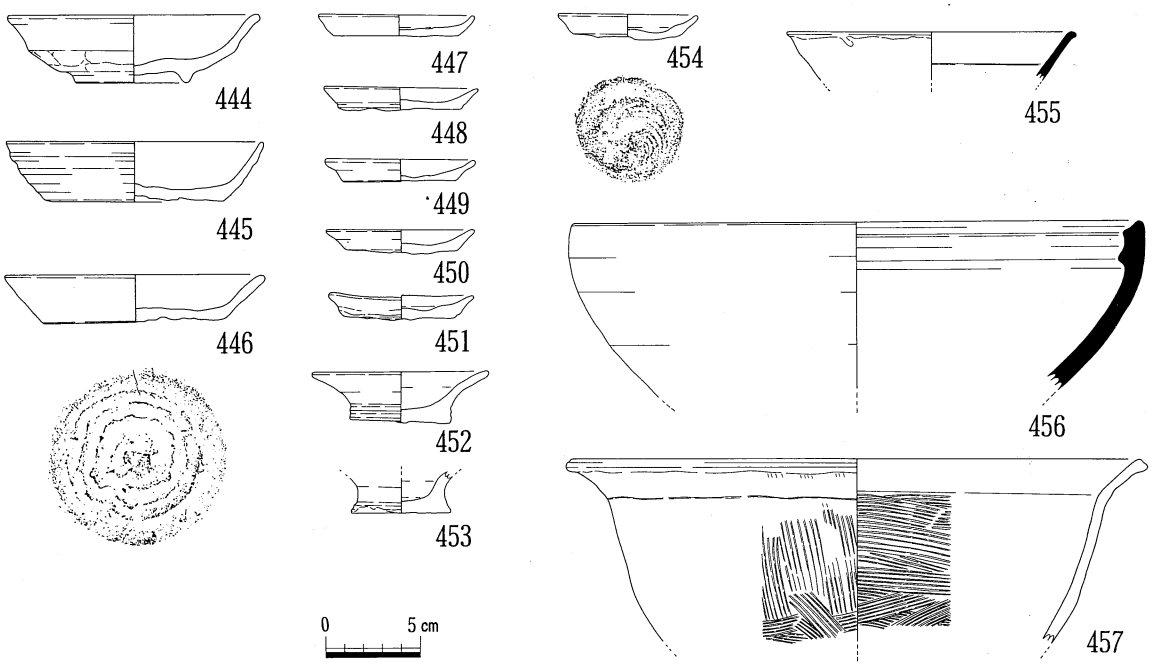


図193　P135 出土遺物

P138（図194、195）

調査区南西部付近で検出された土壙である。長さ1.4m、幅0.9mの長方形の平面形をしているが、南辺にやや凹凸が認められる。遺構検出面は2.9m付近で、埋土は1層である。断面形はU字形をしており、底部には若干凹凸がある。埋土から土器が多く出土したが、遺構の南半に偏る傾向が看取された。

遺物は土師質土器が主体で、白磁や同安窯系の青磁の破片も若干出土した。このうち土師質土器は皿や杯も多いが、他の遺構よりも椀の出土量が多い。また、皿も深い形態のものの個体数が多い。

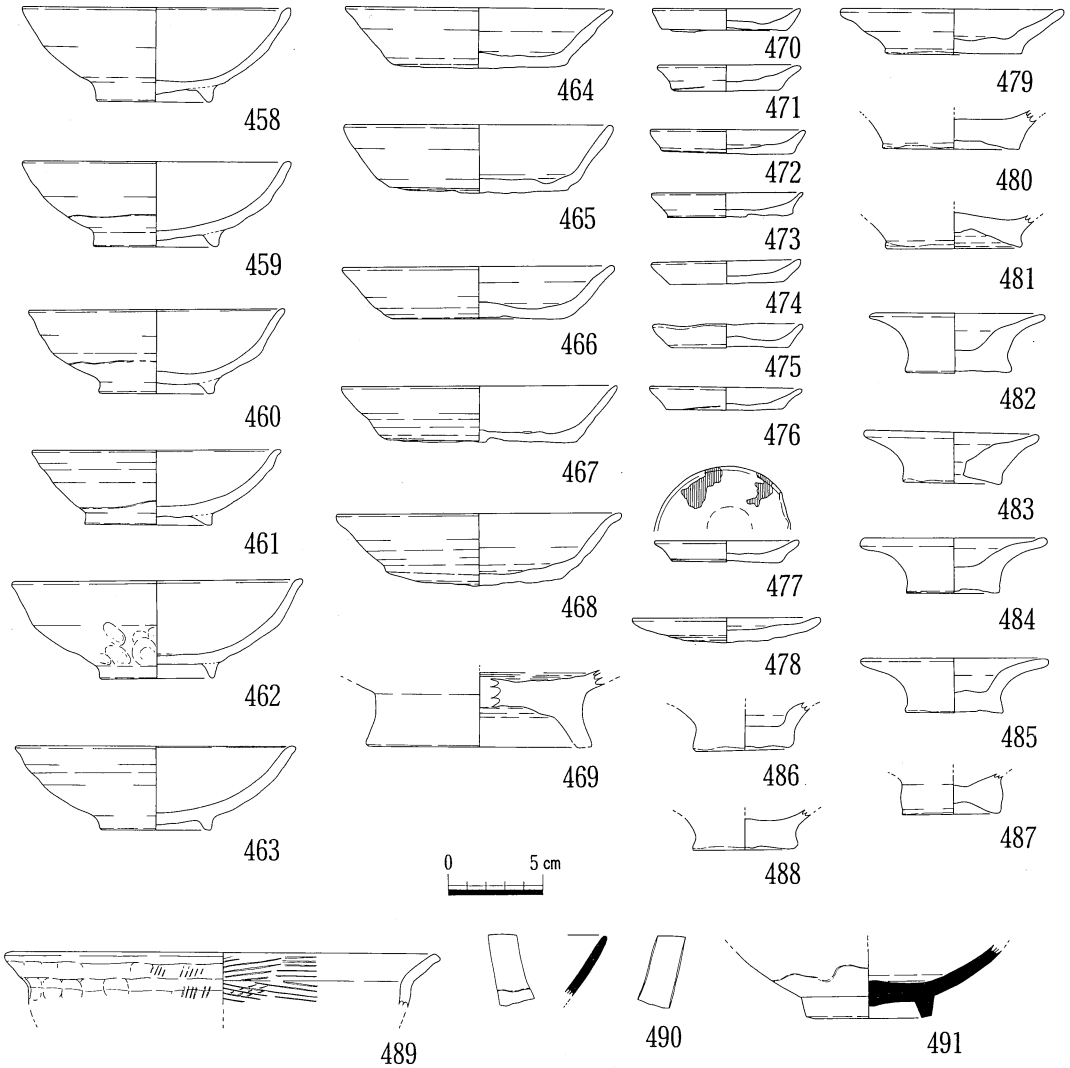


図195　P138 出土遺物

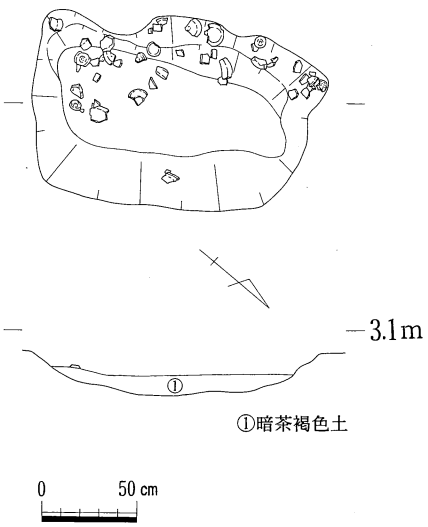


図194　P138 実測図

P139（図196、197）

調査区中央付近で検出された土壙で、長径1.0m、短径0.7mの長楕円形の平面形をしている。遺構検出面は2.9m付近で、埋土は1層である。遺構中央付近に土器がまとまる傾向が看取された。

遺物は土師質土器だけで、杯、皿と椀の底部付近の破片が1点出土した。

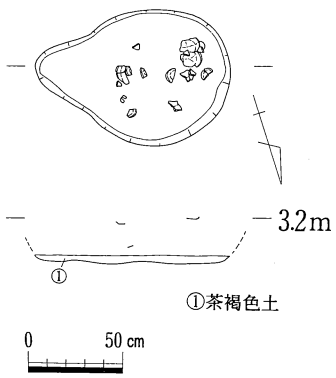


図196　P139 実測図

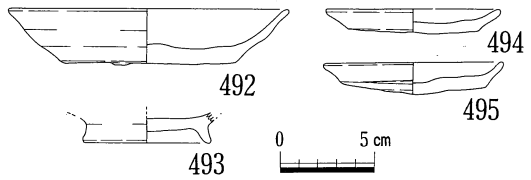


図197　P139 出土遺物

P110（図198、199、200、201、202、203、204、205、206、207）

調査区中央南半で検出された長大な土壙である。検出した時点では長さ7.4m、西側の幅2.0m、東側の幅9.6mの台形の範囲に暗茶黒褐色土が分布し、そこに土器が多量に含まれている状況であった。

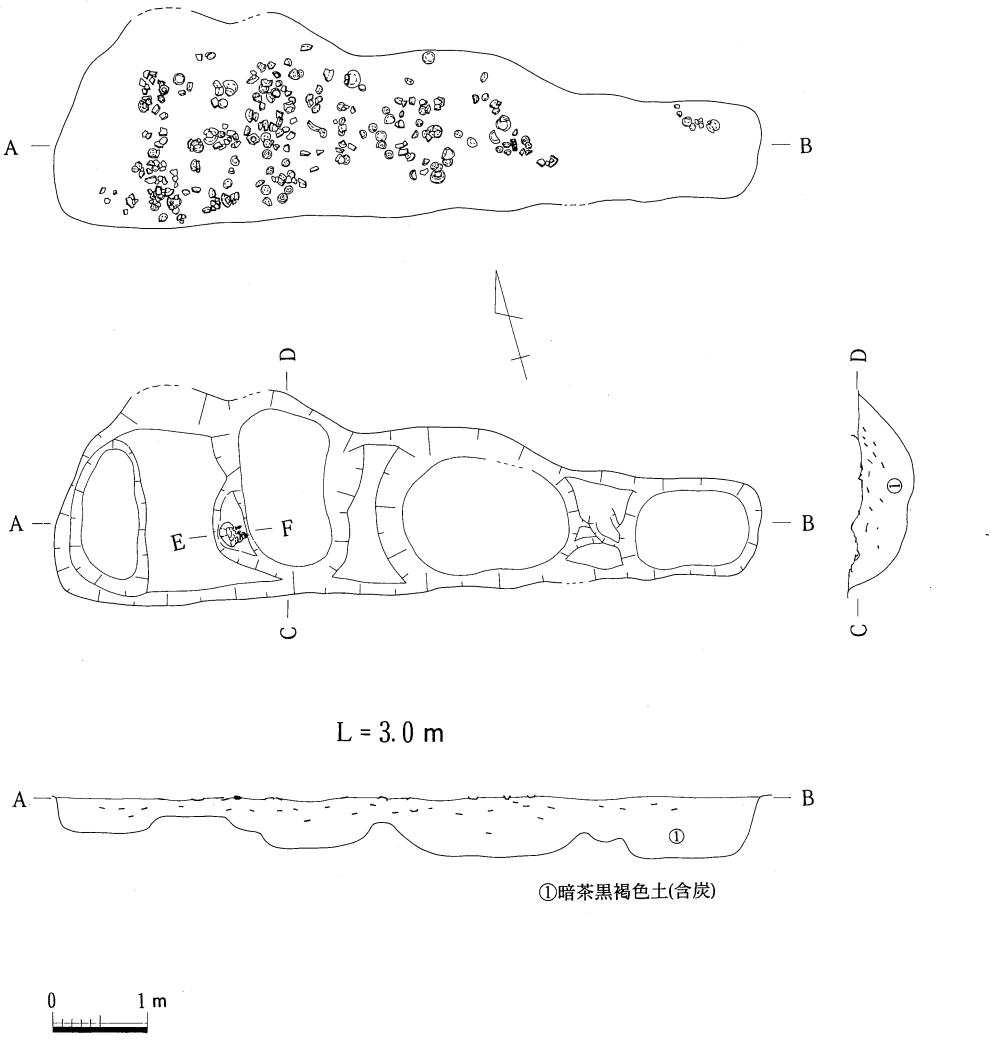


図198　P110 遺物出土状況および堀り上がり実測図

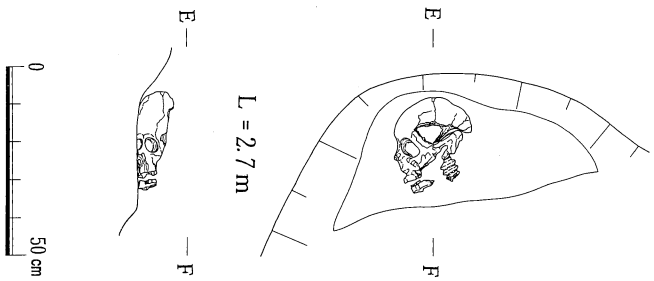


図199　P110 人骨出土状況

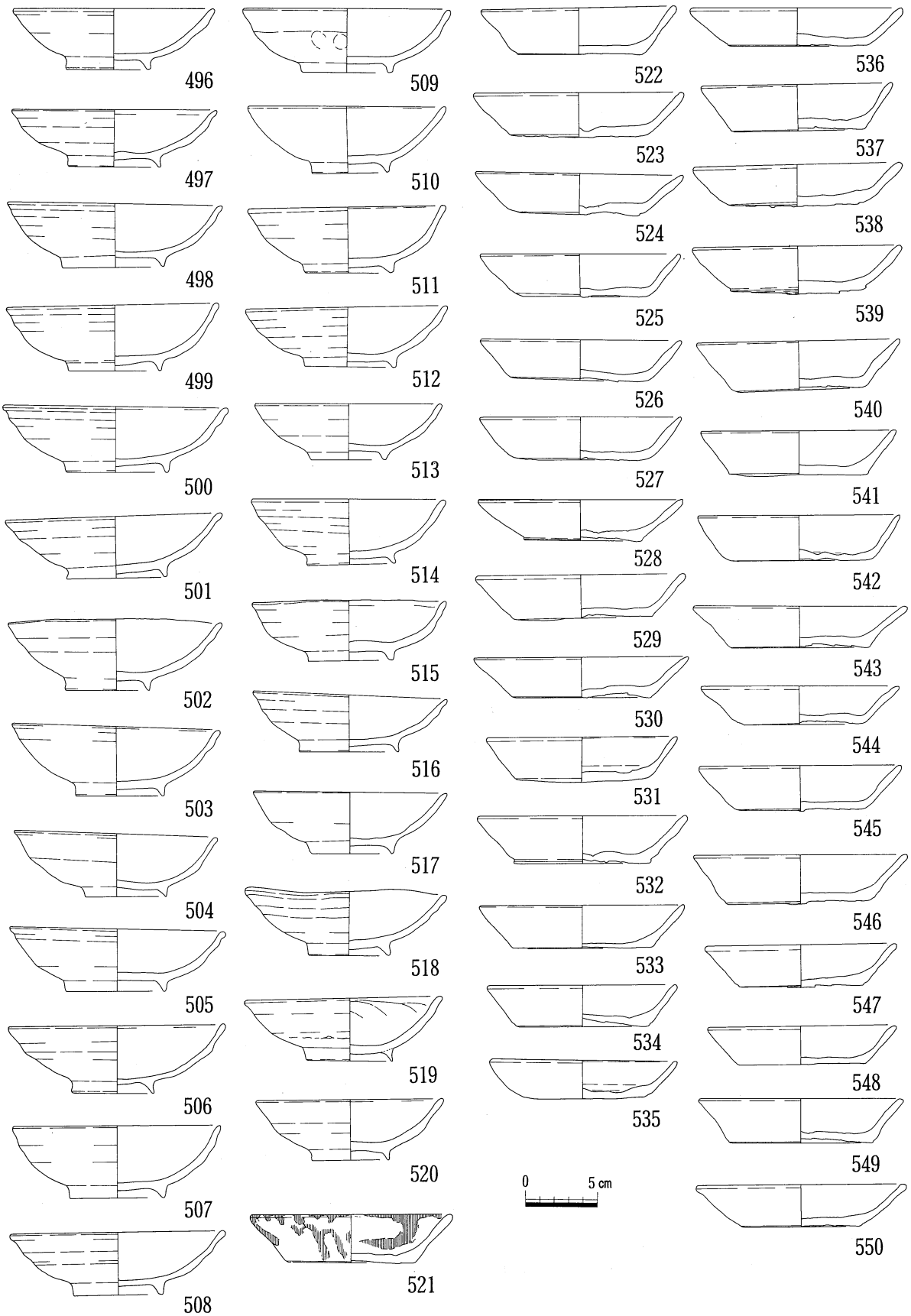


図200　P110 出土遺物（1）

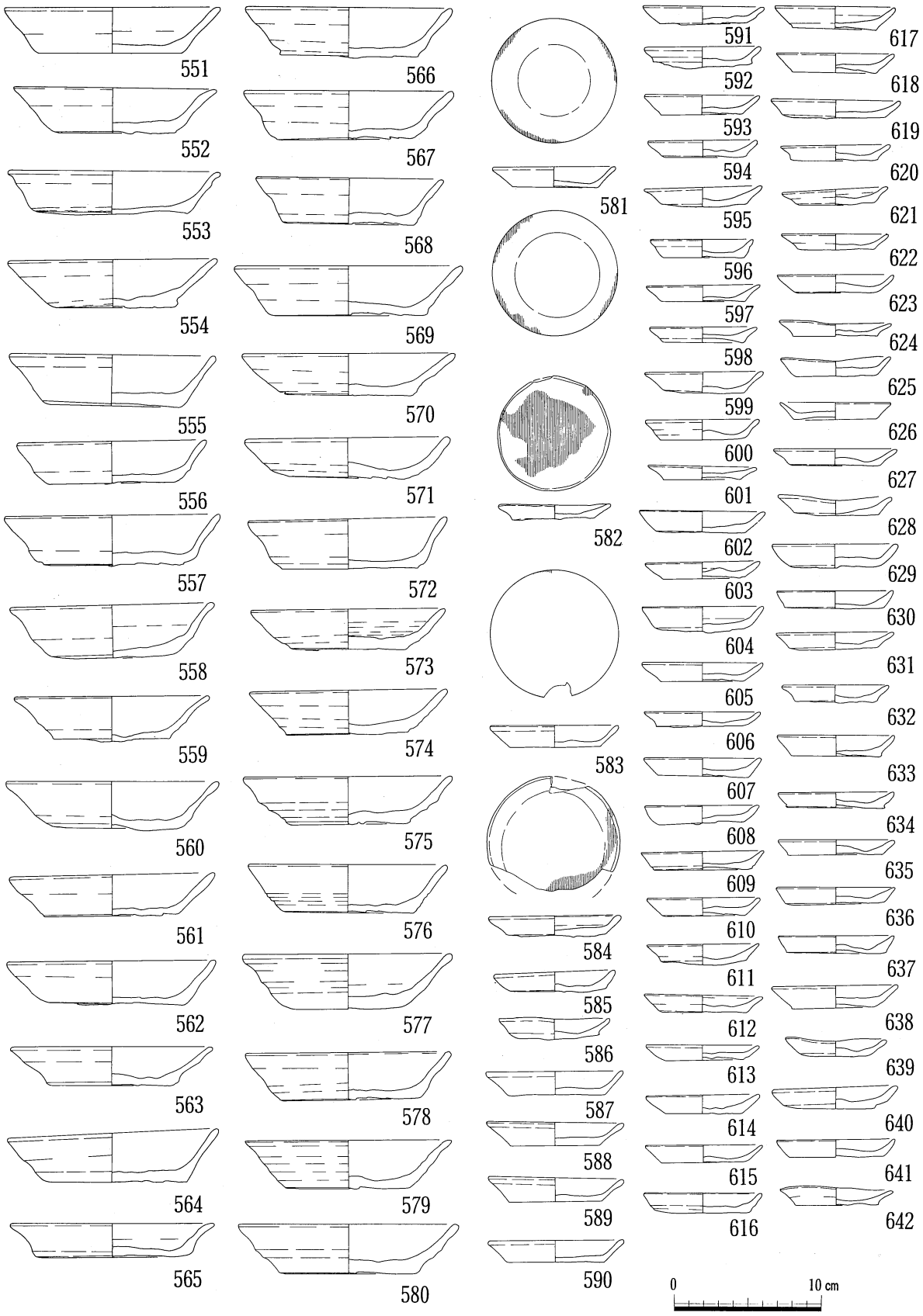


図201　P110 出土遺物（2）

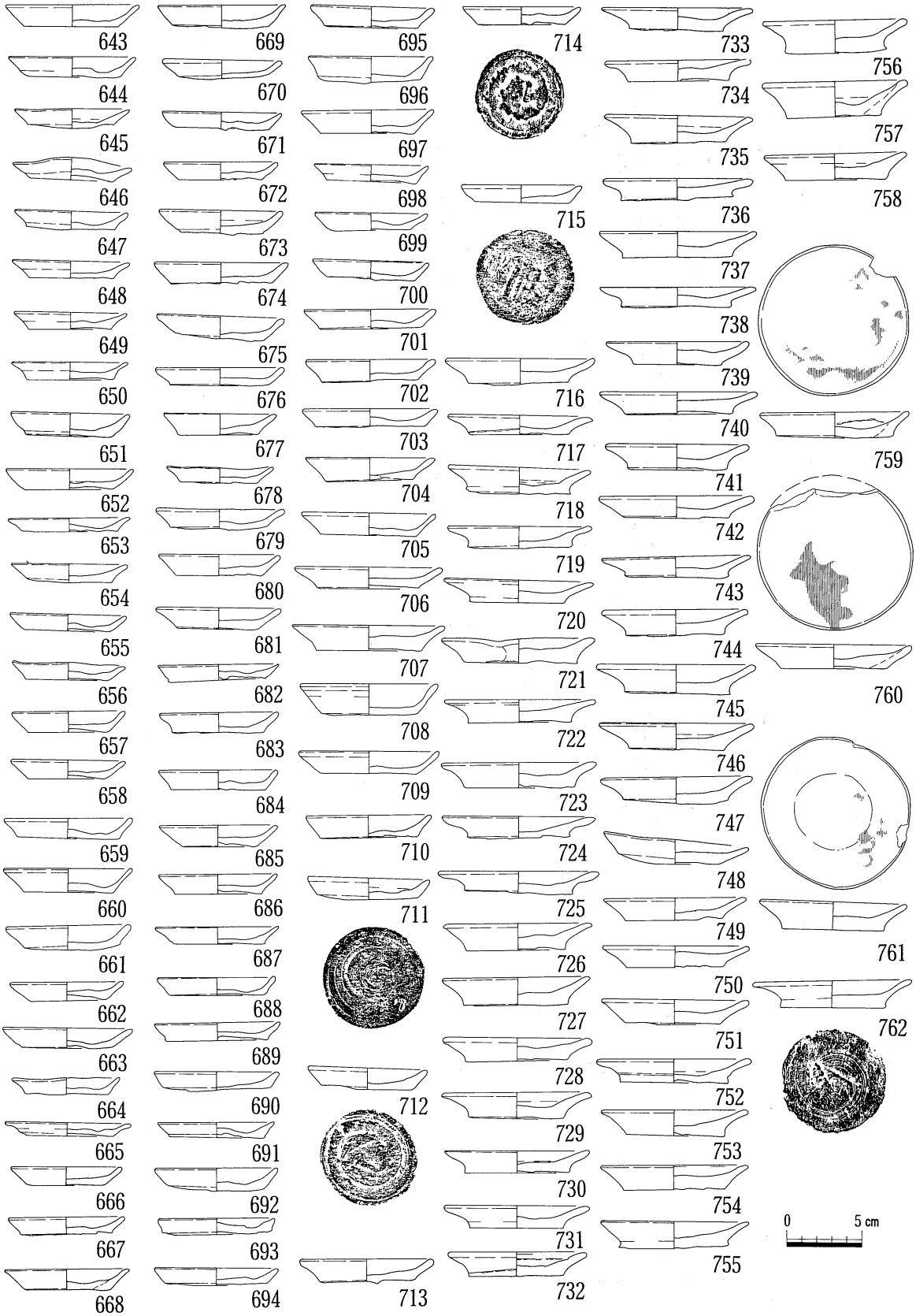


図202　P110 出土遺物（3）

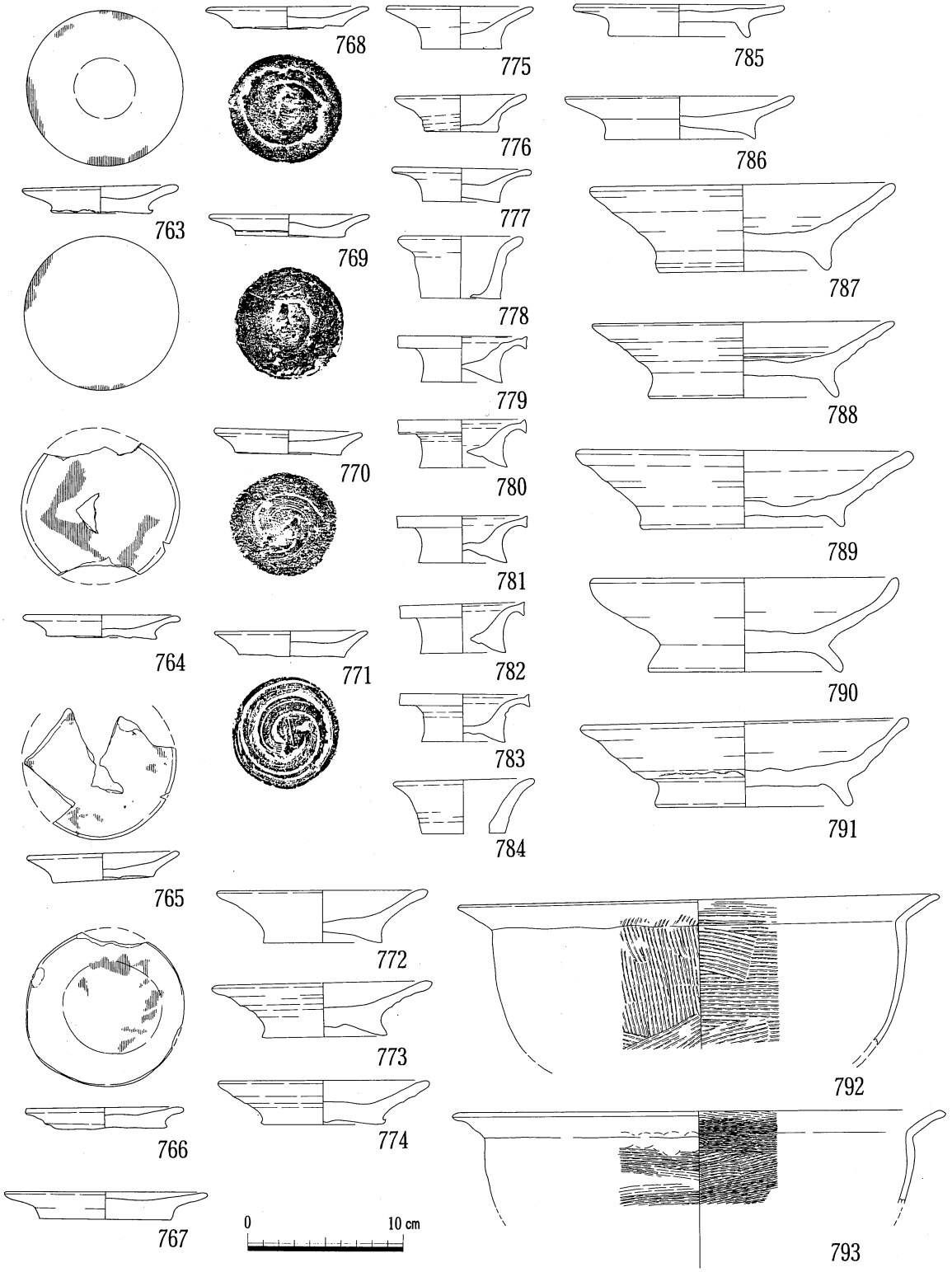


図203　P110 出土遺物（4）

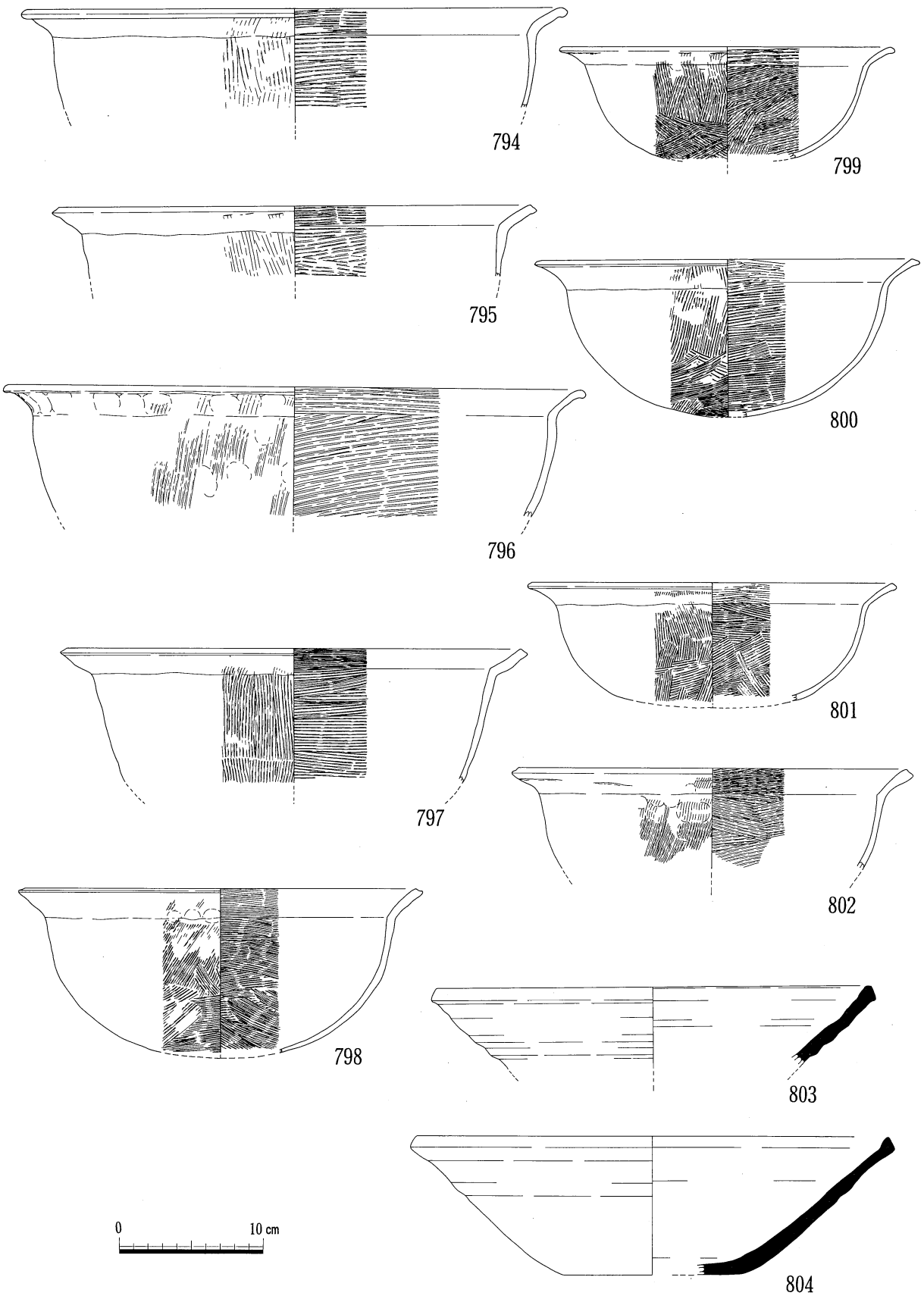


図204　P110 出土遺物（5）

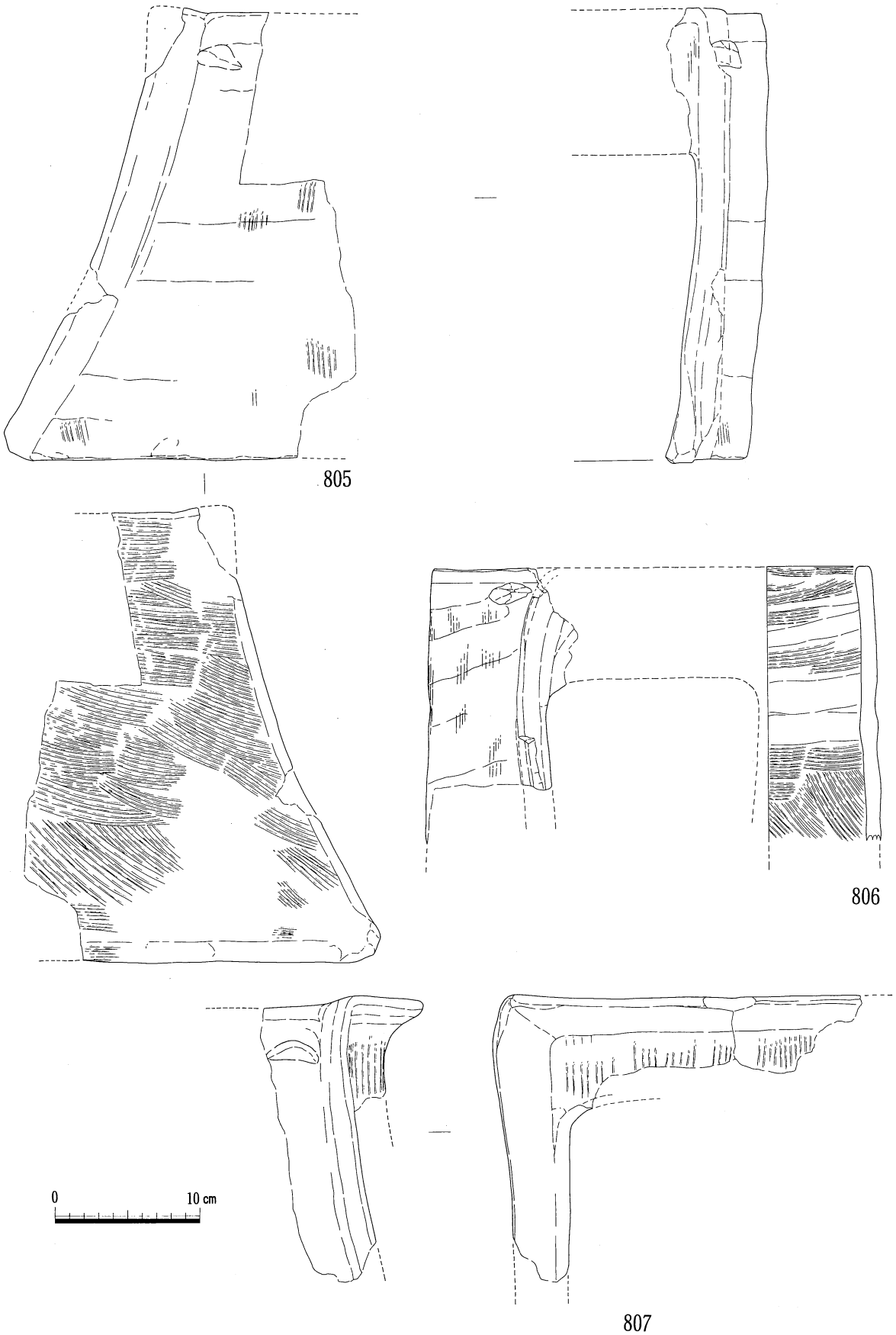


図205　P110 出土遺物（6）

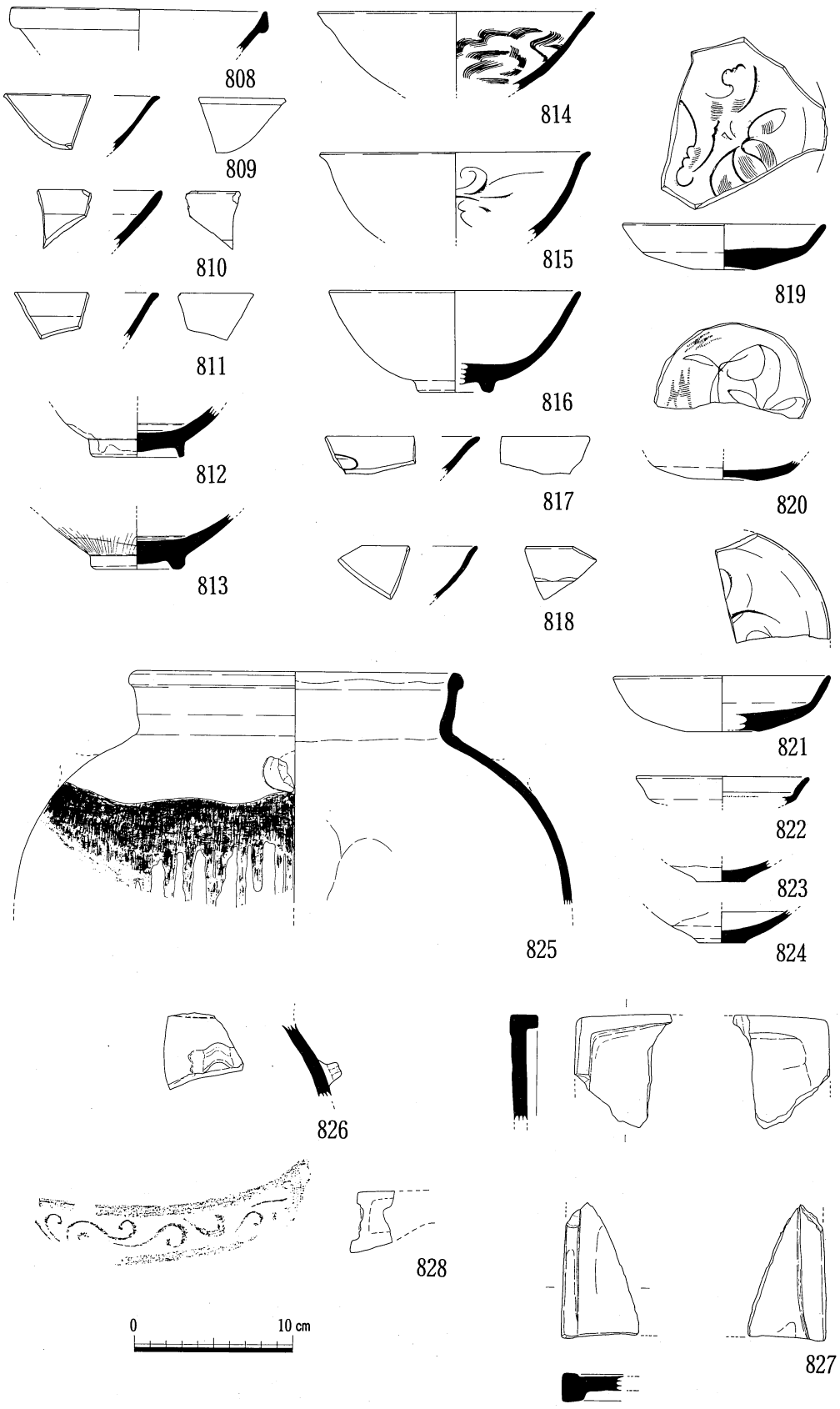


図206　P110 出土遺物（7）

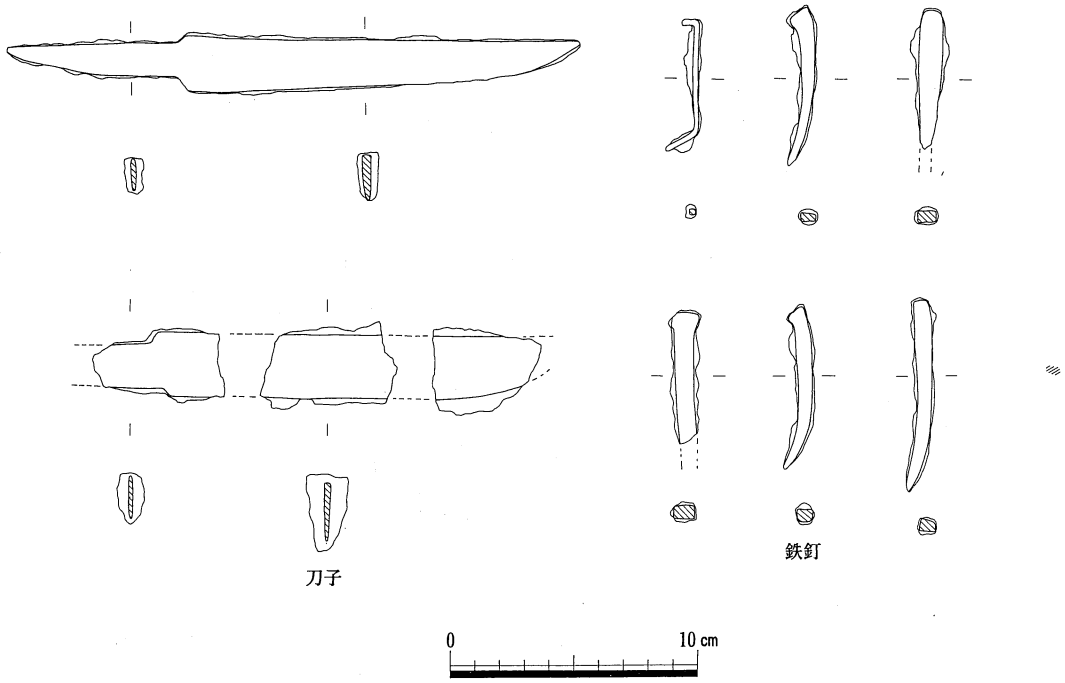


図207　P110 出土遺物（8）

平面形の南辺はほぼ直線的であるが、北辺は凹凸が何箇所か認められ、複数の遺構が重なって同一遺構のように見えている可能性が予測された。そのため、遺物の出土範囲を平面的に土層を確認しながら遺構を掘り下げていった。しかし、埋土中に含まれる土器は若干のレベル差はあるものの、基本的には検出した範囲にランダムに広がっており、南北方向の土層観察でも遺構の切り合い関係は認められなかった。ただ、遺構の底部はかなりの段差があり、複数の遺構が連なっているような様相を呈しているが、土層観察の所見や遺物の分布状況などから、それらは全て同一遺構内の段差と考えられる。遺構の検出面は3.0m付近で、最も深い部分は検出面から0.6m、浅いところは0.2mである。P110は、長方形に浅く掘り下げた後部分的に深く掘り下げたと考えられ、最も浅い部分は最初に掘り下げられた底部のレベルをしめしていると推定される。埋土は1層で、土器が多量に含まれる。土器は破片も多いが、完形もしくは完形に近いものも多く、埋土中にランダムに含まれており、埋土と土器は同時に埋没したと考えられる。埋土中には魚の骨や鱗も検出されており（附章Ⅴ参照）、食事をした残滓とそれに用いた食器を投棄した土壙であることが推定される。したがって、土器を多量に含む土壙が群をなしていることは、この周辺で大きな宴会が催されたことを示していると考えられる。

土器の他に遺構の中央やや東寄りの部分で、頭骨が1個体検出された。長さ0.8m、幅0.3mの段状の部分に横向きで置かれている（図198、199）。P110により下半を削平された土壙墓の可能性も考えたが、土層や周辺から検出される土器はP110の埋土と異なることはなく、切断された頸骨と段のとぎれる部分が一致していないことから、P110の底部付近に置かれたものと判断した。この頭骨に関する所見によると（附章Ⅲ参照）、全体に刀傷と思われるものや、人為的な損傷も認められることから、戦場で首をとられたか、もしくは打ち首などの特殊な措置の結果P110へ置かれたものと考えられる。

遺物は、多量の土師質土器と陶器、中国製陶磁器である。土師質土器は、椀、杯、皿、高台付大皿、鍋、竈である。土師質土器の胎土には白色系と橙色系の2種類があるが、橙色系のものが圧倒的に多い。ただ、橙色と白色が混じったような中間的な発色を呈するものもある。杯と皿は調整が似ているものが

多い。例えば、底部ヘラ切りの後板目の圧痕が認められるものは、内面の中央付近をナデており、逆に底部をヘラ切りのままのものは内面中央付近にナデは認められないといった特徴は、杯、皿ともにあてはまる。このことは、土師質土器の調整にいくつかのパターンが認められることから、複数の生産者からの供給も想定しうるが、それらは器種により異なるといった傾向はなく器種をこえて共通する。このことは器種の違いが生産単位の違いを示しているというのではなく、それぞれの生産者が複数の器種を製作していたということが推定される。陶器は魚住焼の捏ね鉢と産地不明の壺がある。中国製陶磁器には白磁と同安窯系の青磁と龍泉窯系の青磁が各1点と、黄釉陶器の四耳壺がある。四耳壺はP10から出土した破片と接合した。このことはP110とP10の埋没が極めて近い時期であったたことを示していると思われる。土器以外には鉄製の刀子が2点と、釘と思われるものが6点出土している。いずれも土器と混在して検出された。

注

（1）馬場昌一「岡山県邑久町助三畑遺跡井戸出土資料」『第11回研究集会報告資料』中世土器研究会　1992年

（2）山村信榮氏よりご教示を得た。

出土土器観察表

器形	土器番号	法量（cm）			形態・調整手法の特徴	胎土	色調	遺構
		口径	底径	器高				
椀	1	14.0	6.0	4.8	外面ヨコ方向のヘラミガキ、内面口縁部付近にヘラミガキが認められる。	含長石石英	淡白灰色	建物1
椀	2	16.0	6.0	5.6	内外面にヨコヘラミガキをおこない、内面は炭素を吸着させて黒色処理を施す	含長石石英	淡橙灰色	建物1
皿	3	9.0	7.0	1.2	内外面ヨコナデ、底部はヘラ切りのみである。	含長石石英	淡橙灰色	建物2
皿	4	8.6	6.7	1.4	内外面ヨコナデ、底部はヘラ切りのみである。	含長石石英	淡橙灰色	柱穴列2
椀	5	14.0	6.6	4.8	口縁部ヨコナデ後、内面コテナデ。高台部分ヨコナデ内面底部付近重ね痕あり。	含長石石英	淡橙灰色	柱穴列4
椀	6	14.4	4.3	4.5	瓦器の椀である。外面口縁分付近にやや粗いヨコミガキ、内面やや密なミガキ。	含長石石英	黒灰色	柱穴列4
椀	7	14.4	6.7	4.9	口縁部ヨコナデ後、内面コテナデ。高台部分ヨコナデ	含長石石英	灰白色	P4
椀	8	14.3	5.6	4.6	口縁部ヨコナデ後、内面コテナデ。高台部分ヨコナデ内面底部付近重ね痕あり。	含長石石英	灰白色	P4
椀	9	13.5	6.3	4.5	口縁部ヨコナデ後、内面コテナデ。高台部分ヨコナデ	含長石石英	灰白色	P4
杯	10	13.5	8.6	2.9	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切リ後板目痕、内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙灰色	P4
杯	11	14.5	9.8	3.45	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切リ後ナデ後板目痕、内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙灰色	P4
杯	12	13.0	9.0	3.0	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切リ後板目痕、内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙灰色	P4
皿	13	7.8	5.6	1.4	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切りのみである。	含長石石英	橙灰色	P4
杯	14	14.0	8.6	3.1	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切りのみである。	含長石石英	橙灰色	P10
杯	15	14.4	9.6	3.4	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切りのみである。	含長石石英	橙灰色	P10
杯	16	14.0	9.2	3.3	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切りのみである。	含長石石英	橙灰色	P10
皿	17	8.2	6.6	1.5	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切りのみである。	含長石石英	橙灰色	P10
皿	18	8.6	6.8	1.2	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り後ハケ調整。	含長石石英	橙灰色	P10
皿	19	8.6	5.1	1.3	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切り後ナデ調整。	含長石石英	橙灰色	P10
皿	20	9.2	6.8	1.4	内外面ヨコナデ、底部ヘラ切りのみである。	含長石石英	橙灰色	P10
皿	21	9.9	8.2	1.2	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切リ後板目痕、内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙灰色	P10
杯	22	14.0	8.0	3.55	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切リ後板目痕、内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙灰色	P37
皿	23	8.2	6.6	1.5	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切リ後板目痕、内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙灰色	P37
皿	24	8.4	6.6	1.4	内外面ヨコナデ、底部外面ヘラ切リ後板目痕、内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙灰色	P37
白磁椀	25	17.0	—	—	白磁で、口縁部を玉縁にする。釉は灰色を帯びた白色を呈し、若干厚目に施釉。	緻密	灰白色	P37
白磁皿	26	12.0	—	—	白磁で、内面に稚拙な施紋が認められ、釉は黄色を帯びた白色を呈する。	緻密	灰白色	P37
椀	27	15.4	4.8	5.2	口縁部ヨコナデ後、内面コテナデ。高台部分ヨコナデ	含長石石英	灰白色	P58
椀	28	14.2	6.3	4.6	口縁部ヨコナデ後、内面コテナデ。高台部分ヨコナデ	含長石石英	灰白色	P58

椀	29	13.7	5.0	4.7	口縁部ヨコナデ後、内面コテナデ。高台部分ヨコナデ	含長石石英	淡橙	P58
椀	30	－	6.4	－	内面コテナデ。高台部分ヨコナデ	含長石石英	淡橙	P58
杯	31	14.7	10.9	2.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切リ	含長石石英	灰白色	P58
杯	32	13.2	8.8	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデか	含長石石英	淡橙	P58
杯	33	13.4	9.4	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデか	含長石石英	灰白色	P58
杯	34	14.7	10.3	3.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り（ナデか）	含長石石英	淡橙	P58
杯	35	13.7	10.4	3.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り（ナデか）	含長石石英	淡橙	P58
杯	36	14.8	10.2	3.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	灰白色	P58
杯	37	13.3	9.0	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
杯	38	12.8	7.7	2.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
杯	39	15.2	11.4	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
杯	40	14.4	10.6	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙	P58
杯	41	14.6	10.55	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
杯	42	13.6	9.7	3.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
杯	43	13.7	8.2	3.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
杯	44	13.7	9.8	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙色	P58
杯	45	14.5	10.1	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
杯	46	13.7	9.6	3.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
杯	47	13.4	9.5	2.95	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P58
杯	48	14.2	10.9	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰	P58
杯	49	14.5	11.2	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P58
杯	50	13.8	10.3	2.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
杯	51	14.4	9.8	3.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄灰	P58
杯	52	14.2	10.2	3.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄灰	P58
杯	53	13.8	10.1	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰	P58
杯	54	15.3	9.7	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰	P58
杯	55	14.2	10.7	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
杯	56	14.2	9.4	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
杯	57	13.1	8.0	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P58
杯	58	13.3	9.5	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
杯	59	14.2	9.5	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P58
杯	60	14.4	9.6	2.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P58
杯	61	14.0	9.6	2.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
杯	62	14.7	9.5	3.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P58
杯	63	14.3	10.85	2.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P58
杯	64	13.8	10.1	3.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡赤橙色	P58
杯	65	14.8	10.35	2.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙白色	P58
杯	66	14.4	10.6	3.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
杯	67	14.6	10.0	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙色	P58
杯	68	14.5	9.6	2.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
杯	69	15.0	10.4	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙灰色	P58
杯	70	14.4	9.2	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
杯	71	14.4	9.9	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。外面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
杯	72	13.95	9.8	3.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	73	7.8	6.1	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	74	7.4	6.4	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	75	7.4	5.7	1.95~1.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	76	8.1	5.7	1.9~1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	77	8.3	6.1	6.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	78	8.3	6.8	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	79	8.25	6.2	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	80	9.3	6.9	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	81	7.7	5.9	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕か。内面不整方向のナデか。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	82	7.8	6.1	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	83	8.25	6.5	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	84	7.95	6.55	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデか。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	85	7.6	5.6	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	86	7.75	6.0	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕か。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P58
Ⅲ	87	8.0	6.0	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデか。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	88	8.3	6.0	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕か。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	89	8.0	6.3	1.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	90	7.85	6.4	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄色	P58
Ⅲ	91	8.2	6.6	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58

Ⅲ	92	8.7	6.2	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	93	8.4	7.0	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P58
Ⅲ	94	10.00	7.2	1.3~1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	95	8.3	5.7	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄色	P58
Ⅲ	96	7.8	6.1	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	乳黄灰色	P58
Ⅲ	97	7.6	6.6	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄色	P58
Ⅲ	98	7.15	5.7	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデか。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	99	8.65	6.6	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄色	P58
Ⅲ	100	8.75	6.2	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	101	8.45	5.8	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	102	7.8	5.9	1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	103	8.7	6.7	1.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄色	P58
Ⅲ	104	8.9	7.05	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄色	P58
Ⅲ	105	8.3	6.6	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	106	7.8	6.1	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕か。内面不整方向のナデ。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	107	7.6	6.3	1.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄色	P58
Ⅲ	108	7.9	6.0	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄色	P58
Ⅲ	109	7.6	6.0	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデか。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	110	7.3	6.4	1.15~1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	111	8.3	7.0	1.0~1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	112	7.6	5.9	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	113	8.8	7.1	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	114	8.5	7.1	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	115	8.4	6.1	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	116	8.9	7.0	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	石橙色	P58
Ⅲ	117	8.4	6.4	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	118	8.2	6.3	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	119	8.8	6.8	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙灰色	P58
Ⅲ	120	8.0	6.0	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	121	8.0	5.8	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	122	7.6	6.0	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	123	8.4	6.7	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	124	8.6	6.2	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。	含長石石英	淡黄橙	P58
Ⅲ	125	8.0	6.2	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	126	8.2	6.0	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	127	8.6	7.6	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	128	7.8	6.4	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	129	8.0	5.8	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙	P58
Ⅲ	130	7.8	6.7	1.35	内外面ヨコナデ。底部内面ヘラ切り後板目痕。	含長石石英	淡橙褐色	P58
Ⅲ	131	8.1	6.6	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙	P58
Ⅲ	132	8.3	6.3	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	133	7.8	6.2	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	134	8.5	6.6	1.65~1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	135	8.0	5.9	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P58
Ⅲ	136	7.85	5.4	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ	含長石石英	橙茶褐色	P58
Ⅲ	137	8.3	6.6	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P58
Ⅲ	138	8.4	7.0	1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。	含長石石英	淡橙褐色	P58
Ⅲ	139	7.7	6.05	0.8~1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	140	7.3	5.4	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	141	8.4	7.0	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P58
Ⅲ	142	8.5	7.0	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	143	9.0	6.0	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	144	7.8	6.2	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	145	8.2	5.7	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	146	8.0	5.6	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	147	7.6	6.3	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	148	8.0	6.3	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙	P58
Ⅲ	149	7.8	6.2	1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	150	7.2	5.8	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	151	8.8	7.6	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙灰白色	P58
Ⅲ	152	9.1	6.5	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P58
Ⅲ	153	8.35	6.7	1.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	154	8.5	6.7	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58

Ⅲ	155	7.7	5.3	1.7~2.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	156	8.2	7.3	1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデか。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	157	8.2	6.0	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	158	8.4	6.8	1.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	159	8.5	7.0	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデか。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	160	8.2	6.0	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	161	7.65	6.5	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P58
Ⅲ	162	8.3	6.3	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	163	7.9	5.8	1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄色	P58
Ⅲ	164	8.3	6.6	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	165	8.6	7.15	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	166	9.5	7.3	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデか。	含長石石英	橙褐灰色	P58
Ⅲ	167	9.05	6.7	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P58
Ⅲ	168	9.5	2.0	6.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	169	9.95	6.7	2.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	170	8.8	6.7	1.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P58
Ⅲ	171	10.0	6.6	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	172	10.1	7.9	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	173	9.6	7.3	1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	174	8.8	6.2	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	175	9.7	6.4	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙灰色	P58
Ⅲ	176	10.0	6.7	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P58
Ⅲ	177	9.7	6.6	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。	含長石石英	淡橙褐色	P58
Ⅲ	178	9.8	7.2	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡赤橙色	P58
Ⅲ	179	9.6	6.4	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	180	10.3	7.0	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P58
Ⅲ	181	10.2	6.8	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙白色	P58
Ⅲ	182	9.2	6.4	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	183	9.2	6.6	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	184	10.8	7.0	1.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	185	10.0	7.3	2.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	186	9.4	7.0	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	187	10.4	7.4	2.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。	含長石石英	橙色	P58
Ⅲ	188	9.2	6.4	1.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	189	10.0	6.6	1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	190	8.6	6.9	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P58
Ⅲ	191	9.3	6.7	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	192	9.5	7.4	2.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	193	9.15	6.0	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。	含長石石英	淡橙灰色	P58
Ⅲ	194	9.1	6.9	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	195	9.4	6.3	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄色	P58
Ⅲ	196	9.45	6.1	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	197	8.8	6.3	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P58
Ⅲ	198	9.4	6.6	1.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P58
Ⅲ	199	9.7	7.05	1.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙灰白色	P58
Ⅲ	200	8.95	6.1	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	201	10.45	7.8	1.85	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	202	9.2	6.2	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	203	10.1	1.6	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	204	9.0	6.7	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	205	9.6	7.1	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P58
Ⅲ	206	9.6	5.8	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	207	9.5	7.1	1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
Ⅲ	208	10.1	7.7	1.7~2.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデか。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	209	8.3	6.7	0.9~1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕か。内面不整方向のナデ。	含長石石英	乳黄色	P58
Ⅲ	210	8.7	6.7	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	211	8.4	6.9	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	212	9.7	7.6	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	213	9.0	6.2	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P58
Ⅲ	214	7.9	5.7	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。	含長石石英	淡橙色	P58
Ⅲ	215	9.2	6.0	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	216	9.1	6.7	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
Ⅲ	217	9.6	7.0	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。外面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄灰白色	P58

皿	218	10.0	6.8	1.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
皿	219	8.8	6.3	1.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
皿	220	9.4	6.4	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P58
皿	221	9.0	7.0	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
皿	222	9.1	6.1	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデか。	含長石石英	橙褐色	P58
皿	223	8.7	6.5	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P58
皿	224	9.5	6.3	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
皿	225	8.95	7.05	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
皿	226	8.4	6.3	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
皿	227	9.7	6.5	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
皿	228	8.9	6.5	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
皿	229	9.3	6.2	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデか。	含長石石英	淡橙灰色	P58
皿	230	9.6	7.0	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
皿	231	10.6	7.4	1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ目。	含長石石英	淡黄橙色	P58
皿	232	9.65	7.4	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
皿	233	10.2	6.6	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
皿	234	10.1	7.2	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡赤橙色	P58
皿	235	10.0	7.4	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙灰白	P58
皿	236	10.4	7.5	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
皿	237	8.3	5.25	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	乳黄色	P58
皿	238	8.0	5.1	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	乳黄色	P58
皿	239	12.4	8.2	2.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
皿	240	14.7	8.4	2.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P58
皿	241	13.2	8.3	3.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P58
皿	242	12.4	6.8	2.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P58
皿	243	14.2	8.2	2.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P58
高台付大皿	244	18.8	11.7	4.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P58
高台付大皿	245	20.0	12.2	4.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P58
高台付大皿	246	19.4	12.0	5.3~5.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P58
高台付大皿	247	20.7	12.4	5.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P58
鍋	248	31.6	—	—	外面タテハケ・押圧痕。内面ヨコ・ナナメハケ。口縁部ナデ。	含長石石英	淡黄灰白色	P58
鍋	249	32.2	—	—	外面タテハケ・押圧痕。内面ヨコ・ナナメハケ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P58
鍋	250	29.8	—	—	外面タテハケ・押圧痕。部分的にナデ。内面ヨコ・ナナメハケ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
鍋	251	34.1	—	—	外面タテハケ・押圧痕。部分的にナデ。内面ヨコ・ナナメハケ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙白色	P58
鍋	252	32.8	—	—	外面タテハケ・押圧痕。部分的にナデ。内面ヨコ・ナナメハケ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P58
鍋	253	35.8	—	—	外面タテ・ナナメハケ・押圧痕。内面ヨコ・ナナメハケ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P58
鍋	254	45.0	—	—	外面タテハケ・押圧痕。部分的にナデ。内面ヨコ・ナナメハケ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄灰白色	P58
魚住捏鉢	255	28.0	—	—	内外面ヨコナデ	緻密	暗灰白色	P58
青磁皿	256	10.5	—	—	龍泉窯系の青磁皿である。	緻密	淡灰褐色	P58
青磁皿	257	10.1	3.15	3.1	同安窯系の青磁皿である。	緻密	淡緑灰色	P58
青磁椀	258	13.4	—	—	同安窯系の青磁椀である。	緻密	淡緑灰白色	P58
青磁椀	259	13.5	—	—	同安窯系の青磁椀である。	緻密	淡緑灰色	P58
青磁椀	260	—	3.9	—	同安窯系の青磁椀である。	緻密	淡緑灰白色	P58
青磁椀	261	—	5.2	—	同安窯系の青磁椀である。	緻密	淡緑灰白色	P58
白磁椀	262	11.6	—	—	白磁の椀である。	緻密	淡緑灰白色	P58
白磁椀	263	12.7	—	—	白磁の椀である。	緻密	淡緑灰白色	P58
白磁椀	264	13.8	—	—	白磁の椀である。	緻密	淡緑灰白色	P58
青磁椀	265	—	—	—	龍泉窯系の青磁椀である。	緻密	淡灰色	P58
白磁椀	266	—	—	—	白磁の椀である。	緻密	白乳色	P58
青磁椀	267	—	—	—	龍泉窯系の青磁椀である。	緻密	淡緑灰白色	P58
白磁椀	268	—	—	—	白磁の椀である。	緻密	白乳色	P58
青磁皿	269	—	—	—	龍泉窯系の青磁皿である。	緻密	淡緑白色	P58
青磁椀	270	—	—	—	同安窯系の青磁椀である。	緻密	緑灰色	P58
陶器鉢	271	17.7	—	—	内外面ヨコナデ。	緻密	淡灰黄褐色	P58
椀	272	15.1	6.9	4.8	口縁部ヨコナデ後内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。内面底部付近重ね痕あり。	含長石石英	淡橙灰白色	P80
椀	273	15.15	6.3	5.4	口縁部ヨコナデ後内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。	含長石石英	淡灰白色	P80
椀	274	14.0	6.1	4.8	口縁部ヨコナデ後内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰白色	P80
杯	275	15.0	10.0	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P80
杯	276	14.65	10.2	2.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P80
杯	277	14.8	10.2	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P80
杯	278	12.8	7.2	3.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
杯	279	13.6	9.8	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
杯	280	13.25	8.2	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。	含長石石英	淡橙灰色	P80

杯	281	13.95	8.5	3.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。	含長石石英	淡橙灰色	P80
杯	282	13.25	9.2	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ後板目。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
杯	283	13.75	10.1	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。	含長石石英	淡橙灰色	P80
杯	284	14.8	10.0	3.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
高台付大皿	285	19.5	12.05	5.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ後板目痕か。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P80
高台付大皿	286	18.7	13.0	4.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。高台部分ヨコナデ。	含長石石英	橙褐色	P80
高台付大皿	287	—	10.0	—	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。高台部分ヨコナデ。	含長石石英	淡灰白色	P80
皿	288	7.45	5.8	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	289	7.6	6.4	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	290	8.0	6.6	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	291	8.2	5.8	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P80
皿	292	8.0	6.8	1.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	293	8.7	6.0	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ後タタキ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P80
皿	294	7.85	6.0	1.2~1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	295	8.0	5.8	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	296	9.3	5.7	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ後タタキ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	297	9.2	6.4	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面へら黄きり後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	298	9.8	6.6	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ後タタキ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	299	9.5	6.8	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	300	9.8	6.8	1.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	301	10.35	7.5	2.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	302	10.2	6.8	2.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ後タタキ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	303	10.2	8.2	1.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデか。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	304	10.5	6.6	1.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	305	8.35	5.8	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	306	10.25	7.0	1.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	307	8.15	6.2	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	308	7.55	5.0	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	309	10.0	6.9	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ後タタキ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	310	7.95	5.7	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P80
皿	311	9.2	5.9	1.2~1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P80
脚付皿	312	—	—	—	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P80
鍋	313	36.0	—	—	外面ナデ。内面ヨコハケ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P80
杯	314	13.8	9.9	2.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P84
杯	315	14.2	9.9	2.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P84
杯	316	—	10.0	—	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P84
椀	317	—	6.7	—	内面コテナデ。	含長石石英	淡灰白色	P84
皿	318	8.25	7.7	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P84
皿	319	9.0	6.9	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P84
杯	320	13.4	8.9	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P94
皿	321	7.7	4.9	1.2~1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P94
皿	322	8.1	6.5	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P94
皿	323	—	—	—	内外面ヨコナデ。大部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P94
白磁蓋	324	7.95	6.2	1.4	白磁の合子の蓋である。	緻密	白色	P94
白磁椀	325	—	5.2	—	白磁の椀である。	緻密	白色	P94
鍋	326	38.2	—	—	外面ナデ。内面ヨコハケ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	茶灰色	P94
椀	327	14.25	6.2	4.9	外面ユビナデ。内面ナデ。口縁部ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰白色	P109
椀	328	14.2	6.2	5.2	内外面ナデ。外面下半ユビナデ。底部外面ヘラ切り後ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰白色	P109
杯	329	13.9	9.3	3.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P109
杯	330	13.9	9.8	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	331	14.5	10.0	3.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	332	14.5	10.1	2.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P109
杯	333	14.25	10.1	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	334	14.3	9.7	2.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	335	14.2	10.1	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	336	14.1	10.2	2.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデか。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	337	14.9	9.4	3.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヨコナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	338	14.1	9.5	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	339	12.7	8.6	2.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	340	15.4	9.6	—	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	341	14.3	10.3	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。	含長石石英	淡橙褐色	P109
杯	342	14.85	11.4	3.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	343	14.1	10.0	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109

杯	344	15.1	11.0	2.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	345	14.4	9.2	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	346	14.6	8.9	3.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
杯	347	14.2	10.5	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P109
杯	348	13.5	9.8	3.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	349	7.6	6.2	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	350	7.3	5.6	1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙茶	P109
皿	351	7.8	5.7	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	352	8.1	6.7	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙茶褐色	P109
皿	353	8.2	7.4	1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	354	8.6	6.4	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	355	7.9	6.3	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	356	8.1	6.3	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	357	8.5	6.7	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	358	8.4	6.9	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデか。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	359	8.5	7.1	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	360	8.0	6.15	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	361	8.6	7.6	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	362	8.4	7.4	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	363	8.4	7.4	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	364	9.2	8.5	0.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	365	8.9	7.0	0.9~1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	366	7.6	6.1	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	367	8.1	6.0	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	368	8.2	7.0	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	369	8.3	7.5	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	370	8.6	8.0	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヨコナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	371	9.0	7.1	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙茶	P109
皿	372	9.1	8.2	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	373	9.2	7.2	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	374	8.5	7.4	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	375	9.1	7.6	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	376	8.4	6.9	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	377	8.2	7.3	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	378	8.15	6.0	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰	P109
皿	379	9.0	7.5	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	380	8.45	7.5	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	381	9.1	7.5	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	382	8.7	7.8	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	383	7.7	6.5	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	384	7.8	6.35	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P109
皿	385	8.5	7.5	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P109
平瓦	386	—	—	—	外面縄めタタキ在り。内面布目痕あり。	含長石石英	橙褐色	P109
鍋	387	38.1	—	—	外面上半タテハケ。下半ナナメハケ。内面ヨコハケ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙茶灰色	P109
杯	388	13.8	9.0	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P119
杯	389	14.5	10.3	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P119
椀	390	—	7.0	—		含長石石英	橙灰白色	P119
皿	391	8.15	7.0	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P119
皿	392	8.4	6.2	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P119
皿	393	8.25	7.1	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P119
椀	394	—	6.7	—	内外面ヨコナデ。内面コテナデ。	含長石石英	淡灰白色	P134
杯	395	14.3	10.6	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	396	14.7	10.0	3.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	397	14.35	9.6	3.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	398	13.9	9.6	3.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	399	14.3	10.0	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	400	14.8	10.0	3.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕か。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	401	13.95	9.0	3.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ後板目痕か。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	402	13.7	9.2	3.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	403	13.9	9.6	3.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	404	14.0	9.25	3.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	405	13.85	9.25	3.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	406	14.7	10.0	2.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙灰色	P134

杯	407	14.7	11.0	3.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	408	14.55	9.9	4.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	409	14.1	10.4	3.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	410	14.3	10.5	3.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	411	14.2	10.0	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
杯	412	13.25	8.4	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	413	8.0	6.7	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕か。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	414	8.4	7.1	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	415	8.9	7.0	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	416	8.5	7.2	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	417	7.8	6.6	1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	418	8.2	6.5	1.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	419	7.7	6.4	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	420	7.8	6.1	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	421	8.2	7.4	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	422	8.1	6.5	0.9~1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	423	8.1	7.6	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	424	8.75	7.1	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	425	8.0	6.3	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	426	8.0	6.7	1.0~1.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	427	8.4	6.7	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕か。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	428	8.8	7.4	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	429	9.25	6.3	1.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	430	10.4	8.1	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	431	9.8	7.5	1.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	432	10.1	7.2	2.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	433	8.4	6.0	1.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	434	8.5	6.2	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	435	8.2	6.7	1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	436	8.35	6.55	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	437	8.2	6.4	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	438	8.1	6.9	1.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	439	8.45	6.2	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	440	7.8	6.4	1.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	441	7.8	7.2	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	442	7.9	6.3	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
皿	443	8.2	6.8	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P134
椀	444	13.1	5.7	3.6	内面コテナデ。外面ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P135
杯	445	13.4	5.7	3.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P135
杯	446	13.7	9.6	2.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P135
皿	447	8.05	6.5	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P135
皿	448	8.0	6.5	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P135
皿	449	7.75	5.9	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P135
皿	450	7.6	5.8	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P135
皿	451	7.5	5.85	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P135
皿	452	9.1	5.3	2.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P135
皿	453	—	5.25	—	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P135
皿	454	7.3	5.7	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P135
白磁椀	455	15.0	—	—	白磁の椀である。	緻密	灰白色	P135
捏鉢	456	29.8	—	—	中国製陶器である。内外面ヨコナデ。	含長石石英	茶灰色	P135
鍋	457	30.0	—	—	内面ヨコハケ。外面上半タテハケ。下半ナナメハケ。	含長石石英	淡橙灰	P135
椀	458	14.2	6.1	5.0	外面ユビナデ。内面コテナデ。底部外面ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡灰白色	P138
椀	459	14.1	6.4	4.5	外面ユビナデ。内面コテナデ。底部外面ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡灰白色	P138
椀	460	13.3	6.0	4.5	外面ナデ。内面ヨコナデ。底部外面ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	灰褐色	P138
椀	461	13.1	5.7	4.0	外面ヨコナデ。内面コテナデ。	含長石石英	淡橙灰白色	P138
椀	462	15.2	5.8	5.2	外面ユビナデ。内面コテナデ。高台ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	灰白色	P138
椀	463	13.2	6.35	3.35	内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰白色	P138
杯	464	13.9	9.2	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡灰白色	P138
杯	465	14.1	9.5	3.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P138
杯	466	14.2	9.2	2.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P138
皿	467	14.0	10.0	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P138
皿	468	14.8	9.2	3.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ後板目痕。	含長石石英	淡橙灰色	P138
皿	469	—	11.85	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P138

皿	470	7.7	6.6	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡灰白色	P138
皿	471	7.3	5.5	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P138
皿	472	8.05	7.2	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P138
皿	473	7.9	6.6	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P138
皿	474	7.65	6.0	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P138
皿	475	7.8	6.2	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P138
皿	476	8.0	6.2	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P138
皿	477	7.6	5.7	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P138
皿	478	9.8	6.1	1.65	内外面ヨコケズリ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡灰白色	P138
皿	479	11.4	7.4	2.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P138
皿	480	—	7.4	—	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙灰白色	P138
皿	481	—	7.2	—	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P138
皿	482	8.8	5.6	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P138
皿	483	9.1	5.1	2.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。底部焼成後穿孔。	含長石石英	橙灰色	P138
皿	484	9.6	4.9	2.95	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙灰色	P138
皿	485	9.6	5.2	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙灰色	P138
皿	486	—	5.1	—	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P138
皿	487	—	5.2	—	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡灰白色	P138
皿	488	—	5.4	—	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙灰色	P138
鍋	489	22.7	—	—	外面タテハケ。内面ヨコハケ。口縁部ナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P138
青磁椀	490	—	—	—	青磁の椀か。	含長石石英	淡青色	P138
白磁椀	491	—	5.6	—	白磁の椀である。	含長石石英	灰白色	P138
杯	492	14.6	9.0	2.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕か。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙灰色	P139
椀	493	—	6.5	—	内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P139
皿	494	8.95	6.8	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P139
皿	495	9.3	7.0	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P139
椀	496	13.6	5.8	4.2	外面指圧痕後ヨコナデ。内コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄白色	P110
椀	497	14.0	6.3	3.95	外面指圧痕後ヨコナデ。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
椀	498	14.6	7.0	4.5	外面指圧痕後ヨコナデ。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙	P110
椀	499	14.6	7.0	4.4	外面指圧痕後ヨコナデ。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙	P110
椀	500	15.3	6.9	4.3	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙	P110
椀	501	14.6	6.9	4.25	外面指圧痕後ヨコナデ。内面コテナデ。底部外面板目痕。口縁部分ヨコナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
椀	502	14.5	5.7	4.9	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
椀	503	14.15	6.0	4.8	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
椀	504	13.8	5.6	4.4	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
椀	505	14.6	6.8	4.3	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙	P110
椀	506	14.8	5.5	4.7	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。重ね焼痕あり。高台・口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄白色	P110
椀	507	14.5	6.2	5.0	外面指圧痕後ヨコナデ。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙	P110
椀	508	14.2	6.2	4.35	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙	P110
椀	509	14.1	6.3	4.4	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
椀	510	13.5	5.2	4.6	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
椀	511	13.4	6.0	4.6	外面指圧痕後ヨコナデ。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄白色	P110
椀	512	13.7	6.3	5.1	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
椀	513	12.7	5.2	3.9	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
椀	514	13.2	6.05	4.5	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部分ヨコナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
椀	515	13.25	5.8	4.2	外面指圧痕後ヨコナデ。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
椀	516	13.2	6.8	3.95	外面指圧痕後ヨコナデ。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
椀	517	13.2	5.55	4.3	外面ヨコナデ後指圧痕。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙白色	P110
椀	518	13.5	5.5	4.25~4.7	外面指圧痕後ヨコナデ。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙白色	P110
椀	519	13.3	5.9	4.3	外面指圧痕後ナデ。内面コテナデ。口縁部ヨコナデ。体部接合痕あり。	含長石石英	淡橙灰褐色	P110
椀	520	12.8	5.2	4.2	外面指圧痕後ヨコナデ。内面コテナデ。高台部分ヨコナデ。口縁部ヨコナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
杯	521	13.6	8.9	3.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	522	13.25	8.65	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	523	14.2	9.5	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	524	14.15	8.7	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	525	13.6	8.6	2.95	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	526	13.7	9.55	2.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	527	13.65	9.25	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	528	13.8	8.05	2.85	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	529	14.2	9.7	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	530	14.6	9.6	2.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	531	12.9	9.2	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P110
杯	532	14.2	9.5	3.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P110

杯	533	14.0	9.7	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	534	12.9	9.2	2.85	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	535	12.7	8.3	2.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
杯	536	14.35	9.7	2.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	537	13.0	9.2	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	538	14.15	9.9	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のハケ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	539	14.2	9.3	3.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	540	13.9	8.8	3.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	541	13.3	9.6	3.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	542	13.75	9.4	3.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡褐色	P110
杯	543	14.45	9.55	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	544	13.45	8.3	2.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	545	13.7	8.9	3.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	546	14.45	9.9	3.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	547	12.8	8.5	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	548	12.75	8.6	2.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P110
杯	549	13.7	9.8	3.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	550	14.1	8.2	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	551	14.5	9.7	3.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	552	13.5	8.3	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	553	14.0	10.3	2.95	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄白色	P110
杯	554	13.9	8.4	3.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のハケ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	555	13.7	9.5	3.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	556	12.65	8.6	2.85	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデか。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	557	14.3	9.5	3.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヨコナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	558	13.45	8.5	3.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。外面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	559	12.95	7.8	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	560	14.15	9.45	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	561	13.65	9.25	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	562	13.9	9.5	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	563	13.1	8.9	2.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙白色	P110
杯	564	14.1	9.2	3.0～3.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	565	13.5	10.4	2.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
杯	566	13.4	9.4	3.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	567	13.95	9.4	3.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	568	12.45	8.9	3.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	569	15.2	10.55	3.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	570	14.2	8.65	2.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	571	13.45	8.2	2.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	572	13.4	9.2	3.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P110
杯	573	13.0	7.9	2.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙白色	P110
杯	574	13.25	8.25	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	575	14.0	8.5	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のハケ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	576	13.25	8.8	3.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヨコナデ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	577	13.9	7.1	3.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙褐	P110
杯	578	13.7	9.55	3.25	内外目ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
杯	579	13.8	8.6	3.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	明橙褐色	P110
杯	580	14.7	9.4	3.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
Ⅲ	581	8.15	5.8	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P110
Ⅲ	582	7.25	5.6	0.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	灰白色	P110
Ⅲ	583	8.5	6.3	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	灰白色	P110
Ⅲ	584	8.7	6.65	1.3～1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	585	8.0	6.5	1.15～1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
Ⅲ	586	7.45	6.15	1.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	587	9.15	6.55	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	灰白色	P110
Ⅲ	588	9.1	6.1	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	灰白色	P110
Ⅲ	589	9.0	6.35	1.5～1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	灰白色	P110
Ⅲ	590	9.0	6.55	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	灰白色	P110
Ⅲ	591	7.95	5.9	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	592	7.6	6.75	1.05～1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P110
Ⅲ	593	7.65	5.5	1.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	594	7.15	5.8	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	595	7.8	5.8	1.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P110

Ⅲ	596	6.9	5.55	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	597	7.55	5.65	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ　。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙	P110
Ⅲ	598	7.15	5.4	1.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	599	7.85	5.45	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	600	7.6	5.75	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	601	7.25	5.2	0.95	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰白色	P110
Ⅲ	602	8.3	6.1	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	603	7.55	5.7	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄灰白色	P110
Ⅲ	604	8.05	6.4	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P110
Ⅲ	605	8.0	5.7	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	606	7.7	6.2	0.95	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	607	7.7	6.2	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	608	7.45	5.9	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	609	8.15	6.7	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	610	7.45	5.8	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕後ナデ。内面不整方向のハケ後ナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	611	7.5	5.8	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	612	7.9	6.0	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙	P110
Ⅲ	613	7.5	5.3	1.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	614	7.5	5.2	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P110
Ⅲ	615	7.9	5.85	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	616	7.8	6.2	1.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	617	8.05	5.7	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	618	7.8	5.6	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	619	8.55	6.6	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	620	7.25	6.0	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	621	6.9	5.35	1.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	622	7.1	5.2	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	623	7.65	5.8	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデか。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	624	7.45	5.8	0.8~1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ後板目痕。内面不整方向ナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	625	7.4	5.45	1.05~1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	626	7.5	5.5	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙	P110
Ⅲ	627	8.15	6.1	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P110
Ⅲ	628	7.5	5.7	1.05~1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	629	8.2	6.25	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	630	7.7	6.7	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄灰白色	P110
Ⅲ	631	7.8	6.2	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	632	7.0	5.6	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	633	7.75	6.1	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	634	7.7	6.7	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	635	7.6	6.4	1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	636	7.6	6.5	1.0	内外面ヨコナデ。底部内面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	637	7.85	6.7	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	638	7.65	6.8	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	639	6.65	4.9	0.95~1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	640	8.2	7.0	1.3~1.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	641	7.85	6.4	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙褐色	P110
Ⅲ	642	7.45	5.7	1.0~1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	643	8.75	6.4	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	灰白色	P110
Ⅲ	644	8.4	6.3	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	645	7.6	5.8	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	646	7.75	5.6	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	647	7.4	5.9	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	648	7.6	5.7	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	649	7.35	5.5	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	650	7.55	5.8	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	651	7.7	5.9	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	652	8.4	5.8	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	653	7.9	6.45	0.95	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙白色	P110
Ⅲ	654	7.55	5.7	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のハケ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	655	7.6	5.55	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	656	7.25	5.6	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡灰白色	P110
Ⅲ	657	7.3	5.5	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	658	7.35	5.25	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P110

Ⅲ	659	8.4	6.8	1.2~1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	660	8.4	6.0	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	灰白色	P110
Ⅲ	661	8.0	6.5	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P110
Ⅲ	662	7.35	5.05	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	663	8.55	6.05	1.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	664	7.0	5.6	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	665	8.2	5.75	0.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰	P110
Ⅲ	666	7.15	5.2	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヨコナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	667	7.55	6.2	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	668	8.05	5.8	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡褐色	P110
Ⅲ	669	8.4	6.4	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	暗橙色	P110
Ⅲ	670	7.55	6.05	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	671	7.85	6.35	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	672	7.45	5.6	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	暗橙色	P110
Ⅲ	673	8.1	5.5	1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	674	8.8	6.35	1.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	675	8.3	5.55	1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	676	8.25	6.7	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	677	7.35	5.4	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	暗黄橙色	P110
Ⅲ	678	6.95	5.1	1.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	679	8.3	6.5	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	暗黄橙色	P110
Ⅲ	680	7.95	5.8	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	681	8.1	5.5	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	682	7.95	6.5	0.9~1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	683	7.8	6.15	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	暗黄橙色	P110
Ⅲ	684	7.7	6.35	1.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	暗橙色	P110
Ⅲ	685	7.7	5.2	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	686	7.8	5.8	1.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	687	8.1	6.1	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。重ね焼き痕？	含長石石英	黄灰白色	P110
Ⅲ	688	7.7	6.35	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	689	8.15	6.9	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	690	8.05	7.25	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P110
Ⅲ	691	7.8	6.4	1.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	692	8.0	6.35	1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	693	7.65	7.35	1.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	694	8.05	6.9	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	695	8.05	6.25	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	696	8.15	6.95	1.55~1.85	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄灰白色	P110
Ⅲ	697	8.65	6.5	1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不方向のナデ。	含長石石英	灰白色	P110
Ⅲ	698	7.6	6.0	1.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	699	7.3	5.4	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	700	7.55	5.9	1.25	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	701	8.6	6.9	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケか。	含長石石英	黄褐色	P110
Ⅲ	702	8.45	6.5	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	703	8.8	7.3	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヨコナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	704	8.4	5.9	1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	705	8.7	6.4	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	706	9.5	6.8	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	707	9.9	7.1	1.7	内外面ヨコナデ。底部内面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	708	8.95	6.4	2.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のハケ。	含長石石英	灰白色	P110
Ⅲ	709	9.1	6.4	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	灰白色	P110
Ⅲ	710	8.15	6.6	1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P110
Ⅲ	711	8.0	6.7	1.25~1.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P110
Ⅲ	712	7.7	6.2	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	713	8.5	6.4	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	714	7.8	5.9	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P110
Ⅲ	715	7.75	6.3	1.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	716	9.35	5.6	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	黄灰色	P110
Ⅲ	717	8.9	1.4	6.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	赤橙色	P110
Ⅲ	718	9.3	6.7	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙	P110
Ⅲ	719	9.4	7.05	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P110
Ⅲ	720	9.6	6.4	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P110
Ⅲ	721	9.8	7.5	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P110

Ⅲ	722	9.9	6.9	1.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	723	10.0	7.4	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。	含長石石英	橙褐色	P110
Ⅲ	724	9.95	6.9	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	725	10.0	7.3	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	726	9.3	6.6	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	727	9.6	7.05	1.85	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	728	9.35	6.9	1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	729	9.45	6.4	1.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	730	9.55	7.05	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	731	9.4	6.5	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	732	9.1	6.4	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙褐色	P110
Ⅲ	733	9.8	6.3	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	734	9.4	6.8	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	黄橙褐色	P110
Ⅲ	735	9.35	6.4	1.65~1.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	736	9.5	7.5	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	暗橙色	P110
Ⅲ	737	10.3	7.4	7.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	738	10.0	7.4	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	739	9.3	6.3	1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	740	10.1	7.3	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	741	9.15	7.4	7.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	742	9.95	7.2	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	743	9.5	6.95	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	744	10.15	7.1	1.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄灰色	P110
Ⅲ	745	10.3	7.1	1.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄灰色	P110
Ⅲ	746	10.4	6.4	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	747	9.4	7.0	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	748	9.55	6.9	1.6~2.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	749	9.3	6.5	7.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P110
Ⅲ	750	9.5	6.55	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	751	9.5	6.4	1.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P110
Ⅲ	752	9.9	7.3	1.6	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	753	9.45	6.6	1.6~1.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
Ⅲ	754	9.5	6.8	1.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	755	9.7	7.5	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	756	9.15	6.85	2.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄灰色	P110
Ⅲ	757	7.3	6.3	2.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	758	9.25	6.7	1.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	赤橙色	P110
Ⅲ	759	9.7	7.95	1.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	760	10.1	7.1	1.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	761	9.7	6.8	1.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙色	P110
Ⅲ	762	10.2	6.9	1.65~1.9	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙灰色	P110
Ⅲ	763	9.5	6.5	1.55~1.85	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕か。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙灰色	P110
Ⅲ	764	9.55	7.05	1.4	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	765	9.5	6.5	1.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙色	P110
Ⅲ	766	9.85	7.9	1.3	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	767	12.6	8.4	1.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
Ⅲ	768	9.8	7.1	1.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	769	10.0	7.0	1.55	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ	含長石石英	黄橙色	P110
Ⅲ	770	9.2	6.8	1.55	内外面ヨコナデ。底部ヘラ切り後ハケ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙褐灰色	P110
Ⅲ	771	9.7	6.8	1.65	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後ハケ後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙褐灰色	P110
Ⅲ	772	13.0	7.6	3.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヨコナデ。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P110
Ⅲ	773	13.4	8.0	3.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P110
Ⅲ	774	13.0	7.6	2.8	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P110
Ⅲ	775	9.0	5.15	2.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙灰色	P110
Ⅲ	776	8.15	4.7	2.35	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P110
Ⅲ	777	8.4	5.0	2.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡橙白色	P110
Ⅲ	778	7.6	5.2	4.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙白色	P110
Ⅲ	779	8.25	5.2	2.95	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙白色	P110
Ⅲ	780	8.15	5.7	3.1	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙白色	P110
Ⅲ	781	8.35	5.6	3.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙白色	P110
Ⅲ	782	8.0	5.5	3.15	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙白色	P110
Ⅲ	783	8.2	5.3	3.2	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡黄橙白色	P110
Ⅲ	784	8.65	5.35	3.45	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P110

高台付大皿	785	13.1	8.9	2.05	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後板目痕。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡黄色白	P110
高台付大皿	786	14.4	9.6	2.75	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	橙褐色	P110
高台付大皿	787	19.0	10.8	5.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
高台付大皿	788	19.0	12.0	4.85	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	橙褐色	P110
高台付大皿	789	20.85	12.8	5.0	内外面ヨココナデ。底部外面ヘラ切り後ナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
高台付大皿	790	19.2	12.1	6.0	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。内面不整方向のナデ。	含長石石英	淡橙褐色	P110
高台付大皿	791	20.4	12.2	5.5	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り後指圧痕。	含長石石英	淡黄橙灰色	P110
鍋	792	30.4	—	—	外面上半ヨコハケ後ナデ。下半ナナメハケ後ナデ。口縁部ナデ。内面ヨコハケ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
鍋	793	30.6	—	—	外面ヨコハケ。くびれ部指圧痕。内面ヨコハケ。	含長石石英	淡黄橙灰色	P110
鍋	794	37.3	—	—	外面タテハケ後ナデ。口縁部ヨコナデ。内面ヨコハケ	含長石石英	淡鈍橙色	P110
鍋	795	32.9	—	—	外面ナナメハケ後ナデ。口縁部ヨコナデ。内面ヨコハケ。	含長石石英	淡茶褐色	P110
鍋	796	40.0	—	—	外面タテハケ後ナデ。全体に指圧痕。口縁部内外面ヨコナデ。内面タテハケ。	含長石石英	淡橙灰色	P110
鍋	797	31.5	—	—	外面タテハケ後ナデ。口縁部内外面ヨコナデ。内面ヨコハケ。	含長石石英	鈍橙色	P110
鍋	798	27.0	—	—	外面不整方向のナナメハケ口縁部ヨコナデ。くびれ部指圧痕。内面ヨコハケ。	含長石石英	鈍橙色	P110
鍋	799	22.8	—	—	外面上半タテハケ・ナナメハケ。口縁部ヨコナデ内面ヘラ磨き。内面ヨコハケ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
鍋	800	25.8	—	—	外面上半タテハケ・ナナメハケ。口縁部ヨコナデ内面ヘラ磨き。内面ヨコハケ。	含長石石英	淡茶褐色	P110
鍋	801	25.0	—	—	外面タテ・ヨコハケ。口縁部ヨコナデ内面へら磨き。内面ナナメハケ。	含長石石英	鈍橙色	P110
鍋	802	27.0	—	—	外面ナナメハケ後ナデ。くびれ部指圧痕。内面ナナメハケ。	含長石石英	淡黄橙色	P110
魚住捏鉢	803	30.0	—	—	内外面ヨコナデ。	含長石石英	灰褐色	P110
魚住捏鉢	804	32.7	12.4	9.7	内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り。	含長石石英	淡灰黄色	P110
カマド	805	—	—	—	外面タテハケ。内面ヨコ・ナナメハケ。	緻密	茶褐色	P110
カマド	806	—	—	—	外面タテハケ。内面ナナメハケ後上半ヨコハケ。	緻密	淡茶灰色	P110
カマド	807	—	—	—	外面ナデ、一部タテハケ。	緻密	橙茶灰色	P110
白磁椀	808	16.0	—	—	白磁の椀である。	緻密	白灰色	P110
白磁椀	809	—	—	—	白磁の椀である。内外面ヨコナデ。	緻密	白灰色	P110
白磁椀	810	—	—	—	白磁の椀である。外面下半ヘラケズリ。内面ヨコナデ	緻密	白灰色	P110
白磁椀	811	—	—	—	白磁の椀である。内外面ヨコナデ。	緻密	白灰色	P110
白磁椀	812	—	5.4	—	白磁の椀である。底部内面沈圏線が巡る。	緻密	白灰色	P110
白磁椀	813	—	5.2	—	白磁の椀である。底部内面沈圏線が巡る。	緻密	白灰色	P110
青磁椀	814	17.2	—	—	同安窯系青磁椀である。外面ヨコナデ。	緻密	青緑色	P110
青磁椀	815	16.9	—	—	龍泉窯系青磁椀である。内外面ヨコナデ。	緻密	青灰色	P110
青磁椀	816	15.75	6.45	4.4	龍泉窯系青磁椀である。	緻密	青灰色	P110
青磁杯	817	—	—	—	龍泉窯系の青磁の椀である内外面ヨコナデ。	緻密	青灰色	P110
青磁杯	818	—	—	—	同安窯系の青磁の椀である。外面上半から内面ヨコナデ。下半ヘラケズリ。	緻密	青緑色	P110
青磁皿	819	12.6	3.9	2.9	龍泉窯系の青磁の皿である	緻密	青灰色	P110
青磁皿	820	—	3.9	—	龍泉窯系の青磁の皿である	緻密	青灰色	P110
青磁杯	821	13.5	4.7	3.5	龍泉窯系の青磁の杯である	緻密	青灰色	P110
青磁皿	822	10.8	—	—	同安窯系の青磁皿である。口縁部内外面ヨコナデ。外面下半ヘラケズリか。	緻密	青緑色	P110
青磁皿	823	—	3.1	—	同安窯系の青磁皿である。	緻密	青緑色	P110
青磁皿	824	—	3.0	—	同安窯系の青磁の皿である	緻密	青緑色	P110
黄釉四耳壺	825	20.0	—	—	黄釉陶器で薄胎になる。釉下鉄彩が施され、化粧土が見られる。	緻密	黄灰色	P110
白磁四耳壺	826	—	—	—	白磁の四耳壺である。	緻密	白灰色	P110
須恵質硯	827	—	—	—	須恵質の硯である。同一個体と思われるが接合はしない。内外面ナデ。	含長石石英	淡灰白色	P110
軒平瓦	828	—	—	—	包み込み技法で整形されている。偏行唐草紋が認められる。	含長石石英	橙灰色	P110

Ⅵ 近　世（図208、228）

当地が鯉山小学校の敷地となったのは明治８年のことで、それ以前は道勝寺という寺であった。道勝寺は備中吉備津宮の社僧の１つである普賢院の末寺である。したがって検出された近世の遺構は、この道勝寺に関わるものと考えられる。

遺構面は上下２層あり、下層の遺構を埋めて寺域を拡張している様子がとらえられた。以下、下層と上層で検出された各遺構を説明する。

下層（図208、209、210）

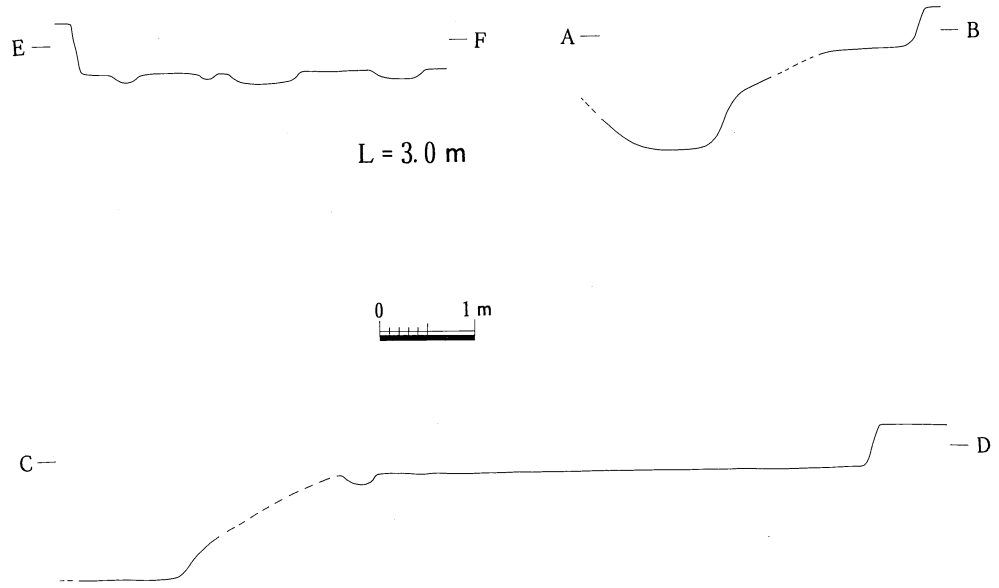


図208　近世下層断面図

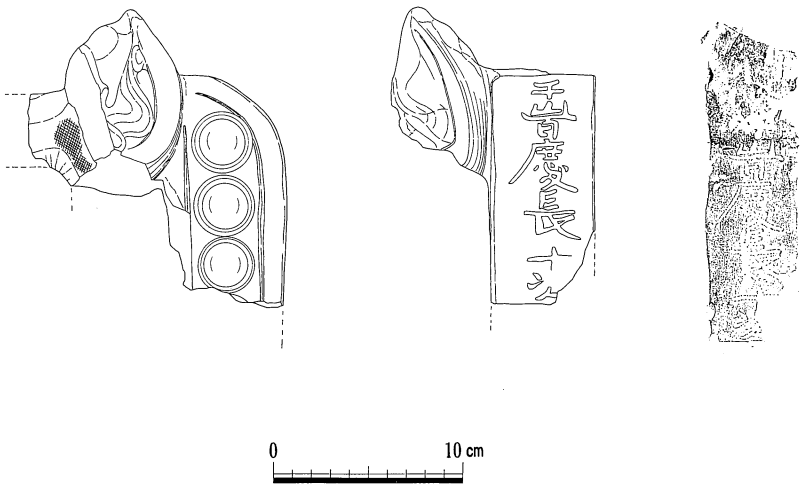
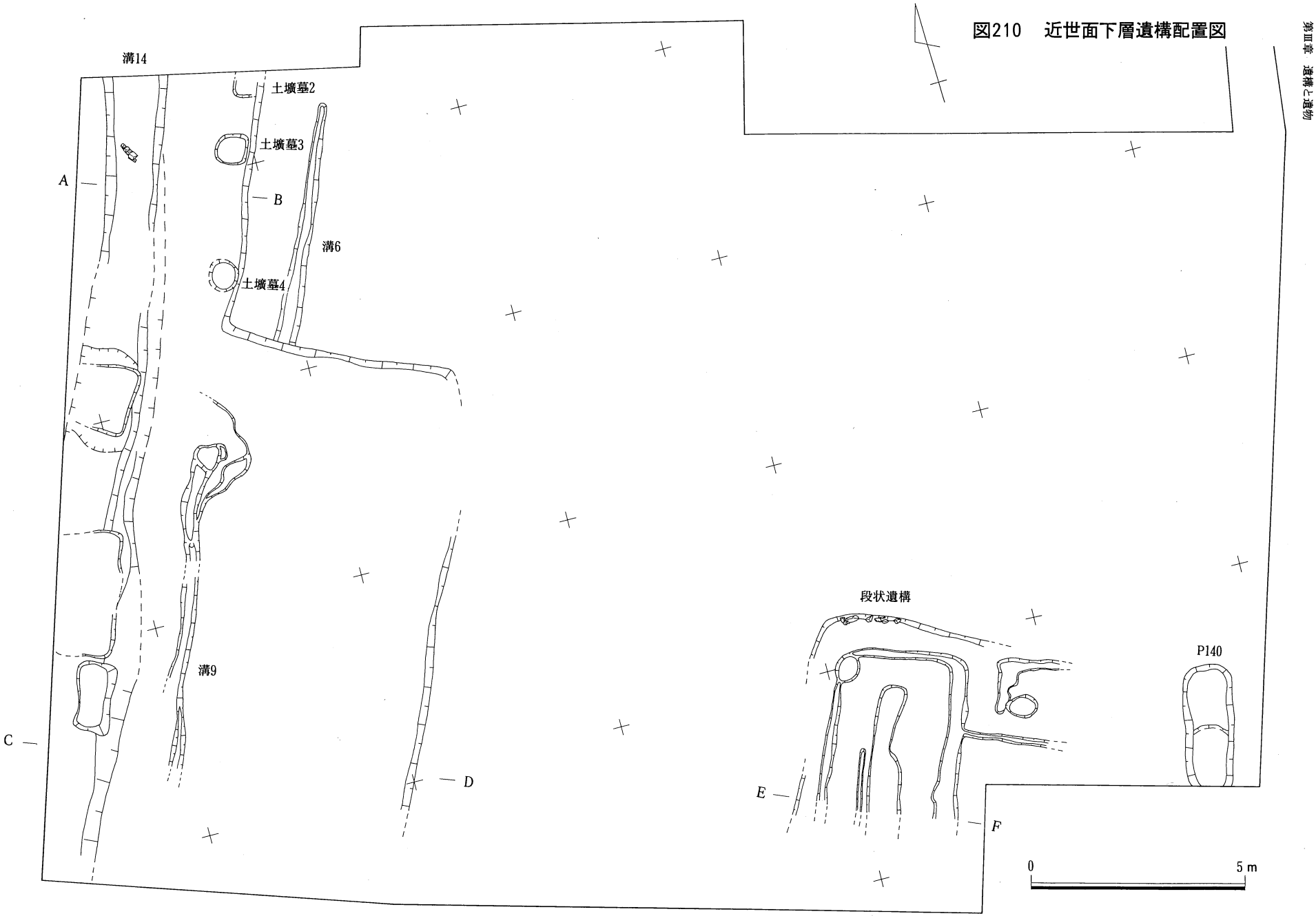


図209　下層出土鬼瓦

図210　近世面下層遺構配置図



調査区西部と南東部は、0.4～0.5m程低くなっており調査区中央部は上面が平坦な段を形成している。段の平面形は、南側に幅約９ｍの張り出し部をもつ凸形をしている（図210）。段上面では現代のゴミ穴が多数掘られていることもあり、溝が検出されたのみであったが、寺関係の建物などの構造物が存在していたものと推定される。調査区南東部の段斜面には部分的に角礫が並んでおり、捨石が施されていたか、もしくは簡単な石垣が存在していた可能性がある（図210）。調査区南東部の段下部分は平坦で、深さが約0.1ｍの浅い溝がいくつか検出されている。調査区のコーナー部分であるため全形は不明であるが、「コ」字形にめぐるものもある。調査区西側の一段低い平坦部には、寺域の西限を画する堀と推定される溝14と、それに沿った小溝が検出された。また一部ではあるが、道勝寺に付属する墓も３基検出されている。これらの墓は規則的に並んでおり、追善供養のおこなわれたことを示す木簡が付近の溝から出土していることから、この墓と寺との継続的な関係が存在していたことがうかがわれる。このことはこの墓の埋葬者が道勝寺の檀家か、もしくは住職であった可能性を示唆している。

下層に属する遺物は、溝などから出土したもの以外は断片的で量も少ない。ただ、「慶長十四年」銘の認められる鬼瓦の破片があり（図209）、これは溝14下層出土遺物の年代とも矛盾しない。したがって下層の上限は、17世紀初頭と推定される。

P140（図211）

調査区南東コーナー付近で検出された土壙で、長さ約３ｍ、幅約1.1ｍの長方形の平面形を呈する。底部南半は約0.1ｍ下がっており、段状になっている。断面形は箱形で、埋土は１層である。この遺構の西側にある「コ」字形の溝からこの遺構へのびる溝も一部検出しており、集水桝状の遺構であった可能性がある。

遺物はほとんど検出されなかった。

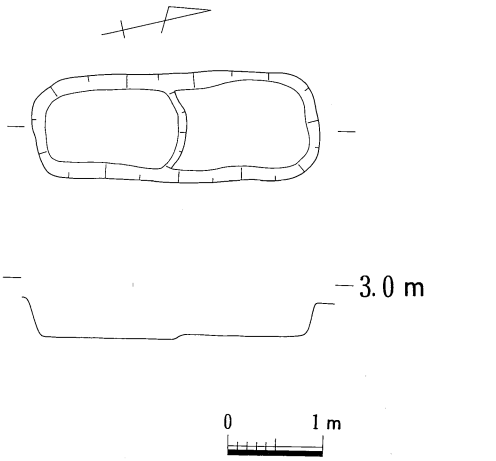


図211　P140 実測図

土壙墓２（図212、213）

調査区北西部付近で検出された土壙墓で、１辺約1.4ｍの方形の掘り方に、長さ約1.3ｍ、幅約１ｍの木棺をすえている。掘り方の深さは検出面から約0.4ｍで、底部は平坦である。木棺は木質の一部が遺存しているだけで、構造はよくわからないが、鉄釘などは出土しておらず、組み合わせ式であったことが推定される。木棺の内部には横臥屈葬で埋葬された人骨があり、頭部に漆の被膜が付着していることから漆製品が副葬されていたと考えられる。この時期に副葬される漆製品は椀が多いが、これは頭部にあることから櫛か髪飾りの可能性も推定される。他に、銅銭４枚を紐を通してつないだいわゆる六道銭が出土した。錆で覆われているため全ては判読できないが、判読できるものは「洪武通宝」ばかりである（図213）。おそらく渡来銭のみで構成されていると思われる。

墓壙の上部は角礫で覆われており、その配置は比較的小さな角礫を墓壙の輪郭に並べ、中央付近に上面が平坦な長さ約0.5ｍの大きな角礫を置くというものである。現況では明確でないが、埋葬直後は若干盛り上がる墳墓状をなしていたと思われる。この土壙墓の西側にある溝14の底部付近から豊島石製の一石五輪塔や木製卒塔婆が出土しており、これらの墓標のいずれかが上に立てられていたのかもしれない。

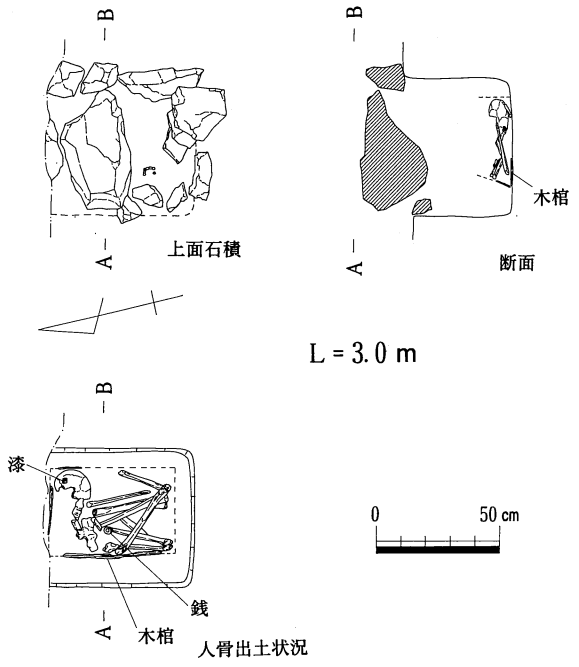


図212　土壙墓 2 実測図

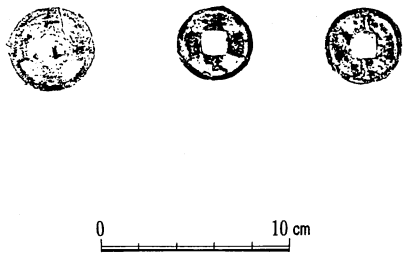


図213　土壙墓 2 出土遺物

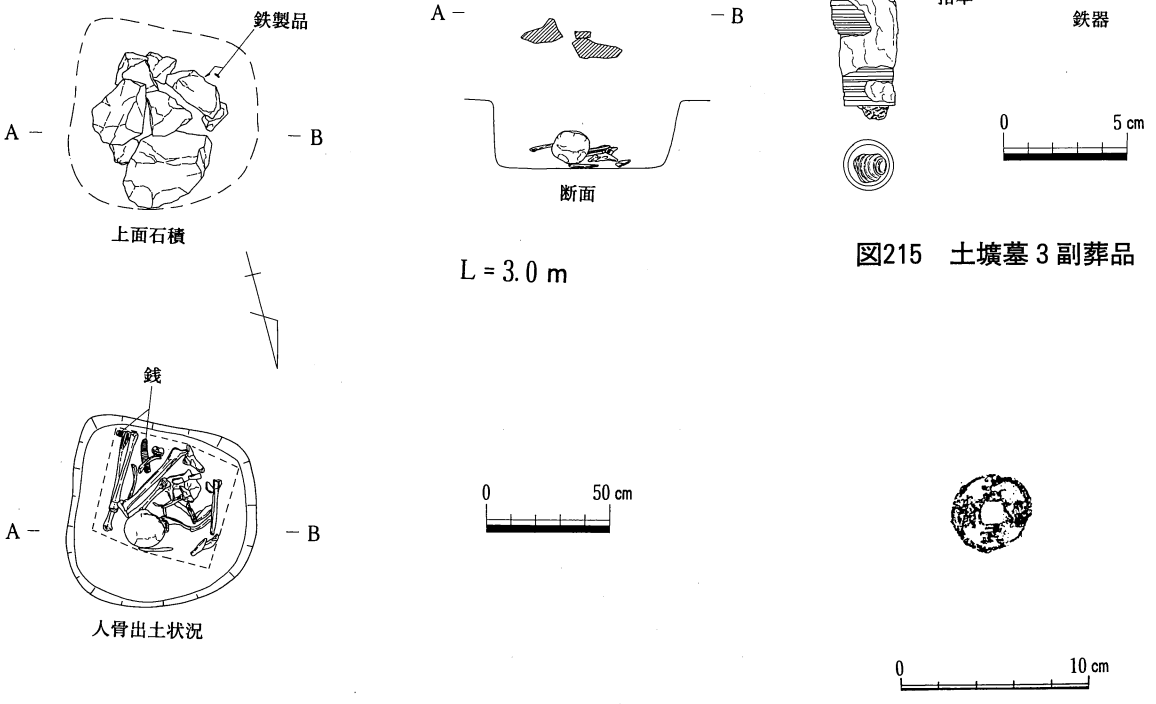


図214　土壙墓 3 実測図

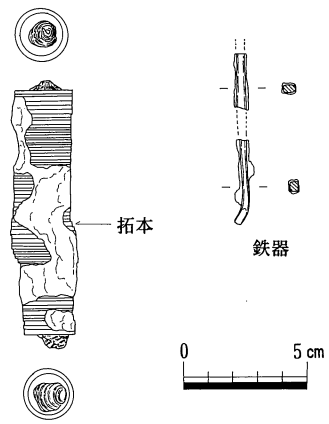


図215　土壙墓 3 副葬品

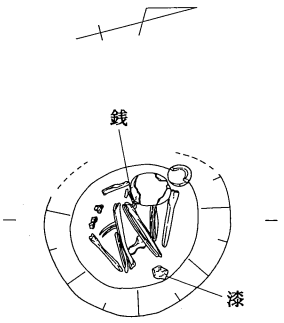
図216　土壙墓 3 出土遺物

土壙墓３（図214、215、216）

土壙墓２の南側に位置し、段に沿って並ぶ土壙墓群の１つである。１辺約0.7ｍの隅丸方形の平面形を呈する掘り方に、１辺約0.5ｍの方形の木棺をすえている。掘り方の深さは検出面から約0.3ｍで、底部は平坦である。木棺は木質の一部が遺存しているだけで構造はよくわからないが、鉄釘などは出土しておらず、組み合わせ式であったことが推定される。木棺の内部には横臥屈葬で埋葬された人骨があり、紐え多数の銅銭を通してつないだいわゆる六道銭が出土した。これは全体が錆で覆われているため実数はわからないが、103枚まではカウントでき、110枚前後になると推定される。中央部分で分離したため少なくとも「洪武通宝」が含まれていることが確認された（図215）。おそらく渡来銭のみで構成されていると思われる。

墓壙の上部は角礫で覆われており、その配置は土壙墓２ほど規則的ではなく、中央付近に比較的大きな角礫を積み上げたようであった。角礫は墓壙を検出できた面よりも0.2ｍも高く、当初は墳墓の頂部に角礫を葺いていたような状態であったと考えられよう。角礫の間から鉄製品が１点出土している。この土壙墓の西側にある溝14の底部付近から豊島石製の一石五輪塔や木製卒塔婆が出土しており、これらの墓標のいずれかの上に立てられていたのかもしれない。

土壙墓４（図217、218、219）



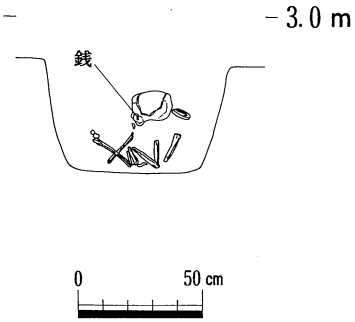


図217　土壙墓４実測図

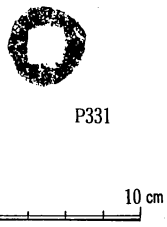


図218　土壙墓４出土遺物（１）

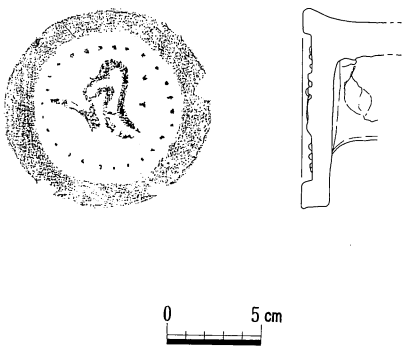


図219　土壙墓４出土遺物（２）

土壙墓３の南側に位置し、土壙墓２と土壙墓３の間隔よりもやや離れている。掘り方の平面形は径約0.7ｍの円形を呈し、深さは検出面から約0.4m、底部は平坦である。木棺の痕跡等は検出されず、鉄釘なども出土しなかった。また、上部には積み石などの施設は認められなかった。内部には座葬で埋葬された人骨が認められ、足元付近には漆の被膜が検出された。漆製品が副葬されていたと考えられ、元の形状はよくわからないが、おそらく椀のようなものと推定される。他に銅銭が１枚頭骨の下付近から出土している。この銅銭は非常に薄く、文字も認められないことから、模鋳銭と考えられる。副葬品ではないが、埋土から梵字を文様とした軒丸瓦が出土している。この瓦は溝14の下層からも出土していることから、「慶長十四年」銘の鬼瓦とともに道勝寺の瓦に用いられたものと考えられる。ただ、この瓦が土壙墓の埋土に入るということは、当初の建物がある程度老朽化してきた時点、つまり慶長十四年よりも比較的時間を隔てた頃

に掘られたことを示しているとも考えられる。調査区で検出された3基の土壙墓のうち、副葬された銅銭の数が最も少なく、掘り方の平面形も円形である土壙墓4が、土壙墓2、3よりも後につくられたと考えられる。

溝6（図220、221）

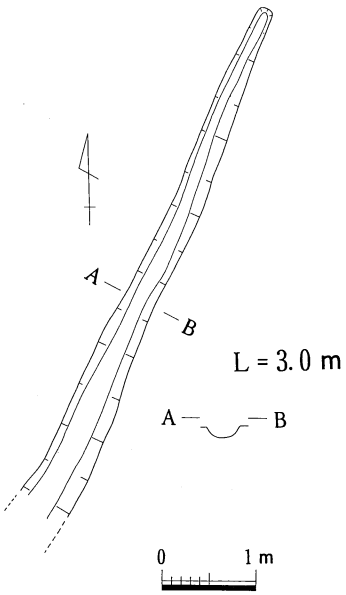


図220　溝6実測図

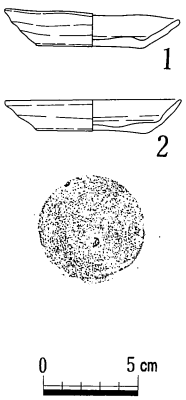


図221　溝6出土遺物

段状遺構の上面で唯一検出された遺構で、南北方向に流れる小溝である。幅約0.3m、深さ約0.2mで、段の方向とほぼ一致する。

遺物はあまり含まれておらず、土師質土器の皿が2点出土したのみである。2点とも底部は糸切りで、薄手である。

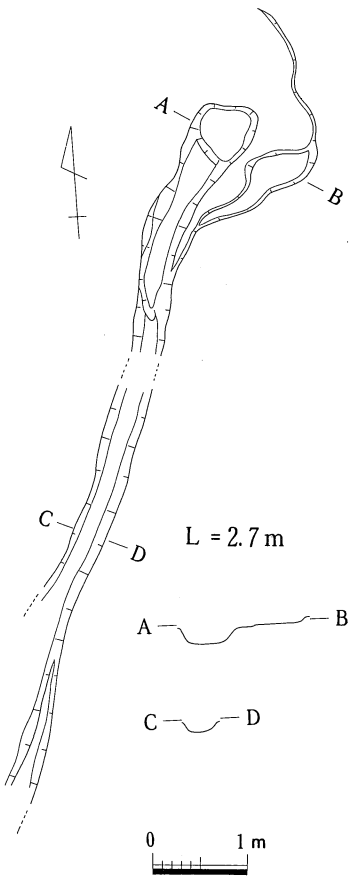


図222　溝9実測図

溝9（図222）

調査区西側で検出された遺構で、南北方向に流れる小溝である。幅約0.4m、深さ約0.2mで、北端部は径約0.5mの不整円形の窪みとなっている。またこの窪みの東側には小規模な段が認められ、段差は0.1m未満である。

遺物は、土師質土器の小片が3点出土したのみである。

溝14下層（図208、210、223、224、225、226、227）

調査区西端を南北方向に流れる溝で、道勝寺の西側を画する堀と推定される遺構である。西岸については調査区外へ出るため不明で、南側についても上層の溝と重複するためよくわからないが、南側の配管部分の調査区では東西方向の近世の溝は検出されておらず、上層で検出した南限の堀と同じ位置にあった可能性が高いと思われる。そうすると、当調査区は道勝寺の南西部コーナー付近に相当していること

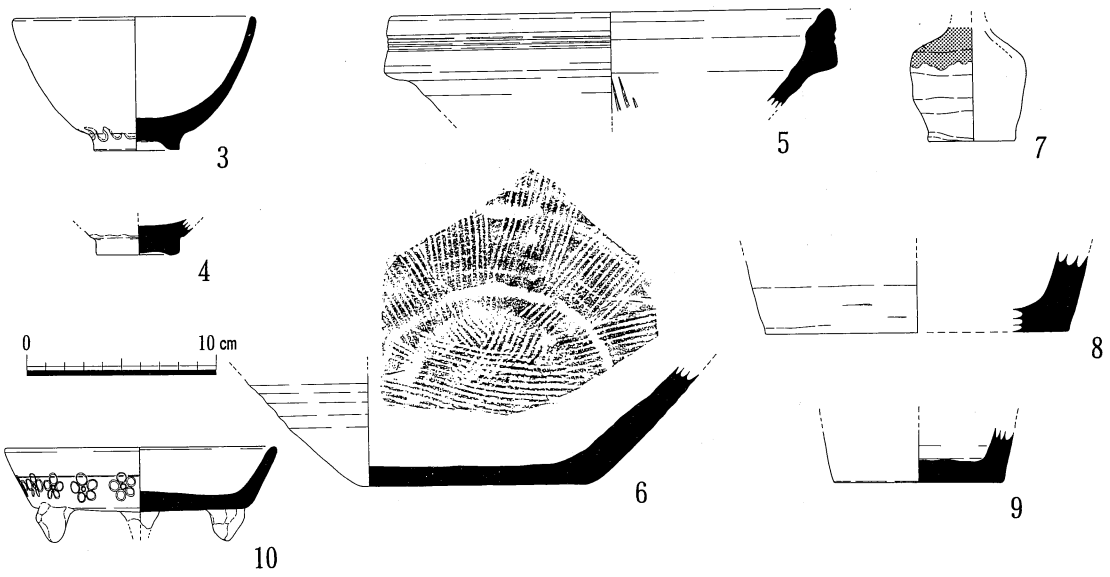


図223　溝14下層出土遺物（１）

が推定される。溝幅は1.2m以上、深さは約１ｍである。埋土は７層確認されたが（図６）、基本的には序々に埋没したことを示す下層と、この溝を整地するため一気に埋めた上層に分けられる。

下層から出土した遺物は、それ程多くない。備前焼の摺鉢片が２点、備前焼の壺片が２点と、唐津焼系の椀（３）１点、小壺（７）１点、天目茶椀（４）１点、瓦質の火鉢（10）１点がある。椀（３）は元和元年（1615）以前のもので、小壺（７）は俗に朝鮮唐津といわれているもので、藁灰釉と鉄釉とを用いているものである(1)。これらは、下層から出土した備前焼の年代ともそれ程矛盾しないようである。

瓦は出土量が比較的多い（図224、225)。軒丸瓦類は文様部分が摩滅しているためやや不鮮明となっているが、平安時代末頃のものと推定され、岡山市福谷の木蔵神社で出土したものとよく似ている。木蔵神社から出土した軒丸瓦に伴う軒平瓦は、主茎の先端が蕨手状に３本分岐する唐草文で、平安宮民部省からも同じものが出土している。11世紀末から12世紀前半頃に備中国から平安京へ搬入された瓦の１種とされている。この軒平瓦は倉敷市亀山窯で認められ、備中西部で焼かれていたことは確実である。また、同じモチーフの軒平瓦が吉備中山山頂部に位置する八徳寺や岡山市一宮の小丸山遺跡からも出土しており、この種の瓦は吉備中山周辺で比較的多くみられる傾向がある。しかし、同種の軒平瓦は吉井川西岸部にも分布しており、備中地域に限定して流通していたものではないようである。瓦そのものが移動していたのか、瓦工人が瓦范と共に移動したのかはよくわからないが、それぞれの文様のモチーフが分布する地点により若干異なっており、後者の可能性が高いように思われる。

軒丸瓦類は梵字のキリーク（阿弥陀如来）を文様としたもので、巴文の軒丸瓦よりもやや小ぶりである。同じく梵字のキリークを文様とした軒丸瓦が倉敷市の日差山廃寺で出土しているが、これには界線があり珠文も大きいことから、当瓦よりも古相を示していると考えることができるが、両者は同じ文様系譜上にあると思われる。

軒丸瓦類は巴文で、巴の頭部が分離していないため中世的な感じを受けるが、内面の小引きはいわゆる「小引きＢ」であり、この種の軒丸瓦は慶長十七年（1612）に再建された吉備津宮御釜殿の軒丸瓦に同じものが認められ(2)、同溝下層から出土している唐津焼や備前焼の年代とほぼ同じと考えてよいよ

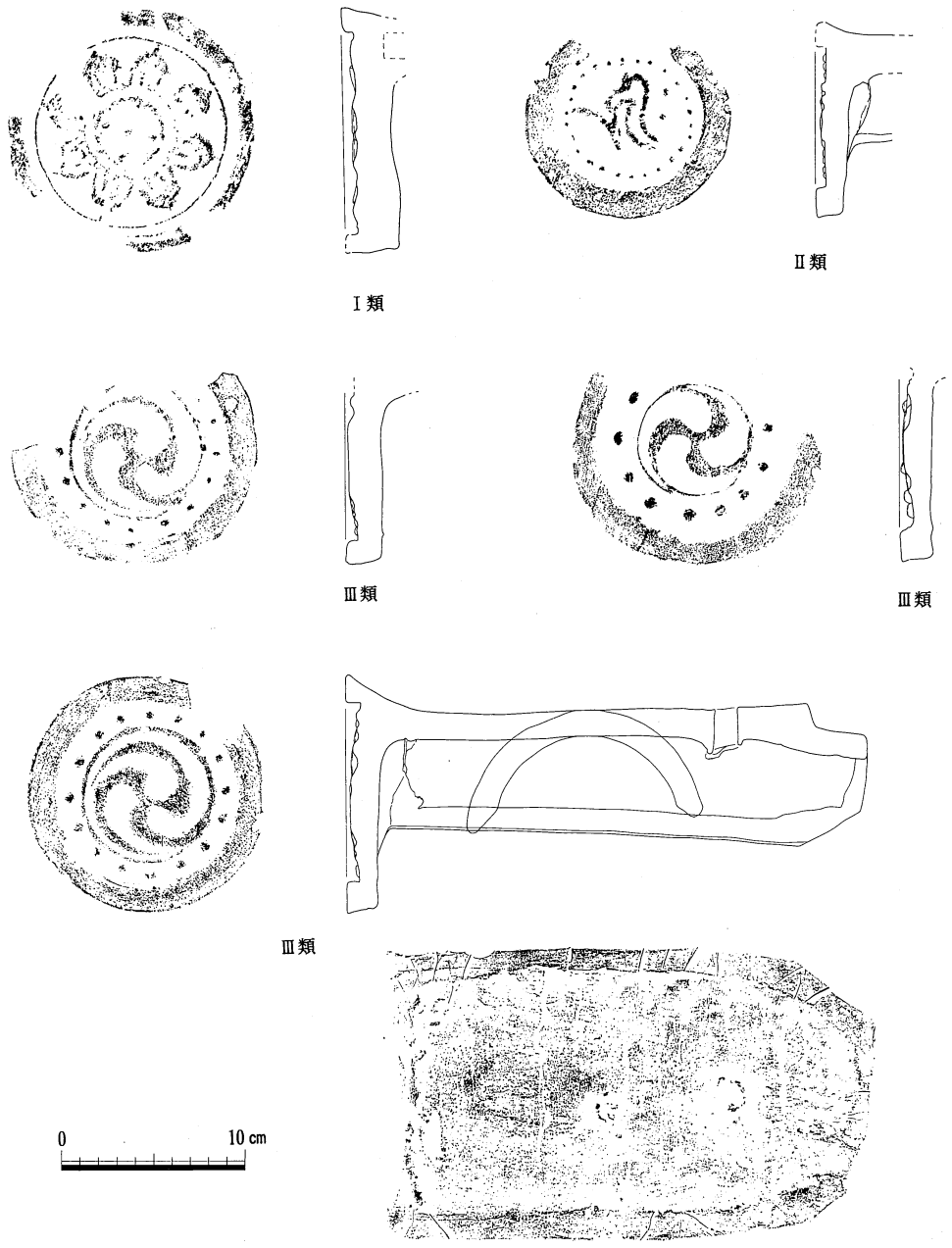


図224　溝14下層出土遺物（２）

うである。瓦頭部の直径は13.0㎝、全長は28.4㎝である。文様区の径は9.8㎝、同深さ0.65㎝、文様は左巻三巴の周囲に径0.6㎝の珠文を16個配す。巴文の径は7.2㎝で、文様区のうち巴文の占める割合は54%、瓦頭厚は1.5㎝である。

軒平瓦は２種類ある。中央に宝珠があり両脇に唐草文が延びるものと、「南無…」を文様としたものである。後者はやや小ぶりで、梵字を文様とした軒丸瓦とセットになるものと思われ、軒丸瓦の種字との関係から「南無阿弥陀仏」となっていたと推定される。上層から出土している軒平瓦は、同じものが吉備津宮御釜殿で認められ、出土層位は異なるものの、確実に軒丸瓦類とセット関係になる。瓦のなかには火を受けた痕跡の認められるものもあり、道勝寺は部分的に火災を受けたことがあったのかもしれない。

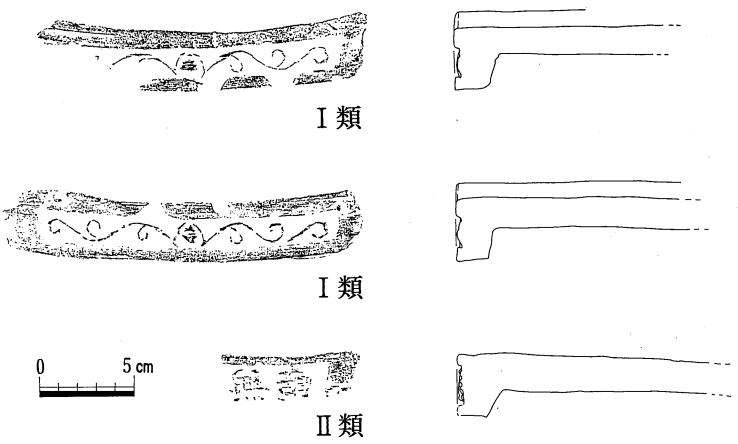


図225　溝14下層出土遺物（３）

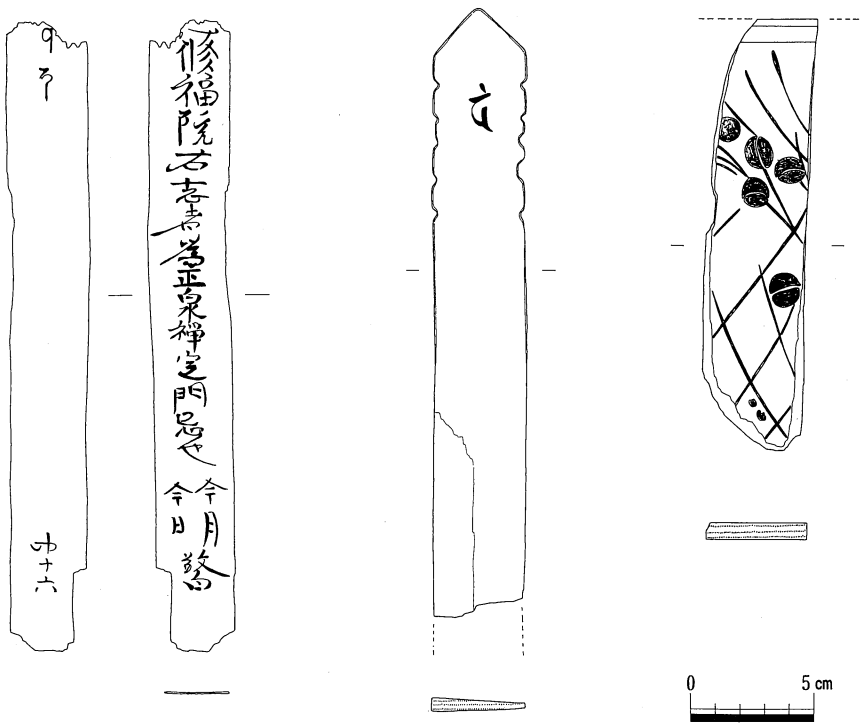


図226　溝14下層出土遺物（４）

木製品は３点あり、漆塗りの重箱の一部と、卒塔婆、木簡がある。漆塗りの重箱は黒漆の下地に朱漆で草花文を描いている。一部のみ端部が生きており、その部分の内側0.3㎝のところに幅0.6㎝で溝状に漆が認められない部分がある。おそらくこの部分に他の部材が接合されていたと思われる。

卒塔婆は幅3.6㎝、長さ24.3㎝以上で、厚さは片側の方が0.6㎝、もう一方が0.27㎝である。穿孔は認められない。頭部から約３㎝下がった位置に、金剛界五仏の最初にあたる梵字のバン（大日如来）の墨書が認められる。邑久町の助三畑遺跡で出土している応永三十□年（1423～1427）銘のある卒塔婆と比較すると、当例の方が頭部五輪塔形が不明瞭で、ただ刻みを施すことによって五輪塔の輪郭を表現しよ

うとしている様子がうかがわれる。岡山市百間川米田遺跡で出土した永正五年（1508）銘の大般若転読札と伴出した卒塔婆は、頭部の先端が三角形で刻みも浅くなっており当例と形態的には似ている。これらの特徴は、木製卒塔婆の型式変化の一端を示しているのかもしれない。木製卒塔婆の一般的な使用形態としては『餓鬼草子』にみえるように、墳墓の上部に立てられていたもので、年忌供養の際に造立したとされている。また一方、室町時代以降盛んにおこなわれるようになった、卒塔婆を川や溝に流して死者の供養をおこなう流し塔婆や「流水灌頂」にも用いられていたとされる。今回出土した卒塔婆がどちらに用いられたのかははっきりしないが、付近に墓が存在することや、その墓に立てられていたと考えられる石製五輪塔が同じ溝から出土していることから、この卒塔婆もそれらの墓の上に立てられていたと考えることができるのかもしれない。しかし、埋墓の付近で流し塔婆や「流水灌頂」がおこなわれたと考えることもできるように思われる。

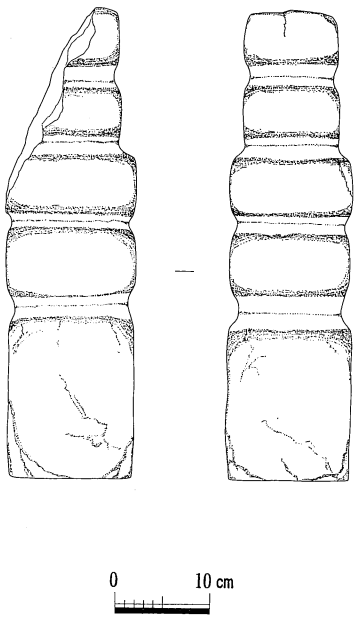


図227　溝14下層出土遺物（5）

木簡は長さ25.2㎝、幅3.2㎝で、厚さは0.15㎝と非常に薄いものである。表には「修福院右志者為正泉禅定門忌也　　敬白」と書かれており、裏には「[梵字]カ（地蔵菩薩）　　中十六」と書かれている。明確な日付が書かれていないものの、内容は板碑などの刻まれている銘文と類似しており、追善供養をしたことを記しているようである。この供養の具体的な内容については、溝14から出土したような五輪塔を造立したのか、あるいは何らかの法要を営んだのかは不明である。ただ、墓群にすぐ近接した位置で出土していることから、これらの墓のいずれかに対しておこなわれたということが推定される。このことから、これらの墓と道勝寺との関係が継続的なものであったことを示しており、この墓の埋葬者が道勝寺の檀家か、もしくは住職であったことが推定される。

石製品は１点ある。豊島石製の一石五輪塔で、長さは0.5m、基底部の幅は0.13mで断面形は方形である。宝珠部と受花部と笠石部は一部欠損している。銘などは認められない。溝14下層の埋土をみるかぎり、それ程水が流れていたとは思われず、この五輪塔が自然に近い形で埋没したとすると、当初は出土地点に最も近い位置にある土壙墓２もしくは３の上部に立っていたと思われる。

上層（図228、229、230、231、232、233）

下層の遺構を埋めて上層の遺構が形成されている。道勝寺の西限を画する堀と推定される溝14が埋め立てられていることから、ある程度寺域が拡張されたことが推定される。南限を画する溝については、おそらくこの時期に石垣が施されたと考えられる。しかしこの石垣は、明治８年に創立された鯉山小学校の敷地として造成された際にほとんどの石は抜かれており（図229）、わずかに基底部の石が14個と、裏込めの小礫が残っているだけである。捨石の出土レベルや検出面から考えて、残存している石垣の石材と大体同じ大きさで石垣が構成されていたとすると、少なくとも２段は存在していたと思われる。調査区南東コーナー付近には段状遺構があり、上層遺構に伴う段状遺構を埋める過程で、新たにより小規模な段を形成したようにみえる。段下部西側については、小礫を捨石状に施し、北側には列石状の角礫が検出されていることから小規模な石垣が存在していたのかもしれない。ただ、南側と東側が調査区外

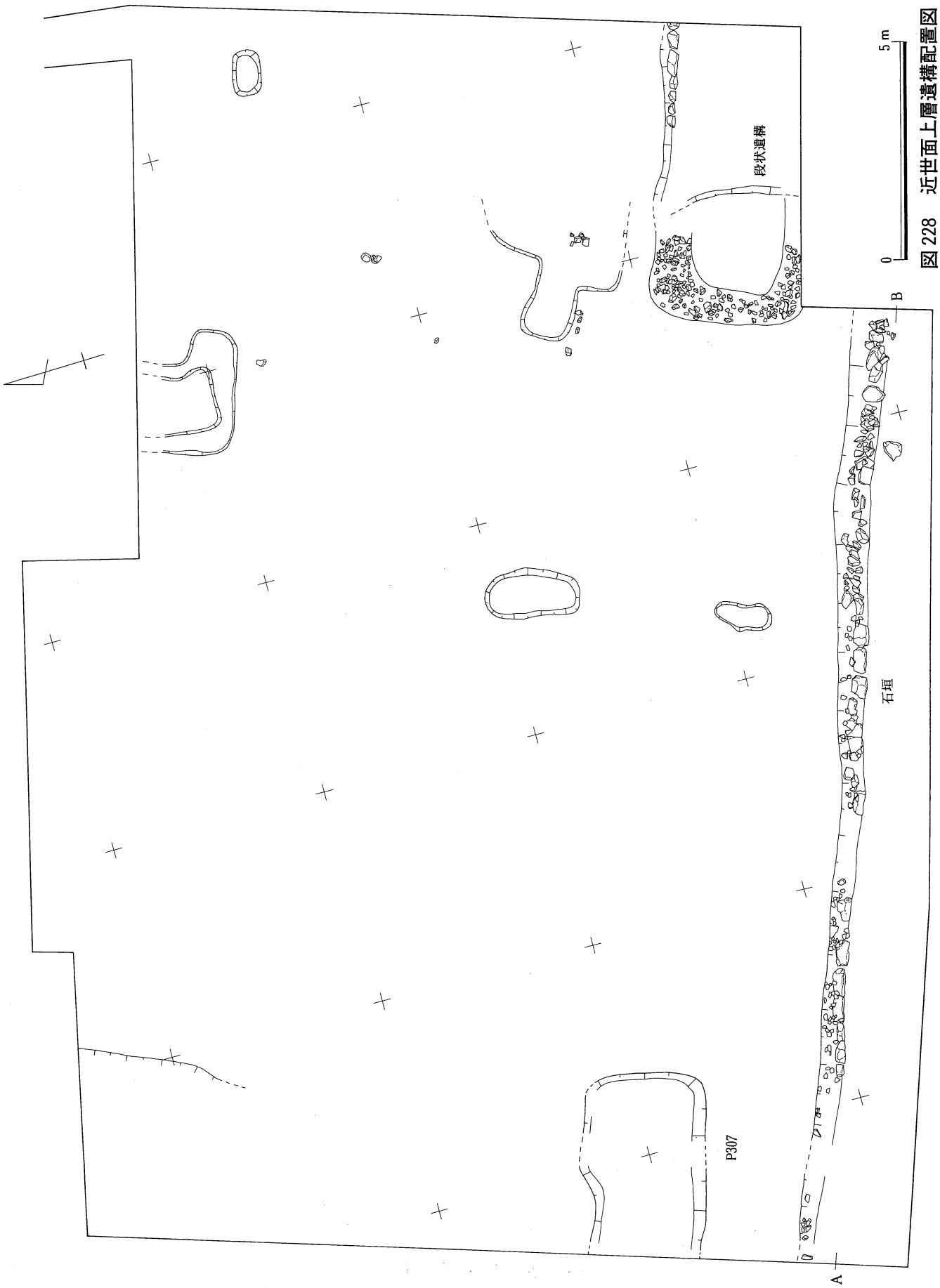


図228　近世面上層遺構配置図

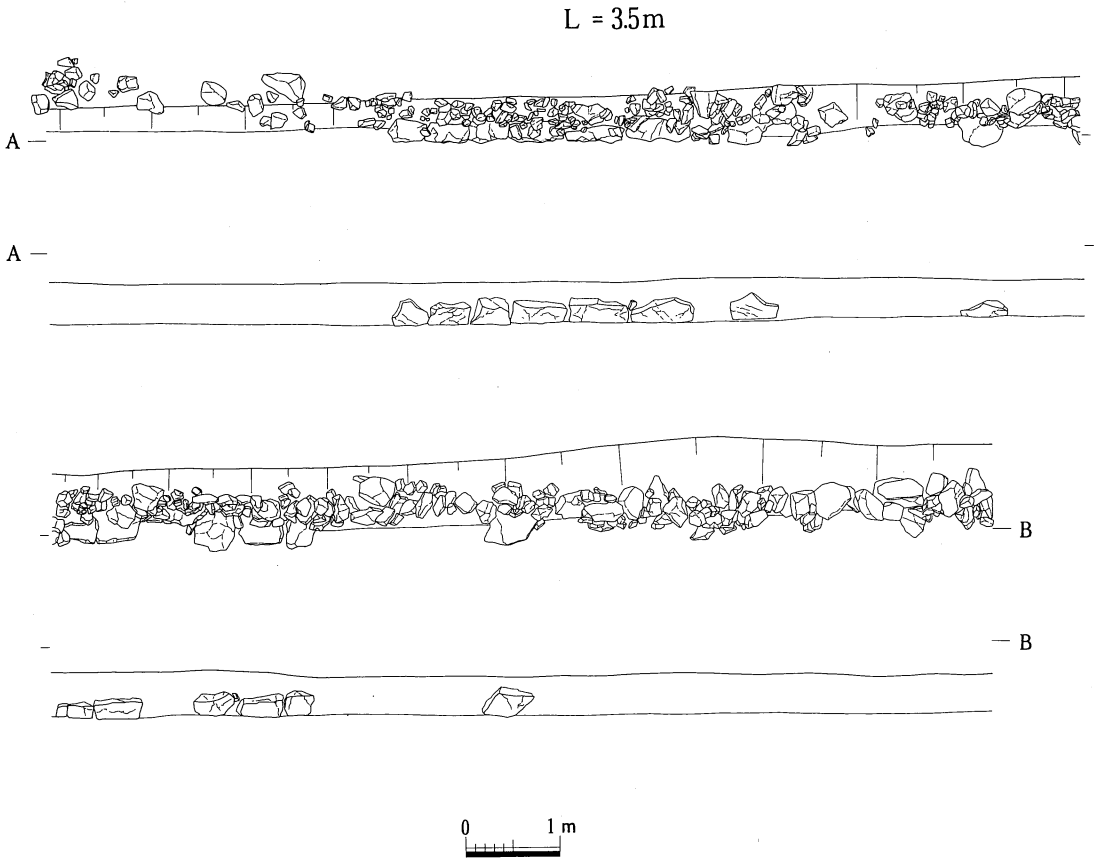


図229　近世上層石垣平面、立面図

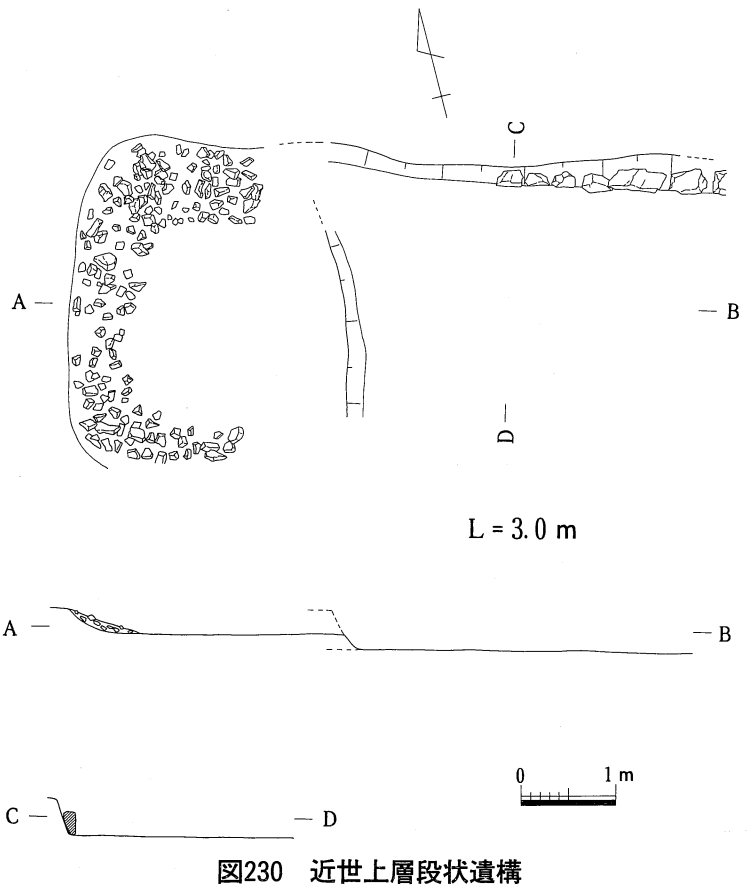


図230　近世上層段状遺構

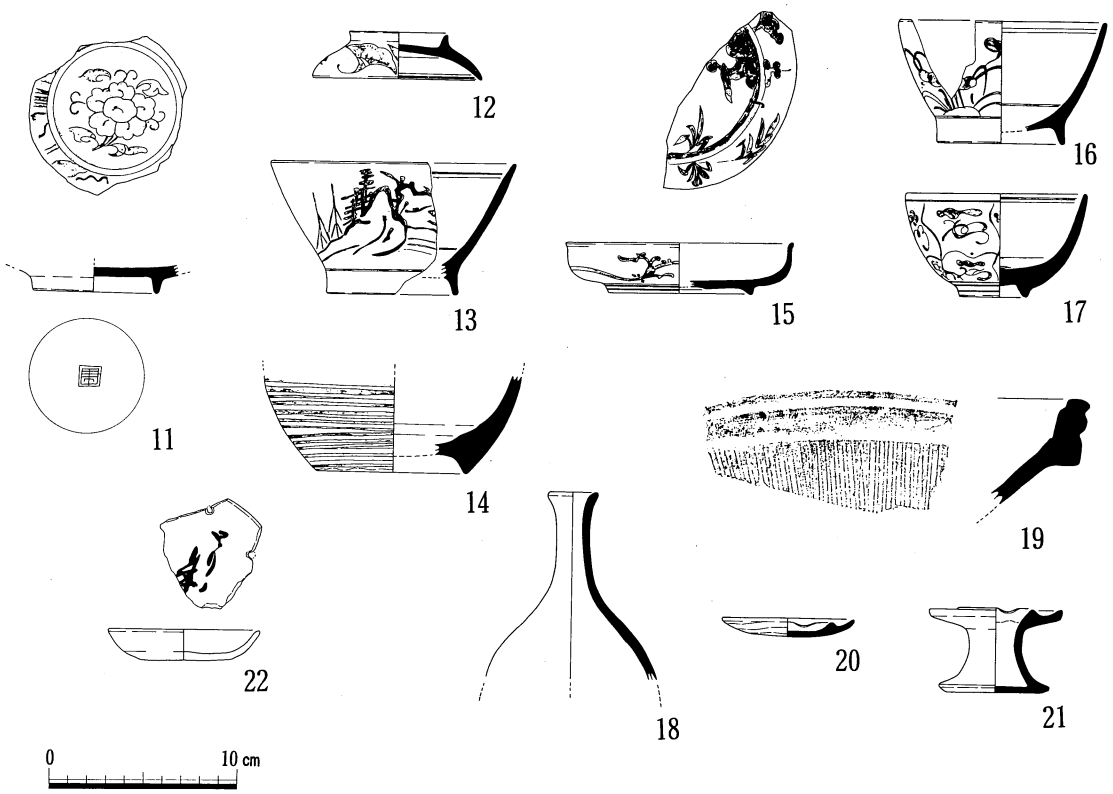


図231　上層出土遺物（1）

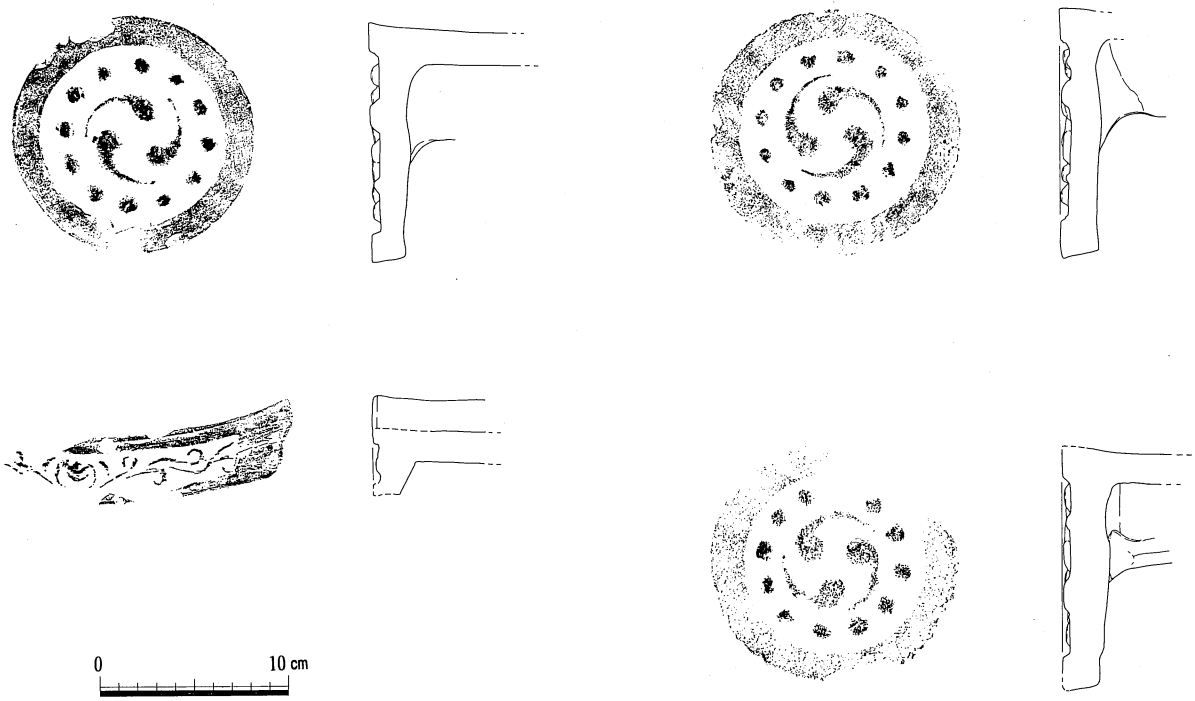


図232　上層出土遺物（2）

図233　近世上層遺構面

へ出るため全体の形はよくわからないが、捨石が「コ」字状になることから、段状遺構ではなく長さ６ｍ以上、幅約３ｍの長方形をした水溜まり状の遺構であることも推定される。

上層に属する遺物は、溝14の上層からとＰ307からある程度まとまって出土している。17世紀後半の遺物は、伊万里焼染付の皿（11）である。18世紀後半に属する遺物は、伊万里焼染付（15）、椀蓋（12）と唐津焼の徳利（14）がある。19世紀の遺物は、伊万里焼染付の椀（13）、（16）、（17）、徳利（18）と灰釉の台付灯明受皿（21）と備前焼摺鉢（19）、灯明皿（20）がある。17世紀後半の遺物は１点だけで、18世紀に属する遺物から量的に増えてくる傾向があり、上層の形成された時期が18世紀後半頃であることが推定される。道勝寺の境内に存在した「妹尾太郎兼康の墓所」には周囲に石の玉垣をめぐらせ、正面の石段の脇に「当寺けい内にせ乃太郎か禰や寸のは可志よあり」の石標があり、安永八年（1779）銘がある。この石標は観光案内的なものであり、石の玉垣との関係はよくわからないが、両者はそれ程隔たった時期のものではないと思われる。18世紀後半に寺域を拡張したことに伴うか、もしくはその直後に「妹尾太郎兼康の墓所」といわれている宝篋印塔の周囲も整備されたものと考えられる。陶磁器の他に土師質土器の小皿（22）も出土している。この小皿は焼成後に２カ所穿孔されており、底部内面には「トリノ年」の墨書が認められる。近世の寺における信仰形態の一端を具体的に示す遺物である。

上層から出土した瓦の大半は平瓦であるが、軒丸瓦、軒平瓦も若干出土した（図232）。軒丸瓦は、瓦頭部の直径12.6㎝、文様区の径9.6㎝、同深さ0.5㎝で、文様は右巻三巴の周囲に径1.2㎝の珠文を12個配す。巴文の径は5.2㎝で、文様区のうち巴文の占める割合は34％、瓦頭厚は2.2㎝である。内面にはタテ方向のタタキ痕が認められる。焼成は比較的堅緻で燻化されており、色調は灰色から黒色を呈する。巴文がやや大きいものの、その他の特徴は岡山城二の丸出土の19世紀の軒丸瓦とよく似ており、この軒丸瓦の時期も同期のものと思われる。軒平瓦は、下層で若干触れたが、慶長十七年（1612）に再建された吉備津宮御釜殿に用いられた軒平瓦と同じであり、下層に用いられた瓦を転用した可能性が推定される。この軒平瓦と同じ文様モチーフをもつものが、岡山市高松の浄土寺や同市高松の高松城、笠岡市の神護寺などにある(3)。

この他に寛永通宝が２枚出土しており、径2.3㎝、穿の１辺0.4㎝で字体は同じである。背銘はない。

Ｐ307（図234、235）

調査区南西付近で検出された。西側は調査区外へ出るため全形はわからないが、幅約2.8m、長さ3.9ｍ以上の長方形をした平面形が推定される。検出面からの深さは約0.5ｍである。この遺構は溝14を埋めた造成層を切っており、寺域拡張の後に掘られていると考えられ、下層造成時期の下限の時期を示すものである。

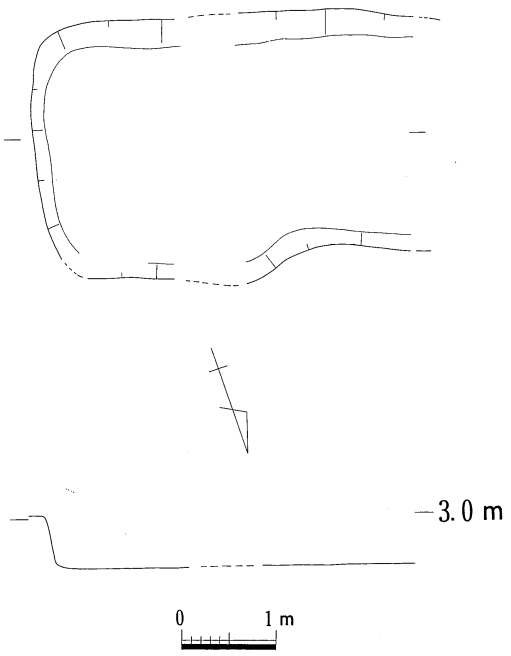


図234　Ｐ307 実測図

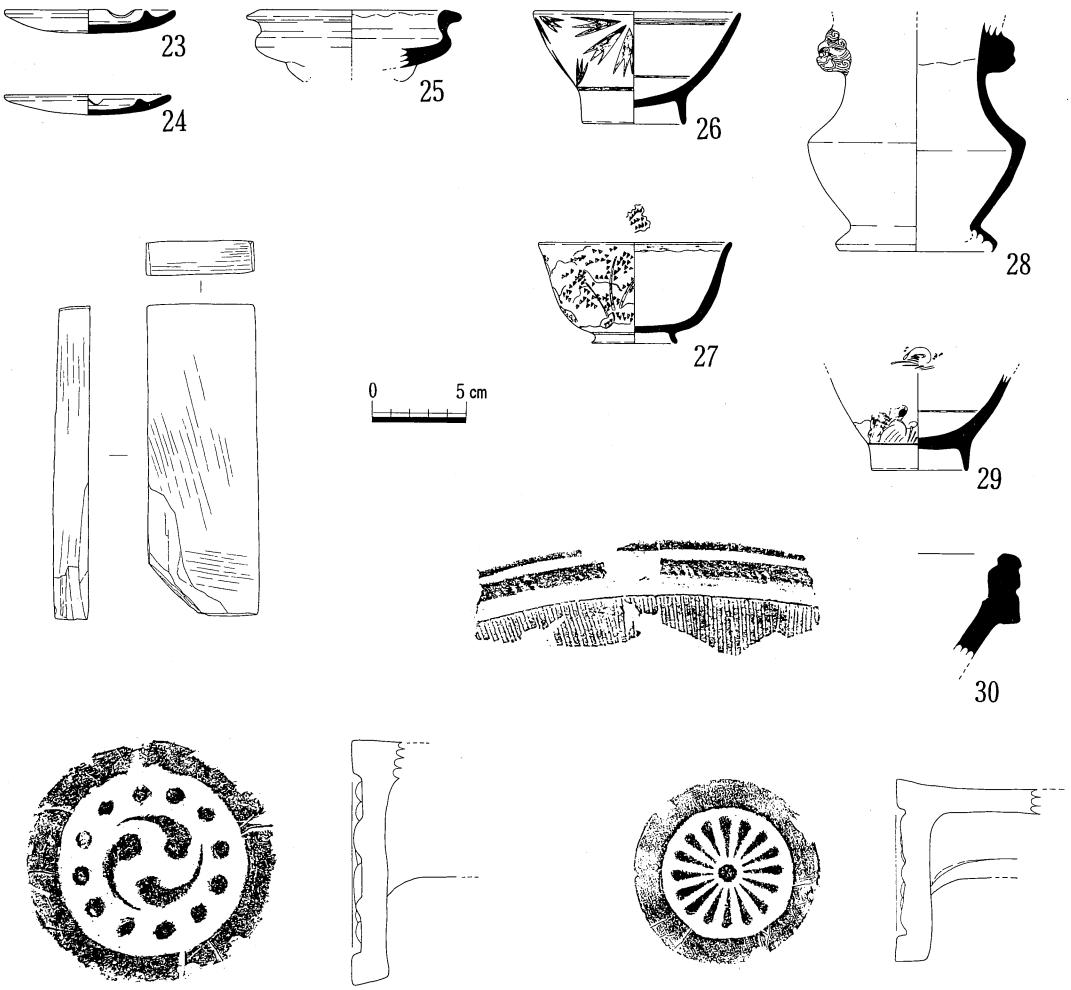


図235　P307 出土遺物

埋土中には陶磁器、土師質土器、瓦が多数出土した。砥石も2点出土している。それらは全て破片であり、この遺構がゴミ穴であったことを推定させる。瓦の大半は平瓦であるが、軒丸瓦も2点出土している。巴文については溝14上層のものと同一で、菊花文のものについては燻化されており、胎土などについても巴文のものと似ている。

この遺構の時期は、出土した陶磁器類から19世紀と考えられる。

注1　大橋康二氏よりご教示を得た。
2　乗岡実氏よりご教示を得た。
3　注2

出土土器観察表

器形	土器番号	法量（cm）			形態・調整手法の特徴	胎土	色調	遺構
		口径	底径	器高				
皿	1	9.25	5.75	1.5~1.9	内外面ヨコナデ。底部外面糸切り。	含長石石英	淡橙灰色	溝9
皿	2	9.25	5.85	1.65	内外面ヨコナデ。底部外面糸切り。	含長石石英	淡橙灰色	溝9
椀	3	12.45	4.4	7.0	唐津の灰釉椀である。高台部分無釉。胎土は暗赤色である。		暗緑色	溝14下層
椀	4	－	4.0	－	内外面に鉄釉を施す天目茶椀である。高台は蛇の目高台で無釉。16C前半。		淡茶褐色	溝14下層
摺鉢	5	22.8	－	－	備前焼の摺鉢である。			溝14下層
摺鉢	6	－	11.6	－	備前焼の摺鉢である。			溝14下層
小壺	7	－	4.6	－	胴部底部に薬灰釉肩部に鉄釉を施す朝鮮唐津である。ひも作り。胎土淡赤色。		暗褐色+灰白色	溝14下層
壺	8	－	16.4	－	備前焼の壺である。外面左回りのへら削り。内面ヨコナデ。	含長石石英	淡灰褐色	溝14下層
壺	9	－	9.2	－	備前焼の壺である。内外面ヨコナデ。底部外面のヘラ記号。	含長石石英	赤褐灰色	溝14下層
火鉢	10	14.2	11.3	5.0	瓦質の奈良火鉢である。内外面ヨコナデ。外面に梅花の連続したスタンプ紋。		黒灰色	溝14下層
皿	11	－	6.5	－	染付の小皿である。見込は牡丹唐草紋。高台内一重方形内に寿か。			溝14下層
蓋	12	8.9	5.2	2.5	染付の椀蓋である。外面は銀杏と松紋。見込みにも施紋。高台内銀杏紋。			溝14上層
椀	13	12.8	6.9	7.0	染付の広東椀である。外面は山水紋。			溝14上層
徳利	14	－	7.8	－	唐津系徳利である。外面は回転刷毛目。底部外面内面は鉄釉。内面は無釉。			溝14上層
皿	15	12.0	7.7	2.7	染付の小皿である。内面は松竹梅紋外面唐草紋。高台は蛇の目凹凸高台。			溝14上層
椀	16	10.9	6.8	6.5	染付の椀である。外面は草花紋（蘭か）。広東椀である。１９C伊万里。			溝14上層
椀	17	9.5	3.5	5.5	染付の椀である。外面は網目状に区切り中に草花紋。見込にも草花紋。			溝14上層
徳利	18	2.5	－	－	白磁の徳利である。内面は口縁部を除いて露胎。器形はいわゆる「白鳥」である		淡灰白色	溝14上層
摺鉢	19	－	－	－	備前焼の摺鉢である。19C		明茶褐色	溝14上層
灯明受皿	20	6.9	1.7	0.95	備前焼の灯明受皿である。口縁部内外面から内面はナデ。外面はケズリ 18C後半		明茶褐色	溝14上層
台付灯明受皿	21	6.9	5.0	4.5	灰釉の台付灯明受皿である。京・信楽系である。底部・内面は無釉。		灰黄白色	溝14上層
皿	22	8.0	5.2	1.6	土師質の灯明皿。内外面ヨコナデ。底部外面ヘラ切り内面とりの年の墨書あり。			溝14上層
台付灯明受皿	23	9.0	4.4	1.25	備前焼の灯明受皿である。外面ヘラ削り。内面ヨコナデ。底部外面糸切り。		暗赤褐色	P307
台付灯明受皿	24	8.8	3.3	1.1	備前焼の灯明受皿である。外面ヘラ削り。内面ヨコナデ。		赤褐色	P307
香炉	25	10.0	－	－	青磁の香炉である。内面は口縁部を除き露胎。脚部下半も露胎。		淡黄青色	P307
椀	26	5.9	5.4	6.0	染付の広東椀である。外面は花紋。見込にも施紋。			P307
椀	27	10.2	4.5	5.4	染付の端反り椀である。外面は樹木と筍の紋様。見込も樹木紋。口縁内部に波紋。			P307
仏花瓶	28	－	8.0	－	備前焼の仏花瓶である。内外面ロクロナデ。胴部二箇所に獅子面の耳を貼る。		暗赤褐色	P307
椀	29	－	5.1	－	染付の広東椀である。外面は山水紋。見込には波紋と思われる施紋。19C			P307
摺鉢	30	－	－	－	備前焼の摺鉢である。		橙赤色	P307

（草原）

第Ⅳ章　貝類の分析

はじめに

今回報告するものは、住居趾－3と呼ばれる弥生時代中期中葉の住居趾内に投棄されていたものである。

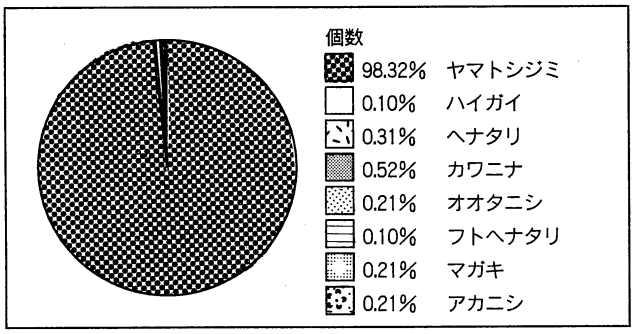
出土した貝類の種名表

軟体動物部門　Phylum　Mollusca
　腹足綱　Class　Gastropoda
　　中腹足目　Order　Mesogastropoda
　　タニシ科　Family　Viviparidae
　　オオタニシ　Cipangopaludina　japonica
　　カワニナ科　Family　Pleuroceridae
　　カワニナ　Semisulcospira　bensoni
　　ウミニナ科　Family　Potamididae
　　ヘナタリ　Certhideopsilla　cingulate
　　フトヘナタリ　Cerithidea　rhizophorarum
　　新腹足目　Order　Neogastropoda
　　アクキガイ科　Family　Muricidae
　　アカニシ　Rapana　venosa
　　柄眼目　Order　Stylommatophora
　　オカチョウジガイ科　Family　Subulinidae
　　オカチョウジガイ　Allopeas　Kyotoense
　二枚貝綱　Class　Bivalvia
　　フネガイ科　Family　Arcida
　　ハイガイ　Tegillarca　granoza
　　シジミ科　Family　Corbiculidae
　　ヤマトシジミ　Corbicula　japonica
　　イタボガキ科　Family　Ostreidae
　　マガキ　Crassostrea　giga

1．分析方法

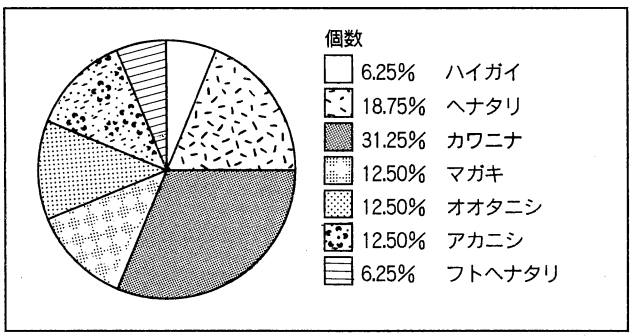
ここで扱う貝類は、周囲の住居趾埋土とともに取り上げた資料を、3㎜と1㎜のふるいを使って水洗選別し、更に残ったものをガーゼにて水洗選別を行ない、ルーペを使用してピンセットにより採集したものである。

名　称	個　数
ヤマトシジミ	937
ハイガイ	1
ヘナタリ	3
カワニナ	5
オオタニシ	2
フトヘナタリ	1
マガキ	2
アカニシ	2

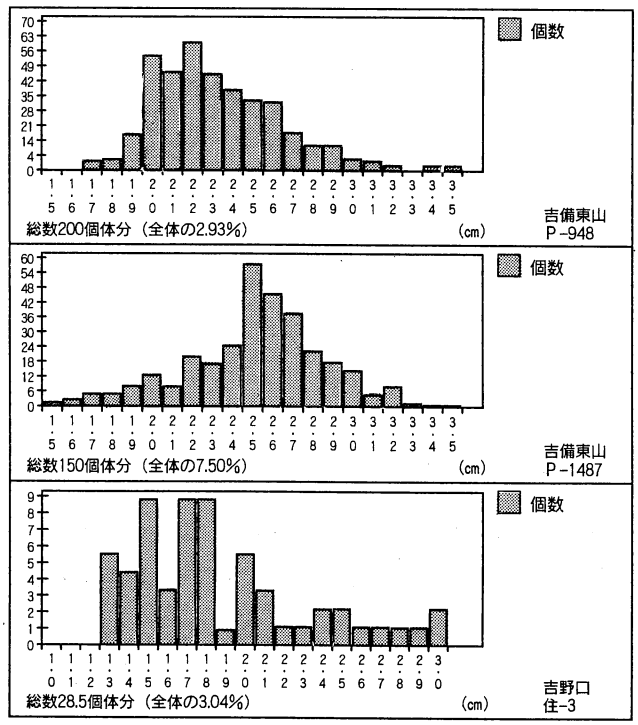


名　称	個　数
ハイガイ	1
ヘナタリ	3
カワニナ	5
マガキ	2
オオタニシ	2
アカニシ	2
フトヘナタリ	1

（表－１）



（表－２）



（表－３）

２．吉野口（鯉山小）遺跡出土の貝類の特徴

吉野口（鯉山）出土貝類はヤマトシジミが98.32%を占める（表－１）。従って当遺跡の貝採取のテリトリーは砂泥底の河口潟湖が大半を占めていたと思われる。ヤマトシジミ以外の貝類に関しては、内湾汽水域に棲むウミニナ類及び、内湾海水域に棲むマガキ等も、ここではわずかに２個体あるいは断片しかみられないため、採取テリトリー内に潮間帯の部分は殆ど含まれていない事を推測させる。オオタニシ、カワニナといった淡水性の貝類も個体数は合計して７個体に過ぎず、採取テリトリー内に淡水域もあまり含まれていなかったことが考えられる。（表－２）

表－３は当遺跡および吉備東山遺跡出土のヤマトシジミの殻長度数分布表である。これを見ると吉野口遺跡は、1.3cmから2.1cmにかけてに集中する傾向が見られる。住－３出土のヤマトシジミは吉備東山遺跡の２地点のものに比べて破損の度合が大きく、サンプル数が少ないものの見た限りにおいて度数分布表と同様の印象を持った。

このグラフから、以下のような吉野口遺跡におけるヤマトシジミ採取状況の特徴が読み取れる。

第一に吉備東山遺跡の２地点に比べてグラフのピークがかなり左に偏ってみえ、また最小サイズが1.3cmであり、かなり小さな個体まで採取していた事がよみとれる。

第二に、このグラフには、吉備東山遺跡の２地点のものに比べて明確なピークが認められない。ピークには1.5cmと1.7cm、1.8cmがあるが、2.0cmの所にも小さなピークが認められ、このことから、住－３の貝採取状況は上記の２地点のものに比べて大きさにとらわれず、採取したことがよみとれる。

第三にこのグラフの形状は、吉備東山遺跡のものほど明確なピラミッド型を呈さず、むしろ右下がりの形状を呈する。この形は自然状態での年齢個体数を表わす、右下がりのグラフに似ていることから、住－３のヤマトシジミの採取方法は何らかの形で自然状態のままのヤマトシジミの群集を捕獲しそのまま持ち帰ったことがよみとれる。

以上の事から、吉野口遺跡のヤマトシジミの採取方法は、サイズに選択性がみられず、その度数分布が自然状態での個体数にやや近いと思われることから、ヤマトシジミの群棲する部分を泥と一緒にすくいあげるといった採取方法がとられたと考えられる。

３．各地点の貝採取場の環境

今度は、周辺に存在する遺跡から出土した貝と比較し、そのデータから周辺の古環境を復元してみたいと思う。

	吉野口	P948	P1487	加茂B	吉備東山 *(1)
ハイガイ	6.25	56.96	58.56	22.76	59.62
マガキ	12.5	1.27	27.03	64.30	6.92
ウミニナ科	25.0	36.07	14.41	10.21	28.08
アカニシ	12.5	0	0	0.29	0
オオタニシ	12.5	5.7	0	1.19	3.46
カワニナ	31.25	0	0	1.25	1.92

数字は%

	吉野口	P948	P1487	加茂B	吉備東山
淡水	43.75	5.7	0	2.44	5.38
汽水～海水	56.25	94.3	100	97.56	94.62

数字は%

	ヤマトシジミ		その他	
吉野口	937	(98.32)	16	(1.68)
P948	6817	(97.73)	158	(2.27)
P1487	1998	(95.27)	97	(4.73)
加茂B	21548	(86.90)	3724	(13.10)
吉備東山	8815	(97.13)	255	(2.87)

( ) 内は%

	吉野口		P948	
ヤマトシジミ	937	(98.32)	6817	(97.73)
ハイガイ	1	(0.1)	90	(1.25)
マガキ	2	(0.21)	2	(0.03)
ウミニナ科	4	(0.42)	57	(0.82)
アカニシ	2	(0.21)	0	(0.00)
オオタニシ	2	(0.21)	9	(0.13)
カワニナ	5	(0.52)	0	(0.00)
その他	0	(0.00)	0	(0.00)

( ) 内は%

	P1487		加茂B	
ヤマトシジミ	1998	(95.27)	21548	(86.90)
ハイガイ	65	(3.10)	709	(2.86)
マガキ	16	(0.76)	2003	(8.08)
ウミニナ科	16	(0.76)	308	(1.28)
アカニシ	0	(0)	9	(0.04)
オオタニシ	0	(0)	37	(0.15)
カワニナ	0	(0)	39	(0.16) *(2)
その他	0	(0)	132	(0.53) *(3)

( ) 内は%

	吉備東山 *(5)
ヤマトシジミ	8815　(97.13)
ハイガイ	155　(1.71)
マガキ	18　(0.20)
ウミニナ科	73　(0.80)
アカニシ	0　(0　)
オオタニシ	9　(0.10)
カワニナ	5　(0.06)
その他	0　(0　)

( ) 内は%

*(4)

津寺遺跡西川調査区
袋状土壙－8

種類	個数	%
ヤマトシジミ	339	70.63
ハイガイ	141	29.37

袋状土壙－81

種類	個数	%
ヤマトシジミ	1720	90.57
ハイガイ	88	4.63
カキ	91	4.80

袋状土壙－107

種類	個数	%
ヤマトシジミ	107	100.00

津寺遺跡西川調査区（統合）

種類	個数	%
ヤマトシジミ	2166	87.13
ハイガイ	229	9.21
カキ	91	3.66

（表－4）

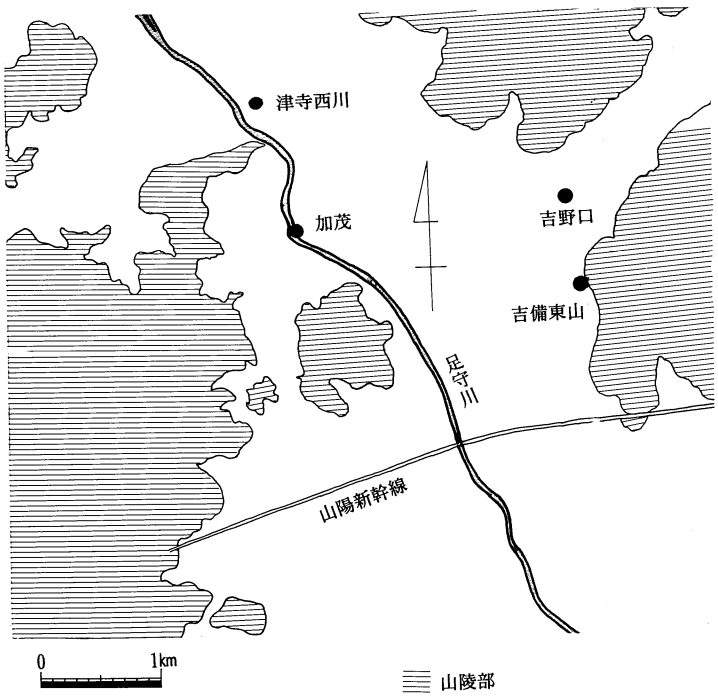


図236　遺跡位置図

表－4のデータから足守川を中心とする平野の東側では貝採取するテリトリー内の潮間帯の占める重要性がほとんどなく、西側ではある程度の重要性を持つという現象が認められる。この現象が起こった理由として2つの要素が挙げられる。

一つ目の要素として地形の影響が挙げられる。すなわち、貝を採取する場所がすくなければ、それだけ潮間帯の貝類のパーセンテージが増えるという考え方である。

津寺遺跡西川調査区から吉野口遺跡にかけての足守川周辺の平野部に、現在の標高を書き入れてみると、標高3m以下の地点は平野部の東側に多く、特に標高2.5m以下の点は、山陽新幹線から北側では吉備団地と小西の集落の間を抜け宮内の集落に向けて、平野の東端の山際に沿って谷状にのびている事がわかる。現在、小西の集落の南東と新幹線を越えた南側に川入といった地名が残っており、ここを河口として先述の谷状にのびる地形の部分を流れる河道があったのであろう。(図237)

日下雅義氏は「…沖積世になって、海は山陽新幹線の北まで侵入したが、津寺付近にまで達することはなかった。せいぜい図1に「吉備津」と記した付近までであろう。当時の足守川の河口は、このあたりにあり、深い入江をつくっていたらしい。…」と指摘している。*(6) 縄紋中期の矢部貝塚（矢部奥田遺跡）は、上記の弥生貝塚が形成された時期とは若干のずれがあり、弥生中・後期の海岸線は

河川の沖積作用によって若干移動していたであろうが、大きな変化は無かったと思われる。

吉備津から、川入にかけての弥生時代の遺跡の分布をみてみると（図236）、平野東端の山麓にある吉備東山遺跡の存在する散布地は、山麓にしがみつくように存在し、その南西にある現在の小西の集落を含む川入遺跡から西側には、平野の中に西端の山際までいくつかの遺跡が点々と続いている。そして現在標高の最も低い、吉備東山遺跡と川入遺跡の間にはなにも存在しない。＊このことからすくなくとも弥生時代にいたってもこの谷状の部分には人が住まない環境＝水があったと考えられる。吉備東山遺跡と川入遺跡との間に谷状の部分にかつて足守川の流れのひとつが入り込んでいたことは間違いなく、この谷状の地形の部分は細長い湾になっていたと推定できる。

当時の海岸線が山陽新幹線のやや北側まで入り込んでいたと仮定しそれをコンターで表現すると（図

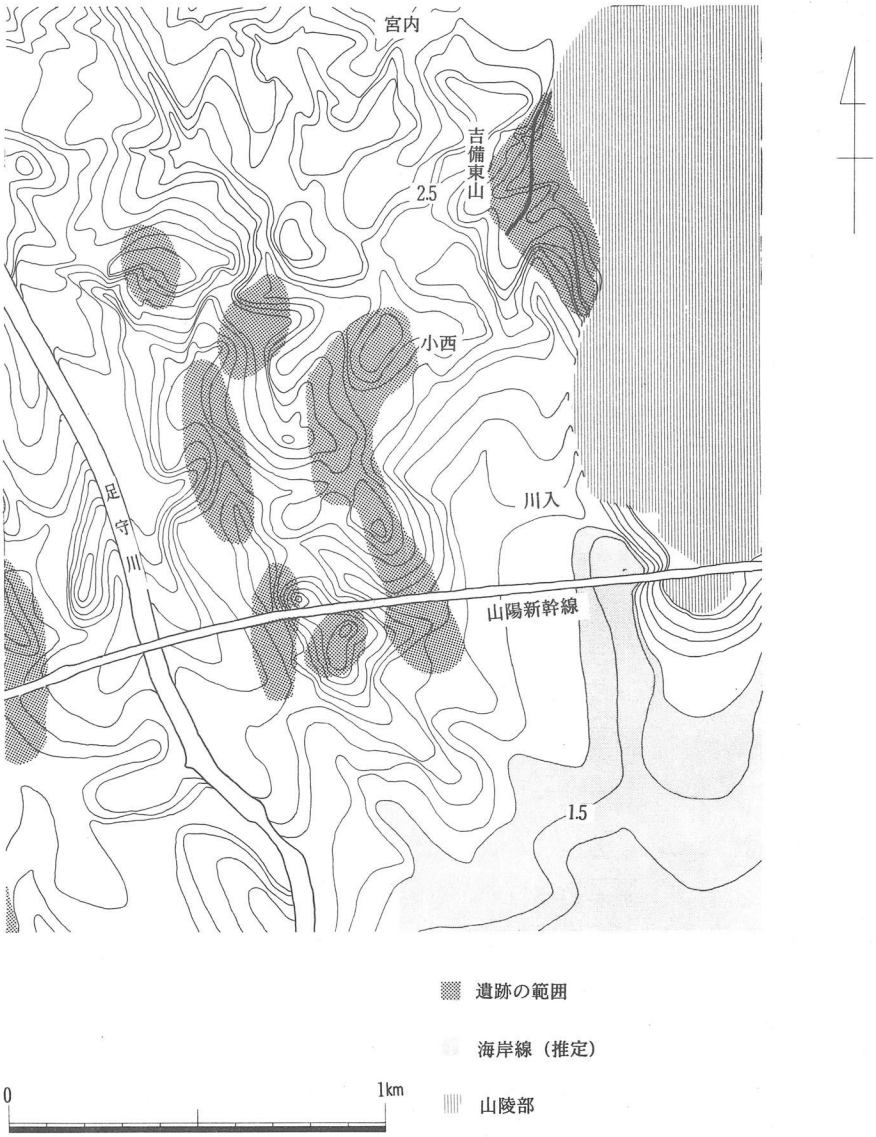


図237　吉備東山遺跡周辺の微地形

237）大体1.5から1.6mのあたりになると考えられる。図237の南の影をつけた部分は標高1.6m以下の部分であるが、これが当時の海岸線の可能性を示すと思われるものである。図237では一部分しか表われていないが、この周囲で当時の海岸線と仮定した標高1.6mのコンターがこの部分程北側へ入りこんでいる部分はない。この内湾を旧足守川の河口域とするならば何本もの支流をもっていたと考えられる足

守川のなかで最も大きな河口域でありそこにヤマトシジミの群棲地があったことが想像される。

吉備東山遺跡および吉野口遺跡がヤマトシジミに対する依存度が高いのは、テリトリー内に大きな河口域を抱えていたためであり、すなわち各遺跡の相違は、集落における貝を採取する場所のヤマトシジミの群棲地たる河口域の広さの差と考えられるのである。

二つ目の要素として挙げられるのは、貝を採取するテリトリーに対する影響力の差という点である。

ここに挙げた4地点の貝塚には、さまざまなものがあり特に加茂遺跡の規模は際立ったものがある。

吉備東山遺跡や吉野口遺跡等の貝塚は、土層断面図でみるかぎり投棄したあとにはすぐ土をいれており、恒常的に貝殻を捨てていたわけではなくむしろ短期間あるいは日常的に消費したものを投棄したものと考えられる。加茂B遺跡の貝塚を同じ性格のものと仮定するならば、他の貝塚程度の重量の貝殻を数100回程度捨てれば物理的に形成は可能である。しかし加茂B遺跡には、大型の貝塚とは別に小型の貝塚も存在する。これらの貝塚のうち、出土遺物から推測して同時期と考えられるものは3カ所であり、3カ所とも大型の貝塚から10m前後しか離れていない。この内土壙－14、土壙－20の土層断面図を見てみると、貝殻のブロックはいずれも土壙の最下層に存在し、あきらかに貝殻を投棄した後にすぐ埋めており、吉野口遺跡等の貝塚と同じ性格のものといえる。*(8)

もしも加茂B遺跡の大型の貝塚（ここでは貝塚1）が小型の貝塚程度の量の貝殻を順次投棄した結果形成されたと仮定するならば、小規模な貝捨て場は無意味なものとなってしまうため、加茂B遺跡の大型の貝塚は、日常的に消費するもの以上の貝類を何らかの理由で捕獲し消費した結果形成されたものであると推測され、他の貝塚とは性格が異なると考えられる。

そこで加茂B遺跡を除いて貝組成のデータを比較してみると、津寺西川調査区の潮間帯の貝類に対する依存度が若干高い傾向は依然として認められる。またこの地点の3カ所の貝類を出土したピットの内容を個別に見てみるとヤマトシジミと潮間帯の貝類の全体に占める割合はかなり異なっていることがわかる。特にヤマトシジミの比率は、70%から100%まで約30%の差が認められ、ある時は、ヤマトシジミだけ採取でき、別の日には3割程度のものを潮間帯の種類でまかなわなければならないという不安定な状況にある事を示す。

当時の海岸線を山陽新幹線付近に置くならば*(9)津寺遺跡は他に比べてそこから最も北に位置するため、この津寺西川調査区にみられるヤマトシジミに対する不安定さは、その群棲地を隔てる距離すなわちそれへの影響力に起因するものと思われる。（図236）つまり津寺西川調査区の集落は吉野口遺跡あるいは吉備東山遺跡よりもヤマトシジミの棲息地から距離が遠かったため、ヤマトシジミを捕獲する場合他の2遺跡よりも立場が弱く、あるときはヤマトシジミばかりを捕獲することができたが、あるときはヤマトシジミの他にマガキ・ハイガイといった潮間帯の種類で需要をまかなわなければならない立場にたたされていたのである。つまり小型の貝塚に投棄された貝殻が、より日常的に消費したものを投棄したものと仮定するならば、普通の貝採取行動においては、吉野口や吉備東山の集落のほうが、ヤマトシジミの棲息域に対して津寺西川調査区の集落よりも、優先権＝影響力をもっていたのである。

一方貝塚1は、ヤマトシジミの棲息域に対する影響力は吉備東山や吉野口と同様であったにもかかわらず、一度に採取する分量が多かったために8割程度まではヤマトシジミで賄えたものの足りなかった分はマガキ・ハイガイといった潮間帯の貝類で賄ったと推定できる。

以上この二つの要素をもとに、大まかな当時の地形環境および貝採取のテリトリーの様子を述べてみたい。

弥生中後期の吉備津周辺は旧足守川の河口付近に位置し、足守川は砂泥あるいは泥の海底を持つ内湾に注いでいた。海岸はかなり干満の差をもつものであり、また多くの種類の貝が見られることから、かなりの環境的変化をもつものであった。近代までたびたび氾濫をおこした足守川が弥生中・後期の当時、現在のように一本の流れであったとは考えられず、下流域においては八つ手状の流れを形成し、最もその中心となる流れは、現在の川入の集落の付近に河口を形成していた。

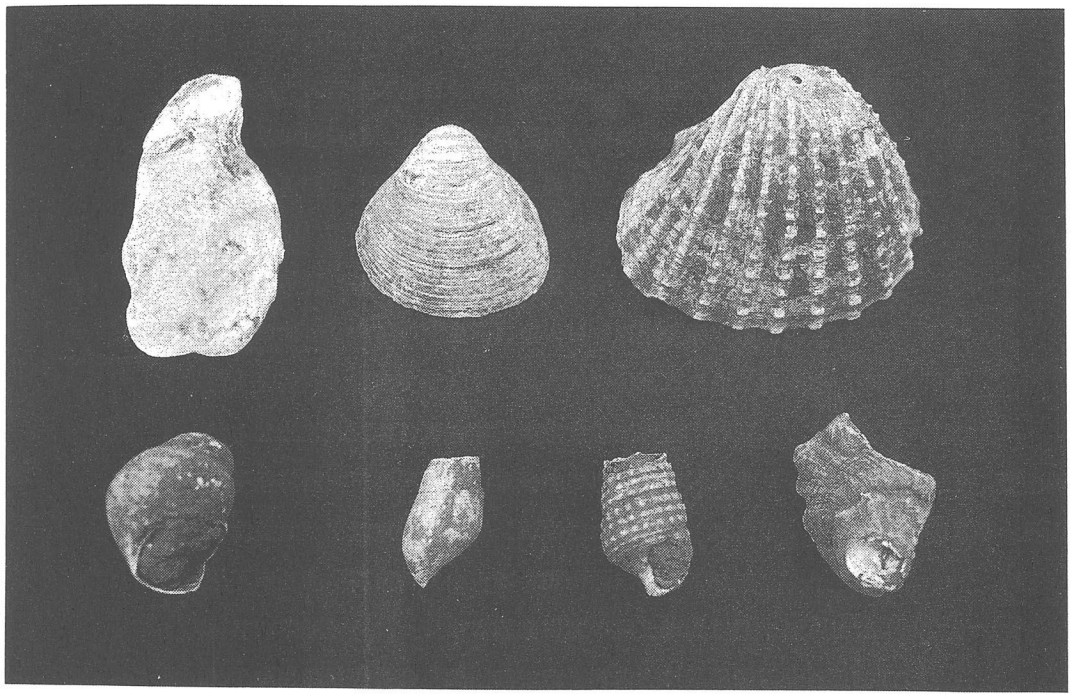
その河口域にはヤマトシジミが群棲していたが特に川入付近の個体数は膨大なものであり、足守川の形成する沖積平野に営まれた弥生中後期の集落にすむ人々にとって重要な食料資源であった。そのヤマトシジミは河口域に近接している集落の人々の貝類の需要の殆どを賄うに足る量であり群棲していることから捕獲が容易であったため、潮間帯にも食料資源として利用可能な貝類がかなり棲息していたにもかかわらず、日常的にはあまり利用されなかった。河口域のヤマトシジミの群棲地に対する影響力は距離的に近い集落のほうが強いと考えられ、吉備津周辺で最大の河口域に近い吉備東山遺跡あるいは吉野口遺跡がそれにあたる。河口域からやや距離をもつ集落の人々はヤマトシジミの群棲地の中心から少しずれた場所で貝類を採取し、そのためあるときは必要とされる量の全てをヤマトシジミで賄うことができたが、またあるときはあまり日常的では利用されない潮間帯の貝類でヤマトシジミだけでは足らない部分を賄っていた。

河口域にに近接している集落の人々の日常的な需要の殆どを賄うことができたヤマトシジミの群集も日常的な消費量をこえた需要があった場合にはやや小さく、そのときになってはじめて、河口域に近接して集落を営む人々は、積極的に潮間帯という新たな貝の群棲地に進出していったのである。

現在までに足守川周辺では多くの遺跡が調査されており、そしてその中の弥生中期・後期の遺構の占める割合もかなりのものがある。その多くは集落遺跡であり、多くの大小の貝塚が形成されていたことは想像に難くない。今回は現在までに貝の種類・数量が明確に計測されている4遺跡、7地点のデータをもとに現在の吉備津周辺の過去の地形環境および貝採取テリトリーの様子を推測してみた。将来さらに多くの調査が行なわれ、貝塚のデータが蓄積されることによつてさらに詳細な過去の情景を推測したいと考えている。

貝類の分類にあたり、早稲田大学の金子浩昌先生、岡山大学資源生物科学研究所の榎本敬先生より多大なるご教示をいただきました。文末ではありますがここに厚く御礼申しあげます。

（河田）



出土した貝類

吉野口遺跡註

註１　吉備東山Ｐ－948とＰ－1487のデータを統合したもの

註２　加茂遺跡のカワニナにはチリメンカワニナを含む。

註３　加茂遺跡のその他の項目には、スガイ・レイシ・イボニシ・ツメタガイ・ヒロクチカノコガイ・ゴマフタガイ・ヘソアキクボガイ・オキシジミ・ウネナシトマヤガイ・マツカサガイ・ハマグリ・フジナミガイ・マテガイ・サルボウを含む。

註４　微細な貝類はここでは個体数に含まない。

註５　註１と同様

註６　「山陽自動車道建設に伴う発掘調査６」（岡山県教育委員会 1993）による。

註７　「岡山市埋蔵文化財分布図」（岡山市教育委員会 1983）による。

註８　「足守川河川改修工事に伴う発掘調査」（岡山県教育委員会 1995）による。

註９　註６前掲書による。

参考文献（本文）

愛媛大学法文学部考古学研究室　愛媛大学考古学研究室報告第２冊

江口貝塚１－縄文中期編－愛媛大学考古学研究室　1993

加藤晋平他　於下貝塚発掘調査報告書　麻生町教育委員会　1992

岡山県古代吉備文化財センター　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　94

足守川河川改修工事に伴う発掘調査　岡山県教育委員会　1995

岡山県古代吉備文化財センター　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　82

山陽自動車道建設に伴う発掘調査６　岡山県教育委員会 1993

岡山県古代吉備文化財センター　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　90
山陽自動車道建設に伴う発掘調査９　岡山県教育委員会 1994
岡山県古代吉備文化財センター　岡山県埋蔵文化財発掘調査報告　98
山陽自動車道建設に伴う発掘調査10　岡山県教育委員会 1995
波部忠重他　標準原色図鑑全集第３巻　貝　保育社　1967
吉良哲明　　原色日本貝類図鑑　保育社　昭和24年
波部忠重　　続原色日本貝類図鑑　保育社　昭和36年
江坂輝彌　　化石の知識　貝塚の貝　東京美術　1983
鈴木公雄　　古代史復元２　縄文人の生活と文化　講談社　1988
鈴木公雄　　貝塚の考古学　東京大学出版会　1989
金子浩昌他　狩猟・漁撈対象動物の地域性「考古学ジャーナル創刊号」　雄山閣　1982
松島義章　　漁撈対象動物（貝類）の地域性「考古学ジャーナル創刊号」　雄山閣　1982
児玉幸多他　縄文時代の日本　雄山閣出版　1981
石井則孝他　シンポジウム縄文貝塚の謎　新人物往来社　1978
岡山県史編纂委員会　岡山県史18　考古資料　山陽新聞社　1981
戸沢充則　　縄文人の時代　新泉社　1995

第Ⅴ章　結　語

吉野口遺跡は今回の調査の結果、縄文時代晩期中葉から近世まで連綿と遺跡が形成され、しかも遺構が密集する集落遺跡であることが確認できた。遺構の形成が稀薄な時期もあるが、水田もしくは畠地として利用された痕跡はなく、基本的に集落の一角であったと思われる。このことについては、遺跡の形成された微高地が広く安定していたということも１つの要因であったと思われるが、むしろその立地している場所が「吉備津」であった点にあると考えられる。「吉備津」に関する古代の文献はないが、弥生時代以降の遺跡が密集する吉備地域の中枢地を南北に貫流する足守川が当時の海岸線と接する地点であり、しかも古代山陽道も付近を通っていることから、古代の吉備地域において最も重要な津、すなわち港であったことがうかがわれる。また、この地には備中の一宮である吉備津神社が存在しており、単に吉備中枢地への門戸というだけでない歴史的な特質を内包していたことが推定され、「吉備津」には畿内に匹敵する大型古墳を造営し得た吉備地域の構造を理解するための重要な手掛かりが存在すると思われる。また古代以降も遺構や遺物の量が多いことについては、吉備津神社の門前町との関係が推定されるが、この地が「源平の争乱」に関わっていることから、在地で形成された政治的な拠点の１つであったことも考えられる。

今回の調査は800㎡と、予想される遺跡の広がりに対して面積的にはわずかであったが、「吉備津」の遺跡の性格の一端を示す貴重な調査例になるものと思われる。第Ⅲ章では、検出した遺構と遺物を大まかな時期ごとに分けて説明したが、ここではそれぞれの遺構面のうち、さらに細かく遺構の変遷をとらえられたり、出土した遺物について検討できた点を簡単にまとめてみたい。

Ⅰ　縄紋時代晩期遺構面

１　縄紋時代晩期の土器について

当調査区から出土した晩期の土器は、コンテナ５箱程である。溝16の最上層から突帯紋土器が２点出土した以外は、突帯紋期の土器は包含層からも出土していない。溝16の最上層については、当調査区内の晩期遺構面が埋没して残った最後の窪みともいうべきところに堆積した土層であり、ここより出土した２点の土器は他の晩期土器と区別できるものである。

晩期土器は各遺構や包含層からそれぞれ出土しているが、土器全体の時間的な幅は殆どなさそうで、当該地の編年の黒土Ｂ１式(1)、あるいは明確な型式設定はなされていないが、いわゆる舟津原式(2)に併行していると考えられる。以下、出土した土器を分類し、その内容を整理してみる。ただし、器種については深鉢と浅鉢に大別して取り扱う。また、この土器群とよく似た様相をもつ南方釜田遺跡の土器群(3)についても、同じ様に分類し、吉野口遺跡の土器群と比較してみたいと思う。

（１）吉野口遺跡の土器

小片が多いため明確な数値ではないが、口縁部の破片数からみた深鉢と浅鉢の割合は大体８：２である。全形のわかるものが全くないため、分類の基準は口縁部付近の形態が中心ということになる。また、深鉢については形態の他に器表面における最終調整や、口唇部の刻目の有無の量的な傾向も数値化し、

他の遺跡出土の土器と比較する指標をつくってみる。

深　鉢（図238、239、243）

C₁　比較的長く外反する頸部をもち、口唇部は丸くおさめたり、上端を平坦にしていたりする。

C₂　やや短く外反する頸部をもち、口唇部は丸くおさめたり、上端を平坦にしていたりする。

D　僅かに外反する頸部をもつ。

E　緩やかに外反する頸部をもち、口唇部を上方へ若干拡張する。

F　波状の口縁部をもち、頸部が緩やかにくびれ、口唇部には刻目が施され台形の突起がつく。頸部あるいは胴部の境には半載竹管紋による刺突紋がめぐる。

G　直口する口縁部をもち、口唇部が尖り気味のものと、上端に平坦面をもつものとがある。

小片のものが多く明確ではないが、大体の傾向として深鉢Cが全体の70%を占め、深鉢Gは小片を含めても2点だけで、深鉢中最も少ない。

次に、これらの深鉢を図238で示した分類基準でみてみると、口唇部に刻目をもたず外面調整がケズリであるものが最も多く、次いで口唇部に刻目をもたず外面調整が二枚貝条痕のもの、そして口唇部に刻目をもたず外面調整がナデのものという順になる（図239）。これらの組み合わせのものが全体の70%を占める。さらに胴部片についても外面調整の多寡を算定してみると、ケズリのものが最も多く、次に二枚貝条痕、そしてナデということになる。これは口縁部片の傾向と一致することから、一応吉野口遺跡の深鉢全体の傾向と考えてよさそうである。

・深鉢口縁部分類基準

A　口縁部刻目の有無……ａある　ｂなし

B　突起の有無……ａある　ｂなし

C　外面調整……ａ二枚貝条痕　ｂケズリ　ｃナデ　ｄミガキ

D　内面調整……ａ二枚貝条痕　ｂケズリ　ｃナデ　ｄミガキ

・深鉢胴部分類基準

E　外面調整……ａ二枚貝条痕　ｂケズリ　ｃナデ　ｄミガキ

F　内面調整……ａ二枚貝条痕　ｂケズリ　ｃナデ　ｄミガキ

図238　深鉢分類基準

［吉野口遺跡］

口縁部刻目　　ある：なし＝3：7　　深鉢：浅鉢＝8：2

A	B	C	D	比率（%）
b	b	b	c	24
b	b	a	c	22
b	b	c	c	22
a	b	a	c	9
a	b	b	c	8
a	b	b	b	7

E	F	比率（%）
b	c	44
a	c	26
c	c	13
b	a	8
a	a	7

図239　吉野口遺跡土器分類

浅　鉢（図244）

基本的には器表面を丁寧に磨いた精製のものが主体であるが、中には粗製のものも若干認められる。土器の表面は黒色になる黒色磨研技法のものもあるが、黒色化していないものもかなり認められる。

A　浅い体部とやや長く外反する頸部をもち、口唇部は上方にやや拡張させる。端部外面に沈線を1条めぐらすものもある。

B　全体の形態はAと似ているが、口唇部は拡張させずやや尖り気味になる。

C　逆「ハ」の字形に開く口縁部で、比較的器高の高いものと、低いものがある。口唇部についても尖り気味のものと丸くおさめるものとがある。内外面の調整は丁寧にヘラミガキした精製のものと、外面に二枚貝条痕やケズリの調整痕を残した粗製のものがある。

D　逆「ハ」字形に開く体部の端部に外湾する短い口縁部をもつものである。

F　算盤玉形の体部で、頸部は外反し、口唇部はつまみ上げ気味におさめる。口唇部外面には沈線をめぐらすものが多い。突起をもつものもある。

H　体部は浅く、「く」字形に屈曲し、頸部は外反する。口唇部はやや尖り気味に丸くおさめるも

のと、内端部を断面蒲鉾形に肥厚させるものがある。また、内外面を丁寧にヘラミガキした精製のものと、体部外面をケズリ、内面に二枚貝条痕の調整痕が認められる粗製のものもある。

小片のものが多いため明確ではないが、口縁部数や形態の推定できそうな胴部片からそれぞれの比率を算定すると、浅鉢Aが31%、浅鉢Cが29%、浅鉢Dが16%、浅鉢Fが14%、浅鉢Gが９%の割合である。浅鉢A、Cが最も多い傾向がうかがえる。

（２）南方釜田遺跡出土の土器（図240、241、242）

南方釜田遺跡は、県下の三大河川の１つである旭川の西岸の沖積平野に位置する集落遺跡である。縄紋時代晩期の土器群は、弥生時代中期の土器や木器が多量に出土した溝下部の斜面堆積層から出土したもので、当土器群を包含する層や、土器の分布範囲は径10m未満であった。土器の量はコンテナ３箱で

［南方釜田遺跡］

口縁部刻目なし　　深鉢：浅鉢＝８：２

A	B	C	D	比率（%）
b	b	a	c	35
b	b	c	c	24
b	b	b	c	16
b	b	a	b	8

E	F	比率（%）
a	c	46
b	c	31
c	c	8
a	a	7
a	b	3

図240　南方釜田遺跡深鉢分類

それ程多くない。この土器群中には突帯紋土器は含まれておらず、斜面堆積中の出土ではあるが、比較的単一の時期幅の土器群と推定される(4)。

深鉢と浅鉢の割合は８：２で、吉野口遺跡の比率と一致する。以下、吉野口遺跡の土器群中には存在していない器形や、やや特徴的な部分の看取されるものについて説明する。

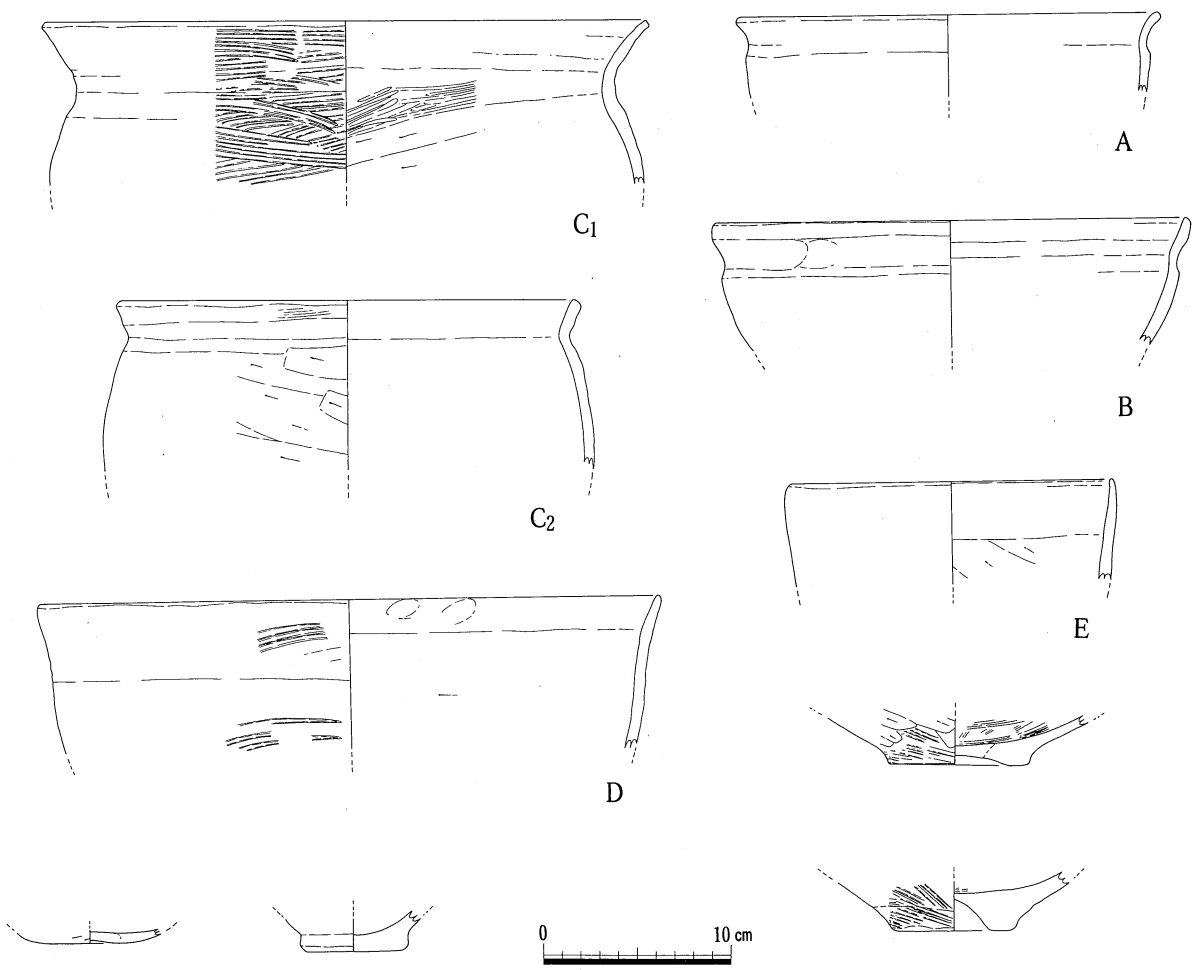


図241　南方釜田遺跡出土深鉢（注３より引用）

深　鉢（図240、241、243）

A　外反する口縁部をもち、口縁部を強くヨコナデしているため胴部との境が段状を呈する。

B　口縁部は若干外反しているが、胴部との境を強くヨコナデしているため、ややくびれたようになっている。

深鉢Ｅ、Ｆは認められない。深鉢Ｆについては、胴部破片中にも爪形紋を有するものはない。また、深鉢の口縁部は76～80点を数えるが、口唇部に刻目を施したものは全く認められず、突起についても同様である。図240をみてみると、外面調整が二枚貝条痕、ナデ、ケズリのものが全体の70～80％を占めていることは吉野口遺跡と同じだが、吉野口遺跡がケズリが最も多いのと比べ、南方釜田遺跡は二枚貝条痕の方が多いといった相違点が看取される。また、この傾向は胴部片でも同じである。つまり、口唇部に刻目をもつものがないこと、外面調整で二枚貝条痕の場合が最も多いということが、吉野口遺跡の土器群の深鉢との明確な差としてとらえることができそうである。また、吉野口遺跡では深鉢Ａ、Ｂは含まれていない。この点も吉野口遺跡の土器群と異なる点である。器形については深鉢Ｃが最も多く80％以上を占め、他はそれぞれ４％未満である。

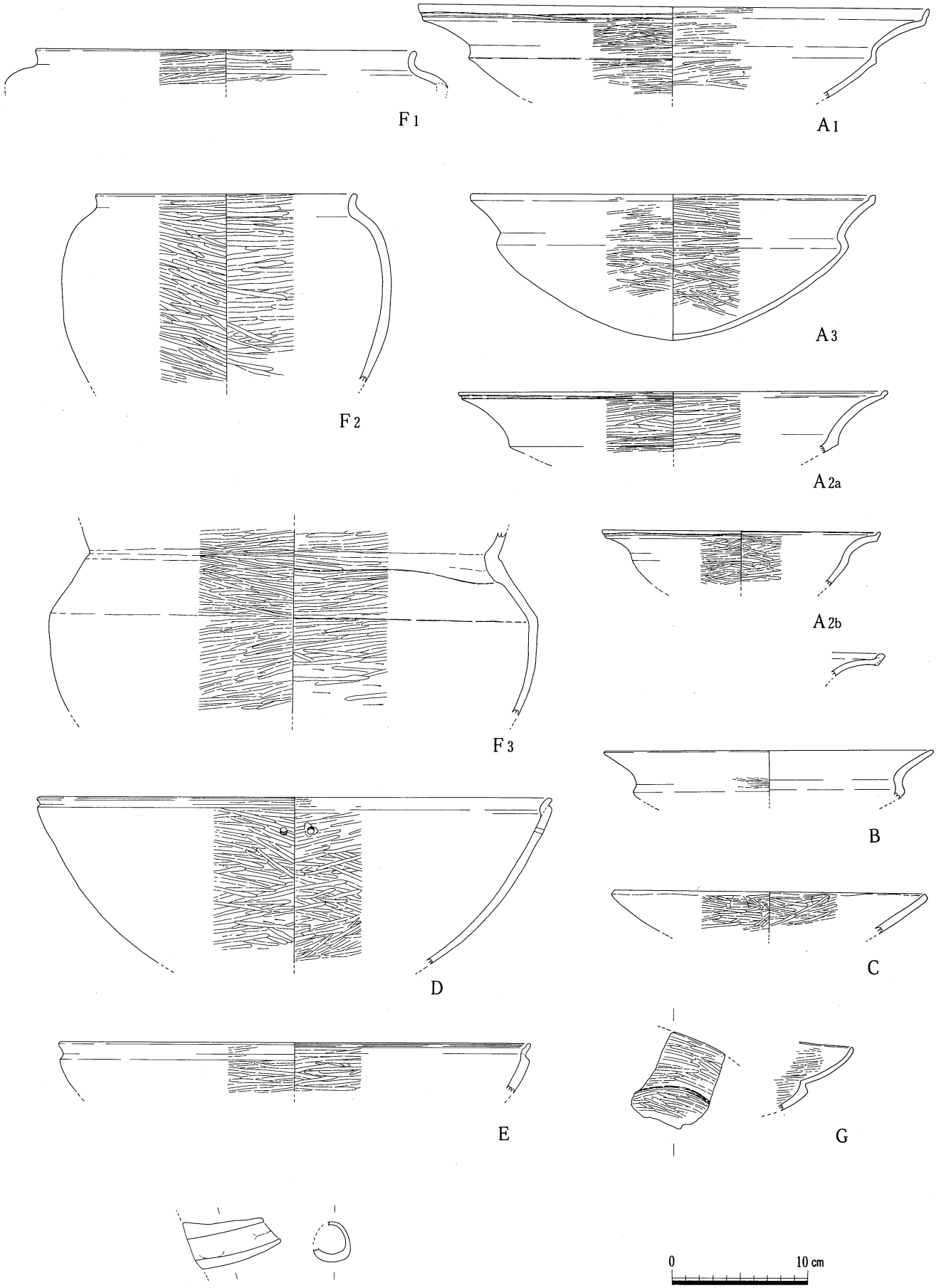


図242　南方釜田遺跡出土浅鉢（注３より引用）

浅 鉢（図242、244）

器表面を丁寧に磨いた精製のものばかりで、大半の土器に表面が黒色となる黒色磨研技法が認められる。

A_1 胴部との境には鋭い稜をもち、口唇部の立上がりは大きく、外端に段状の沈線がめぐる。

A_2 胴部との境はそれ程強調されておらず、口唇部の立上がりはA_1と比べると低い。口唇部に1条の沈線をめぐらす。大きさに大（a）、小（b）がある。

A_3 胴部との境は若干強調されており、内傾気味に立ち上がってから口縁部は外反する。口唇部は断面方形に立ち上がっているが、A_1と比べその高さは低い。外端に沈線は認められない。

B 1点だけ認められる。吉野口遺跡のものとほとんど変わらない。

C 1点だけ認められる。浅い皿形を呈し、内外面は丁寧にミガキがおこなわれている。

D 吉野口遺跡のものと比べ内湾する胴部である。

E 比較的深い体部の外端に、内湾する短い口縁部をもち、その内面に1条の沈線がめぐるものである。この形態の浅鉢は、吉野口遺跡の土器群中には認められない。この浅鉢と似たものが鹿児島県黒川洞穴出土土器中(5)や、それよりやや遡る時期が推定されている福岡県貫川遺跡西第2地点G区48土層の11層より出土した土器群中(6)にみられる。また、山口県岩田遺跡の岩田Ⅳ類(7)の中にもやや古相を示しているが同じ形態のものがある。

F_1 「く」字形に屈曲した胴部で、口縁部は外湾気味に短く外反する。

F_2 口縁部付近の形状はF_1と似ているが、胴部は屈曲せず丸くなる。

F_3 胴部はF_1と似て「く」字形に屈曲するが、口縁部はやや鋭く屈曲して内湾気味に外反する。

G 大きく内湾気味に外反し、緩やかな波状をなす口縁部をもつものである。この形態の浅鉢は吉野口遺跡の土器群中では認められず、当土器群中でも1点しか認められない。有文で、時期的にはこれより遡ると思われるものが滋賀里遺跡の滋賀里Ⅱ(8)や岡山県福田古城池貝塚(9)などに認められる。

形態のわからない小片のものも多く、厳密な数値ではないが、大体浅鉢Aが浅鉢全体の60％を占め、他が3～6％の割合である。

南方釜田遺跡の土器群には、深鉢A、Bや浅鉢A_1、E、Gのように吉野口遺跡の土器群中には認められない古相の特徴の看取されるものが認められる。これらは、量的には多くなく胎土や色調も他の土器との相違は認められない。また、出土状況からみてもこの土器群は、それ程長い時間幅で堆積したとは思われないことから、古相を示す土器を含むものの、一応南方釜田遺跡の土器群は、単一時期の様相を示していると考えておきたい。

（3）県内出土土器との比較

吉野口遺跡の土器群と南方釜田遺跡の土器群との相違点を簡単にまとめてみると、まず深鉢については、口縁端部に刻目のめぐるものが前者にはある程度存在するものの、後者には全くない。そして、外面の最終調整についても、前者ではケズリである場合が最も多いのに対して、後者では二枚貝条痕が多いということである。浅鉢については、器表面を黒色化することが前者ではやや少なくなっているものの、後者にはほとんどに認められる。また深鉢と浅鉢には、共通して前者にはないような古相を示す器

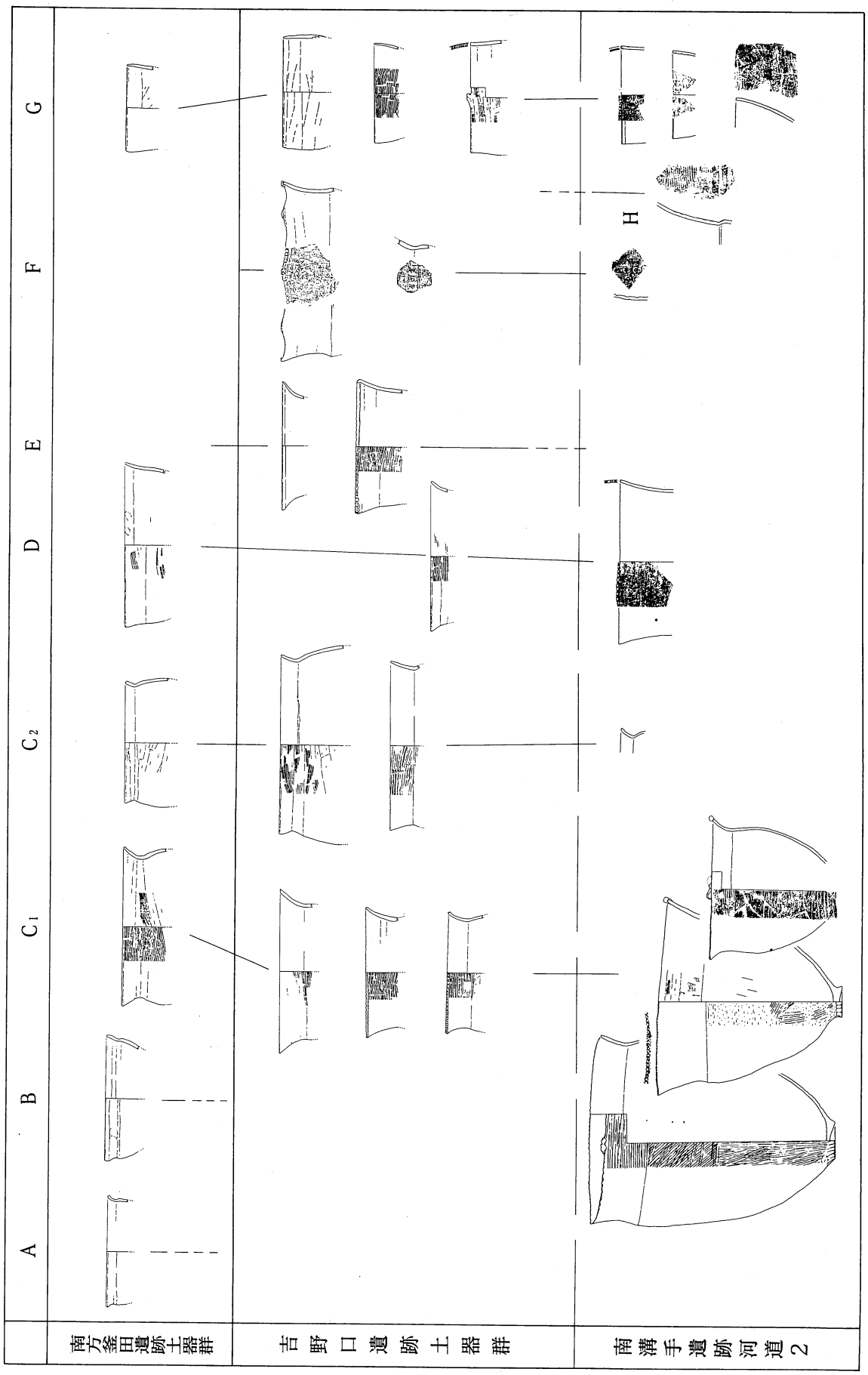


図 243　晩期中葉深鉢分類図

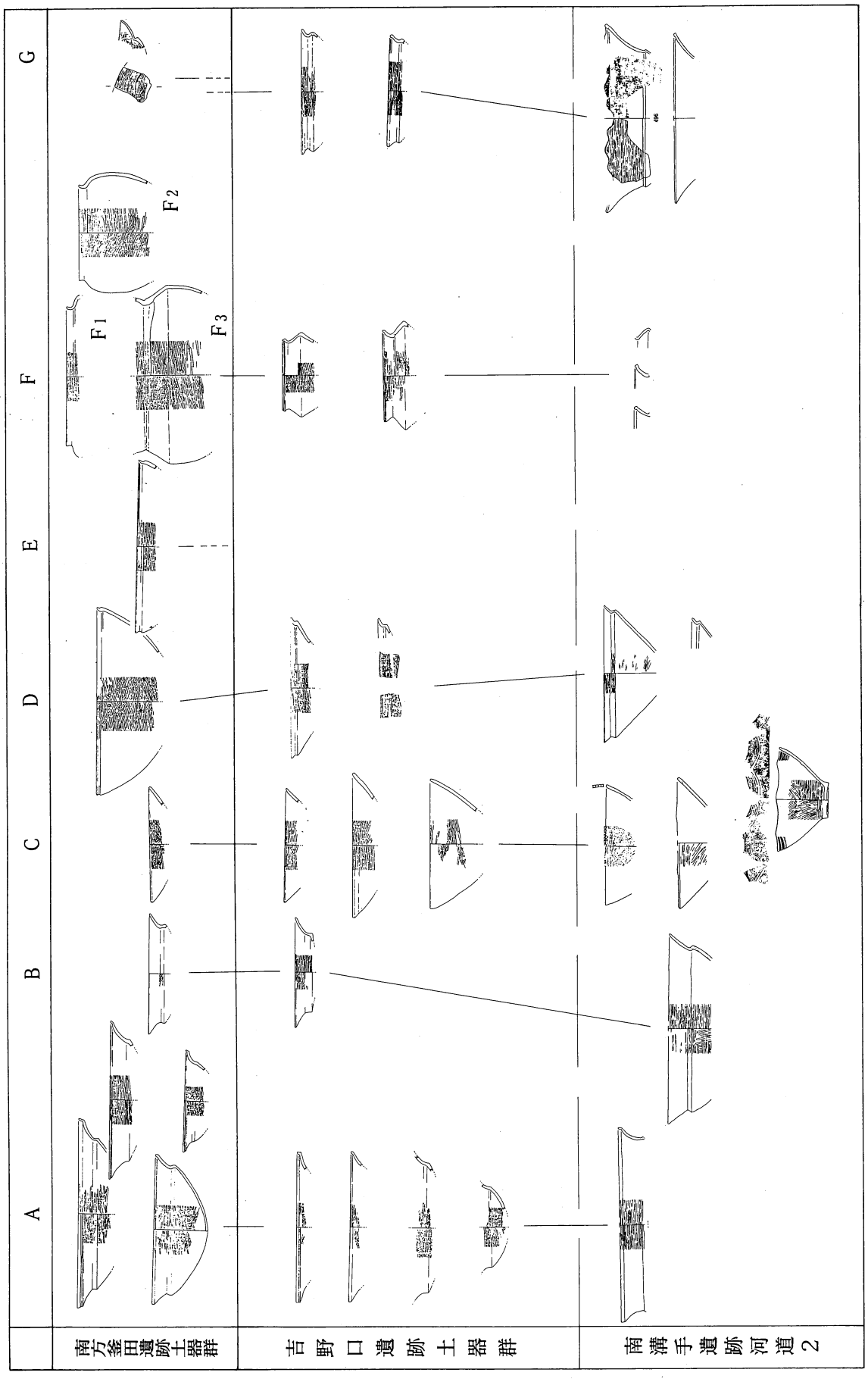


図 244　晩期中葉浅鉢分類図

形が後者には存在する。これらの相違点は両土器群の時間的な差を示していると考えられ、南方釜田遺跡の土器群→吉野口遺跡の土器群の順が想定される。そして吉野口遺跡の土器群に、突帯紋期直前の土器型式とされる谷尻式(10)の指標となる深鉢Fが極めて微量ではあるが伴うことや、浅鉢との形態差から、南方釜田遺跡→吉野口遺跡→谷尻式といった段階が考えられる。

次に、県内で両土器群と似た内容をもつ土器群と比較してみる。

まず、倉敷市舟津原遺跡の土器についてだが、舟津原遺跡の晩期土器の資料は、藤田憲司氏が紹介したものと、岡山県教育委員会の発掘調査によったものとがある。前者については、後期の土器片と突帯紋土器片が混じるものの、突帯紋期以前の晩期土器が主体である(11)。まず深鉢についてみてみると、口唇部に刻目の施されているものがかなり存在し、1～2片だけではあるが深鉢Fも存在している。浅鉢については、浅鉢A_1、浅鉢Eのような古相を示すものがない。以上の特徴から、この資料は吉野口遺跡の土器群と併行するものと考えられる。後者については、前期から晩期の各時期の土器が出土しているが、ここでは下澤公明氏が報告書において分類した晩期Ⅰ.Ⅱを対象とする(12)。晩期Ⅱの土器群の深鉢の口唇部には刻目がめぐらされているものがあり、深鉢Fも認められることから、この土器群は吉野口遺跡の土器群と併行するものと考えられる。晩期Ⅰについては断片的な資料であるため明確ではないが、浅鉢A_1と思われるものが認められることから南方釜田遺跡の土器群に近いと考えられる。舟津原遺跡と比較的近い距離にある倉敷市阿津走出遺跡から出土した晩期土器のうち、報告書において下澤公明氏が分類した晩期Ⅰ.Ⅱとされるものも舟津原Ⅰ.Ⅱと内容的には大体同じもので、晩期Ⅱが吉野口遺跡の土器群と併行すると考えられる(13)。

総社市南溝手遺跡では、谷尻式以前の晩期の土器を二段階に分けてとらえている。土器溜まり1と河道2から出土した土器を対象とし、前者の方に深鉢の口唇部に刻目がない点や、深鉢の口頸部の外面調整に二枚貝条痕を使用するものが多いということから、平井泰男氏は土器溜まり1→河道2の段階を想定している(14)。出土した土器の量が少ないことから、土器溜まり1における浅鉢の器種構成が今一つ明確ではないものの、深鉢の特徴から土器溜まり1は南方釜田遺跡の土器群と併行し、それに続く河道2については吉野口遺跡の土器群に併行するものと考えられる。ただ、河道2の深鉢は、口唇部に刻目を施すものが深鉢全体の約8割も占めており、これに対して吉野口遺跡の土器群の場合は約3割ほどである。浅鉢についても、浅鉢Gの口頸部がのびる点は谷尻式の浅鉢により近い形態といえる。また深鉢に頸部と胴部との境に稜が認められる新たな器種が加わっていることなどから、河道2の方が谷尻式により近く、やや新相を示しているということが推定される。つまり、吉野口遺跡→南溝手遺跡河道2→谷尻式といった段階が想定される（図243、244)。

岡山市関遺跡では、浄化槽の掘削時に同一層中より出土したとされる晩期土器が、石坂俊郎氏により報告されている(15)。この土器群中には突帯紋土器は含まれておらず、突帯紋期以前の晩期の土器だけで構成されている。この土器群中の深鉢は口唇部に刻目を施すものがあり、深鉢Fの破片が1片だけではあるが存在することから、この土器群は吉野口遺跡の土器群と併行すると思われる。

つまり、舟津原遺跡、阿津走出遺跡、南溝手遺跡、関遺跡の様相は、南方釜田遺跡と吉野口遺跡のそれぞれの土器群が当地域において一定の時期幅で存在していたことを示していると考えられ、この2つの土器群が、それぞれ1型式に相当する内容を具備していると考えてよい様に思われる。

この他、倉敷市菅生小学校裏山遺跡(16)や倉敷市広江・浜遺跡(17)でも同時期の土器が多量に出土している。両遺跡とも晩期以前の土器や突帯紋期の土器が含まれており、突帯紋期以前の晩期土器も複数の

時期が混在していそうである。とくに、広江・浜遺跡の縄紋晩期C群土器や縄紋晩期D群土器のなかに、南方釜田遺跡の土器群より遡る時期の晩期の土器がある程度認められる。それらは深鉢の頸部外面に沈線をめぐらしており、浅鉢についても有紋である。より後期に近い内容であり、無紋化された南方釜田遺跡の土器群よりは、さらに1～2型式程の差が存在するものと思われる。

（4）他地域との比較

南方釜田遺跡の土器群は、鹿児島県黒川洞穴から出土した浅鉢のなかに似た器形のものがあり、九州地域の黒川式と併行するものと思われる。また、1点ではあるが平底の深鉢底部がみられ、黒川式の深鉢の底部が平底であるのと共通している点は、このことを示していると思われる。ただ、黒川洞穴出土土器中の浅鉢A_1を黒川式より1時期前にあたる広田Ⅳ期に位置づける考えもある(18)。将来良好な資料の出土により、南方釜田遺跡の土器群のうち古い様相としているものが引き算される可能性はあるが、一応現段階では比較的単一の時期を示していると考えられる出土状況や、他の浅鉢と比較しても広田Ⅳ期のものより無紋化がすすんでいることから、一部に古相を残す器形を含むものの全体としては黒川式併行期と考えておきたい。

畿内地域では、南方釜田遺跡の土器群や吉野口遺跡の土器群は、一部に滋賀里Ⅲａ式の特徴も看取されるものの、概ね滋賀里Ⅲｂ式に併行すると思われる(19)。滋賀里Ⅲｂ式は、家根祥多氏により神戸市篠原遺跡の資料をもとにさらに古、中、新の三段階に細分された(20)。篠原式古段階の深鉢は外面調整が二枚貝条痕かケズリで、口唇部に刻目を施さないことや、浅鉢に共通する器種が認められることから、南方釜田遺跡の土器群と概ね併行すると考えられる。また、篠原式中段階は深鉢の口唇部に刻目が施されることや、この時期の一括資料とされる大阪府八尾市恩智遺跡の土器集積1(21)の中に深鉢Fが3片ではあるが認められることから、吉野口遺跡の土器群と併行すると考えられる。

四国地域では、香川県永井遺跡で後期から晩期にかけての土器が多量に出土している(22)。そのうち永井Xが南方釜田遺跡の土器群と、深鉢の口唇部に刻目のめぐる永井XIが吉野口遺跡の土器群と併行する内容をもっている。

南方釜田遺跡の土器群をみるかぎり、当地域ではこの時期に土器の無紋様化がすすみ、浅鉢は黒色磨研技法が主体となっている。これらのことは、九州地方の影響によるものといわれており、この時期に東海地方を含めた西日本全域が同じ様相を呈するようになっている。吉野口遺跡で出土した黒曜石が、佐賀県腰岳産のものである可能性が指摘される（附章Ⅱ参照）のも、この時期の北九州との関係を具体的に示している。

ただ、南方釜田遺跡の土器群に後続する吉野口遺跡の土器群では、深鉢の口唇部に刻目をめぐらすものが出現し、さらに若干時期のくだる南溝手遺跡河道2ではその比率が増している。深鉢の口唇部の刻目は谷尻式を介して突帯紋期の土器へと継承されており、当地域では晩期中葉から突帯紋期への土器の変化が比較的スムーズに説明できるのではないかと思われる。

2　石器にみる晩期中葉の生業活動

溝16の埋土のプラントオパール分析の結果、突帯紋土器の含まれない中、下層からイネのプラントオパールが検出された。溝16は、調査区内ではわずかな部分しか調査できなかったため、中、下層が確実

に突帯紋土器を含まないとは言い切れない可能性もある。しかし、土層の整合性や現況の遺物の出土状況から、北側に広がる晩期中葉の集落に伴う時期の溝、あるいは河道と考えられる。この時期には、北九州などで出土するすり石の形態や、浅鉢にみられる黒色磨研の技法などから、大陸から伝播した稲作が存在していたことを推定した考えも比較的早くからある(23)。また発掘調査の件数が増えた現在、晩期中葉どころか後期や中期にまで遡る時期のイネを検出した例も報告されている。

県内に於いては総社市南溝手遺跡で後期の土器に籾痕が認められ、後期中葉から後葉にかけての土器胎土からもプラントオパールが検出されている(24)。また、岡山市岡山大学構内遺跡からは、後期中葉の時期の土器胎土からイネのプラントオパールが検出されている(25)。倉敷市福田貝塚出土の後期の土器には籾痕が、その他同遺跡出土の中期後半の土器片からもプラントオパールが検出されている(26)。

県外の例では熊本県湧土石遺跡の晩期初頭の土器に籾痕が認められ(27)、青森県風張遺跡から後期末の炭化米が(28)、鹿児島県鹿児島大学構内遺跡から中期中頃のイネのプラントオパール(29)が検出されている。

このように、突帯紋期より古い時期にもイネが存在したことを示す事例は少なくない。それらと比較すると、本例は新しい時期の例にさえなる。しかし、それぞれの遺跡で検出されたイネがどのようにして、あるいはどんな生産形態の結果でそこに存在したのかは、具体的な生産地点を検出した事例が無いため明らかではない。吉野口遺跡に於いても、今回の調査区は集落部分の調査であって、具体的な生産地については未検出である。ただ、土器の他に打製石斧（石鍬）や、石包丁状のスクレイパーが出土している。特に、打製石斧（石鍬）には明瞭な使用痕が認められる。ここでは、それを観察し、他例と比較しながら吉野口遺跡の周辺で行われていた晩期中葉の稲作の様相を若干検討してみたい。

（1）打製石斧（石鍬）

この形態の石器は、縄紋時代早期末には東北地方や北海道に存在している。それらは刃部が直線的であることから手斧として用いられたとされている(30)。しかし、磨製石斧が普及した前期中葉以降、この石器の側面形態は大きく湾曲するものが多くなる。このような形態変化については、「斧」としての機能から、地下にある根茎類を採集するための「土掘具」として用いられるようになったためと考えられている(31)。「土掘具」としての使用形態は、最初、関東から中部地方にかけての東日本地域で行われた(32)。この石器は断面形態により、偏平度の強いものと、それ程でもないものの2種類に分けられ、前者が九州的で、後者が東日本的とされてきた(33)。しかし地理的にみて、両地域の中間にあたたる京都府の桑飼下遺跡で、後期中葉のものが800本以上も出土しており、その中には偏平型への移行型と考えられるものも含まれている。このことから、東日本の打製石斧（石鍬）が後期中葉以降西日本へ伝播し、九州にも達したものと考えられるようになった(34)。また後期以降、南九州をのぞく西日本に於いて石皿の出土が目立つようになってくる。西日本において、打製石斧（石鍬）の伝播と石皿の出現は非常に近い時期であったといえる。それは、打製石斧（石鍬）が「土掘具」となった前期以降、東日本で熟成された堅果類や根茎類を加工するためのアク抜き・水さらしの技術が、西日本へ伝播したことを示していると考えられている(35)。

ところで、打製石斧（石鍬）は弥生時代に入っても県内の山間部の集落で出土する。長野県の飯田地方では、打製石斧（石鍬）を出土する弥生時代の集落が多数確認されている。それらは木製農耕具をうけつけないような硬い耕土で構成されている段丘上に位置しており、そこで出土する打製石斧（石鍬）

が、段丘上での耕作に鍬として使用したと考えられている。そしてこの時期の集落数が多いことから、当該地域の弥生時代における中心的な生業活動を移動性の焼畑陸耕であったと想定している(36)。つまり、弥生時代において、この種の石器が主要な農耕具として用いられていたということが指摘されている。

突帯紋期の打製石斧（石鍬）にも、その使用痕が片面に顕著であることや、柄の装着痕跡を観察した結果から鍬として使用されたとし、この種の石器に伴出する石庖丁形のスクレイパーを穂摘具と考え、それらを農耕具のセットとしてとらえる考えもある(37)。実際に、津島江道遺跡では、突帯紋期とされる水田から打製石斧（石鍬）が出土している(38)。これらのことは、突帯紋期にも打製石斧（石鍬）が農具として用いられていた可能性を示している。　また、弥生時代初頭の時期ではあるが、沖積地に位置する静岡県浜松市宮竹野際遺跡では、水田遺構から長さが25cmを越える大型の打製石斧（石鍬）が出土している(39)。この事例は、弥生時代でも縄紋系の石器を用いながら水田農耕を行っていたことを示している。

北部九州の後期から晩期の石器を整理した成果によると、後期中葉に出現する偏平型の打製石斧（石鍬）は、長さ８～12cm、幅４～５cmの小型のものと、長さ13～16cm、幅６～８cmの中型のものと、長さ17cm以上、幅７cm以上の大型のものとに分けられる。このうち大型に分類されるものは、晩期前葉に出現し、大型大陸系磨製石斧の出現時期には消える傾向がある。これは大型のものの機能が、晩期後葉にはある種の木製農耕具に引き継がれていったためと推定されている。そして、長さ17cm以上の大型のものの出現の背後には、後期から行われていた栽培種とは別の栽培種の出現、水稲農耕の開始があったことを予想する考えがある(40)。このことは、同時期に存在する打製石斧（石鍬）であっても、その大きさにより機能が異なっていた可能性があったことも示している。

ともあれ、縄紋時代前期以降の打製石斧（石鍬）には、採集に用いた「土掘具」と、耕作に用いた「鍬」の機能があったと考えてよいように思われる。それらの機能については、時期が下がるにしたがい前者から後者へ変化したのか、それとも前者の中から後者の機能が分化していったのかは、明確でない。ただ北九州については、後者の機能が前者から分化した可能性が高いといえそうである。しかし、この石器の用途を画一的にとらえることは困難で、いわば、打製石斧（石鍬）には採集具と農耕具の２つの性格が内包されており、どちらに用いられたかについては個々の大きさや、使用痕を観察することにより判断した方がよいと思われる。そこで、吉野口遺跡から出土した２点の打製石斧（石鍬）について、それらのことを観察してみる。

（２）吉野口遺跡出土の打製石斧（石鍬）（図245）

吉野口遺跡から出土した打製石斧（石鍬）は２点ある（図41、42）。両者は、形態と石材の種類が異なっている。

短冊形の打製石斧（石鍬）は結晶片岩製で、長さ23.3cm、最大幅6.6cmの大型のもので、縦断面形は緩やかに外湾している。端部から約５cmの両側には、長さ約２cmにわたり刃潰しが認められる。この部分の外側と内側には磨滅痕が観察され、これは紐を巻いて柄を装着させて使用したためと推定される。刃部については、外側と側面に磨滅痕が認められる（図245Ａ）。内側については、刃潰しした付近と刃部の先端付近以外のところで磨滅痕は認められない。つまり、磨滅痕跡は外側で顕著であるということがいえそうである。このような片面に偏った磨滅痕の有り様や柄との結縛痕の存在は、片側に柄を装着

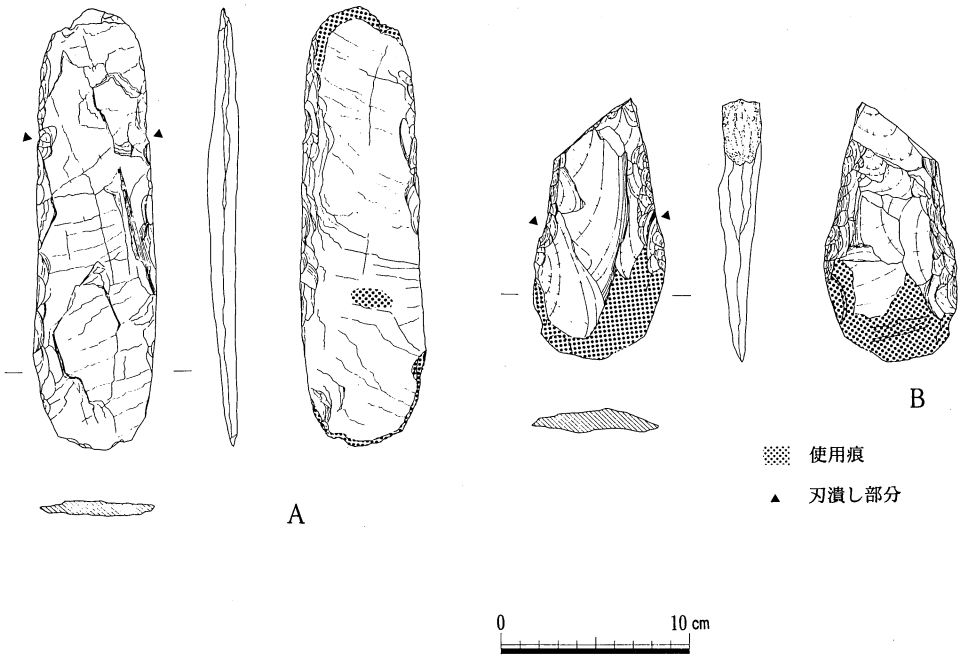


図245　吉野口遺跡出土石斧（石鍬）使用痕

して地面と平行する方向に使用した結果と考えてよいと思われる。すなわちこの石器が引鍬と同じ形態で用いられたことを示していると推定される。

撥形の打製石斧（石鍬）はサヌカイト製で、短冊形よりも小型である。長さ13.8㎝、最大幅7.2㎝を測り、刃部が湾曲している。中央部から上半にかけては、刃潰しがなされており、磨滅痕も認められる。これについても短冊形と同様に紐を巻いて柄に装着させた痕跡と推定される。刃部付近の内側と外側には磨滅痕と縦方向の擦痕が認められる。表面がかなり滑らかになっており、このことは繰り返し縦方向の使用があった結果であることを示している。さらに刃部が内湾していることは、地面に垂直よりやや鈍角に傾けた方向から使用したことを示していると思われる。つまり、打鍬か鋤と同じ形態で用いたことを示していると思われる。

刃部に残る磨滅痕から、当調査区で出土した短冊形と撥形の打製石斧（石鍬）には、それぞれ使われ方が違っていたことが想定される。このことは、それぞれを作るにあたって使用される場、すなわち機能に即した石材を選択したことによっても示される。それは、比較的強い衝撃の予想される打鍬あるいは鋤に使用されたと推定した撥形のものには、サヌカイトを使っている。強い衝撃にはやや弱いものの、節理を利用すれば長めに加工しやすい結晶片岩は、引鍬に用いたと推定した短冊形のものに使用している。

つまり、両石器の使用痕や石材の選択については、短冊形が地面を平らにすることを目的とした耕作具、撥形が地面を掘り起こす開墾具、あるいは耕起具として使い分けがなされていたことを示していよう。このように、耕作に用いられたと推定される石器が、さらに使われ方により形態や石材を選択していることは、その石器を用いた栽培が、段階的な手順のある程度確立されていた栽培であったことを示しているように思われる。

また、短冊形をした長大なものが、静岡県宮竹野際遺跡で整然と区画された水田の耕作土から出土し

ている(41)ことは、短冊形の機能が耕作具であったことを裏付ける1つの根拠となろう。

中部瀬戸内の各遺跡から出土した同種の石器をまとめた成果によると、その使用痕から鋤、あるいは鍬として用いられたと推定されている(42)。結晶片岩製のものについては、表面が節理に沿って薄く剥離するため使用痕が残りにくいものの、他の石材を用いた打製石斧（石鍬）については、吉野口遺跡のものと同じように使用痕が片側に偏在するものが認められる。総社市真壁遺跡の晩期中葉の土器と共に出土した短冊形のものについては、片側に著しい磨滅痕が認められる(43)。後期に属する時期のものにも、片側に摩滅痕が偏るものが認められる(44)。このことは吉野口遺跡出土の例で推定したような使用形態が、後期までも遡る可能性があることを示していると思われる。

（3）小 結

イネのプラントオパールを検出したことや、打製石斧（石鍬）の観察所見と、穂摘具と推定されるスクレイパー（図18）も存在することから、吉野口遺跡の集落ではある程度耕作手順の確立したイネの栽培が行われていた可能性を考えてもよいと思われる。

縄紋時代から弥生時代へ転換したことを示す指標は、水稲農耕の開始とされている。しかし、水稲農耕を行う段階とそれ以前の狩猟、採集段階との間には、雑穀を主とした焼畑を営む畑作の段階が存在したということも推定されている(45)。一方、焼畑農耕については、水稲農耕の前段階に行われていたとするよりも、最近まで焼畑に依存した村が山間部に存在していたことから、焼畑が広く社会的に定着したとして、稲作以前の1つの段階として設定するよりも、そこが水稲農耕よりも焼畑に適した環境であったからということを指摘する考えもある(46)。

農耕のおこなわれた地点の環境が、その形態を規定するような事例が弥生時代にもある。石鍬が多くみられる長野県飯田地方の段丘上で行われた農耕が打製石斧（石鍬）を用いた陸耕とされることも(47)、遺跡の立地する環境が、その遺跡の栽培種や栽培方法を規定する大きな要素となったことを示す事例である。岡山県の県北部の山間部で出土する弥生時代の打製石斧（石鍬）についても、段丘上もしくは丘陵斜面上でおこなわれた陸耕の存在を示している可能性が高い。吉野口遺跡は、背後に丘陵部が存在するものの、沖積地の微高地上に位置している。沖積地の環境は、高燥地を好む焼畑よりも水稲に適している。また、同様の環境に存在する津島岡大遺跡では、後期中葉から晩期の貯蔵穴における種子を分析した結果、水田雑草が認められ、出土した後期中葉の土器胎土中からイネと思われるプラントオパールが検出されており、周辺にイネの栽培地が存在していたことが推定されている(48)。同じく沖積地に位置する南溝手遺跡でも、後期後葉の土器片に栽培イネの籾圧痕が認められ、さらに同期の土器胎土からイネのプラントオパールが検出されている。調査区中では生産地の具体的な地点は確認されてはいないが、付近でイネが栽培されていたと考えられている(49)。

これらのことは、状況証拠の累積ではあるが、縄紋時代後期ぐらいには県南部の沖積平野ではイネの栽培をおこなっていた可能性のあることを示している。したがって、吉野口遺跡の周囲で、晩期中葉にイネの栽培を行っていたと考えても大きな齟齬はないと思われる。　ただ、このイネ栽培の「実際の社会での経済的重要性」(50)が、弥生時代と比べどの程度であったかということについては、よくわからない。縄紋時代の集落でよくみつかる堅果類の貯蔵穴の存在から、この時期の稲作を採集経済の補完的な立場であったことが強調される。しかし一方で、農耕具と推定した打製石斧（石鍬）が、機能に即した形態と石材の選択を行っているという点は、比較的発達した稲作を行っていたことも推定される。

ただ、遺物として残りにくい木製品の実態についてはよくわからないものの、農具として用いた石器については、縄紋時代早期末からの形態であるものを継承して用いており、その点では採集作業の延長にある栽培の範疇としてとらえた方がよいようにも思える。

弥生時代の集落遺跡の存在する微高地端部では、低位部の水田への用水路と推定される小溝が、切り合いながら多数検出される。これは、弥生時代の活発な水田経営の痕跡と考えることができる。ところが、吉野口遺跡や南溝手遺跡はそのような景観を呈していない。このことは、突帯紋期以前の稲作の具体的な生産地点はまだ検出されていないが、水路を掘削し、それに沿って水田畦畔をつくり、さらに新たな水源を確保して水田域を広げていくという、継続性と拡大生産を指向する弥生時代以降の水稲栽培とは異なったものであったことを示していると思われる。しかしながら、日本列島における稲作の伝播速度は、ヨーロッパにおける小麦の伝播速度と比べると約20倍も速かったことが指摘されている(51)。この背景を理解するには、弥生時代の水田稲作以前に、列島である種のイネ栽培が存在したことを想定しなければならないと思われる。

そうすると、弥生時代の稲作とは、稲作そのものの情報が伝播した段階というのではなく、栽培種が稲作に集約されていった段階ということになるのではなかろうか。それは、具体的には水田および、そのための灌漑施設の出現ということが指標になると推測される。

（草原）

註

（1）坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』岡山県高島遺跡調査会　1956年
　　鎌木義昌「備中高島遺跡」『岡山県史』考古資料編　1986年
（2）ａ鎌木義昌「舟津原貝塚」『岡山県史』考古資料編　1986年
　　ｂ藤田憲司「倉敷市舟津原貝塚の資料」『倉敷考古館研究集報』16　1981年
（3）岡山市教育委員会『平成７年度埋蔵文化財速報展』　1995年
（4）註３
（5）河口貞徳「黒川洞窟発掘報告」『鹿児島県考古学紀要』第２号　1952年
（6）前田義人「貫川遺跡－貫川都市小河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告２－」
　　『北九州埋蔵文化財調査報告書　第85集』　1989年
（7）潮見浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要』第18号　1965年
（8）加藤進・丹羽裕一他『湖西線関係遺跡調査報告書』　1973年
（9）鎌木義昌「福田古城貝塚」『岡山県史』考古資料編　1986年
（10）平井勝「岡山における縄文晩期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集　1988年
（11）註２ｂ
（12）下澤公明「本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ」『岡山県埋蔵文化財　発掘調査報告』　71　1988年
（13）註12
（14）平井泰夫ほか「南溝手遺跡１－岡山県立大学建設に伴う発掘調査－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』
　　100　1995年
（15）石坂俊郎「岡山市関遺跡出土の縄文晩期土器」『古代吉備』第12集　1990年
（16）中野雅美・亀山行雄「菅生小学校裏山遺跡」『山陽自動車道建設に伴う発掘調査』５
　　岡山県教育委員会　1993年
（17）間壁忠彦・間壁葭子・藤田憲司・小野一臣「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』14　1979年
（18）橋口達也ほか『石崎曲り田遺跡』Ⅲ　『今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告』11
　　福岡県教育委員会　1985年

(19) 家根祥多「近畿地方の土器」『縄文文化の研究』5　雄山閣　1981年
(20) 家根祥多「篠原式の提唱－神戸市篠原中町遺跡出土土器の検討－」『縄文晩期前葉－中葉の広域編年』
北海道大学文学部　1994年
(21) 八尾市教育委員会「八尾市内遺跡昭和61年度発掘調査報告書－恩知遺跡の調査－」
『八尾市文化財調査報告』14　1987年
(22) 香川県教育委員会「永井遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第9冊　1990年
(23) 賀川光男「日本石器時代の農耕問題」『歴史教育』第16巻第4号　1967年
(24) 註14
(25) 藤原宏志「津島岡大遺跡出土土器に関するプラントオパール胎土分析」『津島岡大遺跡4－第5次調査－』
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1994年
(26) 高橋護「縄文時代の籾痕土器」『考古学ジャーナル』NO.355ニューサイエンス社　1992年
(27) 春成秀爾「縄文時代の終焉」『歴史公論』5－1　雄山閣　1978年
(28) 高橋護「縄文農耕を考える」『東アジアの古代文化』　1995年
(29) 鹿児島大学埋蔵文化財調査室編『鹿児島大学構内遺跡郡元団地L－11・12区』1994年
(30) 鈴木道之助『図録石器入門事典縄文』柏書房　1991年
(31) 斉藤基生「打製石斧の性格」『季刊考古学第35号　石器と人類の歴史』雄山閣　1991年
(32) 註31
(33) 註30
(34) 渡辺誠編『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』平安博物館　1975年
(35) 渡辺誠『縄文時代の植物食』雄山閣　1983年
(36) 松島透「飯田地方における弥生時代打製石器－硬い耕土と石製農具－」『日本考古学の諸問題』　1964年
(37) 平井勝「瀬戸内地域における縄文時代研究の課題－晩期農耕についてー」『考古学研究』第32巻
第1号　1985年
(38) 神谷正義「津島江道遺跡」『第30回埋蔵文化財研究集会　各地域における米づくりの開始第一分冊』
埋蔵文化財研究会第30回研究集会実行委員会　1991年
(39) 太田好治『宮竹野際遺跡』2浜松市文化協会　1994年
(40) 吉留秀敏「縄文時代後期から晩期の石技術総体の変化とその評価－早良平野を中心としてー」
『古文化談叢』第30集（上）　1993年
(41) 註39
(42) 註37
(43) 総社市教育委員会高田明人氏のご好意により実見させていただいた。
(44) 福井万千ほか『神辺御領遺跡第1次発掘調査概報』1976年
(45) 佐々木高明『稲作以前』ＮＨＫブックス　日本放送出版会　1971年
(46) 福井勝義「焼畑農耕の普遍性と進化－民俗生態学的視点からー」
『日本民俗文化体系第5巻　山民と海人』小学館　1983年
(47) 註36
(48) 阿部芳郎ほか「津島岡大遺跡4－第5次調査－」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告　第7冊』
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター　1994年
(49) 註14
(50) 設楽博己「東日本における弥生時代の始まり」『展望考古学』考古学研究会　1995年
(51) 青木健一「農耕の伝播と初期農民の分布域拡大－ヨーロッパの小麦、日本の水稲」『科学』66－3
岩波書店　1996年

Ⅱ　弥生時代遺構面

1　弥生時代中期の遺構と遺物について

吉野口遺跡で検出された弥生時代の遺構、遺物の主体は中期中葉である。ここでは、この遺構を理解する基礎作業として、岡山県南部における中期の土器編年を概観し、吉野口遺跡の中期集落の存続幅を確認したい。そして、中部瀬戸内地域でも１つの地域圏を形成していると予想される旭川と、高梁川および足守川流域での中期の集落遺跡の動向を簡単に整理し、その中での吉野口遺跡の中期集落の位置を確認してみたいと思う。

なお、竪穴住居３で出土した馬骨は（附章Ⅴ参照）、弥生時代における馬の存在を示している。『魏志倭人伝』における「牛・馬・虎・豹・羊・鵲なし」の記事の再考と、本州島における馬の出現時期を考える上で重要な資料になると思われる。

(1) 編 年

当地域の中期土器編年は鎌木義昌氏の『日本考古学講座第四巻』(1)、『弥生式土器集成図録－本編』(2)によって、畿内第Ⅱ様式に相当するものを高田式、第Ⅲ様式に相当するものを菰池式、第Ⅳ様式に相当するものを仁伍式として設定された。さらに、倉敷市前山遺跡の北斜面地点の遺物が、仁伍式よりやや先行する型式として前山Ⅱ式が設定された(3)。これらの編年序列は、数多くの遺跡が調査された現在でも基本的な枠組みとしての有効性をもっている。

高橋護氏は中期を４期に分け、さらに小期を設定し、都合９小期に分けている(4)。氏の編年を基礎として、岡山県教育委員会が長年調査している県下でも屈指の広域調査例である百間川遺跡群の土器編年ができており、その内容は報告を重ねるにつれ充実されていっている。そして、百間川遺跡群を含む県下において出土した遺物をもとに、旧国単位である備前、備中の範囲に地域を大別して、それぞれの地域の土器編年が正岡睦夫氏(5)と高畑知功氏(6)によりおこなわれている。

岡山市南方遺跡（国立病院）で出土した中期前半に属する土器溜まりの土器群を整理した神谷正義氏は、細かな形態分類から、畿内第Ⅱ、Ⅲ様式に対応する土器編年をおこなった(7)。該期の良好な遺物が少ない現況では、貴重な資料といえる。ただ、藤田憲司氏はこの資料について畿内第Ⅲ様式の古段階の単一時期を示す資料との認識を示している(8)。

平井典子氏は、高梁川以東から吉井川以西の県南部を１つの地域圏としてとらえ、中期を３期に大別し、さらに小期を設定して６小期に分けている(9)。

ここでは、精緻となってきている該期の土器編年を大まかに整理してみたい。一応、土器の施紋に共通する特徴を指標にして４期に大別し、さらに各土器のより細かな差を指標に幾つかの小期に分けることとする。

《Ⅰ期》　３条以上の単位をもったクシ描紋の出現を指標としてⅠ期とした。これは、従来の高田式に相当する。この時期に対応する良好な土器群は少ないが、百間川米田遺跡土壙114(10)、同沢田遺跡Ｐ132(11)などがある。甕の器形は基本的に前期の形態のままであるが、頸部の施紋がヘラ描紋からクシ描紋に変化している。クシ描紋には直線紋だけで構成されるものや、波状紋と組み合わせているものなどいくつかのパターンがあり、それらに時期差が存在しているかどうかについては該期の資料が少ないこともあってよくわからない。その他無紋のものも認められる。これらの甕に伴う壺は、口縁部にむかって

すぼまり端部に面をもたない形態のものや、フラスコ形の特殊な形態をしたものがある。断片的な資料の中に、稚拙なクシ描紋を施紋した短頸壺や無紋の壺があり、それらもこの時期に含まれる可能性がある。この時期の土器は、施紋にクシ状工具を用いるようになるものの胎土には大粒の砂粒が含まれ、器壁も厚ぼったく前期的な要素が多く残存している。

《Ⅱ期》　クシ描紋が盛行することを指標としてⅡ期とした。これは、従来の南方式に対応する。甕の内面調整であるヘラミガキの粗密と、高杯の脚端部の平坦面の有無などを指標としてａ、ｂの小期に分けられそうである。Ⅱａ期を示す土器群は、南方遺跡（国立病院）の土器溜まり(12)と邑久町堂免貝塚の円形周溝墓の周溝出土の土器群(13)がある。Ⅱｂ期は百間川兼基遺跡の竪穴住居１、２(14)がある。Ⅱａ期の壺については、クシ描紋の稚拙なものや、最下段に列点紋をめぐらすような古相を示すものも含めている。この時期の良好な土器群が検出されれば、この古相の土器は分離される可能性もあるが、それらはⅠ期の土器とは異なり胎土に大粒の砂粒がほとんど含まれていないことから、施紋に古相が認められる土器も一応この時期に含まれると考えておきたい。甕は、外面上半をタテハケ、下半をタテヘラミガキして、胴部下半に列点紋をめぐらし、内面は丁寧にヘラミガキをおこなうもの（甕Ａ）が主体となる。また内外面の調整は甕Ａと同じであるが、外面の列点紋が省略されているもの（甕Ｂ）もある。ただ、Ⅱｂ期になると内面のヘラミガキが若干粗くなり、ヘラミガキ前のハケ調整が明瞭に観察できるものもでてくる。高杯は口縁部が水平に外反するもの（高杯Ａ）と、椀形になるものとがある。椀形のものについては、口径より高さの方が高いジョッキ形のもの（高杯Ｃ）と、この期に属する明確な資料はないものの、口径の方が大きい鉢形のもの（高杯Ｂ）の二者がある。Ⅱｂ期になると、脚端部が断面方形で接地面が平坦になっているものがなくなる。また、脚部と杯部の接合部の突帯もなくなるか、もしくは１条だけとなる。

《Ⅲ期》　凹線紋の出現を指標としてⅢ期とした。従来の菰池式に対応する。少なくとも、この時期の後半には水差形土器や器台などの新たな器種が加わる。甕の内面調整がハケの後粗いヘラミガキであったものから、ハケの後下半にヘラケズリがおこなわれるようになっていくといった点や、高杯の口縁端部のヨコナデが強くなることによって稜が明瞭化してくることや、壺頸部の貼付け凸帯が凹線紋化するといったことを指標としてａ，ｂの２小期にわけられそうである。壺や甕の口縁部の凹線紋についてもｂ期の方がａ期よりも施紋される比率が高くなる。ただ、ｂ期については壺の体部の屈曲がやや緩やかになることと、口縁部の開きが弱くなること、甕の口縁端部の拡張が顕著となり、そこに凹線紋をめぐらすことを指標にⅢｂ$_1$期とⅢｂ$_2$期の２小期に分けられる可能性を推定している。しかし、Ⅲｂ$_1$期とⅢｂ$_2$期との違いは壺と甕という一部の器種だけで、他の器種については明確な相違は認められない。Ⅲａ期を示す土器群は、南方遺跡土壙42、３、26などがある(15)。未公表資料であるが、南方釜田遺跡出土資料中にもこの期の良好な土器群がある。Ⅲｂ$_1$期を示す土器群は百間川兼基遺跡井戸１、土壙17(16)などで、Ⅲｂ$_2$期を示す土器群は百間川兼基遺跡土壙３(17)などがある。

《Ⅳ期》　凹線紋が盛行することを指標としてⅣ期とした。これは、従来の仁伍式に対応する。凹線紋の盛行とは、具体的には壺の一部や甕の口縁部だけに施紋されていたものが、高杯をはじめ他の壺や水差形土器においても凹線が施紋されることを示している。甕についても胴部最大径が下がり、ややナデ肩状になるといった特徴が出てくる。また、算盤玉形の胴部に脚の付く長頸壺も新たに加わる。ただ、これらの諸特徴のうち、高杯の形態や壺のなかにⅢ期に近いものを含む土器群があり、それらを指標としてａ、ｂの２小期に分ける。Ⅳａ期は従来の前山Ⅱ式に対応し、Ⅲ期とⅣ期の過渡的様相を呈する。

中Ⅰ			高田式
中Ⅱ	a	A B C D A B A B C	南方式
	b		
中Ⅲ	a		菰池式
	b_1		
	b_2		
中Ⅳ	a		前山Ⅱ式・仁伍式
	b		

図246　県南部弥生中期土器分類

ただ、Ⅳａ期を示す良好な資料はあまりなく、この期の内容についてはやや不鮮明な点がある。この期を示す土器群は、川入遺跡法万寺Ｈ－６－１(18)がある。Ⅳｂ期は資料的には多く、上東遺跡東鬼川市７－Ｐ－52(19)、百間川兼基遺跡土壙112、114(20)、鹿田遺跡住居１、土壙366、117(21)などがある。

以上のことを模式的にしめしたのが図246である。

(2) 吉野口遺跡の遺構の変遷（図248）

次に、吉野口遺跡における弥生時代中期の遺構の変遷を時期ごとに分けてみたい。

中期Ⅰに属する遺構は認められない。

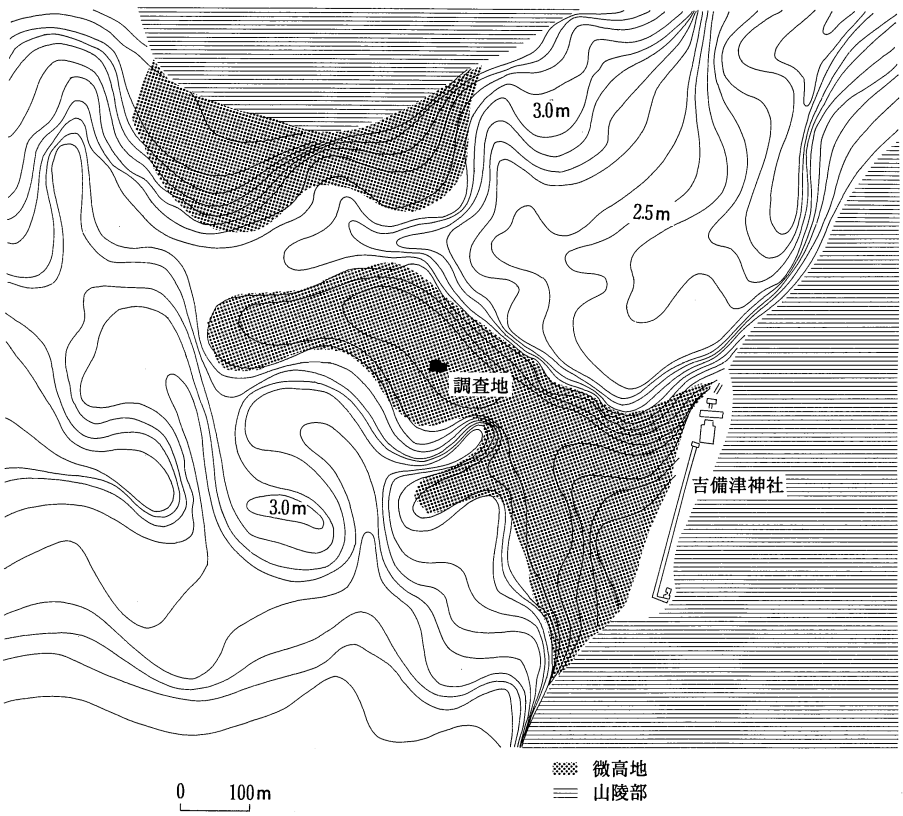


図247　調査区周辺の微地形

中期Ⅱに属する遺構はＰ376、405などで、遺構上面から出土した３点の土器を除いたＰ27も同時期と考えられる。これらの遺構から出土した土器は、甕が主体である。遺構数は少なく、包含層から出土した土器も少ない。吉野口遺跡の形成された微高地は、調査区北方の方がレベルが高くなっており、調査区における同期の遺構も北半に偏る傾向がみられる。おそらく最も安定した微高地中央部にこの期の集落が形成され、その集落の南限ぐらいが調査区北半にあたるものと考えられる（図247)。現況の微地形からの推定であるため厳密さはやや欠くが、この微高地は調査区の北40ｍぐらいで端部になるものと推定される。したがって当該期の集落幅は最大に見積もっても南北幅70ｍの範囲におさまるものと考えられるが、微高地南側にあたる当調査区の様相からすると、該期の遺構が北半の微高地全体に広がるとは思われない。つまり、それ程大きな集落ではなかったと考えられる。

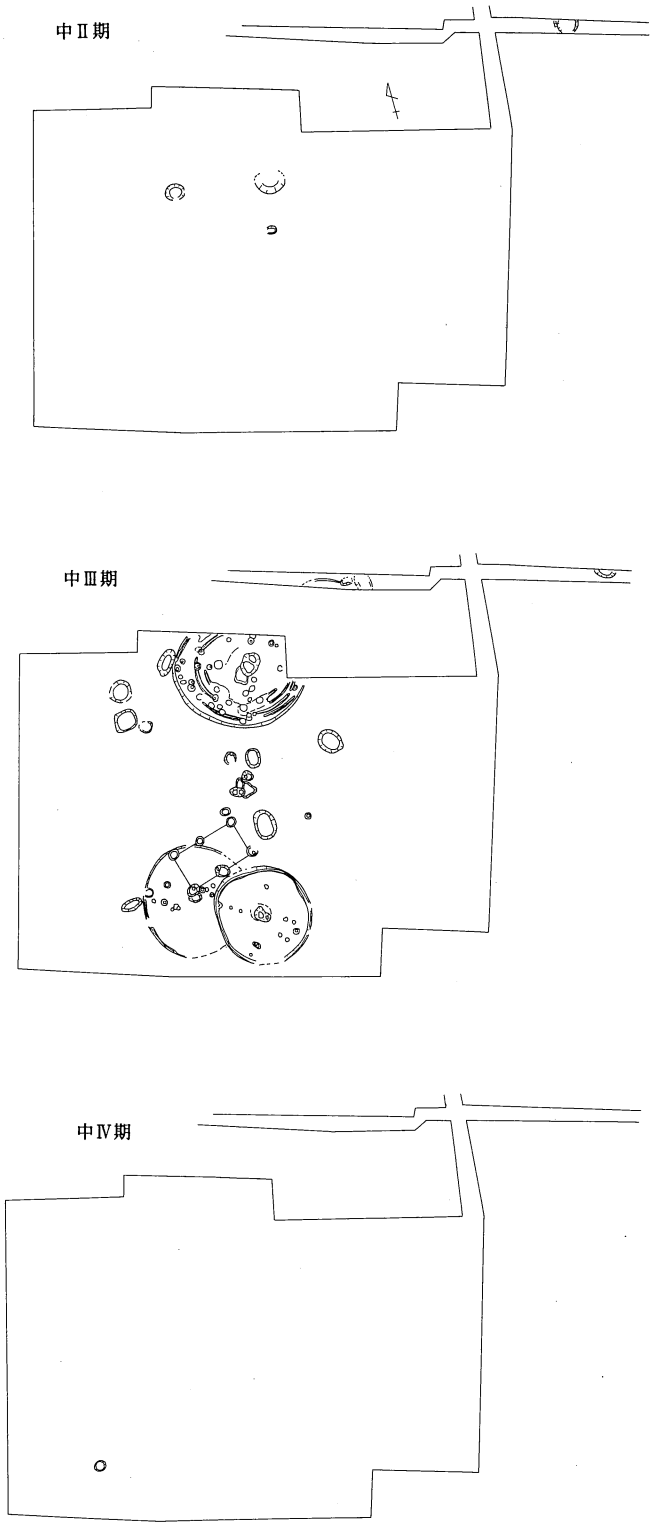


図248　弥生時代中期遺構変遷図

中Ⅲ期に属する主な遺構は、竪穴住居1、3、12、13などで、検出された大半の遺構がこの時期のものである。ただ、甕に内面ヘラケズリが認められるものはなく、Ⅲb期にまで下るものはないものの、遺構の切り合い関係や凹線紋の多寡といった点からⅢa期のうちでも新相のものが主体になる。いずれにしてもこの時期が吉野口遺跡の盛行期といえる。中Ⅱ期に形成された集落が中Ⅲ期まで継続し、そして拡大したものと考えられる。この他石器については、サヌカイトの剥片が多量に出土しており、竪穴住居からは太型蛤刃石斧と同種の石材の剥片が出土している。このことは集落内で石斧を製作していたことを示してはいるが、剥片の数はそれ程多くはなく、集落内での需要をまかなう程度の自給的な生産であったと推定される。旭川流域に存在する南方遺跡では、同種の石材の剥片や未製品が多量に出土しており(22)、吉野口遺跡とは様相が異なっている。さらに旭川流域の遺跡と比較すると、吉野口遺跡の場合は竪穴住居、掘立柱建物とが混在しており、集中して建てられた掘立柱建物群を検出した百間川兼基遺跡のように、集落内で建物の種類によって占地する空間が異なっていたということではないようである。このことは、墓地についてもいえる。南方（市道）遺跡では、墓地空間と居住空間とが集落内で分かれている(23)が、吉野口遺跡では混在している。南方（市道）遺跡とは別の微高地に存在する南方釜田遺跡でも墓地のみが集中する部分が調査されており、墓地空間と居住空間が分離されていることは南方

遺跡周辺の普遍的な様相であったことが推定される。つまり、断片的な資料による比較ではあるが、旭川流域に形成された中期の集落と、足守川流域に形成された吉野口遺跡の集落内部の景観とは異なっていたことが推定される。足守川流域では中Ⅲ期以前の大規模な集落は確認されていないことから、吉野口遺跡の様相が足守川流域の中期集落の様相をある程度示していると考えられる。そうすると、旭川流域の集落は、足守川流域の集落より集落内部での機能分化が進展していたことを示している、ととらえることができるのかもしれない。

中Ⅳ期以降遺構数は激減し、この期に属する遺物もほとんどない。中Ⅱ期から中Ⅲａ期にかけて拡大してきた吉野口遺跡の中期集落は、当該地から移動、もしくは解体したと推定される。

(3)　中期集落の動向（図249）

吉野口遺跡の中期集落は中期前半に出現し、中頃までは継続するものの後半になると遺構数が激減することが確認された。そこで、県南部で比較的該期の調査例の多い高梁川流域から旭川流域にかけての集落遺跡の分布図を作成し、この地域の集落遺跡の動向と吉野口遺跡とを比較してみたい。一応、水系や地形的な観点から高梁川、足守川流域と、旭川流域を各々１つの単位地域として考えていきたい（図249）。

中Ⅰ期は、両地域とも該期の集落があまり調査されておらずよくわからないが、それでも旭川流域の方が確認されている地点数は多い。

中Ⅱ期になると、高梁川、足守川流域でも明確な集落が出現してくる。しかし実態としては、南溝手遺跡(24)のように竪穴住居数棟からなる小規模なものであったと思

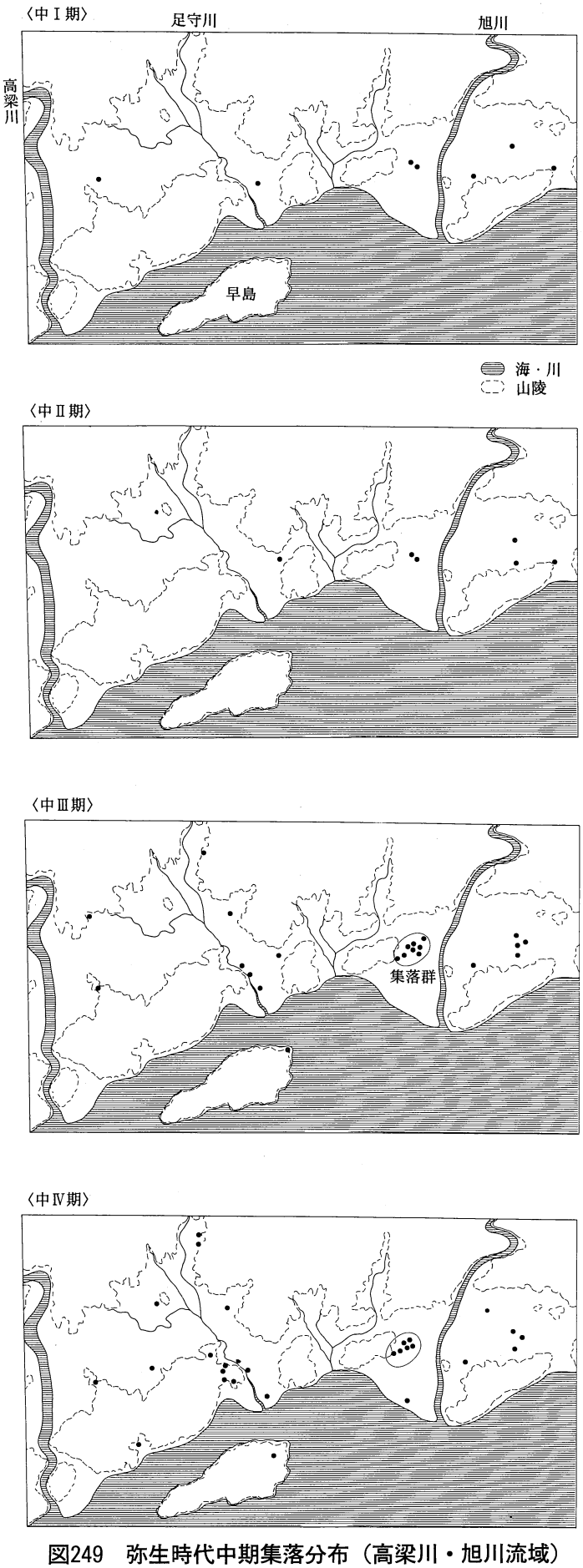


図249　弥生時代中期集落分布（高梁川・旭川流域）

われる。一方、旭川流域では南方遺跡や雄町遺跡で集落の一端が明らかになっており、特に南方遺跡から出土する遺物量は多く、集落規模は拡大してきていると推定される。

中Ⅲ期になると、高梁川、足守川流域の遺跡数は増加する。特に山麓へも序々に遺跡が分布するようになってくる。しかし、上東遺跡の北方約1㎞の位置にある新邸貝塚周辺の様相が調査例もほとんどないことから明らかではないが、継続的に拡大していくような集落はほとんど認められないと考えていいと思われる。

旭川流域の遺跡数も増加する。しかし、高梁川、足守川流域とは異なって、前段階までに形成された集落が拡大したような様相を呈する。とくに、調査例の多い南方遺跡の様相は、近接する複数の微高地に同時期の遺構が数多く形成され、出土する遺物の質、量ともに県下の弥生集落の中では飛び抜けた内容をもっている。南方遺跡のように複数の微高地にわたり同時期の集落が形成されているものを、相互に一体性を有する可能性があるという意味で集落群と呼称すると、旭川流域には、西岸の南方遺跡群と東岸の兼基遺跡から乙多見遺跡にかけての、少なくとも2つは認められる。それらは旭川流域両岸の拠点集落と考えていいと思われる。それら拠点集落の具体相はまだまだ明らかではないが，少なくとも居住域と墓域は明確に分離されており、居住域についても巨大な掘立柱建物が集中する地点があるなど、居住域内部も機能により分離、あるいは地区分けされていた可能性がある。

中Ⅳ期になると、高梁川、足守川流域の丘陵部で非常に多くの遺跡が形成されるようになる。それらの遺跡は、比較的規模の大きいもので竪穴住居10数棟で構成されており、それ程大規模とはいえないが、現在散布地として認識されている地点も集落遺跡と考えると、足守川周辺の丘陵部には特に多くの集落が形成されていたと考えられる。それらの集落は、出土した遺物をみるかぎり立地条件以外は低位部の集落と変わらない。おそらく、丘陵裾部の小扇状地上を山間からの小河道を利用して、比較的完結的な水田経営をおこなっていたものと推定される。したがって丘陵部を中心に数多く出現した高梁川、足守川流域の集落は、対象とする耕作地の面積に規定され個々の単位はそれ程大きくはないものの、水田経営についてはそれぞれがある程度自立的に存在していたと考えてもいいように思われる。そして、次の弥生時代後期の段階には上東遺跡のような拠点集落が足守川流域にもいくつか形成される。それは、中期末の小単位の集落が再編され、低位部の大規模開発がおこなわれた結果出現したものと推定される。

旭川流域では、拠点集落と考えられる遺跡群は若干その位置を移動するものの、継続的に存在するものが大半であるが、鹿田遺跡のようにこの期に新たに拠点的な集落として形成されるものもある。旭川東岸については該期の遺跡の調査例が少なくよくわからないが、前段階の集落群の北方に位置する幡多廃寺下層(25)からもこの期の遺構が確認されており、集落群の拡大もしくは位置の若干の移動も考えられる。しかし基本的には旭川東岸も西岸と同じ様相と推定される。

(4) 小 結

以上のことから、吉野口遺跡の中期集落はやや継続的な様相を呈するものの、Ⅲb期以降継続しないのは、高梁川、足守川流域全体に通じる中期集落の特徴であるということがいえよう。

2 弥生時代後期の遺構、遺物について

吉野口遺跡で検出された後期の遺構は、竪穴住居が2棟だけである。包含層から出土した弥生時代の土器は、中期がほとんどで後期のものはわずかである。このことは遺構の密度の薄さとも一致しており、

後期の吉野口遺跡がそれ程規模の大きくない集落であったことが予想される。

竪穴住居から出土した土器には、長頸壺と短脚化した高杯が存在し、後に「吉備型甕」(26)といわれるようになる甕の祖形も伴うことから後期中葉の時期といえる。山陽新幹線建設に伴い発掘調査された上東遺跡の土器を整理した成果によると、後期を鬼川市Ⅰ式、同Ⅱ式、同Ⅲ式、才ノ町Ⅰ式、同Ⅱ式の5型式に分けている(27)。吉野口遺跡の時期は、この編年の鬼川市Ⅲ式に相当する。この時期には、足守川流域に全長80mにも達するといわれている楯築墳丘墓が築かれており、この巨大な墳丘墓は、古墳時代の指標になる前方後円墳への過渡的形態と考えられている(28)。そして、この時期に墳丘墓に供献される目的で当該地域で創出された特殊器台や特殊壺は、遠く島根県にまで分布しており、日常的な生活圏を越えるような、ある意味で政治的な関係が墳丘墓を築造した首長間で成立していたことを示している。また、一般集落から出土する該期の土器組成中に、土師器につながる特徴のあることも指摘されている(29)。この時期は、弥生時代から古墳時代への変換点に相当することが予想される。

足守川流域でも開発に伴う発掘調査の件数は増えており、該期の集落遺跡の様相が部分的ではあるが明らかになりつつある。ここでは、吉野口遺跡の弥生時代後期集落の性格を理解する基礎作業として、足守川流域を中心とした該期の集落の様相を若干整理してみたいと思う。なお、時期区分については、長頸壺の頸部が凹線紋から沈線紋となり、壺、甕の内面ヘラケズリが胴部上半にまでおよび、高杯の口縁端部を肥厚、もしくは水平に拡張することを指標にⅠ期とする。次に長頸壺の頸部が逆「ハ」字状のものから直立気味になり、胴部も球形になる。そして壺、甕の内面ヘラケズリが頸部付近までおよび、高杯は口縁部がゆるやかに外反し、脚部は円板充填で成形されるものと、別作りのものとが存在する。これらを指標としてⅡ期とする。また高杯の短脚化と「吉備型甕」の祖形の出現や、長頸壺の頸部が「ハ」字状になることや、精製された胎土が用いられる器種があらわれることを指標にⅢ期とする。そして長頸壺が消滅し、高杯がさらに短脚化、小型化することを指標にⅣ期とする。これらは、上東編年と対比させると、Ⅰ期が鬼川市Ⅰ式、Ⅱ期が鬼川市Ⅱ式、Ⅲ期が鬼川市Ⅲ式、Ⅳ期が才ノ町Ⅰ、Ⅱ式に相当する。

なお、竪穴住居4の埋土から出土した器台片については、外面に直線紋を幾何学的に組み合わせ、口縁部内面には直弧紋的なモチーフも認められ、この時期に出現する特殊器台形土器との関係が推定される資料である。

(1)　後期前半の拠点集落の形成

足守川流域の集落は、中期末には周囲の丘陵部にも数多く形成され、後Ⅰ期には丘陵部に位置する遺跡が激減し、低位部に比較的遺構の密度が高い集落が出現、あるいは小規模であった集落が拡大する。これらは、拠点的な集落と考えてよいと思われる。拠点的な集落と考えられるものは、上東遺跡(30)、矢部南向遺跡(31)、津寺遺跡(32)、高塚遺跡(33)などである。当該地域における中期の集落は丘陵裾部

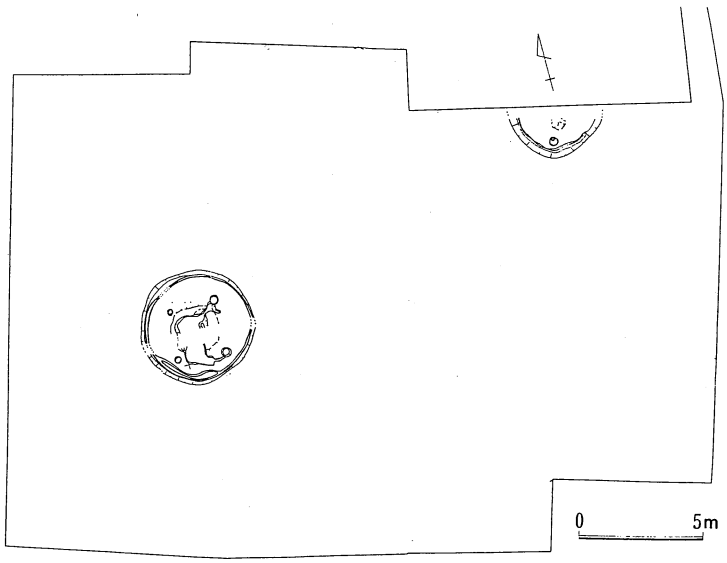


図250　吉野口遺跡後期遺構配置

に広がる小扇状地状地形であるとか、低位部であっても少ない労働投下量で耕作できる部分を基盤としていたと考えられる。したがって、それらを基盤として成り立つ集落規模には自ずと限界があり、当該地域で中期の大規模な集落がほとんど形成されていないのは、このためであろう。しかしその反面、それぞれの集落の水田経営は完結的であり、相対的に自立化した性格が内包されていたことが推測される。これらの集落は、概念的には津山市沼遺跡の発掘調査と周辺地域の分布調査の結果から抽出された、弥生社会を構成する基礎単位とされる「単位集団」(34)に相当するものと考えられる。

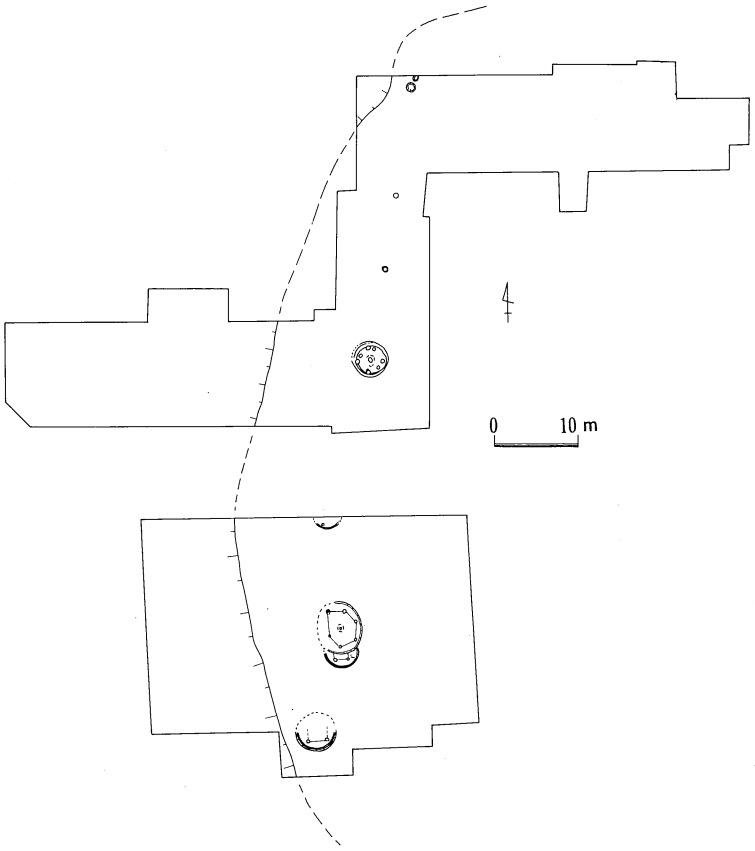


図251 津寺（加茂小）遺跡後Ⅲ期遺構図

ところが、後期になると低位部の集落が拡大する。このことは、それぞれの集落が結集し、低位部の大規模な開発がおこなわれたと理解することが妥当と考えられる。拠点的な集落を成立させた契機については、後Ⅰ、Ⅱ期に金属製鏃の集落内での出土量が増加することから、非日常的な状況、具体的には収穫物や流通物の争奪などが原因となった抗争などが考えられよう(35)。しかし結果的には、大型化した集落を維持するための低位部の大規模開発が進展し、それが集落規模を拡大し拠点的な集落へとなさしめた本質的な諸要因の１つであったと考えられる。ところが、後期前半に形成された拠点集落のうち、その大半は後Ⅲ期になると遺構数が激減、もしくはなくなるものが大半である。それでは、次に後Ⅲ期の集落の様相をみてみたい。

(2) 後期後半の集落の様相

後Ⅲ期の集落も遺構数を視点にしてみると、大きくは２つに分けられる。１つは遺構数が多く、遺物も多量に出土する遺跡で、これをＡ型集落とする。もう１つは遺構数、遺物ともに少なく、小規模な集落であったことが推定されるもので、これをＢ型集落とする。この他後期前半の拠点的な集落で、遺構数が激減したものもＢ型集落の範疇に入れる。また、Ｂ型集落の中でも小規模になるもの、あるいは小規模なものをＢ1型集落、この期になってほとんど遺構が認められなくなるものをＢ2型集落として区別する。

Ｂ1型集落は、吉野口遺跡（図250）、津寺（加茂小）遺跡（図251）などで明らかになっている。津寺（加茂小）遺跡は、岡山市立加茂小学校の校舎と体育館建設に伴う発掘調査によってその内容の一部が明らかになったもので、中Ⅳ期の竪穴住居数棟と溝が検出され、この時期ぐらいから集落が形成されてきたものと考えられる。その後遺構はなくなるが、後Ⅲ期になると５棟の竪穴住居が散在的に認められ

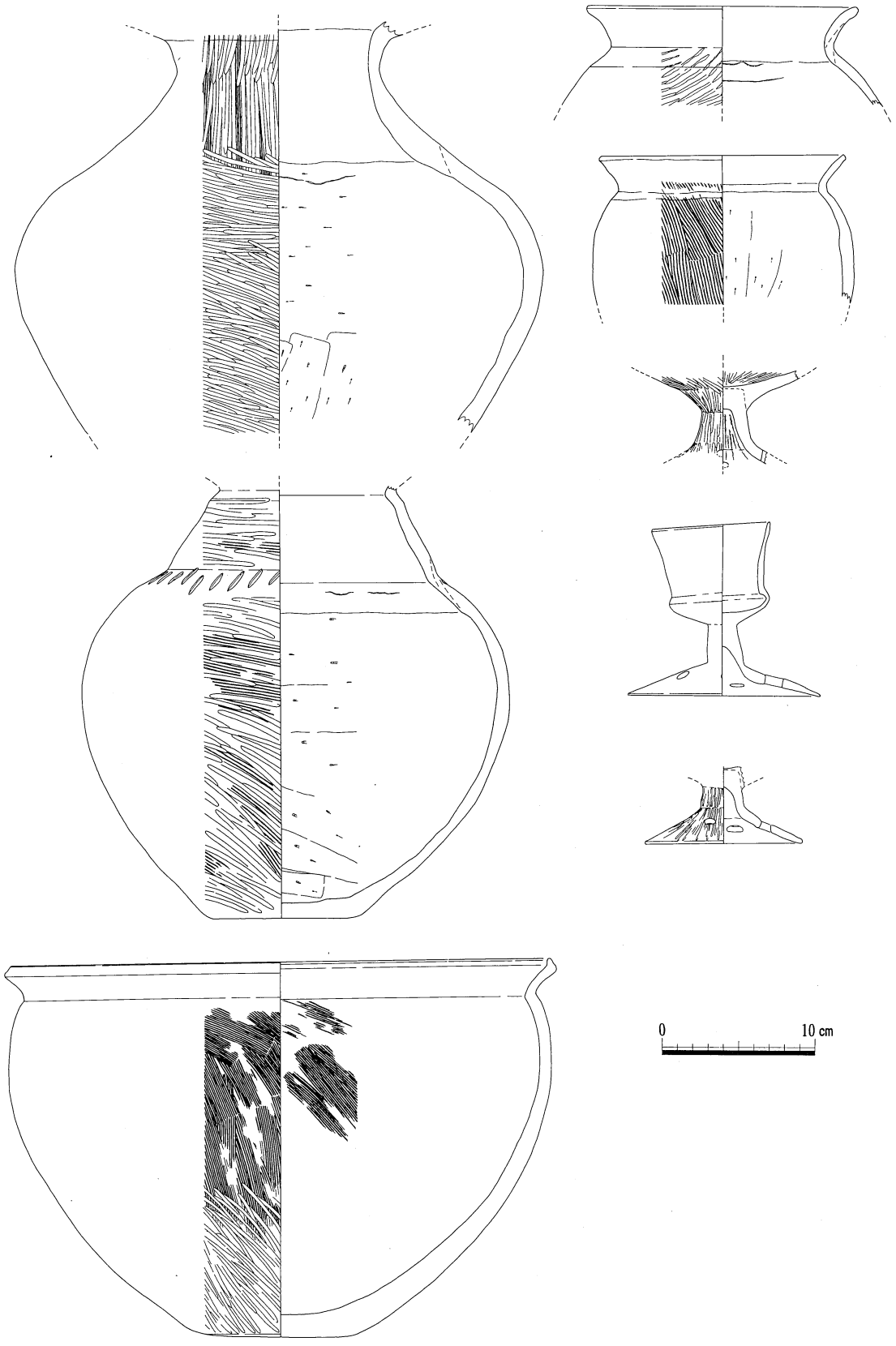


図252　幸利神社遺跡出土土器

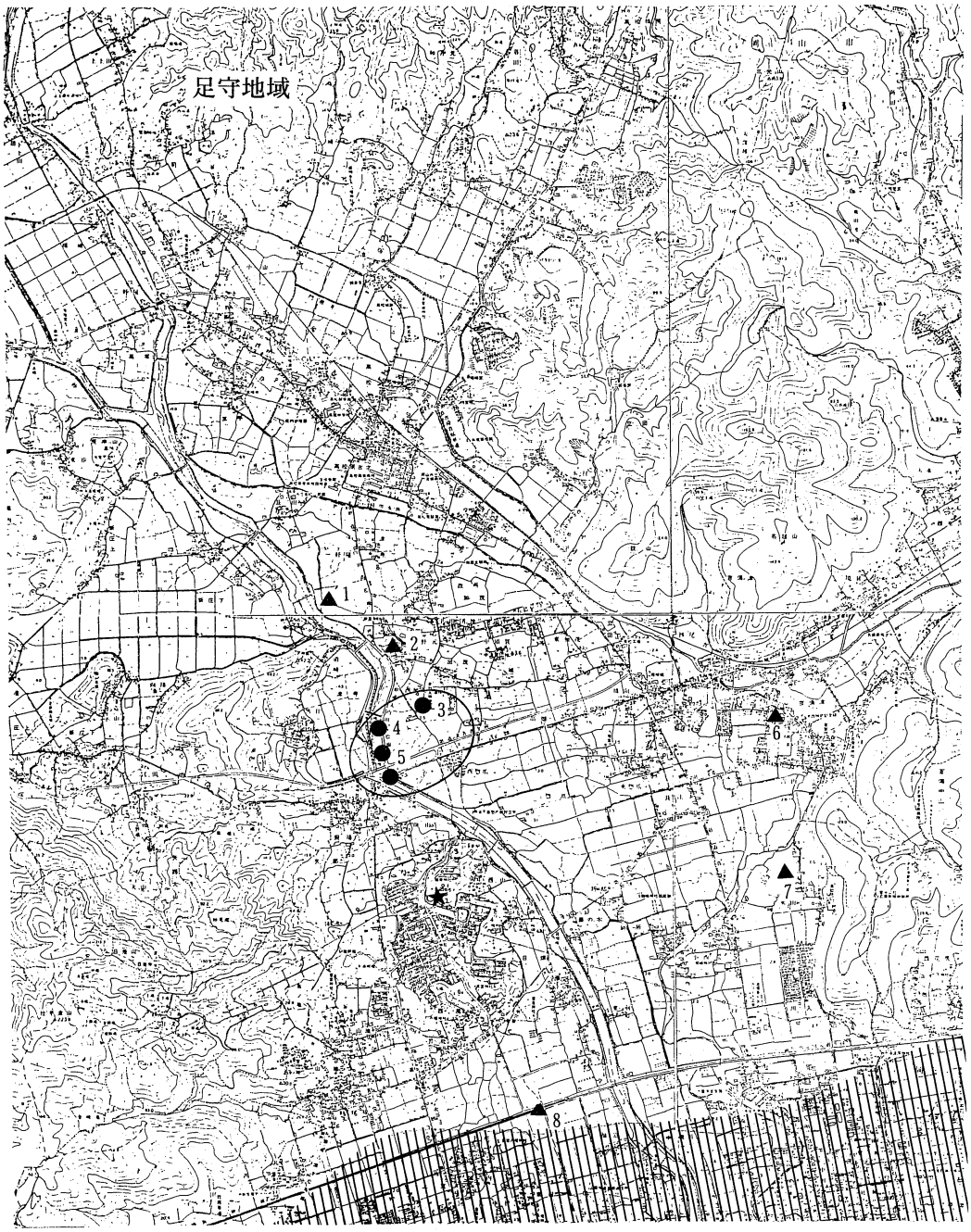


図253　弥生後期後半集落分布

るようになる。しかし、出土する遺物の量はそれ程多くはなく、小規模な集落であったと考えてよいようである。それぞれの竪穴住居が同時に存在していたかどうかは厳密にはわからないが、住居間の間隔は10m～15mで、この数値は吉野口遺跡の２棟の竪穴住居間の距離とほぼ一致する(36)。

Ｂ2型集落は、上東遺跡、東山遺跡、津寺遺跡などである。

東山遺跡は、市道新設に伴う発掘調査によってその内容の一部が明らかになっている。幅６m程の調

査区ではあったが、長さが280mもあり、遺跡が形成されている微高地に対して南北方向のトレンチを入れたことになる。それによると、後Ⅰ、Ⅱ期には多数の土壙や井戸、竪穴住居が認められるものの、後Ⅲ期になると遺構、遺物はほとんどなくなる。後Ⅳ期になるとやや遺構数は増加し、古墳時代になるとさらに増す(37)。

津寺遺跡は山陽自動車道建設に伴い発掘調査されたもので、津寺（加茂小）遺跡の北に位置し、津寺（加茂小）遺跡とは別の微高地に形成された集落である。かなり広範囲にわたる調査であり、遺跡全体の様相をほぼとらえたと考えられる。それによると、後Ⅰ、Ⅱ期の遺構はある程度形成されるが、後Ⅲ期になると遺構、遺物はほとんど認められなくなり、後期末から古墳時代にかけては遺構数が激増する(38)。

上東遺跡は、後Ⅰ、Ⅱ期には竪穴住居が8棟の他に土壙や井戸などの遺構が多数認められているが、後Ⅲ期になると竪穴住居が1棟となり遺構、遺物ともに減少する。その後、後Ⅳ期や古墳時代になると遺構数は増加している(39)。

A型集落は、矢部南向、加茂A、B遺跡で、後Ⅰ、Ⅱ期の集落が継続して大規模な集落を形成している(40)。この他A型集落の可能性があるものは、幸利神社遺跡で、市道整備の際に発見され、出土した遺物は後Ⅲ、Ⅳ期のものが中心である（図252)。

以上の集落の分布図をみると（図253)、A型集落が現足守川の中流域部に集中して集落群を形成し、B型集落が周囲に点在することがわかる。そしてA型集落群の南側にある丘陵上に楯築墳丘墓が存在し、北側の丘陵部には一辺約20m、幅約15mの方形の墳丘墓も築かれている(41)。そして楯築墳丘墓の存在する丘陵上には、長さ十数mの規模が推定される女男岩墳丘墓(42)や、特殊器台を用いた墓群である辻山田遺跡(43)も確認されている。

(3) 小 結

集落の規模や位置的な関係から、楯築墳丘墓の母体となったのがA型集落群であることは、まずまちがいないと思われる。このA型集落群は、後期前半に形成された複数の拠点集落がさらに集約化された帰結と考えられよう。ただ、この拠点集落の内部には、中期からの集落変遷をみるかぎり、いくつかの完結的な水田経営を基盤とした単位集団を内包したものであったと考えられる。したがって、楯築墳丘墓の存在する丘陵上に、女男岩墳丘墓や辻山田遺跡の墓群が認められるのも、A型集落群のなかにいくつかの自立的な単位が存在していたことを示唆していると思われる。ともあれ、後Ⅲ期には足守川流域で、該域全体の拠点集落といえるA型集落群が形成され、一極集中的な様相を呈するようになる。そして、周囲には吉野口遺跡のような小規模な集落が存在していた、ということがいえそうである。

ただ、この状況は足守川中流域の範囲に限定されるものと考えられる。例えば、足守川の上流域付近、後に足守郷となる地域では、墳丘墓がいくつか認められ、足守川中流域のA型集落群を中心とした地域圏とは異なる地域圏が形成されていた可能性がある。つまり、高梁川、足守川流域で最も広い水田可耕地を含みこんだ大きな地域圏が足守川中流域に形成される一方で、それとはおそらく相対的に小さな地域圏もいくつか形成され、前者が中山茶臼山古墳や尾上車山古墳のような全長が100mを越える大型前方後円墳を、後者が比較的小規模な前方後円（方）墳を築造したものと推定される。つまり、当該域の古墳時代の基本的な枠組みは、後Ⅲ期には形成されていたと考えることができるように思われる。

（草原）

注

1 鎌木義昌「各地域の弥生式土器・中国」『日本考古学講座』第四巻 1955年
2 鎌木義昌「山陽地方Ⅱ」『弥生式土器集成 本編Ⅰ』 1964年
3 鎌木義昌「岡山県郷内村前山の弥生遺跡」『吉備考古第80号』吉備考古学会 1950年
4 高橋護「弥生土器」－山陽－『考古学ジャーナル173～181』ニューサイエンス社
5 正岡睦夫「備前地域」『弥生土器の様式と編年』－山陽・山陰－木耳社 1992年
6 高畑知功「備中地域」『弥生土器の様式と編年』－山陽・山陰－木耳社 1992年
7 出宮徳尚・神谷正義 『南方（国立病院）遺跡発掘調査報告』 岡山市教育委員会 1981年
8 藤田憲司「弥生中期の地域性」『吉備の考古学的研究』（上）山陽新聞社 1992年
9 平井典子「備前・備中」『ＹＡＹ－弥生土器を語る20回到達記念論紋集－』 1996年
10 岡本寛久ほか「百間川米田遺跡３」『岡山県埋蔵紋化財発掘調査報告書74』岡山県教育委員会 1989年
11 神谷正義・草原孝典『百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告』 岡山市教育員会
12 注７
13 馬場昌一氏より資料を実見させて頂いた
14 正岡睦夫ほか「百間川兼基遺跡１・百間川今谷遺跡１」『岡山県埋蔵紋化財発掘調査報告書 51』
岡山県教育委員会 1982年
15 柳瀬昭彦ほか「南方遺跡」『岡山県埋蔵紋化財発掘調査報告書』岡山県教育委員会 1981年
16 注14
17 注14
18 柳瀬昭彦ほか「川入・上東」『岡山県埋蔵紋化財発掘調査報告書16』岡山県教育委員会 1977年
19 注18
20 注14
21 山本悦世ほか「鹿田遺跡１」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』第３集岡山大学埋蔵紋化財調査研究センター
1988年
22 扇崎由・安川満「上伊福・南方（済生会）遺跡」『岡山市埋蔵紋化財調査の概要』1994（平成６）年度
岡山市教育委員会 1996年
23 出宮徳尚ほか 『南方遺跡発掘調査概報』 岡山市教育委員会 1971年
24 平井泰男ほか「南溝手遺跡」『岡山県埋蔵紋化財発掘調査報告書100』岡山県教育委員会 1995年
25 出宮徳尚・根木修 『幡多廃寺発掘調査報告』 岡山市教育委員会 1975年
26 関川尚功ほか 『纏向』 桜井市教育委員会 1977年
27 注18
28 近藤義郎『楯築弥生墳丘墓の研究』楯築刊行会 1992年
29 池橋幹「弥生後期土器の地域色とその背景－中国地方東部を中心に－」『考古学研究』第32巻 第３号
考古学研究会 1985年
30 注18
31 江見正己ほか「足守川矢部南向遺跡」『岡山県埋蔵紋化財発掘調査報告書94』岡山県教育委員会 1995年
32 中野雅美ほか「津寺遺跡２」『岡山県埋蔵紋化財発掘調査報告書98』岡山県教育委員会 1995年
亀山行雄ほか「津寺遺跡３」『岡山県埋蔵紋化財発掘調査報告書104 』岡山県教育委員会 1995年
33 平井泰男ほか「５、高塚遺跡」『岡山県埋蔵紋化財報告書20』岡山県教育委員会 1995年
34 近藤義郎 『津山弥生住居址群の研究』1957年
35 草原孝典「吉備の庄内土器」『庄内土器研究』 1995年
36 乗岡実「岡山市域における最近の発掘調査から」『古代吉備』第12集 1990年
37 注36
38 注32
39 注18
40 注31
41 近藤義郎「雲山鳥打弥生墳丘墓」『岡山県史 考古資料』岡山県史編纂室 1986年
42 間壁忠彦・間壁葭子「女男岩遺跡」『倉敷考古館研究集報』第10号 1974年
43 間壁忠彦・間壁葭子「辻山田遺跡」『倉敷考古館研究集報』第10号 1974年

Ⅲ　古墳時代後期遺構面

吉野口遺跡の古墳時代後期の遺構面では竪穴住居６軒が検出され、この時期の一般的な集落遺跡の景観を呈している。しかし、調査区東南部では鉄滓が比較的多く出土し、鉄滓や焼土を投棄した土壙と、鍛冶炉と推定される焼土塊も検出された。このような吉野口遺跡の製鉄関連の遺構や遺物に関して「再加工や打ち直しを中心に行っている村方鍛冶」という評価が花田勝広氏によりおこなわれている(1)が、ここでは出土した鉄滓の分析結果（附章Ⅳ参照）とを合わせてその点を若干検討してみたいと思う。

１　吉野口遺跡の製鉄工程

吉備南部における６世紀後半から７世紀にかけての製鉄遺跡には、「鉄鋌」などの鉄素材からの加工、再加工は別として、鉄鉱石もしくは砂鉄などの製鉄原料を生成する段階から鉄器の製作段階までの、いくつかの作業工程が認められる。それぞれの遺跡がどの作業工程に属するかについては、遺跡に残る遺構や鉄滓の分析から見分けることができる(2)。

まず、鉄鉱石や砂鉄などの製鉄原料は、製鉄炉において製錬される。この工程では、多量の製錬滓が排出される。遺構としては、炉床が長方形あるいは楕円形で、下部に防湿施設を備えていたり、いなかったりする形態の製鉄炉と、横口付の製炭窯、そして斜面を段状に整形した作業場などが認められる。この工程の遺跡には、付近に竪穴住居などは存在せず、土器などもほとんど出土しない。製錬作業に従事した人々が製錬遺跡で生活した痕跡は認められないといえそうである。また、精錬鍛冶滓や鍛練鍛冶滓は伴わないようで、つぎの工程である精錬は製錬遺跡ではおこなわれていなかったようである。そして製鉄原料となる鉄鉱石や砂鉄、もしくは燃料となる木材が得やすいためか、この工程の遺跡は丘陵部に位置し、しかも操業形態に規定されてか、丘陵部でも谷状の斜面部に存在する。備中南部の高梁川、足守川流域の製錬遺跡で最も古いものは総社市せん引き遺跡で、６世紀後半の製鉄炉、横口付の炭窯、斜面を削平した作業場などが複数検出されており、比較的規模の大きなものである(3)。同じく総社市にある西団地遺跡群は６世紀末から７世紀にかけての製錬遺跡で、同じ丘陵部上で製鉄炉62基、炭窯16基、作業場18ケ所が検出されており、かなり大規模なものである(4)。これらの他に総社市長砂遺跡(5)、同青谷川遺跡(6)、倉敷市菅生小学校裏山遺跡(7)のように製鉄関連の遺構や遺物が比較的少なく、小規模な操業であったことが推定されるものもある。

製錬によって生成された荒鉄（表皮スラグや捲込みスラグ、炉材粘土らの不純物を含む原料鉄）(8)は、小割り選別された後、成分調整をおこなう精錬鍛冶、そして鉄器の製作をおこなう鍛練鍛冶の工程へと移行する。これらの３つの工程は単一の遺跡内でおこなわれている場合が多いようで、とりあえず１つの工程と考えておきたい。この工程を示す遺跡は、県北の美作地域においては丘陵部の調査で多くみつかっており、そのうち津山市大畑遺跡で検出された一般的住居２軒、作業的住居２軒、段状遺構２棟といった遺構の構成が、この工程をおこなう集落の基本的な単位であると指摘されている(9)。そして、その単位が複数集まって大規模な鍛冶遺跡となったものが、津山市狐塚遺跡で検出されている(10)。

高梁川、足守川流域では、この工程を示す遺跡の調査例はそれ程多くないが、沖積地の集落で検出されている。そのうち規模が大きく、内容も比較的明らかになっているのが総社市窪木薬師遺跡である(11)。窪木薬師遺跡では多数の鉄塊系遺物、精錬鍛冶滓、鍛練鍛冶滓、鍛造剥片、粒状滓の他に荒鉄から鉄を抽出した後の廃滓が出土している。廃滓の存在は、窪木薬師遺跡で本来は製錬サイドの作業内

容である荒鉄の小割り選別の作業工程がおこなわれたと考えられ、このことは丘陵部の製錬遺跡で生成された荒鉄はすぐに鍛冶集落へ移動されたことを示している(12)。

窪木薬師遺跡の北4kmのところには大規模な製錬遺跡である総社市せん引き遺跡がある。鉄滓の分析から、同遺跡へ荒鉄を供給した可能性が推定されている大規模な製錬遺跡である総社市西団地遺跡群は西へ10kmのところにある。製錬遺跡と鍛冶遺跡の関係を具体的に示すような調査例はないものの鉄滓の分析から、窪木薬師遺跡のような大規模な鍛冶遺跡への荒鉄の供給は、西団地遺跡群のような大規模な製錬遺跡が担っていたと推測されている(13)。

鍛冶集落については竪穴住居が存在し、製鉄関連の遺物以外に土器などの日常生活に用いるものも多数認められることから、一般的な集落と同じで、製鉄作業に従事する人々の日々の生活基盤であったと思われる。しかし、製錬遺跡周辺については、土器などの遺物や住居跡などが付近では検出されないため、少なくとも製錬の工程については作業空間と生活空間とは別であったと考えられる。

ところで、吉野口遺跡で検出した6世紀後半の製鉄関連の遺構と遺物は、鉄滓溜まり、鍛冶炉と推定される焼土塊、鉄滓、フイゴの羽口である。鉄滓溜まりから出土した鉄滓は分析の結果から、鍛冶原料となる荒鉄を小割り選別した残滓ということであり（附章Ⅳ参照)、また、鉄滓溜まりからフイゴの羽口が出土していることから、当遺跡は窪木薬師遺跡のような鍛冶遺跡と考えられる。検出された竪穴住居には、埋土から鉄滓を出土するものもあるが、その量はわずかである。また製鉄関連の遺構や遺物は、調査区の南東部付近に偏る傾向が看取され、調査区外に製鉄関連の遺構の集中するエリアが存在する可能性も推測されるが、鉄滓の出土量は窪木薬師遺跡ほど多くないことから、一般的な集落内でおこなわれた鍛冶といった性格が強いと考えられる。ただ荒鉄の小割りが集落内でおこなわれていることから、窪木薬師遺跡ほどは大量でないものの鉄器の製作をしていたと考えてよい。したがって吉野口遺跡での製鉄は、「再加工や打ち直し」(14)をおこなうといったイメージよりも、小規模ながらも鉄器生産をおこなっている集落と考えられる。

2 吉野口遺跡への荒鉄の供給源について

製鉄の工程は、遺跡における鉄滓の出土する種類から製錬の段階と、本来は製錬作業に付随する荒鉄の小割り選別の作業も含んだ精錬、鍛練鍛冶の2段階に分けられる。製錬の段階に関する遺跡は、せん引遺跡や西団地遺跡群のように多くの製錬炉と炭窯が存在する大規模なものと、総社市長砂遺跡や同市青谷川遺跡のように炉は検出されていないが、炭窯の数や鉄滓の量から比較的小規模な操業をおこなっていたと予想されるものとがある。大規模なものは製錬炉、作業場、炭窯で構成される工房が複数あり、短期間での大量生産を指向していると考えられ、小規模なものはそれ程多くの生産を指向していないものと考えられる。

精錬、鍛練鍛冶の段階に属する遺跡にも、窪木薬師遺跡のように165kgもの多量の鉄滓が出土し、鍛冶関連の遺構も多数検出されるような大規模なものと、吉野口遺跡のように10kg未満ほどの鉄滓しか出土しないような小規模なものとがある。県南部の沖積地において鍛冶関連の遺跡の全体像を把握した例はないが、県北である程度その具体的な様子を確認している。その成果によると、鍛冶遺跡は一般的住居2軒、作業場的住居3軒、段状遺構2棟といった組み合わせが基本的な単位で、この単位が複数結合したものも検出されている(15)。基本的な単位とされるものがここで小規模なものとしたものに、基本的な単位を複数内包したものが大規模なものとしたものに対応するようにも思われる。しかし県北の場

合、この段階の遺跡も製錬遺跡と同様にその多くが丘陵部に位置し、両段階の遺構を同地点で検出した例はないものの、狐塚遺跡のように付近に製錬炉の存在が予想される鍛冶遺跡の例もある(16)。

一方、高梁川、足守川流域の鍛冶遺跡は沖積地に立地しており、製錬段階の遺跡の立地する丘陵部とはやや離れた地点に立地している。窪木薬師遺跡は遺構の配置や製鉄関係の遺物の集積状況から、専業的に鉄生産をおこなった集落という評価もあるが(17)、沖積地に立地すること自体は、製鉄に関連する理由からというよりも、おそらくその遺跡の存立基盤が水田経営と無関係でなかった点にあると思われる。県北のように、鍛冶遺跡も製錬遺跡と同じように丘陵部に位置することは、その遺跡内に一般的な住居とされる竪穴住居が含まれるものの、立地の点では水田経営から分離され、より製鉄への専業化を指向しているといえる。したがって、高梁川、足守川流域の鍛冶遺跡が一般集落と同様に水田経営を意識していると思われることから、県北の鍛冶遺跡のように集落そのものを鍛冶集団としてとらえることは難しいと思われる。

この他、厳密には鉄生産の遺跡とはいえないかもしれないが、ほとんど鉄滓も出土せず小規模な鍛冶炉だけが検出される遺跡もある。これは、再加工や打ち直しを集落内でおこなう村方鍛冶と考えられている(18)。

製錬遺跡と鍛冶遺跡との関係は明確でないが、鉄滓の分析から、西団地遺跡群で生成された荒鉄が窪木薬師遺跡へ搬入されたことも推測されており(19)、大規模な製錬遺跡には大規模な鍛冶遺跡、小規模な製錬遺跡には小規模な鍛冶遺跡がそれぞれ対応すると思われる。そして製錬遺跡については、土器などの生活用品や住居などが検出されていないことから、日常生活の場となっていたとは考えられず、また前述したように荒鉄が小割り選別もおこなわれず鍛冶遺跡へ移動していることは、両者の間に集積と配分を調整するような過程はないことを示しているように思える。つまり製錬遺跡は付近の集落によって操業されていたのではなく、おそらく荒鉄が直接搬入された痕跡の認められる鍛冶集落が、製錬遺跡をも直接操業していた可能性が高いと考えるのである。そうすると高梁川、足守川流域の鍛冶集落は、製鉄原料である荒鉄の生成から製品の加工までの一連の工程を各自でおこなっていたということになる。そして、吉野口遺跡のような小規模な鍛冶遺跡でも荒鉄の小割り選別がおこなわれていることから、小規模な鍛冶遺跡も製錬遺跡と直接繋がっていたと考えられ、規模の大小に関わらず同地域の鍛冶遺跡は荒鉄を自前で生成していたと推定される。

そこで、吉野口遺跡の荒鉄を生成していた製錬炉の位置と規模について若干検討しておきたい。吉野口遺跡周囲の丘陵部では、発掘調査がおこなわれていないこともあって、製鉄関係の遺跡は確認できていない。ただ高梁川、足守川流域の製錬関係の遺跡には、近接して後期古墳が存在している場合が多い。大規模な製錬遺跡の部類に入る西団地遺跡群では近接して50基の後期古墳が認められており、同じくせん引き遺跡でも10基が調査されている。小規模な製錬遺跡である長砂谷製鉄関連遺跡には1基の後期古墳が、同じく青谷川製鉄関連遺跡には2基の後期古墳が認められる。大規模な製錬遺跡には古墳の数も多く、小規模な製錬遺跡には古墳の数も少ないというような傾向が認められそうである。ただ、西団地遺跡群内の古墳のうち、野宮東平1号墳、板井砂奥11号墳では石室の中から鉄滓が出土しているが、それが分析の結果砂鉄製錬滓であることが判明し、周辺でおこなわれている製錬が鉄鉱石を用いていることから、古墳と近接する製錬遺跡との関係を否定的にみる考えもある(20)。しかし、流域が異なる岡山市津高団地遺跡群の猪ノ坂南遺跡、奥池遺跡でも製錬炉の付近に15基の後期古墳が存在しており(21)、みそのお古墳群でも製錬炉と後期古墳の両者が確認されている(22)。西団地遺跡群でも古墳の前庭部と

製錬炉が重複していたり、炭窯を避けて古墳を築いている例があり、古墳の築造と製錬関連の遺構とは相互に意識しているとみられる点がある。このことは、県南部において製錬遺跡と後期古墳が同じ地点に存在する例が多いことから考えても、後期古墳と近接する製錬遺構とが無関係でなかったということを示しているように思える。

一応、後期古墳と製鉄関連の遺跡とが有機的な関係があったと考えて吉野口遺跡周辺の後期古墳の分布をみてみると（図254)、周囲の丘陵の谷部に単独、もしくは2～3基しかないような小規模な古墳群が形成されていることが認められる。吉野口遺跡の南側にある谷部は比較的大きく、この谷部には吉備津神社が存在している。後期古墳は現況では境内に1基認められるだけであるが、かつてはもう少し多くの古墳が存在した可能性はある。しかし、大規模な古墳群を形成していた痕跡は認められず、存在していたとしても数基程度の小規模な古墳群であったと思われる。つまり、吉野口遺跡の周辺には大規模な後期古墳群は存在しないということがいえそうである。このことは、後期古墳の付近に埋没していることが予想される製錬遺跡の規模もそれほど大きくなかったことも示しているとも考えられ、吉野口遺跡に荒鉄を供給したのは、周辺の丘陵部でおこなわれた比較的小規模な製錬遺跡からのものであったという想定が可能と思われる。

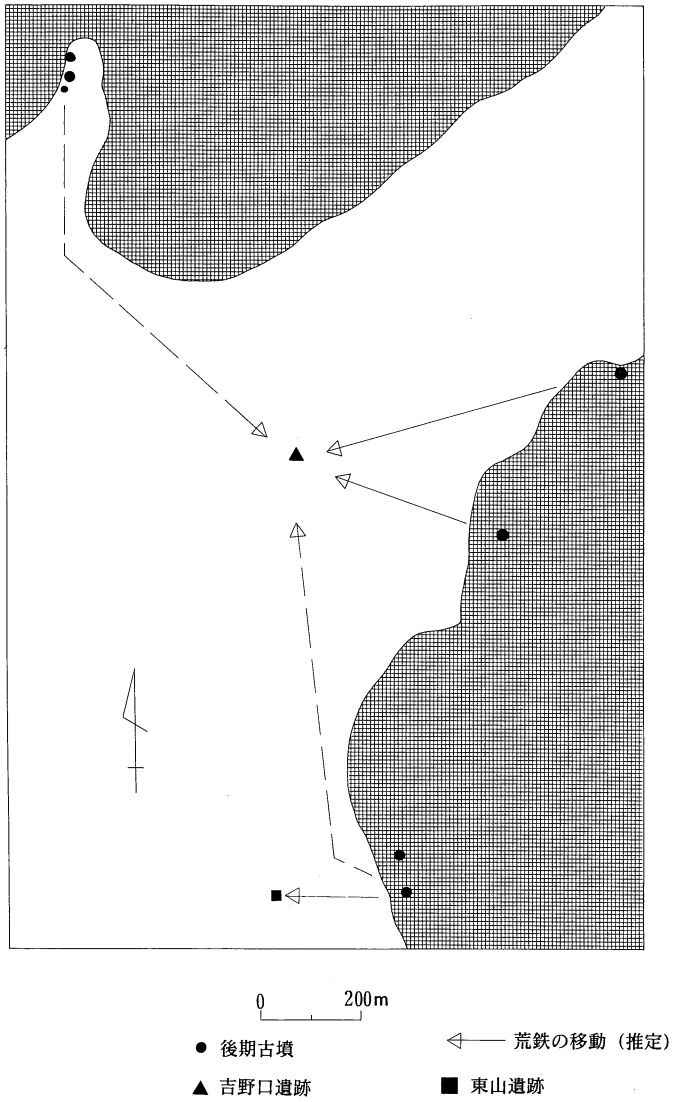


図254 後期古墳分布図

3 吉野口遺跡の製鉄関連遺構の性格

6世紀後半の吉野口遺跡の精錬、鍛練鍛冶遺構に関して若干整理してみた。製錬遺跡と鍛冶遺跡との関係は、製錬遺跡で生成された荒鉄がほとんど手を加えられずに鍛冶遺跡へ移動していることや、製錬遺跡に生活痕跡が認められないことから、鍛冶遺跡が製錬遺跡をも操業していた可能性が高いと考えられた。そして製錬遺跡に近接して築かれていることの多い後期古墳についても、製錬、鍛冶遺跡と一体のものであることが予想された。また窪木薬師遺跡と吉野口遺跡の例から、鍛冶遺跡には大規模なものと小規模なものとがあり、両者は操業規模の差に関係なく製鉄原料である荒鉄の生成と製品の製造までを一連におこなっていることが推定された。それと、高梁川、足守川流域の鍛冶遺跡は沖積地に立地していることから、農業集落といった側面を具備していると考えられ、県北のように丘陵部に立地し、より製鉄作業への専業化を指向しているのとは異なる様相であることがうかがわれた。

4、5世紀代の製鉄関連遺跡の数は序々に増えつつあるが、その例は6世紀以降に比べるとかなり少ない。高梁川、足守川流域の地域では4、5世紀には全長100mをこえる大型古墳が連綿と築かれており、それらはこの地域に求心的な集団関係が成立していたことを示している。この時期の製鉄の操業主体や形態についてはよくわからないが、6世紀以降と比べ製鉄関連の遺跡数が極めて少ないことが当時の製鉄遺跡の数そのものが少ないことを反映しているとすると、例えば三ツ寺Ⅰ遺跡で検出された豪族居館内の製鉄遺構のように(23)、大型古墳を造営した首長（仮に大首長と呼称する）などがある程度独占的におこなっていた可能性も想定されてくる。この時期の大型古墳や、あるいはその陪塚から出土する多量の鉄器の存在は、大首長が鉄器の保有を独占していたことを示しており、その背景には鉄器の製作そのものをも掌握していたということなのではなかろうか。

しかし6世紀になると、この地域ではこうもり塚古墳以外は大型古墳の築造はみられず、4、5世紀のような大首長の系譜は明確でなくなってくる。その一方で、丘陵部には数多くの後期古墳が築かれるようになり、製錬関連の遺跡数も増加する。県南部の沖積地周辺において6世紀に造墓階層が拡大するのと製鉄遺跡が増加することは相関関係にあり、吉野口遺跡の製鉄関連の遺構は、そういった後期古墳を築造し得る基盤となった鉄生産の一端を示していると考えられる。ただし、荒鉄を生成するために必要な鉄鉱石や砂鉄などの原料採集の実態についてはよくわからない。しかしながら高梁川、足守川流域において、製錬遺跡、鍛冶遺跡、後期古墳は先に推定したように、相互に有機的なつながりをもって存在していたと思われる。

一方、製鉄遺跡の増加についてはその技術的な点からも渡来系氏族との関連が推定されている(24)。高梁川、足守川流域については、西から律冷制下の行政単位である下道郡、窪屋郡、賀陽郡、都宇郡の4郡が存在する。後期古墳はこの郡単位に「玄室平面積10平方メートル前後以上あるいは玄室空間の体積三〇立方メートル前後以上」の石室規模を有する古墳が、同一時期に1基の割合で築かれていることが指摘されている(25)。6世紀後半には律令制下の行政単位である郡の範囲が、ある程度在地で形成されていた政治的なまとまりを示していると推定される。

奈良時代に、この地域に在住した人々の氏姓の一端を示した史料が『大税負死亡人帳』である。この史料は大税を未返済で死亡した個人の名を記載したものであるため、戸籍や計帳と異なり当時の断片的な様相しか知ることはできないが、行政単位ごとに在住した氏姓の傾向をある程度読み取ることができる。この史料では、吉野口遺跡の存在する賀陽郡板倉郷の南の同郡庭瀬郷に「忍海漢部」を氏姓とするものが3人認められる。これは、鉄生産に関連する渡来系氏族の氏姓といわれている(26)。「忍海漢部」以外に鉄生産に関連する渡来系氏族の氏姓は「東漢人」、「西漢人」で(27)、この2つの氏姓は都宇郡、賀陽郡にもみられ、『三代実録』によると下道郡にもその氏姓をもつものがおり、4郡のうちの3郡にまで鉄生産に関する渡来系氏族の存在が認められる。このことは、この地域で多数調査されている製鉄関連遺跡の様相とも対応しており、当地域で製鉄が盛んにおこなわれるようになるのは、渡来系氏族の関与があった可能性を示唆していると思われる。

ところで、現存史料という非常に限定された視点からではあるが、6世紀後半の大型古墳であるこうもり塚古墳の築かれた窪屋郡にだけは、鉄関連のものも含めて渡来系氏族の存在が認められない。しかし7世紀中葉には、鉄・鍬が窪屋郡から貢進されたことが『飛鳥木簡』の中にあり(28)、窪屋郡で製鉄をおこなっていることはほぼまちがいないと思われる。4、5世紀段階で、製鉄関連の遺跡があまりみつかっていないことについては、大型古墳を築造した大首長に鉄生産をも独占されていた可能性を推測

したが、同様に6世紀でも大型古墳を築造した首長の直接的な基盤となった窪屋郡では、その地域の鉄生産を含めた手工業生産は、そうした首長のもとに独占されていたと解釈できないであろうか。つまり、大首長の直接的な影響圏以外では、渡来系氏族を介して製鉄などの手工業生産が拡散されていったことを、窪屋郡以外に渡来系氏族が分布していることは、示していると考えるのである。そしてこれらの渡来系氏族の移入は、受容した在地に起因する要素も無視できないが、渡来系氏族を統率する畿内中枢部との関係が最も考慮されるのではないかと思われる。

（草原）

注

1 花田勝広「吉備政権と鍛冶工房－古墳時代を中心に－」『考古学研究』第43巻第1号 1996年
2 大澤正己「大開古墳群・大開遺跡出土鉄滓の金属学的調査」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第15集 1994年
3 武田恭彰「鬼ノ城ゴルフクラブ造成に伴う発掘調査概報」『総社市埋蔵文化財調査年報』1 1991年
4 村上行雄ほか「水島機械金属工業団地共同組合西団地内遺跡群」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』9 1991年
5 村上行雄「長砂谷1号墳、長砂谷製鉄関連遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』6 1988年
6 前角和夫ほか「青谷川古墳群、青谷川製鉄関連遺跡」『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』8 1990年
7 中野雅美ほか「菅生小学校裏山遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』81 1993年
8 大澤正己「窪木薬師遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86 1993年
9 小郷利幸ほか「大畑遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第47集 1993年
10 河本清「狐塚遺跡」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告』第12集 1974年
11 島崎東ほか「窪木薬師遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』86 1993年
12 注8
13 注8
14 注1
15 注4
16 注10
17 注11
18 注1
19 注8
20 注4
21 乗岡実「岡山市域における最近の発掘調査」『古代吉備』第13集 1991年
22 椿真治ほか「みそのお遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』87 1993年
23 下城正ほか「三ツ寺Ⅰ遺跡」『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集 1988年
24 注1
25 近藤義郎『前方後円墳の時代』岩波書店 1983年
26 加藤謙吉「西漢氏の存在形態」『古代王権と祭儀』吉川弘文館 1990年
27 注26
28 潮見浩「鉄・鉄器の生産」『岩波講座日本考古学』3 1986年

参考文献

大澤正己「古墳出土鉄滓からみた古代製鉄」『日本製鉄史論集』たたら研究会 1983年
松井和尊「鉄生産」『古墳時代の研究』5 雄山閣 1991年
古瀬清秀「鉄器の生産」『古墳時代の研究』5 雄山閣 1991年
北野 重「柏原市所在の製鉄関連遺跡」『古代を考える』53 古代を考える會 1991年
光永真一「製鉄と鍛冶」『吉備の考古学的研究』下 山陽新聞社 1992年
神谷正義『西祖山方前遺跡』岡山市教育委員会 1994年
河瀬正利「わが国古代の鉄研究をめぐって」『展望考古学』考古学研究会 1995年

Ⅳ　奈良、平安時代の遺構面

古代に属する時期の遺物の大半は、溝２と溝３から出土したもので、その他Ｐ189からもややまとまって出土している。これらの土器群は、２群に大別できる。溝２、３の埋土から出土したものと、溝２、３の上面およびＰ189から出土したもので、前者が奈良時代、後者が平安時代に相当する。溝２、３と方向を同じくする建物や竪穴住居状遺構も、その方向性や出土した土器から奈良時代と考えられる。つまり当該調査区では、奈良時代の遺構が主体であるということがいえる。ここでは、まず出土した土器を整理して年代的な位置付けを確認し、遺構の性格を若干追及したいと思う。

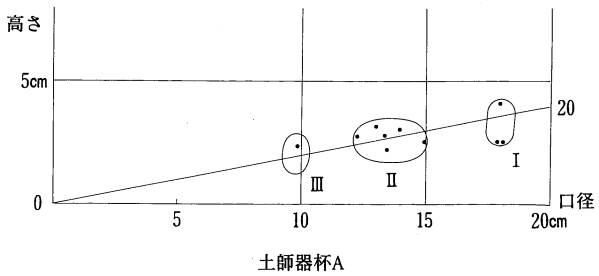
１　奈良時代

奈良時代に属する土器の大半は、溝２と溝３の埋土から出土した。両溝の埋土はよく似ており、また一定の間隔で平行していることや、出土する土器についても時期差がほとんど認められないことから、同時に存在していたと考えてよいと思われる。また、両溝とも埋土は１層で、溝が機能していた時点での堆積層や、溝廃絶後徐々に埋没したことを示すような土層は認められなかった。したがってこの両溝は、短期間のうちに埋没したものと思われ、埋土に含まれている土器の大半も比較的単一の時期を示すと考えてよいと思われる。

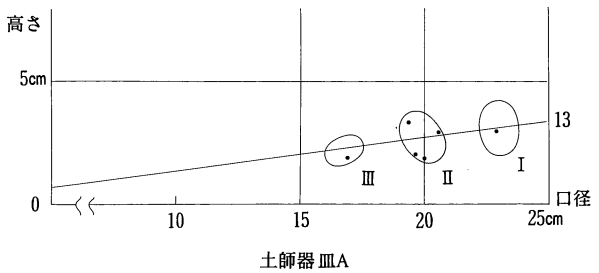
以上の発掘調査時の所見から、両溝の埋土中の土器を単一時期のものとし、土器を分類してみる。分類は土師器と須恵器をそれぞれの器形ごとに分け、さらに同一器形であっても法量の違いにより器種分化が認められるものを、大きい方からⅠ種・Ⅱ種・Ⅲ種…というように分類する。

（１）土師器（図256）

まず土師器については、畿内からの搬入品と思われるものを除いては、食器類のほとんどに丹を塗布している。丹塗りの状況を器の内面と外面に分けてみてみると、内面は全て丹塗りされているが、外面については全体に施すものと、底部や底部付近には施さないものとがある。また、底部外面の調整についても、ヘラケズリの後ヘラミガキを施すものと、ヘラミガキを省略するものが認められ、量的には後者の方がやや多い。また、ヘラミガキを施していても粗く雑になり、ヘラミガキ前のヘラケズリが観察できるものも目立っている。内面に暗文を施しているものもいくつか認められるが、量的には少ない。その内容も連弧状の暗文だけのものが主で、放射状の暗文については非常に少なく、あったとしても１段のものばかりである。



土師器杯A



土師器ⅢA

図255　吉野口遺跡土師器法量表

《杯》　高台のつかない杯Ａが３種類認められる（図255）。Ⅰ種は口径18cm前後、器高３～４cm、Ⅱ種は口径12～15cm、器高２～３cm、Ⅲ種は口径10cm前後、器高２cm前後である。径高指数（器高／口径×100）は20である。高台のつく杯Ｂは１点認めら

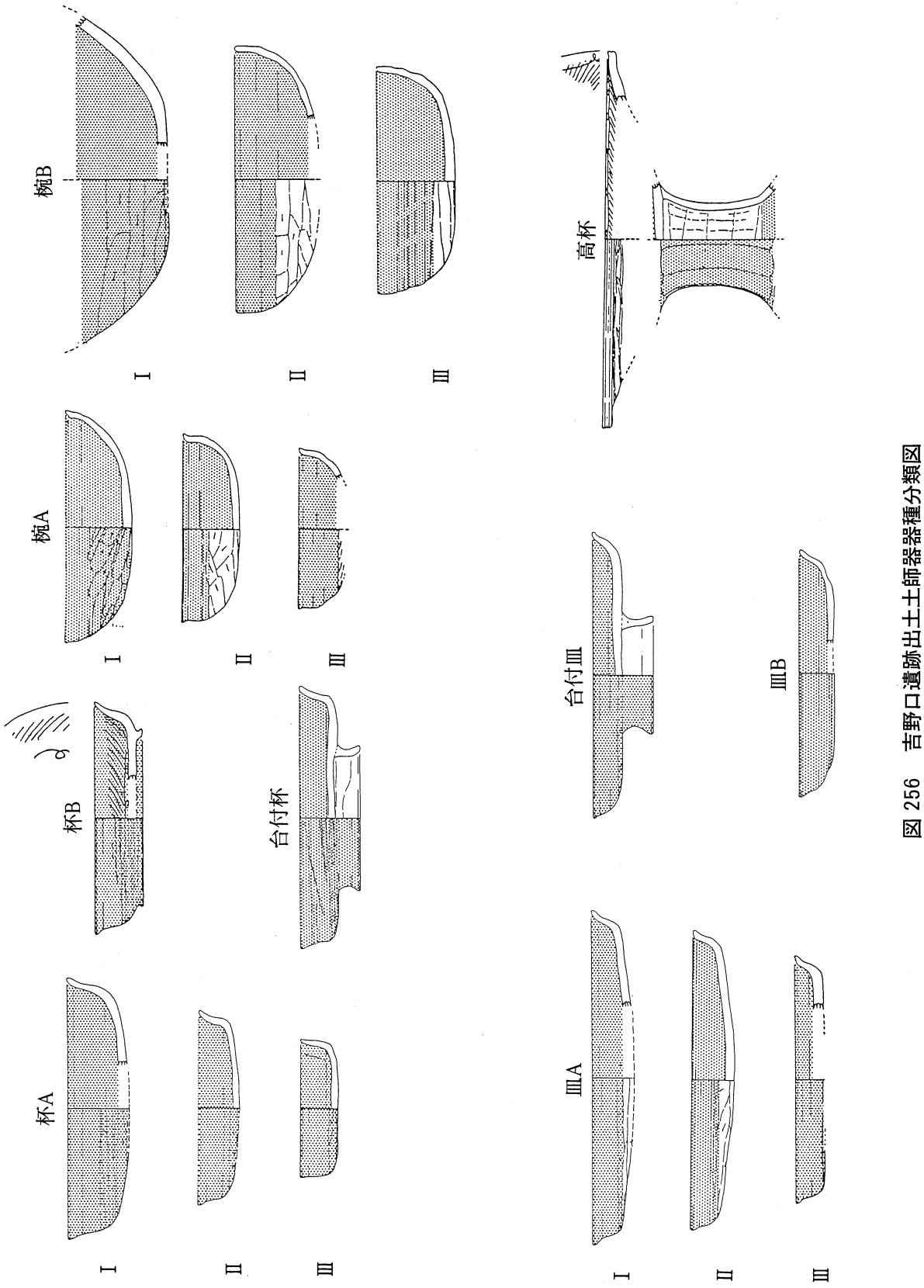


図 256　吉野口遺跡出土土師器器種分類図

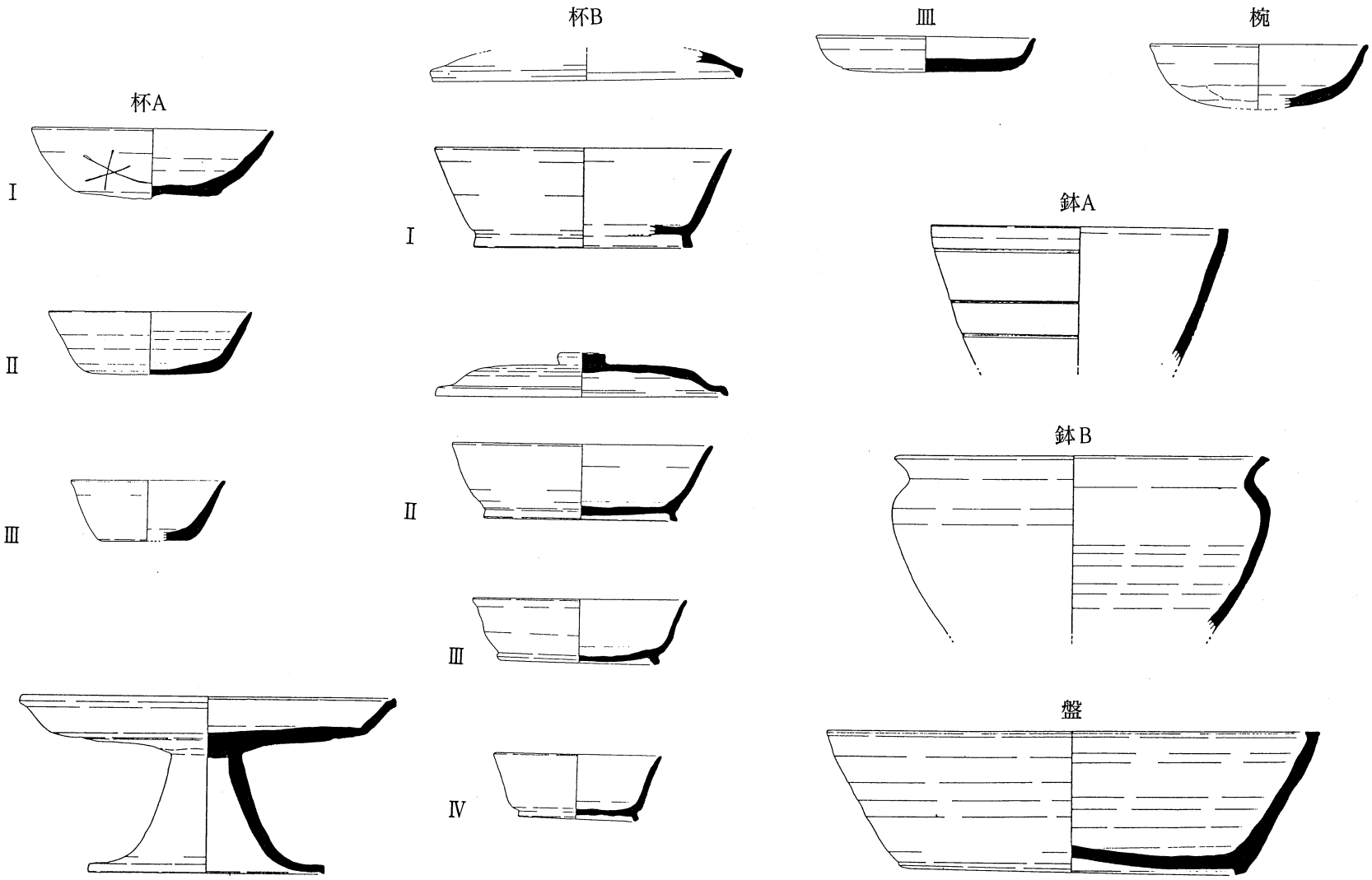


図 257　吉野口遺跡出土須恵器器種分類図

れるだけであり、当該調査区の土師器の杯は杯Aが主体といえる。これは杯Bが主体となる須恵器の構成とは対称的であり、須恵器と土師器の補完的関係を示しているとも考えることができる。この他、畿内ではあまりみられない器形として、脚台のつく杯がある。

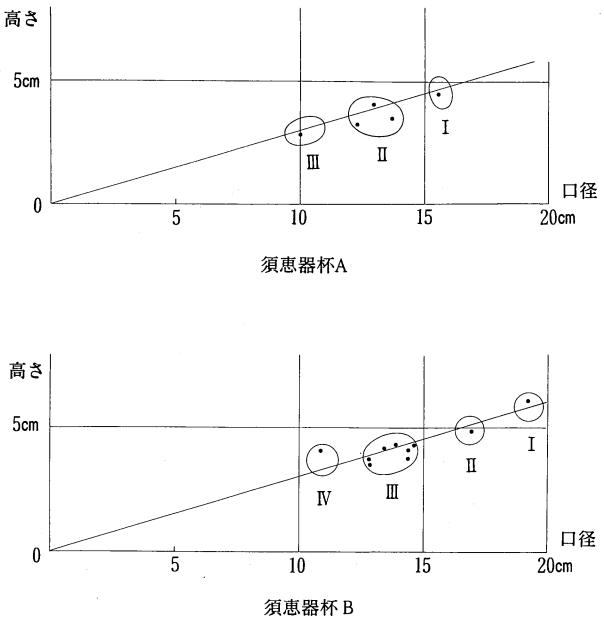


図258　吉野口遺跡須恵器法量表

《皿》　口縁端部を鋭く屈曲させる皿Aと、屈曲の鈍い皿Bとがある。皿Aは3種類認められる(図255)。Ⅰ種は口径23cm前後、器高3cm前後、Ⅱ種は口径19～21cm、器高2～4cm、種は口径17cm前後、器高2cm前後である。径高指数は13である。皿Bは2種類になる可能性もあるが、基本的には口径11～12cm、器高2cm前後の1種類だけである。この他、杯と同様に脚台のつく皿がある。

《椀》　口縁部を屈曲させる椀Aと、口縁端部を丸くおさめる椀Bとがある。椀Aは3種類認められ、Ⅰ種は口径16cm前後、器高4.5cm前後、Ⅱ種は口径13cm前後、器高4cm前後、Ⅲ種は口径11cm前後、器高3cm前後である。椀Bは一応3種類に分かれると考えているが、全形のわかるものはⅢ種のみで、口径15cm前後、器高5cm前後である。Ⅱ種の器高はわからないが、口径19cm前後である。Ⅰ種と推定される（70）は、片口の鉢となる可能性もあるが、一応ここでは椀BⅡと考えておきたい。

《高杯》　断片的にしかわからないが、偏平で大きな皿状の杯部に短かく太い脚部がつくと思われる。さらに、脚部は粘土紐を巻き上げて形成しており（a技法）(1)、杯部と脚部は密着接合し、接合部に粘土紐を巻きつけることはしない。脚部の内壁には接合時に脚を絞ったため生じた縦のしわがある。杯部内面には暗文が認められる。

《蓋》　杯Bの蓋と考えられるものが若干出土しているが、どれも破片のため全形は不明である。

《甕》　口縁端部に面取りをおこない、外湾する口縁部をもつ甕Aと、同じく口縁端部に面取りをおこない、内湾する口縁部をもつ甕Bと、口縁端部を丸くおさめる甕Cとがある。甕A、Bは外面ハケメ、内面はナデもしくはハケメ、あるいはヘラケズリと調整がやや多様である。甕Cは内外面ナデ調整である。いずれにせよ、頸部に鍔のつく羽釜形態のものは認められないようである。

《甑》　一対の上向きの把手がつくもので、外面はハケメ、内面はナデ調整をおこなう。

《竈》　大小の2種類がある。小さいものは焚口の周縁に粘土を貼りつけて庇としたもので、水平に突き出た角状把手がつく。大きいものも焚口周縁に粘土を貼りつけて庇とし、下向きに把手がつく。粘土を貼りつけて庇とする形成手法と、出土した甕の口縁部の形状は、指摘されている竈と甕の組み合わせと矛盾しない(2)。

《製塩土器》　器壁が薄く口縁部が内傾し、底部が尖り気味になるものが主体であるが、1点だけやや器壁が厚く受口状に外反する口縁部をもつものがある。内外面ともナデ調整されており、指頭圧痕が明瞭に観察される。前者は、備讃瀬戸地方の製塩土器の土器型式である「倉浦式」に相当すると思われる(3)。破片数は多く、図化できたものよりも実際の個体数は多くなりそうである。この時期の製塩土

器については、生産遺跡以外では美作国府(4)や国津、郡津と推定される倉敷市酒津－水江遺跡(5)のような官衙関連遺跡で出土する他、浅口郡金光町上竹西の坊遺跡の土壙1(6)など官衙以外の遺跡からも出土している。畿内においても奈良時代の遺跡ではほとんど普遍的に出土しており、特に8世紀前半から中頃にかけてその例が急増しているという指摘がある(7)。製塩土器によって焼成された固型塩（焼塩）の用途を、祭祀関係や手工業用関係の原材料に限定する考えもあるが(8)、平城京や長岡京における製塩土器の出土地点を検討した結果、必ずしも特別な遺構に伴うのではないことが明らかにされ、普通の食用に用いたとする考えもある(9)。当該地における同時期の製塩土器を出土する消費地関係の遺跡はそれ程明らかになっていないが、西の坊遺跡の例などから出土地点が官衙などに限定されるということはなさそうである。

（2）須恵器（図257）

《杯》　高台のつかない杯Aが3種類ある（図258）。Ⅰ種は口径15cm前後、器高5cm前後、Ⅱ種は口径12～14cm、器高3～4cm、Ⅲ種は口径10cm前後、器高3cm前後である。径高指数は30である。高台のつく杯Bは4種類ある（図258）。Ⅰ種は口径19cm前後、器高6cm前後で、蓋が確実に伴う。Ⅱ種は口径17cm前後、器高5cm前後、Ⅲ種は口径13～14.5cm、器高3.5～4.5cmで、蓋が確実に伴う。Ⅳ種は口径10cm前後、器高3cm前後である。径高指数は30である。高台のつかない杯Aは、似た形態である土師器の杯Aと同様に3種類に分けられる。しかし、Ⅰ種としたものはⅡ種に含まれる可能性がある。また土師器の杯の場合は、杯Bの数が非常に少なかったが、須恵器の場合はその逆で、杯Bの方が圧倒的に多い。都城の場合、土師器と須恵器は法量による互換性が確立していることが指摘されているが(10)、吉野口遺跡の場合、須恵器と土師器がそれぞれ器種の少ない分を補完している可能性が推定される。

《皿》　皿は1点だけで、土師器の最も小さいものよりさらに小ぶりである。

《鉢》　形態によりA、Bに分けられる。鉢Aは口縁部が逆「ハ」字形に開き、口縁端部上面に平坦面をもつ。外面には沈線が数条めぐる。鉢Bは「く」字形に外反する口縁部をもつ。鉢A、Bとも砂粒があまり含まれない精良な胎土である。

《椀》　全形のわかるものは1点だけで、法量的には土師器の椀AⅡに相当する。

《盤》　全形のわかるものは1点だけで、断面逆台形の高台をもち、口縁端部上面は平坦でやや内側に肥厚する。8世紀前葉の土器群を出土した西谷遺跡の盤をみると、高台のつくものはなく、高台の有無が時期差を示す指標の1つになる可能性がある。

《高杯》　全形のわかるものは1点だけで、ラッパ状に開く脚部と、外反する口縁部をもつ偏平な杯部からなる。

以上のように、溝2、3から出土した土器は、食器類については法量による器種分化が顕著である点と、土師器に暗紋が施されるものが少なく、かつ施された暗紋も放射状暗紋が1段と連弧紋、もしくは連弧紋のみであるといった特徴が看取される。また土師器の外面のヘラミガキも省略されるものが目立っており、施されたとしても粗く、その間からヘラケズリが確認されるようなものが多い。須恵器の壺は断片的なものしかないが、胴部の稜線が明瞭なものと、やや丸くなっているものの両者が存在するようである。これらは平城宮Ⅲとされる時期の特徴と共通する(11)。この遺構面に伴う土壙であるP332から平城宮Ⅲの土師器皿が出土しており(12)、出土した溝の土器群の時期と矛盾しない。これらのことから吉野口遺跡の奈良時代の遺構面は、平城宮Ⅲの時期であるといえよう。平城宮Ⅲ期は、SK八二〇やS

K二一〇一出土の土器を基準に設定されており、それらに伴った木簡から天平末（７４９）年頃とされている(13)。すなわち、吉野口遺跡の奈良時代の遺構面は８世紀中葉と考えることができよう。

（３） ８世紀前後の器種分化

吉野口遺跡から出土した土器群の特徴として顕著なのは、①土器の主体をなすものが食器であること、②須恵器と土師器の比率がほぼ半々であること、③畿内からの搬入品の土師器があること、④食器については須恵器も土師器も同一器形の法量による器種分化がかなり認められるということである。このうち、④の法量による器種分化といった点については、律令制を基軸とする国家体制の出現と整備を反映させた「律令的土器様式」の指標の１つとなっている(14)。食器類の多様な器種分化や法量の分化は、律令国家を構成する大量の官人層の存在を示しており、この土器様式の地方への波及は、官人的な生活形態が、限られた場所にせよ地方へも確実に浸透していることを示している。

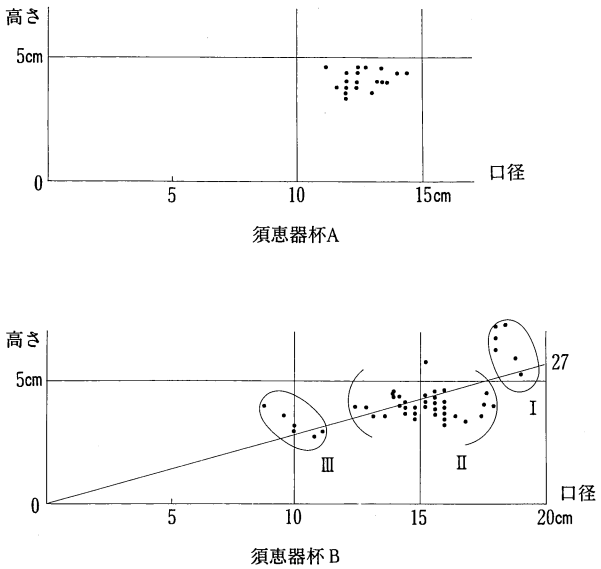


図259　西谷遺跡法量表

８世紀中葉の吉野口遺跡については、「律令的土器様式」の要素が比較的顕著に認められる。ただ地方において、この時期の須恵器に「律令的土器様式」がある程度一般的に認められるものの、土師器については部分的な模倣以外積極的な影響は認められないと考えられており(15)、吉野口遺跡の様相と少し矛盾する。しかしながら、瀬戸内地域は他の地域とは異なり「律令的土器様式」の浸透具合が突出していることを指摘する考えもある(16)。

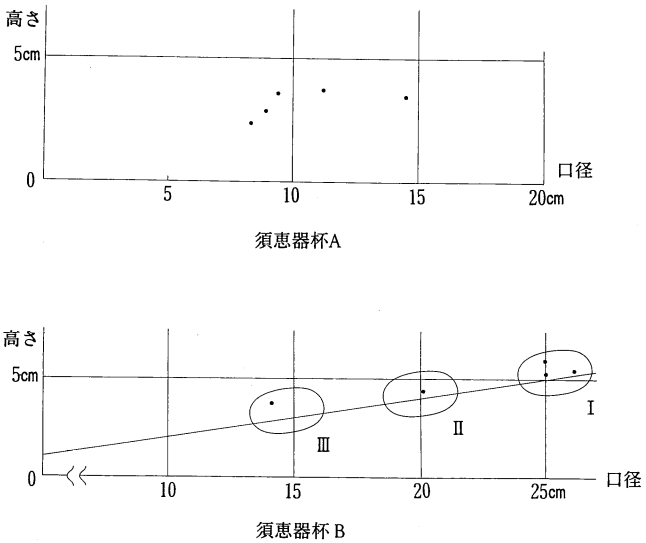


図260　寒風１号窯法量表

そこでここでは、この土器様式の当該域への波及状況を法量の分化を中心的な指標として簡単に検討し、吉野口遺跡の土器の様相が当地域で一般的な状況であるのかどうかを考える材料にしたいと思う。ただし、まとまった該期前後の資料があまりなく、生産遺跡である窯跡とか、生産物の集積場のような非日常的な遺跡から出土した資料を対象とせざるえない。そのため土師器の様相はよくわからず、とりあえず須恵器を主な対象として取り上げることにする。

（４） 各遺跡の様相

吉野口遺跡の土器群よりやや溯る時期の資料が、邑久郡長船町西谷遺跡から出土している。西谷遺跡は背後に存在する邑久古窯跡群に関連する遺跡と推定され、多量の須恵器が粘土採掘壙の中や掘立柱建

物の周辺から出土している(17)。これらの須恵器は、8世紀前葉の平城宮Ⅱ期の所産とされている。この遺跡から出土した土器群のうち、杯Aと杯Bの口径と器高を指標にグラフ化した。(図259) この図をみると、杯Bは3種類に器種分化しており、杯BⅠは吉野口遺跡の杯BⅠに、杯BⅡは吉野口遺跡の杯BⅡ・Ⅲに、杯BⅢは吉野口遺跡の杯BⅣに対応する。一方杯Aは、底部が平らになるものもいくつかあるが、主体は古墳時代の蓋杯の系譜を引く椀状の形態をしたもので、法量分化は杯Bほど明確ではない。つまり8世紀前葉の須恵器については、杯Bに関しては器種分化が認められるものの、杯Aについてはその傾向があまり認められないようである。なお、杯Bの径高指数は27で、吉野口遺跡の杯Bよりも器高が低い。

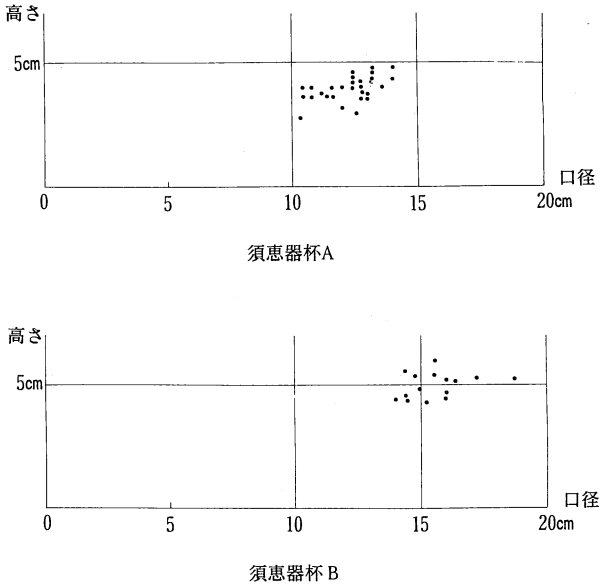


図261　上竹西の坊遺跡灰原2法量表

西谷遺跡より時期が溯る7世紀末の資料が、邑久郡牛窓町寒風1号窯から出土している(18)。そのうち、寒風Ⅲ式の時期とされる杯Bと杯Aについて、口径と器高を指標にグラフ化した（図260)。杯Bは3種類が認められるようであるが、杯BⅠのような大きなものは、吉野口遺跡や西谷遺跡出土のなかには対応するものがなく、杯BⅠは8世紀に入ると欠落するか、もしくは盤に器形が変化したのかもしれない。杯BⅡは吉野口遺跡の杯BⅠに、杯BⅢは吉野口遺跡の杯BⅡに対応する。杯Aは大小2種類がある。杯BⅠと同様に大きい杯Aは8世紀には鉢などの器形に変化したと思われる。つまり、7世紀末の段階は法量による器種分化がある程度認められるものの、8世紀段階のように整然とはしておらず、器形についても未分化な点が看取され過渡的な様相がうかがわれる。また、杯Bの径高指数は21で、西谷遺跡の杯Bよりも器高が低い。

寒風1号窯より時期が溯る7世紀中葉の資料が、浅口郡金光町上竹西の坊遺跡灰原2から出土している(19)。同じように杯Aと杯Bについて、口径と器高を指標にグラフ化する（図261)。杯Aは、西谷遺跡に散見される底部が平坦になるものはなく、法量による分化は認められない。杯Bは、西谷遺跡の杯BⅡに対応するものが大半で、明確な器種分化は認められない。

（5）器種分化の諸段階

以上のことを簡単にまとめてみると、須恵器の杯Aの主体は椀状器形のものから底部が平坦になるものへと8世紀前葉には変化しつつあるが、法量による器種分化は8世紀中葉になるまでは認められない。また、杯Bは7世紀中葉以降に出現するが、器種分化は遅れ7世紀末にならないと認められない。

それでは、杯Aと杯Bで器種分化の認められる時期が異なることについて若干考えてみたい。古墳時代における蓋杯の成形は、粘土紐を巻き上げ大体の形をつくり、その後ロクロにのせ、あらかたの成形をナデ調整でおこない、ロクロからヘラ切りにより切り離す。そして、若干の乾燥期間の後切り離した杯を裏返してロクロに置くが、その際口縁部などを保護するための当て具として同心円文スタンプをロクロの中心に置き、外表面に回転ヘラケズリをおこなっている(20)。ところが、7世紀に入ると成形した後裏返して底部をヘラケズリするという工程が省略されてくる。これは製作過程に変化のあったこと

を示しているとされる。それによると、ロクロに固定された円柱状もしくは円盤状の粘土の上に粘土紐を巻き上げ、成形と調整をおこない、そのまま粘土柱から切り離して完成するもので、従来のものより回転ヘラケズリの工程が少ない分、大量生産を指向でき、法量も比較的同じものをつくることができる(21)。このことは当該期、群集墳に多数副葬される須恵器需要の増加に対応するためと考えることも可能であろう。

ところで、8世紀前葉まで杯Aの主体となるのは椀状形態のもので、これは古墳時代の蓋杯の系譜を引くものである。また、西谷遺跡出土の杯Aの底部外面の観察所見では、ヘラ切り痕の残るものと、2次的な調整をおこなうものとがあるが、前者については底部中心部までヘラ切りが達しており、これは円柱（板）状の粘土の上で成形し切り離した痕跡と考えられる。椀状の杯Aの法量がある程度まとまることからも、7世紀以来の製作工程でつくられていた可能性が推定される。一方杯Bについては、全て高台を貼付する前に底部外面を回転ヘラケズリしており、7世紀に入って杯を成形する際に省略された工程が加わっていると考えられる。

つまり、杯Aと杯Bは8世紀前葉までは法量差による器種分化といった点だけではなく、製作工程にも違いのあった可能性がある。しかしながら、8世紀中葉には両者の違いはほとんどなくなる。8世紀中葉とは、国分寺の造営や大仏開眼に示されるように、律令国家が極めて発展した時期であり、その影響がさらに地方へも浸透したものと考えられる。杯の器種分化に示されるような食器類の器形や器種の増加は、そういった背景により現出したものであろう。杯Aや杯Bの器種分化は、そのような「律令的土器様式」の主体をなすものの1つであり、当該域においてそれらに器種分化がおこなわれる過程が、杯Bの出現→杯Bの器種分化→杯Aの器種分化として段階的にとらえることができることについては、この土器様式が律令国家の支配体制を反映しているとされるだけに、地方に対する律令的支配体制の浸透する段階をある程度示している可能性も考えられる。

土師器については、まとまった資料があまりなくよくわからないが、吉野口遺跡の様相をみるかぎり、8世紀中葉には法量による器種分化が多器形に認められる。断片的ではあるが、山陽町馬屋遺跡の溝1から出土した同期の土器群(22)についても、この傾向がみられる。8世紀以前の土師器については、国府などの特定の遺跡を除いては器種分化が顕著ではないとの指摘がある(23)。8世紀中葉以前の土師器が、7世紀中葉の須恵器の杯Bのように形態だけを模したのか、それとも「律令的土器様式」の根幹の要素の1つである法量による器種分化といったものも具備していたのかは、資料が増えた段階で考えてみたい。

（6）奈良時代の遺構

調査区における8世紀中葉の遺構は、2本を1単位とした溝とその両側に建てられた建物4棟と竪穴住居状遺構で構成されている。竪穴住居状遺構は、通常の竪穴住居よりも極端に小さいことや建物や溝と方向を共有し、しかも単独で存在することから、日常の住居ではなく祭祀などを目的とした特殊な性格のものであったことが推測される。

溝は底部に段差があり、繭状にとぎれた小溝を連結させた形態をしている。このような形態の溝は、津宇郡衙あるいは津宇郡衙関連の官衙に比定されている岡山市津寺遺跡で検出されている。津寺遺跡の溝は、同期の建物を長方形に囲繞している(24)。吉野口遺跡の溝はほぼ直線で、その方向はN－55°－Eである。この方向は、吉備中山と名越山との間のやや幅広の谷状地形上の条里方向と一致する。この条里地割は、備前国と備中国との境付近から備前一宮の平野にかけて分布するもので、この部分は東西に

通る古代山陽道と平行している。条里地割の施工時期については、現況の発掘調査の成果では９～10世紀と考えられており、この付近の条里に関する調査例である総社市南溝手遺跡(25)と岡山市足守庄関連遺跡(26)でも、条里の施工時期は平安時代前半と推定されている。当調査区付近の条里地割の時期も該期とそれ程隔たりがあるとは思われない。したがって、調査区で検出された溝の方向は、条里地割よりも古代山陽道を意識しているということが推定される。

検出された建物は全て調査区の端に位置しており、全形を確実に確認できたとはいいがたい。柱の掘り方の平面形は方形を呈しており、２間×２間以上の建物と、２間×２間以上の総柱建物とがある。建物と総柱建物とは溝をはさんで両側にあり、しかもほぼ同じ位置に建替えられていることから、これらの建物の位置についてはある計画性に基づいて配置されていたことが推定される。このことは、２群の建物の棟方向が、調査区中央の溝方向とほぼ平行であることからも首肯されよう。

以上のように、調査地の面積は非常にかぎられてはいるが、遺構の配置に一定の計画性が認められることから、当遺跡は一般集落とするよりも官衙的な性格を有する遺跡ということが推定される。さらに、この遺跡の様相を考えるために、地方官衙遺跡あるいは関連遺跡とされる遺跡のうち、ある程度その広がりをとらえている例と比較してみたい。

吉野口遺跡のように、ある一定の計画性に基づいた２本の平行する溝が検出された同期の遺跡には、おおよそ２つのパターンがある。１つは、溝により方形に区切られた区画に規定されているもので、岡山市津寺遺跡と山陽町斉富遺跡で検出されている。津寺遺跡の場合は、幅0.9～2.9ｍの繭状にとぎれた溝が、４ｍ間隔で２本平行して約120×93ｍの範囲を方形に囲繞する。その内部には、掘り方方形の柱穴で構成される掘立柱建物がならんでいる(27)。斉富遺跡は遺構の残存状態がよくないが、区画内と推定される建物の方向性と、一部検出された溝から、幅2.5ｍの溝が２本溝間を３ｍあけ、方形区画を囲繞するとされている(28)。以上の２例と比べると、吉野口遺跡の溝は溝自体の大きさや溝間の幅は小規模である。また、溝の両側に建物が存在することから、この溝自体がある区画を囲繞するというのではなさそうである。この他に大きな区画の中をさらに細かく区画している例もある。国庁の位置やその周辺の様子がかなり明らかになっている伯耆国衙では、整然と区画された国庁に隣接して、国庁以外の官舎や付属施設である曹司が溝により区画されている(29)。出雲国衙でも同じ様相が認められる(30)。これらと同じように、吉野口遺跡の溝と建物の周囲にはさらに大きな区画が存在し、当該地はその大きな区画内を細分している部分に相当するということも考えられる。吉野口遺跡の形成された微高地は、吉備中山北麓から北へ鳥嘴状にのびており、調査区付近で幅100ｍ以上と最も幅広くなっている（図247)。地形的にみても、ある程度広がりをもつ区画が存在してもよいように思える。

もう１つのパターンは、平行する２本の溝であっても、区画ではなく、道路の側溝と考えるものである。これについては、さらに２つのパターンに分けられる。１つは、比較的単発的な道路と考えられるもので、大阪府大庭寺遺跡の例がある。多数の掘立柱建物とともに幅0.6～3.4ｍの２本の溝が、溝間約1.6ｍで平行している。この溝間部分は、集落の中の通路と考えられている(31)。

もう１つは、単発ではなく複数の道路が計画的に交錯し、街路を形成しているものである。太宰府はこの例に入り、側溝の心々距離が37.717～37.718ｍである朱雀大路と、それに伴う坊路が確認されている。このうち最も条坊が明確にとらえられているのは、太宰府政庁Ⅲ期とされる10世紀後半以降のことであるが、太宰府政庁Ⅱ期とされる奈良時代から平安時代前半の時期でも、都市部を南北に貫通していた朱雀大路といくつかの街路が確認されている。この街路については、太宰府府庁造営に伴って、都市

部まで含めた計画性が存在していたことが予想されるほど整然としている(32)。

宮都や太宰府のようないわば特殊な官衙遺跡の他に、8世紀前葉から中葉にかけて4町四方もの範囲に街路を伴うと推定される官衙遺跡の例がある。滋賀県野洲町小篠原遺跡で、野洲郡衙に推定されている。政庁域と推定される部分についてはまだ明らかになっていないが、推定政庁域の北側に雑舎群域と官衙風建物群域の存在が街路とともに明らかになっている(33)。

吉野口遺跡の場合は、平行する2本の溝が古代山陽道と方向が一致することや、溝の周囲に建物が存在することから、集落の通路というよりも、街路のようなものの一部であった可能性が高いと推定される。

奈良時代における平行する計画的な2本の溝には、主に区画を目的としたものと、道路の側溝であるものの二者があるようである。いずれにしてもある程度広範囲におよぶ計画性をもとに設定されたものであり、今回の調査区の知見だけではその広がりをとらえることは困難である。また、吉備津神社周辺が近世まで門前町となっていたため、小篠原遺跡の周辺のように、古代の地割が現況の地表面に反映されている可能性は少なく、当調査区部分でも、奈良時代の溝方向の地割は認められない。しかし、奈良時代の溝の方向を手掛かりにして調査区周辺の地割を照合し、当時の区画の広がりを検討してみたいと思う。

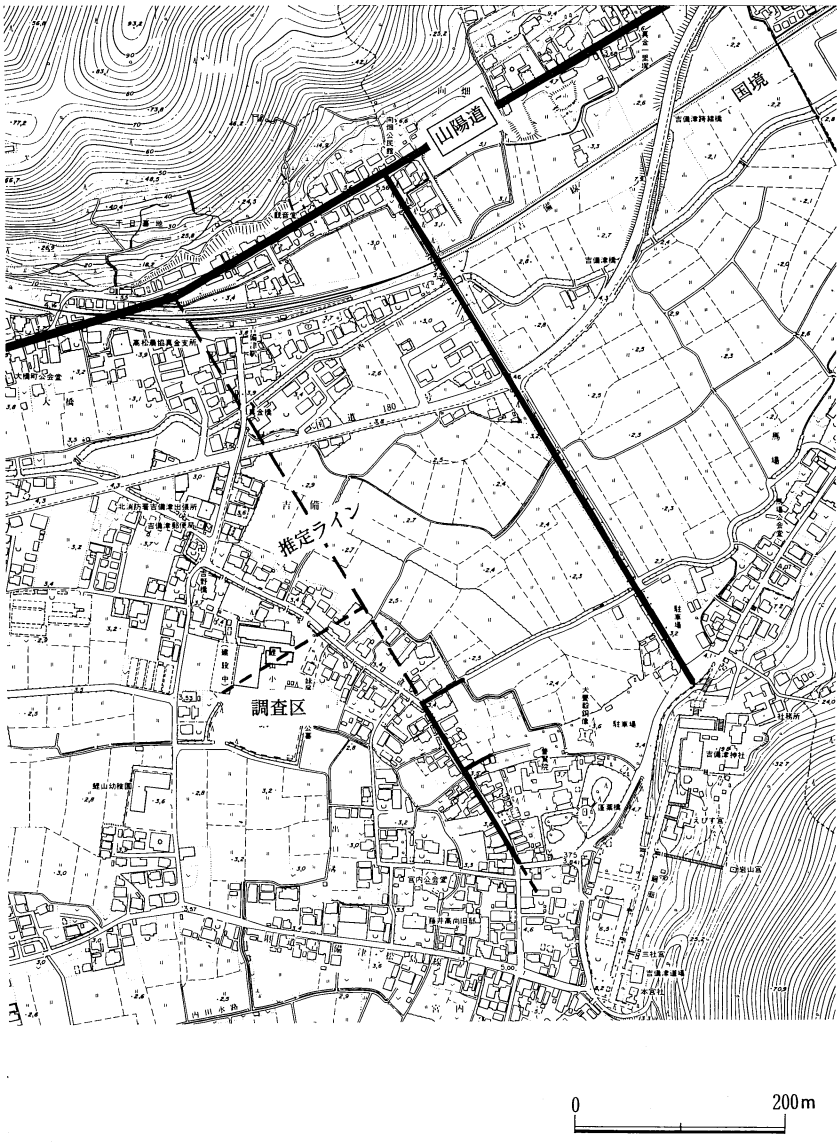


図262　調査区周辺の古代街路推定図

吉野口遺跡周辺に残る地割をみてみると、古代山陽道から門前町を通り吉備津神社に至る参道は、微高地の最も高い位置を通るため微高地の地形に即して弓状に曲がっている。しかし部分的に、吉野口遺跡の溝方向と直交する方向性を有している部分がある。この部分を南北に延長したラインの南側は、吉備津神社の社殿のうち最も古くから存在した部分であるともされる本宮社(34)の前に到達する。北側に延長する部分は古代山陽道に接続するのだが、この部分から古代山陽道は北へ角度を変えている(図262)。このラインの方向に即した方形区画などを予想させる地割は、現況では認められない。したがって、吉

野口遺跡で検出された2本の溝を通路、もしくは道路の側溝と考えると、このラインに直交する道路が存在したということも古代山陽道との関係から考えることができる。つまり、予想されるラインを古代山陽道から分岐した道路であったとすると、それを基軸とした街路が現吉備津神社と古代山陽道との間に存在したと考えられるのである。この想定は、地方において奈良時代の官衙に伴う街路の例があることから、それ程困難でないように思える。ただ吉備津神社は、奈良時代においては文献上にあらわれておらず、847年に、無位であったのが従四位下の神階を受けたという記述が最初である(35)。したがって、推定される奈良時代の街路は吉備津神社に設定されたものではなく、この地点に存在した官衙的施設に伴うものであった可能性が高いように思われる。

（7）吉野口遺跡の奈良時代遺構面の性格

吉野口遺跡の遺構が、方形区画のようないわば密閉型のプランに規定されていたのか、それとも街路のようないわば開放型のプランに規定されていたのかは、当調査区の範囲からでは明らかでない。しかし、その方向が古代山陽道の方向を意識していることや、建物の建替えが同じ場所でがおこなわれていることから、かなり大きな計画性に基づいている可能性が推定される。

また遺物については、溝から土器が多量に出土しており、そこから出土した須恵器と土師器の比率はほぼ1：1で、大半が食器類である。県下で調査された同期の一般集落遺跡出土の土器の構成については、精良な胎土で暗文、ヘラミガキ、丹塗りが施された土師器の食器はほとんど出土しないか、もしくは出土しても僅かであることが指摘されている(36)。

例えば8世紀中葉頃の津山市一貫西遺跡は、尾根上に形成された集落遺跡で、2ないし3棟の掘立柱建物、2棟の総柱建物、建物の残存と推定される段状遺構、製鉄遺構からなる。製鉄を目的とした特殊な集落と考えられなくもないが、多量の須恵器や煮沸甕が出土していることから、ここで比較的安定した生活をおこなっていたと考えられ、建物の柱穴の掘り方も円形であり、製鉄を生業の一部におこなう一般集落と考えておきたい。この集落から出土した食器については、土師器は数点で、大半が須恵器であり、吉野口遺跡の土器の構成とは異なっている。また、須恵器の杯の法量分布についても、杯Aについてはある程度器種分化が明確であるものの、杯Bについてはそれ程明確ではないという特徴が看取される(37)。

また、郡衙の政庁と館、もしくは厨と推定される遺跡が、勝田郡勝央町の勝間田遺跡と平遺跡である。前者には礎石建物と掘立柱建物、そしてそれらに伴う築地があり、それぞれが計画的に配置されていることが推定される。遺物としては多量の瓦と円面硯の他に須恵器、土師器が若干出土している(38)。一方、平遺跡では掘立柱建物が8棟検出されてはいるものの、建物の規模は勝間田遺跡のものより小規模で計画性も乏しい。しかし、多量の須恵器と土師器が出土しており、他に陶硯や緑釉陶器、灰釉陶器が出土している。また、須恵器の中には「郡」刻印の施されるものもある(39)。つまり官衙域は、それを構成する部署によって出土土器の量が異なるようで、政庁などの中枢部については土器の出土は少ないようである。

吉野口遺跡では、多量の食器類とカマドや煮沸甕が出土しているが、陶硯などは認められない。しかし、墨書土器や文字を線刻した土器が存在することから、陶硯が伴わないからといってこの遺跡が文字との関係が稀薄であったとはいえない。陶硯の出土が認められないのは、この地点が陶硯を用いる部署ではなかったことを示しているとも考えられる。そうすると、吉野口遺跡では、食膳をおこなう部署と文字を扱う部署が分離されていたと考えることも可能であろう。

以上のことから、吉野口遺跡の奈良時代の遺構は一般集落ではなく、官衙的な性格を有している、と考えることができる。そしてこの調査区の地点は、出土した大量の食器類から、その官衙の食膳に関係した部署であったと推測される。また、内面に漆が付着した須恵器の壺片が出土しており、付近に漆を用いた工房も存在していたことも示唆される(40)。

さて、当地は備中国賀陽郡板倉郷に属しており、板倉の地名は当遺跡地の北の古代山陽道沿いに残っている。板倉から想起されることは、郡衙に付属して検出されることの多い正倉を構成する倉の一種の名称である。正倉とは田租や出挙稲、穎稲などを保管する施設であり、いわば官衙による地方支配の基盤であったとされるものである(41)。ところで、この郡衙の正倉には火災で焼失した例が多く確認されている。その実例は8世紀中葉から10世紀におよぶ。これは文献資料では、国司、郡司が国神をうやまわないために下った神罰で「神火」によるものとされているが、実際は国司、郡司が不正発覚を逃れるためや、現職の郡司を失脚させるためにおこした人為的な火災とされる(42)。吉野口遺跡で検出した建物にも、火災をこおむった痕跡が認められるものがあり、これは時期的にみて「神火」との関連も想像される。

つまり、直接的な根拠ではないものの、吉野口遺跡には官衙的な遺構の配置状況や遺物の構成、地名との関連、この時期以降頻発する「神火」の可能性も推測される火災の痕跡が存在するといったことから、賀陽郡衙の一画、あるいはそれに関連する施設である可能性が推定される。ただ、賀陽郡衙の位置については、主に地理学的な見地から吉野口遺跡より西方の服部郷にある総社市古郡（現在の字名は御所）が考えられてきた(43)。この部分は、一部が総社市教育委員会により備中国府の範囲確認調査の調査区が設定されており、古代に属する遺物も若干出土している(44)。しかし、明確な遺構は認められていないようである。今後より調査がすすんだ段階で比較しなければならないが、現況では吉野口遺跡が郡衙の一画になる可能性が高いと思われる。

一方、吉野口遺跡は「吉備津」の一画に位置することから、別の性格の官衙である可能性も推測される。「吉備津」とは備前国と備中国の境に位置する吉備中山の備中国側に存在する地名である。この地点では、古代遺跡の密集する備中国の中枢部を南北に貫流する足守川と、東西に通る古代山陽道とが交わっており、いわば古代における交通の結節点に相当する。そして、瀬戸内海から備中の中枢部へ入る場合でも、その起点に位置することになり、備中国の主要な「津」が存在していた可能性の高い地形上の特質を有している(45)。また、総社市奥坂、律令制下の賀陽郡の北半に存在する古代山城である鬼城とこの「吉備津」を結ぶラインは、備中国の中枢部をほとんど含み込むことになり、古代山城によっておこなわれたとされる「畿内政権による畿外の広域領域的支配」(46)の一翼をになっていた可能性をも推測されるのである。しかし、古代の文献には「吉備津」に関するものは残っておらず、吉備津神社の祭神である「吉備津彦」としてのみあらわれる。文献上からの説明は難しいが、例えば吉野口遺跡から南へ約1㎞の地点に存在する東山遺跡(47)や、さらにその南に存在する川入遺跡(48)などでは7～8世紀の官衙的な遺構が検出されており、「吉備津」周辺には公的な港湾施設がいくつか存在した可能性がありそうである。したがって、吉野口遺跡についてもその施設の一部であった可能性があるものと思われる。

2 平安時代

平安時代に属する土器は、P189からややまとまって出土し、その他は溝2、3の上面から若干出土し

ている。両者の土器群については、やや時期差があるものと考えられる。調査区内から出土した土器の量は、奈良時代のものと比べるとかなり少ない。しかし、その中には緑釉陶器も含まれており、遺構、遺物は少ないものの奈良時代に形成された遺構がやや位置を移動させ、当該調査区はその縁辺部に相当するようになったことを予想させる。

溝2、3の上面から出土している土器は、(39)、(61)、(62)、(98)、(174) ～ (180) である。土師器は全て丹塗りが施されているものの、底部は直線的である。これは、土師器の成形に際しても須恵器と同様に回転台を用いるようになったためと考えられる。1点だけではあるが高台のつく須恵器の杯Bも出土している。これは溝2、3の埋土から出土している杯Bよりも器高がやや増す傾向が看取される。これらの特徴から溝2、3上面出土の土器は、溝2、3埋土出土土器よりも後出する時期で、8世紀末頃の時期が推定される。

P189の土器は、杯と皿が中心である。杯については、土師器と須恵器があるが、その比率は9：2で圧倒的に土師器の方が多い。しかし、両者の器形や成形法はよく似ており、焼成の仕方だけ変えたものといえよう。土師器の器表面については、残存状態はあまりよくないが、杯類にも丹塗りを施している可能性がある。杯、皿の底部外面はヘラ切り後ナデを施しており、「底部押圧技法」といわれているものに相当する(49)。須恵器の杯は、焼成は良好で、比較的薄手である。成形の特徴と法量は、鐘鋳場窯から出土したものとよく似ている。したがってP189は、鐘鋳場窯の比定されている時期から9世紀前半と考えられる(50)。

（草原）

注

（1）田中琢「(4) 畿内」『日本の考古学Ⅳ　歴史時代（上)』河出書房社　1967年
（2）稲田孝司「忌の竈と王権」『考古学研究』97　考古学研究会　1978年
（3）近藤義郎『土器製塩の研究』岩波書店　1984年
（4）安川豊史「美作国府跡発掘調査概報」『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第15集』津山市教育委員会　1984年
（5）間壁葭子「倉敷市酒津－水江遺跡」『倉敷考古館集報』第8号　倉敷考古館　1973年
（6）井上弘、武田恭彰「上竹西の坊遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』69　岡山県教育委員会　1988年
（7）積山洋「律令制期の製塩土器と塩の流通－摂河泉出土資料を中心に－」『ヒストリア』第141号
大阪歴史学会　1993年
（8）岩本正二「7～9世紀の製塩土器」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集　1982年
（9）樋上昇「都城出土の製塩土器」『平城京左京三条四坊十二坪発掘調査報告』奈良県立橿原考古学研究所
1987年
(10) 西弘海『土器様式の成立とその背景』真陽社　1987年
(11) 小森俊寛「概説」『古代の土器1　都城の土器集成』古代の土器研究会　1992年
(12) 小栗明彦氏よりご教示を得た。
(13) 注 (10)
(14) 注 (10)
(15) 林部均「律令国家と畿内産土師器－飛鳥・奈良時代の東日本と西日本－」『考古学雑誌』第72巻
第1号　日本考古学会　1986年
林部均「西日本出土の畿内産土師器」『考古学研究』155　考古学研究会　1992年
(16) 武田恭彰「備中に於ける律令期土器様相の諸問題－地方の律令的土器様式の成立と変質－」
『古代吉備』第18集　1996年

(17) 福田正継『西谷遺跡』長船町教育委員会　1985年
(18) 山磨康平「寒風古窯址群」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』27　岡山県教育委員会　1978年
(19) 注（6）
(20) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店　1981年
植野浩三「須恵器蓋杯の製作技術」『文化財学報』第二集　1983年
(21) 佐藤浩司「古墳時代須恵器蓋杯の研究（1）－製作技術と法量変化からみた須恵器生産の画期について－」『研究紀要』第3集　北九州教育文化財団埋蔵文化財調査室　1989年
(22) 伊東晃ほか「馬屋遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』99　岡山県教育委員会　1995年
(23) 注（16）
(24) 正岡睦男ほか「津寺・政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』20　岡山県教育委員会　1990年
正岡睦男ほか「津寺・政所遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』21　岡山県教育委員会　1991年
亀山行雄ほか「津寺遺跡3」『岡山県埋蔵文化財報告』104　岡山県教育委員会　1996年
(25) 平井泰男ほか「南溝手遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』100　岡山県教育委員会　1995年
(26) 草原孝典『足守庄（足守幼稚園）関連遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会　1994年
(27) 注（24）
(28) 下澤公明ほか「斎富遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』105　岡山県教育委員会　1996年
(29) 山中敏史・佐藤興治「古代の役所」『古代日本を発掘する』5　岩波書店　1985年
(30) 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』　1971年
(31) 市本芳三ほか『大庭寺遺跡Ⅰ』大阪文化財センター　1991年
(32) 狭川真一「太宰府条坊の復原－発掘調査成果からの試案－」『条里制研究』第6号　1990年
狭川真一「太宰府の朱雀大路」『文化財学論集』　1994年
(33) 森隆「郡衙遺跡に関する一考察」『文化財学論集』　1994年
(34) 石田寛「岡山市域の条里」『岡山市史　古代編』　1963年
(35) 続日本後紀　承和14年10月条
(36) 武田恭彰「岡山県に於ける古代土器様相の再検討」『古代吉備』第14集　1992年
(37) 行田裕美『一貫西遺跡－津山中核工業団地埋蔵文化財発掘調査報告3－』　津山市教育委員会　1990年
(38) 橋本惣司ほか「勝間田遺跡緊急発掘調査概報」『岡山県埋蔵文化財報告』4　岡山県教育委員会　1974年
(39) 田中満雄ほか「平遺跡」『岡山県埋蔵文化財報告』8　岡山県教育委員会　1975年
(40) 玉田芳英「漆付着土器の研究」『文化財論叢Ⅱ』奈良国立文化財研究所創立40周年記念論文集　1995年
(41) 山中敏史『古代地方官衙遺跡の研究』塙書房　1994年
(42) 早川庄八『日本の歴史4　律令国家』小学館　1974年
(43) 永山卯三郎『吉備郡史』上巻　吉備郡教育会　1938年
(44) 藤井駿『吉備津神社』日本文教出版　1973年
(45) 千田稔「古代港津の歴史地理学的考察」『史林』53-1　1970年
(46) 乗岡実「古代山城」『吉備の考古学的研究』（下）山陽新聞社　1992年
(47) 乗岡実「岡山市域における最近の発掘調査成果」『古代吉備』第12集　1990年
(48) 柳瀬昭彦ほか「川入・上東」『岡山県埋蔵文化財報告』16　岡山県教育委員会　1977年
(49) 武田恭彰「古代土器生産についての一考察（1）－鐘鋳場1号窯の遺物を中心に－」『古代吉備』第11集　1989年
(50) 注（48）

V　平安時代末から鎌倉時代遺構面

1．遺構の変遷

この遺構面では、数多くの柱穴と多量の土器が含まれる土壙が検出された。土壙は、調査区の中央付近で東西方向に2列に並んでいる。ただ、北側の配管部分の調査区でも東西方向に規則的に並んでいると思われる土壙群の一部が検出されており、調査区の周辺にも同様な土壙が存在することが予想される。この土壙群はP109とP119以外は切り合っておらず、それらが規則的に配置されていることや、出土した土器の法量や組成が同じであることから、これらの土壙は極めて近接した時期に掘られ、埋められたものと考えられる。

柱穴については、調査区の北西部では検出されておらず、その分布には偏りがある。また、柱穴列になるものと建物になるものとがある。これらの遺構や包含層から出土した土器をみると大きく2時期に分けられる。しかし、柱穴の切り合い関係や、土壙群の一部であるP84と建物8が重なるといった遺構の切り合い関係などを手掛かりにして、この遺構面は3時期に分けられそうである。以下各時期ごとに遺構の様相を説明する。

Ⅰ期（図263）

この期に属する遺物の量はわずかである。明確な遺構も調査区の南半で検出した建物1棟のみであるが、南半は近世の溝によりほとんど削平されており、建物の全形をとらえたとは言い難い。しかし、この建物の方向が調査区の方向と一致することから、当地点でこの方向に即した遺構はこの時期から形成されたと考えてよい。調査区の方向とは、鯉山小学校校舎の方向であり、この校舎は小学校地となる以前に当地に存在していた道勝寺の敷地の方向性を踏襲している。この時期以前の奈良、平安時代前期の遺構面が、古代山陽道と平行する方向に規定されていることから、当該期以降に現況の地割ができあがったと思われる。

Ⅰ期の具体的な時期については、建物の柱穴から出土した椀をみると内面ヘラミガキが省略傾向にあることから、12世紀初頭の時期が推定される。ただ、共伴した内面黒色土器椀の胎土は白色でなく橙色系であり、やや古相を示している。

Ⅱ期（図263）

この期に属する遺物や遺構の量が最も多い。次の期の遺構に属する遺物がほとんどないことから、遺物の比較ではⅡ期とⅢ期は分けられないが、Ⅱ期の柱穴列がⅢ期の建物の柱穴に切られていることから、両者を別の時期としてとらえた。

遺構は、調査区南半で土壙が東西方向に2列に並んでおり、それを「コ」字形に柱穴列が囲んでいる。土壙群のうち、北側のものは円もしくは長楕円形の平面プランで東西に4つ並び、そのうち西側の2つ（P109、P134）からは土師質土器の完形もしくは完形に近いものが多量に出土しており、東側の2つ（P94、P84）については小片が主体である。このように東西の土壙は、埋土は似ているが出土した土器の様相が異なっている。土壙の埋土からは魚骨や鱗が採集されており、食事をした残滓も土器と共に投棄されたものと思われる。出土した土器の様相に土壙ごとに違いがあるということは、例えば呪術的な行為のために破砕された土師質土器を主に投棄する土壙と、食事に用いられた食器を主に投棄する土壙との違いを反映している可能性を示唆しているのかもしれない。

南側の土壙群は、長大な長方形の土壙であるP110と、P58、P80が東西方向に並んでいる。いずれ

の土壙からも土師質土器が多量に出土している。破片も含まれているが、完形や完形に近いものが主体である。魚骨や鱗が埋土に含まれていることから、南側の土壙群については主に食事に用いた食器を投棄したものと思われる。

これらの土壙群は、それぞれが規則的に並んでおり、しかもお互いに切り合い関係が認められないことと、それぞれの土壙から出土した土師質土器の椀、皿、杯の法量がほぼ一致していること（図264、265、266）から、極めて近接した時期に掘られ、大量の土器が投棄されたものと考えられる。このことは大規模な饗宴がおこなわれたことを予想させる。土壙群の北側には遺構が認められない部分があり、饗宴のおこなわれた広場であるのか、もしくは遺構としては残存していないが『法然上人絵伝』に描かれた漆間時国の館のような礎石をもつ建物が存在したことが推測される。しかし、瓦などもほとんど出土せず、遺構がほとんど検出されていないことから、広場の可能性が高いように思われる。また、土壙群の北側をのぞく3方には柱穴列が認められ、柵列をめぐらしていたようである。この柵列と土壙群は方向性が一致することから、一体のものと考えてよいと思われるが、土壙が掘られた時点に柵列も存在したのか、土壙埋没後に柵列をめぐらしたのかは明確ではない。しかし、P80とP58とを分断するように柵列が存在することから、土壙群全体を囲むことを意識していたのではなさそうである。P110の南側に2重に柵列が存在することから、むしろP110の位置を中心として柵列をめぐらしていた可能性が高いと思われる。P110からは多量の土器以外に頭骨が1点出土している。この頭骨は底部よりやや上面を段状に削り出した部

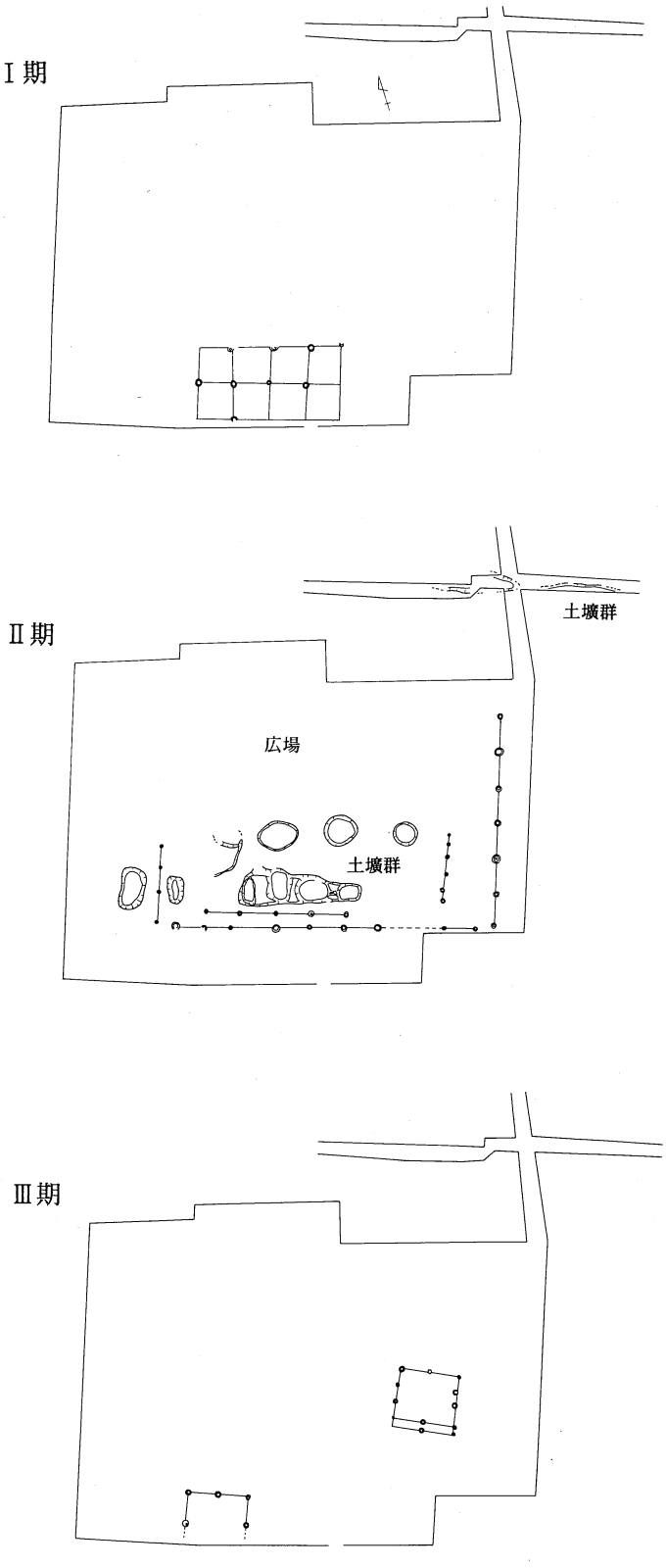
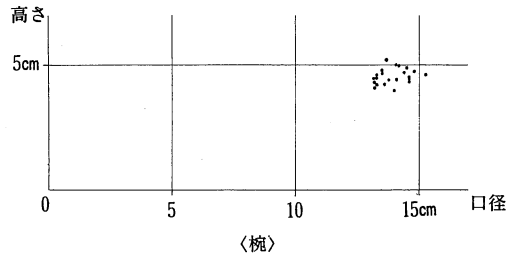
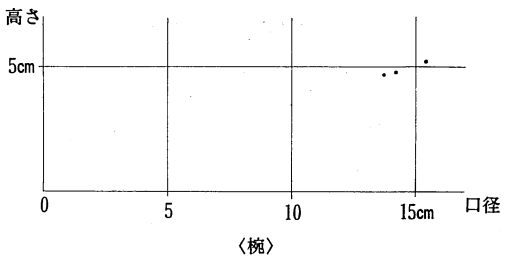


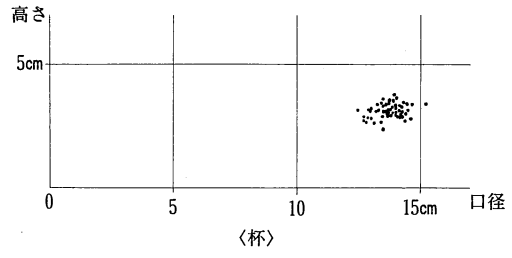
図263　平安後半・鎌倉時代面遺構変遷図



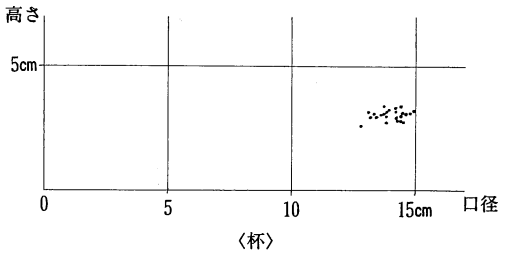
〈椀〉



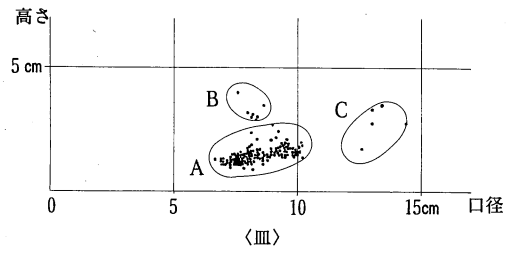
〈椀〉



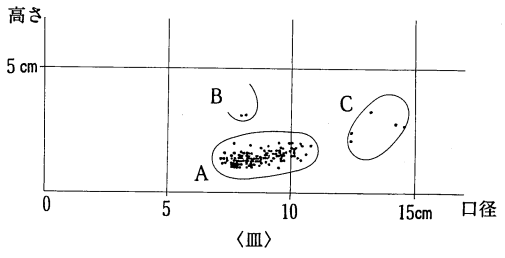
〈杯〉



〈杯〉

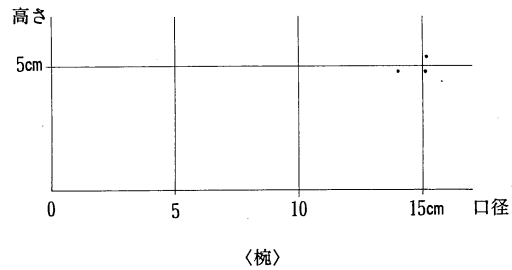


〈Ⅲ〉
P110

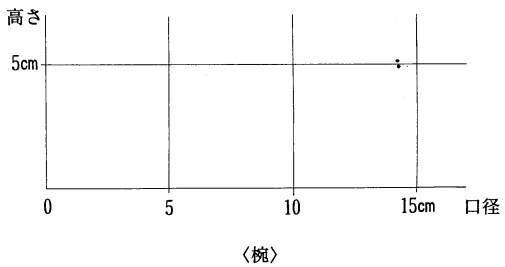


〈Ⅲ〉
P58

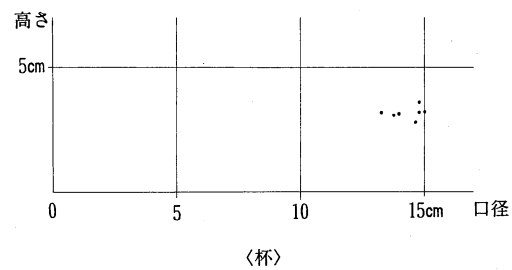
図264　各土壙出土土師質土器法量分布（1）



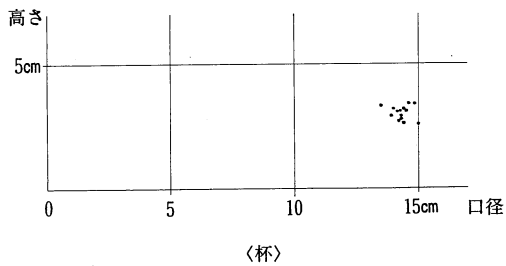
〈椀〉



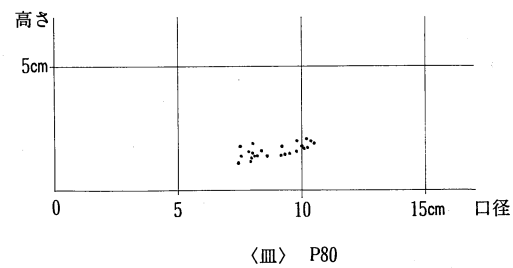
〈椀〉



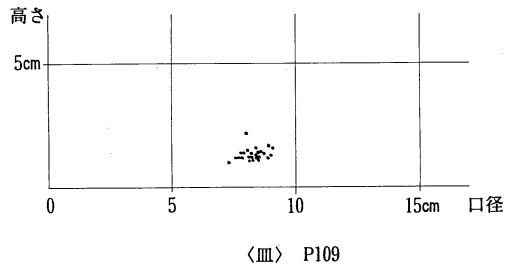
〈杯〉



〈杯〉



〈Ⅲ〉 P80



〈Ⅲ〉 P109

図265　各土壙出土土師質土器法量分布（2）

分に置かれており、土層断面の観察結果からこの頭骨を置いた後、多量の土器が投棄されていると考えられる。この頭骨には多数の刀傷や、人為的な損傷が認められることから、合戦等の後に斬首されたことが推測される（附章Ⅲ参照）。

土壙群周囲の柵列がP110を中心にめぐらされていることや、首を置いた後に土器が多量に投棄されていること、土壙群が規則的な配置をすることなどから、土壙群に入る多量の土器に示される大規模な饗宴の一部にP110の首級が据えられたのではなく、この饗宴の中心がP110の首級にあったことを示していると考えられる。

発掘調査によって確認された、中世の斬首された頭骨の例はいくつかある。鎌倉で出土した例をみると、井戸や建物周辺の溝から出土しており、それらに対して特別な供養をした痕跡は認められていないようである(1)。

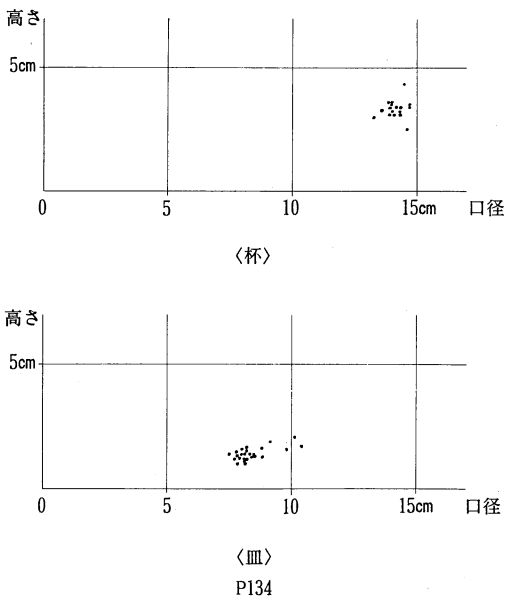


図266　各土壙出土土師質土器法量分布（3）

博多でも特異な例ではあるが、110個体分の首級が出土している。これらは、元弘三年（1333）の博多合戦でうたれた菊池一族のものと推定されている。火をうけた痕跡は認められるが、これについても特に供養や鎮魂をおこなった痕跡は認められない(2)。また中世の港町を広範囲に調査した広島県草戸千軒遺跡でも14、15世紀の頭骨がいくつか出土している。それらには桶に入れられたものもあるが、基本的には特別な供養をおこなった痕跡は認められない(3)。

発掘調査によって出土した例をみるかぎり、斬首された首級に対してP110の頭骨のように大規模な饗宴をおこなうといった例はほとんどなかったようである。ただ、首級になった後も供養、もしくは鎮魂のおこなわれたと考えられる例が1つある。それは、中尊寺金色堂に埋葬されている藤原泰衡の首級である。この首級は藤原秀衡の棺に納められていたもので、額から後頭部へ貫通した釘の跡があることが、『吾妻鏡』の記述にある泰衡の首に対しておこなわれた措置と符号することから、泰衡の首級とされている(4)。泰衡の首級に対して供養や鎮魂の行為がおこなわれたとする具体的な記述は残っていないが、中尊寺金色堂に首級が納められていることから、何らかの供養や鎮魂がおこなわれたと考えるのが妥当であろう。治承・寿永の内乱終息後、後白河院と幕府によって大規模な鎮魂がおこなわれており、それが勝者側の戦後処理の1つとして必要な措置であったことが指摘されている(5)。泰衡は敗者とはいえ奥州平泉藤原氏の当主であり、鎮魂をおこなう対象に十分なり得たと考えられ、溝や井戸に埋没している首級とは扱われ方が異なっていた、と考えることができよう。つまり、首級の生前の立場により鎮魂がおこなわれるものと、それ程顕著におこなわれないものとがあったことが推測できるのである。そうするとP110の首級については、かなり大規模な饗宴がおこなわれたことから、生前かなりの立場の人物であったことが推測される。

Ⅱ期の具体的な時期については、中国製陶磁器の構成において白磁が伴い、青磁に同安窯系のものが多いことや(6)、土師質土器椀の法量が「養和元年（1181）」の紀年銘を有する題籤と共伴する助三畑遺跡井戸4出土の土師質土器椀(7)とほぼ一致すること、柵列の掘り方の中に和泉型で尾上編年Ⅲ－2期の瓦器椀(8)が出土していることから、12世紀末の時期が推定される。

Ⅲ期（図263）

Ⅲ期の柵列と土壙群の一部が重なる柱穴があり、それらの構成する建物をⅢ期とした。柱穴の埋土から出土した土器はわずかであり、包含層から出土した土器をみてもⅡ期に属するものが大半で、それより新しいものは近世に属するものまではほとんど認められない。このことは、Ⅱ期以降当地が居住空間として積極的に用いられていなかったことを示していよう。明確な遺構としては、小規模な建物が2棟だけ検出できた。

Ⅲ期の具体的な時期としては、Ⅱ期の直後で比較的短期間と推定される。

2．Ⅱ期の遺物構成

（1）「吉備中山型」土器組成について

Ⅱ期の土壙群から多量の土器が出土した。主体となるのは、皿、杯、椀などの土師質土器である。それらの組成や器種に他の周辺地域とは異なる点が看取されるため、それらを整理してこの特徴が吉野口遺跡だけのものか、ある程度広がりをもつ小地域性を構成するのかを検討してみたい。

吉野口遺跡Ⅱ期の土壙群は、出土した土器の様相をみると、土壙ごとにやや偏りがある。それは、完形、もしくは完形に近い土器が多量に入るもの（A類）と、破片ばかりのもの（B類）に分けられる。本体部分の調査区で検出した土壙群のうち、北側に東西方向に4つ並ぶものは東側の2つがB類、西側の2つがA類である。このことは、ある種規則的な廃棄がなされたことを予想させる。つまり、呪術的

P 134		
皿	58	69.9%
杯	24	28.9%
椀	1	1.2%
合計	83	100.0%

P 109		
皿	39	54.2%
杯	28	38.9%
椀	3	4.1%
鍋	2	2.8%
合計	72	100.0%

P 58		
皿	146	62.9%
杯	63	27.2%
椀	9	3.9%
大皿	7	3.0%
鍋	7	3.0%
合計	232	100.0%

P 80		
皿	122	68.5%
杯	40	22.5%
椀	9	5.1%
大皿	5	2.8%
鍋	2	1.1%
合計	178	100.0%

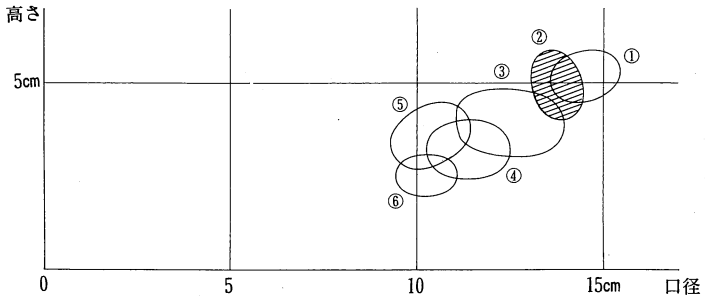
P 110		
皿	842	73.9%
杯	147	12.9%
椀	98	8.6%
大皿	30	2.6%
鍋	23	2.0%
合計	1,140	100.0%

図267　遺構別土師質土器組成比率

な意味で人為的に破砕された土器を入れる土壙と、食器として用いたものを残滓とともに入れる土壙とに分けていたと理解される。南側で東西方向に3つ並ぶ土壙はA類ばかりである。これらのことは、この饗宴が単なる飲食をする集まりであったというのではなく、あるきまりに沿っておこなわれたということが推定される。

それでは、出土した土器の組成をみてみる。どの土壙出土の土器も土師質土器が主体で、中国製陶磁器や国内産陶器の占める割合は数パーセントである。さらに各土壙群から出土した土師質土器の器種別の割合をみると（図267)、若干比率に差はあるものの皿が最も多く、次に杯、そして椀の順になる。

岡山県南部における中世の土師質土器を代表するものは、「早島式土器」「吉備系土師器椀」といわれる乳白色、あるいは黄白色を呈する椀である。当該地域の中世前半の土器研究は、普遍的に存在し、時期の変化が調整や法量の変化に反映されやすいことなどを理由に、この椀を中心におこなわれた。その研究の成果によると、11世紀後半ぐらいに内外面を丁寧にヘラミガキする白色系の胎土をした椀が出現する。そして、この椀は序々にヘラミガキが粗略化されていき、まず内面のヘラミガキが省略される。そして外面のヘラミガキも粗略化されていき、ついには省略される。器表面のヘラミガキの省略過程では法量の縮小傾向は顕著でなかったが、内外面のヘラミガキが省略された以降は段階的に法量が縮小していく(6)。それぞれの段階の実年代については、瓦器や中国製陶磁器などの共伴関係で示されているが、細かい点については不明瞭である。



① 備中国府遺跡 SK003
② 助三畑遺跡井戸4
③ 川入遺跡P 9
④ 清水角遺跡土壙
⑤ 樋本遺跡No.67土壙
⑥ 津寺遺跡土壙47

図268 椀法量変遷図

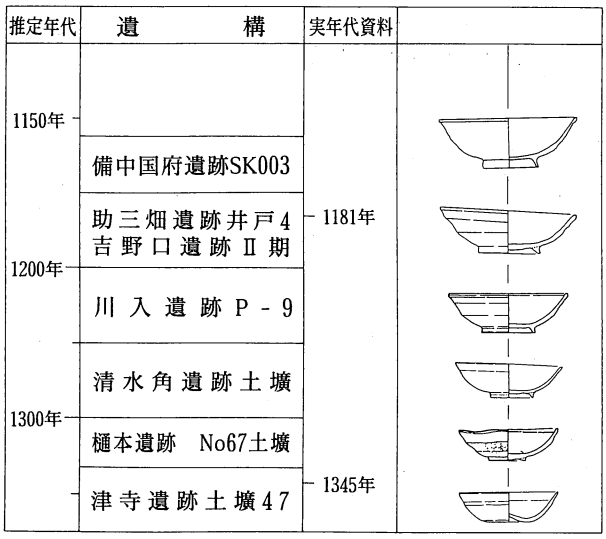


図269 椀変遷図

吉野口遺跡Ⅱ期の椀は内外面のヘラミガキが省略されており、法量変化からみると外面ヘラミガキが省略された次の段階となる（図268)。これは助三畑遺跡井戸4(7)と同じ範疇に入るもので、同井戸から出土した題籤や瓦器の年代から12世紀末の時期と考えられる(図269)。この段階前後から土師質土器が比較的多量に廃棄される遺構がみられるようになることや、器表面からヘラミガキが省略され、法量が急速に縮小することから、土師質土器の扱われ方に変化があったことが推定される。

吉野口遺跡の場合は、椀より杯の割合が多い。まずこの点を吉野口遺跡期前後の時期に属する他遺跡の遺構から出土した土器群と比較してみたいと思う。ただし、ここでは土師質土器椀の分布する瀬戸内東部地域のうち、調査例の多い岡山県南部の主要河川である高

梁川、足守川、旭川、吉井川流域の遺跡から比較的まとまって土師質土器が出土している遺構を取り上げる。

まず、備前国の東側にあたる吉井川流域に位置する助三畑遺跡の井戸４をみると、出土土器のうち椀、皿、杯のいわゆる供膳具の占める割合は92％である。これらの土器には備前焼、瓦器、畿内系の土師質土器、吉備系の土師質土器とがあるが、吉備系の土師質土器の占める割合は最も多く70％以上である。吉備系の土師質土器についてのみみてみると、皿が占める割合は54.3％で最も多く、次は椀が40.6％である。椀と杯の割合は４：１である。

備前国の中心部となる旭川流域の東岸に位置する百間川当麻（米田）遺跡の井戸３をみると(8)、供膳具に備前焼、瓦器、吉備系の土師質土器がある。吉備系の土師質土器にかぎってみてみると、皿が占める割合が最も多く72％、次に椀が22％である。椀と杯の割合は３：１である。同遺跡の土壙159についてもみてみると、供膳具には備前焼、瓦器、吉備系の土師質土器がある。これも吉備系土師質土器についてのみ見てみると、皿が占める割合が62％、椀が26％である。椀と杯の割合は７：３である。

旭川流域の西岸に位置する鹿田遺跡の井戸29(9)からも当該期の土器が出土している。吉備系土師質土器の椀と杯の割合は９：５である。

足守川の中流域に位置する津寺遺跡(10)では、比較的土器が多く入る土壙や墓壙が調査されている。それらをみると、大体椀が多く杯については全く含まれないか、含まれたとしても椀４に対して杯の割合は１程度である。

備中国の中心部となる高梁川流域の東岸に位置する備中国府遺跡のＳＫ003の出土土器(11)は、供膳具のみで構成されており、椀の比率が最も高く62％を占める。皿の比率は20％程である。椀と杯の割合は３：１である。

以上概観した資料では、いずれも杯よりは椀の方が多い傾向が看取される。これは岡山県南部におけ

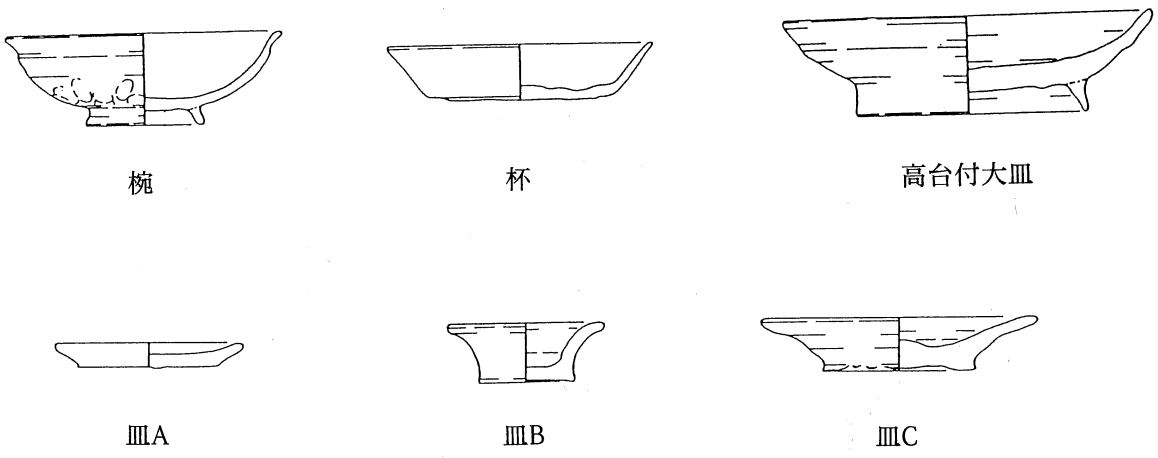


図270　「吉備中山型」土器組成

る一般的な様相と考えてよい様である。したがって吉野口遺跡期が椀よりも杯の占める比率が高いのは、やや特異な様相といえそうである。

次に吉野口遺跡の供膳具の構成をみてみたい（図270）。吉野口遺跡Ⅱ期の皿は法量的には３種類に分けられる。皿Ａは口径６～11㎝、器高2.5㎝未満のもので、最も数が多い。皿Ｂは口径６～８㎝、器高